大正二年十一月廿七日印刷
大正二年十一月三十日發行

有朋堂文庫
新編水滸畫傳一
（非賣品）

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

斷つこと、次巻より追々委し。

とともに酒卓に傍て、酒を酌給ふ時、詐て彼一對の筯を、衣の袖にて拂ひ落し給ひ、故意慌忙しく、これを拾ひ取る體にもてなし、且手を伸してかの人の脚に礙り給へ、此時彼もし閙ことあらば、我又來て宜しく妥すべし、然れ共此望叶ふまじければ、此事便ち止給へ、若彼脚をも縮ず、聲をも做ずんば、乃ち是十分の光なり、彼もし心なくんば、いかんぞよく此に至んや、即ち此を名て捱光と申す、十分の光を捱と云の意なり、此上のことは大官人の心に有べし、唯知らず此計はいかん。西門慶一々計の次第を聞て、天に悦び地に喜で云けるは、王婆汝が胸中には、萬卷の書を藏けるや、かくのごとき神妙奇特の計、譬陳平張良たり共、いかんぞこゝに及ばん、愈我爲に違變なく力を盡せ。王婆が云く、我斯保管上は心を安んじ給へ、大官人たゞ約し給ふ十兩の銀を、忘れ給ふことなかれ。西門慶が云く、汝必ずこれを憂ひ慮ることなかれ、未知らず此計は何の吉日を卜して行ふべきぞや。王婆が云く、幸希今日は黃道吉日なれば、急にこれを行ふべし、我今武太郎がいまだ回らざるに乘じて、急に彼が家に行き、宜しく詞を盡し、彼人を我家に賺し倚んことを調へ申さん、大官人は早く彼白綾等の衣料を求めて來給へ。西門慶が云く、若汝愈計を行ふならば、是殊更悅ばし、我少停衣料を調へ來るべし、とて、たゞちに街へぞ馳行けり。是ぞ事の權輿を廣ぐるにて、竟には多くの人に苦難をかけ、四人の命を

云べきは、我は是酒食を求て來んに、夫人宜しく此官人に陪して談話し給へと、大抵に挨拶して出べし、彼人これを聞て、もし身を起して己が家に避往ば、是又支り難かるべき間、此事便ち休給へ、彼若牢く座を離ずして、返答に及ばゞ、是七分の光あり、我已に酒食を具て搬び出ん時、又彼人に對して云べきは、夫人且生活を收拾給ひて、一盃酌給へ、難得に此官人我に替て東道となり給ひぬ、夫人必ず辭し給ふことなかれと、慇懃に詞を盡すべし、此時彼人苦に辭し、別を告て回ることあらば、此事則休給へ、彼もし口には辭し回んと云共、更に身を動すことなくんば、乃ち是八分の光あり、彼已に大官人と座を對して酒を酌み、興遂に闌に至らん時、我故意酒盡たりと告て、再び大官人に酒を沽しめん、我に答て云給ふべきは、若酒盡なば一向求め來れと命じ給へ、こゝに於て我酒を買に行く體にもてなし、急に前後の門を關すべし、大官人彼と兩人房裡に居給ふ時、かの人もし大に焦燥て跑歸ることあらば、則此事休給へ、彼もし我に任せて門を關させ、少しも焦燥ことなくんば、乃ち是九分の光あり、已に九分は調るべし、唯殘る一分の光却て大に難し、大官人彼人と共に、房裡のうちに居給ふ時、只よろしく多情の詞を以て、彼が心を柔げ給へ、必ず忙はしく手脚を動して、事を誤り給ふことなかれ、若大官人忍の一字を忘れ給ひて、自ら計を敗り給ふぞならば、我決して此撃襯を休べし、大官人彼

此事便ち息給へ、彼若大官人の入り給ふを見ても、曾て其身を動すことなくは、乃ち是四分の光あり、大官人已に坐し給ひなば、我又彼人に對して云べきは、這官人は則是、我に壽衣を惠み給ひぬる施主なり、誠に希有の善人かなと、多く大官人の好所を吹嘘すべし、大官人は又彼女が針線を讃歎給へ、彼若頭を低て一言の答にも及ばずんば、此事則ち休給へ、萬一彼言を開て返答することあらば、乃ち是五分の光あり、我此時又大官人に對して云べきは、此夫人一片の善意を以て、我爲に手を下して、此を縫ひ給ふ、誠に有難き存念なり、我いかなる僥倖にや、想ず兩人の施主を得たり、一人は銀を出し、一人は力を出し給ふ、就中此夫人の手に經給ひぬる壽衣を著して冥途に趣かば、必ず其功德によつて、極樂淨土の諸佛諸菩薩、盡く途中に出て迎へ給はんこと、何の疑ふことかあらんや、我夫人を款待て、豫じめ此恩を謝せんと思へども、唯恨らくは力のこゝに及ばざることを、願くは大官人我に替つて東道となり給ひ、宜しく此夫人を款待てたび給はゞ、猶此上の厚恩齒を沒るまで、これを忘るまじと云て、深く頼み申べし、時に大官人朱提を我に與へ、酒食を求めしめ給へ、彼人もし此體を見て、忙しく座を起て回ることあらば、我又是を扯住がたからん、此事乃ち休給へ、若渠此光景を見ても、猶身を動すことなくんば、乃ち是六分の光あり、我はかの朱提を取て門を出んとする時、則彼人に對して

に對して云べきは、我幸ひに一人の施主有て、一套の壽衣の衣料を賜ぬ、然れ共未だ縫はざる故、近々縫はせんとす、願くは夫人我爲に暦本を開て、黄道吉日を擇出し給はれかし、然らば急に裁縫を央うて、これを縫はしめんと語るべし、此時那人囉唣ことを嫌うて、悦ざる景色あらば、此事則休給へ、彼人もし萬一に、我汝が爲に縫ふべきに、必ず裁縫を僱ひ給ふことなかれといはゞ、則是光あり、其時我彼人を、我家に請て縫はしめん、然るを彼もし、我家にて縫ふべきに、壽衣を這首へ持參せよと云はゞ、此事則休給へ、彼人若殆悅び、則我家に來つて縫ふべしと云はゞ、便ち是二分の光あり、彼もし彌我家に來て縫ふべき時は、必ず酒肉を設けて款待べし、第一日には大官人必ず來り給ふことなかれ、第二日に彼若我に對して、汝の家は不自由にて事調がたし、宜しく我家に持參して縫はしめよと云はゞ、此事乃ち休給へ、彼若次の日同じく、我家に來て縫はゞ、乃ち是三分の光あり、此日も又大官人來り給ふことなれ、第三の日は午の刻前後に、大官人毎よりも格別に粧うて、我店に來り給へ、則咳嗽の聲を以て相圖をすべし、此時大官人は門前に立住て云給ふべきは、頃日は世事に纏れて、此邊にも來らざりし、愈王婆は恙なきや、と呼り給へ、時に我走り出て大官人を迎へ、則延て房裡に入申べし、若彼人大官人の内に入給ふを見て、急に己が家に逃回らば、我又是を留んこと能ふまじければ、

しがたきことあり、官人元來慳吝土顧にて、妄に銀を使ふことを怖れ給はん、我今妥貼まじきと云しは、只此一事なり、大官人果してこれをいかん。西門慶が云く、是甚だ易きことなり、汝何を以て難きとするや、若金銀を使ふべき所あらば、全く汝が調度に任すべし、豈これを慳むことあらんや。王婆が云く、大官人もし果して此のごとくんば、我且一つの計あり、若これを行ふときんば、大官人忽ち那人と、一座に於て對面叶ふべし、只知らず大官人肯て我に從ひ給ふべきや。西門慶が云く、此事のみに於ては、我好惡を揀ばず、都て汝に從ふべし、汝早く臥龍が計ありや。王婆打笑て云く、今日は已に晩ぬ、且貴宅に歸給ひて、半年或ひは三ケ月を過して、再び來り給へ、其時宜しく商議すべし。西門慶これを聞て、忙はしく地上に跪て云けるは、王婆老菩薩、何ゆゑ斯る無慈悲のことを云給ふや、願くは我迷を早く救ひ給へ。王婆是を聞て、呵々と笑ひ、大官人扨々慌給ふことかな、愈堅く忍の一字を守り給へ、我此計は是第一の上策なり。只武成王の廟に入んことこそ能ふまじけれ共、端的に孫武が女兵に敎へし計、十たび捉へて九たび著るよりも猶强れり、我今日大官人に語て聞せ申べし、那人は原是、清河縣の大家より出たる上品ゆゑ、別してよく針線をなす、大官人今一疋の白綾、一疋の藍紬、一疋の白絹、並に十兩の系綿を調へ、我に與へ給へ、然らば我彼が家に往て、那人

捱光と申て、光を捱に五つの件を以てす、此捱光と云二字は尤難し、然れ共この五件だに全うするときんば尤易し、其第一は潘安（晉の潘安仁なり）が容貌、第二は貨を惜ず、第三は鄧通が富貴、第四は衣の裏に針有て、身を刺ごとき苦みを忍ぶ、第五は毎日多く閑暇あらんことを要す、この五の件もし果して全からば、此事掣襯申べし、若又此五つの件、一つも缺ることあらば、成就極めて難からん、寧索乾淨に休給へ。西門慶が云く、我實に此五の件、渾て克すべし、第一我容貌只潘安にこそ如ずとも、也將就にして十分醜ことあるまじ、第二は我家に有所の資寶、驢に駄して行ふ共吝まじ。第三は我蓄鄧通に及ばず共、使用を欠べからず、第四は我尤よく忍の一字を守る、縱此身を割るゝとも敢て動ずることあらじ、第五は我極めて閑暇あり、もし然らずんば、いかんぞ能再三かく此邊に來ることを得ん、汝只宜しく我が爲に神妙の計を盡し、これを成就なさしめよ、然らば我重く汝を謝すべし。王婆が云く、大官人此五件皆全しとのたまへ共、我知る只一つのこと、畢竟妥貼申すまじ。西門慶が云く、汝まづこれをいへ、只一つの事妥貼まじとは、知らず何等の事なるぞ。王婆が云く、我今分明にこれを申さんに、大官人宜く聞給へ、凡此捱光と云は尤難きことなり、十分に光を捱ときんば、事必ず成就せん、然れ共十分に光を捱と欲するときんば、其費九分九釐に至て、僅其一釐を欠と云とも、又成就

喜悦して思ふ樣、此者はや敗れの端を露しぬ、我慢々是を釣んと圖り、乃ち銀を收めて云けるは、大官人は頃日心中に一つの事有て、甚だ火急給ふ色見えぬ。云く、汝何を以てこれを猜しけるや。王婆が云く、諺にも門を入とき榮枯のことを問ことを休よ、容顔を觀著して便ち得と云ことあり、況や我數十年善惡のことを經ゐ、縱いか樣の蹺蹊ことたり共、只一猜にこれを差しむることなし。西門慶此時、我實に心中一つの事あり、汝此ことの根本を猜せんや。王婆打笑て、これを猜せんこと豈難からんや、只一猜にこれを著て見せ申さん、耳を側だて聞給へ、とて、乃ち忙はしからず慢ならずして云けるは、大官人此兩日頻に此邊に徘徊し給ふは、必定前日大官人の頭巾を打邪たる、此隔壁の那人を、慕ひ給ふに決定せり、我此猜いかん。西門慶これを聞き、大いに悦で云けるは、汝誠に智は隋何に賽ぎ、機は陸賈に強れり、我實に彼日、隔壁の人に、不圖頭巾を打れ、遂に那人を見初てより以來、魂魄自ら蕩々として、春路に迷ひ、更に足を入べき處なし、汝肯て我爲に一つの計を施さんや。王婆笑て云く、我多年茶を賣といへ共、今日の過活とするに足ず、是故に專ら這等のことを挈襯て、過活の助とす、何ぞ大官人の命に遵ざらんや。西門慶が云く、汝もしいよ〳〵此事を成就なさしめば、我汝に十兩の銀を與へ、汝が死ん時の棺槨を買しめん。王婆が云く、這等のことをなすには、

ひ給へ、とて、乃ち濃々と薑茶を煎じて、西門慶に與ふ。西門慶茶を吃して、同じく戲れて云けるは、我去年の春、此店に至てより此來、終に此邊に來らざりしなり、汝宜しく我に相伴し茶を吃せんや。王婆が云く、我若相伴致さんは、却て興有まじ、只獨自ら吃し給へ。西門慶又問て云く、此間壁の武大郎は、常に何を以て業とするや。王婆が云く、官人何ぞ早く是を忘れ給ふや、彼は毎日餅を商うて過活とす。西門慶が云く、誠に我も彼が賣ふ餅は名物の譽高きことを聞及べり、我今彼に問て、四五十の餅を誂へんと欲す、しかし武大郎宿に在べきや。王婆が云く、大官人彼が餅を買んと思ひ給はゞ、彼少刻街に出て賣を待て買給へ、何ぞ必しも親自彼が家に尋ね行給ふことあらんや。西門慶が云く、汝が云こと尤然り、後刻街に於て買ふべし、とて、遂に店を立て出ければ、王婆は倘簾の邊に在て、彼西門慶を見るに、一向武大郎が門前を窺ひ望んで、一遭は西に往き、又一遭は東に來り往來す。已に七八遍して、再びまた王婆が茶坊に入て坐をなす。王婆又戲れて云けるは、大官人數月此邊には、消息もなかりけるが、今日は難得に來臨を惠み給ふよ。西門慶是を聞て大に咲ひ、乃ち懷中より一兩（和の十匁）許の銀を探出し、王婆に與へ云けるは、汝權くこれを收めて茶錢とせよ。王婆が云く、茶錢には多く餘れり、いかんぞあへてこれを收んや。云く、汝必ず多少を論ずることなく、且宜く是を收よ。王婆暗に

花期の昔も遙なり。西門慶が云く、其年僅の差ある共、果して汝が云ごとき上品ならば、何爲其年を論ぜんや。王婆が云く、那女は戊寅の生れにて、今年九十三歳なり。西門慶大いに笑て云く、汝這狂婆子いかんぞ此のごとき戲言をいふや、とて、已に座を立て、門外に馳出けり。此時天色漸暮ければ、王婆は則火を點じて、門を闔んとしける處に、彼西門慶又來りて簾の下に坐をなし、乃ち武大郎が門前を一向望みければ、王婆が云く、大官人和合湯を用ひ給はんや。西門慶がいはく、是尤好らん、汝早く拿來れ。王婆すなはち、一盞の和合湯を與へ吃せしむ。やゝ久しく坐し、遂に又簾の下を立て王婆に對して云けるは、我猶明日來るべし、とて、其夜は私宅に歸りけり。翌日早天に王婆門を開て外面をみるに、彼西門慶又門前に在て、一向奔走す。王婆心中に想ひけるは、此西門慶、いかんぞ此のごとく心忙しきや、我少計を施し、彼が錢財を分ち取んものを、と悅んで、乃ち坐して茶を煮んとしける處に、西門慶はや王婆が店に來て、簾の下に坐をなし、只顧頭を傾けて、武大郎が門前を窺望む。王婆は、それを知らぬ體にもてなし、只風爐を搧ぎ、茶を煎じ居けるが、西門慶乃ち店の内を望んで、呼りて云けるは、王婆我が爲に茶を拿來らんや。王婆此時打笑て云けるは、大官人は連日此邊には見え給はざりけるが、今日は何かたの風が吹て、我が店には至り給ふや、宜しく内に入て茶を用

く、兒子回りなば、早速我に知らせよ、とて、遂に店を立て出にけり。王婆は又茶を煮て、客も來るらんと待ける處に、約莫一時餘り過て、彼西門慶又來て王婆が店の簾の下に坐して、武大郎が門前を望み見る。王婆此時一椀の梅湯を捧げ、西門慶に飲しむ。西門慶これを飲畢て云けるは、王婆が此梅湯は做得て味最美なり、汝が家に倘幾干の梅湯有や、若餘あらば我少しこれを所望すべし。王婆故意聞誤りたる體にて云けるは、我一生媒をなしけれども、未だ餘る美女あらず、若あらば所望に應ずべし。西門慶が云く、我は是梅湯のことをこそ問けるに、汝は却てこれを媒となす、大いに差へり。王婆打笑て云く、梅と媒とは本同韻なるゆゑ、我は只媒を做を問給ふかと聞誤りぬ。西門慶が云く、汝果して媒をなさば、我爲に能るべき媒を做あたへば、我重く汝を謝すべし。王婆が云く、媒をなす事は我素より老在行なれば、天下に雙びなき、媒をもなすべけれ共、恐らくは大官人の夫人これを知り給はゞ、我此皺臉の皮を、剝給ふことあらん。時に西門慶が云く、我妻は原來賢女なり、極めて能人を用ゆ、旣に今幾干の妾を求めて、我身邊に侍せしめけれ共、第恨らくは、心に合ふ者一人もなし、若我が爲に汝美なるを東西に看著なば、早速我に告知らせよ。王婆が云く、我前日一人の美女を見置けれ共、恐らくは大官人のこゝろに合ふまじ、其容貌は尋常ならずといへども、唯怨らくは其年少からずして、

し給へ。西門慶が云く、銀擔子李二が妻ならん。王婆頭を搖て云く、若李二ならば、是誠に好一對の夫婦なり。西門慶が云く、然らば必ず花肐膊陸小乙が妻なるべし。王婆大に笑て云く、陸小乙もし彼が夫ならば、又是相應の夫婦なり、大官人再び心を留て猜し給へ。西門慶が云く、我實に猜しがたし、知らず何人の妻なるにや、汝速に告知せよ。王婆哈々と打笑ひ云けるは、我宜く渠が夫の名を云て、大官人を笑しめん、其人は是餅を賣る武大郎なり。西門慶これを聞て、覺えず聲を放て、大に笑ひ云けるは、武大郎と云は、人都て三寸釘谷樹皮と、諢名を附たる武大郎がことならずや。王婆が云く、便ち其矮漢なり。西門慶大に歎息して云けるは、彼のごとき美女、いかんぞ武大郎ごとき醜男に嫁しけるや。王婆が云く、古より諺にも、駿馬却て痴漢を駄て走り、美妻常に拙夫を伴て眠ると云ことあり、世間には儘かくのごとき配合多し。西門慶笑ふこと、良久しうして、再び王婆に諂うて云けるは、汝が兒子は誰に隨つて何國に往けるぞや。王婆が云く、我兒子は數年以前、一人の商客に跟て、外鄕に出けるが、其後久しく音信不通なるゆゑ、其死生をも知らざるなり。西門慶が云く、汝何ぞ兒子を呼回して我に跟さるや、我格別に情を掛て使ふべきに、近日好便あらば、必ず書簡を以て呼回せ。王婆が云く、若大官人兒子を擡擧給はらば、是莫大の幸なり、近々幸便を索て呼廻し候べし。西門慶が云

を眄み、遂に其所を立去しかども、尚七八遍頭を囘して看送りぬ。彼女は自ら簾を収め門を闔し、閑に武大郎が歸るを待居けり。扨かの簾に打れたる漢子は、原是陽谷縣に於て隱なき破落戸なり。乃ち縣前に居住して、生藥舗を開き、其家尤も富饒なり。然れ共此漢子幼きより奸佞の生質にて、又よく拳頭棒をつかふ。彼以前は貧き者なりしが、近年暴に多く金銀を攢て富隆えり。元來佞者なるゆゑ、常に財物を散じ、縣裡の官吏に賄賂を送り、諸役人どもにも盡く交を結で、甚だ勢ありしかば、滿縣の人民ら彼を怕れざるはなかりけり。那漢子が覆姓は西門、名は慶と號す。人皆彼を稱し西門大郎とも云ひ、又錢財あるゆゑ、西門大官人とも稱しぬ。此日西門慶直に王婆が茶坊に入て坐しければ、王婆戯れ咲て云く、大官人先には頭を打れ給ひしが、其痛定て今に禁難からん。西門慶も又打笑て云けるは、彼女は實に誰が妻なるぞや。王婆が云く、彼は是閻魔大王が妹にて五道冥官が女武大官が妻なり、彼を問給ふは、何故ぞや。西門慶が云く、汝又戯を云や、實に彼女がことを告知らせよ。王婆が云く、大官人何ぞ彼を知給はざるや、彼が夫は、毎日縣前に徘徊して餅を賣る漢子なり。西門慶が云く、我是を猜せり、彼女は必定棗糕を賣る、徐三が妻なるべし。王婆これを聞き、手を搖て云けるは、彼が夫もし徐三ならば、少しは相應すべけれ共、彼が夫は尚徐三よりも醜し、大官人再びこれを猜

く歸り、彼前後の門を緊く關して、武松が諫言を守りける。彼妻初の間は、毎日武大を罵りしかども、其後は罵り疲れて、自ら靜り、約莫武大が回る時分に至れば、妻先自ら彼簾を除て門を關す。武大郎之を見て、暗に悦びけり。已に五六日經る程に、冬も漸々暮んとして、天氣陽に回り、日色頗る暖なり。當日彼妻、武大郎も頓て回るべき時分と思ひ、自ら門前に立出て、簾を取んとしける處に、其簾の外に一人の漢子過りけるが、事正に出來すべき時節到りけるにや、彼妻か手に持たる簾、思はず手の内より滑落て、彼漢子これを罵んと欲し、頭を回し、眼を瞋して是をみるに、一人の女風流に粧ひ、門前に立出て在けるが、忙しく罪を謝して云けるは、奴家今覺ず簾を取落して、官人を犯し申ぬ、願くは只罪を免し、怒を息給へ。彼漢子かゝる風流の女を看て、俄に怒色を更め笑を帶み、乃腰を曲て云けるは、夫人、何ぞ慇懃なる分說をなしたまふや、縱頭を傷うたりとも、何の苦しき事かあらん。此時間壁の王婆、店の内より是を見たりけるが、忽ち聲を揚て云けるは、誰人か官人を打ぬるぞや、誠によくも打れたる者かな。那漢子呵々と打笑ひ云けるは、這は是夫人の、我を打給ひたるにあらず、我却て夫人を驚しめけるなり、願くは夫人此罪を免し給へ。彼女も又笑を含て云けるは、望らくは官人實に恕し給へ、もと是奴家不意に出たる過なり。彼漢子又打笑て、頻に眼色を以て、彼女

日武松は已に旅裝を調へて、知縣相公に見えし處に、知縣はや一輛の車に貨物を載み、兩人の精兵幷に兩人の家僕を、武松に從がはしめければ、武松謹で知縣を辭し、都て五人、遂に陽谷縣を離れて、東京へぞ急ぎけり。扨又武大郎は武松に別れてより此來、毎日妻に罵られしかども、氣を忍び聲を呑で爭ひなさず、心の內に只武松が云し言を守り、商賣も常よりは、早く完了て家に回り、便ち彼簾を取て、前後の門を關し、唯安々と家に坐して、他出することもなかりければ、妻此樣子を看、心大に焦燥て、武大郎が面を指ざし罵て云けるは、汝愚夫、何ぞかくのごとく事を曉ざるや、日色猶天空の裡にあるに、はや門を關すは、是世間の法にあらず、必定人皆我家を笑て、いよ〳〵汝を愚なりとすべし、汝尤聰明ならざるといへども、何ぞ弟を恐れて、かくのごときに至るや。武大が云く、若世間の人我家を笑ば、唯よく笑はすべし、弟ながら武松が云しこと、都て皆是非を免るゝことの金言なり、我いかんぞこれを容ひざらんや。妻是を聞て、武大を白眼罵つて云けるは、汝懦弱なりといへども、同く是男子なり、何ぞ自ら主意をなさずして、人の下知を受るや。武大が云く、我決して武松が言を守るべし、彼が云し所、我爲には皆金玉の詞なり、汝必ず邪の言をいふことなかれ。妻これを聞て益怒を含み、一連に十餘日、只顧夫を罵りしかども、武大郎は是を耳にも聞入ず、毎日只晏く出ては、早

這樣に胡亂なる言は他人に對して云給へ、我かつて斯のごとき套語を聞たる事なし、誠に悔氣事共なり。武松是を聞て呵々と打笑て云けるは、若嫂々の宣ふ言のごとくは、我等兄弟少も憂ること有まじ、唯宜しく口と心と相應し給へ、今嫂々の言我よく心に記しぬ、彌其言に差なくんば、誓の爲に此酒を飲給へ、とて、彼大盃に篩持たる酒を阿嫂に送りければ、阿嫂盃を推開て、直に樓を下り梯子の半に至て、聲を放ち涙を流し云けるは、汝はこれ聰明伶利の人なれば、長嫂を敬ふことは原來知りつらんに、何ぞかくのごとく無禮をなすや、我向に武大郎に嫁せし時、曾て叔々あることを聞ず、頃日汝我が家に來て、はや多く事を惹出すは、是道理に於て何ぞや、重ねて我家の事毛頭も管ふことなかれ、と大に哭て梯子をぞ下りけり。武大郎武松は、猶樓の上に有て幾干酒を勸め、盃已に收りければ、武松則武大郎に別を告て、樓を下りしかば、武大郎は頻に戀々として、武松に對して云けるは、汝必ず早く回り、我心を安んぜしめよ、とて、覺ず兩眼に涙を灑ぎけり。武松此體を見て、心中に忍びかね、長兄必ず憂ふべからず、我更に早く回るべし、明日より商賣に出給はずして、唯朝夕心を安じ懐を寛げ、宿に居給へ、毎日の使用は、我自ら送るべし。武大は猶依々として、門前まで送り出で、一向別を歎きけり。武松又云く、長兄必我云し事を忘れ給ふ事なかれ、頓て又再び對面致さん、とて、二人の雜兵と倶に、縣裡へぞ歸りける。翌

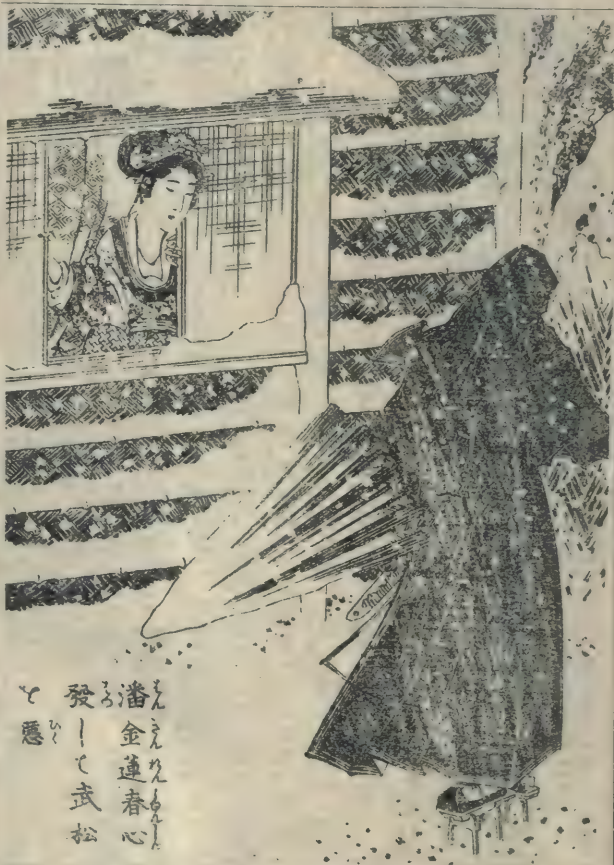
しむ、遲き時は二ヶ月、早くは四五十日の内に歸るべし、このゆゑに我特々來て、長兄に一言を告んとす、長兄は原來人となり儒弱なるゆゑ、我もし當地に在ずば、恐らくは外人に欺れ給ふことあらん、明日より縱商賣に出給ふ共、必ず遲く出て早く歸り給へ、又外人とともに、酒を酌給ふことなかれ、毎日早く門を閉て、是非口舌等を免れ給へ、若猶人有て欺き侮ること あり共、只是を忍て爭ひ給ふべからず、我歸りなば、必長兄の爲に理論すべし、長兄若彌我が言を容ひ從はんと思ひ給はゞ、此大盃の酒を飲乾て誓とし給へ。武大郎是を聞て卽ち盃を取て云けるは、我弟が云處極て然り、我敢て一々汝が言に從はん、とて、遂に其酒を飲乾けり。武松又再び其盃に滿々と篩て、阿嫂に對して云けるは、嫂々は原來乖き人なれば、某多く言を用て示し申に及ぶまじ、唯我兄は人となり愚にして、諸事拙き人なれば、全く嫂々の助を賴のみなり、嫂々若よく家を堅固に守り給はゞ、兄曾て憂ひ給ふこと有まじ、豈聞ずや古人の語にも、籬牢ければ犬入らずと云ことあり。那阿嫂これを聞て忽ち面を紅めて大に恥ぢ、乃夫武大郎を罵て云けるは、汝いかなる事を人に告て、斯我を欺しめけるや、我は是女の中の男なり、見がたきこと聞がたきことを聞見するに忍びず、我武大郎に嫁してより以來、蟻だにも屋の内に入ず、然るに籬牢ければ犬入らずといひぬるは、是明かに我を譏るの詞なり、

し。知縣是を聞て大いに悅び、則酒食を以て且武松を賞しけり。扨武松は知縣の命を受て廳上を退き、乃ち二人の雜兵を街に馳て、酒肴を調しめ、直に紫石街に來て、武大郎が家に至る。此時武大郎も已に餅を賣完了て同く家に歸り、武松に對面しぬ。武松は兩人の雜兵に命じて、酒肴を具へしむる。彼阿嫂は一度武松を怨みけれども、其餘情未だ絕ず居たりしに、武松が來りたるを見て、心中に想ひけるは、彼又今こゝに至るは、定めて我が事を想ひ出してこそ來るらめ、我且慢々と彼を圖るべし、と私に悅で、亦復風流に粧ひ、急に門前に出て、武松を迎て云けるは、叔々は何故絕て音信不通にはなし給ふぞ、我常に心に懸りぬるゆゑ、頃日は叔々を我家に邀へんとこそ思ひし、今日は何の幸に、我ら夫婦を訪ひ給ひしぞ。武松が云く、我今急事有て、夫婦の人に告知せ申さん爲、特々伺候を遂ぬ。阿嫂が云く、已にかくのごとくんば、樓に登つて語り給へ、とて、武大郎と共に武松を引て樓に上り、三人已に座定りければ、彼雜兵酒肴を具へ樓の上に携へ來る。武松頓て盃を取て、武大郎と阿嫂に勸む。阿嫂は只願に武松を看て、情を通ぜんと欲しければ、武松早く此體を察すれ共、更に怒もせず、又悅もせず、只武大郎を勸め、酒を酌しめ、盃數巡に至りしかば、武松又大盃を出し、酒を滿々と篩ぎ、是を手に持ち、武大郎に對して云けるは、某俄に知縣相公の命に依て、東京に上らんとす、明日は急に發足せ

ことあらん、汝今縣裡に移り行こと是天の保佑なり、汝今都頭の職をなすとも、久しからずして、必ず誤ることあらん、とて、混一怒罵りしかば、武太郎此體を見て悦ず、只願武松が事をぞ思ひけり。武松は其日より又知縣相公の衙門裏に移りて、毎日怠らず公役を勤けり。彼妻再三武大郎に示して云けるは、武松は是人として鳥にだにもしかず、必ず渠を訪ひ給ふことなかれ、若一度にても彼を訪ひ給ひなば、我早速夫婦の縁を斷て離別致すべし。武大郎元來愚直の者なれば、今妻に嚇されて、曾て武松を訪はざるこそ拙けれ。當縣の相公は任に到てより以來、已に二年餘りになりしかば、多く金銀財寶を蓄けるが、私に東京の親類の方へ預け置んと思へども、等閑の者に命じて東京へ送らば、必ず途中にて盗賊の難有んを恐れ、何卒一人の豪傑を求めば、是を監押として、財寶を東京へ送り遣さんと圖りける處に、忽ち武松が事を思ひ出し、心中に悦び、卽日武松を呼で商議して云けるは、我近日東京の類親へ一荷の禮物を送らんと思ふに、途中心許なければ、もし汝ごとき豪傑を監押たらしめば、道中恙なからん、汝もし辛苦を辭せず、我爲に東京に往ば、我又重く恩賞を行はん。武松が云く、某多く相公の大恩を蒙る、何ぞ敢て辛苦を辭することあらんや、某未だ東京へ行ず、原來東京の風景をも、一見致したく思ふ折節なれば、某も苟に願ふ處なり、若禮物全く調ひなば、則明日發足致すべ

に笑はるゝことなかれ、とて、直に武松が房裡に入て乃ち武松に對して云けるは、汝は食を吃しけるや、我汝と共に酒食を用んに、房裡を出て、外面に來れ。武松是を聞しかども、一聲をも答ず、唯默然として居たりけるが、忽ち身を奮起して、門外に馳出しかば、武大郎聲を高めて、再三留けれ共、武松更に耳にも入ず、混一縣裡を望で走り行ぬ。武大郎則妻に問て云けるは、武松只顧縣裡を望んで馳行は、是何の意ぞや、我は偏にこれを憂るなり。妻罵つて云く、彼がごとき禽獸、何ぞ憂とするに足ん、彼今縣裡に往は、自ら恥てこそ避行らめ、彼必定己が行李を運び搬て、縣裡に移ることあらん、是幸ひ惡魔を出す道理なれば、却て悅ばし、我が夫もし彼と、一所に居たく思ひ給はゞ、早々我に一紙の休書を與へ給へ、我則此家を出べし、其跡にて彼を呼入れ給へ。武太郎これを聞て、再び一言も返さず、只心中に憂ひけり。斯る處に武松一人の雜兵を引て、再び立歸り、我行李等收拾て、雜兵に挑せ、又忙しく縣裡を望で走り行く。武大郎これを見て、同じく赶行き、乃ち武松に對して云けるは、汝は何ゆゑ早縣裡へは移行ぞ。武松が云く、長兄必ず、是を問給ふことなかれ、若是を云時は、大に家門を汚すのみ、只我に任せて移らしめ給へ。武大郎是を聞て、再び問ことをなさず、遂に私宅に歸りけり。此時彼妻は猶喃々吶々と、武松を罵り、汝ごとき不義の徒若久しく我家に在ば、遂に我命をも害する

乃盃に酒を篩で、これを一口二口飲了り、猶五六分の酒を剩して武松に送り、叔々此酒を飲給へ。武松此時忽然として、大いに怒り、阿嫂が持たる酒を奪取て地上に打捨て、猶聲を勵して云けるは、嫂々何ぞかくのごとき、羞恥を識らざる事をなし給ふぞや、我は是道を知り義を守る大丈夫なり、彼風俗を敗り人倫を沒する徒とは等しからず、嫂々重ねて、かく恥なきことを云給ふな、もし我言を容ずして、尙戯をなし給はゞ、我縱これを忍ぶとも、我が此拳は、曾て嫂々を饒すまじ、唯宜しく自ら恥を知給へ。阿嫂之を聞て、忽ち面色紅うして、急に盃を收て云けるは、我は是一時の戯にこそ斯云けるに、何ぞ是を眞とし給ふや、實に拙き人の心底かな、とて、一向武松をぞ怨みけり。此時はや未の刻もさがりしかば、武大郎も已に、商賣を完了て立歸り、乃ち門を敲きければ、妻忙しく門を開て武大郎を迎ふ。武大郎是を見るに、兩眼に淚を含で、顏色すべて紅かりしかば、武大郎これを怪て問けるは、汝何ゆゑに顏に怒れる色ありや。妻が云く、我夫本愚なるゆゑ、人を呼入て、我を欺しめ給ふなり。武大郎が云く、誰か來て汝を欺きしぞ。妻が云く、我今日武松が雪を踏て歸たるを見て、心中に憐み、自ら酒食を具へて管待ける處、武松人なきに乘じて只顧我に調戯ぬ、是ゆゑに我是を憤れり。武大郎が云く、我弟は原來かくのごとき不義を做者にあらず、必ず聲を高めて、隣家の輩

聞ば、叔々は縣前に、一人の妾を養ひ置給ふと、未だ知らず此事實なるや。武松が云く、嫂々必ず、外人の言を聞給ふことなかれ、某原來色を好む輩にあらず、何ぞ妄に、妾をもとむべきや。阿嫂が云く、叔々の言は、尤君子に似たれ共、只恐らくは、口と心と應ずまじ。武松が云く、嫂々もしこれを信じ給はずんば、我兄に問給へ。阿嫂が云く、叔々の兄何ぞよく、かくのごとき艶事を知らんや、若是らのことを曉らば、いかんぞ餅商賣を致さんや、叔々且心を寛げて、酒を酌給へ、とて、一連に三四盃を篩で、武松に勸め、己も又二三盃飮しかば、愈春心發動き、自らこれを忍びず、只顧戲言を以て、武松を伺しかば、武松これを七八分推察し、只頭を低て、自ら慚愧に堪ざりけり。阿嫂又酒を盪て來らん、とて、已に爐火の邊を立ければ、武松は只火筋を撚て火を弄し、心大に悅ばず。阿嫂頓て又酒を携へて、武松が前に來り、乃ち右の手を伸して、武松が肩胛を推て云けるは、叔々、只這些衣服を着し給ふのみにては、何ぞ此寒氣に堪給はんや。武松これをみて、殆快よからず、只頭を低口を閉て、尙更火筋を撚居たりし。阿嫂は武松が答へざるを見て、急に火筋を奪ひ取て云けるは、叔々火を弄し何の戲をなし給ふぞや、とて、一向笑を含で媚にけり。武松は此光景を見て、大いに怒りけれ共、只聲を出さずして在ければ、かの阿嫂欲心倍熾んにして、武松が心中怒をも知らず、

潘金蓮春心
を發して武松
を惑

ば、武大郎已ことを得ずして、營の爲に街にぞ出行けり。此時彼妻間壁の王婆を央うて、酒肉の類を買調へ、今日は已不得、武松に三盃を勸めて、情を敍んものをと、虛華地に悅び、乃ち簾の下に立て、武松が囘るを待暮す。此日武松は雪の裏を過りて、亂瓊碎玉を踏て歸りしかば、阿嫂簾を揭げて、嘸縣裡も寒冷つらんに、いかんぞ囘り遲かりしや。武松がいはく、今日は縣裡にて早飯を食し、又朋友に酒を勸められしかども、何としてか快からず覺えけるまゝ、直に座を起て歸りしなり。阿嫂が云く、叔々且よろしく向火給へ。武松これを謝して、爐火の邊に坐しければ、阿嫂自ら前後の門を關て、酒肴を携へ、武松が前に來る。武松則問て云く、我兄は何方に行給ひて、未だ歸らざるや。阿嫂が云く、我夫は每日街に出て商賣を營み申さるゝなり、我且叔々と三盃を酌ん。武松がいはく、兄の囘らるゝを待て、共に酌給へ。阿嫂心極めて忙しかりしかば、いかんぞ能夫が囘るを待んや、早速酒を盪て自ら杯に篩ぎ、則これを武松に送て笑を含み、情を露して云けるは、叔々此盃の酒を飲給へ。武松が云く、嫂々必ず慇懃の事をなし給ふな、とて、則其盃の酒を乾しければ、阿嫂又滿々と篩で、武松に再び勸めけり。武松これを謝して、唯賭氣に飲乾し、又此盃に酒を篩で阿嫂に送り、則慇懃に勸めければ、阿嫂これを喜んで飲乾し、遂に武松に問て云けるは、我前日人の傳へ云を

三編　卷之二十二

○其下

武松は兄が家に同居し、既に五六日を過しけるに、武松一疋の緞子を阿嫂に送りければ、彼妻これを得て、顏に笑を含んで云けるは、叔々心あつて送り給ふ物を、若辭することあらば、反て無禮ならん、この故に姑くこれを受收ぬ、とて、限なく悅びけり。武松は武大郎夫婦と一所に在て、毎日縣裡に伺候し、我が職を勤め、あるひは遲く歸り、ある時は疾く歸り、其時刻さらに定らずといへども、阿嫂少しも勞を辭する顏もなく、ねんごろに飮食を具へて、武松に進めければ、武松心中にこれを安からずぞおもひける。阿嫂時々武松が心を窺ひしかども、原鐵石の心にて、少しも動ずる景色なし。光陰箭の如く、はや一月餘りを過しける。時節まさに十一月の天氣になりて、連日寒風緊く起り、彤雲四下に遍く布き、又一天紛々揚々として、大雪降り、世界都て銀を敷たるごとくなり。翌日武松早朝より縣裡に參りて、直に日中に至りけれども、未だ歸らざりしかば、武大郎心中に待侘居ける處に、彼妻武大郎を責て、商賣に出しけれ

に至て再び立帰りぬ。此時彼妻手を洗ひ甲を剔り、別して毎よりも風流に粧ひ、自ら食を設け、武松を請て吃せしむ。武松は原來直性の人なれば、阿嫂が自ら奔走するをみて、意頗る安んぜず、再三慇懃に謝しにけり。彼妻又自ら一盞の茶を捧げて、武松に與ふ。武松忙しくこれを取て云けるは、嫂々自ら斯る手を下し給ふことは、某大いにこれを忍びずして坐立安んぜず、縣裡より一人の雜兵を呼寄申さんに、諸事これに命じ給ふべし。彼妻が云く、叔々は何ゆゑかくの如き、慇懃の言を云給ふぞや、原是一家の骨肉なれば、我縱叔々に事るに、何の不可なるかあらん、若彼雜兵を呼寄給ふとも、是をつかふこと能はじ、彼輩は皆鄙き徒なれば、朝夕の飯食をなすとも、大いに醃臢からんなれば、我亦これを見るに忍ぶまじ、叔々必ず彼輩を呼給ふことなかれ。武松が云く、雜兵等が做ことは、尤淸かるまじけれ共、我いかんぞ敢て嫂々を勞せんや、とて、又公役に因て其日再び縣裡へぞ往にけり。
此篇事長ければ、次の卷へわたりて二十四囘目の文なり。

移り給へ、若移り給はずんば、又もや夫婦他人に欺かるゝ事あらん、我預じめ一間の歇み所を設て急に相待べし。武大郎これを聞て、大に悦んで云く、我妻が云所大に可なり、武松汝肯て我家に移り來らば、誰かよく夫婦の者を欺き侮る者あらんや、願はくは、早くに我家に移來て、我等夫婦が身心を安んぜしめよ。武松これを辭すること能はずして云けるは、既にかくのごとくんば、今晩早速に移り申さんや。彼妻が云く、若今晩移り給はゞ、別して宜しからん、早く回て早く來り給へ、我ら夫婦專ら相待申さん。武松は此時兄の家を辭して、直に縣裡に來り、則知縣相公に見て云く、某が同胞の兄、幸ひ今此地の紫石街に居住す、某今晩より彼家に移り住せんと欲す、願くは速に命を奉つて移り、兄へ悦ばせ申たし。知縣の云く、汝が願ふ所は乃孝悌の事なり、我何ぞ是を許ざらんや、宜しく早々移るべし、但毎日自ら怠ずして、縣裡に來り公役を勤めよ。武松頓首してこれを謝し、乃有合の家財を、盡く雜兵に持せて、其夜武太郎が家に搬りけり。彼妻武松が移りしこと、恰も半夜に金玉を拾ひし思をなし、天に悅び地に悅んで、滿面に笑を含ぬ。乃ち一軒の房裡を設け、武松を歇ましむ。武松も大に悅び、各〻其夜は休みけり。翌日彼妻忙しく起て、面を洗ひ口を漱ぎ、又武松に請て同じく面を洗はしむ。武松これを謝して、乃縣裡に馳せ、其朝の役を勤め、直に五ッ時

にも、人剛骨なければ安身牢からずとこそ申なり、我平生快性なるに依て、我夫のごとき愚直なる人を見るに忍びざるなり。武松が云く、我兄のごときは、事を惹出して嫂々に憂を掛ることなし、何ゆゑ是を嫌給ふや、と未だ云も罷らざるに、武大郎ははや酒肉を調へて家に歸り、即樓に上り妻に對して云けるは、汝は樓を下り酒肉を備へ來らんや。彼妻が云く、我夫は何ゆゑかく世事を知給はざるや、我叔々に備侍してこゝにあり、いかんぞよく樓を下らんや。武松が云く、嫂々何の慇懃のことを云給ふぞ、事あらば宜しく樓を下り給へ。彼妻此時武大郎に對して、我夫宜しく速に間壁の王婆を央て、酒食を具へしめ給へ。武大郎これを聞き、乃ち王婆を傭來て酒食を具しめ、自ら運びて樓上に持來り、三人座を對して、已に飲酌を始めけり。彼妻武松に向て云けるは、今日叔々初て至り給へ共、何の欵待もこれなく、怠慢の至りなり。武松是を謝して云く、嫂々何ぞかく隔心の言を云給ふや。彼妻また兩眼に情を含で、只顧武松を看ければ、武松又此體を見て、心中悦びず、只頭を低て一言半句も說話することなかりけり。酒已に數盃巡りしかば、武松乃ち別れを告て、深く夫婦の欵待を謝しぬ。武大郎が云く、汝何ぞ早歸らんと云や、倘酒を酌で黃昏に歸るべし。武松が云く、酒已に足ぬ、再び來て訪ひ申さん、とて、遂に樓を下りければ、武大郎夫婦も同く下りて相送る。那妻が云く、叔々近日必ず我家に

彼妻が云く、叔々かくのごとくんば、定て不自由にあらん。武松が云く、某獨身のことなれば、別に不自由の事もなく、却て朝夕心安し、況や某が手下の雜兵ら、常に來て我に事ふ、故に我自ら手足を勞することなし。彼妻が云く、雜兵等いかんぞ能心を用ひて、叔々に事ふることあらんや、願くは我家に移て、一所に住し給へ、然らば我自ら食物を調へ、朝夕是を進め申さん、是尤雜兵等が手に觸たる食物より猶も淸からん。武松が云く、嫂々の懇情感謝に勝ざるなり。彼妻又問て云く、叔々は年幾干になり給ふや。武松が云く、某徒にはや二十五歲に及びぬ。彼妻が云く、叔々今年二十五歲ならば、我に三歲長じ給ふなり、叔々此度は何の處より、當地には至り給ひぬるや。武松が云く、我故鄕を出てよりは、滄州に一年あまり逗留し、一向兄のことのみ心に懸りしゆゑ、不圖滄州を出て、兄を探望んとせし處に、想ず此處にて對面を遂ぬ。彼妻が云く、我等夫婦此處に搬來し事は、尤其緣故多し、我叔々の兄に嫁してよりは、人皆夫の愚直なるに乘じて、一向我等夫婦を欺負申せし故、淸河縣の住居なりがたく、遂に此所に移り來れり、向に若かくの如くなる強勇なる叔々家にあらば、誰かあへて我夫を欺く徒あらんや。武松が云く、我兄は半點も某に似たる所なし、唯よく老實を守り給ふ、是却て大いに可なり。彼妻が云く、叔々何故かく顚倒したる言をいひ給ふぞや、諺

は、叔々の事にてありしよな、今日こゝに至り給ふこそ、我夫婦の福なり、先樓に上りて今日は宜しく終日語り給へ、とて、遂に武松を引て樓に登りけり。武松此女をみるに、眉は初春の柳葉に似て、常に雨を恨み、雲の愁を含み、顔は三月の桃花のごとくにて、暗に風の情、月の意を藏しぬ。尤玉貌妖嬈として、芳容窈窕たり。此時三人樓に上て座已に定りしかば、彼妻まづ武大郎に對して云けるは、我暫く叔々に陪して待べし、丈夫急に酒食を設け來り給へ。武大郎が云く、我も斯こそ思ひつれ、武松まづ心を寛げ待るべし、我少刻回て、共に一盞を傾ん、とて、遂に樓を下りけり。彼妻熟々武松が人物を看て、心中に想ひけるは、わが夫武大郎と此武松とは、原同胞の兄弟なるに、何ぞかくのごとく雲泥のたがひありや、此弟武松は身の長八尺に餘り、人品殊に爽なり、我もしかやうの男子に嫁しなば、嘸悦ばしからんに、彼兄武大郎は身の長四尺に滿ず、人物更に醜惡なり、我いかなる報にて、彼漢子には嫁しけるぞや、何とぞ此武松を諫めて、此處に移さしめ、遂に我一點の情をも通ずべきものを、と虛華地に悅び、乃ち滿面に笑を帶して、武松に問て云けるは、叔々當地に至り給ひてより以來、二十日あまりにもなるべきや。武松答へて云く、某當地に至て今日方に十八日に及ぬ。彼妻の云ふ、叔々今何の處にか居住し給ふぞや。武松が云く、未だ宅をも借ざるゆゑ、知縣相公の衙門の內に居住いたす。

りしに、果して汝なり、まづ宜しく我家にて、過し別離の憂をも語り慰むべし、とて、遂に武松を導て私宅に趣き、直に紫石街を望んで馳來り、則一間の茶坊の間壁に至て、武大郎門を敲しかば、內より一人の女出で、彼蘆簾を揭げて門を開き、乃迎て云けるは、丈夫今日は何ゆゑ早く歸り給ひしぞ。武大郎が云く、我弟武松に遇しゆゑ、半途より誘引せり、汝宜しく對面すべし、とて、乃ち武松を引て內に入り、三人座を列ねて、武松慇懃に阿嫂にまみえしかば、武大郎まづ妻に告て云けるは、頃日諸人專ら沙汰しける、景陽岡にて大虎を打殺し、新に都頭の職をなしぬる人は、乃ち是我弟此武松なり。妻これを聞て急に向ひ前で云けるは、叔々（敬ふ語なり）何の幸ひに今日兄弟再たび參會し給ふぞや。武松も則答て云けるは、嫂々（敬ふ語なり）何故かく慇懃に座を起給ふや、とて、忽ち跪き地上に拜をなしければ、彼妻自ら武松を扶け起して申けるは、叔々這樣に拜をなし給ふは、却て我を苦めんとの事なるや、我いかんぞ妄に拜を受て宜からん。武松が云く、嫂々は是我兄に從ひ給ふ人なれば、我が拜を受給ふとも、何の不是かあらん、と終に拜をなしにけり。彼妻又云けるは、前日我も人の云を聞つるに、一人の豪傑景陽岡にて大虎を打殺し、則此日其人も縣裡に來るとて、見物の貴賤恰も蟻のごとく湊ひて、此前を奔走す、我も幾許か見たかりしか共、世間の想像を恥て、出ざりし所に、豈知らんや彼豪傑と云し

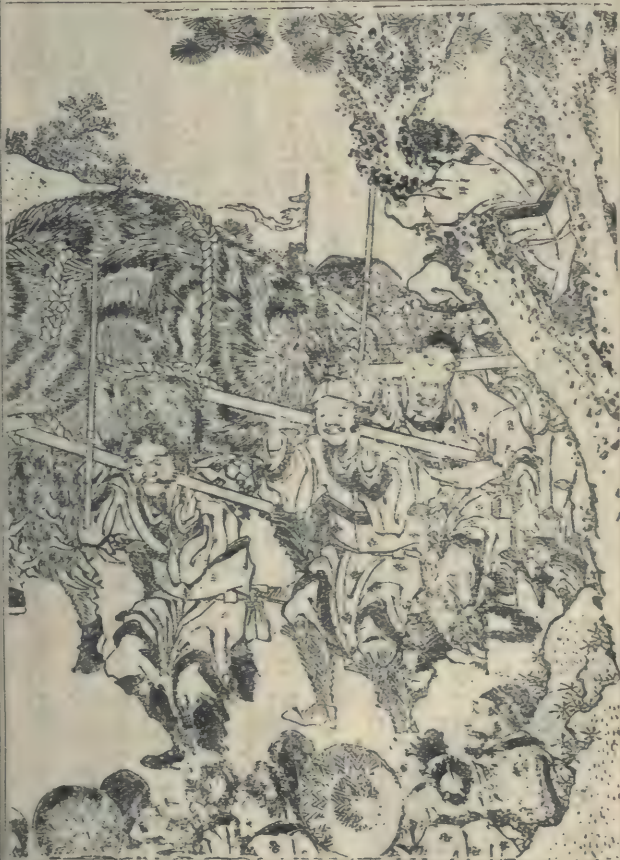
大郎は長四尺に滿ず、其形極めて賤くして醜し。淸河縣の人、皆武大郎かく身の長矮きを以て、諢名をつけて、三寸釘谷樹皮と呼慣せり。又彼武大が娶たる妻は、其比淸河縣にて一人の富貴人有けるが、許多使女の內、一人の家生の使女に潘金蓮とて二十許なるが、顏色頗る美なり、彼富貴人數度調戯をなせども、彼使女、原其家の老管家に情を通ぜんと思ふこと舊久し。故に曾て主人の意に從ず、剩本妻に斯と告しかば、夫婦是より色を變じ相爭ひ、若干日曾て睦じからず。よつて主人大に怒り、彼女を怨み心中に圖りけるは、當地第一の醜き男を選み出し、彼潘金蓮を配せて、其仇を報ぜんと、武大郎を選み出して、多く金銀を武大郎に與へ、乃ち彼使女潘金蓮を以て、武大郎に嫁し、果して大いに潘金蓮を耻辱めり。此沙汰四方に聞えて、人皆希有の思をなせり。乃ち彼後生者ども、盡く來り、再三武大郎を消遣けるとなり。彼潘金蓮は、原來色佳女なりけるに、形鄙しき武大郎に嫁しぬれば、心大いに悅ずして、旦暮に是を愁ひけり。武大郎此時武松に語て云けるは、我淸河縣より此所に移り、別に定まりし家業もなきゆゑ、只餅を賣て過活とす、今日も已に街に出てこれを賣んと欲しぬ、我向に街に在て、諸人の云を聞しに、景陽岡にて虎を打殺したる、武氏の勇士、既に今當地に留つて、都頭の職を賜りぬと、其風說專らなりしゆゑ、我已にこれを察し、武氏の勇士とは汝ならんと、七八分料

○王婆賄を貪て風情を說く

武松は後背を顧るに、今詞を掛しは兄武大郎なりしかば、忽ち地上に拜伏して罪を謝し、頭を擡云く、已に一年餘り對面せざりしゆゑ、日夜心に懸り憂しに、先恙なきこと何よりの福なり、只知らずいかなることにて、此地に至り給ひしや。武大郎が云く、汝故鄕を出て、若干の月日を過したるに、何ぞ一封の書簡も寄ざる、我あるひは怨み、あるひは想ひぬ。武松が云く、いかんぞ怨み想ひつし給へるや。武大郎が云く、怨しは、汝淸河縣にて醉狂の上、人を打倒して、故鄕を迯しに依て、官司より我を責て、汝が行向を問ることゝ、凡一月餘り、其事明白ならず、大いに苦みを受ぬ、這ぞ汝を怨しなり、又近き比我妻を娶れり、然るを後生輩、傍若無人に我家に踏入て我を欺き侮り、大に狼藉を働きぬ、汝あらば誰か敢てかゝる無禮をなさんやとて、汝を想ひぬ、是故に我淸河縣に住居して安んずること能ず、當地に移來て、今已に借宅の體にて貧き營をなす。扨此武大郎と武松とは、一腹一生の兄弟なれども、其形其志、大いに同じからず。武松は身の長八尺に餘り、相貌堂々威風凜々として、しかも兩臂に千百斤の氣力を有ちぬ。若かくのごとくならずんば、いかんぞよく彼大虎を殺す事を得ん。又武

某深く相公の仁心を感ずべし。知縣が云く、汝已にかく思はゞ宜しく汝が意に任すべし。武松大にこれを謝し、早速彼一千貫の賞錢を、諸獵人等に分與ふ。知縣これを見て、心中に深く武松が忠厚仁德なるを感じ、則武松を擡擧て職を授け、當地に留置んと思ひ、則武松に對していはく、汝は原是淸河縣の人ならば、我此陽谷縣とは、誠に咫尺の間を隔るのみ、我今汝を此處に留んことを願ふ、よつて都頭の職を授けんに、汝肯て當地に留りて職に就んや。武松拜謝して云く、若相公肯て某を擡擧給はゞ、某愚なりといへども、又敢て犬馬の勞を献らん。知縣是を聞て大いに悦び、隨卽に、押司の職をなす當番の役人を呼で商議を決し、此日武松を擡擧て、歩兵都頭となしぬ。かの里正竝に諸の獵人ども、悉く來て武松を賀し、一連に五六日喜びの酒を酌みけり。是より武松は、陽谷縣に在て已に數日を過し、只顧心中に思ひけるは、我もと故鄕に歸て、兄を探望んと欲しけるに、想はず此處にて都頭となり、尤譽を國中に蒙りしかども、未だ兄に遇ざるゆゑ、全く心を安んぜず、近日好便を求めて、消息を通ぜんと圖り、其日は先閑に乘じて、縣前に走り出て、此彼を繞り、當地の風景を賞めけり。時に武松が背後に人有て呼りけるは、武都頭は今日發跡を遂て、いかんぞ我を見外にはするや。是誰ならん、次を見るべし。

に迎回りければ、當所の人民等は、一人の豪傑、景陽岡にて虎を殺したると聞き、盡く先を爭うて馳來り、街に充ち見物す。武松轎の内に在てこれをみるに、貴賤雲霞の如くに相集り、肩を擦り背を挨し、直に虎を迎へて見物し、其騷動すること始終鳴を止ざりけり。既にして武松知縣が衙門の前に至りしかば、頓て轎を下り、廳前に進み入れば、下官らも又彼虎を擡て、同じく廳前に至る。此時知縣は武松が猛き模樣を看、又彼錦毛の虎を見て、心中に想けるは、若此大漢子が勇にあらずんば、誰かかくのごとき大虎を、殺すことを得んやと、暗に是を悦び、乃武松を呼で廳上に登らしめければ、武松謹で廳前に拜伏す。此時知縣問て云く、虎を殺したる勇夫は汝よな、汝いかゞしてかゝる猛虎を、一人の力を以て殺したるや。武松答て始終一々相告しかば、廳上廳下に座を列ねたる數多の役人等、一々此言を聞て、いづれ凡人の所爲とは思はれずと、衆皆舌を振て驚きけり。知縣大に感悦し、乃盃を執て武松に酒を賞す。武松謹でこれを飲了りしかば、知縣又村中に觸て、賞錢一千貫を萃め、則是を武松に褒美す。武松が云く、某此度村中の福を賴で、不慮に彼虎を殺しぬ、原某が力の能にはあらず、何ぞ敢て擅に官府より褒賞を受んや、某聞ることあり、村の獵戸等、相公の命を奉つて、虎を殺さんとて、多日多く錢財を費し候と、願くは此賜を彼等に分ち惠み給はんや、然らば

死虎を擔はしめ武松を官府に入しむ

號す、此度滄州より古郷に歸らんとして、今日此邊の酒店に立倚り、大いに酒を飲て岡に上りし所に、乃ち此大虎に遇ひ、これを打殺し候、とて、始終一々に語りしかば、諸の獵戸共これを聞き、大に感じて云けるは、足下は眞に是、世に罕なる豪傑なり、もし此のごとき豪傑にあらずんば、誰か能彼虎を殺すことを得んや、とて、やがて酒食を設て武松を欵待ぬ。武松は虎を殺して大に疲しかば、速に歇んと思ふ處に、里正すでに歇所を設け、請て歇ましむ。武松悦んで、其夜は里正が館に歇みけり。翌日は里正人を縣裡に馳て、虎を殺したる次第、具に口詞を寫し、知縣相公に訴ふ。此時武松も又草堂の上に出たりしかば、里正ならびに村中の郷老共、多く食を調へて武松を管待ぬ。武松諸人と座を列ね、一々對面をなし、頓て盃を擧て飲酌を始めけり。諸人が云けるは、彼虎が害せし人誠に其數を知らず、今日幸ひ豪傑此所に至り給ひ、遂に此虎を殺して、害を除き給ひぬること、第一村中の人民、都て其福を蒙り、第二には往來の旅人悉く其禍を免かる、豈これ豪傑の賜にあらずや。武松これを謝して云く、思ふに是、何ぞ某が力のなす處にあらん、すべて列位村中の福を賴んで、某不慮に彼虎を殺しぬ。諸人又暫く武松に酒を勸め、盃已に收りける處に、陽谷縣の知縣相公より、使者來て、則ち武松に對面し、頓て武松を請て轎に乘しめ、又彼虎をも轎の前に擡せ、直に陽谷縣

何故、岡を上つて虎は打ず、空くこゝに在るや。兩人が云く、かの大虎極めて猛き故岡に上ること能はず、唯此所に埋伏し、遠矢に射取んとのみ圖りぬ、汝は是いかなる勇力なれば、容易那大虎を殺し給ひしぞ。乃ち彼數輩に虎を殺したるを、語通ぜしを、一人も信ずるものなし。此時武松諸人に對して云けるは、汝等これを疑はゞ、今我其所につれ行これを見せん。諸人是を聞て云く、すでに斯のごとくは、總て客に從ひ行て看ん、とて、早速五六把の炬松を點し、盡く武松に從ひ、再び岡を上り來る。武松已に林の邊に至り、彼死虎を指ざして、諸人に見せしめければ、諸人これを見て、覺ず聲を放て、天に歡び地に喜び云けるは、かくのごとき猛き大虎を、只一人の力を以て打殺せしこと、寔に天神にあらずんば、誰かよくこれをなさんや。其内より一人は先此地の里正の家に注進に馳行ぬ。又諸人此死虎を緊と縛り、乃五六人にこれを擡せて、岡を下りける處に、七八十人の鄉夫はや此邊に出迎ふ。乃一乘の轎に、武松を請て乘しめ、直に里正が館に擡來りしかば、里正は自ら門前に出迎へ、卽ち武松を延て草堂に至りぬ。鄉夫各かの死虎を舁て、草堂の前に至りけり。斯て村中惣て三四十の獵人等盡く來て、武松に相見て問けるは、豪傑の高姓大名はいかん、又何國の人にて、何國へ行給ひ、幸ひ此處を過り給ふや。武松が云く、某は是當地の鄰郡清河縣の者にして、姓は武、名は松と

者共云く、我輩は當地の獵戶なり。武松が云く、汝今こゝに來るに、虎のかはを著するは、いかなるいはれぞ。彼者が云く、客は未だこの岡の上に大虎あるを知らざるや、今此景陽岡の上には、夜々彼虎人を傷ひ、獵戶も已に七八人害せられぬ、往來の旅人を傷害せしは其數を知らず、此故に當縣の知縣相公より公文下つて、當村の里正より、我がごとき獵人に命じて、これを捕へしめ給ふ、然れ共かの虎勢猛くして、近づくこと能はず、徒に每夜此邊に在て、かくのごとく相伺ふ、今宵も總て十餘人の輩こゝに埋伏して、虎の至るを待ぬ、客岡を下つて來しゆゑ、却て虎ならんと疑ひしなり、客は實に何等の人なれば、今時分に岡を經て來り給ふ、かつて虎には遇ざりしや。武松が云く、そも我は是淸河縣の者にて、名を武松と號す、今岡の上林の邊にて、大虎に遇ぬるゆゑ、我此拳を以て彼虎を打殺しぬ。兩人の者これを聞て大いに呆れ、疑て云けるは、いかんぞよくかゝることを得んや、此言信じがたし。武松が云く、汝等もしいよ〳〵信ぜずんば、我衣の上を見よ、猶依然として血を濺ぬ。兩人が云く、汝は如何して彼虎を殺しぬるぞ。武松此時虎を殺したる始終の働い詳かに語聞しかば、兩人半は喜び、半は愕然き、乃ち彼十餘人の者共を呼集けるを、武松此輩をみるに、各手には鎗棒刀弓矢鳥銃等を拿て來りぬ。武松則彼兩人の獵戶に問て云けるは、此數人は

虎を、暫時の間に殺しけるは、古今稀有の勇夫なり。此時虎死たるを見て手を放ち、再び松の樹の下に行て彼折棒を拾ひ取り、若死きらざる事もやと、又二三棒打了り、乃ち心中に想ふやう、我此虎を拖て岡を下り、彼酒店に行て、今宵一宿せんと、雙手を擧げ、虎を拖り起さんとすれども、恰も萬斤の重き如く、寸歩も拽がたし。原來有名の大力なれども、先より闘て氣力を使ひ、四肢も疲軟え、今此死虎を拏起る事難かりしなり。武松又青石の上に坐し、熟々思ひけるは、天色已に暗うして、四方の光景冷じくぞ覺えける、若又一つの虎出來ることもあらば、我此疲にいかんぞよく敵し得ん、しかじ先明日の沙汰にすべし、とて、石を下り林を出で、岡を下り再び下を望んで半里ばかり過ぎし所に、枯草の叢し裡より、兩匹の大虎飛出ぬ。武松是を見て、大に駭き騒ぐこと限なけれども、暗に心を取しづめ、我命竟にこゝに罷るべし、是天命の時節なりとて、またよく窺ひ望みけるに、かの二つの虎忽ち立起て人のごとく奔走す。武松是を怪しきことに思ひ、睛を定めて克みるに、是則兩個の人、虎の皮の衣服を著し、手に五股叉を持ちぬ。かの兩人の者武松を見て大に駭き、兩人ひとしく聲を發げ、今こゝに來るは何者ぞや、汝が身邊に機器を帶せず、只獨この岡よりくだれる、じつに汝はこれ人にてはよもあらじ。武松が云く、汝兩人は又何者ぞ。かの

武松景陽岡
上に大虎を
撃つ

に握つて、平生の勇力をつくして打けるに、忽ち大にひゞくこゑあつて、傍の松の木に打著て、枝をつらね葉を帶して、二つに打折ぬ。彼虎も又原來眼明かにして、武松が打てかゝるを見て、急に躱れぬる故、其棒の餘りつひに松の樹に著しなり。武松慌て是をみるに、其棒も又半より打折たり。武松猶少も怯ず、棒の末を手に拿ち、牙をかみ眼を瞋し虎を睨れば、虎是を見て大に吼り、再び身を躍して武松に跳かゝる。武松又身を奮て右の傍に繞出で、乃ち十歩ばかり引退いて棒を地に打捐て、忽ち大手を開て飛かゝり、つひに彼虎が雙の耳をしかととらへ押ければ、虎は雷の如く吼て、急に掙扎んとせし處に、武松勇力を出し半點も鬆寛ざりしかば、彼虎漸疲しをみて、武松右の足をあげ、虎のみけんを望んで、一向に踢たりければ、彼虎又忽ち大に吼て、前足の爪を以て頻に地上を抓き、遂に一つの土坑を穿りけり。武松是を見て幸ひの事に想ひ力に信せ、虎の嘴を土坑の中に押入れ、勢に乘じて再三踢こと十脚計。彼虎剛力に踢られ眼を眩し、今は氣力つきて、掙扎事あたはず。武松此時左の手を以て、頭をかたく揪へ、右の手にて、鐵鎚のごとく拳を握り、縱に平生の力をいだし、只顧續打に、およそ五七十拳打ければ、虎も今は大に苦み、眼鼻耳の裡等より、鮮血涌流れ、遂に息絶え、吼る聲を止め、間もなく斃けり。誠に武松平生の神威を振ひ、胸中の武藝に仗て、斯猛き大

怖んや、とて、又幾歩を徐歩しかば、醉はいやましに發し、只踉々蹌々と、一歩は高く一歩は低く、天を下に見地を上に見て、漸樹林の内に進み入ぬ。此所幸ひに、一つの大なる青石有ければ、頓て棒を傍に建置き、乃ち身を翻して、石の上に打倒れ、只快く一睡せんと思ひし處に、忽ち一陣の怪風起り沙を走せ石を飛しむ。諺にも龍現て雲从ひ、虎出れば風從ふと云けるに、今果して風の生ずるは、虎の出べき驗なり。此怪風已に過し處、樹林の背後大いに響く聲有て、吊睛白額の大虎、狂ひ吼て跳來る。武松是を見て、忽ち石の上より跳下り、かの棒を搶取石に傍て扣へたり。かの虎早く武松を白眼望んで、大いに馳り吼て跳蒐る。武松原來眼明かに、手快き勇夫なれば、虎の來るを見て、急に身を閃し、棒を劈して虎の背後に繞り出づ。虎叉爪を竪て腰を紐り武松に飛かゝる。武松再び閃りと避て、傍に跳開く。彼虎兩度まで武松に避開かれ、大いに恚狂うて、霹靂の如く吼り進みければ、山をも岡をも震ひ崩すかと疑はる。武松又身を回して、左の方に跳撒尙眉間に棒をかざし、暗に畜生脚を觀透し、方に好く武藝の祕術を盡さんと相伺ふ。凡虎の人を拿には、只一撒の內に其人をうるに、已に今三度に至るまで、武松に躱れ閃されしかば、虎の勢まづ其半を沒せり。然共彼虎は尋常の虎にあらざる故、再び大に怒り吼つて、電の如く跳かゝる。武松此時其圖をみすまし、棒を雙手

て、直に進んで岡に上り來る。此時すでに申の刻なりしかば、日も漸々西山に傾ぬ。武松は酒興に乘じて、ひたすら岡を望んで上り來り、纔半里ばかり路を馳て、傍に一つの山神の廟ある所に至りぬ。武松卽ち廟門の上をみるに、一張の榜に、官府の印あるを貼ぬ。其榜の文に云く、

陽谷縣爲這景陽岡上。新有一隻大蟲。近來傷害人命。見今杖限各郷里正幷獵戸等打捕。未獲。如有過往客商人等。可於巳午未三個時辰結伴過岡。其餘時分及單身客人白日不許過岡。恐被傷害性命不便。各宜知悉。

と書記しぬ。武松此官府の印ある榜を見て、まさに自ら岡の上に虎あることを、全く信じ、幾乎再び酒店に囘んと欲して、遂に身を囘らしけるが、忽ち心中に想ひけるは、我若今囘ること有ば、必定彼等に笑はれん、是大丈夫の恥べき所、決して歸り難し、只此棒だに持ば縱鐵石の虎なりとも、終によく微塵に打碎んものをと、又勇を奮て只顧足に信せ馳上る。此時又頻に酒の醉出上つて、殆ど熱し覺しかば、則笠を脊梁に負ひ、棒を小脇に挾で、岡の上に馳上りし處に、日もはや山の端に沈で忽ち暗し。時は十月の天氣にて日短く夜長うして、尤晩るに易し。自ら獨言に呼り云けるは、いかんぞ虎あらん、人みな聞怕して岡に上らず、我何ぞ是を

の言を云て、我を嚇すことなかれ、縦虎ありとも、我又是を怕じ、汝無益のことを云んより、速かに立歸れ。主が云く、我は是好意を以て、貴客を救はんと欲す、汝もし是を信じ給はずんば、且我家に來て、榜を看給へ。武松が云く、我曾て虎を恐れず、汝我を留んとするは、必ず半夜に至て、我性命を害し、乃ち此行李等を取んと圖るらめ。主が云く、我は是一片の善意を以て虎有ことを告けるに、反て是を惡意とし給ふは、大いに不禮なり、此上は兎も角も、客の心に任せ給へ、とて、遂に己が家に回りけり。武松は此時、行李を拴たる棒を取て手に提げ、直に景陽岡を望んで馳上り、漸々四五里ばかり過て、岡の下に立し處に、此邊に一つの大樹有けるが、其樹の皮を刻て、白き處に兩行の文字あり。武松頗幾許の文字を識ぬ。急に首を擡て是を看るに、其文に曰く、

近因ニ景陽岡大蟲傷ㇾ人。但有ニ過往客商。可ㇾ於ニ巳午未三個時辰ㇾ結ㇾ夥成ㇾ隊過ㇾ岡。勿ㇾ請自悞。

とぞ書付たり。武松これを看了て、呵々と打笑ひ、乃ち心中に想ひけるは、是都て彼酒店の主が、詐の計ならん、かく書誌して、往來の旅人を嚇し、すなはち己が家に一宿なさしめて、必ず事を圖るならん、よし遮莫、我此棒だに手に提ば、岡の上に何の恐れかあらん、と

松が狂ひ出さんことを恐れ、則又六碗の酒を篩與ふ。彼又時をも移さず、盡く飲果して、忽ち身を起して云く、我かつて一點も醉ず、向後彼簾を門前に立ることなかれ、三碗にして岡を過ずとは、實に可笑ことなり、とて、飛がごとくに跑出す。此時に主相續て走り出で、大に呼つて云けるは、客まさに何の方に往給ふぞや。武松足を踏住て云く、我汝に酒の償は、已に濟したり、又何事有て我を呼や。主が云く、我は是一片の好意を以てせん、貴客先我家に回て、官司より掛置たる榜を見給へ。武松が云く、官司の榜を見て何の益かあらん。主が云く、前面の景陽岡には、今一つの猛虎あり、晩に及べば、必ず出て人を害す、頃日已に二三十人の豪傑を咬殺せしゆゑ、官司專ら獵戸に命じて彼虎を捕ふといへども、未だ是を得ず、此邊の人家には都て官司より榜を掲給ひ、往來の旅客に、虎あることを知らしめ給ひ、只是巳午未三時の間のみ過る、其餘の時刻には、岡を過ることなし、況や單身旅する人は白日にも過らず、唯大勢を待合せ、一同に岡を過るなり、今は是未の末申の初の時分なれば、必ず岡を過り給ふことなかれ、若萬一我が言を容ひ給はずんば、必ず一命を傷れ給はん、今宵は先此里に歇り給ひて、猶明日同行を待て、二三十人一所に岡を過り給へ。武松是を聞て冷笑ひ、我は是清河縣の者にして、此景陽岡を過ること、凡二十餘度に及べども、曾て虎あることを知らず、汝必ず詐

過し給ふことなかれ、若醉倒れ給ひなば、是を療治せん藥なし。武松が云く、汝何故かくたはことを云や、汝もし蒙汗ぐさを用ることあらば、我まさにたふるゝことも有べし、然れ共我鼻有て、よくこれをかぎ出さん、何ぞ別に怕るゝことかあらんや、宜くつぎ來れ。主今は止むことを得ず、また一連に三碗を與ふ。武松また是を飮畢て、再び牛肉を食し、猶一向主を呼でつがしめければ、主又三碗をつぎぬ。武松これを一息に飮みほし、口中益渇きしかば、彌飮んことを思ひ、且懐中より銀を取出し、主に與へて云けるは、酒肉の價此銀にて足るべきや。主が云く、此倘多く餘りあり、貼錢を與へ申さんや。武松が云く、貼錢更に望まず、只宜しく酒を與へよ。主が云く、貴客彌酒を望み給はんとならば、盡數五六碗の酒を與へんが、恐らくは是を飮み給はんこと難かるべし。武松が云く、盡數五六碗の酒あらば、一滴も剩さず、つぎ來り與へよ。我是を飮んで見すべし。主が云く、貴客のごとき大をとこ若醉倒れ給はゞ、唯五六人の力にては扶け起さんこと難かるべし。武松呵々と咲ひ、倘我汝に扶け起さるゝことあらば、誓て大丈夫をなすまじ。主猶これを信ぜずして、酒を出さゞりしかば、武松大いに焦燥て、雷のごとく呼つて云けるは、我汝が酒を白々飮にあらず、何ぞ再三我怒を惹出すや、若果して我意に背くことあらば、此店を微塵に踏坍して、立地に後悔をなさしめん。主これを聞て武

が云く、牛肉を用ひ給はんとならば、早速これを添ん、酒のことは再び添申まじ。武松が云く、我慣をかくこと有まじきに、何ゆゑ再び酒を賣ざるぞ。主が云く、貴客は何ぞ門前に立置たる旗を見給はざるや、分明に三碗不過岡の五大字を掲たり。武松が云く、我も讀たれどもいかなるいはれを知らず。主が云く、我この酒は、村酒といへども却て老酒の滋味あり、是故によく人を醉しむ、凡旅客此酒を三碗飲むときは、忽ち大に醉て、此まへの岡を過ること能はず。是によつて十人に七八人は、唯好一二碗を飲で、三碗を飲人は極て少なり、若三碗の外に飲時は、立處に、大に爛醉す、岡を過らんはさて置き、此門外に於て醉倒るゝ者多し、是則三碗にして岡を過ずと云ことなり。武松冷笑て云けるは、唯かくのごとき謂のみならば、我是を信じがたし、我今已に三碗をのみけれども、かつて醉ざるはいかにぞや。主が云く、我此酒は透瓶香共、又は出門倒とも名く、本此酒じ味にき（原本ノマヽ）ありといへども、又格別に香ふゆゑ、初口に入るとき極めて飲易し、然れども遂に飲了つて、門を出るときは、則醉倒るゝを以て、出門倒と名く、其香甚しきを以て、透瓶香と名くるなり。武松が云く、汝かくのごとき妄の言を云んより、再三三碗を篩來れ、我是を飲で汝に見せん。主武松が少しも醉ざるを看て、又三碗を與ふ。武松飲で大に賞美云けるは、此酒尤よし、汝一向に篩來て與へよ。主が云く、貴客必ず此酒を、

三編　巻之二十一

○景陽岡にして武松虎を打つ

武松は横海郡の柴大官人の館を辭し、故郷に回り兄武太郎を訪んとて道を急ぎ、陽谷縣の界迄來り、酒肆を尋ね酒食を用んとする處に、大文字の旗を立たる酒肆を見かけ、忙しく馳入て呼て云けるは、主早く酒を舀で我に賣れ。主是を聞き、早速酒を具て、武松が前に拿來る。武松急に杯を執てはや一盃を飲乾し、則主に向て云けるは、此酒甚だ氣力有て海量の好むべき味なり、別に佳肴あらば與へんや。主が云く、此處には原來珍しき肴なし、只一色牛肉のみこれあり、これを用ひ給はんや。武松が云く、夫は極て好肴ぞ、疾拿來れ。主聞て二斤の牛肉を切て大盤に盛て捧來る。武松これを肴にして、再び一盞を酌乾て云けるは、此酒極めて味狼き美酒なり、とて、又一碗を酌乾し、酒是に盡たれども主重ねて酒を篩ざりければ、武松大に呼て云けるは、僅に只三碗の酒を與へ、再び酒を添ざるはいかんぞや、早く來て酒を篩げ。主が云く、牛肉を用ひ給はゞ、倘一向そへ來り申さん。武松が云く、我先酒を用ん、早く酒を添よ。主

明のよく人を救ふを以て、及時雨と稱しけるよし、寔に其稱するごとし、我幸ひに這樣の大丈夫と、兄弟の盟を約しは、末賴母きことなり、と歡ぶこと限なし。已に十餘日を馳て、陽谷縣の地に到りしは、午の刻ばかりなるが、此所より縣裡へは、尙遠かりしかば、先酒食を求て、飢渴を充んと欲ひ、則酒肆を尋ねて、徘徊しける處に、對面の方に一軒の酒店有て、門前に一根の旗を立つ。五つの大文字あり、三碗不レ過レ岡と五字なりけり。

武松此酒肆に入て大酒し、行先途中猛虎に遇て勇力を顯し、吼虎と鬪ひ、竟に打殺すより、兄武太郎が妻、密夫と合體し、武太郎を毒殺するゆゑ、嫂ならびに事に關る者、悉く害し弃て、其外武松が強勇種々、此次三編目の內に委しく出づ。

席に移り、已に飲酒を催して、各陽關の感に勝ざりぬ。漸日も黄昏に至りしかば、武松が云く、天色已に晩けるに、押司愈某を弃給はずんば、幸ひ今某が八拜を請給ひて義を結び、盟を誓ひ、乃ち兄弟の約を定めて、此處より快く別れ給ふべし。宋江是を聞て大いに悅び、卽時に兄弟の契を結んで、武松が八拜を受にけり。宋江又一錠十兩（和の百目）の朱提を武松に送る。武松再三辭して云けるは、長兄も同じく旅泊の事なれば、自ら金銀を用ひ給はん所多からんに、某敢て是を拜受せんや。宋江が云く、汝必ず斯等のことを思ひ慮つて、此朱提を辭することなかれ、若果して、是を辭することあらば、我決して兄弟の盟を約ぶまじ。武松今は辭すること能はず、拜謝して其銀を受にけり。宋淸再び酒肆の斷に問て、乃ち酒肉の價を償ひ、三人ひとしく酒肆の門外に出しかば、武松只顧涙を洒て、宋江兄弟に別れ、頓て故鄕の方へと赴きけり。宋江は宋淸と酒店の門前に立停り、戀々として遙に武松が形の見えざるまで打望み、兄弟再び身を回して、柴進が館に急ぎしかば、はや五六里至る所に、柴大官人は兩人の家僕に、二匹の馬を牽せ、自らも馬に乘て、直に此處に馳て出迎ふ。宋氏兄弟是を見て大に悅び、各轡を並べて打乘り、柴大官人の館に歸りけり。又武松は各に立別れて後、其夜三十里（和の五里）を馳て、旅宿に歇り、翌日又早天に旅店を打立ち、路すがら心中に想ひけるは、天下の人、宋公

を扮へ、已に宋江柴進に別を告ければ、柴進又起身を祝して、飲酌を催し、乃ち一領の紅綢の襖子を送て、武松に著せしむ。武松是を謝し畢て遂に別れ出ければ、柴進宋江宋清も共に門外に出て相送る。此時宋江一包の銀を武松に與へて云けるは、是乏少の薄儀たれども、聊以て餞別の誠を表す、只宜しくこれを笑納せらるべし。武松これを見て、再三大に感謝して拝收せり。宋江則柴進に對して云けるは、我は今武松を送て、路口に出べきに、大官人は宜しく、館に在て待給へ、少刻回り申さん、とて、宋江兄弟遂に五六里送り到しかば、武松が云く、願くは押司は是より回り給へ、柴大官人嘸、待久しく思ひ給ふらん。宋江が云く、猶幾ばくの路を送て別るべし、とて、再び閑話をなしつゝ、路を行ければ、覺ず又二三里計馳過ぬ。武松此時、依々戀々として、宋江が手を携て云けるは、押司只顧遠く送り給ふことなかれ、諺にも君を送ること千里、終に須く一別すべしと、古き詞あり、只宜しく此處に於て別れ申べし。宋江是を聞て、乃ち對面の村を指ざして云く、彼所に幸ひ酒店有り、我尚彼酒店まで送り、宜しく汝に勸めて、更に三杯の酒を盡すべし、とて、三人又手を携て、遂に酒店に至り、各席を求めて坐しければ、酒肆の廝僕まづ茶を捧げぬれば、宋清先僕に命じて云けるは、汝速かに酒肉を設來れ。家僕これを聞て早速酒肴豐に具へ、乃ち三人を請て、酒席に就しめ、宋江等三人酒

し、家内の針工に命じて、客三人の衣服を縫しめけり。頃日柴進が武松を十分愛せざるはいかなれば、原武松が初め來りし時は、殊更重く款待けれ共、其後は、武松慢に酒を飲で、動不動醉狂をなし、擅に拳を下して、家人共を打ける故、一家中の從僕等、盡く武松を嫌ひ、毎日柴進が前に出て、詳かに武松が不行跡を告しかば、柴進これを聞て殆悅ず、漸々其管待慢りぬ。然れ共此度宋江甚だ武松を愛し、朝夕一所に在て、酒を酌み憂を語り、心情ともに相合ひければ、武松甚だこれを感じ、其後は曾て撒酒風することもなく、只慇懃に宋江が左右に侍り從ふ。此時柴進を初とし諸の家人共、武松が性を改め、心の誠を守るを見て、各奇異の思を催しけり。既にして半月餘り過しけるが、武松は故園の情切にして、急に淸河縣に回り兄を訪はんと欲しける處に、柴進宋江再應是を留めければ、武松が云く、某故郷を去てより以來、久しく兄が消息を聞ず、是故に一回歸て、兄を探望たく思ふこと頻なり、願くは明らかに是を察し給へ。宋江が云く、足下實にかくのごとくは、最留がたし、異日もし暇を得給はゞ、再び來て參會せらるべし。武松聞て深く感謝す。柴進又若干の金銀を武松に與へ、路の費に當しめければ、武松厚謝していはく、誠に大官人の惠を蒙ること、重疊にして、心に銘じ骨に鏤ことのみなり。其夜酒宴を設け、宋江兄弟と倶に、武松に酒を勸め、別を惜みけり。翌日武松旅裝

相貌堂々たり。兩眼の光は星のごとく、雙眉の濃ことは刷に似たり。耳太く鬚長く、其風は又萬夫も敵すべからざる勢あり。宋江是を見て、心中甚だ悦び、則武松に問て云けるは、足下は又何等のこと有て、久しくこゝに在りや。武松が云く、某向に清河縣に於て、酒の後不圖彼所の機密と相爭ひ、乃怒に乘じて、只一拳を以て打ちければ、彼忽ち眼を眩して地上に倒れぬ、某只これを見て、彼已に死したりと思ひ、遂に彼所を逃出て、直に此邊に至り、多く柴大官人の大恩を蒙り、はや一年あまり、此館に滯留し、其後又世上の人の傳へ云を聞に、彼機密は、其時幸ひに隣家の者共藥を灌ぎ、厚く介抱を蒙り、再甦しとなり、故に某今故鄕に歸り、兄を尋ねんと欲する所、想ず瘧を病で、回ること能ず、心甚だ鬱悶に逼りしに、今彼廊下にて、押司不圖火盤を踏飜し給ふを見て大に駭き、忽ち冷汗多く出けるが、果して這疾全く痊ることを得たり、是則押司の過にて、却て我救を蒙れり。宋江聞終て大きに喜び、自ら又盃を執て相勸め、其夜三更に至て、宴遂に罷りければ、宋江則武松を西軒の下に留め、床を同じうして歇みけり。翌日柴進又羊を殺し牛を宰しめ、美々しく酒宴を設け愛待けり。每日かくのごとくして、幾日も過しければ、宋江自ら若干の銀を武松に與へて、衣服を調へしめんとせしかば、柴進これを聞て、再三再四其銀を宋江に還し、早速一櫃の緞子花紬縐紗等を取出

彼漢子に告て云く、遠くは則十萬八千里、近くは則眼前にあり、彼及時雨宋公明は、便此押司のことなり。彼大漢子が云く、實に是便ち、宋公明なるや、我いまだ猶信じがたし。宋江が云く、某乃ち宋公明なり、足下何ゆゑ某がことを、斯吹噓し給ふや。彼大漢子是を聞て、乃晴を定めて、良久しく、宋江を打望んで居たりけるが、忽ち地上に拜伏して云けるは、今日いかなる吉日にて、押司を拜し奉るや、却て夢かと疑れぬ。宋公が云く、某何の幸ひに、斯く足下の愛敬を被るぞや。彼大漢子が云く、某先に押司を識認ずして多く無禮をなしぬ、願くは廣く是を恕し給へ、とて、再び地に跪づく。宋江忙はしく、扶起して云く、足下の高姓大名はいかん。柴進が云く、此人は是淸河縣の人なり、姓は武、名は松と號す、某が家に、逗留せること、凡一年ばかりなり。宋江が云く、世上の人皆武松と云名を傳へ稱するを聞及べり、想はず今日此處にて相遇ふこと、幸ひ尤甚し。柴進、今日偶然して豪傑相聚ること、是等閑のことにあらず、共に席を同じうして、互に心事を語るべし。宋江是を聞て、大に悅び、自ら武松が手を携へて、終に再び後堂にぞ至りける。此時宋江舍弟宋淸を呼で武松に遇しめ、柴進又自ら武松を邀て座に就しめ、宋江も又急に、武松を延て上座を讓りければ、武松大いに辭し、自ら下つて、第三位の席に坐しける。宋江燈下に在て、武松が形を窺ひみるに、身軀凛々として、

武松柴進が宅にして
宋江に肇て面會ス

を勸解として稍鬧しかりけるに、忽ち一個の人兩三人に燈籠を提させ、飛がごとくに馳來る、是則柴進なり。宋江に對して、云けるは、押司何ゆゑ此所に在て鬧ぎ給ふや。彼家人先宋江が、火盆を踏翻したる、次第をかたれば、柴進聞てから〳〵とうち咲ひ、彼大漢子に對して云けるは、汝此名高き押司はいまだ識認ざりけるや。彼大漢子が云く、天下に押司たる者其多きこと斗を以て量ん、其なかに、我國四裔津々浦々の邊境邊地まで、誰あつて名を知らざる者なきは、鄆城縣の押司宋公明のみなり、此者は何國の押司たりとも、いかんぞ宋押司の萬が一にも及ん。柴進益咲て、汝果して宋押司を識認れるや。彼大漢子が云く、未だ其面は識ざれども、世上の人彼を尊で、及時雨と稱す、このゆゑに我其名をきくこと久し、況や是宋公明は、義を重んじ、財を輕んじ、專ら人の危きを扶け、人の困らるゝをすくひ給ふ、是乃天下にかくれなき英雄なり、此人を除いて、別に當世名だかき押司あることを知らず。柴進が云く、汝なにの好處を以て、宋押司を天下の英雄とはするや。彼漢子が云く、宋押司の好所、豈すべてこれをかたりつくすことを得ん、宋公明は且是、仁をなすに首尾あり、義をなすに始終あり、誠に當世第一の君子なり、我今病の痊るを待て訪ひ行んと欲す。柴進が云く、汝今宋押司に見えたく思ふや。彼漢子が云く、まみえたきことは最方寸に逼れり。柴進此時宋公明を指ざして、

ば、夜も初更に近づいて、漸鐘の聲耳に轟ぬ。此時宋江起て淨手に行んとす。柴進忙しく、一人の家僕に燈を提させて、東の廊下の、盡頭なる所に導せ、家僕客を引て前面の廊を繞り出て行ける所に、宋江已に七八分の醉あつて、脚步稍穩ならず。斯る處に、一人の大漢子瘧を患で、廊下の邊にありけるが、柄附の火盆に、火を多く設けて、囘烘居ぬ。此時宋江此人を看しかども、火盆に柄あることを知ずして、不圖かの火盆の柄を踏ければ、忽ち掀翻て、其火盡く彼大漢子が面上に飛散けり。此時彼大漢子大きに駭き、猛然一身に汗を出し、瘧の抖は止しが、是より其病竟に治しぬ。已にして彼大漢子大に怒り、急に宋江が衣の襟を揪へて、吼罵て云けるは、汝何奴なれば、敢て來て我を弄戲る。宋江も火盆を踏翻したるを見て、同じく大に駭き、更に其分說べんじがたき所に、彼燈を提たる家人も、忙しく彼漢子に向ひ、此客は是、我主人のため第一の上賓なり、今火盆を踏翻し給ひしは、本火盆に柄あることを知り給はざる故なれば、必ず此客に對して、無禮をなしたまふな。彼漢子が云く、汝一向彼を上賓と云ふ、我來りし初は、家內擧つて我を上賓と稱しぬ、然るに柴大官人頃日我を別して疎んぜり、諺にも、人千日好ことなく花百日紅なることなしと云しも、實最理なり、我今此者に面を燒れ豈よくこれを忍んや、とて、已に拳を擧て、宋江を打んとせしかば、彼家人も急に、これ

いへ共、身を倚に處なし、千難萬苦の中に於て、大官人は原來、孟嘗君が志ありと、乃擅に來て、餘蔭を蒙らんことを願ふのみ。柴進が云く、押司宜しく尊慮を安んじ給へ、遮莫十悪の大罪を犯し給ひぬるも、既に我館に入給ふ上は、少しも怕れ給ふことあらじ、自ら誇ていふにはあらざれ共、當世の官軍等、誰か敢て某を譲らざらんや。宋江これを聞て大に悦び、彼閻婆惜を殺たること、一々詳に語りければ、柴進呵々と大に笑ていはく、這等の小事、何ぞ道に足ん、縦朝廷の大臣を殺し、府庫の財物を奪ひ給ふとも、某又よく押司を藏さんに、豈怕るゝ所あらんや、とて、終に宋江兄弟を請て沐浴なさしめ、又新しき衣服を送て、舊衣服を更めしめ、再び後堂に移りて酒宴を催し、柴進再三宋江を請て、上座に就しめ、宋清を請て、其の次に就しめ、己は則ち主座に就く。三人座定つて、許多の家人、酒を篩肴を添て、左右に侍り奔走す。柴進自ら盞を執て兄弟を勸めて云く、必ず心を寛げ酒を酌給へ。宋江深く謝して盃を擧げ、酒も數巡に及びしかば、三人各胸中のことを語て、少も隔意なし。此時天色已に晚ければ、燈燭許多設けて、席外を照しぬ。宋江柴進に對して云く、某深く大官人の厚款を感じ、自ら强て酒酩酊に及べり、願くは盃を收め給へ。柴進が云く、今暫くの、夜飲を娛み給へ、とて、乃宴を換へ、盃を更めて、酒又數巡に至りしか

ち宋江を見て地上に拜伏して云けるは、某久しく押司を仰ぎ慕ふに、今日何の幸にや、駕を枉給ひ、某渇想の懐を安んじ慰めたまふ事、誠に某一生の悦び、何ぞ是にしかん。宋江これを聞て、同く地上に跪づきて答けるは、某匹夫、今日敢て貴宅に伺候し、反て尊顔を冒しぬ。柴進急に宋江を扶け起して云けるは、昨夜燈火の報あり、今朝喜鵲の噪ありけるに、果して押司の光臨を蒙りぬ、某平生押司を慕ひ奉るの誠、遂に天に通じて、今良縁を賜ひ、想はず嚴威を覩奉ること、某襁褓の内を出て、善惡の別を辨てより以來、今日のごとき幸、夢にだに曾てこれを得ざるなり。宋江料らずも今、柴進が斯慇懃なる動靜を見て、大いに悦び、則舎弟宋淸を呼で、柴進に見えしむ。各禮畢りしかば、柴進左右に命じて、宋江が行李を、後堂の西軒の下に、搬運ばしめて、則此處に歇處を設けり。柴進宋江が手を携へて、廳上に至り、賓主席を分て、座已に定まりければ、柴進宋江に問て云く、押司は鄆城縣に居給ひて、公事繁多なると聞ぬるに、いかんぞ尊暇を得給ひて、此間に駕を惠み給ひしぞ。宋江答ていはく、某大官人の大名を聞こと、猶雷の耳に轟がごとし、況や數度書簡を惠まるといへ共、たゞ恨らくは、出ては則公役に逼り、入ては則私務に纏はれ、曾て寸暇あらざりしゆゑ、貴宅を訪ふことも能はざりけり、然るに某今日大事を惹出し、四海廣しと

りかくこそ想ひぬ、彼人と我と常に書簡の往來は疎からざれ共、緣熟せざるにや、未だ對面を遂ず、幸ひに此度は彼人を訪ふべし、とて、兄弟遂に商議を決し、直に滄州を望んで進發す。

○横海郡に柴進客を留む

偖も宋江兄弟は、夜は泊り、曉れば行き、山に登り、水を渉り、城下を經て、村中を過り、兩人疲を忍びて、急ぎしかば、不日に滄州の界に至りける。先鄕老に問て、柴大官人の住所、地名を聞き、直に其門前に至り、急に家人に向て問けるは、柴大官人は貴宅に居給ふや。家人答て、主人は此兩日は私用にて別宅に逗留して居らる。宋江が云く、別宅は是より幾多の路ありや。家人是を聞て、先貴客の姓名はいかん。宋江が云く、我は是鄆城縣の宋江なり。家人又云く、及時雨宋押司にはあらずや。云く、是なり。曰く、主人常に押司の大名を稱すること、年月深し、今日偶來臨を惠み給ふに、主人在宅せざること、殘念の至なり、然れ共某押司を導て、尊歩を移させ申さん、とて、二客を引て、約莫三時許して、彼に至り、家人則宋江兄弟に對して、貴客暫らく亭の上に待給へ、某主人に告ん、と、遂に門内に馳入ける。兄弟亭に登て俟處に、少頃彼柴大官人五六輩の家人を從へ、自ら忙しく走り出て、亭に上り、乃

寄て我憂を慰よ。宋江等兄弟兩人、謹で父の命を蒙り、乃旅裝を調へて、諸事全たかりしかば、父子三人餞別留別の席を交へて、酒を酌み、漸四更の鐘も四方に響きて、人音稀なりしかば、宋江宋清已に、旅の打扮を催しぬ、宋江は綠氈の笠を戴き、身に皁緞の衣を著し、腰に紫線の縧を繫び、足には八塔の鞋を穿ぬ。宋清は又家人の模樣に出立ち、背脊に包裏を背ひ、すでに宋江宋清共に、草堂に至て、父太公を拜していはく、恩父自ら心を慰め給ひて、必ず某らがことを以て、尊慮を患し給ふべからず。太公が云く、汝二人が行向は青山萬里の長途なれば、必しも自ら身意を惱すことなかれ。父子三人及び家人に至る迄、こと〴〵く皆涙を洒がざるはなかりけり。古語に悲は生別離より悲しきはなしと云しも、斯時のことならめ。宋江等兄弟二人は、遂に父太公に別れて、住慣ぬる先祖の遺宅を踏離れ、故鄉の雲を腦後に顧て、客路の霧を眼前に望み、頻に哀をぞ催しけり。宋江先宋清に、商議して云けるは、我輩今何の方へ投べきや。宋清が云く、某聞く、滄州横海郡の柴大官人は則是大周皇帝の嫡孫として、譽高き貴人なり、況や此人義を重んじ、財を輕んじ、尤よく流人等を救ひ給ふとなり、昔の孟嘗君は好んで人を救ひしとなれども、又多く柴大官人に賽ることあるまじ、我いまだ對面はせざれども、只よろしく彼人の家を賴むべし。宋江が云く、我も老早、彼人のことを心中に測

権威甚だ猛が器量を以て、其職に就故に吏をなすは難し。其比は別して、諸州諸郡の官府、若知府知縣かりしゆゑ、凡押司以下の役人等、縦小き過たりとも、萬一これを犯す時は、若知府知縣の心に合はざる者なれば、間其罪にあらずして、其罰を被ることあり。所以に宋江これを恐れて、預じめ彼窨を設けて、不時の禍を脱れんと圖りぬ。又父母兄弟まで連累を蒙らしめんことを恐れ、乃數年以前に、宋太公を官府に遣し、許て宋江が不孝と訟へしめ、親子の縁を斷り、則彼執憑の公文を、乞受置し、遠き慮なり。宋の時は諸州諸郡に於て、預じめかく暗なる生路を准備置く者、極めて多かりしとかや。此日宋江は又窨を出て、父太公弟宋清と共に商議して云けるは、我向に若朱都頭が救を蒙らずんば、終に縲絏の恥を請んに、誠に朱都頭が厚恩、骨髓に髓りて感激せり、我今速に宋清と共に里を出て、難を免るべし、天若憫みを垂給はゞ、必ず寛恩大赦の時節に遇て、罪を免され立歸て、再び親子對面を遂げ、家を安んじ業を樂むべし、願くは恩父我爲に、金銀を朱都頭が家に送て、乃彼を頼み給へ、又上下の役人等が方へ賄賂をなさしめ、又は金銀米錢を閻老婆が方へ惠み給ひて、彼が再三官府に訟んことを休しめ給へ。太公が云く、汝必ず這些事を念頭に懸ることなかれ、我自らよく是を辨ぜん、汝は只弟と倶に、道中恙なく急に落行べし、若何の所にても、身を安んじて、早く書簡を

次まで、捜しぬれども、宋江は更に見ず、宋太公は是重病に犯されて、旦夕の命も危し、宋清は已に前月より、他國に出て未だ回らず、是ゆゑに只親子斷絶の執憑の公文を寫し來り候。知縣が云く、既にかくのごとくならば、今更急に事を決斷しがたし、只好近州隣郡に觸て、宋江を捕へしむべし、とて、即日文書を以て、所々方々に一々觸をぞなしにけり。扨縣裡には、原來宋江と親しき人々多かりけるゆゑ、盡く相湊て、再三再四張三に諫言を加へ、必ず閻老婆が爲に、挑唆をなすことなかれ、と示しければ、張三諸人の諫言に背きがたく、遂に諫に從ひ漸々怒を休にけり。朱仝自ら若干の錢財を湊て、彼閻婆に與へて、必ず州裡に往て訴ることなかれ、と宥めける處に、老婆も頃日米錢に缺用て、酷だ燃眉し時なりしかば、錢財を得て心中に喜び、容易領承をなしける。知縣原來宋江を助ん存念深かりし處に、彼老婆遂に朱仝が惠を蒙り諫言を容ひ、是より縣裡に至て、哭訴ふることもあらざりしかば、知縣大いにこれを喜び、則彼唐牛兒に罪を干け、輕々と二十棒を策て、城外五百里外に追放せり。彼宋江は原百姓の家なるに、いかんぞ能家內に、大いなる窨を設けぬるやと尋るに、宋の徽宗皇帝の時分には、官をなすは易くして吏をなすは難し。其仔細は官をなす徒は、盡く皆奸佞の大臣等媚諂ひ、賄賂を獻りて、官をなすに易し。宋江がごとき、吏となつて、押司の職を勤むる徒は、都て己

公の言定めて詐は有まじけれ共、只其文書ばかりにて、親子にあらずと云ふ、分説立がたし、已不得太公宋清兩人を請て、縣裡に同往致すべし、若然らずんば、某知縣に見えて述ん詞なし。雷横これを聞て先云けるは、朱都頭須く、我いふ所を聞給へ、宋押司此度罪を犯されたることは、必定脱がたきこと有てこそ、彼婆惜を殺されし物ならん、され共未だ死罪に決定したるにもあらず、太公は又已に親子の縁を斷給ひ、前官の印を押れたる、公文を所持ある上は、分説又立ざるにもあらず、我輩も平日宋押司と交厚し、何かの事を顧て、權く且太公を宥しまゐらせん。朱仝是を聞て想ひけるは、我は是雷横が疑はんことを恐れてこそ、故意太公を縣裡に同往せんとは云つるに、雷横反て此のごとき懇の言を云は、十分の幸なりと悦び、乃ち雷横に答て云けるは、雷都頭既に斯の如く懇情を施し給ばんとならば、左も右も足下の良議に從ふべし。宋太公此一言を聞て、大に悦び、深く兩都頭を謝し、又酒食を設けて、二人の都頭及び三四十人の兵共まで、別して慇懃に款待し、乃二錠各二十兩（和の二百目）の銀を取出して、兩都頭に送りしか共、兩都頭萬千是を辭し受ざれば、宋太公乃其銀を分ち、諸の兵共に與へけり。兩都頭は執憑の公文を乞出して、これを一紙に寫し、遂に宋太公に別れ、再び縣裡へ歸り、乃知縣に見え、ことを詐て云けるは、某等宋家に至り、家内前後左右遍く兩

給ふべからず、只一刻も早く旅裝を完へ發足し給へ、宋江が云く、晩に至て急に打立候はん、都頭益康健にして、公役を務給へ、若緣絕ずんば、再會の期をこそ、相歡び申さん、とて、遂に別を告て、只管留戀げに朱仝を顧みて、再び窨の内へぞ藏れける。朱仝は此時、彼板を取て、窨の口に蓋し、猶又卓を以て其上を壓へ、遂に館の門を開て、忙はしく奔出で、乃雷都頭に向て云けるは、家内遍く搜し盡すといへども、宋江は見えず、只宜しく宋太公を引て、縣裡に回るべし。雷橫此言を聞て暗に思ひけるは、朱仝は原來宋江と交尤厚し、いかんぞ反つて太公を捉んと云や、此言故意顚倒して云に疑ひなし、彼もし再び此言を云ば、我宜く太公を饒して、一つの情を顯すべし、と圖り、乃朱仝と共に、兵共を呼集め、盡く草堂に進み入しむ。宋太公此時急に酒食を設けて、諸の人を款待ければ、朱仝が云く、必ず酒食を備へ給ふことなかれ、某急に宋淸を請て、共に縣裡に回るべし。雷橫が云く、宋淸は何ゆゑ、見え給はぬや。太公がいはく、某事を命じて街に遣しぬ、彼は今日の騷動を、微塵も知り申すまじ、扨宋江がことは、某老早赶逐したる者なれば、我爲には、他人よりも猶疎し、那厮がことに於ては、某が關るべきことにあらず、已に前官より賜ひたる公文にも、向後宋江が身の上のことに於ては、善となく惡となく、都て某が管ふまじき事共を分明に書載あり。朱仝が云く、太

直に此處に入て押司に見え申す、此處は尤身を躱すに好といへ共、身を安んずるに足ず、若人此窨あることを知て、此所を捜さば、何を以てか是を遮り給はん、只宜しく別に計をなし給へ。宋江是を謝して云く、都頭の厚恩誠に身を沒まで忘がたし、我も已に此所を出て何方になりとも、逃行んとこそ思ひつる、若都頭に救はれずんば、必定縲絏の恥を受べきに、某いかなる僥倖にや、多く都頭の憐みを蒙る。朱仝が云く、何爲慇懃の言に及候はん、唯知らず、押司はいづれの所に身を倚んとは圖り給ふぞや。宋江が云く、我熟これを想ふに、身を倚べき地三個所あり、第一は是、滄州横海郡の小旋風柴進が館なり、第二には、青州清風寨の、小李廣花榮が處なり、第三は是、白虎山の孔太公が家なり、此孔太公は二人の男子あり、嫡男が名は毛頭星孔明、二男の名は獨火星孔亮と申す、此兄弟の者は、前年當地に至りて、某に相見えり、此三箇の內、何の方に到て好からん、と躊躇未だ決せざるなり。朱仝が云く、此內何方へ成とも疾心を決し、今晩打立給へ、必ず延引に及で自ら誤ち給ふことなかれ。宋江が云く、某敎に隨ひ今宵早速落行べし、只官司のことは、偏に都頭を頼み申さんずる間、宜しく發落給ふべし、若賄賂の爲なんどに、金銀緞帛等の物使用に候はゞ、忌諱なく、父太公にこれを索め給へ。朱仝が云く、これらのことは、總て某が身に干つて辨じ候はん、必ず心機を費し

内より鎖を下しあるを固辭開きて、香華を供置く卓を把て、側に搬れば、其下に又一片の板あるを揭起して、乃此所をみるに、一つの窨あり。窨の内に一條の鈴の索あり。朱仝是を把て拽ければ、鈴の聲忽ち響て、瞬目間もあらぬに、窨の内より一人の漢子現れ出る。朱仝これをみるに、則宋公明なり。時に宋公明朱仝と顏を見合せ、大に驚き只呆れたる計なり。朱仝が云く、押司必ず我此處に至りしを恨み給ふことなかれ、我常に押司と交厚き故、押司遂に我に放心し給ひ、昔酒の上にて我に語り給ふは、我親の佛堂の下に一つの窨あり、窨の上には一片の板あり、一脚の卓を居てこれを掩ふ、此ゆゑに家人等も又知る者罕なり、汝若萬一の急難あらば、我に知らせよ、我彼窨の内に藏し、難を救はんと告給ひぬ、我是を聞てより以來、已に數年經たれ共、猶隱々に此言を記えり、是によつて我老早、押司此内に隱れ給ふを知れり、今日知縣相公、雷横と某に命じて、押司を捕へんとの事なれ共、其實は知縣相公も、何とぞ押司を助んとの意最も深し、只恐らくは張三只顧閻老婆を挑唆て、再三知縣相公に訴へしめ、相公もし嚴しく宋江を搜し捉へ給はずは、州裡に往て、知府相公に訴へ申さんとて、哭狂ひ、幾度か、狀子を呈るゆゑ、知縣相公も已ことを得給はず、某等兩人に命て、太公の居宅を搜し見よとのことなり、恐らくは雷横、人を救ひ得ること、屆まじく思ひ、彼を賺し門前に待しめ、某は

ともに、僅の田畑を耕して營をなし、宋江とは食を同じうせざれば、豈よく彼が事を知らんや。朱仝が云く、某上司の命を請て來るゆゑ、太公の言に從ひがたし、唯宜しく家内を一捜し捜して回りなば、知縣の命を背かざる道理なり、太公恕し給へ、家内を捜し申さん、とて、則三四十人の兵に館を圍ませ、朱仝雷横に對して云けるは、我は前門を守り申さんに、足下は先内に入て捜し給へ。雷横これに同じ、遂に内に入て四方八面普く、半時ばかり捜し索て、再び前門に馳出で、朱仝に對して云ける、我遍く捜し索しかども、宋江實に此内にはあらず。朱仝が云く、我嘗て疑ふ所あつて、心を安んぜず、雷都頭は兵等と共に此門を守つて待給へ、我は親ら詳かに捜し見て、宜しく知縣に報ずべし。宋太公が云く、某下愚たりといへ共、頗る官府の法度を知れり、いかんぞ敢て罪人を家内に藏し置申さんや。朱仝が云く、這は是人を殺したる大罪なれば、鬆寛になし難し、太公必ず誤つて、我緊きを怨給ふことなかれ、凡人の命のことに於て、其兇身を捜すには、何方にても類例かくのごとし。太公が云く、某何ぞ都頭を怨る所あらんや、只隨意に家内を嚴に捜し改て疑を散し申されよ。朱仝が云く、雷都頭は太公を守つて、此處に待給へ、必ず妄に、宋太公を放し給ふな、我は又一捜し捜し來らん、とて、直に家内に進み入しが、私に佛堂の前に至り、此所に又一つの門有るを堅く鬬ぢ、

仇を捕へ給はずんば、恐らくは州裡に赴て、知府相公に訴へ申すべし、知府相公萬一彼が爲に當地に於て仇人を捜し出さるゝことあらば、恐くは相公答へ給ん詞は有まじきか、凡事は小きに起て、大なるに至る、況や是は人命の公事なり、只宜しく三思を加へ給へかし。知縣は原來其理あることを知るといへども、一向に宋江を助んと欲し、聊事を曲て支吾さんとしけるに、今彼閻老婆並に張三に再三訴へられ、殊更州裡に訴訟せんと云しを、心中にやゝ恐れ、遂に止ことを得ず、即日一封の文書を修へ、乃ち朱仝雷横兩人の都頭を呼で云く、汝兩都頭、急に人數を引て宋家村に馳行き、宋江もし隱し在ば、捜し捉へ歸るべし、とて、文書を與へらる。兩都頭鈞命を受け、文書を取て、先役所へ來りける。かくて兩都頭は、兵四十餘人を引て、遂に宋家村に馳來り、宋太公が館に至りて、斯と告ければ、宋太公忙しく、門外に出て相迎へけるに、兩都頭が云く、太公某らを恨給ふことなかれ、則知縣相公の命に依て來りしことなれば、某等私の所爲にあらず、太公の嫡子宋押司、今人を殺して此邊に隱れ居らるゝとなり、定て太公是を知り給ふらん。宋公が云く、兩人の都頭聞給へ、彼逆子宋江は、已に親子の緣を斷て、彼が事に於ては善惡を論ぜず、某が干る所にあらず、是故にこそは、前官より文書を申受たり、夫より以來數ケ年を經れ共、曾て我館の近邊にも來らず、某は獨次男宋淸と

し置たるとならば、宋太公は是則他人なれば、尤太公が干ることにあらず、只宜しく一千貫の賞錢を以て、近州遠郡を普く觸を廻して、宋江を捉へしめん、此外曾て行ふべきことなし。彼張文遠又閻老婆を挑唆て、再三訴訟せしめければ、閻老婆乃ち頭を披れ髪を亂し、頻に廳前に哭倒れて告けるは、宋江は明かに是弟宋淸が働にて藏し置ぬ、願くは相公我爲に、仇を殺してたび給へ。知縣怒て云く、宋江は父太公ならびに弟の宋淸、已に數年以前に、宋公とは親族の緣を切て、分明に前官より賜ひし文書ある上は、いかんぞ能く此事を宋太公宋淸に問んや、汝必ず妄のことを申ことなかれ。老婆これを聞て、益流涕して云けるは、宋江は是孝行第一の人なるに仍て、世間に皆孝義宋郎と諢名せり、豈敢て親子の緣を斷ことあらんや、彼執憑の文書といふは、必然假の文書ならん、只望らくは相公、明かに決斷し給へ。知縣が云く、前官自ら、印を押たる公文に、豈假のことあらんや。閻婆是を聞て、大いに狂ひ哭き、再三再四知縣に告て申けるは、人命のことは、天よりも大いなり、相公若彌わが爲に、これを決斷し給はずんば、いかにせん我直に州裡に行て、府尹相公に訴ふべし、我女故なくして、刃の下に身を喪び、其死尤苦めり、斯太平ならざる世といふとも、仇を眼前に見ながら、何ぞよく是を安穩ならしめんや。此時張文遠、又廳前に進み出云けるは、知縣相公もし彼が爲に、

訴へ、既に親子の縁を斷て、則官府より賜りたる、執憑の文書をも、今に某が身邊に所持せしむ、某はたゞ次男宋清と倶に、農作を務て、今日の渡世を營み、宋江とは多年水火を交ず、況や家内に往來することなければ、其後は彼が面を見たることだにあらず、彼今大罪を犯したりとも、某が身に干ること候まじ、彼必定這樣の事を惹出して、親類にも禍を蒙らしむることとあらんと、料知ぬるゆゑ、彼と緣を斷て、其節官府より、執憑の文書を申受置ぬ、願くは、列位明かに是を察し給へ。下官等是を聞て、是則宋江父子が、預じめ計を設けて、かくのごとく行ひつるとは知けれども、原來宋江が惠を蒙りし下官共なりしかば、敢て咎ることもなく、只打笑つて云けるは、太公既に親子の縁を斷給ひて、官府の文書あるならば、早く取出て見せ給へ、某ら是を寫抄て、知縣相公に見せ申べし。太公則文書を取出して、下官等に送りければ、下官らこれを受て太公に謝し、遂に別れて、縣裡に囘り、則知縣に見して、下官らに寫さしめ、頓て又酒食を備へて下官らを款待し、乃ち白銀十餘兩を取出して、えて云けるは、宋太公は數年以前に、宋江と親子の縁を切り、則其時の官府より、執憑の文書を賜りぬ、某ら已に、白紙に寫して持參せり、このゆゑに宋太公を捕ること成がたし、是世間一同の法なればカなし。知縣此言を聞て、私に心中に悅び、既に前官より執憑の文書を、出

二編　巻之二十

○朱仝義をもつて宋公明を釋す

却說鄆城縣の知縣は、宋江を助けん爲只罪を唐牛兒が身に負せ、已に日數經ん間に、又方便を以て唐牛兒を赦さんと圖りけるに、料らず張文遠、頻に閻老婆を引いて、只顧哭き告しめけるゆゑ、知縣も今は、大法に就て止ことを得ず、乃ち下官兩三人を、宋家村に遣し、宋江の父宋太公及び其次男たる宋淸を急に呼來るべし、とて、乃ち一通の文書を與へけり。下官等卽日遂に宋家村に馳て、直に宋太公が館にいたる。宋太公自ら是を迎へ、草廳に延請て客座に就しめ、宋太公已に主席に座しければ、下官等彼文書を取出してこれを與ふ。宋太公是を見了て云けるは、某世々此村に居住して、農作を業とし、某が代に至るまで、先祖の遺業を破ず、唯宜しく分を守つて、渡世を營み申所に、我嫡子宋江は、幼きより志驕り意傲り、第一親に事へて、不孝の徒なり、彼向に官に仕へんと申せしゆゑ、我再三これを制しけれ共、彼毫髮も某が諫を容ひず、已に家を出て縣裡に馳往しゆゑ、某其時當地の官府に彼が不孝のことを

宋江ははや迯去て、家内に在ざりければ、下官ら商議して云けるは、我輩手を空しくして回らんより、隣家の輩数人を、捉て歸るべし、とて、頓て隣家の數輩を擒て、遂に知縣の廳前に引出し、乃知縣に告て云けるは、兇身宋江は已に家を弃迯去りし故、隣家の數輩を捉へ回て候。此時張文遠知縣に向て、縱宋江逃失たり共、彼が父宋公ならびに弟宋清共に宋家村に居住す、宜しく彼等を捕へ其日數を限り、乃下官等に從はしめ、倶に宋江を尋ねしめ給へかし、と申しける。今般宋江を捕へ得るや否や、後巻を見て詳ならん。

狀せよ、と問ければ、唐牛兒が云く、某かつて前後の事を知候はず、願くは相公、辜なき者を罪し給ふことなかれ。知縣が云く、汝夜中に閻老婆が家を閙しむるは、私の冤ある故なり、婆惜を殺したるは、必定汝が所爲なるべし。唐牛兒が云く、某昨夜彼が家に行て宋押司を訪ひしは、實に一盞の酒を求ん爲なり、豈私の冤有て行申さんや、若是を信じ給はずんば、彼老婆に其動靜を問給ふべし。知縣が云く、いかんぞ白々と抵賴や、我今痛く汝を拷問せん、必悔ることなかれ、とて遂に左右に命じ、策せければ、恰も虎狼の如き下官共、忽ち唐牛兒を拉倒し、痛く五十餘棒打ぬる所に、唐牛兒聲を放て喊しが、其言は猶初申所と少も差ざりし。知縣は元來、唐牛兒は閻婆が女を殺せしにあらざるは、老早明らかに知るといへ共、只一味に、宋江を救はん爲この唐牛兒を拷問せり。知縣先左右を呼で彼に頸枷を枷させける處に、彼張文遠廳に上り、乃知縣に告て申けるは、唐牛兒が申所始終相同じ、況や閻婆惜を殺したる壓衣刀は、紛なき宋江が常に帶したる、祕藏の壓衣刀にて、同僚の輩これを識認たる者多し、願くは先宋江を捕へて、問給ふべし、然らば立處に其兇身知れ申さん。知縣は深く宋江を助けんと欲せしかども、張文遠に再三再四訴へられ、今は已に人の耳目遮り掩ふこと能はず、遂に下官に命じて、宋江を捕へしむ。下官等命を承り、直に宋江が居宅に到つて搜しみるに、

此昨夜不圖宋押司を訪ふに、此老婆が家に至り、乃ち宋江に相伴して、酒を酌んとせし處に、此老婆何の故もなく、妄に某を羞辱め、剰へ拳を以て痛く打ちけれども、某是を忍びて回れり、今朝某叉街に出て糟薑を買て居ける處に、此老婆宋押司を捉へて、縣前にあり、只顧爭をなして、鬧しかりし故、某站停てこれを勸開けるに、宋江自ら走り迯去て候、某毛頭、宋押司彼が女を殺されたることを、露ばかりも存ぜず候、望らくは相公是を察し給へ。知縣大いに怒て云く、汝此のごとく胡亂の言をいふや、宋江は是信行の君子、いかんぞ人を殺さんや、閻婆惜を害したるは、必定汝なるべし、とて遂に左右に命じて、唐牛兒を絆けり。かゝる所に張文遠來つて、宋江が閻婆惜を殺したると聞き、心中に憤り、乃閻婆惜が爲に一通の狀子を修へ、遂に知縣に告て、死人閻婆惜が屍を點檢むべしと願ひければ、知縣是を許し、則當地の里正、及び仵作等を、閻老婆が家に遣して、彼屍を點檢ける所に、死人の傍に、一挺の壓衣刀ありしかば、里正先此壓衣刀を拾取り、彼閻婆惜が殺されたる、刀の痕等くはしく是を見屆け、乃死人を棺椁に納めて、近邊の寺中に寄置き、諸人再び縣裏に回て、點檢たる照依、詳かに訴へたり。知縣は原來宋江と尤親しかりけるゆゑ、いかやうともして宋江を救はんと欲し、乃ち罪を唐牛兒が身に推干け、再三唐牛兒を怒り罵て、白

間不宋江忽ち脱去

閻老婆
唐牛児と闘諍の

何ゆゑ彼を逃したるや。唐牛兒是を聞て忽ち大に駭て云く、我いかんぞ宋押司の人を殺されたることを知らんや、汝必ず、我是を知て逃したると思ふことなかれ。閻婆又彼下官らに向て、大に呼つて云く、列位我爲に、人を殺したる賊宋江を捉てたび給へ、もし然らずんば、累列位に及ぶべし。下官らは原來、宋江が情を蒙りし者共なれば、敢て宋江を追求んとするは一人もあらず、下官一人閻婆を引き、餘の下官共は都て皆唐牛兒を捕へて、直に鄆城縣へ引渡しぬ。知縣は人を殺したることを聞て、忙しく廳上に出ける處に、諸の軍卒ら、唐牛兒を堦の下に引出す。知縣これを見るに、一人の老婆左の方に跪づく、又一人の漢子右の方に低頭す。知縣問て云く、人を殺したるとはいかんぞや。彼老婆答て云く、我姓は閻と申者にて、一人の女を持ぬ、名を閻婆惜と申し、宋公明の妾なりしを、昨夜、女宋江と倶に樓上に酒を酌み、娯で居し處に、此唐牛兒直に我家に至て大に鬧じ、我を罵惡口致しぬ、尤左右の近隣、盡く知る所なり、今朝宋江已に囘りけるが、何故かしらず、頓て又來て女閻婆惜を殺す、此ゆゑに我宋公を扯て、縣前に至りし處に、又唐牛兒來て、擅に我を打罵り、竟に宋江を放逃し候なり、願くは相公、明らかに是を決斷し給へ。知縣これを聞て乃ち唐牛兒に向て、汝何ゆゑ人を殺したる兇身を放逃せしや。唐牛兒謹で云けるは、某嘗て前後の縁故は知らざれ共、

聲呼りしかば、縣前に在合ふ下官ら、數人馳來て是を看れば、宋江なりしかば、下官皆閻婆を勸めて、汝口を閉よ、宋押司は人を害する人物にあらず、汝若事あらば、靜にこれを述よ。閻婆が云く、宋江は實に人殺しの兇身なり、列位我が爲に此を捉へ、我と倶に知縣相公に訟て給り候へ。原來宋江の人となり、究て仁善なれば、官軍上下愛敬して、滿縣の人宋江を讓ざるは一人もなき故、此時下官ら都て宋江を捉ず、却て只逃さんと欲しける處に、想ず彼唐牛兒糟姜を擔て此所に來りけるが、閻婆が宋江を捉へ、只顧鬧ぐを看て、怒あらく、賊老婆昨夜我を打けるが、今朝は汝また、宋押司を捉て苦むること、甚だ遺憾なり、我今此處に於て、昨夜の回打をなさずんば、更に何の時をか待べし、とて、乃ち糟薑を藥賣の老王公が凳の上に卸し置き、忽ち飛がごとくに跑來て、大いに罵て云けるは、賊老婆、汝何ゆゑ押司を捉へ苦しめまゐらすや。閻婆が云く、汝必ず牽爾に來て、宋江を逃すことなかれ、若逃さば汝が命を我に償ふべきぞ。唐牛兒は前後の事を知らざりしかば、此言を聞て大に怒り、何ぞ我が命を汝に償はんや、とて、彼閻婆が手を取て、痛く柝き、猶拳を捏て閻婆が面を散々に打ける處に、閻婆大いに苦で、遂に手を放ちければ、宋江は不慮に閻婆が手を脫れ、其鬧しきに乘じ、遂に逃去ぬ。閻婆急に唐牛兒を揪へて、哭呼はつて云けるは、宋江昨夜我娘を殺たるに、汝は

行ひ給へ。宋江が云く、是最易し、我陳三郎が家にて棺槨を調へ汝に與へん、汝先自ら屍首を棺椁に收よ、此外に又十兩の銀を送るべき間、諸事の使用に供て、急に屍首を葬るべし。閻婆が云く、押司肯てかくのごとく惠み給ふならば、屍首を葬さんこと、尤易かるべし。只宜しく夜の明ざる内に、棺椁を調へ屍首を收なば、左右の近隣、屍首を見る人なく、事いよ〳〵穩ならん。宋江が云く、汝が言極て然り、汝疾紙筆を拿來れ、我書簡を修へて、汝を陳三郎が方に遣はして、棺椁を賒しめん。閻婆がいはく、若書簡を遣し給はゞ、必定事延引に及ぶべし、願くは押司自ら往給ひ、早々棺椁を取寄給へ。宋江が云く、汝が言所尤も其理あり、我今汝と倶に行べければ、牢く門を關せ、とて遂に樓を下り、門外に出ければ、閻婆自ら門を關して、兩人縣前を望んで馳ける處に、此時天色猶未明にして、街の人家未だ起ざりしか共、縣門は已に開けしなり。

○閻婆大に鄆城縣を鬧しむ

宋押司は、閻婆と倶に縣門の前に至りしに、閻婆俄に宋江を牢く揪へ、人を殺害したる賊こゝに在り、と呼れば、宋江大に驚き、急に閻婆が口を掩んとせしを、頭を搖て掩しめず、又一連に二三

んとしければ、宋江回す刀にて、婆惜が首を只一刀に斬て落し、遂に招文袋を取て、彼書簡を燈の下にて火中て、直に樓を下りて來りける處に、彼閻婆は、女が今人を殺すと呼りたる聲を聞て、實に何事を做出しけるにやと、忙しく起きて馳來り、乃ち梯子の上にて、宋江に撞當りしかば、閻婆先問て云く、汝兩人竟夜何事を爭ひ給ひぬるぞ。宋江が云く、汝が女甚だ無禮なるに依て、我彼を殺しぬ。閻婆打笑て、押司は常に一寸の蟲をだに殺し給はぬ人なるに、いかんぞ肯て人を殺し給はんや、必ず戲れを云給ふことなかれ。宋江が云く、我實に婆惜を殺しぬ、汝若これを信ぜずんば、樓の房局に入て屍首を見よ。閻婆が云く、我尙信じがたし、とて遂に房局の戸を推開きこれを見ける所に、鮮血の內に屍首ありければ、閻婆大に驚て云く、苦しやな、是を如何せん。宋江が云く、我はこれ大丈夫なれば決して逃ることをせず、いか樣とも汝が心の欲する所に從ん。閻婆が云く、我女元來押司の心に背き惡しき所多かりしかば、押司是を殺し給ひぬるも理なり、只恨らくは我晩年に及で一人の女に別れしかば、今より誰かあへて我を養ふべき。宋江が云く、此事何の憂る所あらん、汝もし我を饒さんには、我多く金銀財寶を送て、汝を豊に養育べし、實に汝が心いかんぞや。閻婆が云く、若果してかくのごとくんば、我深くこれを感心すべし、只急に屍首を葬るべきに、押司これをよき樣に

宋江怒て閻婆惜を刺殺す

しと言べきや。宋江は未だ怒をなさずしてありけるが、婆惜今知縣相公の廳上と云しを聞て、忽ち大に怒り、急に兩眼を睜開き云けるは、汝實に還さんや、又還すまじきや。婆惜が云く、汝何を怒るぞや、我決して還すまじ。宋江が云く、彌還すまじきや。婆惜が云く、我百度も還すまじきに、汝これを如何、若招文袋を求たくば、鄆城縣知縣相公の前に出よ、我彼所にて汝に還すべし。宋江是を聞て大に怒り、彼が被たる夜褄を扯開て、其内を見る所に、彼招文袋は原來女が懷中に藏し置ける故、婆惜は只雙手を伸し胸の上を緊と抱て、夜褄の内を捜すを顧みざりしかば、宋江これを知て云けるは、招文袋は汝が懷中に藏し置たるに疑なし、速に出して還さんや、とて忙はしく向ひ倚て婆惜が手を扯離して、これを奪ひ取んとしければ、婆惜は一命を掛て、これを奪取られじと働しゆゑ、宋江又死を捨てこれを奪取んと、互に推つおされつ、暫く揉合ける處に、彼壓衣刀まづ懷中より落たりしかば、宋江乃壓衣刀を取て手に持ければ、婆惜これを見て、忽ち聲を揚げ、宋江人を殺す、と未だ呼も罷らざるに、宋江此聲を聞て、忽然として、婆惜を殺さんと思ふ念起りし處に、婆惜又第二聲を呼りければ、宋江彌これを忍びず、左の手にて婆惜が胸を壓へ、右の手に壓衣刀を持て、遂に婆惜が顙の上を一刀刺ければ、鮮血滾流れ、滿身紅に染けれども、婆惜いまだ息絕ずして、猶聲を揚て喊

ん。宋江が云く、我已に二つの事を准へり、何ぞ第三の事を准へざらんや。婆惜が云く、汝強て准へんとならば、彼晁蓋が送りし一百兩の金子を早く我に與へよ、然らば我汝を饒して、招文袋を還し與ふべし。宋江が云く、彼二つの事は准んが、此一つの事は頗る准がたし、其故いかんぞなれば、彼百兩の金子を我に送りしかども、我再三是を辭し、封をも開ず、山陣に還しぬ、もし此金子我手に有ならば、早速汝に與ふべけれども、誓て此金子我手になし。婆惜が云く、汝聞ずや、公人錢を見ては、蠅子の血を見るが如しと云ことを、彼汝に百兩の金子を送るに、汝是を受ずして還すべきや、這些の言は、只好三歳の孩子を誑べし、汝何ぞ百兩の金子を惜むや、若事の敗に至て汝が一命を殺さるゝ時は、必ず後悔することあらん。宋江が云く、汝も素より知る如く、我は曾て謊を云たることなし、汝もし信ぜずんば我に三日を限れ、三日の内に家財盡く變賣し、百兩の金子を汝に與ふべきぞ。汝先招文袋を我に還せ。婆惜冷笑て云けるは、汝一人聰明の人にて、他人は皆癡なると思ふかや、汝我を誑いて、招文袋を求んと欲すとも、我何ぞ汝に誑されん、汝三日内に百兩の金子を調へて、我に與へんと云は、大いなる僞なり、汝もし招文袋を求度は、早く金子を持參し招文袋と取換せ。宋江が云く、我實に此金なし、何ぞ汝を誑かさんや。婆惜が云く、汝明日知縣相公の廳上に至ても、尚抵賴て、此金な

れ。宋江此一言を聞て、心ます〱慌悵て云けるは、我常に汝母子兩人を覷こと、稀にも懇切ならずといふことなかりしに、汝は何ゆゑ我を怨るや、願くは平生の情を省て、招文袋を還さんや。婆惜が云く、汝常に云ふ、我と張三とは事ありと、其實正を看居んと欲する心深し、張三たとひ一點の過ありとも未だ死罪に決すまじ、是則汝が彼盜賊等と通同する罪よりは猶大いに輕からん。宋江甚驚て云く、汝必ず聲を高むることなかれ、若隣家の人是を聞ば、事終に敗れん、只宜しく聲を低くせよ。婆惜が云く、若外人の聞ことを恐るゝならば、這樣の大罪は犯すまじきことなり、我彼書簡を牢く藏し置けれ共、汝もし我に三つの事を准へなば、我書簡を還し得させん。宋江が云く、三つの事は扨置て三十の事たりとも、都て我准ん、汝速に望のことを告よ。婆惜が云く、汝只恐らくは准へ難からん。宋江が云く、いかなる事かは知らざれども、我まさに行ふべき事ならば、則行ん、何ぞ豫じめ先疑ふや、汝宜く早々に申せ。婆惜が云く、第一のことは、我今日より彼張三に嫁すとも、汝一言を申まじきと云ふ文書を修へて、我に與へんや。宋江が云く、是最易し、我これを准へん。婆惜が云く、第二の事は、我縱張三に嫁したりとも衣食使用は、都て汝是を辨ずべきと云ふ文書を修へて、我に與へんや。宋江が云く、是又易し、我是を准へん。婆惜又云く、恐らくは第三の事准へがたから

我云ことを聞んや。婆惜答て、汝何の云こと有て妄に我を妨るや。宋江が云く、汝早く招文袋を我に還さんや。婆惜が云く、汝何の所にて、我に招文袋を交與して是を索るや、我曾てこれを知らざるに、汝率爾の事を問ふことなかれ。宋江が云く、我先に汝が床の前の欄干の上に、架置たるを忘れて囘りぬ、此所には別に來る人もなければ、汝是を取ずんば誰か是を取んや。婆惜が云く、汝は是狸か狐に迷惑されたるに疑なし、何ぞかくのごとき無實の言掛をなすや。宋江が云く、汝頻に抵頼んより、速に我に還せ、我明日を初として、何事も汝が心に隨ふべきぞ、汝再三戲れをなして、我を焦らしむることなかれ。婆惜が云く、我汝を戲れて何の興かあらん、我は曾て一物も拾はざるに、汝速に他所に往てこれを問ば、萬一又得ることもやあらんに、汝此無用の所に、長居することなかれ。宋江が云く、汝先には衣をも脫ずして臥けるが、今は是被を蓋て臥しければ、汝再び起て、此被を運入たるには疑なし、其時必定彼招文袋を拾取たらん、何ぞ一向に抵頼や。婆惜此言を聞て大に怒り、忽柳眉を踢竪て、星眼を睜開て云けるは、我實に招文袋を拾ひ取しか共、決してこれを還すまじきに、汝能我を捉へて、官府に賊情を訟んや。宋江が云く、我いかんぞ汝を捉へて賊とせんや、必ず誤て我心を疑ふことなかれ。婆惜冷笑て云けるは、汝も又能我は賊ならずと知けるこそ奇特な

と娯を催さんをとて、再び金子と書簡とを、招文袋の内に入置き、自ら天に悦び地に喜びけり。

○宋江怒て閻婆惜を殺す

斯る所に、忽ち閻婆が家に門を開き入は誰なるぞや、宋江再び來るなり。閻婆が云く、我先に、尚甚だ早からんに夜明て回り給へと云けれ共、押司これを容ひ給はざりしが、果して回り來り給ふ、且樓に上て婆惜と倶に歇み、夜明ん時早々歸り給へ。此時宋江直に樓に登りければ、婆惜は宋江が再び來りし樣子を聞知けるゆゑ、急に彼招文袋を懐中に藏し入て、自ら牢くこれを懐き、故意熟く睡たる體に詐臥しける處に、宋江已に房局の裏に進み來て、先床の前の欄干を見けるに、招文袋ははやなかりしかば、宋江心中に甚驚き、自ら昨夜の憤りを忍びて、彼婆惜を推動して云けるは、汝もし舊日の恩愛を思ひ出して、彼招文袋を我に還さば、我深くこれを感心すべし。婆惜詐て熟睡の體にもてなし、更に一言の答もせず。宋江又も推搖して云く、汝何ゆゑ再三我を怨るや、我明日より汝を格外に敬ふべきに、宜しく速に怒を息んや。婆惜は初て眠を醒したる體にて云けるは、われ甘く睡り居ける所に、我を推起すは、誰なるぞや。宋江が云く、汝已に我又來りしを知ながら、斯僞の體は何事ぞや、願くは汝怒ることを息て、

閻婆惜は宋江が歸りしを聞て爬起き、獨言に宋江を罵て云けるは、彼宋江村夫我を妨げて終夜睡しめざるこそ遺憾なれ、とて、猶一向罵て不圖欄干の上を看れば、彼招文袋を忘れて掛置しかば、婆惜冷笑て云けるは、宋江今朝我に羞辱られ、忙しく逃回りけるが、果して招文袋を忘れけるよな、われ幸ひに是を探て、張三に送るべきに、と悦んで、遂に招文袋と壓衣刀とを取てこれを見るに、少し重かりしかば、必定銀もやあらんとて、急に是を揮ひけるに、果して一包の金子と、一通の書簡とを揮出しければ、婆惜呵々と打咲ていひけるは、天是を我に惠み給ふなり、明日早々酒食を調へ張三を款待し、偕に娯を催さんものと、且其金を收め、又書簡を披て、燈の下にこれをみるに、其上に晁蓋が名判を書記し、許多の事共詳に述たりしかば、婆惜大に悦び、這樣の大事我手に落ること、是我と張三とが莫大の福なり、我先には只吊桶の井の内に落たるかとこそ思ひしに、豈知らんや、井却て吊桶の内に落たるよな、我常に張三と夫婦にならんことを冀ふといへども、宋江が在ゆゑに、此願を遂ずして、萬千是を憂けるに、今日此書簡我手に落入ること、是乃ち井の吊桶の内に落たるごとき稀有の珍事なり、宋江汝は原來大丈夫の譽あるとこそ聞つるに、誰か識ん、かくのごとく梁山泊の強盗らと通同して、書簡の往來をなすよな、書簡の内に、百兩の金子を以て汝に送りけると有なれば、我此金子をも乞取て、張三

一たび死せば二たび驢と生れ馬となり、押司の洪恩を報い奉らん。宋江が云く、汝なんぞ慇懃のことを云や、とて、彼招文袋の内に金子あるを、取出さんとして、已に手を以てこれを探けれども、招文袋は腰に著ざりしかば、大きに駭きて想ひけるは、昨夜不圖婆惜が床の側なる欄干の上に懸置けるが、今朝忙しう回りし故、忘れて腰に著ざりしよな、其内の金子は盗取るゝとも、聊憂なけれ共、晁蓋が方より來りし書簡を入置けるが、第一の禍なり、我昨日酒樓にて是を燒弃んとは思ひしか共、劉唐もし山陣に歸て書簡も其席に燒捨しと告ば、晁蓋が想はん所もいかゞあらんと憚りしゆゑ、宿所に歸らば燒火んと想ふの所、其途より不慮に閻婆に引れ、彼が家に往燒火間なく、こゝに及べり、我常に婆惜を看に、動不動曲の本を讀けるが、定て幾ばくの文字をも識たらん、若渠に看らるゝことあらば、忽ち大事を惹出すべき間、急に立歸て是を取んと欲し、乃王公に對して云けるは、汝必ず我を怪むことなかれ、我今朝忙しく出けるゆゑ、彼金を入し袋を忘れて、家の内に置來れり、我今是を取て、少刻來るべき間、宜しく此に在て我を待んや。王公が云く、押司何ぞ必ずしも、今日に限るべきや、明日にても明後日にても、慢々と賜るべし、若此事のみならば、必ず今立歸り給ふことなかれ。宋江が云く、別に又肝要の物を入置しゆゑ、我今立歸て、取來るべし、と忙しく別れて再び閻婆が宅に急ぎけり。扨彼

り給へ。宋江是を耳にも聞入ず、門を開きて私宅へと歸りけり。程なく縣前を過りける處に、一盞の燈の光有ければ、宋江立倚て見れば、是則湯藥を賣る王公と云者なり。此時分縣前に出て湯藥を賣て產業とす。此王公宋江を見て、忽ち禮をなして云く、押司は何の急用有て、今朝未明より出給ふや。宋江が云く、我昨夜多く酒を飲けるゆゑ、時を差へて、此時分出けるなり。王公が云く、押司已に酒を過し給ひしならば、定めて快からまじきに、醒酒二陳湯を用ひ給はんや。宋江が云く、二陳湯あらば、我幸ひにこれを用ゆべし、とて、凳の上に坐しければ、王公頓て一盞の二陳湯を捧げて、宋江に與ふ。宋江これを用ひ、忽ち思ひ出し、我每度この者が湯藥を用ゆれ共、此者我償を請ざるゆゑ、我日外、彼に一つの棺椁を施すべしと、約しけれ共、未だ是を與へざりしまゝ、今朝幸ひ彼に棺椁錢を與へ悅しめん、と思ひければ、乃王公に對して云けるは、我日外汝に棺椁を惠むべしと約しけれ共、事の忙はしきに紛れて、未だ與へざりき、幸ひ今朝金子の携出あれば、約のごとく料を惠んに、汝速に陳三郎が家に往て、棺椁を調へ來り、家に安置し、百年の齡を經て、竟に死去の時は、我又幾ばくの銀を施して、宜しく葬らしめん、汝老人只心を安んじて、這等のことを憂ふることなかれ。王公が云く、押司每々某を憫み給ふ上、肯て壽具を惠み給はんこと、此恩生前には報じ盡し難からん、

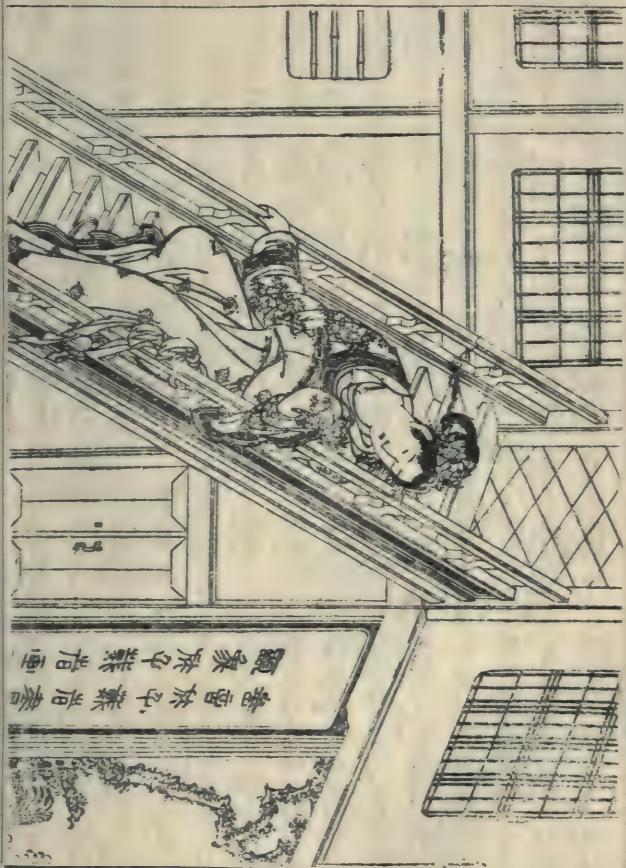
く我を請て歇しめんと思ひけるに、豈知らんや、婆惜は只心中張三がことのみ慕ひけるゆゑ、
却て、宋江が來りしを、大に悦ずして想ひけるは、宋江今宵も又、我と同じく休んとこそ思ふ
べけれども、我今宵は決して彼と倶に寢むまじ、とて、獨燈の下に坐して、一向歎息しける處
に、夜もはや闌にして、二更の鐘も響しかば、婆惜衣をも解ずして、床の上に打臥けるが、
更に宋江を顧ざりければ、宋江心中に思ひけるは、此女何ぞ我を欺くこと、此に至れるや、
我先に閻婆に酒を勸められて、醉ひけるにや、少し疲に及で、此深夜を過しがたければ、只曲
て一睡眠らばや、と思ひ、頓て頭巾を除て卓の上に置き、衣服を脱て、衣架の上に架け、壓衣刀
と招文袋を床の邊の欄干の上に掛け、遂に床の上に登つて、婆惜が背後に打臥ければ、婆惜こ
れを見て、再三冷笑ひけるゆゑ、宋江愈鬱悶して、睡ること能はず、已に三更の左側に至り
ける處に、酒の醉も全く醒て、漸々又五更の時に推移りしかば、宋江遂に起て頭巾を戴き衣服
を著し、乃ち彼婆惜を罵て云けるは、汝賤婦、何ぞかくの如く無禮をなすや。婆惜此言を聞て
同じく答へ罵て云けるは、汝自ら羞を知らずして、我床の上に臥し、却て我を罵るは、實に
好笑こと共なり。宋江益々怒たる體して、急に樓を下りける處に、彼老婆床の內より宋江が回
るを聞て呼り云けるは、押司は何ゆゑ、今五更の時分に歸り給ふや、宜しく夜の明るを待て歸

樓に上り、宋江に對して云けるは、押司は何ゆゑ彼小人に憐憫を加へ給ふや、彼は是専ら人の是非を云て、一碗の酒を貪る乞食なり、押司向後彼を惠み給ふことなかれ。宋江は原來眞實の人なれば、今閻婆に計を看破られたるゆゑ、座を立難て、只顧躊躇して居たりしかば、閻婆又宋江に對して言けるは、押司必ず心中に我を恨み給ふことなかれ、我は唯押司を慰ん爲、斯は行ひ申せしなり、とて、又女に對て云けるは、汝何ゆゑ押司を勸めて酒を過さゞるや。我暗に汝兩人の、動靜を猜するに、久しく遇はざりしゆゑ、互に怨あると覺えたり、若いよく怨あらば、早く歇んで、是を語り候へ、とて、遂に盃を收めて、樓を下りければ、宋江暗に想道く、婆惜は張三と私情を通じけると、人皆沙汰しけれども、我いまだ實正のことを見ざるゆゑ、半を信じ半は疑て事を決せざるが、今宵心を認て婆惜が動靜を伺んため、一夜は曲て歇るべし、と意を定めける處に、那閻婆又樓に上て、女に對して云けるは、夜も已に更けるに、何ゆゑ押司を勸めて、共に歇まざるや、只宜しく早々歇んで、我心を安からしめよ。閻婆惜答て云く、我等が歇んことは、母の干り給ふことにあらず、多く心を費し給はんより、自ら樓を下りて歇み給へ、明日再び遇ひ申さん、とて、遂に樓を下り燈を滅し、自ら寢間に入て臥にけり。宋江は猶凳の上に坐して在けるが、婆惜定めて常のごとく、凳の傍に來て談話をもなし、宜し

か、只顧押司を尋ね給はんや、這等の計は、只よく三歳の孩兒を欺くべし、我前にては此計は、決して行はるまじ。唐牛兒が云く、實に是知縣相公より、度々使を馳給ひて宋押司を尋ねしめ給ふなり、我何ぞ謊を云んや。閻老婆大に罵つて云く、汝小人何ぞ敢て我を欺んとするや、我兩眼は星よりも明なり、先に押司汝に向て、回りたきの模樣を見し給ひて、汝にかくのごとき計を云しめ給ふなり、汝もし心ある者ならば、押司回んと云給ふとも、猶これを諫て押司を慰むべき處に、却て押司を拖て歸んと圖るはいかんぞや、我決して汝を饒しがたし、とて、忽ち跳起て、唐牛兒が面を打ければ、唐牛兒は樓の口に坐しけるゆゑ、遂に樓より落けれども、幸ひに身を傷損ずして云けるは、汝閻婆、何ゆゑ妄に我を打や。閻婆が云く、汝擅に我家に來り、押司を引て回らんとするは、是則我衣飯を破る者なれば、我何ぞ汝を打まじきや、汝もし猶聲を揚ることあらば、彌痛く打べきぞ。唐牛兒が云く、汝我を打て妨なくんば、我汝に打るべし、とて、近々と進みければ、彼閻婆酒興に乘じて、又唐牛兒が面を、續けて三拳打て門外に推出し、乃ち門を關して、猶頻に惡口しければ、唐牛兒大に怒り、門外に立住つて罵り呼て云けるは、賊老婆、汝よく我を打けるよな、我若宋押司の事を想はずんば、汝が此屋を微塵に打壞て、汝が命をも害すべきものを、と牙を咬で回りけり。閻婆は再び

に尋ね行て、本錢をも借り、尙且相伴して、幾ばくの酒をも酌んものを、とても押司の歸り給はん迄は、待がたし、とて、直に閻婆が家に至り、門の縫間より內を望み見るに、燈の光明かにして、樓の上に人音ありければ、唐牛兒急に進み入て、直に樓に上り、乃ち宋江に見えて、慇懃に跪ぬ。宋江暗に思ひけるは、此者幸ひの處に來れりとて、乃ち唐牛兒に向て、回りたき模樣を見はし眼交しければ、唐牛兒原來乖き者にて、早く其意を知覺り、則宋江に對して、言をつくり云けるは、某押司を尋ねて、方々を馳けるに、押司は此處に在て、斯安々と酒を酌で娛給ふや。宋江が云く、汝我を尋ねしは、定めて縣裡より公用を申來りつらん。唐牛兒が云く、押司何ぞはや忘れ給ふや、今朝彼一ツの公用、いまだ消息なきゆゑ、知縣相公大いに焦燥て、待わび給ひ、已に五六度許使を馳て、押司を尋ねしめ給ひぬ、宜しく急に回り給へ。宋江が云く、誠に我不圖今朝の公用を忘れたり、知縣すでにかく使を馳給ふ上は、一刻も急に回るべし、とて、頓て座を立んとしける處に、彼閻婆これを攔住て云けるは、押司何ぞ這樣の計をなし給ふや、我愚なりといへ共、此計に中るまじ、且宜しく坐をなし給へ、とて、又唐牛兒に向て云けるは、汝は何ゆゑ我樓に登て、我を誑んとするや、今此夜中には、知縣相公も已に衙門に回り給ひて、夫人とともに、酒を酌んで、樂を催し給ふべきに、何の公用有て

處に、宋江も婆惜も、頭を低て居たりしかば、閻婆哈々と打笑て云けるは、汝兩人は、何ゆゑ互に羞怕て、談話もなさゞるや、押司は是男子のことなれば、別に羞給ふことも有まじきに、只宜しく風流の談話を催し給へ。宋江は是を聞彌悅びず、只一言も答ずして、甚だ憂愁に迫りぬ。彼婆惜も又自ら想道く、我は只張三がことをこそ、朝夕これを思ふに、汝今宵こゝに來るとも、我豈敢て汝と偕に樂をなさんや、とて、心中宋江を惡み嫌ふこと尤甚し。かゝる處に、鄆城縣に一人の、糟薑を賣ふ唐牛兒と云者有けるが、常に宋江の恩を蒙りしゆゑ、若宋江彼を用る時は、彼又死を捨て宋江が爲に力を盡しけるが、此夜博奕に輸て、奈何ともすることならず、宋江に本錢を借んと欲して、宋江が宅に往しかども、宋江は宅にあらざりければ、唐牛兒彼に去此に來て、方々尋ぬる所に、一人の友唐牛兒に問て云く、汝は誰を尋ねんとて、かくのごとく忙しきぞ。唐牛兒が云く、我は是縣裡の宋押司を尋るなり。彼友が云く、我看たるに、宋押司は閻婆に引れ此前を通り給ひぬ。唐牛兒が云く、彼閻婆が女閻婆惜は、宋押司の妾なりけるが、頃日張三と私情を通じて、不義をなしけるゆゑ、宋押司頗る此事を知りて、久しく彼が家には往給はざりけるが、今宵は必定かの閻婆に誑れてこそ、行給ひしならん、我今賭博に輸て、一錢の貯もなきまゝ、宋押司に少し本錢を借んと欲することなれば、閻婆が家

も打休め給ひて、一向酒を過し給へ、とて、言を巧にし色を令して、再三酒を篩て、宋江に勸め、又婆惜に對して云けるは、汝は何ゆゑ、孩子のごとく、頻に我が教訓に背ぐや、宜しく怒を息て、一盃を酌んや。婆惜が云く、母はいかなることによつて、斯我を苦め給ふや、我實に酒を飲む意なし、必ず無益の諫を云給ふこと勿れ。閻婆又云く、汝が心愛の宋押司偶來り給ふに、一盃の酒を勸め申すとも、何の不可なることかあらん、汝速に我言に隨て、押司とともに酒を酌んで心を慰めよ。婆惜此言を聞て、心中に想ひけるは、我心は只張三がことこそ思ひぬるに、いかんぞ能宋江に陪して酒を酌んや、然れども、我もし彼を醉しめずんば、彼必ず床の内にて我を妨ることとあらんか、されば先、彼を酒に醉しめ、熟く睡しめんにはしかじ、と圖り、乃盃を執り、半盞の酒を酌ければ、閻婆打笑て云く、婆惜汝は心を改めけるよな、必ず憤ることをなさずして、押司の心に從ひまゐらせよ、押司も又多く酒を過し給へ、とて、再四詞を盡し強ければ、宋江辭すること能ず、一連に三五盃を酌しかば、閻婆も又數盃酌了て、再び樓を下りて、酒を盪來りける處に、婆惜又半盞を酌ければ、閻婆これを見て、心中に悦ひ、想ひけるは、今宵もしよく宋江を歇しむることあらば、宋江必ず此間の怨を忘れて、又幾ばく月日を養ふべければ、其内に宜しく商議をなすべきものを、と思ひ、又樓を下りて、酒を盪て來りける

に、彼閻婆、宋江が回らんと欲する色を悟りしかば、乃房間の戸を闔して、鎖を下し、遂に樓を下りて街の上に行き、多く酒肴を調へ、再び家に歸り、やがてこれを具へて、房間の内に運び來りける處に、宋江も婆惜も共に頭を低れ、互に無興の色、面に露れしかば、閻婆乃ち女に對して云けるは、汝宜しく盃を擧て、押司に勸めよや。婆惜が云く、我今日何とやらん、身心煩はしく候へば、酒を用んこと能ふまじ。閻婆が云く、汝幼き時より、父母に寵愛せられて、自由自在に生長たるゆゑ、動不動自像自意のこと多し、這等のことは是、父母に對しては行はるべけれども、佗人に對しては、行はれざることなり、汝宜く心を更めて、押司を慰め申せ。婆惜が云く、我今日は快からざるゆゑ、酒を酌まじきに、何ぞこれを自像自意といはんや、我縱酒を酌ずして、床の上に打臥とも、誰か敢て、劍を飛し我首を取者あらんや、必ず多く無用の言を云給ふことなかれ。閻婆これを打笑て云けるは、押司は是風流の人物にて、汝がごとき短見にあらず、汝縱酒こそ酌ずとも、頭を擡て談話をもすべきことなるに、却て頭を低て悅びざるは、至て無禮なり、とて、自ら盃を執て、宋江に勸めければ、宋江辭すること能はず、自ら强て一盞を酌乾けり。閻婆これを見て、哈々と打笑て云けるは、願くは押司心を寛げ給へ、必ず外人の云ことを聞入れ給ひて、我等母子を恨み給ふことなかれ、別して今日は何事

と共に樓の上に登しかば、閻婆乃ち宋江を拖て、房局の内に入り、乃女に對して云けるは、押司偶至り給ふに、汝は何ゆゑ斯悦びざるや、汝原來短氣の者なるゆゑ、觸にも押司の心に背て、押司を恚らしめまゐらせ、押司遂にこれを恨給ひて、久しく我家に來り給ふことなかりき、汝常に押司を慕ひけるが、今晩却てかく憤りを含は何の道理ぞや、我再三力を盡して、押司を迎へ來りしに、汝必ず等閑のことに思ふべからず。婆惜これを聞き、母に答て云けるは、母は是何事を噪ぎ給ふぞや、我かつて反きことをも致さゞるに、彼人自ら來り給はぬに、我なんぞ是を知らんや、必ず少しも怕れ給ふことなかれ。宋江是を聞しかども、只聲をも做ずして居たりしかば、閻婆則婆惜を扯起して、宋江が左の側に坐せしめて云けるは、汝宜しく押司を慰て談話せよ、必ず又押司の心に背くことなかれ。婆惜是を聞て大に悦びず、則座を起て、宋江が座の遙對面に坐し、頭を低て居たりしかば、宋江も同じく頭を低て、互に一句一言も云ず在ければ、閻婆此體を見て云けるは、酒なくんば、いかんぞ能情を惹ことあらんや、我少刻酒肴を求て來るべきに、女必ず押司に陪して、談話せよ、少も羞怕るゝことなかれ。此時宋江暗に想ひけるは、我想はず此閻婆に扯住られ、已ことを得ずして此處に來りぬ、閻婆もし外に出ることとあらば、我好此間に乘じて逃回るべきものを、と思案を定めける處

に過候はゞ、都て我身の上に干て、これを正し申さんずれば、今晩は、縦いか樣の幹事おはしますとも、少の間なりとも、駕を移し給へ。宋江は猶公用あるを以て、只顧否けれ共、彼閻老婆、宋江が袖裂とも放たず、竟に宋江を拽て、己が家の門前に至て云けるは、押司已に此所まで至り給ふ上は、宜しく門内に入給へ。宋江今は辭すること能はず、遂に門内に入て凳の上に坐しければ、彼閻婆も同じく、宋江が傍に坐して、女を呼て云けるは、汝が心愛の人來り給ひしに、早く出てこれを迎へよや。彼婆惜は床の上に在て、一向張三がことを思ひ居ける處に、忽ち母が呼て、心愛の人來り給ひし、と云ぬるを聞き、必ず張三が事ならんと思ひ、忙ぎ慌て起上り、樓を下り彼隔子の縫間より透しみるに、瑠璃燈の下に、宋江凳に坐して在しかば、彼婆惜急に身を回して、再び床の上に打臥けり。此時閻婆は、女が樓を下んとする足音の聞けるが、再び又樓を上りぬるを聞て、重ねて呼て云けるは、汝が心愛の人來り給ひぬるに、何ゆゑ樓を下ざるや。彼婆惜床の上より答て云く、其人は是盲目にあらず、自ら能樓に上るべきに、何ぞ我樓を下て迎へ申さんや。閻婆これを聞て云ける、我女押司の久しく來り給はざるを怨て、かくのごとく申ならん、我押司を延て樓に上るべし。宋江は今婆惜が云し詞を聞て、早心中悦びず、直に回らんと思ひけれ共、閻婆再三再四扯住るに、已ことを得ず、閻婆

二編　巻之十九

○虔婆酔て唐牛兒を打つ 虔又閻に書す

閻婆宋江を途中に見て、呼掛けるゆゑ、宋江立佇りし時、閻婆が云く、押司は何ゆゑ、久しく我屋には至り給はぬや、女婆惜、もし押司の心に背くことあらば、宜しく教訓を垂給へ、我今押司に遇ぬるこそ幸ひなれ、已不得我が家に導き申べし。宋江が云く、我今日は公用忙しければ、汝が家に至ること能はじ、異日暇を得ば、必ず母子を訪ふべきに、今日は先我を免せ。閻婆が云く、我女専ら押司の光臨を待わびて居候へば、枉て來臨を恵み給へ、押司は何ゆゑ、斯疎んじ給ふや。宋江が云く、今日は實に忙しければ、先宜く我を放ち回らしめよ、明日は早々汝が屋に至るべし。閻婆が云く、我偶押司に遇ぬるに、如何ぞ、肯て放ち申さんや、今晩は除非に駕を枉給へ、とて宋江が衣の袖を扯て、倘再三云けるは、何人か押司に詐のことを告申て、斯は疎じ給ふらん、我等母子は、押司を憑で今日の生涯を饒にして世を過す者なれば、豈押司のことを、等閑に思ひ申すべき、必ず外人等が云所の、譏言を信じ給ふことなかれ、若女

宋朝運祚將傾覆　四海英雄起寥廓　流光垂象在山東
天罡上應三十六　瑞氣盤旋繞鄆城　此鄉生降宋公明
神清貌古眞奇異　一擧能令天下驚　幼年涉獵諸經史
長爲吏役決刑名　仁義禮智信皆備　曾受九天玄女經
江湖結納諸豪傑　扶危濟困恩威行　他年自到梁山泊
繡旗影搖雲水濱　替天行道呼保義　上應玉府天魁星

が手を携ていはく、足下自ら路次の間を小心給へ、重ねて此邊に來り給ふこと、必ず以て無用なり、此處は常に下官多く徘徊する所なれば、別して用心すべきことなり、我故意遠く送るまじき間、則此邊にて別るべし。劉唐これを聞て云けるは、押司宜しく此所より回り給へ、某も急に連夜て馳行申さん、とて、遂に別れ、梁山泊へと回りけり。扨宋江は已に劉唐に別れて、乃ち心中に想ひけるは、早くも是下官等が看著る者ならば、忽ち大事を惹出すべきに、天幸ひを垂れ給ひて、危き地位を脱れしこそ悅びなり、とて、又晁蓋等が事を、暗に思ひけるは、彼十一人の豪傑等、いかんぞ斯のごとく、大いに威勢をふるふや、誠に梁山泊は、要害雙なき名地と聞つるに、果して其言虛しからぬよ、と感歎しつゝ往ける處に、忽然として、背後に呼る聲あつて云けるは、押司は奚方に往給ひぬるや、何故我家には至り給はぬぞ。宋江これを聞き、急に頭を回してこれを看るに、是則閻婆なり。是宋江不慮の難義を惹出す始末、次の卷に具なり。

閻婆を又虔婆とも出たり。水滸傳舶來の本には每回詩章多し。兒女の耳には遠きゆゑ、譯本には省けり。然れ共呼保義宋江は、後に梁山泊に入て、第一凳の豪傑たれば、此卷第二十一回の首に出たる古風一首をこゝに載す。

宅に留て款待申たく思へども、若人有て、足下を識認ときは、大事忽出來らん、今宵は月色も定て明かならん、よろしく月光に乗じ回らるべし、諸の頭領にも委しく一禮を傳へ給はるべし、必ず一刻も早く、道を急ぎ給ふべし。劉唐是を聞て云けるは、押司の厚恩甚だ重き故、晁頭領再三、不佞に命じて薄儀を贈り申さる、若是を請給はず、拿回らしめ給ふならば、某必定其責を蒙るべし、願くは押司これを受給へ。宋江が云く、晁保正の命令既にかく厳ならば、我宜しく返簡を修へて送らん、足下これを持回り給へ、しからば少しも足下の過たることあらじ。劉唐此時尚、苦々に宋江を強て、收めしめんとしけれ共、決して受ずして、早速酒肆の主に、墨筆を假り、具しく返簡を修へて、劉唐に與ふ。劉唐は原來、直性の勇夫なれば、宋江斯辭するを看て、畢竟宋江に强がたきことを料知り、遂に返簡を得て、其金を再び包袱になし、乃ち別を告て宋江に辭して云けるは、天色も已に晩候へば、某終夜に馳て、山陣に回り申べし。宋江が云く、是尤然り、早々急ぎ給へ、我敢て足下を留め申さゞること、明らかにこれを察し給へ。劉唐が云く、宋押司の厚意、某いかんぞ察せざるべき、山陣に歸りなば、晁頭領らに、詳に語り聞せ候はん、とて、乃ち又宋江を拜して、兩人遂に酒店の樓を下り、直に街の口に至りしかば、月色已に上りぬ。此時八月中旬にて、秋光一入明かなり。宋江又劉唐

る、小賊都合七八百人を集めけれども、猶兵粮を蓄しことは其數を計らず、晁蓋は申に及ず、呉用以下の頭領某に至るまで、常に只顧押司の大恩を感じて、忘るゝ違なし、此ゆゑに某晁保正の命を受て、書簡並に黃金一百兩を携へ來て、押司及び、朱仝雷橫兩都頭に謝し奉る、とて、先書簡を宋江に呈す。宋江已に書簡を披て看畢りしかば、乃ち腰に掛たる、招文袋を開て書簡を入る。劉唐又黃金を取出して、宋江に送る。宋江が云く、足下先此金を包給へ、とて、再び是を包しめ、つひに酒屋のこものを呼て酒を出しぬ。頓て劉唐にすゝめて、飮酌を催ける。此時日も漸々、西山に落過て、晩たりければ、劉唐又金を取出して、宋江に送らんとせし處に、宋江忙しく攔住て云く、足下宜しく我言を聞給へ、晁保正今初て、山陣に上られしとあれば、定て金銀の使用大にして、何程貯給ふとも不足すべし、某は原來家内に頗る錢財の蓄有て缺用なし、先此金は山陣へ拿回り給へ、異日もし我要用の時あらば、舍弟宋淸を山陣に遣して借用申べし、扨彼朱仝も頗る家財有者なれば、必ず金子を送らるゝに及ぶまじ、晁保正の厚意我密に彼に宜く傳へ申さん、又彼雷橫は某ら晁保正を逃したることを知らざれば、是越發金子を送るに及ぶまじ、況や彼は博奕を好む者なれば、若金を得ば、必定賭場に拿出べし、然らば萬一、事を惹出すこともあらん、決して此金を送るべからず、我また足下を私

あれども、未だ其參會したる所を知らず。彼漢子が云く、願くは押司某が爲に、一步を移し給はゞ、告申たきことあり。宋江が云く、已にかゝらば、我豈辭し申さんや、とて、彼漢子とともに、一軒の酒店に至て樓の上に登り、未だ坐も定らざるに、彼漢子忽ち、身を飜して拜をなす。宋江忙しく禮を還して云く、足下は本誰人やらん、先其姓名を報給へ。那漢子が云く、大恩人は何故某を見忘れ給ふや。宋江が云く、我も幽々に識認たるやうに記しかども、實に足下のことを忘れり、願くは早く告しらせ給へ。彼漢子が云く、某は是、向に晁蓋が館にて押司の尊顏を拜し、乃ち押司の救を蒙り、一命を脱れたる、赤髮鬼劉唐なり。宋江是を聞て大に驚て云く、足下いかんぞかく大胆なるや、若下官等に見尤められ給はゞ、忽ち大事を惹出し給はんに、何故此處に來り給ひしぞ。劉唐が云く、不佞已に再生の恩を蒙りしゆゑ、一死を怕ず特々來て押司を訪ひ奉る。宋江が云く、晁保正は這一向恙なきや、足下今此處に至り給ふは、定めて晁保正に賴れ給ひつらん。劉唐が云く、晁保正那日押司の大恩を蒙りての後、直に梁山泊に登つて山陣の主となられぬ、吳學究は軍師となり、公孫勝も又、吳學究と共に同く山陣の兵權を執る、林冲深く某ら七人を憐んで、彼王倫を殺し、再三山陣を以て、晁保正に讓りぬ、山陣に又原來杜遷、宋萬、朱貴と申て三人の頭領あり、今總て十一人の頭領山を守

ふまじ、徒に恚を起して、何の益かあらん、向後彼が家に往ずんば、卻て是心淸からん、とて、約莫一月餘り往ざりければ、閻老婆は、私に宋江が來らざることを愁ひ、毎度使を馳て邀へしかども、宋江は只公事繁きよしにて往ざりけり。又一日宋江暮に乘じて、縣裡を出來り、乃茶坊に坐して、茶を用ひ居ける處に、一人の大漢子頭には白氈の笠を戴き、身には黃羅の衣を著し、腰には一挺の刀を帶し、脊量に一つの大包袱を背ひ、一身に汗を流して、忙しく走り行く。宋江これを見て、何者なれば昏に及んで、かく急に馳行や、いかさま怪しき裝束かなと思ひ、茶坊を立て彼漢子が後を赶て慕ひ行く。約莫四五十步計に至て、彼漢子頭を回らして、宋江を一ト目看けるが、只顧立住て躊躇す。宋江も又彼漢子を見て、何とやらん其面を識認たる樣にて、頻に心中に思ひけるは、彼漢子が面色慥に識認たる者なるが、何の所にて、參會しけるにや、と再三考ながら、同じく躊躇す。彼漢子も尙又頭を回らして、宋江を打望み、恰も事ありげに見えけれ共、又妄に詞をも掛ることとなし。宋江此光景を見て、彌怪しみしかども、是又妄に問ふこともなさゞりけり。彼漢子傍の篦頭舖に立倚て、問けるは、彼後より來り給ふ官人は、誰なるぞや。待招答て云く、彼官人は、及時雨宋押司なり。彼漢子是を聞て、急に宋江が前に來て慇懃に腰を回て云けるは、押司は某を識認給ふや。宋江が云く、足下は隱々に識認たるやうには

只顧眼を以て情を送る。此時宋江淨手に立ければ、張三則言を以て、婆惜を戯れり。諺にも風來らざれば樹動かず、舟搖ざれば水渾ずと云ふ。はたして此ことの如く、張三來て婆惜が心を動せり。此より兩人、互に十分の情ありしかば、彼張三其後は時々來て、故意宋江を訪ふ。此時宋江は、又かつて婆惜がいへに行ざりしゆゑ、婆惜は私に是を歡び、張三が來るごとにこれを留て談話をなし、つひに兩人不義の情を通じけり。かの張三は、原來色道の達人なりしかば、かの婆惜百念を忘れて、悦びをのぶること尤限なし。諺にも、一たび將ず二たび帶せずといふことありけるに、宋江想はず、張三を將て、婆惜がいへに至て、酒を酌しゆゑ、遂にかくの如き、反ごとを惹いだしぬ。彼婆惜、張三と情を通じてより後は、朝夕に張三がことのみ心にかけ、宋江がことは、毛頭も想はざりければ、宋江若一月の内たま〳〵一日も來ることあれば、彼婆惜多く道理なきことを以て宋江に違く。宋江は原女のことなどを、心に掛ずといへども、此よりは彌疎んじて、婆惜が家に至ること尤稀なり。那張三這婆惜と情を交ること、恰も漆と膠のごとくにして、曉暮一處に在て擅に戯れしかば、左右の隣家悉く皆しらざるは、一人もなかりし。此沙汰頗る宋江が耳に入しかども、宋江猶半は信じ、半は疑うて、心中に思ひけるは、婆惜はもと父母の匹配給ふ妻室にあらざれば、彼もし我を嫌はゞ我又渠を慕

處に流落て、宋押司の洪恩を蒙りたれば、若宋押司我女を求んと欲し給はゞ、我早速女を宋押司に事へしめて、聊大恩を報ずべし、王婆我爲に此事を宋押司に告給はんや。王婆是を聞て、然り、と同じ、翌日宋押司に見えて、閻老婆が言を告げ、再三宜しく言を巧にして宋江を攛掇ければ、宋江肇は承允せざりしかども、王婆に言を竭され、遂に其議に應じて、閻婆惜を娶りて妾とし、乃縣裡に小宅を借て、閻婆親子を住しめ、多く金銀米錢を送て、豐かに過させけり。已にして、半月餘り經たりしかば、彼婆惜忽ち格別に粧うて、頭には玉の簪を帶し、身には錦の衣を著し、殊に風流にぞ見えにけり。初が間は、宋江常に來り、閻婆惜と一所に在て娯をなしけるが、日を逐て漸々疎んじぬ。此ゆゑはいかんとなれば、宋江は原是有名の豪傑にして、色道には十分荒ざるゆゑ、閻婆惜が心に合はず、此より兩人互に睦しからず。一日宋江後司貼書張文遠を引て、閻婆惜が家に至て飲食を催しける。彼張文遠は、皆人これを小張三と呼慣せり。此張三生れ得て眉清く目秀で、齒白く脣紅にして、其形きはめて風流なり。况や彼少年の時より專ら花街に遊び、娼門青樓に戯れ、妓女婊子の風情ならびに、吹彈歌舞盡くこれをさとりぬ。かの閻婆惜も元來曲をよく唱ひ、舞奏ることを以て、諸方に徘徊したる娼子の流なれば、今一ト目張三を見て、忽ち心を動しけるに、張三も又婆惜を見て、已に十分の意あり、

て旅宿にあることとなれば、棺郭を求る銀だにもあらず、焉ぞ能使用の備あらんや。宋江が云く、若使用の銀なくんば縦棺郭有とも、葬ること能ふまじ、我又汝に十兩の銀を惠むべし、汝宜しく此銀を以て、使用とせよ。閻婆これを聞て、大に悅で云く、押司若かくのごとく憐を垂給はゞ、則此恩天地と等うして、齒を沒るまで忘れ申まじ。宋江遂に一錠の銀を取出して、閻婆に與へていはく、汝此書を携て陳三郎が家に往なば、必ず棺郭を得ることあらん、とて、遂に別れて歸りけり。這閻婆書簡を得て甚だ悅び、直に陳三郎が家に至て棺郭を賖り、則旅宿に持せ回て死人を葬りける。一日閻婆宋江が家に至て、嚮に惠を受し恩義を謝し、家內をみるに一人の女もなかりしかば、閻婆心中に怪しく思ひ、回て王婆に問て云く、宋押司の家には一人の女も見えざりけるが、未だ夫人を娶り給はざるや。王婆がいはく、宋押司の本宅は宋家村にあれども、未だ夫人有ことをしらず、今押司と成て此處に住し給ふは、乃是旅宿なり、此宋押司は稟性仁心深く、專ら人に棺郭を施し、人の貧苦を救ひ給ふゆゑ、我向に汝の艱難を彼押司に告たり、定て未だ夫人は娶り給ふまじ。閻婆が云く、我女婆惜は頗る顏色あり、殊に吹彈歌舞の事、一々是を曉せり、我古鄉に在りし時は、幾ばくの富貴人彼を養子にせんとて、再三我ら夫婦に求めしか共、唯一人の女なるゆゑ、其需に應ぜざりし、然れ共今日想ず此

とを得ず、遂に貼書後司張文遠に仰せて、彼文書を諸の村里に下して、嚴に觸を廻しけり。
已にして宋江は、縣裡を出て三五十歩計行ぬる所に、背後に人あつて、押司々々、と呼りければ、宋江これを聞て誰なるにや、と頭を回してこれをみるに、乃是媒をなして、過活とする王婆なり。この王婆一人の老婆を引て後に來る。宋江則問ていはく、汝王婆我を呼て何のことありや。王婆忙しく答て、彼老婆を指して云く、押司に告申たきことあり、此老婆は本是一家三人東京より此處に來りし人なりけるが、一人の女あり、其名を閻婆惜と申し、其父閻公原來能曲を唱はれしゆゑ、彼女幼き時よりこれを學び、吹彈歌舞等の事、都て詳かに曉し、年まさに十八歳にして、頗る顏色好し、向に親子三人、山東に往て、女を官人の家に事へしめんとしけれ共、本山東の地に知人なき故にや、これを帮襯者一人もなく、遂に落魄して、此鄆城縣に徘徊しける處に、彼閻公不幸にして、昨日病死いたしぬ、此閻婆又是を葬るべき力なくして、已に急苦に逼り、乃我を賴んで、女を奉公に出さんとなしけれ共、此節急に妥貼がたし、願くは押司一片の仁心を垂給ひて、彼に一つの棺槨を惠給はんや。宋江が云く、已に斯あらば、汝ら兩人我に從て來れ、街梢の酒店に至て書簡を修へ、乃汝に與へて、縣裡の陳三郎が家に遣はし、一つの棺槨を賒らしめん、只しらず、屍骸を葬る使用銀有や。閻婆答て、我流落

此處には強兵猛將極て少なれば、賊を捕へんことは偖置き、却て此處に劫來り、兵粮を借んと云はゞ、我何を以てかこれに當んや、とて、只顧躊躇して憂ひ愁ふ。舊府尹は翌日旅粧を准備て、遂に新府尹に別て東京に歸りけり。扨新府尹は、東京に在し時は、只七人の棗商客のみならば、縱梁山泊に上りたるとも、何の捉へがたきことかあらん、とて、已に看破して此に到りしが、昨日舊府尹に、梁山泊猛勇の形勢を告知らされて大に驚き怕れ、乃ち諸の軍官等と商議して、專ら軍を招き馬を買ひ草を集め、粮を屯し、梁山泊の豪傑等を防ぎ捉ふべき備を催し、卽日文書を以て近州隣郡に觸を廻し、各宜しく力を併せ賊を捕ふべし、とぞ命じけり。此時、鄆城縣の知縣は文書を見觸を聞て、早速宋江と商議して云けるは、此度の賊情最大なり、汝宜く文書を以て、支配の村里にて一々嚴に梁山泊の盜賊を防がしめよ、必ず怠る事なかれ、とて、遂に文書を修へて宋江に與ふ。宋江文書を得て心中に想ひけるは、晁蓋等七人の輩いかんぞかくの如き大罪を犯しけるや、況や官軍を殺し何濤を傷ひ、今又黃安を活捉り山陣に留置こと、是乃九族を滅す罪に當れり、尤止ことを得ずしてこそ、斯は行しならん、されども法度の上に於てこれを饒しがたし、萬一官軍等に、捉はるゝことあらば、必定大法に行はれん、我何ぞよくこれを忍びんや、とて、一向憂愁に逼りぬ。然れ共宋江知縣の命重きに仍て自ら止こ

馬に乘り、直に東門の外に出て相迎ふ。新官已に接官亭の前に至て馬より下りしかば、府尹急に是を延て亭上に登り、一禮畢つて、座已に定りければ、彼新官則朝廷より携へたる、尹替の文書を取出して、府尹に與へて語りけるは、此度梁山泊の强盜等、頗る猖獗といへども、これを平がたきと云こと、預じめ京に聞え、即ち某に命じ給ひて、速に府尹に替り、宜く濟州府を守つて、急に賊を捕ふべきよし、詔命なり、尤俄の勅諚なりしかば、先達て當府に、飛報到來するにも及び候はじ。府尹是を聞て心中快からず、乃彼文書を披てこれを讀了り、即時に新官を導て、濟州府に歸り、酒宴を設て、新府尹を款待し、酒已に數盃巡りければ、舊府尹、先新府尹に告て云けるは、今般誕辰の禮物を奪ひ取たる兇賊、晁蓋等七人の輩、今已に梁山泊に上て、太だ猛威を奮ふ、某彼等を平ること能はざるよし、已に都に聞えたるとなれば、蔡太師嘸憤り給ふらめ、然れども梁山泊の英雄等、智勇足備つて、要害の險地に據けるゆゑ、直正等閑のことにあらず、已に兩度まで許多の官軍を殺されぬ、とて、彼何濤黃安等が次第、一々微細に語りければ、新府尹これを聞て大に愕然ていはく、十分のことはよも有まじきとこそ思ひつるに、反てかくのごとく猛勇を振ひ申すや、とて、忽ち面色土のごとくに成て、心中に思ひけるは、蔡太師這般のことを聞知られたるゆゑ、故意我を擡舉て此處につかはし給ふらん、

なすべし。晁蓋が云く、既にかくのごとくは、全く軍師の良計に從んに、速にこれを調へ給はんや。呉用此時諸の頭領に命じて、山陣の備等一々是を辦ぜしむ。扨濟州府の府尹は、黄安が手下の士卒に、命を脱れて逃かへりたる者を呼で、乃ち梁山泊の動靜を具しく盤問ければ、彼士卒答て云く、官軍盡く殺され、黄安已に活捕れぬ、梁山泊の豪傑等、十分の猛勇にして、近づき敵すること能はず、且水路窄くして、船の進退自由ならざりしゆゑ、いよ〳〵戰ひ打負て、賊を捕ふること叶はず。府尹これを聞て大に驚き、則蔡太師の使者に對して云けるは、我此度太師の爲に賊を捕へんと欲し、初何濤を捕盜の觀察として馳しめけるに、許多の人馬を失ひ、何濤一人命を脱れかへりしかども、二つの耳を割落され、其疵今に痊ず、私宅に在て將息す、所以に此度、又團練使黄安ならびに當府の捕盜官に兵を與へて、梁山泊に遣しける所に、是又强賊らに打破られ、黄安は終に擒となりて、今梁山泊の獄中に繋るとなり、倘且官軍を殺されたること其數を知ず、又戰馬許多を賊に得らる、再び誰を將とし、いかなる計を以て、賊を捕へ得んや、とて、大いに憂ひくるしみけり。頃日又濟州府の府尹新に替るよし、專ら取沙汰有しが、此日果して新官當府に至りしかば、一人の承局官忙しく來て、府尹に告て云けるは、今城の東門接官亭上に、少停新官の到來なりとて、飛報此に至れり。府尹これを聞て、早速

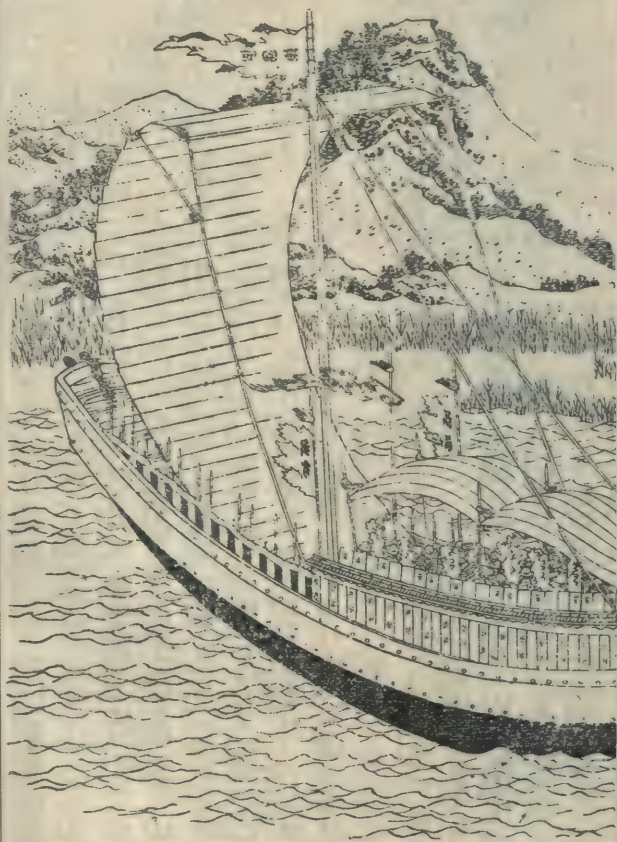
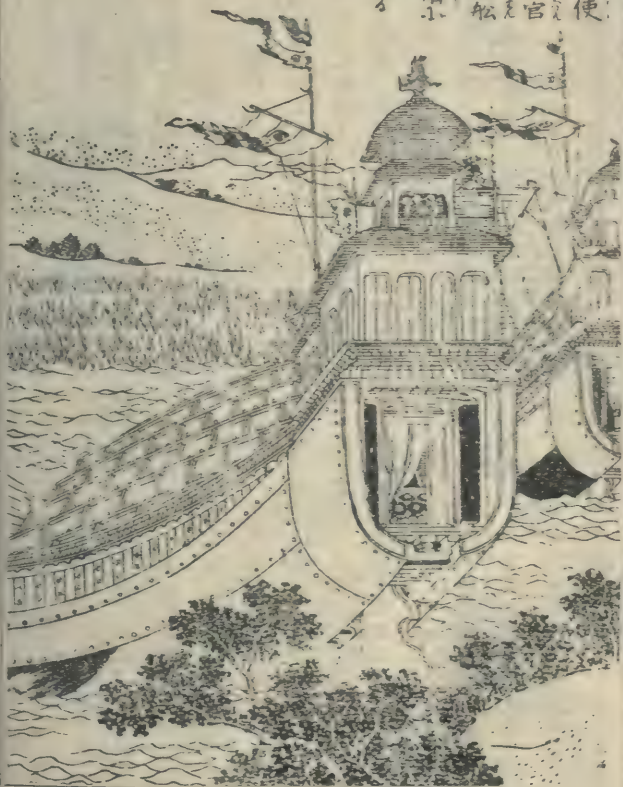
て、又諸の頭領の力なり、誠に感激に堪がたし。諸の頭領が云く、是都て兄長の福分に倚て、かくのごとく得采し、何ぞよく某らが力のなす所にあらんや。晁蓋益喜悦をなして、飲酌已に晩に至て罷りしかば、衆皆聚義廳を退て歇けり。

○鄆城縣の月夜に劉唐を走しむ

翌日又諸の頭領聚義廳に集會せしに、晁蓋乃呉用に對して云けるは、我輩七人の性命は、都て宋押司朱都頭、兩人に救はれぬ、古人の云く、恩を知て恩を報ぜざるは、獸類禽鳥にだも如ずと、今日の富貴安樂、何より來れるや、皆是宋押司朱都頭兩人の賜なり、近日の內に、金銀を以て禮物とし、則人を鄆城縣に馳て一禮を述べし、是第一專要のことなり、又彼白勝今已に濟州の牢中にあり、我輩必ず濟州に馳て渠をも救ひ出すべし。呉用が云く、兄長必ず是を憂ひ給ふことなかれ、宋押司の大恩を謝せんずることは、某已に所存あり、近日一人の頭領を遣すべし、又彼白日鼠を救んは、一人聰明の人を濟州に遣し、上下の役人に、賄賂をなさしめ、其便機を待て、遂に彼を救ひ出すべき間、先宜しく商議して、糧を貯へ船を造り、軍器をこしらへ、寨柵を設け、盔甲を整へ、弓箭を調へ、山陣を嚴密に備て、官軍を支ん計を

醺で、終に曉に至りし所に、一小賊忙しく馳來つて、喜を報じて云く、三阮頭領已に二十餘車の金銀財物、ならびに四五十匹の驢馬を得給ひぬ。晁蓋これを聞き、且問て云く、曾て人を殺さゞりしや。小賊答て云く、彼商人等、我輩が猛勢を見て大に怕れ、乃ち車驢馬等を打撤て、跡をも顧ずして去し故、只一個の人をも殺すことなし。晁蓋これを聞て、大悦斜ならず、我輩初て山陣に至り、人を害せずして寶を得るは、乃ち山の福なり、且汝に褒美を惠まん、とて乃ち一錠の白銀を出して與へけり。晁蓋又吳用公孫勝林冲等と倶に山を下り、直に金沙灘に至りて、諸の頭領を相迎ふ。諸の頭領は車驢馬等こと〴〵く小賊等に牽せて馳回り、乃ち金沙灘に於て晁蓋等に相見え、衆皆大に悅びぬ。晁蓋急に、一人の小賊を馳て朱貴を邀へ、諸の頭領とともに、再び山に上り、遂に聚義廳に於て、豐に酒宴を設け、彼奪取たる金銀財寶を二つに分ち、其一つは庫に收めて、後日の軍用に備へ、其一分を得て、悅び娛むこと、最極りなし。諸小賊等に至るまで、衆皆飲酌を催しけり。晁蓋が云く、我輩向には只災を脫れ難を避んことをのみ望て、此山に來り、乃ち王倫が帳下に於て、一小卒ともならんとこそ、思ひつるに、豈料らんや、林頭領我を助けて、山陣の主とし、想はず兩度の悅びを得ぬ、其一つは、官軍に勝て許多の人馬兵船を得、其二には、今又若干の金銀財貨を得ぬ、是皆林教頭の助に出

の軍初に快しと悦んで、乃牛を殺し馬を宰り、大いに酒宴を設け、飲酌をぞ催しけり。斯る所に小賊、忙しく馳來りて報じけるは、山の下の朱頭領今使を馳ぬ。晁蓋これを聞て乃使を呼入て問けるは、朱頭領何のこと有て汝を馳けるや。使の小賊跪て云けるは、今宵十餘人の商客旱路より麓を過るよし、其沙汰專らなるゆゑ、朱頭領急にこれを山陣に注進申さる。晁蓋が云く、頃日已に、金帛殆ど使盡し、將に用を缺の時節、是幸ひの注進なり、誰か我が爲に、人數を引て馳向ふべきや。三阮兄弟進み出て曰く、某兄弟命に應じて馳下るべし。晁蓋大に悅び、汝等兄弟向はゞ最可ならん、然れ共唯心を用ひ、意を留め、速に往て早く來れ、我又跡より劉唐を馳て、救應をなさしめん間、汝兄弟はまづ、急に裝束を改めよ。三阮命を請て粧ひ、則百餘人の小賊を引て再び廳に上り、遂に晁蓋等、諸の頭領に別れて、山を下り關を出で、直に朱貴が店へぞ來りけり。晁蓋は三阮兄弟萬一誤つこともや有らんとて、又救應の爲とて、劉唐に一百有餘の人數を與へ、再三命じて云けるは、必ず唯軟に財物ばかりを奪取て、決して人の命を害することなかれ。劉唐命を請け、人數を率して下りけり。晁蓋は已に三更の時分まで相待けれども、何の消息もなかりしかば、心中ふかく憂へ慮り、又杜遷宋萬に五十餘人を與へ、乃助けの爲として、山の麓に下りけり。晁蓋は吳用公孫勝林冲らと、共に酒を

團練使
黄安が官
軍の大船
梁山泊に
攻寄る

これを聞て膽を消し、急に兵に下知して、船を岸邊に搖往處に、早兩邊の灣港の內より、四五十艘の小舟漕出で、諸船各射手を揃へて、散々に射たりしかば、官軍矢に中て死する者數を知らず。黃安忙がしく、快船に乘移りて逃走りけるが、猶首を囘して後を顧るに、官軍等盡く皆追擊せられ、然も逃べき道なかりければ、半過て水中に飛入けり。黃安漸半里逃延し時、又葭の內より、一艘の小船揖を忙しく揖て馳來り、船の頭に劉唐立出て、大いなる鐵の鉤索を以て、黃安が船を鉤住め、劉唐忽身を躍して黃安が快船に跳乘り、遂に黃安を捉て大いに罵て云く、汝賊官掙扎ことなかれ、汝がごとき匹夫、いかんぞ正しき眼を以て我輩を看ことを得んや、とて、頓て岸の上に扯上けり。此時官軍等、水性を識て水中に跳入し者は、水中にて殺され、水中に跳入ざる者は、船の上にて擒れけり。晁蓋公孫勝は、小賊五六十人並に戰馬二三十疋を領して、山邊に打出で、直に來て諸頭領を相迎ふ。此日の戰に、活捕の官軍二百餘人、其外盔甲等を得たるは其數をしらず。晁蓋等諸の頭領、再び人數を收めて、山陣に馳囘り、則聚義廳に相集て、各戰功を賀しぬ。晁蓋彼黃安を絆めて柱に捆著け、又金銀財寶を散じて、小賊等に恩賞を行へり。此日敵の戰馬總て六百餘匹を奪取しは、乃ち林冲が功なり。灣港の內にて官軍を討取しは、三阮兄弟並に杜遷宋萬が功なり。黃安を活捉しは、劉唐が功なり。諸の頭領山陣

に、水面の四方より七八艘の小船、棹を列ねて棹來り、各船の上に幾ばくの人あつて、頻に矢を雨のごとく射かけしかば、殆危かりしゆゑ、急に船を回さんとせしかども、原來灣港の内窄くして、進退難義に及し處に、兩岸の上に二三十人馳來り、大いなる麻の索を用て、兩岸より牽張り、乃水面に横たへて、親方の船を遮り住しゆゑ、某ら索を切掃はんとて、船を進めんとせしに、又岸の上の人數一度に、木石を雨のごとくに打かけしかば、其木石に中りて傷ふ者多かりき、此時某等皆船を弃て、水中に跳入り、暫く葦の内に躱れ居て、その後船を得、路を覓て、迯回りぬ。黄安これを聞て大に驚き、已にかくのごとくんば、長赶することなかれ、とて、則白旗を揮動して、諸の船を招き、呼つて云けるは、諸船且賊を追ふことを休て、舟を回せ。諸の舟是を聞て、忙しく漕回さんとせし處に、彼三艘の船、又十餘艘の類船を引て、黄安が背後に続出で、毎船に五六人の漢子乘て、各手には旗號を拿ち、口には胡哨を吹て、飛がごとくに追來る。黄安これを見て、急に船を揃へ、迎へ戰はんとする時、忽ち蘆葦の内に石砲の聲大いに響く。黄安四方を看に、前後左右都て紅の旗を竪列ねたり。其内の人數いまだ形を露はさゞれば、其勢幾何と云數頭をしらず。黄安心中大に迷ひ、猶豫する所に、背後より赶來りし、船の上の漢子等、高らかに呼つて云けるは、黄安早く首を遺して回り去れ。黄安

子、都て一やうの裝束なり。官軍の内これを識認たる者有て、黄安に告て云けるは、此三艘の船頭に立たる三人の漢子は、一人は阮小二、一人は阮小五、一人は阮小七なり。黄安が云く、既にかくのごとくんば、汝等我爲に力を併せて、彼三人を擒るべし、必ず走らしむることなかれ。此時兩邊より四五十艘の船、一度に咄と前んで、大いに喊の聲を發しければ、那三艘の船これを見て、再び櫓を扯て漕回る。黄安自ら鎗を撚つて前み來り、大音聲にて下知しけるは、汝ら此三賊を擒るべし、若よくこれを擒る者あらば、我重く恩賞を行はん。彼三艘の船一向漕行ける所に、官軍の船後に隨て追來り、亂矢を放つこと、恰も雨の降がごとくなり。三阮是を見て急に船艙の内に入て、一片の青狐の皮を取出し、乃是を以て、亂矢を遮りぬ。官軍等が諸船、盡く先を爭うて追蒐來り、未だ二三里の灣港をも過ざる所に、親方の快船、飛が如く搖來り、一人の小卒黄安に告て云けるは、必ず此灣港の内に、入給ふことなかれ、某前日何濤に從つて、此内に入けるに、親方の兵殘らず、彼等に殺されしかども、某幸ひ葦の内に藏れ、這這命を脱れ、逃回りぬ。黄安問て云く、汝らが嚮に彼等が計に陷たる、緣故はいかんぞや。彼小卒答て云く、某向に船を進めて、此内に漕入り、纔半里許行し所に、遙向うより、二艘の小船漕來りしが、毎船五人の漢子乘けるを、某等力を併せて追蒐け、未だ二三里も過ざる

務中となり、猶又隣家近村にも、詳委く問けれ共、總て人皆かくのごとく語り申ぬ。林冲是を聞き潸然として涙を流し、最これを悲めり。晁蓋等之を聞て、共に悵然として嘆きけり。扨此より山陣には、只毎日人馬を練り、器械を調へ、專ら官軍を支べき備をなす。一日諸の頭領、聚義廳に在て、事を議して居ける所に、二三人の小賊、慌しく山に上て報じけるは、濟州府の官軍、凡一千餘り大小の船四五百艘に取乘て、今已に石碣村の湖中に屯しぬ。晁蓋これを聞て、大いに驚き、卽ち軍師吳用に問て云く、如何なる策を以て、官軍を破らんや。吳用打笑つて云く、兄長是を憂ひ給ふことなかれ、某自らこれに當るべし、古よりいへり、水來る時は土を以て掩ひ、兵來る時は將を以て迎ふとかや、此則兵家の常なり、某一つの計を行ふべし、とて、早速三阮兄弟に計を授て、かくのごとく〳〵と低言き、又林冲劉唐にも同じく計を授けて、這般々々と云含め、又杜遷宋萬にも計を示しけり。扨濟州の府尹は、團練使黃安、幷に一人の捕盜官に、兵一千有餘を與へて、梁山泊に差向しかば、團練使黃安は、已に人馬を領して舟に乘り、旗を飜へし、鼓を擊て、金沙灘に馳來る。漸金沙灘も近づきける所に、遙の水面より三艘の舟漕來る。黃安此船を見るに、每船に五人の漢子あり、四人は櫓を搖し、一人は船の頭に立ぬ。頭には絳紅布を戴き、身には紅羅襖を著せり。三艘の船の頭に立ぬる漢

る金銀財寶、多くこれを散して小賊等に分與ふ。此時且牛を殺し馬を宰て、天地神明を祭り、大に酒宴を設て、共に悦び賀し、一連に數日酒をぞ酌にけり。晁蓋又吳用等と商議して、堅く柵を排べ、陣を列ね、鎗刀弓箭盔甲等を造らしめ、專ら官軍を防んずる計をぞなしにけり。林冲熟晁蓋が動靜を見るに、能公にして、私の所爲なかりしかば、心中に是を悦び、一日晁蓋に告て云けるは、某山に上てより以來、妻子を山陣に迎へ取んと思ひしか共、王倫がなす所、諸事穩ならざりしかば、未だ其沙汰に及ざりしなり。妻子は今東京に流落て在けるが、久しく消息をも聞ざれば、曾て其死生を知らずして、是を憂ふること尤深し。晁蓋が云く、賢弟既に寶眷有て、東京に在ば、何ゆゑ早く是を迎へ取ざるや、汝快々書簡を修へて、使を馳せ急に是を迎へ、山陣に引取べし。林冲深く是を謝し、卽日書簡を修へて、兩人の小賊を已に東京に遣しけり。小賊遂に東京に赴き兩月過て山陣に歸り、乃ち林冲に告て云けるは、某ら直に東京の城下に至り、殿師府の前にて、張敎頭の家に尋行き、夫人のことを問けるに、夫人は高太尉がゆゑに、婚姻のことに苦められ、自ら縊れて死し給ひ、已に半載を經ぬとなり、張敎頭再三是を嘆き給ひ、一月以前病死し給ひぬるとなり、家內には獨錦兒とやらんと申す下女、剩りけるが、是も頃日夫を招きて家內に贅れ、夫婦專ら、渡世の營を

林冲なほ鼎の三脚を譬て、第三位に坐せしめけり。生必ずこれを辭し給ふことなかれ、とて、遂に公孫勝を推て、第三位に坐せしめけり。林冲なほ譲んとしける處に、晁蓋呉用公孫勝、身を起して云けるは、林頭領、再三再四、鼎の三脚を譬へ諭て命じ給ふ故、敢てこれ違ずして、三人同しく上座を汚しぬ、もし猶譲り給はゞ、某ら宜く別を告て、山を下るの外他なし、とて、三人等しく林冲を推て、第四位に坐せしむ。晁蓋又、杜遷宋萬に向て云けるは、兩頭領宜しく此次に坐し給へ。兩人の輩心中に想ひけるは、我輩武藝未熟にして、然も文才なし、しかじ自ら下つて座を譲らんには、とて、再三下り譲り、劉唐を請て第五位に坐せしめ、阮小二第六位、阮小五は第七位、阮小七は第八位に坐し、杜遷第九位、宋萬は第十位に坐し、朱貴は第十一位に坐す。梁山泊是より十一人の豪傑山陣を守り、山前山後總て、七八百の小賊あり、此日殘らず廳前に至て拜をなし、盡く左右に分れ立列る。晁蓋衆人に對して云けるは、看るごとく、今日林頭領我を扶け、山陣の主とし、呉學究を軍師とし、公孫勝も同じく公權を執て、林頭領等と倶に山陣を掌る、汝等も各其職に依て、山前山後の事を掌り、必ず疎失することなく、共に力を竭し、心を同じうして、堅く大義を守れ。衆人盡く頓首して命を受ぬ。晁蓋又山陣の左右に屋を建て、阮家の眷族を安居せしめけり。此日晁蓋彼奪ひ取たる十萬貫の金銀珠玉、竝に元來家内に貯へ置た

晁蓋を請て第一位の椅子に坐せしめて、廳の中央に一爐の香を燃き、林冲又向ひ前で云けるは、某は原來賤き匹夫にて、只鎗棒のことを曉すのみにして、學もなく才もなく、智もなく術もなし、今日山陣に天の幸ひを賜て、諸の豪傑大義に聚りしかば、尤舊日と同じからず、宜く吳用先生を請て軍師とし、乃山陣の兵權を掌らしめて、第二位の椅子を讓るべし。吳用が云く、某は村中の小儒、胸中に又世を濟ひ人を救ふの才なし、粗孫吳が兵書を讀といへども、未だ曾て半點の微功あらず、いかんぞ敢て此職に當らんや。林冲が云く、事已に此に到れり、必ず謙退し給ふこと勿れ、とて、再三吳用を推て第二位に坐せしむ。吳用辭こと能ず、遂に此議に相從ふ。林冲又云く、公孫先生は第三位に坐し給へ。晁蓋是を聞て、忽ち林冲に對して云けるは、林頭領、何ぞかくのごとく讓り給ふ、果して再三自ら下り給はゞ、我必一位の座をも退くべし。林冲が云く、晁天王差り、豈聞給はずや、公孫先生の芳名は、普く四海に流る、況や能兵を用ひて、計に富給ふ、又風を呼雨を呼の法、誰かよく公孫先生に及んや。公孫勝が云く、某頗風雨を祈るの法を曉すといへども、世を濟ふの才なし、豈敢て林敎頭の議に從はんや、願はくは林頭領自ら第三位に坐し給へ。林冲が云く、今遭官軍を破り給ひし良法、誰か先生にしかんや、眞に是鼎に三つの足を分つ、若其一つを缺ときは不可ならん、先

く、林教頭の言誰か敢て背く者有んや、願くは早く示し給へ。林冲此時、且座を改て語り申さん、とて、遂に一位の椅子をぞ下りけり。林冲吳用に對して、甚の言語を說出すや、次を讀ば知らん。

○梁山泊の義士晁蓋を尊とす

偖も林冲は、第一の交椅を下つて、諸の豪傑に對して云けるは、今晁保正義を重んじ財を輕んじ智仁勇兼備はり、天下の人皆其名を聞て伏せざるはなし、我今理の當然を以て、晁保正を山陣の主とすべし、列位の尊意はいかんぞや。諸の頭梁これを聞て、皆其意に同じければ、晁蓋が云く、此義不可なり、我始て山に上りて、豈此位を犯さん。林冲是を聞て、保正何ゆゑこれを辭し給ふや、とて、遂に晁蓋を推て、第一の椅子に坐せしめ、再三再四諫て云く、事已に此に至て、必ず辭し給ふことなかれ、とて、則諸人に向ひ、高らかに呼つて云けるは、今日我晁天王を以て山陣の主とす、もし從はざる者あらば、王倫を以て例とすべければ、早々亭下に出て拜せよ。此時諸人悉く亭下に來て晁蓋を拜す。林冲又再び晁蓋を請て、すなはち本陣に歸りければ、一山の人數悉く來て相聚る。林冲左右に命じて、許多椅子を聚義廳の內に設けしめ、乃

林冲王倫を斬て山陣の座位十一発を定む

し處に、晁蓋劉唐これを遮る。王倫此體を見て大に仰天し、忽ち土のごとく面色變り、高聲に呼りて云けるは、我心腹の者共は何に在や、早く來て我を助けよ。幾ばくの心腹これを聞て、急に王倫を救はんとしけれども、林冲が猛勇に怖れ、一人も近付ず。林冲王倫を捉へて、再三是を罵り、遂に刀を擧て王倫が首を刎けり。哀れなるかな王倫は、半世にして强盜をなし、今日林冲が手に死し畢ぬ。晁蓋等七人は、林冲が王倫を害したるを見て、各懷中より利劍を取出し手に持ち、威堂々として扣へ居けり。林冲は王倫が首を提げ、大音に呼りて云けるは、誰にても異議に及ぶものあらば、忽ち王倫を以て例とせん。杜遷、宋萬、朱貴これを見て、大いに怖れ、忙はしく地上に跪て云けるは、某ら心を傾けて、諸の豪傑に從ひ、聊犬馬の勞を施すべし。晁蓋ら急に三人の頭領を扶け起す。呉用自ら第一位の椅子を亭の中央に設け、再三林冲を推して坐せしめ、乃呼つて云けるは、今日林頭領を以て山陣の主とす、若伏せざる者あらば、卽座に首を刎べし。林冲是を聞て、同じく呼つて云けるは、呉先生差へり、某今日の事は、諸の豪傑尤義重きによつて、不仁不義の佞人を殺除けり、豈某敢て此位を圖んや、呉先生若此位を某に讓て、山陣の主たらしめ給はゞ、必ず天下の英雄に笑はるべし、縱令死すとも此位に坐することあるまじ、某今一句の言有り、列位某に從ひ給ふべきや。諸人が云

とき小人文にも通ぜず武にも達せずして、豈能山陣の主とならんや。吳用則ち晁蓋に向て云く、某ら山に上り、反つて兩頭領の好を壞ひぬ、宜く急に山を下るべし、とて、晁蓋ら七人已に座を立んとしければ、王倫がいはく、且暫く扣へ給へ、宴畢て歸り給ふべし。此時林冲は懷中より刀を取出し、直に王倫を望で跳かゝる。吳用早速手をもつて、かの合圖の鬚を撚りければ、晁蓋劉唐急に立て、虛しく林冲を攔り住んとす。王倫呼つて云く、林冲卒爾のことをなすべからず。吳用故意林冲を扯住て云く、林敎頭怒を休給へ。公孫勝僞つて云く、林頭領必ず我輩の爲に、王頭領を害して、大義を壞ひ給ふことなかれ。阮小二は便ち去て杜遷を揪ふ。阮小五は宋萬を支り。阮小七は朱貴を防ぐ。諸の小賊ども、此光景を見て大に驚き、只忙然と呆れたる許なり。林冲已に王倫を揪へて、大に罵て云く、汝は是落第の貧儒なりしかども、幸ひに杜遷に助けられ、尙且柴大官人の救に依て、今かくのごとく山陣を設たるにあらずや、然るに柴大官人我を薦め遣されし時も、これに背んと欲し、今日又諸の豪傑の來り給ふに、是をも赶囘さんとするはいかんぞや、汝は是賢を嫉み能を憎む佞人なり、汝を生て何の時の用にか中ん、今我汝が首を刎んに、好天命を知れ、とて、已に刀を閃かす。杜遷、宋萬、朱貴三人の輩は、勸解んと思ひけれども、豪傑らに扯住られ、動き働くことならず。王倫此時逃んとせ

乃ち晁天王の幕下に屬すべし、とて、彼一盤五挺の銀を取て、晁蓋に贈る。晁蓋が云く、某久しく、山陣には賢を招き士を募給ふことを聞及び、直に來て麾下に屬せんことを欲す、然れ共頭梁等某を用ひ給はずんば、又奈何ともすることなし、只宜しく別を告て山を下るべし、餞の賜は決して請申まじ、某乏しといへども、路費は多く腰に纒ひぬるゆゑ、さらに不足のことなし、望らくは速に賜を收拾め給へ。王倫が云く、何ゆゑ薄儀を辭し給ふや、某諸の豪傑を留めたくは候へども、山陣には糧少く屋希なるゆゑ、恐くは後反つて豪傑等を困苦せしめんことを察して、留申さゞるなり、必ず誤つて恨給ふことなかれ、といまだ云も罷らざるに、林冲雙眼を活と睜開き、大きに吼つて云く、王頭領汝は我始て山に上りし時も、糧少く屋少なりと云て、幾乎に留まじきとしけるが、今日晁保正來り給ふにも、又此のごとき言を云は、是何の道理ぞや。此時吳用林冲に對して云く、林敎頭且怒を息給へ、某ら來て山陣の好を壞ふこと、大いに不可なり、今日王頭領、禮を以て我輩を囘し給ふことなれば、我輩少しも恨る所なし、頭領必ず舊日の好を傷うて、王頭領と諍ひ給ふことなかれ。林冲が云く、王倫がなす所は笑の內に刀を藏し、言淸く行濁れり、我今日は彼を饒しがたし。王倫是を聞て大いに怒て云く、汝禽獸何ぞかくのごとき無禮をなすや。林冲も亦彌恚あらく、汝がご

乘の轎を擡て馳來り、乃ち七人の豪傑を請て乘しめ、直に水陣の前に至る。各輿を下り、七人の輩四方を顧るに、其風景寔に罕なる所なり。王倫、杜遷、林冲、朱貴等は親自亭の外に出て相迎へ直に延て亭に上り、賓主の禮畢て、座已に定まる。王倫は四人の頭領、杜遷、宋萬、林冲、朱貴等と共に、左の方に座を列ぬ。晁蓋は六人の豪傑、呉用、公孫勝、劉唐、三阮兄弟等と共に、右の方に座を列ぬ。此時大いに酒宴を設け、各盃を執て相勸め、酒已に數巡に至りしかば、晁蓋先王倫に對して、義を交へ盟を結ばんことを相求む。王倫是を聞て左右の返答にも及ばず、只世上の閑談を以て支吾し、顏色頗る變じけり。呉用私に林冲をみるに、林冲眼を睜開て一向王倫を瞅み、怒る顏色漸面に露れけり。酒已に闌にして午の下刻に至りし處に、王倫左右の小賊に命じて、携出よ、と云ければ、小賊等命を承て、奧を望んで走り入る。晁蓋らこれを聞て、何を携へ來るやと、疑はしく思ふ所、良久しうして、一人の小賊、大盤の中に、五挺の大銀を盛て捧げ出る。王倫則身を起して、晁蓋に對して云けるは、某幸ひに諸豪傑の、來臨を蒙りしかども、山陣元來地窄く、屋少なれば、いかんぞ能諸の豪傑を留め申さんや、某聊薄儀を備へて餞を表す、冀くは此銀を笑納し給ひて、何方になりとも、大陣に駕を移して、人馬を快く歇め給へ、然らば某使者を以て、貢を獻り、

二編　巻之十八

○晁蓋梁山にて小き泊を奪ふ

且說七輩の豪傑等、林冲を送り客館に入て、未だ須臾ならざるに、はや一人の小嘍囉王倫が命を領じて客館に到り、七人に見えて云く、今日王頭領諸の豪傑を水陣の亭に邀て、酒宴を開んとなり、宜く早々來臨を惠み給へ。晁蓋が云く、忝く少刻伺候致さん、とて、使の小賊を回し、吳用に問て云く、吳先生今日の參會、其吉凶如何ぞや。吳用打笑て云く、保正心を安んじ給へ、今日の參會、保正必ず、當山陣の主と成給ふべき發端なり、林敎頭已に王倫を殺さんと思ふ心あり、萬一も若林冲遲疑することあらば、某此三寸不爛の舌を以て、林冲が心を勵し、氣を發すの言を談話の內に含せて、終に林冲をして、王倫を害さすべし、衆皆身邊に刄を隱して持たまへ、只某が手を以て鬚を撚るを相圖と定め、各齊く力を併せ給へ。晁蓋らこれを聞て心中に悅び、已に辰の下刻に至て、山陣より邀の使、凡三五度に及ぬ。此時晁蓋等七人は、各懷中に刄を藏し、裝束已に完りければ、宋萬自ら客館に至て相迎ふ。小賊等七

かく早朝來て、心底を語れり、今日もし王倫一言半句にても齟齬することあらば、某忽ち行ふべきことあり。晁蓋が云く、林教頭かくのごとく、愛憐を垂給ふ上は、諸事只顧林教頭を賴み申なり。吳用又故意林冲に對して云けるは、林頭領もし某らが爲に、王頭領と顏を變じ、舊情を傷ひ給ふことあらば、某ら豈よくこれに當らんや、某らは只留るべきことならば、則留り、去べきことならば、則去ん、何ぞ敢て再三教頭を勞し申さんや。林冲が云く、先生の言差へり、諺にも豪傑は豪傑を愛し、猩々は猩々を愛すとこそ申なり、王倫がごとき小人、畢竟何の用にか中らん、諸事は某が方寸の間にあり、諸の豪傑先心を寬げ給へ、必ず退悔の念を起し給ふことなかれ、とて、遂に晁蓋等七人に別れて、館外に出しかば、七人の豪傑も、ひとしく館外まで送りけり。林冲が腹藏する所、畢竟いかん。次の巻に詳なり。

此卷に出たる詩句に、趙官家と云ひ、又趙王君とあるは、宋の世にて天子姓は趙なり。高俅はさらなり、梁中書蔡太師のごときも、賄賂に耽り下を苦め、政治不正の賊官たり。其下に立つ何濤と巡檢との首を斬て、眞の忠臣我們直に宋の天子に獻ぜんとの意なり。又水滸傳舶來の本には、何觀察とあり、觀察は官名にて、緝捕使何濤は、此度官軍を向らるゝ、捕盗の觀察使たる故に、何濤を何觀察と書けり。

ず、實に公の道を以て論ずる時は、王頭領、第一位を教頭に讓るべきことなり、教頭此座に移り給はんは、天下の公論にして、柴大官人の所存にも背かざる道理なり。林冲が云く、某何ぞ敢て先生の高談に當らんや、某向に大罪を犯し、已に身を寄べき所なきゆゑ、其節柴大官人も、別して愍み深かりけれども、恐らくは後日柴大官人に禍を受しめんことを憂へ、乃自ら願うて此山に登れり、只今日身命だにも恙なくは、某が爲には大いなる幸ひなり、全く座の高下を爭ふにも及ぶべからず、然れ共只恨らくは、彼王倫心術定らず、言語誠ならず、動不動信を失ひ約を背く、眞の大丈夫とするに足らず。吳用が云く、王頭領は原來人を迎へ物を交へて、一團の和氣あるとこそ聞及びしに、何ぞかく心窄きや。林冲が云く、今日山陣に天幸ひを賜て、諸の豪傑至り給ふ、則是錦に花を添へ、旱に雨を得るがごとし、然るに王倫賢を妬み能を惡む意を懷けり、保正昨夜大勢の官軍を殺し給ひしことを語られし故、彼はや心中に其勇を妬み、豪傑を留めまじき模樣差現れ、只顧躊躇して決せず、遂に諸の豪傑を關外に息ましめ、山陣に留めざるなり、吳用が云く、王頭領かゝる心あらば、我輩一刻も早く他所に行き身を藏すべし。林冲が云く、諸の豪傑、何ぞ必ず這樣の心を生じ給ふことなれ、某自ら此豪傑を、各山陣に留め申すべし、某只豪傑の山を辭し、囘り給はんことを恐るゝゆゑ、

外に出ぬ。林冲が云く、某東京に在しとき、朋友と禮節を交へて、誤つことあらざりしかども、今日はその位に居せざるゆゑ、尊顔を拜すといへども、多く禮を失へり、是によつて今朝も客館に伺候し、聊一點の實を表す、望むらくは、保正某がこゝろをさつし給へ。晁蓋これを謝して云く、某深く教頭の厚意を感ず。吳用又林冲に問うて云く、頭領昔日東京に居給ふとき、豪傑の名譽遠近に振うて、人皆尊敬すとこそ聞けるに、何故高俅が所爲に、無實のつみに陷され給ふや、其後又滄州にて大軍草料場を燒けるは、高俅が所爲とつたへ承りしなり、たゞ知らず、たれ人の樞機にて此山には上り給ふぞや。林冲答て云く、もし高俅が某をつみにおとしたる一節を語るときんば、千恨萬怨立處に生ず、然れ共未此仇を報ずること能はず強て氣を忍ぶのみなり、某此山に登りて、身を容し根本は、都て柴大官人の薦めなり。吳用が云く、柴大官人と宣ふは、世間の人都て小旋風柴進と稱る人にあらずや。林冲が云く、則其人なり。晁蓋が云く、某久しく諸人の傳へ云を聞に、柴大官人は義を重んじ、財を輕んじ、專ら四方の豪傑と交を結び給ふとなり、況や大周皇帝の嫡孫にて、其家貴きよしを承りぬ、何とかして一遭見え度ことぞかし。吳用又林冲に向つて云く、教頭もし武藝人に勝れ給はずんば、柴大官人も、妄に此山に薦遣はさるゝことあるまじ、某毛頭詐て教頭を稱美するにはあら

倫が模様を見て、自ら不平の心を生ぜり、頻に眼を怒して王倫を睨ぬ、某林冲をみるに、反て我が輩を憐むの心深し、重て對面に、某只一言を以て林冲に氣を添て、終に林冲をして王倫を殺さしめん。晁蓋が云く、何事も只吳先生の計を賴とす、宜く行うて身を安んじ、命を立しめ給へ、とて、其夜は列位歇けり。翌日早天に家人來て、晁蓋に報じて云く、林敎頭今館外に至て保正を訊ひ給ふ、早く是を迎へ給はんや。吳用これを聞いて、保正に對して云く、林冲今こゝにいたるこそ幸ひなれ、我宜く計を行ふべし、とて、七人忙はしく出て相迎へ、乃ち林冲を延て、客館にいたりければ、吳用先林冲に謝して云く、某等いはれもなく、樞機もなく、卒爾に山に上り、多く厚愛を沐むること、誠に雀躍のいたりなり。林冲が云く、某大に貴客を敬ふ心ふかしといへども、原より其位にあらざるゆゑ、みづから尊敬を失へり、願くは明かにこれを察して、不敬のつみをゆるし給へ。吳用が云く、某ら不才たりといへども、又草木にもあらず、豈林頭領の憐愍をたれ給ふを見ざらんや、別して林頭領の洪恩を感ずることと淺からず。此時再三讓りて林冲を上座にこひけれ共、林冲決して上座につかず、つひに晁蓋をおして上座につかしめ、林冲は其つぎに座を定めければ、吳用等六人は、一行に座をつらぬ。晁蓋が云く、某久しく林敎頭の大名を聞及びぬ、想はず今日對面をとぐること、喜び望

蓋にすゝめ、飲酌已に晩に至てをはりしかば、王倫らは晁蓋呉用ら七人の輩を、關下に送て客館に歇ましむ。晁蓋心中に悅び、乃呉用等六人に對していひけるは、我輩已に大罪を犯し、何に身を安んずべき所なし、若王頭領かくのごときの憖みを垂るにあらずんば、我輩竟に命を立る所を失ふべし、誠に王頭領の大恩忘るべからず。惟呉用は此言を聞て、頻に冷咲ふ。晁蓋これを見て、乃問て云く、呉先生は何ゆゑ只顧冷笑ひ給ふや、もし事あらば、速に知せ給へ。呉用がいはく、元來保正は性直にして、事を一味に信じ給ふ、彼王倫何ぞ我輩を留申さん、保正は只彼が詞を聞て彼が心を見給はず。晁蓋が云く、彼が心を看ざるとはいかん。呉用が云く、保正未だ悟り給はずや、今朝肇て相まみえし時は、王倫頗る信實の情を交へけるが、其後保正、又彼官軍等を殺したるを語て、三阮兄弟が強勇を吹嘘し給ふゆゑ、王倫是を聞て顏色忽變じたり、尤口中には問つ答つ始に異ならざれ共、心中には反て恐れ懼るゝ意あつて、只顧躊躇して、我輩を山陣に留る意あらず、いかんぞ今日早商議を定め、列座の次第を究べきことなり、然るに未だ其沙汰にも及ばざるは、其心必ず決定せざる所あり、彼杜遷宋萬兩人の者は、原來鄕生長の輩なれば、曾て客を欵待ことをしらず、獨林冲は本京の禁軍教頭ともなりし者なれば、はたして能諸事を曉せり、今止ことを得ずして、第四位に座す、今日林冲王

晁蓋三阮が葦討手の官軍を鏖にす

は晁蓋を引て、金沙灘に至り、竟に此所より岸に上りければ、又十人の小賊、山を下て相迎へ、直に山陣に導て關前に至る。此時に王倫等四人の頭領は、自ら關を出て、晁蓋等七人を迎へければ、晁蓋ら忙はしく禮を行ふ。王倫も又急に禮を返して云ひけるは、某嘗て晁天王の大名を聞こと、恰も雷のみゝに轟がごとし、今日何の幸ひにか、山陣に來臨を恵み給ふや。晁蓋らが云く、某は是書史を讀ざる愚輩なり、今日事已に危急に臨しゆゑ、下愚を顧ず敢て來て山陣を汚す、願くは頭領の帳下に留て、一小卒ともなし給へ、もしよく頭領の憐を沐ば、某拙しといへども、犬馬の勞を獻らん。王倫が云く、且山陣に入て、疲をも慰め給へ、何ごとも緩々と商議いたさん、とて、乃晁蓋らを引て山に上り、遂に陣中の聚義廳に至りしかば、王倫再三譲て、晁蓋を廳に上らしむ。晁蓋深く是を辭しけれ共、終に辭すること能はずして、晁蓋ら七人、先堦に上て、右のかたに一連に立並ぶ。王倫ら五人は、ひだりのかた一行に立列なる。各禮已にをはりければ、賓主相分つて座をなし、大いに酒宴を設けて、飲酌に及び、酒すでに數盃巡りければ、晁蓋則賀儀の金銀を奪取り、官軍を鏖にせし次第、一々微細に語りて、彌々山陣に跡を留んことをねがふ。王倫是を聞て、忽駭然として、心中に躊躇し、半時許はこゑも出すこと能ず、良久しうして、僅に一兩句相こたふ。はや盃を取て、再三晁

て、鬪のことを問ければ、晁蓋答て、次第一々相告ければ、吳用等是を聞て、大に悅び、乃船を揃へて梁山泊に漕つけ、諸人陸に上て直に旱地忽律朱貴が酒店に至る。朱貴は許多の人來て山陣に入しと云を聞て、忙しく出て相迎ふ。吳用則朱貴に對し、委しく來歷を語りければ、朱貴大に悅び、逐一都て相見え、乃ち延て廳上に至り、各座已に定りければ、朱貴早速酒宴を設けて、諸人を款待し、酒數盃巡りければ、朱貴則一張の弓に、一枝の響箭を搭て、對向の蘆の中を望んで射入けるに、響箭の到る所、はや一艘の小船に五六人の小賊等打乘て、朱貴が廳の下に搖來る。此響箭を以て相圖と定む。朱貴もし山陣に用有時は、乃此響箭を放つ。此響を聞時は、小賊忽ち船を漕て馳來ること定例なり。扨朱貴は一通の書簡を修へて、晁蓋等七人が山陣に加らんと欲する來歷を述べ、遂に小賊に與へ山陣に注進す。朱貴又牛を宰り、羊を殺して、豐に酒宴を新めて、暮に至るまで飲酌をなし、其夜は衆皆朱貴が廳に歇けり。翌日早天に朱貴一艘の大船を備へ、乃ち晁蓋を請て舟に乘せ、已に一時ばかり漕しかば、はや一つの水口に至りぬ。かゝる處に岸の邊に、金鼓のおと大に響く。晁蓋これを見るに、七八人の小賊、四艘の哨船に、齊しく櫂を用ひ搖來り、乃ち朱貴に見えて慇懃に禮をなし、再び飛がごとくに馳かへる。此四艘の舟は、先山陣に注進せんが爲、已に此所にて動靜を伺ひしなり。朱貴

の天王晁蓋は、汝等がごとき、賊官等が業に、困らるゝ者にあらず、我輩又曾て汝が濟州に手を出さず、聊も犯したることなし、汝も又重て我村を犯し、自ら死を取ことなかれ、汝が府尹ごときは、小州の鼠輩なれば、原來云に足ず、縱蔡太師自親數十萬の軍馬を引て來るとも、我又蔡太師を三十鎗擲て、身を粉にし骨を碎くべし、汝濟州に歸らば、我輩が虎威龍勢を、賊官等に告知らせて、再び來らしむることなかれ、しかも我村へ指もさすべからず、此處には曾て大路なければ、我今阮小七を以て汝を路口まで送らしめん、とて、則阮小七に命じ送らせければ、阮小七一艘の快船に、何濤を載て、直に路口迄送出で、すなはち又何濤を罵て云けるは、此より一直に行ば、即一つの道あり、諸の官軍共悉く皆斬死されたるに、いかんぞ汝一人のみを恙なく回さんや、我今汝が耳を切割き後日の表證とし、又濟州の賊官等に咲しめん、とて、頓て刀を拔て二つの耳を割ければ、血大に滾流れ、滿身すべて紅に染けり。阮小七これを見て、呵々と打笑ひ、乃何濤が繩を緊と揪て、遙の岸に衵上しかば、何濤は官軍鏖になりし中に、一人命を助るを悅で、耳の痛も打忘れ、自ら一筋の道を尋ね覓め、直に濟州を望で回りける。扨晁蓋、公孫勝、三阮兄弟は、十餘人の漁夫を引て五六艘の小船に乘り、直に李家道口に漕來つて、吳用劉唐が船に尋遇ひ、乃船を攏て一處に會合す。吳用晁蓋に對し

助け燒ければ、官軍共大いに噪ぎ、盡く岸に跳上つて、命を保ち身を脫れて奔走す。然れ共四方皆蒹葭生茂て、一筋の旱路もなかりしかば、衆皆大いに迷ひけり。此時岸の上なる蘆葦、また刮々雜々と燃上る。官軍等水陸都て走る路なく、悉く爛泥の內に亂れ入り、各茫然として立並びぬ。又火の光の內に、一艘の快船飛がごとくに馳來る。船の尾には、一人の漢子櫓を搖し、船の頭には一人の先生、𦩷の上に坐し、手には明晃々と一挺の寶劍を提げ、大に呼て云けるは、官軍等一人も走ることなかれ。官軍等これを聞て、いよ〳〵魂を落すばかりなり。葦の東岸より、又兩人の漢子、四五人の漁夫を引て、各手には、明晃々たる鎗刀を提馳來る。蘆の西岸よりも、同く兩人の漢子、四五人の漁夫を牽し、各手にはまた、鎗刀を揮て馳至る。此輩已に器械を擧て搠かゝり、暫時に官軍爛泥の內に搠伏らる。東岸の兩人は、乃是晁蓋と阮小五なり。西岸の兩人は、阮小二阮小七なり。快船の上の先生は、便ち今怪風を祈りたる、公孫勝なり。此五人の豪傑十餘人の漁夫を引て、各勇を奮ひ、力を併て働きしかば、諸の官軍共一々皆此時斬盡し、只一人何濤を綁めて、船艙の內に入置けるが、又此時引出し、阮小二大に罵て云く、汝は是濟州に於て民を害する毒蟲なれば、我もと汝を殺すべけれ共、我反て汝を助けて、濟州に回さんに、汝くはしく府尹等に對して、我輩が、猛勇を語るべし、東溪村

彼捕盗巡検は、諸官軍等と共に船を岸の邊に泊て、何濤が回るを待けれ共、良久しく消息なかりしかば、巡檢則官軍等に對して云けるは、何濤向に兵等が事を辨ぜずとて、自ら路を覓に往けるが、時刻已に移れ共、未だ歸らざるはいかんぞや。此時初更の左側にて、星光天に滿て一朶の雲もなく晴しかば、諸の官軍皆船の兩傍に、袖を列ねて納涼居ける處に、忽ち一陣の怪風起て、沙を飛し石を走らせ、水を捲浪を起す。諸の官軍ども大に驚き、這はいかに、と騷動す。此時諸船の攬索一度に發喇々と斷ければ、官軍等益仰天し、急に纜ぎ住んと立騷ぐ所に、後の方に唿哨の聲頻に響く。官軍これを恠み、衆皆首を擡て蘆の內を望み見るに、其側より一道の火の光直に閃き出づ。諸人大に膽を消し、こはいかなる恠異ぞや、我輩が一命こゝに於て休るべし、と未だ云も了らざるに、彼官軍等が乘たる大小の舟、凡四五十艘、怪風に吹亂され、彼に撞此に挪り、已に二三艘の小船眼前に沈みけり。那火の光漸近く進み來りしかば、諸人これをみるに、原來數艘の小船各船の上に焚草を裝み、恠風に乘じ一度に火を放ち、直に官軍等が船を望んで、燃來る。官軍等これを避んと欲して、急に船を漕開かんとせしか共、此所瀞港の內にて路窄く、又避行べき所もなかりしかば、一向猶豫して居たりける處に、かの火船已に馳至て官軍數十艘の船を散々に燒掃ふ。原來水の中にも、幾ばくの人あつて、力を

鬪を助くべし、と先兩人の兵を岸に上せける處に、彼漢子急に鋤頭を擧て二人の兵を水中に打落しぬ。何濤是を見て、大に驚き慌て、只呆れたる計なり。斯る所に水底より一人の漢子現れ出で、何濤が兩足を取て、只一扯に水中に扯入けり。舟の上にある幾ばくの兵、是を見て大に仰天し、急に漕回さんとする所に、彼鋤頭を拿たる漢子、忙しく追來つて、舟の内に跳乘り、卽鋤頭を擧て、船中の兵一々水中に打籠けり。何濤は水中に扯落されし、水底に沈けるが、彼漢子頓て何濤を倒に挽りて岸に上り、腰に纏うたる索を解取て、遂に何濤を綁めけり。彼水中より現れたる漢子は、乃是阮小七なり。彼鋤頭を持たる漢子は、則阮小二なり。此兩人の兄弟、何濤を罵て云く、我三人の兄弟は、元來人を殺し、火を放ことを好む、汝等がごとき輩、縱何萬人來とも、何の怕るゝことかあらん、然るに汝官軍を引來て、我輩を犯さんとするは、汝が命を休る所なり。何濤が云く、某は上命を蒙て、此所に至れり、いかんぞ私に來て豪傑等を犯さん、願くは兄弟の豪傑憐みを垂給へ、我家には猶八十歳の老母あり、もし我いかん共なるならば、老母は養はるゝ者なく、終に街に徘徊して、乞食をなすべし、望らくは明にこれを察して、命を助け給へ。兄弟が云く、且汝を粽の如く捆て、船艙の内に入牢さすべし、とて、再び舟に乘て、何濤を艙の内に入れ、兄弟各一艘の船に駕し漕出けり。扨

に道を求て來るべし、とて、蘆の内に進ましむ。二艘の小船已に蘆の内に漕入り、凡二時ばかりを經ぬれ共、更に消息なし。何濤大に待わび、又二艘の船に、各兵五人を乘せ漕入しむ。此船すでに漕入又一時あまり過けれども、同く音信なし。何濤が云く、彼葭の内に入し者共は、久しく我手下に在て、物馴たる輩なるが、今日は何ゆゑ、斯事を辨ぜざるや、もはや歸るべき比なるに、とて、頭を伸して又良久しく待けれ共、一艘の船だにも歸ることなし。此時天色漸黄昏に至りければ、何濤大に憂愁して云く、若此所に在て岸の上に至らずは、恐らくは賊らが詐の計に中るべし、我自ら路を覓て來るべし、とて、一艘の快船に乘り、六七人に楫を棹せて、飛がごとく葦の内に進入り、凡五六里計往ける處に、傍の岸上に、一人の男子鋤頭を提馳來る。何濤乃是に問て云く、汝は何者ぞや、又此所はいかなる所ぞや。彼漢子答て云く、我は此村に住居する百姓にて候、此所は則斷頭溝と申て道なき所なり。何濤が云く、汝もし二艘の小船の此所に至るを見ざるや。彼漢子答て云く、二艘の船と云は、かの阮小五を捉へんとする船ならめ。何濤が云く、汝何を以てこれを知れりや。彼漢子が云く、總て四艘の船、今專ら烏林の内に在て、阮小五と相鬪ふ、此ゆゑに某是を知れり。何濤が云く、烏林と云は此所より幾ばくの路ありや。彼漢子が曰く、烏林は乃此前面にあり、路最近し。何濤是を聞て、

ねの頭に立けるが、頭には青箬笠を戴き、身には綠簑衣を著し、手には長柄の鎗を撚り、口にはまた擅に歌をうたふ。其うたにいはく、

老爺生長石碣村　稟性生來要殺人
先斬何濤巡檢首　京師獻與趙王君

何濤巡檢ならびに諸軍、此歌を聞て大に膽を消し、彼は又何者なるや、と諸人騷動する處に、一人の官軍が云けるは、彼鎗を撚り歌を唱うたる者は、乃是阮小七なり。何濤これを聞て、卽官軍等に對して呼りけるは、汝ら力を併て先彼賊を捉よ、必ず走らしむることなかれ。阮小七遙に此言を聞て、呵々と打笑て云けるは、汝ら潑賊小頃後悔することあらん、とて、再び船を回して、灣港の内に搖入しかば、諸の官軍共、大に喊き叫で追來る。阮小七飛がごとく搖行き、已に灣港の内に、半里計馳入ける處に、官軍等も相續て追至りしに、灣港甚だ窄きゆゑ、船を進むること能ず、都て岸の邊に漕著け、何濤則岸に上て、此所をみるに、茫々蕩々として、四方都て蘆葦生茂り、只一筋の旱路もなかりけり。何濤心中に疑ひ、乃ち彼隣家の漁夫に、此所を問ければ、漁夫答て、某ら當所に居住すといへども、蘆葭の内にいかやうなる所有やらん、曾て是を知らず、と。何濤これを聞て、彌疑ひ惑ひ、二艘の小船に、各兵三人を乘て、急

はく、

打レ魚一世蓼兒注　不レ種青苗不レ種麻
酷吏贓官都殺盡　忠臣報答趙官家

何濤ならびに、諸軍これをきいて大に驚き、何者なるにや、と對面を遙に看去に、一人の漢子、一艘の小ぶねに棹さして、うたを唱うてすゝみ來る。官軍の内これを識認たる者有て、乃指ざして云けるは、かの者便これ阮小五なり。何濤これをきゝ、急に手をあげて、則諸のふねを招きければ、諸人力を併て、むかひすゝみ、各器械を挺て、我先にと相むかふ。阮小五これを見て、大いに笑ひ罵て云く、汝官軍ら百姓を害する大賊、何ぞかくのごとく恐を顧ず、敢てわが村に來て虎の鬚を捋や。何濤が背後に射人の達者ありけるが、此惡口を聞て大にいかり、きふに弓箭を取て打搭へ、滿月のごとく挽紮つて、つるおと高く兵と放つ。阮小五弦音をきいて、忽ち身を倒にし、水中に跳入りけり。官軍これを捕んと欲して、忙しくふねをすゝめしかども、阮小五は遂に水底に淬入して、かげも形もみえざりけり。何濤再び諸船に下知し、纔に半里ばかり漕ぎゆく所に、よしの内に又唿哨のこゑきこえしかば、諸のふねども急に、撐開きて、前面をみるに、兩人の漢子、一葉の魚船にさをさして馳きたる。一人の漢子は、ふ

晁蓋又阮小五、阮小七にも、計を授け、かくのごとく〳〵、敵を迎ふべし、とて、二艘の小船に乗しめて遣しけり。さて何濤は捕盗巡検と共に、軍勢を率して、石碣村の近邊に馳抵り、湖中に在所の船共、悉く奪ひ取り、水戰に慣たる兵若干を選出し、水路より進せ、則水陸並び起て發向し、遂に阮小二が家の前に至て、大に賊の聲を揚げ、諸軍先を爭て、家内に亂れ入り、此彼捜せども、早人影もなき空屋なり。何濤これを見て大に呆れ、隣家の漁夫を捉て、阮小二が事を問ければ、漁夫の云けるは、阮小二が往向は知らざれども、彼が二人の弟、阮小五、阮小七が家、各湖泊の内にあり、舟にあらずんば往こと能はじ。何濤これを聞て、巡検と商議して云く、此湖の内には港瀆多くして路逕少からず。抑且水の深さも、未だ是をしらず、若軍勢散々に成て、備正しからずんば、又怕らくは賊の計に中るべし、且戰馬共を聚て、盡く這村に預け置き、乃ち數箇の人を留めて是を守らしめ、我輩は總勢一手に成て舟に乗り、宜く首尾を連ねて馳行べし。巡檢然り、と同じ、急に總勢を合せ、盡く皆舟に乗る。此時湖中にて奪取たる舟、凡千餘艘なり。諸の官軍共、一どに船を漕いだし、たゞちに阮小五がいへを望で馳來る。かゝる所によしのうちに嘲うたふ聲あり。官軍共みゝを側めてこれをきくに、其歌にい

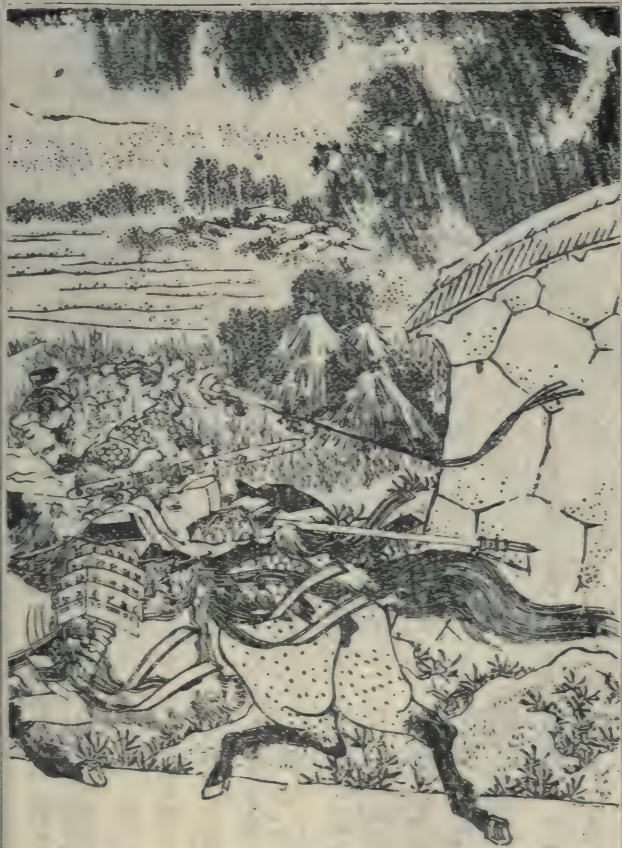
○林冲水寨に大に火を併す 火併の二字もゆる火のことと見るべからず

偖も晁蓋は、公孫勝とともに數十の家人を從へ、已に石碣村の程近く成ければ、三阮兄弟はや途中に出て相迎へ、遂に晁蓋を導て、石碣村に歸り、七人の豪傑都て阮小五が家に在て、梁山泊に入べき計議に及ぶ。呉用が云く、今李家道口に、彼旱地忽律朱貴と云者、酒店を開て、專ら四方の豪傑を接ゆ、若梁山泊に入んと欲する者は、先彼が店に至て來意を達す、我輩今船を催し、彼所に馳行き、委細朱貴を賴て山陣に入べし。晁蓋是を聞て尙商議半なる所に、三四人の漁夫、慌しく馳來て告けるは、若干の官軍人馬當村を望で寄來る。晁蓋躍り起て云けるは、彼又此所に追來るぞならば、我輩爽に一戰を催し、潔く討死すべし。阮小二が云く、いかんぞ討死するまでのことやあらん、保正必ず憂へ給ふことなかれ、某自ら馳向て彼等を過半水中に引落し、容易是を討取べし。公孫勝が云く、列位騷ぎ給ふことなかれ、且某が手段を一見し給へ。晁蓋兩人が勇みを見て、心中に悅び、乃又劉唐に向て云けるは、汝は呉先生と倶に家財等を舟に裝み、先立て李家道口に馳て相待べし、我輩は官軍等が勢を試て、後より少頃來るべし。阮小二乃二艘の舟を浮べ、家財及眷屬共盡く載しめければ、呉用、劉唐

上は、再び捕ふとも易かるべし、且白勝は彌緊く牢中に入置べし、とて、府尹重て何濤を呼で云けるは、汝は再び石碣村に馳向つて、晁蓋等七人の賊を、急に捉へ來るべし、と命じけるゆゑ、何濤は直に役所に來り、諸の軍卒等と、賊を捉ふべき計を商議しけり。時に軍卒等申けるは、石碣村湖渺々として、然も梁山泊に通じ、都て是茫々蕩々たる蘆葭の裡の水泊なり、若多くの人馬戰舟を得ずんば、誰か敢て彼所に馳て賊を捕へ得んや。何濤これを聞て、尤理なり、と再び府尹が聽前に至て、府尹に告て云く、彼石碣村は本渺々たる湖にて、遙に梁山泊に相通じ、週廻は都てこれ葦漫々と生茂り、常にだも閒賊在て人を劫す、いはんや日者はまた許多の强盜來て、梁山泊の内に水陸陣を列ね、旁堅固に相守る、若大勢の人馬を引て馳ずんば、いかんぞ能、賊を捕へ申さんや。府尹が云く、果して汝が云如くならば、又一人の捕盜巡檢を汝に相添へ、乃ち五百の人馬をさしむけ、汝と倶に力を倂しめ、賊を捕はしめん。何濤命を聞て大に悅び、又役所に來り、急に精兵五百人を撰出し、各器械を準備しむ。翌日彼捕盜巡檢、已に濟州府の文書を領じ、何濤と共に五百の人馬を引て、遂に濟州城を打出で、直に石碣村を望んで進發す。此合戰いかんぞ、次を讀で明ならん。

を問けるに、初の間は抵頼しかども、痛く策れ、これに勝かね、遂に白状しけるは、向に六人の輩來て商議しけれども、某らこれを識認ず、只其内一人は、當地に於て讀書の先生たる呉學究と云者にて、原來面も識認候、今一人が名は公孫勝一清先生と號す、又一人は大漢子にて姓は劉、名は唐と申す、此外三人の輩は呉學究が語らひ來り、姓は阮とやらん申し、石碣村に住し魚を釣る漁夫と承りぬ、本同胞の兄弟三人と覺候、晁蓋今彼等が家に落向きたる事もや候はん、是則某らが實情、曾て詐る所なし。知縣是を聞て、兩人の家僕を何濤に交割し、則一通の返文を修て、濟州の府尹に呈す。何濤は此返簡と兩人の家僕を請取り、諸の軍卒と倶に、連夜に馳回り、濟州府に至りて府尹に見ゆ。何濤先府尹に訴へて、晁蓋が逃去たる事、及び兩人の家僕が白狀の次第、一々詳に語て、彼返文を呈す。府尹是を聞て、既にかくのごとくんば、再び白勝を引出し、阮氏兄弟が來歴を問べし、とて、遂に又白勝を策て、阮氏兄弟が事を問ければ、拷問に勝ず、乃白狀せしは、彼阮氏兄弟が名は、兄を立地太歳阮小二と號し、次を短命二郎阮小五、次を活閻羅阮小七と號し、三人都て石碣村に住し候。時に府尹又問ふ、此外三人が姓名はいかん。白勝告て云く、一人は智多星呉用、一人は入雲龍公孫勝、又一人は赤髮鬼劉唐と申す。府尹是を聞て云けるは、既にかくのごとく、落著分明なる

て云けるは、彼賊究て猛勇にして、倘能奔走す、いかんぞ追上ことを得んや。是に於て縣尉も衞計盡き、兩人の都頭と倶に、再び晁蓋が家の門前に至る時、すでに四更の天氣なり。何濤は待侘て在けるが、諸の人數終夜虛しく騷動して、一人の賊をも捕へ得ざるを見て、大に苦で云けるは、某特々當地に至り、一人の賊をも捉ず、いかんぞ再び濟州に回て、府尹に見えんや、とて、再三後悔に及びけり。縣尉は幾ばくの隣家を捉へて、直に鄆城縣を望で馳回る。當時知縣は、終夜書房の内に坐し、只顧東溪村の消息を待ける處に、賊こと〴〵く逃去て、只幾ばくの隣家を捕へたると聞て、心中大に憂ひ、乃隣家の者共を、阼堦の下に呼て、晁蓋が往向を問ければ、諸の隣家荅て、某らは皆晁蓋と同村に住すといへ共、遠きは三五里を離れ、近きは一二里を隔て、常に彼家に往來する輩は、都て鎗棒を使ふ者共なり、晁蓋が爲人にて、此般の大罪を犯さんとは、夢にも存寄候はず、彌彼が往向を求んと欲し給はゞ、畢竟晁蓋が家人を捕へてこそ訊ね給へ。知縣が云く、彼が家人は、盡く從ひ行しにあらずや。隣家が云く、家人の内、故鄕に歸らんと欲する輩は、皆留て猶此間にあり。知縣是を聞て、早速捉捕の者を遣し、乃隣家等を作眼として、急にこれを捉へしむ。よつて忽ち東溪村に至て、兩人の家僕を捕來りて、廳前に引渡す。乃知縣是を引居て、晁蓋が往向、及び六人の從賊が姓名

知縣
勢を
向見
蓋と
捕しひろ
宋江時を
迯し是
を
おどろ

三人の賊東の小路を望んで逃けるに、雷都頭早く是を追蒐給へ。雷橫これを聞て、再び兵を引て東の路に馳向ふ。朱仝は晁蓋が後に從て馳けるが、漸火把の光も遠く隔て、晁蓋が形も見えざりしかば、今は已に心安しと思ひ、詐て跌き倒れたる體にもてなして、路の傍に倒れ在しかば、諸の兵ども、これを見て駭き、急に扶起して、こはいかに、傷を被り給ふか、と問ふ。朱仝答て云く、火把に離れ、路黑きゆゑ、石に跌き倒れしかども、十分大いなる傷にあらず。此時縣尉馬を飛せ跑來り、乃朱同に問て云く、賊已に逃出けるに、いかんぞ是を赶ざるや。朱仝が云く、某追ざるにあらざれども、路黑うして奈何ともすることなし。況や這些の兵ども、盡く恐れ慄て向ひ進まざるゆゑ、一人の賊をも捉へ得ざるなり。縣尉これを聞て大に後悔し、再び兵を進めて追掛しむ。諸の兵ども心中に想ひけるは、兩人の都頭だにも、賊に近づくことならぬを、我輩あに能賊を捕へんや、とて、虛しく半里ばかり追往き、遂に立歸て、縣尉に告て云けるは、路甚だ暗くして、賊何の路より走りたるを知らざるゆゑ、曾て一人の賊にも遇ず候。此時雷橫も又賊を追失うて立歸りけるが、私に心中に想道く、朱仝は原晁蓋と交厚し、多くは朱仝晁蓋を放つらん、我も又原來晁蓋を救はんと欲しければ、今彼等逃延たるは幸なり、然れ共我此一片の情竟に見れざるこそ惜かりつれ、とて、則諸人に對し

云けるは、晁保正走ることなかれ、朱仝老早此處に至て汝を待こと久し。晁蓋これを耳にも聞入ず、公孫勝と共に、一命を弃て斬て出づ。朱仝故意傍に避廻て、一つの路を開き、則晁蓋を譲て奔らしむ。晁蓋公孫勝に對して云けるは、先生は家人を引て先に往給へ、我は跡より殿後して來らん、とて、遂に手分をして行ける所に、朱仝は歩行の兵を後門より家内に進ましめ、只顧呼り云せけるは、賊前門に出けるに、前門の兵宜く是を擒るべし。雷横これを聞て、忽ち身を回して、門外に馳出で、兵を分つて跡を追しめ、己は火光の内に在て、東を觀、西を望んで一向晁蓋を尋ぬ。朱仝は兵を撤て一騎馳に晁蓋の後に隨て追來る。晁蓋後を顧て云けるは、朱都頭は何ゆゑ、緊しく赶かけ給ふや、我と朱都頭とは、元來仇もなく怨もなきぞかし。朱仝後を望むに、一人の兵も見えざりしかば、乃晁蓋に答て云けるは、保正は倘我一片の情を知り給はずや、我雷横が心迷ひて、保正を放つまじきを恐れ、乃我雷横を賺して、前門に向はしめ、我は後門に至て、保正を放つ、我今一つの路を開て、保正を通らしめたるは、原來心あることなり、保正今他所に往ことを休て、只宜く梁山泊に馳入り身命を安じ候へ。晁蓋是を聞て大に感謝し云けるは、足下活命の恩、異日これを報ずべし。朱仝又詞を復さんとする所に、背より雷横大に呼て云けるは、朱都頭賊を走らしめ給ふな。朱仝忙しく答て云く、

とて、騎馬の士十人、歩行の兵二十人、都て三十人を率し、遂に先立て、打出でけり。縣尉雷横と共に大勢を率し、火把三四十兵に持せ、直に晁蓋が家の前門をさして馳來り、已に半里許過て、はや晁蓋が館を望ける所に、晁蓋が家の中堂に、猛火盛に焚上り、黒烟地に滿ち、紅焔空に飛ぶ。已にして雷横等は、前門に至り、乃三四十の火把に一齊に火を點け、四面八方を揮照し、諸人喊き叫で、門内に亂入り、各首を擡て四を見るに、中堂の火の光、及び炬火の輝にて、家内を照しければ、明亮々なること猶白日のごとし。諸人此彼を捜しけれども、更に人影なかりけり。斯る所に後門の邊に、呼はる聲大に響く。元來朱仝は、晁蓋を後門より放ち逃さんと思ふ心ありしゆゑ、已に先を爭うて後門に向んと望しかども、朱仝に說伏られ、已ことを得ずして、遂に前門に向ひけり。朱仝後門に至りし時は、晁蓋いまだ家内を完ずして在ける所に、家人馳來りて告けるは、官軍大勢已に後門に推來ぬ、宜く急に打出給へ。晁蓋是を聞て、忙はしく家人に命じ、中堂に火を放たしめ、則家人數十左右に從へ、公孫勝と共に喊き叫んで、後門に斬て出で、晁蓋自ら大音聲を揚げ呼て云けるは、我に當らん者は死せん、我に避ん者は生ん、必ず近く進で傷を被ることなかれ、とて、勇を奮ひ刀を輪して、門外に馳出る。此時朱仝呼で

夫不當の勇あり、しかも六人の從賊有てこれを助く、其六人の輩も、武藝力量人に超て、一騎當千の剛の者なるべし、且彼們は、皆死命の者共なれば、何の恐れもなく、一齊に斬て出べし、殊さら晁蓋が內には、原來家人多し、彼輩各力を竭て働かば、我輩いかんぞよく、是に敵することを得んや、只よく東に聲て西を擊つ計をなし、直に彼輩が迷ひ亂んを待て、諸人一齊に手を下さば、能誤なからんか、しかじ我と雷都頭と、人數を二手に分け、兩路より進み、某は先兵を引て、彼が後門の邊に埋伏して相まち、乃ち唿哨の聲を以て相圖とすべし、雷都頭は又大勢を率して、前門より打て入り、卽ち一人に遇ば一人を捉へ、二人を見ば二人を擒り給へ、これ則萬全の籌ならん。雷橫これを聞て、大に然り、と同じ、朱都頭の計略理なり、然れ共朱都頭は宜く縣尉相公とともに、前門より打入給へ、願くは某後門より打入らん。朱仝が云く、雷都頭は未だ知り給ふまじ、晁蓋が家には、後門の傍に又一筋の小徑あり、之を知る人少なり、我は每々彼が宅に往來しける故、好く眼の裏に見置り、我は則彼路に趣て支るべし、足下若彼が逃出べき所を知ずして、萬一誤て走らしめば、禍諸人に及ぶべし。縣尉是を聞て云けるは、朱都頭の言極めて然り、旣にかくのごとくんば、人數過半を率して馳向ふべし。朱仝が云く、某大勢を用るに及ばず、只二三十人を率して、馳向ふべし、

相に驚きて、宋江に對して云けるは、此は是蔡太師より、使者を遣され、立地に賊を捕へ、相渡すべきとのことなり、宜く急に人を馳て、七人の賊を捕ふべし。宋江が云く、若日中に人を馳て、騒動することあらば、必ず消息を漏して、賊また走ることもや有らん、唯好夜中に馳て、彼賊首晁蓋だにも擒ば、其餘の六人は、自ら在所知れ候はん。知縣が云く、東溪村の晁蓋は、原來名譽の豪傑なるに、いかんぞかくのごとき事を做出せしや、我全くこれを信じがたしといへども、先文書の表に隨て、是を捕ふべし、とて、則一人の縣尉ならびに兩人の都頭を廳前に喚で、晁蓋を擒て來るべきよしを命ず。此都頭一人は姓は朱、名は仝、又一人姓は雷、名は横、此二人武藝衆に勝れ、等閑の輩にあらず。當時朱仝雷横已に命を奉け、縣尉と共に役所に來り、則馬上の頭目幷に歩行の兵、總て百餘人を催し、緝捕使何濤及び兩人の虞候を作眼として、其夜兩人の都頭馬に打乘り刀を提げ、遂に大勢を引率して直に城の東門を打出で、飛がごとくに、東溪村の晁蓋が家を望で馳來る。已に其村に至りしかば、時はや一更の左側なり。諸の軍馬一つの觀音庵の內に屯し、賊を捉ふべき手術を商議する時、朱仝が云く、前面は乃これ、晁蓋が館なり、渠が宅には、前後二筋の路あり、若大勢前門より推蒐ば、彼必ず後門より逃れ出べし、一度に後門に押詰ば、前門より走るべし、我知る晁蓋は、萬

二編　卷之十七

○美髯公智をもつて插翅虎を穩にす

宋押司は晁蓋を逃し、馬に策て私宅に歸り、自ら馬を槽に繫ぎ、急ぎ茶坊に來る處に、何濤は茶坊の門前に立出で、一向頸を伸して、宋江を待居ければ、宋江頓て至て何濤に向ひ、何公嘸待久しく在つらん、某早々來るべき所、村中より、一人の親類來て、家事を談話し、頗る延引せり。何濤が云く、急事たるに依て少しは待侘ぬ、願くは押司早く某を知縣へ導給へ。宋江が云く、待侘給ひしは理なり、とて、則同伴して知縣の衙門に入けるに、此時知縣時文彬已に廳上に出て、訟を聞公事を辨じ居たりしかば、宋江則濟州の文書を携へ、遂に何濤を引て、知縣が書案の邊に至り、已に左右を呼で、廻避牌とて、人を避しむる牌を揭ければ、諸の人これを見て、盡く案前を退きけり。時に宋江知縣に對申けるは、此度濟州府より、賊情の事にて、緝捕使何濤に文書を附與して、當地に差越され候、乃賊の落著、當縣に關れり。宜く文書を披讀し給へ、とて、遂に彼文書を呈す。知縣時文彬これを披見して、忽ち大

此所目錄の次、美髯公智插翅虎を穩にす、と云を前にし、宋公明私に晁天王を放つ、と云を後にす。本文と前後の差あり。冠山子の譯通俗の本には、之を改正して、相當に書り。此書も又前後の序を改む。

く我輩大勢を安んじ容ることを得んや。吳用が云く、保正はいまだ委しく知り給ふまじ、彼所よりは梁山泊に近し、梁山泊の陣寨は今大に繁昌し、縱千軍萬馬を向て攻るとも、少しも恐るゝことなし、吾輩もし官司の觸にて、緊しく捜され、果して石碣村に隱れ居ること能はずんば、直に彼山陣に入て、彼等が内に加るべし。晁蓋が云く、此計我心に合へり、然れども只恐らくは王倫ら、吾輩を山陣に留まじきこともあらん。吳用がいはく、吾輩今身邊にあるものは金銀なり、多くこれを送て、彼們に與へなば、悅で留ることあるべし。晁蓋が云く、既にかく商議相定る上は、事遲なはるべからず、吳先生はまづ、劉唐とともに、家人に擔を挑はせて、急ぎ三阮が方へ行給へ、我は乃ち公孫先生と後より來るべき間、旱路に出て相迎へ候へ。吳用これを聞て、然り、と同じ、彼奪取たる誕辰の禮物金銀珠玉悉く收拾めて、五六擔の擔に作り、乃五六人の家僕に、これを挑はせ、吳用劉唐各朴刀を提げ擔子を監押し、總て十餘人、遂に晁蓋が館を打出て、石碣村へぞ進發す。晁蓋は又公孫勝と家內を取拾て、諸事悉く完了れば、家人の內また故鄕に歸らんと願ふ者には、多く路費を與へて囘らしめ、其餘の家人等には、擔子を荷はせ、はや打出べしとて、既に中堂に火を放ちければ、忽猛火熾に焚昇りけり。

置き、乃馬を飛せて急に跑來り、再三我を諫めて走り候へと催促す、最少刻の内に捉捕の人我館に來るべし、まさにこれいがんがせんや。吳用これを聞て大に感嘆して云く、若彼人來て告ずんば、我輩都て天の網に掛るべし、彼人は誠に我輩が爲には、再生の恩人なり、保正は彼人を稱して宋押司と云給ひしが、本宋氏の人にこそあらめ。晁蓋が云く、彼人は是當縣の押司、宋江と云人なり。吳用が云く、某久しく宋江の大名を聞しかども、緣なければ、咫尺の地に居ながら未だ曾て對面せず。公孫勝、劉唐ひとしく云く、世間の人皆及時雨宋公明と云て擧貴ぶは、彼人のことにあらずや。晁蓋が云く、及時雨とは則宋江の事なり、彼と我とは原來義を結で兄弟の盟を約ぬ、この故に今日一命を助らる、誠に感激に堪がたし、足下らも等しく、活命の恩義を蒙れり、猶是を忘れ給ふな、とて、又吳用に問て云く、我輩事已に危急に逼ぬ、いかなる計を以て、此場を脫れんや、吳學究がいはく、保正何ぞ別に議することあらんや、三十六計、走るを上計とするなり、只よろしく速に走り給へ。晁蓋が云く、今宋押司も、已に走り候へと、諫めけれ共、我未だ其走る所をしらず。吳用が云く、我已に思案を設けて心中にあり、家内の財寶を收拾て、六七荷の擔に作り、乃ちこれを家人に擔はせて一度に打出で、急に石碣村の三阮が方に落行べし。晁蓋が云く、三阮は原漁夫の住居にて舍も窄からんずれば、豈よ

たし、誠に好も告給ふ者かな。宋江が云く、保正多く言給はんより、早く家財を收拾て走り候へ、某ははや歸り申さん。晁蓋又云く、我等七人の內、阮小二、阮小五、阮小七と云三人の兄弟有り、已に金銀を分取て、自ら石碣村の居に歸りぬ、此外三人の者、猶我館にあり、押司先彼等に對面致し候へ、とて、則宋江を引て、後園に至り、晁蓋急に三輩を指して、宋江に告て云く、一人は吳學究と申て、當地の人、一人は公孫勝と申て、蘇州の人、又一人は劉唐と申て、當潞州の人なり。宋江忙はしく、彼三人に向て一禮をなし、直に身を囘して別を告げ、尙再三晁保正早々家內を收拾て走り給へ、某は早歸申なり、とて、再び馬に跳乘り、逸參に縣裡に馳行けり。晁蓋は各に對して、今此所に至て對面したる人を知り給ふや。吳用が云く、某曾て彼人を識認候はず、何ゆゑ慌忙き囘られしぞや。晁蓋が云く、各いまだ知り給ふまじ、若彼人來らずんば、我輩が命は忽ち休るべかりし。三人大に駭て、此度の事外に漏候や。晁蓋が云く、宋押司誠に一命を捨馳來り、乃ち我に注進す、此恩尤莫大なり、豈料んや、白勝已に捉はれ、今濟州府の獄に繫る、彼遂に拷問せられて、我輩七人が事を、白狀するに依て、乃ち濟州府の緝捕使、何濤と云者、蔡太師が命を受て若干の軍卒を從へ、今朝已に鄆城縣に至て、忽ちに我輩を捉へんと欲す、宋押司幸に先此事を聞き、何濤を誑て茶坊に待せ

晁蓋等は、酒已に酒を酌樂在り。但し三阮兄弟は、已に金銀を派分し、自ら石碣村に回りぬ。晁蓋等は、酒已に興に入て見えける所に、忽ち家人來て報じて云く、宋押司急用有て、門前に至り給ひぬ。晁蓋問て云く、幾何の人從ひ來れりや。家人が云く、只獨馬を飛せて、跳來り給ひ、急に保正に遇べきに早く告よ、と曰き。晁蓋是を聞き必然事あらんと、忙しく出て宋江を迎へければ、宋江則ち晁蓋が手を携て閑所に入り、座已に定りければ、晁蓋先問て曰く、押司今何の急事有て、斯忙しく一騎馳に來り給ふや。宋江答へて、保正と某とは、兄弟よりも親しき、心腹の朋友なり、故に我一命を捨て馳來り、則保正の禍を救ふ、保正必ず心に覺有べし、今既に黃泥岡の事顯れ、白勝老早に擒られて、濟州府にて、拷問を被り、已に保正等七人を供けるゆゑ、濟州府の官軍等蔡太師の命を受て、今朝鄆城縣に馳來り、乃ち保正ら七人を、捕へんと欲して、保正を以て魁とす、天の幸ひに此事先我手に落たれば、則計を以て緝捕使何濤を哄つて、茶坊に待せ置き、急に馬を飛せて馳來りぬ、古より三十六計走るを上計とすといへり、保正速に走り給へ、若疑惑遲滯に及ばゞ、禍立地に至るべし、某は先立歸て、彼何濤を引て、知縣に遇しむべし、然らば少刻捉捕の者大勢來るべし、彌急に落行候へ、必ず一刻も延引し給ふことなかれ。晁蓋是を聞大に驚き、乃宋江に謝して云けるは、足下の大恩、實に報じが

を入て、甕を探り取がごとし、然れ共一つの事あり、何公今携へ來り給ふ文書は、親自これを官府に持參し給へ、然らば官府早速捕人を遣して、晁蓋を捉しめらるべし、其節は某も隨分力を竭し申さん、此度の公事は、尋常の公事と等からず、必輕々しく沙汰し給ひて、事を漏し候ことなかれ。何濤が云く、押司の言尤明かなり、願くは押司某を引て、知縣相公に遏しめ給へ。宋江が云く、知縣は朝の訴へ事を聞了て、大いに疲れ、權く先歇んで居られけるが、未だ起申さるまじ、何公は宜しく、此所に片時待給へ、知縣廳上に出られ候はゞ、某早速來て何公を迎へ申べし。何濤が云く、偏に押司を賴申間、宜く擡撥を加へ給へ。宋江が云く、理の當然する所、何ぞ再三命じ給ふに及ばんや、某は先私宅に歸て少しき用事を完へ來り申さんに、乃此所にて待給へ、とて、遂に別れて、茶坊を出で、彼門前に待せ置たる家人に、命じて云けるは、汝はもし知縣公廳上た出給ひぬと聞ならば、早速かの茶坊に行て、彼官人に告て云べきは、押司は少頃來らるべきに、少く相待給へとて、宜く待しめ申せよ、とて、其身は飛がごとく、私宅に馳歸り、自ら馬槽に至つて馬を牽出し、乃後門の外より、是に打騎て、城の東門を馳出で、馬を飛せて、忽ち東溪村へ跑來り、いまだ半時にも及ばざるに、はや晁蓋が館に到り著ぬ。當日晁蓋は、吳用、公孫勝、劉唐等とともに、後園の葡萄架の下に席を設け、

京に送らるゝ處の、十萬貫の金銀珠貝を、奪取んと圖り、則蒙汗藥の酒を用ひ、押貨及び廂禁軍、都て十五人の者を痛め、遂に十一櫃の禮物こと〴〵くこれを奪取候、今彼酒賣白勝と云者を捕へ、緊く拷問せし處に、白勝竟に白狀して、殘七人の賊を供けるに、都て當所に落著せり、今蔡太師より、十日の內に賊を捕へて、東京に引渡すべし、と嚴密の命令下つて、其使者已に、濟州府に滯留し、立所に賊の音信を聞んと欲す、願くは押司官司の爲に、心を用ひ、某に力を戮せ給はるべし。宋江が云く、蔡太師の文書はさて置き、假令足下自らの文書を下し給ふとも、豈敢て力を用ひざらんや、但しらず彼白勝が供たる七人の賊が姓名はいかんぞや。何濤が云く、賊首が名は乃遠近に藏れなき、東溪村の晁蓋なり、此外六人の從賊は未だ其姓名を知ず、押司彌心を用ひて、これを捉捕はしめ給へ。宋江是を聞て大に駭き、心中思ひけるは、晁蓋と我とは、兄弟より猶親しき、心腹の朋友なり、彼いかんぞかゝる大罪を犯しけるや、我若彼を助けずんば、彼終に官司の爲に捕はれ、性命早速休るべし、我何とぞ計を以て、急に逃さばや、と思ひ、乃答て云けるは、晁蓋はもと、賢人を假る佞人にて、人常に彼を恨る者多かりけるに、果してかくの如き、大罪を犯しけるよな、誠に好彼に天罰を請しむべし。何濤が云く、願くは押司急に事を行ひ給はんや。宋江が云く、此事極めて易し、恰も甕の裏に手

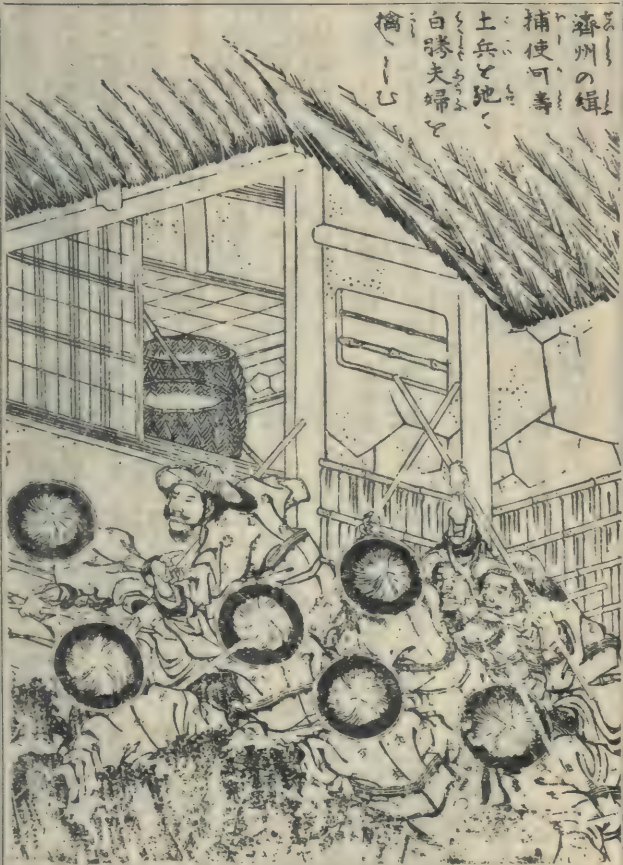
り。宋江が云く、貴客もし問給ふことあらば、某敢てこれを承ん、とて、則家人を門前に留待しめ、遂に何濤と共に茶坊の内に入て、座已に定りければ、宋江先問て云けるは、貴客の姓名は如何ぞや。何濤答ていはく、某は是濟州府の緝捕使何濤と云者なり、しらず押司の高姓尊名はいかん。宋江答て、某姓は宋、名は江と申す。何濤是を聞て、卽ち跪て云けるは、某久しく押司の雷名を聞及べり、唯恨らくは、緣を得ずして、遂に謁を下風に取ことなかりき、今日初て尊顏を拜すること、誠に悅至極なり。宋江又新て禮をなし、乃遠來の客なればとて、再三何濤を請て客座を讓り、宋江は自ら下つて主座に就き、茶すでに二三鍾吃し了りしかば、宋江先何濤に問て云けるは、何公此所に臨給ふは、定て公事あつて至り給ふらめ。何濤が云く、尤大いなる公事に依て到りしなり。宋江が云く、恐らくは、賊情の公事にはあらずや。何濤が云く、實に然り、則濟州府よりの文書を携來れり、願くは押司某が爲にこれを辨じ給へ。宋江が云く、何公は卽文書を携へ給ひて、上司より遣されたる役人なれば、某あへて慢り申さんや、只しらず、いかなる賊情にて候ぞや。何濤が云く、押司は官府の役人にて、終に此事をも聞給ふべければ、先立て語申すとも妨ることも有まじ、此度の公事は、濟州府の領內、黃泥岡にて、八人の賊、七人は棗商人に形を變へ、一人は酒賣に身を裝ひ、彼北京大名府の、梁中書より東

たり。此押司は乃ち是、姓は宋、名は江、字は公明と號す。三祖相續て、鄆城縣の宋家村に居住す。此人面の色黒く、身の長矮きゆゑ、人みな黒宋江と呼慣はし、且又家に於て大孝を行ひ、其人となり忠義を貴び、利欲を賤ず。是に依て人皆孝義黒宋郎とも譚名せり。上に一人の父有て、母は早世し、下に又一人の弟有て、名を鐵扇子宋清と號す。此宋清は原來官府に仕ず、則父宋太公と倶に家に在て、農作を業とす。兄の宋江自ら、鄆城縣に在て、押司の職をなし、よく文筆に通じ、兼て武藝に達す。平生只天下の豪傑と交を結び、もし人あつて、彼が家に頼み來る時は、高下となく、都て家内に逗置て、宜く介抱を加ふ。もし其來る人再び回らんと欲するには、多く盤纏を與へて、これを惠む。誠に金を見ては塊の如く思ひなせり。若死人有て、棺槨をも調がたき者には、早速棺を惠て、是を葬らしむ。儘人の性命を救ひ人の危急を助く。是故に其名、山東河北等の地に聞えて、人又及時雨宋江とも呼馴たり。及時雨とは天より降る時雨のごとく、能萬物を救ふを比喩たるなり。此時宋江は一人の家僕を從へ、縣前に至りける所に、何濤道に出て、宋江を相迎へ、乃呼つて云けるは、押司先茶坊に入給ひて茶を用ひ給はんや。宋江彼人をみるに、軍官の裝束なりしかば、忙はしく禮を還して云けるは、足下はいかなる人にて候や、某いまだ相識らず。何濤が云く、押司まづ茶坊の内に入候へ、某一言を問事あ

何濤諸人を誡て云く、若大勢一度に騒しく縣裡に入らば、賊必ず是を知覺て、急に迯走らん、汝ら暫く酒店に入て俟べし、我先兩人の軍卒に、文書を持せ、密に縣裡に馳せ、乃知縣にまみえて、立所に晁蓋を捕ふべし。諸人これを聞て、然り、と同じければ、何濤遂に二人の軍卒を具して、悄々に縣裡に入り、已に知縣の門前にいたる時、已に巳の刻計なり。時に知縣は朝の訴を聞畢り、門前殊に靜にして、原告被告等の輩も、悉く退散し、一人の訴訟人も見えざりけり。何濤乃ち傍の茶坊に入て茶を吃し、乃主に問て云けるは、今日は何ゆゑ、知縣の門前には訴訟人も來ずかく謐なるや。主答へていはく、今日は知縣相公、朝の訴訟を聞畢り給ひ、諸の役人及び訴答の族も、衆皆早飯を吃せんが爲、暫く宿所に歸りし後なり、逐付又出來り候はん。何濤再び問て云く、今日の當直に押司の職をなすは、誰なるぞや。主已に答んとしけるが、忽又對面の方を指て云けるは、今日の當番を勤る押司は、則今向うより來る人なり。何濤これを見るに、眼は龍鳳のごとく、眉は蛾蠶に似たり、滴溜々として兩耳に珠を垂れ、明皎々として、雙睛に漆を點じ、唇方にして、口正し、鬚は薄く長うして腮に落ち、座定る時は虎の相のごとく、走り動く時は狼の形に似、年の比は三十許にして、萬人を養ひ濟ふの度量を有ち、身の丈六尺ばかりにして、四海を掃ひ除の心機を懐く、尤志氣堂々として、威風凛々

此時府尹賊の棟梁を問けれども、白勝夫婦堅く包んで、一人を供ざりしかば、府尹大に怒て、汝何ぞ是を抵頼や、已に首告の者あつて、賊の棟梁は、鄆城縣東溪村の晁蓋なりと訴ふ、汝尙敢てこれを僞らんや、若速に其餘六人がことを供ずんば、早々嚴重の拷問せん、とて、遂に左右に命じ、白勝を二十棒打せければ、忽ち皮開け肉綻れ、血滾々と流れ地に溢る。府尹又詐つて云ける、晁蓋がことは、已に首告有てこれを訴へし故、はや捉捕を遣しぬ、汝いかんぞ彼六人が姓名を供ざるや、もし白ずんば今此上に又疼く二十棒を打ん、然らば汝は眼前に死せん、然らば又妻も是に例せん。白勝此上棒一つも受ること能ず、遂に白狀せしは、此度七人の賊、其内の魁は乃晁蓋なり、其餘の六人は、某も此度始て黄泥岡にて、出會しのみにて、曾て其姓名を知り候はず、某此詞毛頭詐所にあらず。府尹が云く、汝實に彼六人を知らずんば、是又再三問に及ばず、只晁蓋を捕へなば、六人の在所は、立所に分明ならん、とて、乃ち二十斤の死罪の頸枷を白勝に枷け獄中に遣し、妻も同じく鎖を以て縲め、女牢に入置けり。此日又一封の文書を何濤に與へていはく、汝は急に軍卒及び北京の虞候兩人を引て、鄆城縣に至り、則文書を知縣に見せて、立所に晁蓋幷に彼六人を捕へ來るべし、必ず賊を走らしむることなかれ。何濤命を承つて、早速健なる軍卒二十人を從へ、又彼兩人の虞候を引て、直に鄆城に馳至る。

歴ありや。何濤答て申けるは、今日已に頗消息あり。府尹聞て大に悦び、既に消息あらば、宜く後堂に入て、密談すべし、とて、則後堂に呼入て、これを問ければ、何濤一々詳に其來歴を訴ふ。府尹是を聞て、既にかくあらば、急に先白勝を捕ふべし、とて、則八人の軍卒を何濤に添て、安樂村に遣し、彼客屋の主を案内者として、直に白勝が宅に馳來る。此時夜已に三更の左側にて、白勝夫婦は熟く睡り居ける處に、大勢の軍卒等、一度に門を打破つて。家内に擁入けり。頓て白勝を把て床より下に拖ずり墜し、遂に高手小手に縛けり。白勝天に驚き地に怖れ、忽ち面色土のごとくに成て、諸人に對して云けるは、汝らは何者なればかく狼藉をなすや。軍卒罵つて云く、汝黃泥岡にて、金銀珠玉莫大を奪取り、飫まで好ことをなし、早これを忘たりや。白勝これを聞て、再三抵賴ければ、軍卒等又其妻を紲て、これに問けれ共、是又只顧抵賴ゆゑ、諸軍卒等が云けるは、何ぞ問にや及ばん、速に家内を捜し、彼等が派分したる金銀を尋ね出せ、とて、一度に手を下し、方々を捜しける處に、床の下に些小凸き處ありければ、諸人是を疑ひ、此處を一二尺許掘見るに、果して一包の金銀を穿出しぬ。白勝是を見て膽を落し、魂を散し、大いに龔れ慄きけり。軍卒等、彼金銀を白勝が頸に掛つけ、妻をも共に、濟州府に引立て、縣を望回けり。已に夜の五更の時分、濟州府に至て、乃ち白勝夫婦を廳前に引出す。

濟州の緝捕使何濤土兵を馳て白勝夫婦を擒へしむ

李なり、今濠州より東京に棗を運ぶ商人にて、少しも疑はしきものにあらず、と云捨にして後堂に入けるが、最怪しき模様なり、然れ共又別に咎むべきこともなきゆゑ、我遂に彼等を帳に書載しが、翌日五更の比、七人ともに旅宿を打立ぬ、其日早膳以後、我又客屋の主と倶に隣村の博奕宿に行ける所に、途中に於て、一荷の桶を挑ひ來る漢子に行遇ぬ、我原此漢子を、識ざりしかども、客屋の主は此男子と知音にて、則問ていはく、白太郎何の所に去や、彼男子答て云く、村中に一人の富貴人有て、一荷の酢を買べしとて、我を頼れしゆゑ、今我此二桶の酢を彼村に運ぶと云て行過ぬ、客屋の主我に告て云く、彼桶を荷うたる漢子が名は白日鼠白勝と云ふ、博奕の老賭なり、他日彼をも招くべし、と語りけるが、其後黄泥岡に於て七人の棗商人、ならびに一人の酒賣、蒙汗藥を以て、人を痛め麻木かし、遂に十萬貫の誕辰の禮物、金銀珠貝を奪ひ取たると、專ら方々に沙汰ありき、我是を思ふに、七人の棗商人と云は、恐らくは晁蓋以下の七人ならん、また一人の酒賣とは、必ず白勝なるべし、其ゆゑいかんぞなれば、彼觸に酢を運ぶと云けるに、其桶は却て馥々と酒の香あり、酒を詐て酢と云には、豈其内に一物なからんや、今若白勝を捕て拷問せば、賊の來歷早速知れ候はん。何濤是を聞て、大に悅び、即日舍弟何淸とともに、濟州府に來て、府尹に相まみゆ。府尹問て云く、此度の盜賊、いかゞ來

○宋公明私に晁天王を放つ

何濤頗酩酊を催すに望で、何濤乃問て云く、我偏に、七八人の賊を便袋の内に收めたると云ことを信ぜず、實に彼賊らが來歴は、何の處に落著したるにや、速に語聞せ、我等夫婦が心安んぜよ。何濤答て云く、實に前日我博奕に打輸て、彼賭博坊に歇居ける處に、又一人博奕の友來て、我を邀て云けるは、汝今輸盡して、下稍なくは、我汝に三五百の錢を借て、小賭博をなす所に行ん、とて、城の北門を出十五里ばかり馳て、安樂村と云處に至り、王氏の客屋に於て、小博奕を催しける所に、彼村は本諸方より、盜賊多く湊るよしにて、官司より緊く村中に觸て、毎夜彼村に泊る所の旅客、盡く皆帳面に載て、乃ち帳面を村の里正が方に遣し、是を點視しむ、然るに彼王氏の客屋は、原文字を識ざるゆゑ、我彼に代つて、凡半月餘り、牒面を寫せり、かゝる所に六月三日の夜、七人の棗客來て、彼王氏の客屋に、旅宿を借ける故、我これを牒簿に載んとて七人を見ける、其内首たるべき一人の客は、乃ち鄆城縣東溪村に於て、しかも保正の職をなす、晁蓋と云者なり、我前年一人の英雄に隨て、晁蓋が家に至れり、よつて我よく渠を識認て候、其後我帳面を持て、彼等が姓名を問けるに、其内一人が答に、我輩が姓は

忙はしく二錠十兩和の頁目の銀を取出し、是を何清に與へていはく、賢弟先此銀を收めて、小費の助にせよ、後日賊を捕へなば、我猶重く汝に謝すべし。何清是を見て冷咲て云けるは、我兄此銀は何ぞや、我常に博奕に輸て、十分に苦しき時だにも、一錢も求たることなし、早く此銀を收拾め給へ、もしかくのごとく銀を以て我を賺し給はゞ、我決して賊の在所を語まじ、若夫婦親類の情を以て問給はゞ、我肯て賊の音信を知せ申べし、必ず銀を出して我を驚し給ふことなかれ。何濤がいはく、我平日汝を罵りしは、全く諫んが爲なり、必ずこれを恨ることなかれ、此銀は本官司より恩賞に賜りたる銀なれば、我今汝に是を分る、汝何ぞ是を辭するや、願くは早く賊の在處をしらしめよ。何清哈々と大に笑ていはく、我兄必ず憂へ給ふことなかれ、我此七八人の賊を、とく捉へて、便袋の內に收め置り。何濤これを聞て、大に駭て云く、汝いかんぞよく、七八人の賊を、便袋の內には收めけるや、我偏に其意を曉さず。何清が云く、我兄これ疑ひ給ふことを息て、先此銀を舊のごとく收拾給へ、若銀を持て我を賺し給はば、反て賊の在處を、聞給ふこと難からん。我先快く酒を飲で、其後賊の來歷を、詳に語り聞しめ申さんに、速に酒を出し給へ、とて、又酒を乞求めて、良久しく盃をぞ傾げけり、何清竟に何等の說を云出すや、次の日を讀で明らかならん。

んや。何濤が云く、賢弟何ぞ再三情なき話を云や、汝既に賊の音信を知ながら、一向是を藏し云ずんば、佗人の爲に功を奪れん、しからば我むなしく罪を蒙らん、汝先賊の行向を、我に告知しめば、我必ず重く汝に報ずべし。何清がいはく、何の行向を問給ふや、我かつて知らず。何濤大に歎じて云けるは、汝は我面の刺をも見つらんに、いかんぞよくこれを忍ぶや、同胞の兄弟は元來手足の如し、汝もし父母のことを思ひ出さば、我が命救ふべし。何清是を聞て打笑て云けるは、我兄必ず慌給ふことなかれ、若事十分に危きに至らば、我自ら此小賊を捕へて、兄の難を救ひ申べし。此とき阿嫂が云けるは、願くは阿叔速に兄の難を救ひ給へ、今蔡太師の使者濟州府に在て、立處に賊の消息を待つ、是尤大いなる公事なり、然るに汝は是を小賊などと云て、共に驚くことをなし給はざれば、更に兄弟の情なし、唯宜しく急々に賊を捕へて、我夫婦の憂を慰め給へ。何清が云く、阿嫂も知り給ふごとく、我唯博奕を好む故、兄に欺き罵られ、幾何の惡言か耳に觸れども、我これを忍んで、相爭ふことなし、常に酒食ある時は、他人を請てこれを欵待給ふのみ、一年の内何の日か、我に一盞の酒を飲しめ給ふや、今日此事あるに至て我を撫給ふとも、我少しも是を悦とせず、諺にも他人は酒食に聚り、親類は憂愁に聚と云ふことあり、我兄は何ゆゑ、此言を曉し給はざるや。何濤これを聞て、

や。何清是を聞て呵々と大に笑て云けるは、原此賊は棗商人に紛なくんば、何ゆゑ人を馳てこれを捕へざるや。阿嫂が云く、阿叔は好容易云給ふよな、彼賊等を捕ふべき處あらば、いかんぞかく憂ん、只うらむらくは賊を捕ふべき處なし。何清がいはく、我兄は常に酒食の朋友を親んじ、同胞の兄弟を疎んじ申さるゝが、今日難儀の節には、誰か來りて商議をなす者あらんや、若我に數貫の錢を與へて使しめ候はゞ、此八人の賊を捕へんこと、何の難きことあらん。阿嫂が云く、阿叔は此賊の音信を知り給ふや。何清がいはく、我が兄若十分の危きに臨なば、我其時來て、兄を救ふべし、とて、已に身を起して回らんとせし處に、阿嫂再三引留て酒を勸め、則内に入て夫何濤に對して、何清が云しことを、詳に告ければ、何濤急に何清を請て對面し、賢弟汝已に賊の音信を知なば、速によく我に告知せ、此度の危急を救ふべし。何清が云く、我かつて賊の消息を聞ず、我今阿嫂に云聞せしは、戯耍の言なり、何ぞ實に賊の來歴を知ることあらん、我本下愚の者なれば、兄を救ふこと能はず。何濤が云く、賢弟何ぞ舊惡を念ふや、只我平日の好き處を擧げ、反處を弃て、速に我危難を救ひ、一命を保たしめんや。何清が云く、我兄の手下には、二三百の軍卒有て、悉く皆眼明かに、手快き者共なるに、何ゆゑ我兄の爲に、力を合せて賊を捕へざるや、我ごとき廢漢唯一人の力を以て、豈よく兄を救ふことを得

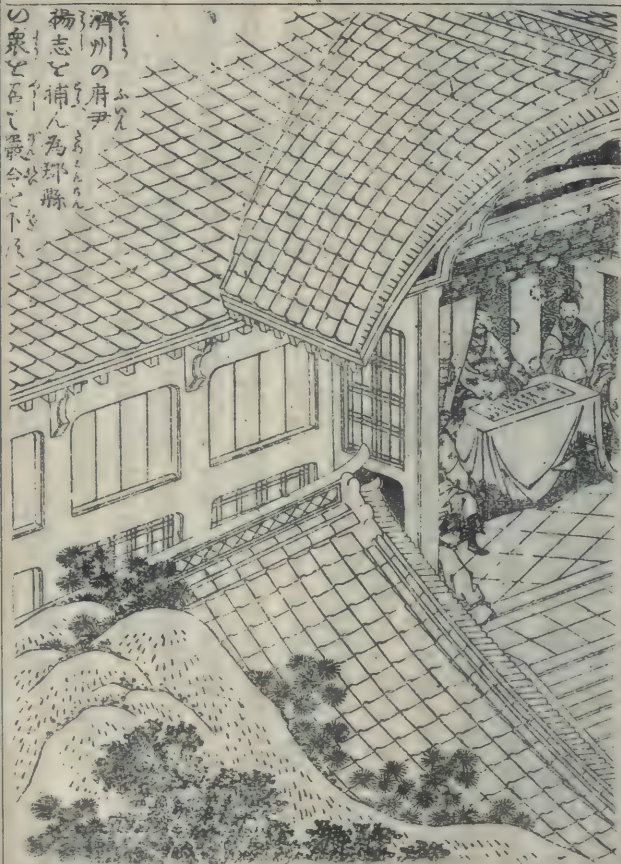
は、我兄は甚だ我を欺給ふ、縦廢漢たりといふ共、本同胞の兄弟なれば、一座に列つて一盃の酒を酌とも、何の恥かあらん、緝捕使の職はいかなる大役なれば、己を看るは天の大いなるがごとくにし、人を見ては針の小さきごとくにするや、我かく憤る内にも、又笑ひに逼るなり。阿嫂が云く、阿叔先怒を休給へ、汝の兄も心中に憂有て今日を過すことなりがたし。何清が云く、我兄は毎日大利を趂け、家内に有ものとては、金銀米錢なり、何の不足して、今日を過しがたきや。阿嫂が云く、阿叔は知り候はずや、前日黄泥岡にて、七人棗商人并一人酒賈人、擅に梁中書より東京に送る誕辰の禮物を奪取り、其落著遂に此濟州府に預り、府尹相公今蔡太師の文書を得給ひ、卽十日の内に賊を捕へんとの事なり、若十日を延さば、府尹相公も必ず、京よりの咎を受給ふこと分明なり、これに依て此般の追捕を汝の兄に命じ給ひ、若十日の内に賊を捕へずんば、流罪に處すべしとて、汝が兄の面には、刺を被り給ひぬ、果して賊を捕ふること能はずんば、終に難儀を請べし、故に阿叔の兄は、頃日專ら欝悶に逼て居給ふぞ、是に依て自ら、快き挨拶も有まじ、阿叔必ずこれを恨み給ふことなかれ。何清がいはく、我も略此賊等がことを聞り、但し知らず、いかなる模樣の賊なるにや。阿嫂が云く、阿叔はいまだ醉給ふまじきに、我今七人の棗商人が奪ひ取たると語りしに、はやこれを忘れ給ふ

先日すでに、黃泥岡に至りし處、八人の賊出來り、計を以て禮物を、悉く奪ひ去ぬ、是に依て、此八人の賊を急に捉らるべしとて、前日府尹相公我に命じて、黃泥岡の邊を尋捜さしめ給ふ故、我隨分心を盡して、これを捜し索れども、今に於て更に賊らが在所を知らず、我心甚これを愁る所に、今日又蔡太師方より、文書到來して、十日の内に賊を捕へ、早速東京に引渡すべしとて、緊しく命令下りし故、府尹相公大に駭き、乃我を呼で、賊の消息を問給ふに依て、我未これを捕ず、と答へければ、府尹大に怒て、若十日の内に賊を捕へずんば、流罪に行ふべしとて、先我面に刺を蒙りぬ、若此度日限の内に賊を捕へずんば、汝とも永く別れ、一命も又旦夕を保難からん。妻これを聞て大に嘆き、かくのごとくんば何を以てか、其賊を捉へ、此難を脱れ給はんや、とて、夫婦愁患て居ける處に、舍弟何淸來て何濤を訊ふ。何濤これを見て云ひけるは、汝は常に好む博奕はなさずして、今此に來て何の用ありや、多くは是博奕に打輪け、下稍を求んとて、奔走すらめ。妻何淸を見て、私に心中に悅び、賊の來歷を彼に問はゞ、必定消息を知る便もあらんかと、則手を擧て、何淸を招て云けるは、阿叔敬つて叔父と云ごとし先厨房に來り給へ、我一言を問ことあり。何淸これを聞て則ち阿嫂に隨つて、厨下に至りければ、阿嫂急に酒食を儲けて、何淸を款待し、自らこれを相勸む。何淸酒數盃を酌で阿嫂に對して云ける

乃ち命を奉て、使臣房裡に來り、急に手下の軍卒等を集めて、賊を捉んことを商議す。諸の軍卒らは、何濤が面の刺を見て大に驚き、盡く皆顔色を失うて、恰も箭の雁の嘴を穿ち、鈎の魚の腮に搭りたるごとく、都て口を閉て、一言半句も答る者なし。何濤これらの光景に、倍憂て云けるは、汝ら衆人我手下に屬しあるゆゑ、常に情をかけ、稀にも樂を諸にし、愁を同じうす、我今日かゝる難儀に干て、深く身心を苦むるに、汝らいかんぞ聲をも息をも出さゞるや、望らくは我面の黥を見て、具に憐を催さんや。諸の軍卒等是を聞て、某ら下愚たりといへども、亦木石にあらず、いかんぞ平日の情を忘れて、此度の公事を憂想はざらんや、只是黄泥岡の賊は、心定他州他郡の者にして、深山曠野の强盜ならん、既に今十萬貫の金銀珠玉を奪ひ取り、自ら山陣に皈て、擅に樂をなして居候はんに、豈容易これを捉へ申さんや、縱彼が在處を知りたりとも、只徒に打詠るのみならん。何濤これを聞しかば、今迄は五分の憂なるに、又五分の憂を添て、十分に憂愁し、乃ち使臣房を出て、私宅に歸り、獨鬱々として、只顧嘆息する計なり。其妻此黥を見て、且歎き且心安からず、何濤に問て云けるは、我夫何故黥を蒙り、深く煩惱に沈み給ふや。何濤が云く、汝いまだ今日のことを知まじ、此度北京の梁中書、十萬貫の金銀珠玉を東京に贈て、泰山蔡太師が、誕辰を賀する、其禮物

尹相公累を免れんとならば、急に又許多の追捕を馳せ、十日の内に賊を捕へしめ給へ。府尹是を聞て大に驚き、盗賊のことを掌る緝捕使の職をなす、何濤と云者を、堦の下に呼で、これに對して云けるは、我前日汝を、黄泥岡の邊に遣し、賊を尋させける處に、今に於て兎角の消息なきは、是慢の至極なり。何濤が云く、某前日尊命を奉て、黄泥岡の邊に馳行き、専ら心を用ひて、四面八方を尋捜し、晝夜怠りなく、今に此事のみを、評議いたせども、賊の來歴を知る者なければ、未だ其在所を聞ず、是某が怠る所にあらず、實にいかんともすることなし。府尹是を聞て大に怒て云く、汝何ぞかくのごとき言をなすや、我熟思ふに、汝必ず怠る處あり、故に未だ賊の消息を聞得ざるなり、諺にも上緊からざれば、下慢といふことあり、今東京蔡太師より、使者ならびに文書を遣はされ、十日の内に賊を捕へて、京に引渡すべしと、緊しく日數を限り給ふ、若十日の内に賊を捕へずは、我啻官職を削らるゝのみにあらず、必然流罪にも、處せられんか、汝はもと賊盗のことを掌る緝捕使の職に在ながら、いかんぞ自ら怠て累を我に及ぼすや、我先汝を遠國の鳥も往來せざる悪所に流さん、とて、即流人の印として、何濤が面に剠して云けるは、汝若流罪を免れんと思はゞ、十日の内に賊を捕へ來るべし、若日限を違ことあらば、其罪決して恕すまじ。何濤先面に黥せられ、心中甚だ憂へ、

は、北京梁中書の文書を得てよりは、專ら人を方々に分遣し、賊を搜し求むれども、更にその行向をしらず、甚だ憂ひ慮る所に、忽ち左右の者告て云けるは、東京蔡太師より、文書到著して、使者已に廳前に來れり、と。府尹是を聞き大に駭き云けるは、是必ず黃泥岡の盜賊等が事ならん、急に使の者に見えん、とて、早速廳上に出て使者に對面しければ、使者乃文書を呈す。府尹文書を披きみるに、果して黃泥岡の、一儀なりしかば、府尹則使者に對して云けるは、黃泥岡の賊が事は、我已に北京大名府、虞候等が訴を受け、專ら追捕の者を方々に分遣し、賊を搜すといへども、未だ其行方しらず、賊を捕ることなし、前日又梁中書方よりも、文書を受しゆゑ、頃日は彌緊しく、役人等に命じて、諸州諸郡に追捕を馳せ堅く日限を究て、是を搜せども、今に消息を聞ことなし、若近々に消息を得ることあらば、我自ら蔡太師の方へ伺公して、宜く返答に及ぶべし。使者がいはく、某は是蔡太師の憐みを蒙る者なるが、此度の使を承て、當地に赴けり、某前日東京を發足の砌、蔡太師自ら某に命じて申されけるは、汝もし濟州府に至らば、府尹に告て、十日の内に彼八人の賊、ならびに逃軍楊志を捕しめて、早々東京に引すべしと、再三嚴に是を命じ給ひぬ、若十日の内に、賊を捕へ給はずんば、府尹相公も緩怠の咎有て、頗る累を蒙り候はん、某も又罰を蒙りて一命を保つこと能ふまじ、府

濟州の府尹楊志を捕ん為郡縣の衆を召し嚴令を下す

動き働くことならざりければ、楊志かの七人の棗商人と倶に、禮物の財寶悉く奪取て、擅に車に載て、遂に岡の麓に逃去ぬ、某ら其日の黄昏に至て、漸毒薬消て手足動きけるゆゑ、早速起上て直に濟州府に馳せ、則知府に訴へ、兩人の虞候を、濟州府に留置き、某ら十二人は、夜を日に續で馳回り、乃ち相公に此事を訴へ奉る、願くは明かに是を察して、罪を恕し給へ。梁中書是を聞て大に駭き怒て云けるは、楊志大賊、汝罪を犯して流人となりしを、我格別に愍を垂て、職を授け、遂に擡擧て人となせしに、汝何ぞ早く恩を忘れ義を背き、此のごとき不仁不忠のことをなすや、我若汝を捕へなば、身を鱠に切ん、とて、則文書を認めて、濟州府に遣し、又書簡を修へて、使者を東京の、蔡太師が方に送つて、禮物已に奪取れたることを告知せたり。使者は足に信せ、道を促ける程に、日あらず東京の城下に至り、乃蔡太師にまみえて書簡を呈す。蔡太師已に書札を披讀て大に驚き、罵て云けるは、是らの賊徒、甚以て大膽なり、我壻梁中書、去年も已に、幾ばく萬貫の禮物を、我に送て誕辰を賀せんとせし處に、盜賊是を奪取り、今に其行方をしらず、然るに今年又かくのごとく、傍若無人の振舞をなすこと、言語に述がたし、若是を急に捕へずんば、恐らくは後治め難からん、とて、即日一通の文書を認て、一人の下官に持せ、直に濟州府に送て、立地に此度の賊黨を捕はしむ。濟州府の府尹

後總て五六百の小賊、幷に四五人の頭目、悉く地上に跪て降參す。智深卽ち小賊等に命じて、鄧龍が死骸を取弃さしめ、庫の中に貯ある財寳を悉く查點て封皮を貼り、此日を初として、智深楊志山陣の主となり、大に酒宴を設け、一山の小賊等を集め、倶に飮酌を催し、其日も漸黃昏に至りしかば、曹正は兩人の豪傑に別れて、鄕民等とともに、私宅へぞ歸りけり。是より二龍山益繁昌し、老山の小賊等心を傾けて服せざるはなかりけり。玆に叉那誕辰の禮物を失うたる、老都管幷に十一人の廂禁軍等は、夜を日に續で、北京に馳歸り、乃梁中書に見えて、悉く堦の下に拜伏し、謹で畏りければ、梁中書是を見て云けるは、汝等遠路に馳て辛苦に堪へ、徃來恙なきこと偏に悅至極せり、唯しらず、楊提轄は何ゆゑ見えざるや。衆人齊く、恐入て告けるは、楊志は是恩を忘れ、義を背く大賊なり、某ら向に此北京を離てより、七八日を過て黃泥岡に至り、天氣甚だ熱かりしゆゑ、皆林の內に至りて、しばらく歇ける處に、楊志私に七八人の賊に內通しける故、七人の賊詐て棗商人の形に打扮ち、乃七輛の車に棗を載み、先立て、黃泥岡に上て、木陰ある處に憩ひぬ、此時某ら甚だ渴し候ゆゑ、酒を飮で渴を潤さんと、酒賣より酒を買取て、皆々是を飮ける處に、豈知んや、原來酒の內に、蒙汗藥を入置しかば、某ら是を飮で、未だ須臾もせざるに、忽ち四肢麻木身體癱え、遂に地上に倒れ、

鄧龍と害し
宝珠寺
山陣の
主と
なる

魯智深
楊志

索を懸つて、山陣に至るよな、逐付汝が首を刎て、大王の仇を報ずべし。智深これを聞て更に聲をも作ざりけり。曹正楊志は智深を引て、佛殿の上に至り、乃ち此所を見るに、本尊及び金剛神等を、傍に去置て、殿の中央には、虎皮の交椅を設け、前後左右には許多の小賊等、器械を持て立並ぶ。少刻あつて、兩人の小賊、鄧龍を扶けて、殿中に至り、則鄧龍を請て、交椅の上に坐をなさしむ。曹正揚志は、智深が左右に引傍て、已に堦の下に至りしかば、鄧龍智深を見て、大に罵て云けるは、汝惡僧前日我を踢倒し、已に小腹の上を傷うて、其腫今に平ならず、汝今日又我にまみゆる時節ありや。智深眼を睜開き、大に怒つていはく、奸賊今我汝を殺さんに、走ることなかれ、とて、身を奮て躍起ければ、兩人の鄕民智深に懸たる活索を把て引解く。曹正又禪杖を智深に與ふ。智深是を取て、風車のごとくに輪し、直に鄧龍を望んで、打て蒐る。楊志も同く刀を撚て斬てかゝる。曹正及び小舅幷に鄕民等も一度に吶と、器械を舉て進み來る。鄧龍これを見て、急に掙扎んとする所に、智深早く禪杖を舉て、只一打に擊ければ、鄧龍が首を打碎て、交椅も微塵になりにけり。此時楊志は刀を揮て、小賊六七人斬伏しかば、敢て進んとする者一人もなし。曹正此體を見て、大音聲に呼つて云けるは、汝等速に來て降參せよ、若尙背く者あらば、鄧龍を以て例とせん。小賊等是を見て、大に慄き恐れ、寺前寺

人數を催して、二龍山を打破り、其序に汝が此村をも、悉く燒拂はんと鬧ぐゆゑ、某ら詐て、再三酒を勸め、遂に其醉に乘じて、是を綁め候なり、よつて早速、大王に獻じて注進す、願くは大王、我等が孝順の心を察し給ひ、速に此惡僧を殺して、後の患を脫れしめ給ふべし。彼頭目これを聞て大に悅び、乃ち呼つて云けるは、汝等は先此處に候べし、我今大王に報じ、少頃來らん、とて、則關を下りて直に山陣に入て、鄧龍に斯と報じければ、鄧龍これを聞て大に悅び、乃ち小賊等に命じて云けるは、早く惡僧を引て山陣に入べし、我先彼が膽を切て、これを肴に酒を飮み、快く前の恨を晴さん、とて、躍起て掌を拍ければ、小賊等命を承て、盡く關上に至て、大に關門を開き、乃ち曹正を導きて、山陣に上る。曹正楊志らは、智深が左右に從て、山陣に馳上り、彼三つの關をみるに、其險阻なること尋常ならず、兩邊の山勢、甚だ高く聳て、寶珠寺を當中に引裹む。その間に只一條の路あつて、山陣に上る。三重の關上には、鎗長刀斧戟弓箭、鐵銃石砲等を幾ばくと云數をしらず、密緻備へ列ね、用心緊き防禦なり。已に寶珠寺の前に至て、此邊をみるに、三つの殿門、恰も鏡面のごとき平地なり。其週遭は都て木柵を設て陣を布き、寨を結び、最堅固の要害なり。山門の下には、七八人の小賊立並んで在が、智深が絆られたるを見て、大に罵て云けるは、汝惡僧向に我大王を傷ひけるが、今日遂に

二編　巻之十六

○青面獸寶珠寺を雙奪す

曹正が謀計に隨ひ、魯智深と楊志と合體し、寶珠寺を雙奪んため、翌日は五更の時に起て食を吃し了ければ、曹正乃ち小舅の後生、及び六七人の鄉人を從へ、智深楊志を引て二龍山へ急ぎし程に、其日午の下刻、林の內に至り、則活索を以て智深を綁め、二人の鄉民に、索を取らしむ。楊志は鄉民の姿に打扮て、懷中に朴刀を藏し持て、曹正に相從ふ。曹正が小舅、及び鄉人等を率し、自らは智深が禪杖を持ち、直に二龍山の麓に至て三つの關をみるに、弓鎗鐵銃石砲等を四面八方に備へ、其防尤嚴格なり。此時小賊は關の上に在て、鄉人等が智深を綁來るを見て、飛がごとく山陣に入て此由を注進す。良久しうして、一人の頭目關に上て、呼はり問ていはく、汝等は何の者なれば、此山に來るや、又彼惡僧はいかゞして擒りけるぞや。曹正答て、某らは此山の近村に住し、酒肆を開きて、產業とする者なるが、此惡僧某が店に來りて、飽まで酒食を吃ひ、其償の錢をも與へずして、一向罵て申けるは、梁山泊より

等は、悉く降參せんこと治定せり、某が寸謀かくのごとし、兩公の心いかん、と云ければ、智深楊志甚だ奇計として、大に喜んで云けるは、曹正の籌策、誠に孔明にも賽て覺ゆ、明日早々計を行ひ給はるべし、とて、其夜深更まで酒を酌み、各快く歇けり。

し、已に首を取んとせしかども、手下の小賊大勢馳來て、遂に鄧龍を助け、山に登り急に關門閉たるゆゑ、我再び山に上ること能ず、只關前に在て、只顧惡口して罵詈れども、彼曾て山を下らず、今更いかなる計あつて、これを取べきや。楊志が云く、已にかくのごとくば、我和尙と再び馳て、心を用ひ勇を奮て關門を破るべし。智深が云く、今兩人の力を以ても、關を破ることは能ふまじ、別に計の行るべきものを、商議せんにしかじ。曹正が云く、某一つの策あり、兩公の尊意に合ふまじきかは知らざれども、楊制使は裝束を改て、此邊の百姓の姿に打扮給へ、然らば我智深和尙の、禪杖戒刀を取て、小舅に幾ばくの人を添てこれを持せ、又索を以て智深和尙を綁め、某自ら是を引て、二龍山の麓に至り、乃呼て云べきは、某らは此近邊に、酒店を開きて、營をなす者なるが、此和尙某が店に來て酒食を吃ひ、其價の錢をも償ひ申さず、只顧大勢を催し、二龍山を打破んと云て、某らを嚇し候故、某ら深く是を恨み、乃彼が醉たるに乘じ、遂に是を縛候、このゆゑに、早速大王に獻りて注進申と詐ば、彼必ずこれを信じて、我們を山に登らすべし、若山陣の内に到て、鄧龍に對面することあらば、速に絆の索を引解て、禪杖を和尙に與ふべし、此時楊制使も、叉刀を振つて働き給へ、然らば鄧龍を殺さんこと、掌を反すよりも易からん、若鄧龍だに殺しなば、其餘の小賊

に、這處に二龍山寶珠寺とて、身命を安んじ保つべき處あることを聞及び、特々來つて、山中に加らんと欲しける處に、二龍山の賊首鄧龍我を用ひざるゆゑ、我彼と相鬪ひしに、彼我に敵すること能ず、山下にある三つの關を牢く閉て出ざれば、我今山に上るべき道をしらず、一偏四方を尋れ共、此山元來險阻にして、別に上るべき路もなく、遂に計絕たるゆゑ、唯關を望で、頻に惡口をなせども、彼且て是を怒らず、再び出て戰ふことなし、是故に我大いに鬱悶せり。楊志是を聞甚だ悅び、兩人乃ち林の内に坐して、終夜談話をなし、互に少も隔意なかりしかば、楊志すなはち牛二を殺したる事より、此度誕辰の禮物を失し事迄悉く語り、又曹正が敎に因て、此山を訊來りし事を告て云けるは、我も同く此山に上らんと欲して來りしか共、彼已に關を閉ば、我輩こゝに在とも益有まじ、宜しく先曹正が家に行て、再び良策を圖るべし。魯智深是を聞て尤と同じ、すなはち楊志に引れて、曹正が家に至りしかば、楊志則曹正を呼で、智深に遇しむ。曹正大に悅んで忙がはしく酒食を設け、兩人を款待し、專ら二龍山を打べき、計を商議す。曹正はくはしく智深が戰うたることを聞て、則兩人に對して云けるは、彼果して關門を閉なば、兩人はさて置き、千軍萬馬を進めて攻るとも、山に上ること能ふまじ、只宜しく智を以て取べし、力を以て打べからず。智深がいはく、我前に彼と戰ひし時、我彼を踢倒

楊志魯智深と
戦て自ら
和談を

なるに、何故今此處には來られしぞ。魯智深がいはく、我事は一言を以て盡しがたし、大相國寺に在て、菜園を掌りし時、豹子頭林冲に逢て義を結び、其後林冲は高太尉が所爲にて、無實の罪に陷され、滄州に流罪せられし時、監押の下官二人、高太尉が命を受て、道中に林冲を害せんとせしゆゑ、我直に林冲を送て滄州に至り、遂に林冲が一命を救ひて、又東京に歸りしに、彼兩人の下官、高太尉に告て云しは、野猪林の内にて、已に林冲を殺さんとせしかども、大相國寺の魯智深と云僧に妨られ、剩へ滄州まで送り來りしゆゑ、手を下し、林冲を害することは叶はざりけるよし、申せしに依て、高太尉人を相國寺に馳て、我を捕へんとせし處に、近邊の徒者ら、我に斯と告知せけるゆゑ、我則菜園廨字に火を著て、遂に圏外に逃出で、此彼に走つて、許多の國々を經繞しか共、身を置べき地なく、孟州の十字坡に至りし時は、酒店の女房に、蒙汗藥を飲され、已に命を害せらるべかりしに、其酒肆の主皈て、我模樣及び禪杖戒刀を見て、大に驚き、此和尚必定尋常の人にあらじ、宜く命を助けんとて、早速解藥を飲せけるゆゑ、蒙汗藥の毒俄に解て、再び命を免れ、彼主又我を數日留め奔走し、則義を盟で、兄弟の契約せり、彼夫婦の者は元來世間に名高き豪傑にて、其夫が名は菜園子張青と云ひ、妻が名は母夜叉孫二娘と云ふ、甚だ義を重んずる者共なり、我彼が家に逗留して在ける内

とて、則大に呼つて云けるは、和尚は又、いづれの處の人なるぞや。彼大和尚重ねて、返答にも及ず、禪杖を輪して打てかゝる。楊志見て、汝何ぞかく無禮なるや、我が手なみを見せん、とて、刀を舞して相迎へ、兩人勇を奮て、戰已に四五十合に及べども、未だ雌雄決せざりしかば、彼和尚故意、圈子の外に飛出て大いに呼つて云く、汝且歇め、我一言を問ん。楊志乃ち刀を收め、隱に讃歎して思ひけるは、此和尚何ぞかく、武術の達人なるや、我も只敵し鬪ふのみにして、擊入で勝を取ん透を得ず、誠に希有の惡僧かな、と未だ思ひも了らざるに、彼和尚も又大に呼て云けるは、汝は本何人なりや、其姓名を報よ。楊志が云く、我はこれ東京の制使たりし楊志なり。彼又問ていはく、汝は東京にて、寶劍を賣んとして、大蟲牛二を殺せし、青面獸楊志にはなきや。楊志が云く、我すなはち其人なり、我が面の金印を見よや。彼和尚大に笑て云く、我幸ひに、此處にて遇けるよな。楊志が云く、和尚は原誰なれば、我劍を賣て、牛二を殺せしことを知り給ふや。彼和尚がいはく、我はこれ延安府老种經略相公の提轄たりし、魯達と云し者なり、前年三拳を以て、鎭關西を打殺し、此ゆゑにて五臺山に上り出家せり、我脊の上に、花を鯨刺したるを見て、人皆稱して花和尚魯智深と云ふ。楊志これを聞て、呵々と打笑ひ、和尚は原是某とは、同鄕の人なり、世間の人傳へ云を聞に、和尚は大相國寺に挂搭し給ふと

し、萬千心を用ひ、漸く山塞に逗留せられしと承る、制使先梁山泊に行ことを休給へ、此近邊青州の内に一つの山あり、これを名けて二龍山と云ふ、山の上に一つの寺あり、寶珠寺と名く、究て險阻にして彼寺を四方より引蘊み、最要害堅固の地なり、唯一筋の道あつて、山に登る、今此寺の住持還俗しければ、其餘の衆僧も、悉く歸俗して相從ひ、總て四五百人を聚め、專ら強盜をなし、金銀財寶を劫取り、山中直正富饒なり、彼還俗したる住持が名を、金銀虎鄧龍と號す、制使もし肯て強盜の内に加はらんと思ひ給はゞ、彼處に行て命を立て身を安んぜられよ。楊志が云く、すでにかゝる所あらば、速に赴て彼等が内に加り申さん、とて、其夜は曹正が家に一宿し、翌日路費少々借受て、朴刀を提げ腰刀を帶し、遂に曹正に別れて二龍山へ急しかば、其日晩に及んで、はや一つの高山を望む。楊志想道く、今宵は先林の内にて一夜を明し、來日早々山に登るべし、とて、乃ち林の内に入ける處に、一人の大和尚赤條々になつて、背の上には、多く花を鏤し、乃ち松の樹の下に坐して納涼居る。楊志これに遇て先大いに駭きけり。彼和尚已に楊志が林の内に入たるを見て、禪杖を引提げ、兩眼を睜開き、直に躍出て大いに聲を勵して云けるは、汝大漢子、何の所より來れるや。楊志彼和尚が言語音聲を聞て、私に思ひけるは、此和尚も又是關西の者なり、我彼とは同鄕なれば、且彼が出所を問ん、

しばらく、先我家に來て歇給へ、とて、遂に楊志を延て、私宅に歸り、賓主の座已に定りければ、曹正先彼妻が弟を呼で、楊志にまみえしめ、早速酒食を儲て楊志を欵待し、酒已に數盃巡りし所に、曹正又楊志に問て云けるは、制使は此度何等の事に因て此邊には至り給ふや。楊志答て、彼花石を失ひ、此度又生辰の禮物を失ひし事共、一々に語りければ、曹正是を聞て、心中深く愍み、則楊志に對して云けるは、既に斯有ば、某が家に暫く逗留し給へ、重て宜く商議も有べし。楊志が云く、足下の志は、誠に骨髓に徹て感激すといへども、此處に逗留すること能ふまじ、若追捕の者此所に尋ね來らば、累足下一家に暨ぶべし。曹正が云く、既にしからば、制使又何の處に往んと欲し給ふや。楊志が云く、今更何に往べき處なき内にも、倘梁山泊に上つて、足下の師林教頭を訪んと欲す、我向に梁山泊の麓を過りし時、林教頭に出合て、已に鋒を交て戰五十餘合に及びぬ、此時王倫我輩が武藝の高下なきを見て、遂に山陣に伴うて種々欵待に預りぬ、此故に我已に林教頭を識れり、其節も王倫再三我を山陣に留しかども、我あへて止らず、今我面には、一つ金印を添へ、殊更進退難儀に臨で、再び彼處に赴て身を頼んこと、尤本意ならず思ふゆゑ、躊躇して未だ決せざるなり。曹正が云く、某聞く、王倫は心偏くして、人を用ること能ず、我師林教頭肇て彼陣に入し時、再三言を竭

曹正楊志と追て
其武藝に
感伏に

を問ことあり、とて、乃ち楊志に向て云けるは、汝はもといかなる人ぞ、早く姓名を報ぜよ。楊志これを聞て、胸を拍て云けるは、我は是昔名を更ず、今姓を改ず、乃ち青面獸楊志とは我事なり。彼漢子これを聞て即問ていはく、汝は是東京殿司府の楊制使にてはあらずや。楊志が云く、汝いかんぞ我を知れりや、我則楊制使なり。彼漢子忙はしく鎗を棄て地上に跪て云けるは、某眼あつて、眞の豪傑を識らず、願くは無禮の罪を免し給へ。楊志此體を見て、急に禮を還して云けるは、足下は是誰人なれば、かく慇懃の禮を行ひ給ふや。彼漢子答て云けるは、某は原東京開封府の者なり、乃ち八十萬禁軍教頭林冲が弟子、姓は曹名は正と申す、人皆某が渾名を稱して、操刀鬼曹正と言馴はせり、某嚮に東京に在し時、一人の富貴なる主顧、本錢五千貫を某に借れたるゆゑ、此山東に來て、商賣をなし候處に、想ず本錢を損失いたし、再び故郷に回難く、遂に當地酒肆の贅壻となつて、此邊に跡を留候なり、最前の女は則我妻なり、彼後生は愚妻が弟なり、某今制使と闘し時、私に制使の武藝を試るに、恰も我師林教頭と同じ、故に敵すること能ず覺ゆ。楊志が云く、原足下は林教頭の弟子にてありしよな、足下の師は、高俅がゆゑに無實の罪に陷され、今は則梁山泊に入て、强盜の頭領となり給ひぬ。曹正が云く、某も噂ばかりは聞けれども、いまだ其虚實をしらず、願くは制使

すなはち酒を温て、楊志に與へしかば、一人の後生出來り、自ら此酒を篩で、楊志を相留む。彼女又飯を携て出ければ、楊志飯を飽まで吃し、乃ち発を立て門外に走り出づ。彼女急に呼つて云けるは、客未だ酒食の價も與へずして、何ゆゑ座を立給ふや。楊志答て云けるは、我今身邊に持合なし、重て回るさに還し申さん、權く我に賖候へ、必ず疑ふことなかれ、とて、足を早めて跑出す。彼後生これを見て、相續て跑出し、遂に楊志に追ついて衣を扣へ、故もなく價を推て賖さする、理やある、と罵りければ、楊志急に拳を擧て、彼後生を地上に打倒し、已に跑行んとする所に、後より又一人の漢子追來て、奸賊走ることなかれ、と罵て、已に近々と馳至る。楊志彼漢子をみるに、大脫膊になつて、手に一條の鎗を持て相迎ふ。楊志が云く、汝無益のことをなさんより、早く回らんや、とて、足を住て扣ける處に、彼後生も又手に棒を持て、二三人の漢子を引て追來る。楊志私に思ひけるは、この鎗を持たる男だに殺しなば、彼後生等は必ず迯去んと料り、急に手中の朴刀を挺て、彼漢子に斬て蒐る。彼漢子も又、鎗を撚て相迎へ、鬪已に三十餘合に及びける處に、彼漢子漸々力衰へて、楊志に敵すること能ず、只遮攔になつて殆危かりしかば、彼後生及び二三人の漢子、一度に咄とかゝりければ、彼漢子却て、圈子の外に跳出て、大きに呼て云けるは、互に皆手を動すことなかれ、我一言

藥を飲せて、誕辰の禮物盡く奪取り、已に往方しらず、逃去たりと訴べし。老都管是を聞て大に悦び、乃又商議して云けるは、既にかくのごとくんば、明日先當地の官府に訴へ、兩人の虞候を留て賊を尋ねしめ、我輩十二人は、急に北京に歸て、具しく相公に告知らしめ、乃ち文書を以て蔡太師に訴へ、早速濟州府に命じて、賊を捕へしめんに、今宵は先旅宿を求て歇むべし、とて、各又岡を下り、再び跡の村へ立歸り、宿を求めて休息しぬ。翌日又廂禁軍等、兩人の虞候を引て、直に濟州府に至り、具に次第を訴へぬ。扨又楊志は已に黄泥岡を去り、南の方へ半日許馳て、日已に晩ければ、其夜も又、三更の左側に至まで息をも續ず、足に任せて急ぎしかば、已に林有所に至て、暫く木蔭に立倚て休息し、心中に倩おもひけるは、身邊に盤纏已に盡き、且又此邊一箇の知音もあらざれば、如何なる計を用ひてか、此艱難を免れんや、と頻に鬱々として、憂愁に逼りけり。既にして夜も漸暁ければ、楊志又志を勵し、宜く此涼しきに乘じ路を急がばや、と思ひ、遂に林の内を出て、二十里ばかり馳ける處、前面に一間の酒肆あり。楊志心中に想ひけるは、若酒を飲ずんば、豈よく飢渇に堪んや、且酒店に入て、胡亂に一盃飮んとて、乃酒肆の凳に坐しければ、竈の邊に一人の女あつて、楊志に問て云けるは、貴客は打火を求給ふや、楊志が云く、先酒を飲で、其後飯を吃すべし。彼女これを聞て、

劣んとも思はず、若此所に自殺すと云共、忠義の心世に顯るゝ事も有まじ、大丈夫何ぞ敢て非命に死せんや、先命を保て後日強盗を捕へ、宜く再び事を正さん、とて、又岡の上に來て彼十四人をみるに、尚醒ずして動くこと叶はず。楊志大に罵て云く、汝等匹夫我金言を容ざる故、かく強賊の計に陷り、果直に我身に及べり、今更後悔すとも、何の益あらん、とて、遂に松樹の下に立寄り、朴刀を取腰刀を插し、猶頭を轉して、四方を顧るに、更に一物も遺らざりしかば、楊志大に嘆じて、直に岡を下つて馳行けり。彼十四人の輩は、已に二更の時に至て、漸醒逐個々扒起き、おの〳〵大いに苦み憂へ、這は如何せん、と喊びける時、老都管先諸人に對して云けるは、汝等楊提轄が金言を聞ざりし故、今日此所にて、命を果すに至れり。諸人が云けるは、事已に敗れて、歎くとも返るまじ、宜く先商議をなして、一命を脱るべし。老都管が云く、汝等いかなる見識ありや。諸人が云く、此度のことは、都て我輩が過なり、然れ共、諺にいはく、火燒身に到ときは、各自ら去て掃ひ、蜂蠆懷に入ときは、隨て即衣を解といへり、若楊提轄猶此處にあらば、云がたきことなれ共、今楊志は往方をしらず、落行ければ、我輩北京に歸て、梁中書相公に見えなば、罪を楊志が身の上に預けて云べきは、楊志道中に在て、只顧我が輩を棄うち、剩盜賊等を語らうて、我輩を欺き、遂に蒙汗

て、一瓢の酒を酌でこれを飲ぬ。此時白勝は、故意怒る體にもてなし、劉唐が酌取たる一瓢の酒を奪ひ復さんと欲し、直に劉唐を逐て林の內に入ければ、其時吳用私に酒桶の傍に來りて、遂に一瓢の酒を酌で幾乎飲んとせし處に、白勝飛がごとくに馳回り、急に吳用が酌持たる一瓢の酒を引揎て、桶の內に移し入れ、ふたゝび蓋を緊くして、幾ばくの怨み言を云けるが、是乃ち計にて、蒙汗藥は此時吳用が手より入れにけり。扨かの十五人の輩は、倘毒藥醒ずして、打倒れ在けるが、其內楊志一人は、原酒を少し飲けるゆゑにや、諸人に先達て、はや醒たりしかば、漸々起上て彼十四人の輩をみるに、悉く皆涎を流して、動くこと能はず。楊志乃ちかの十四人に向て云ひけるは、汝等我言を容ひざるゆゑ、果して賊手に遭て禮物を奪ひ取れぬ、いかんぞ能再び北京に歸て、梁中書に見えんや、此書簡目錄も、何の用にか中らん、とて、遂に扯破て弃にけり。楊志今は家あれ共走がたく、國あれども投がたく、身をいづれに寄べき計を失ひ、しかじ此處にて自害せんには、とて、已に黃泥岡の麓を望んで下りけり。

○魯智深二龍山を單打つ

青面獸楊志は、已に忽然として、心中に思へらく、我今十八般の武藝を學び得て、器量諸人に

は、此桶の內なる酒向に一人の棗客一瓢を舀取て飲しかば、此分を價の中にて讓申さんに、四貫五百文の鳥目を償ひたまへ。十一人の輩是を聞て、何ぞ僅々の事を論ぜんや、とて、五貫の鳥目を與へしかば、彼漢子大いに悅び、遂に空桶を荷て、再び岡の下に下りけり。彼七人の棗客は木蔭に立寄り、十五人の者を指して云けるは、汝等已に我輩が計に中れり、早早倒んぞ、と云も了らざるに、一行渾て十五人の輩、忽ち手足麻木て、盡く地上に打倒れ、恰も死人の如くにて、倘只動くものは兩眼のみなり。此時七人の棗客急に七輛の車を牽出し、彼棗を取て地上に丟て、十一檐の金銀珍貝を、心のまゝに奪ひ取り、悉く車に載み、一度に咄と、造化好、と叫んで黃泥岡の麓を望み、一參に下りけり。楊志是を見て、甚しく後悔すといへ共、渾身癱麻れければ、動き働くこと叶ず。十五人の者共、悉く徒に眼を開て、七人の棗客等が、誕辰の賀物皆奪取て、岡の下に馳行を、打眺てぞ居たりけり。偖此七人の棗客はいかなる徒と尋ぬるに、原來これ晁蓋、吳用、公孫勝、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、等なり。彼酒を賣たる漢子は乃是白日鼠白勝なり。彼酒の內にいかゞして、蒙汗藥を用ひたるやと問に、此二桶の酒は原是藥を用ざる好酒なり、ゆゑに一桶の酒は、七人の輩これを飲ぬ。彼一桶の酒の內にも、毒藥なきを楊志ら十五人に知らしめんが爲、向に劉唐私に酒桶の蓋を開

云けるは、汝何ゆゑ小しきことを憤て斯はいふや。彼漢子が云く、我實に酒を賣まじきに、汝らいかんぞ我を妨るや。此時棗客等、酒賣漢子を諫て云けるは、いかんぞ汝甚だ彼客を憤るや、最前の一言に誤あるは、本是不意に出たる戯言なり、汝速に賣與へ、彼人等が渇を救ひ進らせよ。彼漢子が云く、事なくして人に疑れて、何の益かあらん。棗客等又いはく、汝過て心なき輩なり、とて、彼漢子を傍に推のけ、乃酒桶を取て彼十一人の者に與へて云く、足下等早く飲給へ、我輩敢て、彼漢子に替り此酒を賣なり。十一人の輩大に悦び、急に彼椰瓢を借て、一向に呑で是を飲む。棗客等又一盤の棗を十一人の者に送て是を肴にし給へ、と云ければ、十一人厚く是を謝し、某等故なくして、何ぞ能貴客の賜を受申さんや。棗客等が云く、必ず慇懃の禮に及ぶまじ、都て是同路の旅客、何ぞ百十箇の棗を事とせんや。十一人の輩これを謝し畢て、二瓢の酒を呑で、老都管と楊志とに與ふ。老都管はこれを飲しかども、楊志は曾て是を飲ず。兩人の虞候も各二瓢の酒を飲て又楊志に勸む。楊志はもと酒を好まざれども、一つは暑氣を避んと思ひ、二つは衆人是を飲けれ共、更に別條なきゆゑ、已に半瓢の酒を飲て、又幾ばくの棗を吃しければ、十一人の輩は楊志も又酒を飲たるを見て、私に心を安んじ、何の遠慮もなく、殘る半桶の酒時を迂さずこれを飲乾けり。彼酒賣の漢子十一人の者に對して云ける

ことを欲し、其内一人の廂禁軍乃ち老都管に向て云けるは、老都管は如何見給ひけるや、彼棗客今一桶の酒を沽て飲けれども、曾て異儀なし、我輩も彼一桶を沽取てこれを飲み、喉を潤さば、大いに快らん、實に口中甚だ渴すといへども、此邊に水を需め飲べき所なし、願くは老都管我等が爲に宜しく楊提轄に告給はんや。老都管これを聞て、已も一盃飲んと欲し、則楊志に對して云けるは、彼棗客既に今一桶の酒を、沽取て飲けれ共、更に別儀なし、我輩も彼一桶を沽取て、十四人の輩に飲しめて、渴を救ふべし、此處には一點の水をも干ること能ず、もし彼酒を得ずんば、何を以て渴を潤さん、望らくは提轄是を察し發し給へ。楊志是を聞て、心中に思へらく、我今此所に在て見けるに、かの棗客らが酒を沽て飲けれ共、更に別儀もなし、彼一桶の酒の內も又一人の棗客これを舀採て呑ぬ、定めて彼桶の內なる酒も、別儀有まじ、我向に數度十一人の廂禁軍を痛く箠ければ、せめて酒を買しめ、憤りをも息させんと思ひ、乃老都管に答て云けるは、老都管再三詞を盡し給ふに、我これを容ひざるも無禮なり、早く十一人の輩に、酒を沽しめ給へ、酒を飲了らば、早速岡を下るべし。十一人の廂禁軍は楊志が此一言を聞て大に悅び、則五貫の錢を湊て、酒賣漢子が前に來て、酒を沽んと望ければ、彼漢子が云く、我此酒の內には、蒙汗藥を入置しゆゑ、汝に賣こと能ふまじ。十一人の者打笑て

汝これを念とせざれ、とて、則椰瓢を取出し、又一盤の棗を捧げ來て、七人の客、遂に桶の傍に立寄り、互に目と目を看合せ、遂に桶の蓋を開て、替る〴〵酒を酌み、乃ち棗を肴に用ひて、急に飲ける程に、時を移さず、一桶の酒を飲乾けり。已にして七人の客が云けるは、我未だ、價を問ざりけるに、汝償ひは、幾ばくを求るぞや。那漢子が云く、價は實に鳥目十貫を以て、二桶を賣る、一桶は鳥目五貫なり。七人の客がいはく、價は汝が云處に從はん、只一瓢の酒を添て、我輩に飲しめんや。彼漢子が云く、添ること能ふまじ、我多年酒を賣しかども、値の外に、酒を添たることなし。此時彼七人の客の内、一人は價の錢を償ひ、又一人は私に桶の蓋を開て、一瓢の酒を酌取て、これを飲ければ、彼漢子是を見て、大に怒り、則酒を奪取んとしける處に、彼客急に松林の内を望んで逃入しかば、彼漢子も亦跡を慕うて追蒐る。此時又一人の客手に一瓢を持て彼漢子が跡に續出で、乃ち桶の蓋を開て滿々と一瓢の酒を酌み、已に飲んとせし處に、彼漢子これを見て、飛がごとくに馳回り、急に彼客が酌持たる酒を奪ひ取て、忽ち桶の内にうつし入れ、乃ち又桶の蓋を緊と蓋して、七人の棗客に向て云けるは、汝七人の客は相貌も卑しからぬが、何ゆゑ一瓢の酒を貪てかく閙しめ候ぞや、誠に人物とは大に相違したる、醃臟心かな、とぞ罵りけり。さて彼十一人の廂禁軍等は此光景を見て、頻に羨しく酒を飲ん

我もし早くかゝることをしらば、返答にも及ぶまじきに、晦氣套話を聞ものかな、とて、又松の樹の下に來て、猶閙しかりける所に、對面の松林の内より彼棗客、毎手に刀を提て走り出で、乃問て云けるは、汝等は此所にて、何事を閙ぐや。那酒賣漢子が云く、我此酒を岡の下の村に、運んで賈んと思ひ、先暫時此所に休息し、暑氣を避んとする所に、彼客等が酒を沽んと云故、我只價を論ずるのみにして、未だ酒をも賣ざる處、彼一人の旅客、我此酒の内には、蒙汗藥を入たらんとす、豈晦氣ことにあらずや。棗客等七人是を聞て哈々と打笑て云けるは、我等は只賊來りたると思ひしに、原來かくのごとくの事ならば、縦閙しきとて、何の妨かあらん、我輩も幸ひ、酒をがなと思ふ折節なるに、彼客すでに疑をなすならば、汝肯て我輩に賣與へんや。彼漢子が云く、我酒の内に蒙汗藥を入たるなれば沽給ふことなかれ、我も又賣申まじ。七人の棗客がいはく、汝何ぞかく言を一列に叙るや、我輩は曾て、汝が酒に蒙汗藥の入しとはいはず、汝疾一桶を分つて我等に賣れ、世間に又多く、湯茶粥等を施してだにも、人の飢渴を救ふ善人も有ぞかし、汝いかんぞ我等が渇を救はざるや。彼酒賈が云く、客等に酒を賣んには、少しも爭ふ所なけれ共、則彼客等に惡言せられ、二つには碗瓢無して、酒を舀飲しむること能ばざるゆゑ、これを賣ざるなり。七人の棗客が云く、碗瓢は我輩これを携へり、

那漢子既に、岡の上に登り來て、松林の裏に桶を卸し、坐をなして、憩ひ納涼む。十四人の廂禁軍等、卽ち彼漢子に問て云けるは、汝が此桶の内には、何かあるや。彼漢子答へていはく、我此桶の内なるは乃ち白酒なり。廂禁軍等又問ていはく、汝何の所に運んでこれを賣や。彼漢子がいはく、岡の下の村有所に至てこれを賣ふ。廂禁軍等がいはく、幾ばくの價に一桶を賣や。彼漢子が云く、實に一桶爲目五貫の價なり。廂禁軍等是を聞て商議して云けるは、我輩又熱く又渴きぬ、宜く此酒を買取こゝろよく一盃を酌で、暑氣を避まじきや。十四人の者、一同に然り、と悅で、則錢を出し合んとしける所に、楊志これを看て、大に怒て云けるは、汝等衆人何をなすぞ。廂禁軍等答ていはく、我輩酒を沽て飮んと欲するゆゑ、各自の錢を湊んとす。楊志彌怒り鞭を揚げ、又打罵て云く、汝等我下知も待ず、何ぞ妄に、酒を沽て飮んや。廂禁軍等が云く、提轄又我輩を、鬧しむるや。各自らの錢を出して、酒を沽に、提轄何の干ることかあつて、亦復人を打給ふや。楊志が云く、汝匹夫、各身に大事のこと有を忘れ、早くも口を貪るや、汝らかつて道中の艱難をしらず、誠に幾ばくの豪傑が、道中に於て、妄に酒を飮み、遂に蒙汗藥に中られ、身を委ねて、賊の手に害せらる、汝ら必ず此酒を沽ことなかれ。彼漢子此言を聞て、楊志を見て冷笑て云く、汝此旅客は、何ぞかく善惡を一列にみるや、

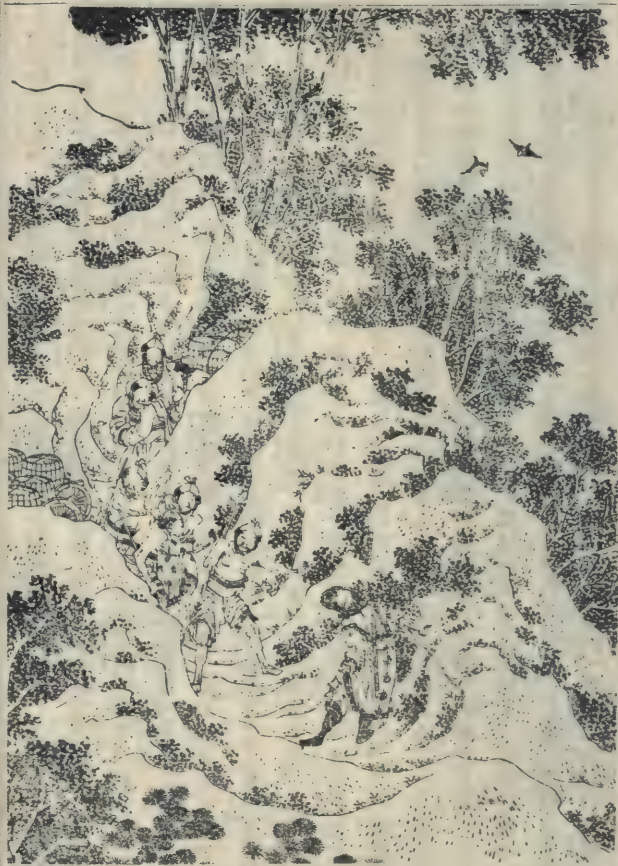
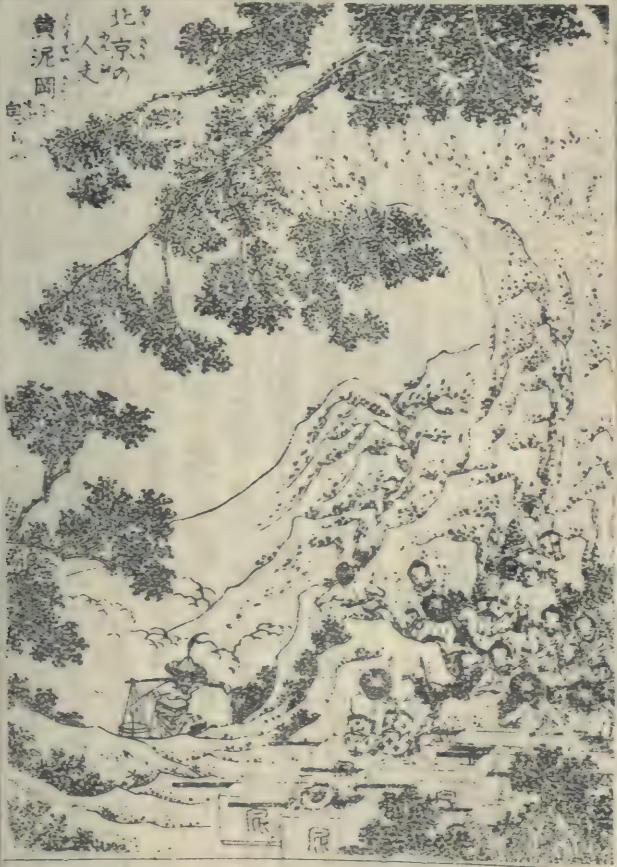
に登つて、炎熱甚だ堪がたき故、暫く先車を駐て、休息をなす所に、俄に人音あるを聞て、賊ならんと疑ひ、私に一人を出して汝を窺はしむ。楊志是を聞て初て心安んじて云けるは、原來かくのごとくんば、同く是一樣の經紀人なり、汝今私に我を窺ひ看たるゆゑ、恐くは盜賊ならんと思ひ、則此處に馳入て汝らを尋ねみたるなり。七人が云く、既に斯の如くんば、互に異儀なし、貴客棗を用ひて、暑氣を避給はんや。楊志が云く、我素より棗は嫌ひなり、とて、則叉刀を提て、擔の邊に歸りけり。老都管楊志に向て、已に賊あらば、我輩早く岡を下るべし。楊志が云く、我向には賊ならんと思ひしに、原是東京に棗を運ぶ經紀人なり、少しも怕るゝことなし。老都管が云く、汝は今彼を見て盜賊なりと云て、我らを驚かしめけるが、いかんぞ叉經紀人なるや。楊志が云く、汝事なくんば、これ幸ひならん。何ぞ只顧我を尤るや、暫く先此所に休み、日中過て涼しき風起らば、方に此岡を下るべし。十四人の廂禁軍是を聞て、一笑を催しけり。此時楊志は一邊の樹の下に坐して、暫く扇を揺て、憩ひ居ける處に、遙の下より一人の男、一荷の桶を挑ひ、擅に曲を唱て、岡を上り來る。其曲にいはく、

赤日炎々似二火燒一　野田禾稻半枯焦

農夫心肉如二湯煎一　樓上王孫把レ扇搖

言なるをしらず、妄に自大なるこそ愚なれ。楊志再應答んとする所に、俄に向の松林の内に人影顯れて、一人の漢子頭を舒し脳を探りて、私に楊志等が諍ふを望看る。楊志これを見て云けるは、老都管林の内を看候へ、すでに盗賊出來りぬ、とて、たちまち鞭を弃刀を採り、林の内に走入り、即罵り呼はつて、汝何者なれば擅に我擔子を窺ひみるぞ、早此を立去んや、とて、傍をみるに、七輛車を排並べて、七人の漢子赤條々になつて乗涼居る。此内一人の漢子、鬢の邊に大いなる硃砂記ある者先刀を取て、楊志が前に進み來りしかば、殘る六人の者共も一度に喊んで跳來る。楊志大に怒ていはく、汝等は何者なるや。七人の者が云く、汝は又何者なるぞ。楊志これを聞て大に吼て云く、汝等は必ず賊徒にはあらずや。七人の者呵々と打笑て云く、汝こそ賊ならんに、反て我等を賊と云や、我等は本貧き商人なれば、汝に與ふ財寶なし、汝徒に望を起すことなかれ。楊志が云く、汝等我に與ふる財寶なくんば、何ぞ我のみ汝に與ふる、財寶あらんや。七人の者又問ていはく、汝は實に何者なるぞ。楊志が云く、汝等は先何の所より來るや、先汝等が出所を聞ん。七人が云けるは、我らは本濠洲の棗商人なるが、今東京に運んで、商はんと欲し、既に此道を過る、此黄泥岡の上には、白晝にも賊有て、旅人を劫ふと聞及べり、然れ共我輩は少しの棗有て曾て錢財なし、故に敢て此道を過る、今此岡の上

に怒て云く、汝等小人、何ぞ我に彎拗や、我今汝等を二十鞭打ずんば休まじ、とて、又籐の鞭擧て、散々に打ければ、老都管大に呼つて云く、楊提轄且彼等を敲ことを止て、我云ことを聞け、我東京の蔡太師に從て、嬭公の職をなせし時、門下の官軍千となく萬となく、盡く頭を低て我を尊敬しぬ、我自誇言を云にあらざれ共、汝がごときは、是死に當るの流人なり、然るを相公不思議に憐を垂給ひ、遂に汝を擡擧て、提轄の職を授け給ひぬ、汝かくのごとき、小職に在て、何ぞ直に自大を振舞傍若無人なるや、我は是相公の家の、都管たることは扨置き、假令賤き民の老翁たりとも、道を知人は、年長の諫を容ゆ、然るに汝我諫を容ずして、一向彼十四人の者を箠は、是いかなる所爲ぞや、汝自ら汝が分量を知れ。楊志が云く、老都管汝は原來城中の人にして、蔡太師の家にて生長したるゆゑ、曾て道中の千難萬苦を知ず、汝只能我所爲に從ふべし、相公汝等にも命じて、不佞此度道中の棟梁として、下知を背くまじと、嚴かに宣ひしは忘れたるや。老都管が云く、我も曾て四川兩廣等の地を過り、道中の善惡も略これを試ぬ、何ぞ汝が云ごときのみならんや。楊志が云く、今の時は太平の時に比しがたし、汝これを一列にみることなかれ。老都管大いに恚て云く、汝が今の一言は、口を剜舌を割の罪に當れり、今日の天下何ぞ、太平ならざるや、又相公汝を旅行の棟梁たらしむとは、一時の挨拶、當座の美

北京の人走
黄泥岡

ば又倒れ、彼を敲起せば、これ又倒れ、楊志も手に餘したる處に、老都管と兩人の虞候は此光景を見て、急に楊志が前に來りて云けるは、楊提轄彼等を怨み給ふことなかれ、我輩も實に此處は炎暑に苦で、一歩も進みがたし。楊志が云く、老都管はいまだ此所を知られざるや、此處は是强盜の出沒なり、乃ち名づけて黃泥岡と申す、常々太平の時だにも、白日に盜賊出て、旅人を劫ふ、況や今の時節に、誰かあへて此處に足を歇て憩んや。兩人の虞候これを聞て云けるは、楊提轄はいくたびか、かくのごときことを云て人を嚇し給ふ、我まつたく是を信じがたし。老都管が云く、權且彼を歇めて、日中過なば又好路を促て行候はんや。楊志が云く、是より岡を下るには、尙七八里の路あり、其間は都て險阻の徑にて、一間の破敗屋もなし、いかんぞ能此處に休んや。老都管が云く、我はしばらく、且此處に歇んで後より來んに、汝は先に行給へ。楊志是を聞て返答にも及ばず、乃ち策を擧て彼十四人の者を責て云く、汝ら早く起上つて、此岡を過るべし、若我下知に從はずんば、二十鞭を與へん、と猶頻に恚りければ、十四人が内一人いはく、我輩は百十斤の重擔を荷ひけるゆゑ、身體大に疲て、身すがらの、人と同じからず、楊提轄は何を以て、人を禽獸のごとく覰給ふや、たとひ梁中書相公自ら來て、監押し給ふ共、などかは我らが一言を、容ひ給はざらん、楊提轄詳に、是を察し給へ。楊志大い

此日の路は、甚だ險しき山路にて、十四人の廂禁軍等、遂に腿酸脚軟て、常よりも莫大に苦み、十四人私に云合せて、柳の樹の下に、擔を卸して、歇んとしければ、楊志これを見て、策を揚聲を勵まし、罵りけるは、汝等は善惡を辨ざる愚人かな、此處は村里に同じからず、何ぞよく心を安んじ歇んや、一刻も早く急げ、と當先に進で馳ければ、十四人の者齊しく楊志を恨み、口の内に喃々訥々罵詈る。當時楊志は遂に衆人を催促して、山中の險路を行ける處に、時已に午の刻に至て、暑熱いよ〳〵酷し。路邊の小礫、渾て燒て、火の足下に起るがごとくなれば、衆人大に脚を痛め進むこと能はず、愁て云けるは、かゝる炎暑に片時も休ませざるは、人を晒殺す道理なり。楊志これを聞き、大いに憤き、汝等益なきことを云んより、早々向うの岡を馳過べし、彼岡をだに過なば、汝等を歇ません。衆軍漸々楊志に 隨て往ければ、時を移さず、十五人の者岡の上に馳登り、暫く息を續んとしける處に、彼十四人の者、悉く擔を卸し、松の樹の蔭に睡り倒れて、再び起上らざりしかば、楊志是を見て、大に苦しみ、乃ち十四人の者に向て云けるは、汝等は此處をいかに思へるや、これ則ち第一の惡所なり、速に起て此岡を馳下れ。十四人が云く、我輩 重擔を肩にかくる故、足下とは同じからず、假令身を七八段に斬裂るゝ共、實は行こと能ふまじ。楊志恚き限りなく、籐の策を以て散々に打けれども、これを打起せ

日中にも歇まず、動不動疼く策うたる、人の身は貴も賤しきも、都て同じく父母の皮肉なり、某等假令賤き身たり共、何ぞかくの如く苦みを蒙るや。老都管が云く、汝等先怨を休よ、我東京に至らば、汝らを重く賞すべし。廂禁軍等が云く、老都管のごとく人皆情あらば、某ら嘗て怨る所なし、然れ共世間には、只情なき人多し、とて、私に楊志を譏て、其夜は各歇みけり。翌日天色いまだ明ざるに、十四人の者齊しく起立ち、涼さに乗じて打立べし、と楊志を呼起しければ、楊志起上り、大に罵て云く、汝等匹夫何ぞ早打立んとは云ぞ、時分は我提調すべきを、妄に喧きことなかれ。廂禁軍等が云く、朝の内涼しき時に往ざれば、日中熱くして往に悩めり。楊志が云く、汝等愚輩、何をか暁さん、若猶我下知に背かば、痛く敲べきなり、とて、遂に策を取て、大に怒しけるに、廂禁軍等已むことを得ずして、再び打臥し、只心中にぞ怨みけり。此日楊志は直に、辰の刻に至て起上り、乃ち廂禁軍等を催し、已に旅宿を打出で、一刻片時も歇ず、息をも繼ず急しかば、廂禁軍等大いに怨み憤る。兩人の虞候は、老都管が前に來て、楊志がことを譏けれ共、一旦梁中書の命もあり、楊志も剛勇の人なれば、老都管は只心の内に、楊志を怨みて、口頭には出さゞりけり。既にして路を行こと十四日に及びしかば、十四人の廂禁軍等、悉く倦疲れて、楊志を寃ること限なし。此時六月四日にて、天氣大に熱し。殊更

二編　巻之十五

○呉用生辰綱を智をもつて取る

偖も楊志に倶せられし、兩人の虞候、ます〱倦じ疲れ、柳の樹の下に立憩うて、老都管を待受け、これに告て云けるは、楊志今某兩人を罵つて甚威を震へり、彼は只是提轄の分として、何ぞ斯無禮をなすや、願くは老都管、彼を嚴しく來殺給へ。老都管が云く、向に北京を出る時、相公已に我輩三人に命じて、楊志が下知に彎拗なと、再三命を蒙りぬ、これ故に我氣を忍び聲を呑で、彼が自像をなすを、虚目に覩て耐へり、然れ共此兩日は、我も渠を憤ること方寸に逼れり、唯恨らくは相公の命あるに依て、彼を來殺ことなりがたし。兩人の虞候が云く、相公の命じ宣ふ所は、唯是當座の挨拶にて、本不意に出たる詞なり、何ぞ再三これを守り給ふや。老都管がいはく、今日は先權くこれを忍ぶべし、とて、其日申の刻に、旅宿を求めて歇けり。此時十人の廂禁軍は、滿身に汗を流して大に嘆じ、乃ち老都管に對していひけるは、我輩不幸にして、廂禁軍となり、かくのごとき炎天にも、終日重擔を荷ひ、剩へ此兩日は、

しめ候が、此両日は何故又、日中にも歇ませずして、只顧路を促給ふや、是却て足下こそ心なきと云ん。楊志が云く、汝何ぞ套話を云や、前日の路は都て村里有て穏なり、此両日の路は都て甚だ険阻にして村里なし、このゆゑに、我日中に道を急ぎ、五更半夜に行ことをなさず、汝ごとき愚輩は、只其一を知て其二を知らざるなり。兩人の虞候は口に左右を云ざれども、心には却て、楊志が罵りたるを憤りぬ。楊志は刀を提策を持ち、擔に引傍て急ぎけり。

此巻に云ふ傘蓋山、通俗忠義水滸傳に金蓋山とあり、恐らくは非歟。

已に北京の城門を打出で、大路より馳て東京を望んで進發す。此時五月の中旬にて、天氣淸明たれ共、暑熱甚だしく人を蒸し、衆皆大に苦みけり。いづれも毎日五更の比、宿を立ち、涼きに乘じて路を急ぎ、日中に至て甚だ熱き時は、また暫く擔を卸させて憩しめ、既に七八日も經たりしかば、漸く險阻の地に相近づき、村里も少にして、過る所都て山路なり。彼十一人の廂禁軍初のほどは、楊志が下知にも及ばず、各精神を勵まし、路を急ぎしかども、疲れに隨つて、擔益重く覺え、殊更炎熱堪がたきまゝ、大に身心を苦しめ、動不動林の内に入木陰を頼んで憩んと欲す。楊志は是を緊しく催促し、或時は罵り、或時は策うち、此兩日は日中にも歇まざりしかば、衆皆心中に恨を含めば、彼兩人の虞候も、自ら包裹を背けるが、此時に至り殆倦疲れ、此彼に站往て休みければ、楊志是を責て云く、汝兩人共に、畢竟益なき輩なり、かく大事を身に干り、何ぞ擅に私の自由を貪るや、汝心ある者ならば、我に代りて、彼脚夫等をも、催促すべき處に、卻て後に落り跡に後れ、偏に我陶氣となるは、これ何の道理ぞや、此路は是反人多くありて戲耍の處にあらず、汝自ら懶惰なることなかれ。二人の虞候が云く、我輩實に懶惰をなすにあらず、天氣甚だ熱きゆゑ、身倦足軟て速に行こと能ず、是に依て後落りぬ、前日は專ら涼きに乘じて、朝晩の路をのみ急ぎ、晝の内は暫く、休め

梁中書が云く、此事何の妨有べき、我彼三人に命じて汝が下知聊も背せまじ。楊志答て既にかくのごとくは、即刻彼三人の者を召て、某が親前に於て、厳に命じ給へ。此時梁中書乃ち三人を呼出し、命じけるは、此度楊志に十萬貫の金銀珍貨を委ね東京に蔡太師の誕辰を慶す、最楊志此行に於て、諸人の棟梁たるべし、汝等は又夫人が内用を調はしめんが爲、楊志に差添へ、等く東京に遣すなり、道中一切の事、宜く楊志が下知に従ふべし、必ず楊志に拗て、大事を誤つことなかれ、若一點の疎失あらば、重く罰を行ふべし、大小の事聊も、揚志が下知に背ば、是又汝等を罪すべし。三人の者謹で命を受け、一々領承して退きけり。此時楊志は肇て安堵をなし、其日諸事全く相調ひ、翌日五更の一天に、總て十櫃の擔を廳前に排列れば、彼三人の者は、又夫人の禮物を一櫃に納め、同じく是を廳前に運び來る。都合十一櫃の擔を、目錄に記し、健なる廂禁軍を、脚夫の形に打扮せて、これを挑はしむ。楊志が裝束頭には薄錦の笠を戴き、身には青紗の衣を著し、腰には腰刀を帶し、手には朴刀を提け、老都管同じく、商人の粧に打扮ち、兩人の虞候は、假に従人の體に打扮ち、各々手には朴刀を提け、極めて嚴なり。梁中書乃ち一封の書簡を修へて楊志に與ふ。楊志是を請取り、事已に完く備りければ、遂に梁中書に辭し、廳前を退り、老都管及び、兩人の虞候と共に擔物を押監し、

廂禁軍十餘人を、脚夫の形に打扮せて、これを挑はしめ、悄々に路を急て、直に東京に馳往ば、多くは誤なからん。梁中書是を聞て、大に可して云けるは、汝は智勇兼全き、豪傑と云べし、我一箇を修して具く蔡太師へ頼み、今般早速に立身せしむべし。楊志頓首して深く恩を謝し、卽日十萬貫の禮物を十櫃に分ち粗物擔に造り成し、急に廂禁軍を撰けり。翌日梁中書又楊志を呼で問て云けるは、汝何の日に發足せんや。答て、事完く調りし上は、宜く明日打立候べし。梁中書が云く、我夫人も別に又禮物有て、蔡太師に獻る、殊更諸親類中に、書簡及び內用等も繁多なれば、本夫人に隨て我家に來りける嬭公老都管幷に虞候の官兩人を、汝に相添て遣すべし、此輩には皆夫人が內事を調はしめん。楊志是を聞て、大いに悅ばずして云く、某往こと能ふまじく覺え候。梁中書、諸事調り、已に明日の發足と定て、今急に往まじきと云はいかんぞや。楊志が云く、此度の禮物、渾て某が身に相預り、諸人も亦某が心に相從ひ、某が下知を守らば、方によく往候はん、然るに今嬭公老都管、幷に虞候等を差添給ふこと、某が本望にあらず、彼等は夫人の用人と云ひ、殊更蔡太師門下の嬭公なれば、若道中に於て、某に拗るとも、某豈能爭ふことを得ん、若萬一大事を、誤つことあらば、罪は却て某一人に歸し、これを分說せんこと難かるべし、此故に某往こと能ふまじくとは存じ候なり。

擡舉て、昇進させしめんと思ふゆゑ、別に一通の書簡を修て、汝がことを蔡太師へ懇に頼み遣はさんと欲す。しからば汝必ず、蔡太師が奏聞に依て、宜しき勅命を蒙り、遂に立身することあらん。汝何ゆゑ却て、是を辭退に及べるや。楊志が云く、相公去年も既に、禮物を送り給ひしか共、盜賊の所爲に劫奪はれしと承及べり、今年は道中に、盜賊益多し、此より東京に往には、都て旱路にして、更に水路なし、其過る所には、則是紫金山、二龍山、桃華山、傘蓋山、黄泥岡、白沙塢、野雲渡、赤松林等の險阻あり、此數ヶ所は皆強盜の出沒なり、身邊に貨なき旅客だにも、此數ヶ所の地は、一人通ることをせず、况や此般は十萬貫の金銀珠玉を、運ぶことなれば、盜賊是を奪はんとするは必然なり、此ゆゑに某尊命に從ひがたし。梁中書がいはく、かゝらば多く士卒を添て遣すべし。楊志が云く、相公縱五七百の士卒を添給ふとも、其益有ことなし、此輩は若盜賊來ると聞ば、各車を捐置先を爭うて逃散べし。梁中書が云く、汝が言のごとくならば、禮物を送ること能ふまじ。楊志が云く、若某が計較に從ひ給はゞ、まさによく送り届くべし。梁中書がいはく、我原來十萬貫の禮物は、盡く汝が身に委ぬ、何ぞ汝が計較に從はざらんや。楊志が云く、若某が計較に從ひ給はゞ、禮物を車に載ことを休て、乃十餘櫃の粗物擔に做り成し、詐つて商客の體に妝ひ、又健なる

一兩日の中に、發足なさしむべし。然れ共猶一つの事有ていまだ完からず、此故に儘是を躊躇す。蔡夫人が云く、何等の事いまだ完からずして、頻に躊躇し給ふや。梁中書がいはく、去年も已に數萬貫の金銀珠玉を、東京に送らしむる所に、押貨人聰明ならずして、盗賊に禮物を奪はれぬ、今帳前に人多しといへども、此押貨人たらしむる、智勇の者なし、是に依て躊躇して決せざるなり。蔡夫人堦の下を指ざして云けるは、相公常に、彼者が智勇を嘘吹し給ふに、此度の押貨、何ゆゑ渠には命じ給はぬや。梁中書堦の下をみるに、靑面獸楊志、其日の當番として堦の下に相詰あり。梁中書大に悅で、卽楊志を呼で廳上に至らしめて云けるは、我此度全く汝がことを忘たり、汝辛苦を避ず、我爲に誕辰の禮物を押貨して、東京に送り屆んや、然らば我早速汝を擧て、大役に就しむべし。楊志命を承て謹で云けるは、相公の尊命最違きがたし、然れ共只しらず其禮物は、馬に駝給ふや、又車に載給ふや。梁中書が云く、禮物は十輛の車に載で運ぶべし、又帳前の廂禁軍、十人を汝に添て、車に跟しめん、車毎に各一つの黃旗を插して、その旗の上には又、蔡大師に獻ずる誕辰の禮物と、大文字にて書付べし、汝宜く近々發足せよ。楊志が云く、某尊命を、辭するにはあらざれども、願くは赦宥を蒙らん、別に然るべき、英雄伶俐の士を撰で是に命じ給へ。梁中書が云く、我原來汝を

歸らるべし、期至らば、早速來て會合し給へ、吳先生は常のごとく、門弟を聚めて、讀書の敎授をし給へ、公孫先生劉公二人は、我館に滯留し給へ、尤各穩密なるべし。六人の者これを聞て然りと同じ、其夜は猶三更の左側迄、酒を酌で相勸め、盃つひに收りければ、衆みな客廳に入て歇みけり。翌日又晁蓋美々しく早膳を設て六人の豪傑を款待し、乃又三錠各十兩宛百目銀を取出して、これを阮家の三兄弟に分送て云く、某敢て微儀を將て、薄意を表す、願くは咲納し給へ。三阮これを見て、再三再四辭推に及びければ、吳用が云く、朋友の志これを拒り給ふことなかれ。こゝに於て、三阮辭することを得ず、遂に是を納めて、去來囘り申すべし、とて、已に別を告ければ、晁蓋ら四人、是を送て門外に出來る。此時又吳用阮家三輩の耳に附て、此のごとく、此のごとく、と低言て、委しく計を示しければ、三兄弟計を聞て遂に石碣村へぞ歸りけり。吳用は再び私宅へ歸つて、門弟を指南しけれども、閑を偸んで、毎日晁蓋が館に至て、專ら此事を商議しける。玆に又北京大名府の梁中書は十萬貫の禮物已に調りければ、近日人を撰て東京に送り遣さんと思ひけれども、いまだ其才幹なる者を得ずして、ある日後堂に在て只顧躊躇して居ける處に、蔡夫人來て、則梁中書に問て云けるは、東京に送る誕辰の禮物は、何の日、發足なさしめ給ふや。梁中書が云く、禮物ははや盡く調りしかば、

黄泥岡の大路より來るなり。晁蓋が云く、黄泥岡の東十里安樂村と云所に、一人の漢子あり、其名を、白日鼠白勝と號す、前年彼者艱難に逼り、嘗て我館に來て、路費を索しゆゑ、我厚くこれを惠めり、若彼を用る所あらば、共に是をも招くべし。吳用大に悅で云く、保正の夢にも、七星の外別の小星有て、白光と化して飛去しは、則此人の身に應ずる所なり、此復用ゆべきことあり。劉唐が云く、此處より黄泥岡へは路遠し、何の所を得て身を歇んや。吳用が云く、此乃ち白勝が家を借て、身を休歇べし、白勝も亦衆中に加へ、計を授けて行はしめん。晁蓋が云く、吳先生今度の計畢竟如何ぞや。吳用打笑て云く、計は其模樣に因て行ふべし、力を以て取べくは、則力を用ひて取ん、智を以て取べくは、則智を以て取ん、然れども先一つの計あり、知ず尊意に合ひ申さんや。晁蓋が云く、如何なる計ありや、速に示し給へ。此時吳用六人の豪傑に對して、此の如く、此のごとく、と低言ければ、晁蓋これを聞て大に悅び、天晴神妙奇特の計なり、宜なる哉人皆先生を稱して智多星と云こと、尤當れり、縱諸葛亮が謀たりとも、亦此策に養るまじ。吳用が云く、重ねて計を沙汰し給ふ事なかれ、諺にも壁上にも須く耳有べし、窓の外に豈人なからんやといへり、只汝知り我知て、必ず人に知られんことを怕るべし。晁蓋が云く、阮家の三英は、先石碣村に

は、當世の豪傑なるゆゑ、天下の義士德を慕て、訊來る者多し、是を以て保正の平生を知ぬべし。晁蓋が云く、某下愚たりといへども、僥倖に先生らのごとき、英雄に訪らはる、今日も已に猶、幾ばくの豪傑來て、後堂にあり、共に對面なさしめ申さん、とて、再び公孫勝を延て、後堂に移りければ、劉唐三阮即ち出て對面し、大家悅を催して云けるは、今日此參會等閑のことにあらず、眞に天の引合する所なり。此時吳用が云けるは、保正は宜しく、第一位の座に就給へ。晁蓋が云く、某不能不才の貧主として、豈敢て自ら座を高くせんや。六人一同に云けるは、保正二位の座を讓り給はゞ、誰か其座を犯し申さんや、願くは速に坐して、各其座を定め給へ。是に於て晁蓋辭すること能ず、遂に第一座に坐してければ、吳用は第二位、公孫勝第三位、劉唐第四座、阮小二は五位、阮小五は六位、阮小七は七位、各次第を論じて、座已に定りければ、則大酒宴を設け、殊更悅び樂んで、飲酌を催しけり。吳用が云く、保正の靈夢に、北斗の七星直に屋脊に墜たると見給ひけるが、今日果して我輩七人遂に座に聚る、是則夢の瑞に應ずる者なり、彼十萬貫誕辰の賀儀これを奪ひ取んこと、必ず易からん、只宜く計をなすべし、劉公は先北路に打出て、一套の富貴の過る道筋を聞定め給へ。此時公孫勝が云く、只此事のみならば、劉公此行は休給へ、某詳にこれを知れり、彼等が過る路は、

を、憚らざるに似たれども、これは是都て、百姓を剝取て集たる、不義の財なれば、たとひ取とも奪ふとも、何の妨かあらん、願くは保正我心を疑ひ給ふことなかれ、と纔に云了らんとする所に、一箇の人閣子の外より進み入り、公孫勝が衣の襟を揪て云く、汝が膽何ぞ偌大いなるや、明なる所には、王法あり、暗き所には神靈あり、然るに豈よく、かくのごとき大罪を、犯さんと欲するや、我疾閣子の外に在て、詳に汝が云ことを聞り。公孫勝これを聞き、驚き騒て仰天し、忽ち面色、土のごとくに成て、更に聲をも出さゞりけり。是何等の人ぞ、次に詳なり。

○楊志金銀擔を押送す

閣子の外より、公孫勝に聲を懸たるは、何者なれば是智多星吳用なり。晁蓋哈々と笑ていはく、公孫先生驚き給ふ事なかれ、先彼人と對面し給へ、とて、三人又新に座を列ねければ、吳用笑て云く、某久しく、一清先生の芳名を聞及べり、今日幸に此處にて、道顏を拜して、喜望外に出ぬ。晁蓋亦公孫勝に向て云けるは、這先生は是、吳學究と云人なり、皆稱して知多星と綽名す、少しも遠慮のことあらざる間、必ず隔意に存給ふまじ。公孫勝がいはく、吳先生の大名は世に知らざる者鮮し、豈料んや、天良緣を賜ひ、今日此處にて參會せんとは、誠に晁保正

一清道人晁蓋が
門前を閙す

ければ、呉用五人の者は、竊に是を避にけり、晁蓋已に後堂に至り、彼先生を請て客座に就しめ、茶纔に二三鍾を進めける處に、彼先生が云く、此所は説話するに宜からず、別に僻靜なる室あらば伴ひ給へ。晁蓋是を聞て、彼先生を延て、閑なる小閣の内に至り、賓主座定りて、晁蓋先問て云く、先生の姓名はいかん、又何の國に住し給ふや。彼道士答て、某が覆姓は公孫、名は勝、道號は一清先生と呼る、乃蘇州の産生にして、幼き時より好で鎗棒を習ひ、略武藝を曉し候、又一家の道術を學び得て、能風を來し、雨を喚び、霧に駕雲に騰る、此故に人皆、某を稱して入雲龍と申す、某久しく保正の大名を聞しかども、尊顏を拜するに由なし、仍て空しく今日に至れり、今某十萬貫の金銀珠玉を、保正に獻じて、初相見の禮を表せんと欲す、保正いかゞ是を納め給はんや。晁蓋是を聞て早く悟り、乃答て云けるは、先生の宣ふ十萬貫の寶物は、誕辰の賀儀にはあらずや。公孫勝大に愕然て云く、保正は何を以て、よく是を知り給ふや。晁蓋が云く、某胡亂に推察いたしぬ、しらず先生の言に中りたるや。公孫勝が云く、某が言は實に此梁中書が東京に送る誕辰の賀儀なり、是一套の富貴、必ず失ひ給ふことなかれ、古人の語にも當に取べきを取べし、過て後悔ることなかれ、と云ことあり、保正畢竟尊意はいかんぞや、某今日初て、保正と對面し、早速此等の大事を以て諫め申は、却て尊慮

て居たるに、汝何ぞ再三來て我を妨るや、重てはいか樣のことを云共、決して我に知らすることなかれ。家僕言を領して再び門前に出けるが、良久しうして、門外大いに鬧ぐ聲あつて、又別に一人の家僕、飛がごとく馳來て、晁蓋に報て云けるは、彼先生大に怒て、我輩十餘人を打倒し、尙吼り狂うて、門外を鬧しめ候。晁蓋是を聞て大に駭き、乃ち五人の豪傑に向て云けるは、足下らは先快く酒を酌給へ。某自己に出で、事を治め來らん、とて、竟に門前に至りこれをみるに、一人の道士身の丈八尺計も有らんと見えて、相貌堂々として、儀表直ならず。彼士猶怒罵て云けるは、汝都て人を識ざる匹夫等、我を等閑の輩と、一列にみることなかれ。晁蓋すでに進んで、彼道士に對して云けるは、先生今晁蓋に見えんと欲するは、米を求ん爲ならんに、家人等已に米を與へなば、別に事あるまじき所に、何故再三門前を鬧しむるや。彼先生哈々と大いに唉て云く、我は是酒食米錢のために來ず、唯十萬貫の爲に、保正を訪ふなり、這等の匹夫共、某を罵るゆゑ、一時の怒に乘じて、門外を鬧しめ候。晁蓋が云く、先生は本、晁蓋を識認給ふや。彼先生が云く、只其名を知て、其面を識ず。晁蓋が云く、晁保正とは、則某が事なり、先生何の事ありや。彼先生是を聞て、忙しく禮をなして云く、願くは保正一時の失敬を発し給へ。晁蓋がいはく、先生先内に入て茶を進め給へ、とて、延て内に入

模様なる先生來りけるが、主人に相見えて、米を求んと欲す。晁蓋がいはく、汝すでに我は今客に相伴して、酒を酌を知りながら、何ぞ這等のことを我に報るや、汝速に六七升の米を與て回すべし。家僕が云く、某已に米を與へけれ共、彼却つて米を受ず、唯願主人に見えんことを願ふ。晁蓋が云く、これ定めて輕少なるを嫌うてのことならめ、宜しく二三斗の米を與へて回すべし、汝又彼に告んには、保正は今日内客を得て忙はしきゆゑ、見えがたし、猶佗日來れと云ふべし。家僕命を請て、後堂を出けるが、少刻もあらざるに、又來て云く、某今三斗の米を與へけれども、彼又米を受ずして自ら稱して云けるは、我は是一清道人なり、曾て米錢の爲に來らず、唯保正に見えんことを、欲するのみと申す、願くは見え給はんや。晁蓋が云く、汝もと、答應を能せざるゆゑ、彼再三かくのごとくならめ、汝何ぞ今日は客有て忙はしきゆゑ、まみゆること叶はず、異日又來り給はゞまみえ申さんとはいはざるや。家僕が云く、某已にさのごとく、申せしかども、彼先生が云けるは、我は原米錢の爲に來らず、實に保正、義士たることを聞て、一見を求めん爲のみなり、と申して、米を以て眼にかけ候はず。晁蓋が云く、汝何ぞ這體のことを了解ざるや、これ猶米の少きを嫌うてならん、汝自ら四五斗の米を與へて、宜しく申聞すべしと、實に客なくんば、見えんこと易かるべけれ共、汝が知るごとく事の商議し

晁蓋大に喜び、早速家人に命じて、美々しく酒宴を設けしめ、頓て飲酌を催しける。三阮兄弟等は晁蓋が人物軒昂にして、言語洒落なるを見て、大に心服し、晁蓋に向ひ、某ら極めて、豪傑を慕ふといへども、保正を訪ふに便宜なく、虚く年月を過せり、今日もし呉先生の、導を蒙らずんば、豈はやく、尊顔を拜することを得べきや、今日の參會誠に雀躍に堪ざるなり。此時劉唐も、又肇て三兄弟に相見え、互に心を傾け、隔意なかりけり。晁蓋自ら盃を執て相勸め、酒已に闌にして、日漸晩ければ、又燈を秉て夜飲を催し、閑談良久しうして、二更の鐘聲遂に席上に到れば、盃も收まり各も退き歇けり。翌日又晁蓋又後堂の前に、猪羊を供へ、金錢紙を燒て、盟を結びければ、三兄弟は、晁蓋がかくのごとく志誠なるを見て、大に感じ、則香花燈燭を列ねて、各盟を說ていはく、梁中書今北京に在て、專ら民を虐げ財寶を劫取り、今度十萬貫の賀儀を東京に贈つて、丈人蔡太師が誕辰を慶す、是則不義の財なり、此故に六人心を同じうし、力を合せて、これを奪ひ取んと欲す、若六人の內、別意を起す者あらば、忽ち天地の誅、神明の罰を蒙るものなり。六人の豪傑各誓を演了ければ、再び後堂に入て後堂に入り、六輩の座已に定りければ、呉用則晁蓋に對して、始終一々に相達す。晁蓋大て又酒宴をぞ設けける。かゝる所に、一人の家僕來て、晁蓋に報じて云けるは、門前に道士の

めて、山の凹の僻靜なる所にて、這一套の富貴不義の財を劫し取て、大家これを平に分ち、同じく一世の樂を圖んと欲す、今日某鯉魚を索んと云しは、原來詐にて、他聞を掩はん爲なり、足下等彌力を戮せ、これを取べきや。阮小七身を跳起して云く、某等一世の望、此度に畢ぬべし、恰も癢き所を搔がごとし、知らず先生何の日に、某等を誘引して囘り給ふや。吳用が云く、事遲はるべからず、明日五更の一天に打立べし。三兄弟大に悅び、又盞を揚て、良久しく相勸め、其夜は各歇みけり。

○公孫勝七星に應じて義に聚る

三阮兄弟吳用ともに、醉に快一睡し、夜も已に、五更の時に至りしかば、等く起て打點をなし、遂に石碣村を打出で、足に信せて急ぎける程に、其日東溪村に著して、直に晁保正が館に至りける所に、晁蓋は劉唐と、槐樹の下に在けるが、吳用已に阮家の三兄弟を誘引したると聞て、掌を鼓て大に悅び、乃これを延て槐樹の下に至り、六人の豪傑、已に一禮畢りければ、晁蓋先三兄弟に對し云く、足下等三雄の大名を聞こと舊し、今日天良緣を假給ひて、遂に一堂に手を握る、何の幸かこれに及んや、先後堂に移りて、一盞を進ん、と再び各を延

に出て奪取り、晁蓋に手を、空しうせしめんと欲す、しらず足下等の心底は如何ぞや。阮小五が云く、一套の富貴と云は、もといかなる來歴かはしらざれ共、晁保正は是當世の英雄なり、某ら若非道の事をなして、晁保正が爲に害をなさば、却て天下の人に笑はれん、此事に於ては先生の命に違くべし。吳用がいはく、足下らは、實に義を重んずる、豪傑なるかな、此上は彌實情を以て明すべし、一套の富貴と云は定めて、足下等もこれを察し給ふらめ、今我半路に於て奪ひ取んと云しは都て詐なり、實は此度晁保正、足下等三人の、大名を聞及び、特々我を馳せ、急に足下等を請て、共に商議をなし、彼一套の富貴、力を戮せ奪ひ取んとなり。阮小二が云く、某ら三人ともに、愚魯なりといへ共、半點の詐なし、晁保正既に這等の事有て、我輩を招て商議あらんとならば、我們豈敢てこれを辭せんや、我等一命を弃擲ずんば、乃ち這盃酒を以て誓とせん。小五小七も齊く胸を拍て云く、我這一命は我を識人に獻らん。吳用が云く、さて此一套の富貴と云は、尋常の小事にあらず、當朝の大臣蔡太師が誕辰は、六月十五日なり、よつて渠が壻、北京大名府の梁中書十萬貫の、金銀珠玉を、近日東京に送て、則丈人蔡太師を賀せんとす、是をさして一套の富貴とは云なり、今一人の豪傑劉唐と云者、已に晁保正が館に來て此事を告ぬ、故に足下等を請て、共に商議をなし、猶幾ばくの豪傑を聚

心拘束にして、人を用ること能はず、向に林冲が始て來りし時、幾乎赶回さんとせしかども、林冲再三心血を盡せしにぞ、王倫已ことを得ず、漸にこれを留ぬ、然れ共、王倫今に疑を懐きて心を隔ると聞り、彼王倫かく妄に、人を容ざる故、我輩心懶く、梁山泊に登る望を絶しぬ。阮小五が云く、彼王倫はもと儒者にして、學問も有べきに、何故かく心狭小や、若先生のごとく豁達にあらば、我們老早に山に上て、此比は彼所にぞ有らん。阮小二が云く、某ら若先生のごとき英雄に從はゞ、死を弃て報ずべし。吳用が云く、某ごとき不肖、何ぞ道に足んや、今山東河北等の地に、英雄豪傑究て多し。阮小二又云く、我も曾て彼地方には、英雄有と聞けれ共、相見ゆるに由なし。吳用が云く、鄆城縣の東溪村に、晁保正と云人あるを識給ふや。阮小五が云く、晁保正と云は、乃ち托塔天王晁蓋と云ふ人にてはあらずや。吳用が云く、乃ち其人なり。阮小七が云く、某ら彼人とは、僅百十里の路を隔けれ共、緣薄き故にや、名のみ聞て未だ對面せず。吳用が云く、かゝる豪傑に、何ゆゑ相見えざりしや。阮小二が云く、某兄弟事なければ、又那地に至らず、此故にいまだ相遇ず。吳用がいはく、某實に這數箇年は、晁保正が館の、近隣に住居して、孩子等に讀書を師範す、晁保正今一套の富貴來るを聞て、これを待取んと圖る、これに依て、某特々至て、足下等と商議を遂げ、富貴來らば、是を半途

盗をなす族は、都て罪を干したる干隔澇の類なり、萬一官司より捕はれば、後悔眼的なり。阮小二が云く、今時の官司は、却て罪なきを殺し、辜ある者を助く、縦天地を動せる、大罪を犯したりとも、何のことかあらん、若人有て某等を導て、强盗の内に加へば、某等又樂んで住べし。阮小五が云く、我も常々かゝる思ひ絶ず、我兄弟三人の武藝、人に劣るにあらずといへ共、誰かよく我らを識者なきをいかん。吳用が云く、若誰にても足下等の武勇を識て招く者あらば、足下等又肯て往給はんや。阮小七がいはく、若我を知て招く人あらば、水の裡ならば、水の裡に往ん、火の裡ならば、火の裡に去ん、若よく今日志を得ば、明日の禍、更に恨なし。吳用これを聞て、私に想ひけるは、此兄弟此のごとき意あるからは、我等に與せんこと易かるべし、先酒を勸めて、其後に密事を談んものと、又杯を執て三人に勸め、酒遂に酣に巡ける時、吳用又問て云く、足下等三人敢て梁山泊に上つて、彼賊頭を捉んや。阮小七が云く、縦彼等を捉へたりとも、何の所に獻じて、賞を請ん、却て天下の豪傑には笑はるべし。吳用が云く、某が愚意を以て惟るに、足下等今漁夫の活業を做んより、急に梁山泊に入て、共に賊首となつて、一生を安々と娛まば、これ則志を得る道理なり。阮小二が云く、先生未だ知らざる所あり、我等兄弟幾囘か、此事を商議し、彼賊衆に加らんと欲へども、彼白衣士王倫は、

し取ぬ、又是別に一般の賊なり、されば當世の官人等は、高下大小を論ぜず、都て一般に強剛を恐れ、弱を欺く、實に害を除くの意あらで、害を加ふるの心あり、奚ぞ能梁山泊に至て、林冲ごとき豪傑を捕へ得べき、若官軍等梁山泊に來らば、膽を裂き魂を消て逃去ん。阮小二が云く、我輩梁山泊に於て釣せざれば、彼等に尤らるゝことなし、故によく禍を避遁て、無事に世をわたれり。吳用が云く、既に冇斯ば、彼賊等は、却て樂を極ること、又大いならん。阮小五が云く、那們は天をも怕ず、地をも怯ず、官司をも怖ずして、恣に官家を劫し、商民を打敗り、多くの金銀資財を奪得て、扛秤を以て是を別ち、身には錦繡を纏ひ、口には珍羞に飽き、日夜に酒宴し、朝暮に酣歌す、誰か能彼們が快活を似せん、我輩三人がごときは、武藝を練熟し、膂力を有といへども、徒に碌々として、世にも容られず、豈よく佗們が娛を學び得んや。吳用は兄弟等が嘆息するを聞て心中に歡び、彼が輩斯世を寃み、官家を欺し、身を嘆く上は、必定我計に陷べきぞ、急に諫勵し内謀の衆中に銜はんとぞ惟ひける。阮小七又いはく、人間の世にあるは、恰も草頭の露に似たり、然るを我兄弟三人一點の娛きことなく、只一葉の舟に棹さし、乏き業に身を苦むるこそ、遺憾なれ、せめて朝に梁山泊の豪傑を學ばゞ、夕に死すとも甘じ就ん。吳用が云く、這等の强盜を學んで、何の益かあらん、今時强

ひけるにや。阮小五が云く、先生原此來歷を知り給はざるゆゑ、再三猜疑晴ざるなり。吳用が云く、我いまだ來歷の所以を、知らざるゆゑ、偏に不審晴ざるなり。阮小七が云く、此梁山泊のことは、一席一座の談話に盡がたし、今梁山泊の内には新に一夥の强盜來て、固く此處を守り、我ごとき漁夫の過活をなす者にも、魚を捉ことを許さゞるなり。吳用が云く、某曾て梁山泊に、賊あることを聞ざりしに、はや此のごとく威を振ふや。阮小二が云く、彼强盜等が第一の頭たる者は、本落第の儒者にして、白衣秀士王倫と號す、第二の頭は摸著天杜遷、第三の頭は雲裏金剛宋萬と號す、又此下に旱地忽律朱貴と云者有て、大道の傍に酒肆を構へ、專ら世間のことを窺ひ聞て、王倫等に注進す、此輩は、十分猛勇にもあらざれども、日者又新に、一人の豪傑加はりぬ、これ則東京の禁軍敎頭にて、其名は、豹子頭林冲とやらん號しけるが、武藝の達人にして、最强勇なり、其外にも、力量ある者多し、總て小賊五七百を集め、恣に來往の旅客を阻り住め、妄に民舍を打劫し趕散し、其猖獗こと傍には人もあらぬごとし、某らも凡一年餘り、梁山泊の裡に釣することとなし、是によつて我輩が、衣食の根を絶せしなり。吳用が云く、既にかくあらば、官司より人を來して、他們を捉しめざるや。阮小五が云く、當世の官司は、悉く貪欲の族にて、官軍の到る所、甚だ百姓を鬧し犯し、金銀財寶を劫

乃ち銀子を取出して阮小七に與へ、多く酒肴を求しめて、遂に四人酒店を出で、再び小船に駕して、阮小二が家を望んで漕歸り、暫くの間に、阮小二が家の前に至り、各岸に上て、直に阮小二が後堂に入り、座既に定りければ、阮小二乃ち所々に燈燭を照し、眞正繁華の光景なり。此時阮小二は妻子ありしかども、阮小五阮小七は未だ妻を娶ざるなり。扨三兄弟は吳用を請て上座に就しめ、已に酒宴を設け、飲酌始り、酒數盃巡りしかば、吳用又鯉魚のことを問ていはく、大いなる泊湖の裏に、何ぞ重さ十四五斤の鯉魚なからんや。阮小二がいはく、先生は未だ知り給ふまじ、此のごとき大魚は都て梁山泊の内にあり、我此石碣村の内には、大魚を得ること能はず、これ則湖の窄きゆゑなり。吳用が云く、是より梁山泊へは相通じて遠からず、本一派の水なるに、何ゆゑ彼所に往て、釣し給はざるや。阮小二嘆息して云く、先生是を問ことなかれ。吳用又云く、二郎は何に緣て、嘆息はし給ふや。時に阮小五がいはく、先生は知り給ふまじ、彼梁山泊は、本某ら兄弟が衣食の基にて有しか共、頃日は決して往ざるなり。吳用が云く、偌大いなる泊湖なれば、官司も又魚を取ことは禁じ難からんに、何の事に碍て、梁山泊には釣せざるや。阮小五が云く、官司はさて置き、閻羅大王も、豈此泊湖を禁ずること能はんや。吳用が云く、既に官司より停止禁制なくんば、何を憚て又梁山泊の衣食を、自失

て得がたし。阮小五が云く、呉先生遠く、此所に至て求め給ふに、せめて重さ四五斤の鯉魚十尾計り相送るべし。呉用が云く、某多くの償の銀を携へり、價は論ずまじきに、大いなるを與へ給ふべし。阮小七がいはく、先生大いなる鯉魚は、求給ふこと能ふまじ、四五斤の魚も早速は得がたし、且鯉魚のことを休て、快く酒を酌候へ、とて、又盃を新め、互に相勸めて酌ければ、紅日西に沈んで、天色漸晩んとす。呉用隱に想ひけるは、此酒店にては、密事を語るに宜からず、今宵は彼等が舍に一宿し、其便宜に乘じて、事を商議せんと、いまだ思ひ了らざるに、阮小二がいはく、早日も晩候へば、今宵は先生を請て我家に留め申し、明日よろしく、鯉魚の沙汰を致すべし。呉用が云く、今日は三兄弟の厚情に依て、疲を慰めたり、今宵は某又二郎公の宅を借て、夜飲を催し申さんに、此所にて酒肴を調へ歸るべし。阮小二が云く、某兄弟何ぞ敢て、先生の攪擾になり申さんや、某等自ら、淡酒粗肴を調へ、先生を欵待申すべし。呉用が云く、某此たび幸此所に至り、足下兄弟に一酒を勸んに、何の不可なることかあらん、もし足下等、これを辭し候はば、即此所より別を告申べし。阮小七がいはく、呉先生再三がくの如くんば、豈よく好意に背んや、今宵は先、先生を東道として、宜く酒を酌べし。呉用これを聞て大に悅で云く、七郎は原來性最爽なり、今宵は愈某に席主を讓給へ、とて、

呉用水村に
三阮と歡飲す

でに呉用を見て急に禮をなして云けるは、呉先生は尙我邑を忘れずして、來り給ふや、別れてより凡三年も見えざるに、今日何の幸ひにて、再び尊顔を拜すや。阮小二が云く、我今呉先生を導きて汝が家に訪ひしかども、汝家にあらざるゆゑ、直に此所に至れり、水閣に登て三盃を酌んに、去來汝も船を出せ。阮小五大に悦び、乃棹を採て舟を撐開き、三艘の舟相並て漕出しければ、時を移さず、水閣の下蓮華咲亂れたる中へ三艘とも漕寄せ、頓て四人岸に上て、酒肆に入り、水閣の上に座を列ねければ、阮小二酒店の小厮を呼で云けるは、何等の肉かある。小厮が云く、猪羊は賣盡し、只牛肉あり。阮小七が曰く、汝速にこれを十斤携へ來れ。小厮承て、牛肉十斤を兩盤に盛て持來る。阮小五呉用に對していはく、先生只能湖水の清き流を見て、これを肴に酌給へ。呉用が云く、今日某偶來て、三公の欵待を蒙る、豈酒を進めざらんや。阮小二盃を執て、呉用に勸め、已に數巡獻酬しければ、阮小五呉用に問て云く、先生今般、此處に至り給ふは、必ず別に事あらん。阮小二が云く、呉先生は、今大富人の師となり給ひて、繁昌益昔に强如り、此度來り給ふは、乃ち彼富貴人の爲に、十餘尾の鯉魚、重さ十四五斤なる物を、急にこれを求め給はんがため、特々我輩を訪ひ給ふなり。阮小七が云く、若前遭のごとくならば、十餘尾はさて置て、百餘十尾忽ち有べけれども、此節は重さ十斤なる物も、決し

給へ、とて、竟に船を並べ阮小五が家の前なる岸の濱に至りしかば、阮小二乃ち船傍に立て、高聲に呼りけるは、五郎家にあらば、早く出よ。此時阮小二兄弟等が老母猶存世して、阮小五が家に在けるが、阮小二が呼はるを聞て、乃答ていはく、五郎は日者、曾て釣にも出ず、唯博奕にのみ心を罄し、大に打輸て、下稍に盡き、今朝又我銀の簪を借て、是を下稍となし、乃ち大吉利市を祈る、賭博の場に出けるが、未だ寓には歸らざるなり。阮小二呵々と大に笑て、再び船を漕出す所に、阮小七是を聞て云けるは、我兄は博奕に火昌ゆゑにや、動すれば輸をとること速にして、本錢拂底す、我ごとき老賭だに、頃日は造化惡くして、一連に輸つゞき、酒の償にも盡はてて、晦氣く寂寞に逼るなり。呉用此言を聞て心中に想ひけるは、彼等兄弟、博奕に打輸け、身の艱難なる時なれば、必定我計に落べきぞと、私にこれを悦びけり。阮小二阮小七は、船を並べて急ぎけるほどに、はや獨木橋の邊に至りける處に、一人の漢子、二串の鳥目を持て、橋の下に來り、乃一艘の小船に跳乗て、頓て舫の索を解ければ、阮小二是を見て、乃呉用に對して云けるは、今彼小船に乗たる漢子は、是則阮小五なり。呉用此阮小五をみるに、頭には斜に破頭巾を戴き、鬢には柘榴の花を插し、身には舊夏布を著し、胸には青き豹を刺し、腰には破褌子を纏ひけり。此時呉用呼で云けるは、五郎造化克や。阮小五す

ごとき鯉魚十四五尾を需たく欲す、足下我爲に急に釣し給はんや。阮小二是を聞て打笑て云く、此こと未だ遲かるまじ、某先、先生とともに三盃を傾けて、快く別離の情を叙ん。吳用が云く、某も原來斯ぞ思ひき、何の辭することあらんや。阮小二又云く、湖を隔て、幾ばくの酒肆ある所あり、則舟を渡して、彼處に趣き、ともに昔に異ならぬ湖水の漲るを見て、これを肴に飽まで酌み、一醉に乘じ、心を語り慰むべし。吳用が云く、已にかくの如くんば、益娯からん、然れ共某先阮五公に遇たきに、今宿所に在れんや。阮小二が云く、先生もし阮小五に遇んと、欲し給はゞ、某も倶に彼が家に趣き申さん、とて、兩人已に岸の濱に來て、枯樹に纜たる、漁船の索を解き、二人等しく舟に跳乘り、頓て湖中に漕出し、纔半里ばかり行ける處に、阮小二忽ち手を舉て、蘆の內を招き、呼つて云けるは、七郎汝此邊に、五郎は見ざるや。吳用急に是をみるに、蘆の內より一人の大漢子一艘の船を漕出す。是阮小七なり。其裝束頭には遮日笠を戴き、身には短袖衣を著し、腰には生布裙を繫びたり。兩船已に相近きければ、阮小七乃阮小二に問て云く、五郎を訊給ひて、何の事有や。此時吳用呼て云く、七郎恙なきや、某は是吳用なるに、何ぞはや見忘れ給ふぞや。阮小七忙はしく禮をなして云く、先生遲禮の罪を恕し給へ、某豈見忘れ申さんや。吳用が云く、共に一盃を傾んに、七郎も來り

二編　卷之十四

○吳學究三阮を說て撞籌せしむ

吳用は石碣村に到り、直に阮小二が家の門邊に來て、此處をみるに、門の前には、數艘の小舟を枯樹の本に纜ぎ、籬の外には、一張の破れ網を白沙の上に晒ぬ。都て其邊山に倚水に傍ひ、約莫十四五間の草房あり。此時吳用遥々と立倚り、阮二公は寓に在や、と問ければ、阮小二これを聞て、急に門外に出來る。吳用渠をみるに、頭には破れ頭巾を戴き、身には舊衣服を著し、足に綫草鞋を穿き、吳用を見て、忙しく禮を行うて云く、今日何の風か先生を吹て、此處に至らしめけるや。吳用答て云く、小事にて特々足下を訪ふなり。阮小二何等の事有てか、來臨を惠み給ふや、宜く亟に諭し給へ。吳用が云く、我向に此處を離れて、故鄕に歸り、今已に三年餘なり、某頃日僥倖に因て、大富人の、讀書の師となり、擧貴ばること、尋常ならず、彼富貴人、近日の內酒宴を設て、珍客數輩を邀はるゝゆゑ、山河の美味品多く調しかども、此內たゞ金色の鯉魚、重さ十四五斤なるもの、いまだ是を求ず、此故に足下を賴で、此の

ん、詳に聞届け歸り給はゞ、豫じめ好其準備を催すべし。劉唐が云く、何の辛苦の事かあらん、乃ち今宵、深夜に乘じて馳行ん。吳用が云く、是尙太早し、蔡太師が誕生、六月十五日と聞く、今は是五月の首なれば、四五十日の餘限あり、某先三阮兄弟が方に趣き、彼等を誘引して立歸るの日、劉公又北路に出らるべし。晁蓋が云く、先生の言極て然り、劉公は愈我館に逗留して、吳先生の歸らるゝを待候へ。此時酒も數巡にして、漸々三更の左側に至りしかば、吳用は、時すでに三更なるに、最早打立申さん、とて、遂に席を起て門外に出ければ、晁蓋劉唐すでに、門外まで送りけり。吳用は則兩人に辭し、其夜足に信せて、急ぎける程に、翌日の午の刻石碣村に至り著けり。三阮が消息いかならんや、次の卷に詳なり。

常に魚を釣て業とす、姓は阮にして、一人が名は立地太歳阮小二と號す、又一人が名は短命二郎阮小五と號す、又一人が名は活閻羅阮小七と號す、此三人原同胞の兄弟にて、都てよく義を重んず、某前遭那里に數年住して、彼兄弟等が風を見しに、然も文筆には通ぜずといへども、專ら義を守り信を執る、故に某彼三人は、誠の豪傑たることを知て、常に親く交り、互に來往せり、某當村に歸ての後、今已に三年の餘、彼等に對面せず、若此三人を得ば、大事必ず成就せん。晁蓋が云く、我も曾て阮家三兄弟の名を聞り、石碣村は此處より、僅百里には過ざる道なれば、急に人を馳て、これを邀ば可ならんや。吳用が云く、若使を以て邀ば渠必ず來るまじ、某自ら行三寸不爛の舌に憑て是を說ば、方に能說伏せて、俱に誘引して回るべし。晁蓋大に悅で云く、先生もし、肯て自ら行給はゞ、何の患かあらん、しらず何の日に發足あるべきや、吳用がいはく、事すでに此に至れり、一刻も急に行べし、乃ち今宵三更の時打立ば、明日午の刻には彼地に至らん。晁蓋が云く、今宵若打立給はゞ尤善るべし、先一盃を酌給へ、とて、則酒宴を設て、已に飲酌をぞ始めける。吳用又云く、北京より東京に往には數多の路筋あり、いまだ彼梁中書が十萬貫の賀儀の貨物は何の路より、來ることをしらず、劉公もし辛苦を辭せずして、急に北京の路に打出で、彼賀儀の貨物はたして何の道より來るやら

晁蓋が夢に
北斗の七星
屋の棟に
落

我が爲にこれを決し給へ。吳用これを聞て打哂ていはく、先に劉公の模樣何とやらん蹺蹊ありげなるを見て、頗る十に八分も此を察せり、此一事尤好といへども、猶いまだ全からざる所あり、其故いかんとなれば、此事人多くして成難く、又少くして成がたし、貴館に餘多の家人有といへ共、此輩は一人も用るに足ず、今唯保正、劉公、某三人のみにては、此事猶做就せがたからん、保正劉公ともに、武勇勝れたるといへども、這等の大事全く當ること能ふまじ、凡八人の豪傑を得ば必ず成就すべし、八人の外多きも不可ならん、又少きも不可ならん。晁蓋が云く、先生決して八人の數を定め給ふは、我夢の星の數に應じ給ふや。吳用が云く、保正の此夢は天より託る靈夢にて、心より作虛夢にあらざれば、よろしく夢の瑞に應ずべし、此邊にも猶又此ことを助る者有べきに、兩公心當はあらざるや、とて、三人齊く頭を低て、しばし沈吟なしけるが、吳學究先、北邊に三人の豪傑あることを思ひ出し、則保正劉唐に對して云けるは、某幸ひ三人の豪傑あることを思ひ出せり、此三人皆武藝衆に秀で、力量も亦卓越す、共に水火の中にも馳入て、死を同うし生を等うする義士共なり、もし此三人を語らひなば、此度のこと容易成就すべし。晁蓋が云く、其三人は本何等の豪傑にて、姓名はいかん、又孰の所に居住なすや。吳用が云く、此三傑は原兄弟三人にして、濟州梁山泊の邊、石碣村に住し、

宅主に見えて云けるは、某今日急事あつて他出いたす間、若門弟來らば、此よしを告知せ給はるべし、と委しく頼置て再び門外に出で、乃晁蓋劉唐に引れて、晁蓋が館に至り、直に後堂に入て賓主座已に定りければ、吳用晁蓋に對し、劉唐がことを問て云く、彼人實に保正の爲には誰なるぞや。晁蓋が云く、彼人は是當世の豪傑、姓は劉、名は唐と申す、東潞州の人なるが、此般一套の富貴を、某に與へんとて、昨夜當村に至られしかども、酒に醉たる故、醉を醒して其後某が館を訪はんとて、直に靈官廟の内に入て、暫く休み居られたる處に、雷都頭夜巡りして、廟中に至り、誤つて賊ならんと疑ひ、遂に生捉て某が館に至りけるゆゑ、某詐て舅甥の挨拶をなし、遂に雷横を欺て、彼人を救ひぬ、さて一套の富貴と云は、何ぞなれば、此度北京大名府の梁中書、十萬貫の金銀珠玉を、東京に送て、丈人蔡太師が、誕辰を賀すとなり、尤近日此邊を過ると云ふ、沙汰あるゆゑ、劉唐某と心を合せ、是を奪取んと欲す、某思ふに、是らは皆民を擠て、集めたる不義の財なれば、たとひこれを劫し取とも、少も罪のあたること有まじ、況や此一事、某が昨夜の夢に應ぜり、其夢いかんぞなれば、乃北斗の七星たゞちに我屋の脊に墜下りぬ、又其内に格別に一つの小星あつて、一道の白光と化して飛去れり、我是を思ふに、星屋を照すは必ず利あらん、然るに今果して此一套の富貴耳に觸る、先生

に、大に怒て、つひに某と五十餘合を闘ひぬ。晁蓋これを聞て、大に劉唐を罵て云く、汝奚ぞ此のごとき、無禮をなすや、早く都頭を拜して、罪を謝せよ、とて、乃又雷横に對して云けるは、某かつて、彼が所爲を知らざるなり、願くは平生の好を思ひて、此罪を免し給はんや。雷横が云く、保正此事を知り給ふまじきを、某老早これを察しぬ、何ぞ必しも慇懃の分說に及候はん、某毛頭念に掛ることなし、願くは保正も貴慮にかけ賜ふな、とて、遂に保正吳用に別れて、縣裡へぞ歸りぬ。扨吳用は晁蓋にいひけるは、保正もし片時遲く來り給はゞ、必定大事に及べきに、幸の節に來り給ひけり、某彼令甥の武藝を見候に、天晴の達人なり、雷都頭は原來、遠近に隱れなき勇士なれども、令甥に敵しがたく、只架隔になつて危かりき、若再三戰ふものならば、終に令甥の爲に殺さるべし、しらず此令甥は、何より來り給ふぞや、某年來貴館に出入致せども、かつて見たることなく、又令甥あることもいまだ聞ず。晁蓋が云く、某今先生を請て、共に一事を、商議せんと欲せし處、彼者雷都頭と闘ふことを聞て、忙しく此所に至れり、先生彼を識認給ぬは、尤理なり、先某が館に至り給はゞ、來歷忽ち知れ候はん。吳用が云く、已にかくの如んば、貴館に趣申さん、暫くこゝに待給へ、少頃參らん、とて、先私宅へぞ歸りける。此時吳用は、讀書の師をなして、每日門弟多く來るゆゑ、乃

我言を用ひて怒を息回らんや。劉唐が云く、儒者汝いまだ此所以を知り給ふまじ、彼禮物は我舅得心して送りたるにあらず、彼雷都頭我舅を誑て、求めたる禮物なり、彼もし我に還さずんば、我誓て還るまじ。雷横が云く、此禮物を取還さんとならば、汝が舅自ら來て是を取ば、我是を還さん、我何ぞ肯て汝に還さんや。劉唐が云く、汝彌還さずんば、且我手の內の刀に問ふべし、刀だに汝を赦さば、我も又汝を饒すべし。吳用又勸めて云く、汝等兩人すでに今半日ばかり鬪しかども、曾て雌雄分たず、汝ら幾遭戰ふとも、畢竟勝負決すまじ、無益の力を竭すことなかれ。劉唐が云く、我彼が首を取ずんば、誓て大丈夫をなすまじ。雷横限なく恚ていはく、我若雜兵共の力を借て汝を殺さば、是豪傑の儀にあらず、我只此刀一挺を以て、立地に汝を殺さん、とて、二人一齊に刀を撚て、再び鬪んとしければ、吳用又再三再四諫といへども、遂に遮り留ること能ず。已に兩人近々と進み寄所に、晁蓋跡を慕うて馳來り、遂に此所に至て大に劉唐を罵り、又詐て云く、小三汝畜生、何ぞ甚だ都頭に對して無禮をなすや。此時吳用打咲て云く、保正自ら來り給はずんば、必ず誤有べきに、幸ひの處に來り給ふなり。晁蓋再び戰の發端を問ければ、雷横先答ていはく、保正の甥劍戟を揮て、某を追來り、彼賜つたる禮物を、頻に取復さんと云故、某自己に保正に還さんは格別、彼に渡すべき樣なければ、其旨を述たりし

茶褐帶を繫び、其相貌然も又人に勝れ、眉潔く目秀て、面白く鬚脩し。この人乃ち姓は吳、名は用、字は學究、綽號は智多星、道號は加亮先生と云ひ、世々當鄉の人なり。此時吳用團扇を以て劉唐を指て云く、汝何の憤ること有て、都頭に對し敵をなすや。劉唐眼を睜開て云く、汝がごとき儒者の干ることにあらざるに、無益のことを問べからず。此時雷橫先吳用に向て云けるは、吳用先生はいまだ彼を知り給ふまじ、昨夜彼漢、赤條々になつて、靈官廟の內に睡り居けるを、某絆縛て、直に晁保正が館に、行ける所に、豈知らんや、彼原晁保正が甥なり、故に某肯て晁保正が爲に、彼を饒しければ、晁保正これを感じて、某に禮物を送り候處に、彼私に某が後に隨ひ追來り、擅に再び、禮物を取復さんと欲す、是豈大胆の徒にあらずや。吳用是を聞て心中に思ひけるは、我と晁蓋とは竹馬の友にして、何等の事ある時は、則我と商議す、此ゆゑに交甚だ厚し、晁蓋が親類は皆我知音なり、然共我曾て渠が甥あることをしらず、殊更舅甥の年甲も相應せざれば、此中に必ず蹺蹊あらん、我先彼等二人を諫めて、無事を調へ、其後又蹺蹊を委しく問べし、と思案して、吳用又劉唐に向て云けるは、汝必ず誤て無禮をなすことなかれ、我と汝が舅とは、交極て親し、我又此都頭とも、交疎からず、汝が舅既に此都頭に禮物を送らんに、汝是を取復さば、却て舅が面を壞ふべし、汝宜く

然らば汝を饒すべし。雷横が云く、我原來汝が舅より得たる禮物を、汝何の干ることあらん、汝何ぞ私に禮物を取復さんや。劉唐が云く、我曾て賊をなさゞるに、汝擅に我を生擒て、終夜梁の上に吊起け、剰へ舅を誑て、禮物を需たり、汝もし速に禮物を返さば、我倘佛眼を以て汝を看ん、萬一禮物を還ずんば、忽ち目前に血を流さん。雷横これを聞て大いに怒り罵ていはく、汝親族を辱しめ、家門を敗る潑賊、なんぞ敢て無禮をなすや、汝畢竟禍を晁蓋に及すべし、汝もし自ら愧をしらば、早く去て自殺せよ。劉唐大に怒て云く、汝奸賊科もなき百姓を害して賄賂を貪る、いかんぞ却て我を辱かしむるや、我今汝を胴斬にせんに、汝よく是を支へんや、とて、棒を弃刀を拔て斬てかゝる。雷横これを見て、呵々と打笑ひ、同じく刀を撚て相迎へ、二人大道の上に在て、互に平生の手並を出し鬪しかば、刀を合すること已に五十餘囘に及べども、更に雌雄を分たず。此時部下の者共、雷横が勝まじきを恐れ、一齊に器械を揮て、助け來りし處に、忽ち傍にある衡門推闢き一箇の人、手に團扇を拿て走り出で、乃ち呼つて云けるは、兩輩の勇士先戰を休よ、我とく汝等が働を見ること久し、必誤ことなかれ、とて、團扇を以て當中に隔りければ、兩人遂に戰を止め、刀を收め、則圈子の外に跳出て、彼人をみるに、儒者の裝束にて、頭には梁頭巾を戴き、身には皂布衫を著し、腰には

いへども、頗る武藝を曉せり、縦千軍萬馬の隊の中たりとも、唯一條の鎗だに手に撚つて刺入ば、毫末も怯るゝことなし、若保正某を棄捐給はずんば、一套の富貴を獻ずべし、唯しらず保正の尊意はいかんぞや。晁蓋が云く、壯なる哉〳〵、此事最四方白し、然れども當座の商議に決しがたければ、○先緩々と申語らはんに、汝は暫く客廳に入て旅行の疲をも慰よ、必ず心を忙はしむることなかれ、とて、則家人に命じ客廳に伴せけり。偖劉唐は客廳に休息して、心に思ひけるは、我何の由なくして、昨夜雷横に生捉れ、已に無實の罪に、陷んとせしかども、幸ひ晁保正に命を救はれぬ、雷横先に白々と晁保正を誑て、多く禮物を請たり、況や我を終夜、梁の上に吊起しかば、此寃骨髓に徹て忍びがたし、那廳尙未だ遠くも行まじきに、我今路を慕うて、追蒐け唯一擊に、雷横を討倒し、彼禮物をも取復し、晁保正に還さんとて、遂に客廳を出て、鎗架に架てある、手來の棒を擇取り、叉刀を横たへて、急に門外に駈出で、直に南を望で追懸往き、漸四五里許り馳しかば、果して雷横に追著たり。劉唐大音に、雷横走ることなかれ。雷横是を聞て、大に駭き忙はしく、首を旋し背を看れば、劉唐虎のごとく吼て威を震ひ、棒を輪して進み來る。雷横急に腰の刀を引抜持ち、呼つて云けるは、汝妄に我を逐來て何をなすや。劉唐がいはく、汝若恐を知らば、保正より賜りたる禮物を、速に我に還せ、

め、某保正とは初ての對面なれば、保正肯て某が四拜を受給へ、とて、晁蓋を四度拜しけり。晁蓋が云く、汝が云天の賜る富貴とは、何事ぞや。劉唐が云く、某諸國諸州を巡りて、多く豪傑英雄の輩と相交り、往々保正の大名を聞及びぬ、又常に山東河北等の地の豪傑、私に朝官等が不義の財を奪取り、直に來て貴館を賴て、身を藏すといへども、深く憐を垂て彼等を家中に藏し、事の靜るを待て後、囘し給ふと聞り。故に某此たび私の計を以て、保正に語んと欲す、若左右に他人なくんば、心を傾け膽を吐て、語り申さん。晁蓋が云く、我家の者は皆我心腹なり、少も遠慮なく、語られ候へ。劉唐が云く、某聞く、北京大名府の梁中書十萬貫の金銀珠玉を賀儀として、是を東京に送て、丈人蔡大師が誕辰を慶すとなり、去年も已に數萬貫の金銀資財を贈りけれ共、何者の所爲なるにや、半途に是を奪去ぬ、今に其跡を露すことなし、今年又十萬貫の賀儀を近々東京に送て、此六月十五日の生誕日を賀すとなり、某熟々想ふに、是は皆百姓を剝取て、聚たる寶なれば、乃ち不義の財なり、某らこれを劫し取とも、何の碍ることかあらん、此故に某此事を以て、宜く晁保正と商議して、半路に奪ひ取んと欲す、天地の神祇ともに、此事を見知給ふ共、某等を罪し給ふことは、曾てあるまじ、保正は乃ち當世の豪傑にて武藝力量萬人に超給ふと傳へ承る、某亦不才たりと

や辭し別れ候はん。晁蓋が云く、都頭暫く又後堂に入給へ、某別に說話あり。雷横辭すること能はず、晁保正に從ひ、再び後堂に入ければ、晁蓋は一封の財物を取出して、雷横に送て云く、都頭我爲に、此輕儀を納給ふべし、聊以て、甥が災を免れしを、祝すのみなり。雷横辭して云く、某無禮を致せし上に、何ぞ禮賜を受べきや。晁蓋が云く、都頭これを領納なくんば、乃是某を怪み給ふなり。雷横が云く、すでに斯のごとくんば、厚意背き難きゆゑ、暫く是を拜受なし、異日敢て厚意を謝し申さん、とて、つひに辭して縣裡へこそ歸りける。

○晁天王義を東溪村に認む

却說晁保正は、彼漢子を延て後廳に至り、則新しき衣服、頭巾等を與へ、これを著せしめ、彼漢子が姓名及び住所を問ければ、彼漢子答云く、某が姓は劉、名は唐と號す、世々東潞州に住す、某が鬢邊に、硃砂記ある故、人皆某が綽名を赤髮鬼と申す、今度幸ひに、天の賜る所の富貴を以て、保正に獻んと欲し、昨夜當村に至りしかども、第一夜も闌になり、殊更酒に醉候ゆゑ、暫く廟中にあつて歇ける所に、想はず、彼等に捉はれぬ、世俗の諺に、緣あれば、千里來て相會し、緣なければ、紙門隔つて相逢ずと云は、誠に今日のことなら

よな、とて、雜兵が持たる棒を借取て、彼を散々に打ければ、諸の人是を諫め止ていはく、保正妄に敲給ふこと勿れ、宜く豫じめ其所以を詳に聞給へ。彼漢子が云く、願くは我舅怒を息て我云所を聞給はれ、某十五歳の時、舅に對面し、辭てより以來、已に十年を過せり、此故に某旦暮舅のことをのみ、憂ひ想て、此度不圖訪ひ來り候處に、途中に於て酒を過し、最大醉に及びし故、舅に罵られんを恐れ、且醉を醒して往べしと思ひ、彼廟の中に入て、暫く歇みける處に、彼輩入來るもしらず、遂に生擒れ、其來由をも演說ず、某曾て賊を做ことなければ、心に怖るゝことなく、いつか官府に至らば、罪を犯さゞることを明めんと思ひしなり。晁蓋猶怒て、汝村夫、直に我屋に至て酒を飲ず、途中に酒を貪り吃ふや、我家何ぞ汝に與ふるほどの酒なからんや、汝我を恥辱むること至て甚し。此時雷横晁蓋を諫めて、保正怒を休給へ、令甥もと賊を致されたるにはあらざれども、偖大きなる漢子廟中に歇ありし故、必定賊ならんと思ひ誤てこれを縛て候、我們もし早く保正の令甥たるを知ば、豈あへて捉ふべき、冀くは無禮の罪を赦し給へ、とて、乃雜兵等に命じて、絆の索を解棄しめ、自ら是を延て、保正に還し、保正必ず令甥を責り給ふことなかれ、渾て某が過なり、唯望らくは、某が卒爾を免したまへ、令甥は又是、遠來の珍客なれば、宜く款待を盡し給へ、某はもは

の大漢子、實に〳〵强賊放火も、做かねまじき曲者なり、と云も了らざるに、彼漢子晁蓋を見て、大いに呼つて云けるは、此家の主は正しく、我舅晁保正なり、願くは某が一命を救ひ給へ。晁蓋これを聞き、故意良久しく沈吟して、忽ち大いに恚り、汝廢料、これ王小三にてはあらずや。彼漢子が云く、某則王小三なり、望らくは甥が災を救ひ給へ。雷横及び部下等、此體を見て大に愕然、雷横先、晁蓋に問て云く、渠は保正の爲には、何等の緣有てかく認識給ふや。晁蓋がいはく、彼はもと我外甥にて、王小三と云ものなり、彼いかんぞ靈官廟には歇けるや、彼は則ち我姉の伜にて、幼き時は當村に居けれ共、其後四五歲に至て、父母に隨ひ、南京に上りけるが、凡十年餘り、南京に居住し、前年彼が十五歲の時、又棗賣商人に隨て、此處に來り、僅五七日滯留して、再び南京に歸りしが、厥後曾て對面せざりし、多くの人の傳へ云を承及ぶに、渠が行跡極て好らざるとなり、某本彼が面は忘れしかども、鬢邊に一つの硃砂記あるに因て、隱々に是を識認り、さすが稚顏の殘れるに感慨す、都頭我爲に暫く相扣へ給はるべし、我委しく彼に來歷を問ふべし、とて、再び彼漢子を罵て云く、汝匹夫何故直に我家には來らず、却て村中に徘徊し、賊をなすや。彼漢子が云く、某豈敢て賊を働んや。晁蓋益怒つて、汝賊を做ずんば、いかんぞ生擒るゝことあらん、汝よくも舅が面を汚しける

は是天下に雙なき義士なり、是故に我今天より賜りぬべき富貴を以て、此人と分ち有んと欲し、急に當村に至れり。晁蓋が云く、汝が尋る、晁蓋とは則我ことなり、我今汝を救はんと欲す、汝若後刻我にまみゆる時は、必ず我を稱して、母舅とせよ、我は又汝をもつて、外甥とすべし、汝後刻我にまみえなば、我汝が幼少の時相離れたるゆゑ、しかと面を見しらざる體をなすべし。彼大漢子、大いに悦んで云く、扨は晁保正にて座すや、此上にも某を救ひ給はゞ、深く再生の恩を感ずべし。晁蓋心中に悦び、再び提燭を以て、空房を出で、急に後堂に入て、雷横に見えて云く、都頭如何酒を勸め給ひけるや。雷横が云く、某夜中に來て懇篤の欵待を蒙り、感謝言語に盡しがたし。晁蓋又盃を執て相勸め、已に數盃巡りける時、窓外はや天光白みければ、雷横則別を告て云く、東方既に曉を催せり、疾縣裡に歸りて、公事を完へ候はん。晁蓋が云く、都頭は原來官職を兼給ふ身なれば、嘸公事多からん、某豈再三留め申さんや、若又異日公事に依つて、這邊を過り給はゞ、必ず敝舍に來臨を惠みたまへ。雷横が云く、重て伺候致さば、必ず慇懃のことを休給へ、とて、竟に辭し席を起ければ、晁蓋自ら送て門前に至る。此時彼雜兵等も、同じく晁蓋が館にて、多くの酒食を用ひ盡く悅び、進んで那空房の内に入り、郎生捕の漢子を急梁より引下し、門外に連て出でければ、晁蓋これを見て云く、天晴

て來るべし、とて、遂に雷横に一禮を叙て、席を離れ、自ら一つの提燭を持て、直に空房の邊に至てこれをみるに、彼雜兵等は、悉く皆内に入て、酒を飲居ければ、空房の邊には、一人の士卒もあらず。晁蓋則家人に問て云く、彼擒れたる賊は、いづれにありや。家人が云く、賊は只空房の内に吊起て候なり。晁蓋是を聞て、急に空房の戸を推開て、窺ひみるに、一人の大漢子高く梁の上に吊起られ、一身の黒肉を露現し、兩條の毛腿を抓扎て、只瓢々蕩々として居たりけり。晁蓋自ら提燭を照し、彼を見るに、色黒く面濶く、鬢邊に一つの硃砂記あり、鬚は左右に分れ、眼は圓にして大いなり。晁蓋則問て云く、汝は何の所より來れりや、我此村中にて、曾て汝を見ず。彼男が云く、某は遠方より來りたる者なり、本這村に一人の長輩あるを、尋訪んと欲しける處に、想ず彼輩某を擒て、賊となせり、某自ら、是を辯ずる所あり、何ぞ憂とするに足んや。晁蓋が云く、汝此村に至て、誰を訪んと欲するや。彼漢子が云く、我此村に尋んとする人は、誠に當世の豪傑、其名北斗よりも高し。晁蓋が云く、汝が云豪傑の姓名はいかん。かの漢子が云く、某が云豪傑は、乃ち這村の保正晁蓋と云人なり。晁蓋是を聞て想道く、彼他國より此所に至り、偏に我を問んと云は、しらずいかなることにやと、心中これを怪み、乃ち又問て云く、汝晁蓋を尋ねて何のこと有や。彼漢子が云く、晁蓋

云く、已にかくの如くんば、先寛ぎて歇給へ、何の妨ることかあらん、とて、遂に酒食を設しめて、雷横を管侍けり。晁蓋又雷横に問ていはく、しらず都頭當村に於て、賊を捉へ給ひけるや。雷横答て云く、前に靈官廟の内を捜しける處に、一人の大漢子、殿中に熟く睡りて歇たるを、是非を論ぜずして、これを生捕けるが、這厮必定賊徒にてぞあらめ、某直に縣裡に引回て、知縣相公に訴へんと欲しかども、今五更の時なれば太だ早し、倘且保正は又此東溪村を掌り給へば、當村に於て賊を捉へたることを、保正にも告知せ申さば、異日若知縣相公、事の序に因て、此賊の來歴を、保正に就て問るゝ事も有ん時、自然答の心得にもならんかと思ひ、實は告知せんため、妨をも顧ず、直に貴館に來りしなり。晁蓋これを謝して云く、某不肖なりといへども、當村の保正にて、村中を掌り候へば、かくのごとき公事は、求めて承はるべき處に、却て都頭の告を蒙ること、感激に堪ず、先後廳に移り給ひて、快く一盞を酌給へ、とて、手を携へて、共に後廳に至り、賓主座已に定つて新に飲酌を催し、酒數遍巡りける處に、晁蓋私に心中に躊躇して、我此東溪村には、原來賊あること稀なり、然るに今宵靈官廟の中に賊有て、雷横に捕はるゝこと、偏に疑はし、我親自、彼賊を試に一見せん、と思ひ、即家の老主管を呼て、是に命じけるは、汝は我に代りて、雷都頭に酒を勸めよ、我は淨手し

晁蓋
西溪村に入て
妖性魔鎮の
宝塔大石を
除く

西溪村に住ことならずして、我里に來れり、我彼寳塔を除て、妖怪を再び西溪村に還さんとて、私に夜闌なるに乘じ、唯獨溪の口に馳往て彼大いなる青石の寳塔を、さも輕々と托起し、遂に右の小腋に夾で、東溪村に居置しかば、これをみる人、大きに愕ていはく、かくのごとき大石の寳塔を、脇挾ん者は、恐らく古今に少ならん、寔に晁蓋は凡人にはあらじ、とて、見る人聞く人、敬はざるはなかりける。これより人みな、晁蓋を稱して、托搭天王と云馴せり。（塔を托ぐるの義也）晁蓋今東溪村の保正となつて、專ら諸方の豪傑と、偏く斷金の交をなしければ、其名を四海に高うし、天下に芳し。此夜雷横は、部下の雜兵等と共に、生捉を引て、晁蓋が館に至て、門を敲きければ、家人其來意を聞て、晁蓋に報ける處に、晁蓋忙はしく出迎へ、自ら雷横を引て、草堂に至りぬ。此時雜兵等は、彼生捕の大漢子を引て門内に擁入り、則生擒を空房の内に吊上けり。晁蓋先雷横に問て云く、雷都頭は何の公事ありてか、夜も全く曉ざるに、此處には至り給ふや。雷横答へて云く、某今宵知縣相公の命を承つて、朱仝と倶に部下を引率し、方々を巡り搜して、賊を捕へんとて、朱仝は先西門より馳出で、西の方一連の地を、巡り搜して、必定當村にも至ることあらん、某は又東門より打出で、東の方一連の地を、普く巡り搜し、身心ともに疲れける故、暫く貴館を借て、休息せんと欲し、敢て來て保正の眠を妨げぬ。晁蓋が

此晁蓋が爲人、平生義に仗り、財を吝ず、專ら天下の豪傑と交を結び、もし人有て、彼が家を憑て來る時は、其人の善惡を論ぜず、これを家内に留置き、專ら介抱を加へ、懇情を罄す。其人歸らんと欲すれば、又多く盤纏を與へ回らしむ。かるがゆゑに、每度大德を慕うて來る者、一年三百六十日の内にまゝ多し。いまだ妻を娶ず、每日唯武藝を演習して、筋骨を熬煉を事とす。此鄆城縣の東門の外に、最村里多しといへども、就中地面寬濶して、居民富饒なる村は、此東溪村と西溪村とのみなり。此兩村は東西に相對して、其中に一つの大いなる溪を隔たり。前年此西溪村には、常に妖怪あつて、白日にも人を魅し、溪水の内に引入れ人を害すること太だ多かりけるが、一日一人の僧、西溪村に至て、妖怪あることを聞き、乃ち鄉人を、溪の口に誘引して、一つの凹みある地を指ざして云けるは、汝等鄉人、怪妖の災を免れんと欲せば、此凹みの上に大いなる青石の、寶塔を建て、鎭置べし、我加持して得さすべし、然らば此妖怪必ず他所に逃往ん。こゝに於て鄉民等早速大いなる、青石の寶塔を調て、其凹みの上に立置しかば、奇なるかな彼妖怪果して、西溪村に蟄居すること叶ず、遂に東溪村に逃來て、專ら東溪村の人を害しければ、晁蓋これを聞て、大いに怒り、何ぞ他方の惡魔を、我里に入んや、必竟彼寶塔あるゆゑに、惡魔

擁入て、一捜し探みん、とて、諸の雜兵に火把を持せ、遂に齊しく殿中に入て、四方偏く火把を照し、捜しみる處に、香燭を供る卓の下に、果して一人の大漢子、赤條々に成て、前後もしらず熟睡せり。雷横これを見て雜兵等に對して云く、知縣相公太だ其見明かなり、我輩を東溪村まで、巡らしめ給ひけるに、果して此處に賊あり、急にこれを擱んとて、雷横聲を揚て大いに吼つて罵りければ、彼大漢子忽ち驚き醒て、忙はしく掙挫とせしかども、二十人の雜兵一度に手を下し、遂に高手小手に絆めけり。雷横大に悅び、乃ちこれを引せて廟外に出で、部下を引纏ける。此賊誰なるらん、次を見て知るべし。

○赤髮鬼醉て靈官殿に臥す

雷横は擒の大漢子を牽せ、殿外に出ければ、夜は曉に近かりける。諸の雜兵に向て申けるは、我輩先賊を引て、晁保正が館に行き、暫く彼所に休息して、酒食を索め、稍疲をも慰めて、其後賊を引て縣裡に歸り、知縣に訴へ、彼賊を拷問すべし、汝等先我に隨つて晁保正が館に來れ、とて、遂に賊を引せて、直に晁保正が館へぞ至りける。乃此東溪村にて、保正の職をなすものは、姓は晁名は蓋と號して、先祖代々當村に居住し、原來富貴功名の家なり。

聚りて、民家を劫し官軍を犯す、又諸方の村里にも、賊徒多く隱れて、小人少からず、汝二人辛苦を辭せずして、我儕に多く雜兵等を引て、城の東西兩門より打出で、兩路に分れ向て、賊徒を尋ね捜べし、若疑はしき者あらば、早速これを絆めよ、必ず居民を犯し鬧すこと勿れ、汝等兩人も定て聞つらん、東溪村の山の上に一つの大楓樹有り、此樹の葉のごとき楓の葉は、他所にこれなし、汝ら此楓の葉を、數片摘取て歸るべし、我此楓の葉を看ば、汝等が、辛苦を辭せずして、遠く彼所まで巡り往しことを知りぬべし、若楓の葉を持參せずば、妄に官府を欺て、彼所までは、巡り至らざることを知りぬべし、然らば速に其罰を行うて、其罪を正すことあらん、汝兩人必ず楓の葉を以て我等にみせしめ、是を證據とせよ。兩人の都頭命を承り、卽ち先私宅に歸て、手下の雜兵を催し、已に兩人城の東西の門より打出で、兩路に分れて巡行す。先雷橫は雜兵二十人を領して、城の東門を出此彼を繞り、一連の地悉く尋ね捜して、直に東溪村の山上に登りて、彼楓の葉を摘取り、再び山を下つて村中を巡り、又二三十里ばかり馳て、はや靈官廟の前に至て此處をみるに、殿門未だ閉ずして大に開けり。雷橫私に此殿中に賊あらんことを疑ひ、乃ち雜兵等に對して云けるは、此殿中には廟祝なきゆゑ、殿門開くこと稀なるに、今宵此殿門妄に開たるこそ奇怪なれ、恐くは賊從此内に躱あらんも料がたし、去來且

勸め、日も晩じ酒宴遂に竟りけり。其比山東濟州鄆城縣の知縣、姓は時、名は文彬と號しけるが、一日時文彬廰の公座に出て、諸の軍官等を聚めて、專ら公事を評議す。此鄆城縣には、原來都頭の官兩人有けるが、一人は歩兵都頭とし、一人は馬兵都頭とす。歩兵都頭は、歩行の頭目二十人、及び雜兵二十人を掌る。馬兵都頭は、馬上の頭目二十人、及び雜兵二十人を掌る。此馬兵都頭姓は朱、名は仝と號す、身のたけ八尺四五寸にして、髯の長さ一尺五寸あり、面は棗のごとく、目は星のごとし。恰も好關雲長の相貌に似たるゆゑ、人皆關雲長の綽號美髯公と云を假て。乃ち朱同を稱して美髯公といふ。元來當地富貴の人の子孫なり。彼が人となり、能義を重んじ、財を輕んじ、專ら天下の豪傑と交を結び、武藝は又千萬人に勝れたる達人なり。彼歩兵都頭、姓は雷、名は横と號し、身の長七尺五六寸あつて、面の色は紫棠の如く、鬚左右に分れ、恰も銅の針に似たり。力量は諸人に過て、武藝は諸士に秀で、能二三丈の濶澗を跳渡るゆゑ、人みな彼を稱して、插翅虎と云ふ。原是當地に於て、名高き鐵匠の子孫なり。尤よく義を重んじ、財を輕んず、然れども唯心偏しくて頗る拘束なり。此朱仝雷横二人の者は、ともに尋常の輩にあらざる故、遂に都頭の職を授りて、專ら盜賊を捕ふることを掌る。此日知縣此兩人を呼で云く、我聞此濟州に屬する所の水鄕梁山泊の内に、盜賊多く

已に立身し給ひてより以來、今日遂に一統師の職を授り給ひて、國家の重任を握り、富貴功名倶に保ち給ふことは、是いづれより得給ふや。梁中書が云く、我幼きより書を讀て頗道理を知れり、況や人草木にあらず、我這般に富貴功名を享るは、總て是泰山（妻の父を泰山と云ふ舅なり）の賜なり、我豈敢て此恩を忘れんや、誠に泰山一臂の力を以て、我に國家の重職を掌せ給ふこと、我つねに感激に堪ざるなり。蔡夫人が云く、相公既に、我父の恩を感じ給はゞ、我父の生誕日記え給ふや、若猶忘れ給はずんば、宜くこれを賀し給はんや。梁中書が云く、我何ぞ泰山の生誕日を忘んや、泰山の誕生は六月十五日なり、我前月の中旬に、早速人を方々に馳て十萬貫の賀儀を調へ、今已に整め盡く全し、宜く急に都に送つて、泰山の誕辰の慶して、南山の賀を獻ずべし、然れども只一つのこと、頻に猶豫して決せず、夫人も知るごとく、去年已に許多の金銀珠玉を京に贈て、泰山の生辰を賀しける處に、いまだ半途にも至らずして、賀儀の寶物悉く强賊等に奪取られ、空しく數萬貫の、財寶を失ひき、今に其賊を尋得ず、今年又誰を遣して好らんにや、只これのみ躊躇す。夫人が云く、相公の帳前には若干の軍官あり、宜く聰明才幹の者を、撰み出して、つかはし給はんや。梁中書が云く、猶四五十日の餘日あれば、其内には必定才幹の者を撰得て、これを上すべき間、夫人我が爲に多く憂へざれ、とて、再び盃を執て相

急先鋒索超
青面獣と
鎗術の
較量に

官軍と倶に、居館をさして回りけり。かゝる處に東郭門の邊に、諸の百姓等老を扶け、幼を抱へ、盡く皆路傍に充滿して、其悅ぶこと限なし。梁中書馬上より、此光景を見て、乃ち自ら百姓らに問て云く、汝居民等、何の樂きこと有て、かく路端に袖を連ね襟を接へて喜ぶぞや。百姓らこれを聞て、忙はしく跪て云く、某ら世々此大名府に居住して、餘多の豪傑をも見しかども、今日のごとき英雄の比試は、いまだかつてこれを見ず、果してかゝる豪傑國に在ときは、能賊を殺しよく民を救ふ、此ゆゑに某ら敢て悅びを催しぬ。梁中書これを聞き、大に悅で云けるは、誠に汝らが云ごとくなり、とて、遂に馬を發して、屋敷に歸り入しかば、諸の官軍も各宿所に歸りけり。索超は原來大名府に親類も多きゆゑ、其夜は親族共、盡く索超が宿所に訪うて、昇進を賀し比試を譽め、已に悅びの酒宴を催しける。楊志は此度初めて大名府に至りたれば、親類は云に及ばず、朋友すらなければ、門外に誰訪ふ者もなく、唯獨燈に對し膝を抱き、寂寥に堪でぞ打臥けり。此梁中書は、大に楊志を憐み、尤格別に懇請を給ひしかば、楊志も又朝夕身を委ね、心を竭して勤めけり。光陰矢のごとくにして、はや春盡夏來て、時已に端午の節に値ければ、梁中書乃ち、後堂に酒宴を設けしめ、蔡夫人とともに酒を酌で端陽（五月五日のこと）を賀し、盃已に數巡に及びける處に、蔡夫人梁中書に對していはく、相公

かじ闘を休させんには、とて、乃旗牌官に、令の字の旗を持しめて、闘を引分させければ、將臺の上には、又歇軍の石砲、一連に三度まで打けれども、兩人の豪傑は、互に闘の興に乘じ、功を爭ふ折なれば、石砲の響も耳に入ず、益精神を揮擻て相戰ふ。かゝる處に旗牌官飛がごとく、馬を進め馳來り、大音に號で云けるは、梁相公の命令あり、兩將先戰ひを休よ。二人是を聞て聊躊躇り。李成聞達、直に梁中書の前に至て、謹で申けるは、抑兩士の武藝更に高下なし、願くは相公兩人ともに、重く用ひ給はんや。梁中書これを聞大に悦び、乃索超楊志を廳前に呼ければ、兩人の英雄、鎗を弃て下馬し、早速堦の中に來て蹲踞る。梁中書左右に命じ、白銀兩錠呉服兩套を取出させ、是を兩人に賜り、褒美していはく、索超楊志が武術、誠に衆を出群に過ぐ、我今兩人を等しく擧て、提轄使の職を授く、向後愈心を同くし力を合せ、朝廷の忠勤を勵むべし。兩人再三頓首して恩を謝し了り、すでに堦を下りて兩邊の諸軍に對し、一禮を敘ければ、諸軍擧つて、羨ざるはなかりけり。此時諸卒又勝鼓を打ち、勝賊を揚て、天地も動くばかり、暫時は鳴も止ざりし。梁中書則演武廳の上に於て、酒宴を設けしめ、大小の官軍と共に觴を飛せ、漸紅日も已に西に沈みければ、宴罷り盃收り、梁中書再び馬に乘て、かの新參の提轄兩人も、同じく馬上にて、左右に從はしめ、諸の

萬人に勝れけり。斯る所に、正南の方より、一人旗牌官、手に令の字の旗を持て、馬を一鑽に飛せて、楊志索超が兩馬の間に馳至り、乃ち大音聲を揚て、呼つて云けるは、我今相公の命を承てこゝに至るなり、楊志索超二人ともに、必ず各力を盡すべし、若誤て負を取ものには、忽ち重く罰を加ふべし、若能勝を取者には、速に厚く賞を行ふべし、汝兩人決して命を違くことなかれ。兩人馬上に身を躬め、頭を低て令を承り、則兩人一度に馬を飛せ、教場の當中に至り、兩馬漸々近く交へければ、索超大いに怒て鎗を擧げ、威を逞しうし、直に楊志を望んで刺かゝる。楊志も亦急に、鎗を撚り力を發して相迎へ、兩將の爭戰、飛龍猛虎の勢、喊き叫んで、一來一往秘術を顯し蘊奥を悉し、刺進ば躱れ退き、撃掛れば、外し潛り、四つの人臂は交つて縱橫し、八つの馬蹄は亂て盈縮す。既にして五十餘合、挑み戰けれども、贏輸を別たず、梁中書は月臺の上より望見て、天晴神妙の鬪やと、一偏汗を捏り、拳を緊て壯觀す。兩邊の諸官軍も、都て低言稱譽、我們多年軍中に在て、鬪を見れども、いまだ此のごとき、一對の豪傑を見ず、誠に稀有の競かな、と他念を忘れ看恍惚たり。此時李成聞達の二人、將臺の前に在て再三聲を發て譽けるが、私に心中に想ひけるは、此者共が働き、等閑の業にあらず、若猶久しく鬪はしめば、必ず相傷ふに至らんか、然れば國家に損あつて益なし、し

二編　巻之十三

○急先鋒東郭にて功を爭ふ

楊志周謹が勝負、楊志贏を得たれば、事竟るべきに、索超又比試を望出るに依て、梁中書黙止しがたく、重て比試場に出て兩士の武藝を見物す。此時將臺の上に紅旗を搖動しければ、將臺の兩邊には、金鼓齊く打鳴す。東西の陣中には、各石砲を放つて、天地も震動するばかりなり。是に於て索超まづ馬を教場の内に跑入み、遂に旗竿の下に至て馬を勒へ鎗を横へ、楊志が出るを今や遲しと相俟けり。將臺の上に又青旗を揮動しければ、再び金鼓の響を添ける所に、楊志馬を飛せて、同じく教場の内に馳入り、直に旗柱の後に至て馬を駐む。此時又赤旗青旗、同時に搖動し、戰鼓三度打鳴して、陣の東西に喊の聲大に響きける所に、正牌軍索超鎗を輪し馬を飛せて、陣前に跑出す。諸人是をみるに、威風堂々として、眞に罕なる勇士なり。其次に又戰鼓三たび打鳴せば、青面獸楊志鎗を提げ、馬を躍せ、飛ぶがごとく陣前に馳來る、其裝束儼然として、實に珍しき猛將なり。此兩人いまだ、武術の高下はしらねども、威風猛氣先千

本文と符合せしむ。

志命を承て已に廳後に赴きければ、梁中書一疋の良馬を牽出させて、これを借し、楊志に騎しめて云く、汝此馬に乘て、宜く心を用ひ、意を認て較量せよ、必ず索超を、等閑の輩と一列に見ることなかれ。楊志頓首して命を承り、已に裝束を調へて一入猛く出立けり。さて又李成は索超に命じていはく、汝はこれ周謹が爲には、武藝の師なれば、何とぞ今楊志に勝得て、周謹が耻をも雪め、又汝が英名も揚べきなり、必ず怠慢て楊志に輸ることなかれ、若萬一にも負ることあらば、楊志はかならず、大名府の軍官を欺き侮ること有べし、我幸ひ陣中に、騎慣たる戰馬幷著馴たる盔甲あり、我是を汝に借べき間、是を披掛て力を奮ひ、心を悉して勝を得よ、汝必ずみづから鋭氣を折くことなかれ。索超深く是を謝し、則嚴に披掛けり。既にして梁中書は、階の前に出て試合場を望みければ、左右の親隨等、銀の校椅を設て、すなはち梁中書を請て座をなさしむれば、其左右には以前のごとく、餘多の軍官等、列を正して並居たるは、誠に嚴重なる形勢なり。

此所目錄の次、金聖歎七十回本、李卓吾評閱施耐庵羅貫中が百回本、及び本朝岡島冠山子の譯通俗本ともに、次の拾三卷目の初に出る急先鋒東郭にて功を爭ふ、を先にし、青面獸北京にて武を鬪ふを後にす。故に本文とは前後の差ありて讀に惑ふ。今前後に目錄を更て、

長鬚あつて、威風凜々として、相貌堂々たり、此人かならず尋常の輩とは見ざりけり。彼勇士既に梁中書が前に至て、敬で云けるは、周謹は今病後にて、精神の衰へ全く復せず、よつて誤て楊志に輸候ひき、某不才たりといへども、願くは楊志と武術の至極を比べ申すべし、某若半點の破綻あらば、楊志を擧て、周謹が職に、替らしめ給はんは偖置、縦 某が職に代らしめ給ふとも、誓て秋毫も寃なし、望むらくは、相公比試を許し給へ。梁中書これをみるに、これ則大名府の正牌軍索超なり。此人常に短氣、急性なるによつて、人皆是を名けて、急先鋒索超と呼り。此時李成も同じく進み出て申けるは、楊志はもと、殿司制使の官を、務たる者なれば、必定武藝の達人ならん、恐らくは周謹が敵手には過つらめ、もし今索超と比試せしめ候はば、天晴よき對手なるべし、願くは相公此輩が、武藝を比べさせ給へ。梁中書是を聞て、心中に想ひけるは、我は只楊志を擡擧んと欲して、斯は計ひ果せし處、衆人いまだ心服なきゆゑ、倘試合を望む、もし今楊志又よく索超にも雄なば、諸人必ず心服して、死すとも怨ることあるまじ、彌楊志に勝を取しめて、正牌の職を授くべきものをとて、乃ち楊志を呼て問て云く、汝索超と比試せんことは如何。楊志が云く、相公の尊命、某豈これを否申べき。梁中書がいはく、汝果して比試せんと思はゞ、先廳後に至て、裝束を更め、再び宜く披掛べし。楊

もなき、空挽しければ、周謹が防牌は徒に空をぞ接へける。周謹心中に想ひけるは、楊志は只鎗のみ善使うて、矢を射ることは善せざるゆゑ、かく空弓を挽けるよな、若第二の箭も亦空弓を控ば、我是を罵つて、竟には我贏にせんものを、と忙はしく馬に策うつて、已に正南の盡稍に至り、再び韁繩を扣へて騎回し、直に廳前を望んで跑來る。楊志此時、急に弓箭打搭へ、已に放たんとしけるが、忽然として、心中思慮をめぐらし、我若此矢を放たば、恐らくは周謹が一命を亡すべし、我佗と原來仇もなく恨もなし、我もし今一箭に射殺さば、却て大いに善事ならじ、只宜しく彼が死すべからざる處を、撰て射中んとて、乃ち馬を近々と進めて、能挽て兵と放ちければ、其矢あやまたず、周謹が肩胛に礑と中れば、周謹暫時も耐得ず、馬より下に眞倒に落たりけり。諸の士卒これを見て、急に教場の内に跳入て、遂に周謹を扶けて、臺の背後に趣きけり。梁中書是を見て、大に感じ、則軍正司の官に命じて、楊志を周謹に代らしめ、副牌の職を授けしかば、楊志は喜氣洋々として、謹で恩を謝し、乃ち其職を蒙りけり。斯る所に堦の左の方より、大漢子一人躍り出て雷の落かゝるがごとく、呼つて云けるは、楊志汝職を受ることなかれ、我汝と三百合を闘て、武藝の至極を試むべし。楊志此人を見るに、身のたけ七尺あまりにして、面圓く耳太く、唇闊く口方なり。腮の邊には、また一部の

放つ。此時楊志弦音の響を聞て、閃りと外し、身を鐙の内に藏しければ、其箭忽ち空を射て遙の方に飛去けり。周謹第一の矢の中らざるに、甚だ慌て、再び第二の矢を取て打搭へ、暫し熬て兵と放てば、楊志又二の矢の弦音を聞き、身を扭弓を擧て、唯一拂ひに掃ひしかば、其矢忽ち草叢の裏に落たり。周謹又二の矢の外れたるを見て、倍周章ける處に、楊志が馬はや教場の盡稍に至りしかば、楊志急に轡縄を勒へ、再び廳前を望んで馳回る。周謹これを見て等く馬を回し、飛がごとく跑來り、兩人兩馬、勢を振ひ勇みをなし、四面八方に繞つて、息をも續ず跑しかば、八つの馬蹄は盞を翻し、鈸を撒すがごとくなり。此時周謹第三矢を打搭へ、平生の力を悉して、宛も團月のごとくに扣滿ち、馬を近々と進めて、楊志が背脊を望で、兵と放ちければ、楊志又弦の響を聞て身を翻し、猿臂を伸し、飛來る矢を中に取て、掌の内に緊と捏り、遂に馬を飛せ、廳前に馳至り、乃其箭を遙場外に投棄けり。梁中書是を見て大に悅び、乃令を下し、楊志も又、周謹を射さしむ。此時將臺の上に又青旗を搖動しければ、周謹急に弓箭を捐防牌をかざし遮り、馬を躍せ正南を望て駈出す。楊志これを見て、同じく馬を飛して追來り、已に其間近くなりしかば、楊志いまだ箭も番へざる虛き弓を滿々と引緊め、弦音高く響せける。周謹は馬上に弦音を聞き、急に臂を開て、防牌を遮りける所に、楊志はもと箭

は又彼等二人に、弓箭の比試を爲しめ給へ。梁中書是を聞て、然りと同じ、即兩人に命じ、汝兩人再び弓矢の高下を較ぶべし。兩人謹で命を承り、各鎗を捨て弓箭を持ち、二人等しく馬を飛せ、教場の内に跑入しかば、諸人是を見て、未だ弓箭の高下は知らねども、天晴大剛の勇夫かなと、一度に咄と稱にけり。此時楊志は梁中書に向つて、馬上に禮を施し、乃ち身を屈て云けるは、弓箭はもと飛ものにて候へば、其中る所、必ず傷くこと有べし、願くは傷損赦免の、命令を承て、互に遠慮なく比試申たし。梁中書、武士の比試に何ぞ損傷することを怖るべき、縱射殺すとも、一言半句の所論有まじ。楊志竟に令を承て馬を回し、教場の當中に跑出たり。李成又防牌を二面出させ、兩人に與へて云けるは、汝兩人弓箭の比試には必ず、防牌なくては不可ならん、各此防牌を用て、箭を遮り身を護つて、よろしく高下を分つべし。兩人防牌を賜りて、これを臂の上に掤り著け、いざ先一箭試んとて、已に馬を飛せて、左右に立分る。楊志まづ周謹に向て、汝先に我を三箭射よ、我も又後に汝に三箭を返すべし。周謹是を聞て、只一箭に射透さんものをと思ひ、急に弓を拈り、箭を搭へ、直に楊志を望で跑來る。楊志は原來周謹が武藝を看破りければ、少しも怯るゝ色なく、防牌を拔き馬を飛せ、正南を望んで跑巡る。周謹忙しく、後に隨て追ひ來り、滿月のごとく扯緊め、箭ごろを待て兵と

東郭の教場に
周謹楊志
武術の試量す

白點を遺すべし、乃ち白點多き者を、輸と定めて、較量なさせば、畢竟傷損なく、軍事に於ても、亦大に利あらん、しらず中書の意はいかん。梁中書是を聞て、甚だ其言を然りとし、則周謹楊志を、廳前に呼て、これを命じければ、兩人謹んで領承し、遂に廳の後に到て、鎗頭を拔去り、氈を用てこれを蘊み、其上を石灰に蘸し、各皂き袍を著し、再び馬に打乘て、二人齊しく敎場の内に跑來る。楊志先馬を勒へて、周謹を見るに、頭には皮の盔を戴き、身には銅の甲を著し、腰には紅の縧を繫び、足には紫の靴を穿き、鎗を撚て馬を躍せ、直に楊志を望んで刺かゝる。楊志も同く馬を飛せ、鎗を擧て相迎へ、兩人陣前にあつて、一來一往勇を勵し、力を競ひ、鞍上の人は、人と戰ひ、座下の馬は、馬と鬪ふ。兩人鎗を交ること、已に五十餘合に及びしかば、周謹が袍の上には、斑々として、五六十の白點を負へり。楊志は只肩胛に一つの白點あり。梁中書これを見て、大に悅び、忙はしく令を下し、鬪を息させ、則周謹を、廳上に呼ていはく、前官汝を以て副牌の職を授けしかども、已に今楊志に贏を取れしかば、今般楊志を以て、汝が職に代らしめ、軍馬を掌どらせんに、汝必ずこれを寃ることなかれ。此時都監李成進み出て、梁中書に告て云けるは、周謹は鎗法未熟たりといへども、弓馬熟練せり、若今周謹が職を削て、楊志を擡擧給はゞ、恐らくは、諸人心服なすまじ、願く

甲を著し、手には長鎗を持ち、背には弓矢を帶し、遂に馬に乘て、廳の後より跑出し、直に教場の内に繞入りければ、梁中書乃ち令を下して、兩將先鎗を比ぶべし、と命じけり。此時周謹楊志を見て大に怒て云く、楊志賊配軍、汝敢て我と武藝を比べんは甚だの慮外なり。楊志これを聞て、同く大に恚り、汝誇言を云んより、早く來て一鎗を試んや、とて、兩將已に馬を躍せ鎗を撚て近々と進みけり。

○青面獸北京にて武を鬪ふ

楊志周謹は互に馬を躍せ、鎗を撚り、已に近く進んで、相鬪んとせし處に、兵馬都監聞達、大に呼ていはく、楊志周謹妄に戰ふことなかれ、暫く馬を勒て相待べし、とて、直に廳上に登て、梁中書に見て云けるは、楊志周謹が武藝を較ぶること、其高下は見ず候へども、鋒はもと無情ものなれば、唯よろしく敵を殺し、賊を斬るべし、今日一家の比試に、眞劍を用ひ候はゞ、恐らくは傷損あつて、輕き時は身を殘ひ、重き時は、則命を害すべし、是もと軍事に於て、大いに利なし、願はくは兩人が鎗の頭鋒を除き、各氈を用てこれを包み、乃ち氈の上を石灰に蘸し、又各黑き袍を著させて、鎗を交へしめば、鎗の中る處必ず石灰の痕あつて、

て、名を遠近に振へり。將臺の上には、風に飜して旌旗多く竪連ね、將臺の下には、天に響せて、金鼓頻に敲立る。此時將臺の上に、一つの紅旗を搖動しければ、諸の武將各器械を持て、教場の左右に躍り出で、謹で梁中書の號令を相伺ふ。梁中書乃ち令を下して、副牌周謹を招きければ、周謹馬を飛せて跑來り、廳前に至りて馬より跳下り、恭しく地上に跪て、令を承る。梁中書が曰く、周謹汝先速に、武藝を演すべし。周謹貧んで命を承り、則ち鎗を取て馬に乘り、直に教場の内に跑入て、東西に馳せ、南北に繞り、鎗を擧て、閃閃と使ひければ、諸人一度に聲を揚て譽にけり。梁中書又左右に命じて、東京の流人楊志を呼ければ、楊志早速廳前に至て跪く。梁中書乃ち楊志に對して云く、我前年東京に至て、汝がことを聞及べり、汝は原殿帥府の、制使をもなしたる者なれば、定めて武藝を善すらん、卽今兇賊四方に起て、人を用ゆべきの時なれば、汝若果して武藝を善せば、我汝を擧て軍中に加ふべし、汝今周謹と武藝の高下を比べ、若得て周謹に勝ことあらば、早速職を授けて重く用ひん。楊志が云く、相公の尊命、豈敢て違き候はんや、某不才たりといへども、尊命に從て一場較量いたすべし。梁中書大に悅び、遂に左右に命じ、馬一疋牽出させ、則ちこれを楊志に與へて、乘しめければ、楊志再三恩を謝し、乃ち廳の後に來て、昨夜梁中書より賜りたる、鐵の盔

職を命ぜんと思へども、未だ汝が武藝の虚實を知らざる故、猶其沙汰を默止せしなり。楊志が云く、某向に武擧の及第をいたし、已に殿帥府の制使の職を授り、十八般の武藝、幼少より學び習うて、頗る是を熟せり、若相公某を以て、副牌の職に擡擧給はゞ、恰も雲を撥て日をみるが如くなり、某若果して、立身を遂ることあらば、敢て心力を竭して、大恩を報じ奉らん。梁中書大に悦び、則又一領の盔甲を取出して、これを楊志に與へていはく、明日東郭門の教場に於て、諸將に武藝を演習しむべき間、汝必ず力を盡し、彼等と比試をなして、雄を取れ、然らば則汝に副牌の職を授くべし。楊志謹んで恩を謝し、其夜は心切に、歡ばしく歇みけり。翌日梁中書又人を軍中に馳て、用意を催しける。此時二月の中旬なれば、風和らかに、日暖かにして、天色ことに明朗なり。梁中書已に早膳罷りければ、裝束華美に調へて、馬に打乘り、楊志及び、許多の家人を從へて、已に東郭門に至りしかば、大小の諸將悉く出迎ふ。梁中書則演武廳の前にて馬を下り、已に廳上に登て中央に著座なしければ、左右に列なる猛將には、指揮使、團練使、正制使、統領使、牙將校尉、副牌軍等、都て百餘人、威風堂々、義氣凜々として、次第を亂さず座を占ぬ。兩邊正將臺の前には、兩人の都監立竝ぶ。其一人は李天王李成、一人は聞大刀聞達、此兩人は、萬夫不當の勇あり、專ら今軍馬を掌つ

多くして、守官梁中書兵權を掌て勢四方に震ひけり。此日二人の下官張龍趙虎は、已に楊志を引て大名府に至り、乃ち東京よりの公文を、梁中書に呈しければ、梁中書是を披き見て、乃ち楊志に問て云く、我前年東京に至し時、曾て汝がことを聞及べり、何故今日人命を害しけるや。楊志謹て云けるは、某向に花石を失ひ候て、久しく流浪の身と沈落し、方々徘徊しける所に、此たび幸ひ赦免を蒙りし故、何とぞ又舊職、制使の官を做んと欲し、彼是雜用に、僅の貯なる金銀も悉く用ひ盡し、漸申文書を乞請け、乃是を携て殿帥府に出候へども、不幸にして、高太尉に容られず、已に艱難に迫りしゆゑ、先祖より傳はりし、寶劍を取出し、是を賣拂んと思ひし處に、惡徒牛二に奪ひ取れんとせしかば、一時の怒に乘じ、遂に牛二を殺し候。梁中書これを聞て大に悅び、卽座に頸枷を除かしめ、遂に返文を修へて、二人の下官に與へしかば、二人は乃ち大名府を出て、再び東京にぞ歸りける。楊志は乃此日より梁中書に事へて、朝夕慇懃に勉ければ、梁中書甚だこれを愍み、始より楊志を擡擧げ、副牌の職を授んと、欲しけれども、諸人の伏すまじきを憚て、空しく月日を送りけるが、一日梁中書大小の諸將に、號令を下して、明日東郭門の敎場に於て、武藝を演習すべき間、早々用意をなして、悉く皆敎場に相集れ、と一々觸を廻しけり。其夜梁中書又楊志を呼て、密に云けるは、我曾て汝を擧て副牌の

官を押監として、北京大名府にぞ流しける。二人の下官張龍趙虎已に命を奉て、楊志に頸枷を入め、即日官府を出て、直に天漢州橋の邊に至りしかば、彼近隣等盡く皆一連に出迎へ、楊志及び二人の下官を請て酒肆に至り、則酒肉を設けて、別の盃を催しけり。酒已に數盃巡りければ、諸の近隣ら、銀子若干取出して、二人の下官張龍趙虎に與へて云く、楊志はもと有名の豪傑にして、此度幸ひに牛二の暴者を殺し、市民の爲に一害を除き候故、諸人悦びをなして楊志を憐むこと尋常ならず、兩公も亦楊志が豪傑なるを憐みて、道中宜しく介抱を加へ給へ。二人の下官がいはく、我等も久しく楊志が英名を聞及びぬ、縦諸人の憑を受ずとも、少しも疎略の意なし、必ず道中のことは憂へ給ふなかれ。近隣の族又若干の銀を取出し、輕微ながら、路費の助に、とて、楊志に贈りければ、楊志深くこれを謝して、涙を含むばかりなり。諸の近隣らは、已に盞を收めて、楊志及び二人の下官に別れ、四方に散て回りけり。楊志は下官と倶に、酒店を出て、再び前日の旅宿に回て、行李等を拾收め、遂に主に辭し別れ、下官に伴れ、北京を望んで、進發す、其夜は東京城より三十里外に、旅宿を取て歇けり。翌日未明に三人、又宿を出て路を急ぎけり。此のごとくすること凡十日にして、遂に北京の堺に至て、直に城下に入り、其夜は旅宿を借て疲を歇め、翌日早々大名府に赴きぬ。此大名府は原來軍馬

されし、天漢州橋の邊に遣し、具に檢驗をなさしめければ、諸々の隣家等は、已に下官を引て、天漢州橋の邊に來て、具しく始終を告げ、一々檢驗を遂させ、遂に一通の供狀を修へて、再び府尹に差上けり。こゝに於て府尹これを發落けるには、人を殺すは尤大罪なれば、命を償はずんば有べからず、とて、遂に楊志を死罪にぞ定めける。かく定て、楊志牢中に在ける所に、諸々の役人共、彼近々に首を刎らるべきを聞て、各大に憐み、何とぞ楊志が命を助けんと、思ふ折節、諸々の近隣等多く賄賂を上下の役人に施し、乃ち府尹に訴て云けるは　彼牛二は東京第一の徒者にて、動もすれば街に出て人を敲店を壞ひ、專ら官府を蔑如にして、農商を犯し掠めぬ、然るに此度楊志彼を殺しければ、東京の街に一害を除き候、願はくは諸人の訴訟を準へ給ひて、楊志が死罪を宥め給はゞ、諸人の悅び、最莫大ならん。府尹訴を聞ていまだ一決せざる處に、上下の役人等盡く皆、よろしく擴成を云ければ、府尹も助けんとは思ひけれども、若牛二が方に、原告の者もや出來るらんと、私に人を馳て動靜を窺しめける處に、牛二には原來近き親類もなくして、僅一兩人遠き緣類有けれども、常に彼が惡をなすを惡みけるにや、此節に及んで、官府に出て左右のことを訴る者もなかりしかば、府尹則楊志が命を助くべしとて、其日早速死罪を改めて、流罪に定め、二十棒を拷打て、面に金印を刺し、遂に二人の下

上に倒れ死にけり。楊志これを見て、大に呼つて云く、諸人の見給ふごとく、此者大に非道をなしたる故、某今是を殺しぬ、願くば近隣の人々、某と共に官府に赴て、此者が非道を働て、殺されたることを訴へ給はんや。此時近隣の者共、牛二が殺されたるを見て、大に喜び、各馳聚集り、商談して云けるは、今牛二殺されしかば、東京の街に一害を除たり、我們速に彼對手と倶に、官府に馳て訴ふべし、とて、楊志に隨つて、開封府に來りしかば、楊志乃ち劍を携へ、諸の近隣等と、堦の下に至て、府尹に見え、楊志先進出で、恭く訴へて云く、某は原殿帥府の、制使にて候ひしかども、向に花石を失ひ逐電せしゆゑ、官職を除かれ、久しく浪々の身となりぬ。已に路銀盡て今日の營もならざるゆゑ、一挺の劍を賣て、飢渇を免れんと、街に劍を携へ、賈んと致せし處、想はず沒毛大蟲牛二來て、劍を奪んとするのみならず、拳を以て某を打んとしけるゆゑ、某一時の怒に乘じ、牛二を殺し候、近隣都て證見として、某と共に此所に伺候いたし候。此時近隣らも都て堦の下に拜伏し、楊志が爲に始終詳に訴へけり。府尹がいはく、已にかくのごとくんば我先楊志に、入門の棒を免すべし、とて、乃ち左右に命じ、楊志に頸枷を加へ、牢の內に遣しけり。此入門の棒と云は、罪人初て官府に來る時、其是非を論ぜずして、先拷打制法あり。此時府尹又幾ばくの下官を近隣等に跟て、彼牛二が殺

欲す、汝劍を買ずんば、速に立去れ、再三我を侮り戲るゝは、是何の道理ぞや。牛二がいはく、汝が劍、愈寶劍に紛なくば、敢て我首を斬んや。楊志が云く、我汝と仇もなく寃もなし、汝を斬て何の益あらん。牛二是を聞て、忽ち楊志を揪ていはく、我實に汝が寶劍を買ん。楊志がいはく、汝買ば、速に先價を持來れ。牛二がいはく、我は原來一文の價もなし。楊志が云く、汝價なくんば、我を揪へて何となすや。牛二が云く、我只汝が劍を求む。楊志が云く、我堅く汝に與ふまじ。牛二が云く、汝眞の豪傑ならば、我を斬んや、若我を斬ずんば、我あへて汝が劍を奪取べし。楊志是を聞て大に怒り、忽ち足を擧て、牛二が小腹を只一踢、けたりしかば、牛二は大力に踢られ、地上に岸破と倒れけるが、牛二も元來剛の者なれば再び起上り、楊志を望で打て掛る。楊志是を見て、大音聲に呼つて云けるは、近隣の人々及び見物衆中、願はくは我爲に證明になり給へ、某今路銀に盡て、此劍を賣んとする所に、此者劍を奪んとするのみならず、今又我を擊んとす、後もし事の破れに至らば、我爲に宜く是を辨じ給はるべし。牛二大に恚ていはく、汝がごとき匹夫縱打殺すとも、何の妨かあらん、とて、卽ち右の手に拳を捏て、已に楊志が眉間を望で打て掛る。楊志これを見て、閃りと跳躱れ、彼寶劍を引提て、直に牛二が身邊に刺て入り、一時の怒に乘じて、胸の上を續けて三刀刺ければ、牛二忽ち阿と叫で、遂に忽ち地

く銅錢を持來れ。牛二乃ち貨包の内より、二十餘錢を取出し、則州橋の欄干の上に疊置て、楊志に向ていはく、汝もし此錢を切たらば、我三千貫を以て買取べし。此時諸の人民、近くは前ざれども、盡く遙の所より取圍て見物す。楊志が云く、是らの銅錢を切んに、何の難きことあらん、いざ一切割て見せん、とて、頓て劒を拔て、只一著著たると見けるが、彼疊たる二十餘の銅錢、忽ち二つになつて、切口少しも參差なかりしかば、見物の諸人、一度に咄と譽にけり。牛二怒て云く、汝等諸人何を猥に稱るぞや、再び一聲なりとも、揚ることなかれ、と罵て、又楊志に對して云く、汝第二には吹毛を切と云けるが、汝又是を試んや。楊志が云く、最易きことなり、とて、自ら數十根の頭髪を拔て、刃の齒の上を望て、一吹吹ければ、頭髪忽ち切て紛紛と散にけり。見物是を見て、牛二に叱られんことを顧ず、また一般に聲を發して譽しかば、益人加つて見物彌多かりけり。牛二又問て云く、第三には人を斬て刃の上に血を染めずと云けるが、我さらにこれを眞とせず、此劒果して寶劍に贋なくは、汝早く人を斬て、我に見せよ。楊志が云く、太平の世に何ぞ妄に人を斬るべき、汝若信じがたくは、人の代に狗を引來れ、我是を斬て證とせん。牛二が云く、汝向には人を斬ことを云て、狗を斬とは云ざりけるが、今更に狗を斬んと云は如何ぞや。楊志が云く、我今狗といへるは、人の代に是を斬んと

なかゝる城下に、孰の所よりか大蟲來るらんと、四方を顧る所に、遙向うより、一人の大漢子、大に爛醉して擅に双手を打搖り、傍若無人の體にて、左右を拂て馳來る。楊志此者を見るに、面色の黑きこと墨のごとくにて、威風の猛きことは虎のごとし。此者は原東京第一の徒者、沒毛大蟲牛二と云て、常に東京の街に出遊び、動不動人を嚇し爭ひを作し、已に官府にも數度出けれども、官府に於ても又禁ずること能はざるなり。此故に東京の人民此牛二をみるごとに、皆先を爭うて逃走る。此時牛二楊志が前に至て、則ち手を伸し彼寶劍を握て楊志に問ていはく、汝が此劍は幾ばくの價に衒や。楊志答て、是は先祖より相傳の寶劍にて、實に三千貫ならば賣申さん。牛二叱ていはく、汝が此劍いかなる名作なれば、かく許多の價を需るや、我只三百錢に買たる刀も、能牛肉を切豆腐を切る、汝が此劍も、此等の物を切のみならんに、何を以て寶劍とはいふや。楊志がいはく、我此劍は、街の店にて買ふ白鐵の刀とは等しからず、是はこれ實に名作の寶劍、汝必ず尋常の刀と一列に見ること勿れ。牛二がいはく、汝再三寶劍と云は、此劍必ず猪肉豆腐等の外、又能物を割や。楊志がいはく、我此劍は第一には銅鐵を切て、刃の齒捲らず、第二には能吹毛を切る、第三には人を斬て、刃の上に血を染ず。牛二が云く、已にかくのごとくんば、汝敢て銅錢を切んや。楊志が云く、何ぞ切ざらん、汝切せたくばはや

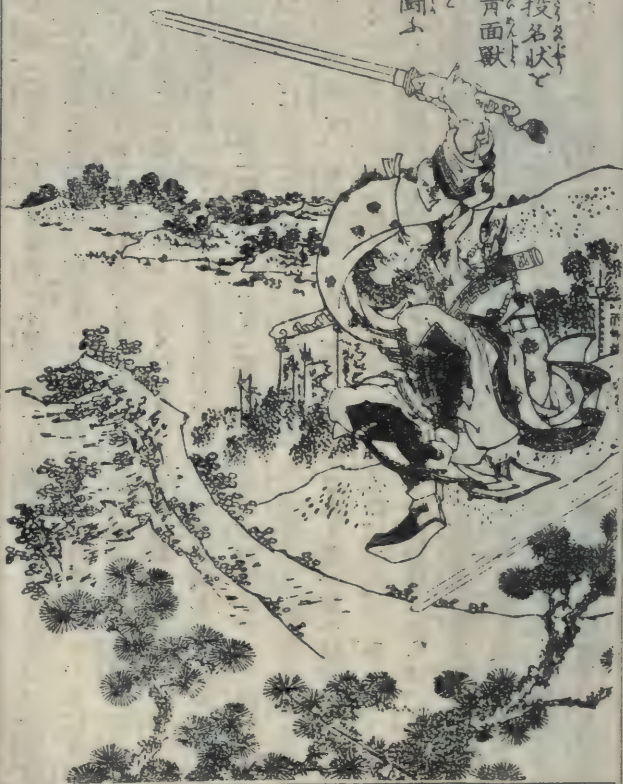
く朝廷を輕ずるにあらずや、幸ひに今赦免を蒙るは、最莫大の造化にして、自ら滿足すべき所に、何ぞ妄に再び殿帥府の制使を做んと欲するや、汝縱赦宥を蒙りたりとも、以前の罪名いまだ淨からず、我奚ぞ肯て汝を殿帥府に用んや、とて、申文書を把て自らこれを扯破て、階の下に丟去て、遂に左右に命じて、楊志を門外へ追出しぬ。楊志大に恥辱を蒙り、直に旅宿に歸て、只鬱々として想けるは、向に梁山泊にて、王倫再三我を諫め、高俅が用ひまじければ、山陣に留れと云けるは最理なり、然れども我代々、清白の姓名を、今更汚さんことを忍び難く、何とぞ再び歸官して、先祖の名をも清くせんと欲するに、想はず高太尉に遮られ、剰恥辱を蒙りぬ、高太尉何ぞかくのごとく、毒惡にして人を妬忌や、我今許多の金銀を、賄賂に用悉して、進退殊に谷りぬ、然れ共幸ひ先祖より、相傳所の寶劍一挺、尚いまだ身を離たず、所持すれば、此節これを沽代なし、路費を求め、何國へなりとも走り去て、再び命を立身を安んぜんものと、其日寶劍を携へ市に出で、乃ち賣標を插て、此彼に徘徊し、遂に馬行街の内に來て、凡二時ばかり買主を俟けれども、曾て一人も問者なかりしかば、直に街を繞り出で、天漢州橋熱鬧なる所に來て、暫く買主を求めて、立住て居たりしに、急に左右の人悉く一度に騷立て、夫大蟲來るに、早く逃よ、と呼つて、各四方八面に迯散けり。楊志これを聞て、怪か

の門まで出けり。楊志深く禮謝し、諸の頭領にも一禮を述て別れ、乃ち小賊ら一兩人に導れ麓に下り、頓て大路に出で、又小賊等に辭し別れ、遂に東京を望で歸りけり。王倫は此より林冲を山陣に留て、第四の校椅に坐せしめ、朱貴を第五の校椅に坐せしむ。此日を肇として、梁山泊に五人の頭領堅固に山塞を守り、專ら民舍を打ち、官家を劫し、威風四方に震ひけり。

○汴京城にて楊志刀を賣る

偖も青面獸楊志は大路にて送りの小賊等に辭れ、直に東京を志し急ぎける程に、不日に東京に至りて城下に入り、乃ち客店を借て旅宿し、數日逗留して、樞密院に賄賂をなし、再び殿司府に於て、制使官をなさんと思ひ、許多の金銀を遣ひ盡し、漸々申文書を得て、殿師府に至り高太尉に見えけり。此申文書といふは、凡殿師府に入て官をなす者には、先樞密院より此申文書を官者に與へ、殿師府の太尉に見えしむ。こゝに於て太尉、又其者を點視て、官に任ずると任ぜざるとは、殿師府に於て定まるなり。此時高太尉は楊志が呈上せし申文書を見て、大に怒ていはく、楊志汝は嚮に十人の制使の内に加へ、花石を收めに遣しける所、九人の制使は、早速花石を運漕回て納めけるに、汝獨のみ花石を失ひ、其懈怠の罪を避ん爲行方を藏す、是全

山陣に至て、新に某に屬す、足下も亦向に不慮の難にて、浪々の身となり給ひ、今幸ひに勅免を蒙り、帝京に回り給ふとなれども、唯恐らくは高太尉今專ら兵權を掌り、不仁不道を行ひ、賢人義士を妬む、豈敢て足下を容ひ申さんや、願くは東京に歸ることを休給ひ、我此山陣に跡を隱し、某らと共に强盜の首となり、多くの官人等が不義の財を奪ひ取り、大秤を以て金銀を分ち、大碗を以て酒肉を喫し、均く安樂を催し、同じく豪傑を做し給はんや。楊志答て曰く、誠に大頭領の懇情、感激に勝ずといへども、某が親族東京に在けるが、某向に身を遁れし時、禍彼等が身の上に及び、多く難儀を蒙せり、然共其後曾て一禮をも叙申さゞる故、幸ひ此度は速に東京に赴て、親類などへも、一禮を謝し申さんと思ひ候へば、山陣に逗留なしがたし、唯望らくは、某が行李を還し給はらんや、もし還し給はずんば、手を虛うしてなりとも、是非歸京すべし。王倫打笑て曰く、足下山陣に留ることを嫌ひ給ふならば、某何ぞ强に止んや、先心を寬け今宵は一宿なし、明早旦發足し給へかし。楊志是を聞て大に悅び、乃ち心を安んじ、酒盃闌になりしかば、遂に酒宴罷て、各一間に入つゝ歇みけり。翌日早天王倫又酒宴を設け、楊志を請互に獻酬し、共に別を惜みけり。楊志は酒を酌こと數盃の後、辭し打立んと申ければ、王倫彼行李を取出し、楊志に還さしめ、遂に楊志を送りて、山陣の眞面

林冲投名状を
求て青面獣
楊志と闘ふ

らずや。楊志がいはく、則然なり、青面獸は某が綽號にて候なり。王倫がいはく、足下果して青面獸楊制使にてあらば、先山陣に伴て、一盃の淡酒を勸め度思ふなり。楊志がいはく、足下某がことを能知り給はゞ、只彼行李を返し給へ、是却て酒を賜らんより、猶悦しからん。王倫がいはく、我前年東京に至りし時、足下武擧の及第し給ひて、洛中擧て足下の武藝を讃嘆しけるゆゑ、某も其時足下の雷名を承知りぬ、今日幸ひ此所にて對面を遂候に、豈敢て空しく歸しまゐらせんや、先山陣に入給ひて、暫時疲を慰め給へ、少しも別意これなき間、必ず疑ひ給ふことなかれ。楊志此時辭すること能ず、遂に王倫に隨て河を過り岸を上つて山陣に至りけり。此時朱貴も亦山陣に來て、共に聚義廳に入て會合す。左の方に王倫杜遷、宋萬朱貴、次第に依て四つの校椅を一連に排て、右に楊志、其次に林冲、二つの校椅各座已に定りければ、王倫急に小賊等に命じ、美酒佳殽を備て酒宴を設しめ、山河の珍味品を盡して、飲酌を催し、酒已に數盃巡りしかば、王倫乃ち林冲を指して、楊志に對して云けるは、最前も粗告しごとく、此人は東京八十萬禁軍教頭豹子頭林冲なり、只彼高太尉、賢者を妬み小人を愛し、遂に謀を設て彼を無實の罪に陷いれ、滄州に流し、剩又頃日人を滄州に遣し林冲を殺さんと圖りしゆゑ、林冲却て高太尉に方人せし惡人等、總て三人を害し、滄州城を逃出で、直に此

こゝに於て、兩人刀を收めて双方に立並ぶ。王倫また林冲を指ざして、彼大漢子に對ていはく、これは我爲には盟を約たる、義兄弟林冲と云ものなり、知らず汝は又いかなる人ぞや、願はくは姓名を承ん。彼漢子が云く、我は是三代將門の後、五侯楊令公が孫、姓は楊、名は志と云者なり、頃日は流落て此關西の邊に徘徊す、我前年曾て武擧の及第し、直に殿司制使の官となりぬ、其比帝萬歳山の上に花石を布き、山の風景を索給はんとて、某ごとき制使の官、總て十人を太湖の邊に遣され、多く花石を收て、京に運び上るべき由なりしかば、某ら勅命を奉て、已に太湖の邊に趣き、夥き花石を船に積て、都合十艘の舟、同時に太湖を漕出し、直に黃河の邊に至りし處に、大風欻に起て、十艘の舟悉く風波に顚倒し、已に危く見えしが、幸ひに恙なかりしに、某唯時運拙き故にや、十艘の舟の内、某が舟のみ、諸の船に後れ、一二里ばかり引下りしかば、急に追つかんとするに、又候風濤大に起り、竟に我舟を礁の上に吹揚げ、忽ち船底破れしかば、花石悉く水中に沈み、僅に命のみ助かり、這々岸に上りしかども、再び京に歸入がたく、方々に徘徊して、罪を遁れ難を避けて在し所に、幸に此たび赦免を蒙りしかば、急に少しの錢財を求め、已に今東京に歸らんとて此處に至り、想ず足下等に行李を奪れぬ、願くは行李を疾々還し給はらんや。王倫是を聞て、乃問て云く、汝は是青面獸楊志にはあ

二編 卷之十二

○梁山泊にて林冲落草す

斯說林冲は刀を横へ待居たるに、彼大漢子已に至り、大に罵て、潑賊汝、我行李を疾持來て返さんや、とて、刀を揮て撃てかゝる。林冲原來心悶て、待設けたることゆゑ、一言の答にも及ばず、乃ち虎の鬚を竪て、圓き眼を開き、急に刀をもつてこれを迎へ、二人勢を奮うて相鬪ひ、左に當れば右に躱れ、右に撃ば左に避け、互に武術の秘蘊を盡して、戰已に三十餘合に至れ共、雌雄いまだ分たざりしかば、二人の豪傑、相共に大に怒り、虎の勇み龍の勢ひを震つて、又鬪十餘合に及で、精神益盛んなりける所に、忽ち山高き所より、數十人の聲して、大に呼ていはく、兩人の豪傑鬪を休られよ、必ず誤て相傷ふことなかれ。林冲是を聞て、急に圈子の外に跳出で、山を望で是をみるに、王倫、杜遷、宋萬及び諸の小賊ども、悉く山を下り舟を浮べ、河を渡て馳來ぬ。王倫先二人の豪傑に向て云けるは、足下等兩人の働き、等閑の豎ぶ所にあらず、先互に怒を休て息み給へ、必ず誤て兩虎の鬪、一虎を傷ふことなかれ。

ひ、林冲小賊に向ひ、歎じて云けるは、我が薄命の至て苦しきこと、何ぞ果して斯るぞや、三日の内に唯一人の客を待請けるに、又討漏し手を虚うす、是何の報いぞや。小賊がいはく、旅客は討漏し給へども、是等の行李を得候へば、是又首の代にもなるべきなり。林冲が云く、然らば汝は先此行李を荷て、山陣に歸るべし、我は尚又客の來るを俟つけ、何卒投名狀を整て歸りたし。小賊然り、と領承し、則行李を擔て先山陣に歸りけり。かゝる處に一人の大漢子、山坡を繞り出て馳來る。林冲これをみて、天の賜なり、と大に歡び、乃ち朴刀を横へ、相待ける處に、彼大漢子近々と馳寄て、恰も奔雷の如く、太いに吼り罵り、林冲を白眼で云けるは、汝潑賊好も我僕を襲うて、行李を奪ひ取けるよな、我今汝を尋ね需んとする所に、汝反て此處に出で、妄に虎の鬚を撚らんと欲や、去來汝に手術を見せん、と忽ち身を躍り刀を揮して、直に林冲に斬て掛る。林冲この漢子をみるに、頭には紅氈の笠を戴き、身には黒綾の衣を著し、腰には白線の縧を繋び、一挺の腰刀を帶し、一挺の朴刀を提げ、身の丈七尺五寸ばかりにして、面には大いなる青き痣あり、腮の邊には少し赤鬚あつて、兩眼の光は朝暾のごとくにして、尋常の人とは見えざりけり。是大漢子何者ならん、次の卷を讀て知得ん。

林冲雪を蹴て聚義廳に至る

山を下り、直に東の路に馳行ける。林冲小賊に對て、今日もし投名狀を取得ずは、直に他方に赴くべし、汝よく我が爲に旅客來ることあらば、告知せ候へ、とて、一二三百歩許東の路へ遣し、旅人の來るを伺はしめ、其身は路の傍に徘徊り、今や投名狀の來るやと、一向前後に眼を配りて俟けれども、さらに一人の客も見えず、日もはや晝過になりければ、彼小賊再び立歸り、林冲に語ていはく、常には一日の內三五人の旅客必ず通ることなるに、何ゆゑにや今日もはや午時過に暨で、いまだ一人も來らざれば、敎頭嘸倦給はん。此時殘雪初て霽て、日色極めて朗なりければ、林冲卽ち朴刀を提て、小賊に對し、汝が申ごとく、今日晝時を過て、一人の來るなし、必定投名狀は妥貼まじ、天色未だ晩ざるに乘じ、行李等を收拾て、何方になりとも馳行き、此身をも命をも立安んずべし。小賊是を承り、誠に難澁の仕合に遇給ふものかな、と云も了らざるに、一人の旅客遙東の方より來りしかば、小賊これを見て、急に林冲に告ていはく、好哉々々東の方を見給へ、一人の旅客見え來れり。林冲覺えず聲を揚て云けるは、あら慚愧しや、三日の內に只一人の旅客に遇けるよな。彼者已に山坡を過て、漸々近づき來りしかば、林冲頓て身を奮て跳り出で、乃ち朴刀を輪して斬殺さんとせしに、彼客大いに愕き、急に荷物を弃置て飛がごとく、山坡を超て逃去ければ、林冲焦燥て後を慕ひ追けれ共、影も形もなく追失

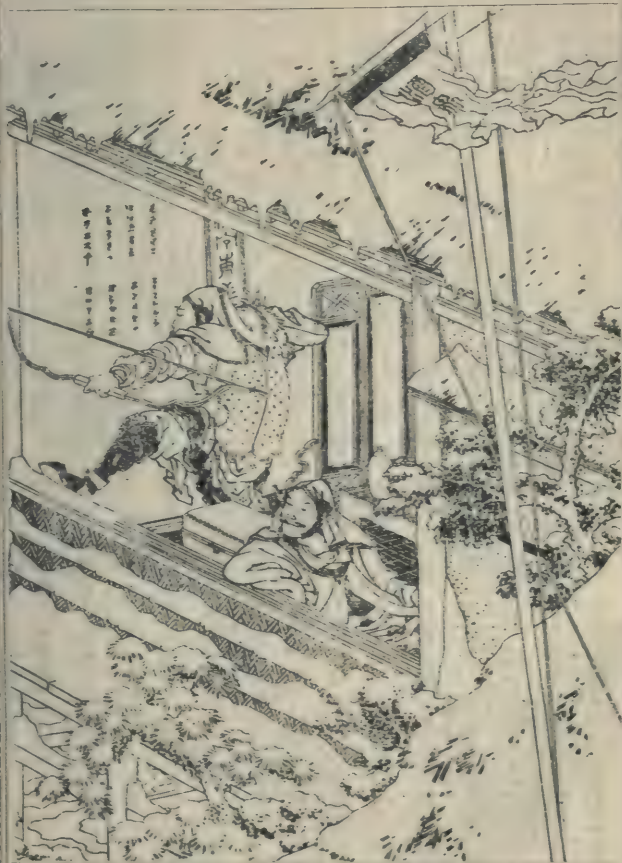
林冲もさすがに手を下しがたく、空しく打眺て通しけり。此時林冲深く嘆息して、又今日の投名狀も、畢竟如何ならん、と心志を苦めけるに、日も漸々西山に傾きければ、林冲小賊に向て、我運命何ぞかく盡ぬるや、昨今兩日のうち心腑を惱し、投名狀を俟たるに、偶來るは三百餘輩の大勢なれば、聊も犯しがたく、擅に過らせたり、其跡には絕て人影もなければ、今日も亦手を虛うして、投名狀の整なし、誠に我命運の拙きこと、如何がせん、と天を仰て長歎すれば、小賊がいはく、敎頭且心を寬げ給へ、明日も猶一日あり、某敎頭を引て、東方の路に打向ひ、必ず投名狀を待得べし、今日もはや日暮なれば、去來歸り申さん、とて、遂に兩人舊の路より山陣へ、上りける。王倫又林冲に問て云く、投名狀は整携へ候や。林冲兎角を答ずして、只顧歎息ばかりなり。王倫これを見て、呵々と打笑ていはく、今日も投名狀を調へ候はずや、我謂に三日の限を定て、已に今二日に及べり、若明日投名狀なくんば、再び見ゆるに及ぶまじ、足下の心儘に直に何方へも赴き候へ、必また山に上り給ふこと無用なり、と。林冲是を聞大に憂ひ、卽ち客廳に入て、地を拍て頻に歎じていはく、我高俅が故に無實の罪に陷され、竟に落魄して此處に至り、かく命運の衰へけるこそ拙けれ、とて、竟宵眼も閉ずして、夜の曉を遲しと待わび、翌日未明に食を吃し、裝束を調へ、腰刀を帶し朴刀を持ち、又小賊とともに

が、午の刻に到れども曾て一人も通行せざれば、林冲心甚だ安からず、ひとへに頸を伸して、東西を顧み、何者にても早く來れかし、投名狀を整て、快く山陣に歸らんものを、と猶心をいらちて待けれども、其日も暮に及ぶまで、一人の人影だに見えざりしかば、彌鬱悶し、只惘然と呆れはてたる處に、小賊諫て言けるは、教頭十分に憂給ふべからず、たとひ今日投名狀に遇ずとも、明日明後日の內には、何ぞ一人旅客、過らざることなかるべき、今日は已に晩に及候へば、先山陣に歸り給へかし。林冲が云く、汝が言然り、とて、遂に小賊を倶して、むなしく歸山したりける。王倫は林冲が歸り來ると聞て、呼入れて問けるは、投名狀はいかゞ持參ありしや。林冲答て、今日は折あしく、更に旅客に遇ざりしゆゑ、投名狀を得ざるなり。王倫が云く、明日明後日の內に投名狀なくんば、此處に逗留叶ふまじ。林冲再びこたへにも及ず、心中に快からずして客廳に來り、其夜も亦鬱々として歇みけり。翌日早天より、林冲は又一人の小賊を從へて山を下り、乃ち商議して云けるは、今日は南の路に出て、投名狀を待つくべし、とて、遂に二人南の路に出て、茂れる林の有しに藏れ、恰も旱魃に白雨を待こゝちして、風の颯と吹をも、人の足音かと疑はれ、遙左右を見遣り待けれども、さらに半身もみえ來らず、午の時過て一簇の來りしかども、凡三百餘人、首尾一列して通りければ、

く、某大罪を犯して、身を藏すべき處なきゆゑ、此處に來るなり、大王は何ゆゑ頻に疑を生じ給ふや、某今官司方々に追捕を馳て捜し索めらるゝこと、諸人の知る所なり、願くは大王是を以て察し給へ。王倫がいはく、汝若眞の心にて我山に至るぞならば、一つの投名狀を持參せんや。林冲が云く、投名狀を整んこと容易し、墨筆を借候はゞ、早速書整め申べし。朱貴がいはく、林教頭は未だ投名狀を知り給はず、是は人の首を云なり、凡新に人來て山陣に加はる時は、先麓に下つて往來の旅客を斬り、其首を獻じて衆の疑を晴さしむ、これを名づけて投名狀とは申なり。林冲がいはく、某肇て山陣に來り候故、此ことを辨ざりし、然れ共首を獻じて、投名狀とせんこと、是亦難からざれば、早速麓に下て、投名狀を整むべけれども、若往來の人なくんば、如何せんや。王倫がいはく、汝に三日を限るべし、若三日の内に投名狀を差出さば、山陣に留め申さん、若又三日の内にこれなくば、直に山を下りて、何方へ成とも行候へ、必ず我を恨むることなかれ。林冲乃ち領承して、其夜は客廰に入て歇みければ、朱貴は再び麓に下り、酒肆にぞ歸りける。林冲は其夜頻に鬱々として眼を合せず、已に五更の時に至りければ、自ら起出て用意を調へ、遂に腰刀を帶し朴刀を提げ、乃ち一人の小賊を從へ、山を下り舟を渡し、已に岸に上り小路の傍に隱れ在り。今や人の來らめ、と心を認て俟ける

がいはく、願くは大王某が一言を聞給へ、山陣はいまだ粮多からずといへ共、近村遠郷を馳て借求るも易かるべし、山中水泊には樹木極て多ければ、縦萬千軒の屋を造り候とも、是亦易かるべし、林敎頭一人を留候はんに、何の難きことか候はん、況や柴大官人は、山陣の爲には恩人なり、若林敎頭を留給はずんば、柴大官人何とか思はれ候はん、殊に林敎頭は武藝の達人なれば、必ず異口力を盡して、山陣の恩をも報じ申されんか、望らくは大王明らかに察し給へ。杜遷がいはく、山陣いまだ十分に富ずといへども、何ぞ一人の衣食の、足足ざることを論ぜんや、大王若林敎頭を留給はずんば、柴大官人我輩が恩を忘れ義を背くを悪まるべし、我輩向に多く柴大官人の惠を蒙りてこそ、今かくのごとく命を保ち身を安んじ候なり、然るに偶一人の英雄を薦め越され候を、留得ずして山を追下し給はゞ、實に是本意に有まじ。宋萬も又諫て云く、柴大官人は山陣の恩人なるに、豈能是を辭することを得んや、よろしく林敎頭を留て頭領とも成し給へ、若然らずんば我輩、信を失ひ義を傷ひ、必ず天下の豪傑に笑るべし、某何ぞ能これを忍び申さんや。王倫がいはく、汝ら各いまだ知らざる所あり、林冲は滄州に於て、大罪を犯したるに依て、當山に逃來るといへども、未だ其實をしらず、若萬一山陣の動靜を窺はん爲に來るぞならば、汝等後悔するとも何の益かあらん。林冲是を聞て近く前でいは

處に、其後宋萬又相繼で馳加り、終にかく衆八百餘人を集めて山陣を守る、然れ共我曾て武藝を善せず、杜遷宋萬が武藝も又尋常なり、彼林冲は東京禁軍の教頭なれば、武藝必ず人に勝るべし、若彼を山陣にとめ置なば、彼必ず我輩が武藝を侮り、久しからずして山陣の主とならん事を圖るべし、然る時は我輩爭か彼に敵し當らん、終には山陣を奪れんこと治定たらん、しかじ今宜き計較を設て彼を他方に遣し、預じめ後の患を除くべし、最柴大官人の想像は好るまじけれ共、今更これを顧み難し、とて、又格別に酒宴を設け、飲酌已に亙久くして宴罷りしかば、王倫小賊に命じ、白銀五十兩（和の五百目）幷に彩緞十疋取出し、自ら是を林冲が前に差置ていはく、柴大官人偶足下を薦遣されしかども、山陣は糧乏しく屋破れ、足下を留るに宜しからず、若曲て足下を留なば、却て足下前程を誤つことあらん、是は輕少の禮物にて候へ共、聊以て餞を表するまでなり、願くは是を收め、早々山を下り給へ。林冲これを聞て大に悅ずして云けるは、某千里の路を來て、山陣を賴まんとするは、柴大官人の薦めに任す所なり、聊餞を受て他方に行ん望なし、願くは憐を垂給ひて、山陣に留置給はゞ、某不才たりといへども、敢て大王の爲に犬馬の勞を施すべし。王倫がいはく、我此山陣は淡薄の地なれば、豈能足下を留め申すことを得んや、足下必ず誤て某を怨み給ふことなかれ。朱貴

朱貴舩を呼て
林冲を梁山泊
に伴ふ

凡方四五百丈もあるらんと覺しき四方の山を要害とす。是則山陣の眞面の門なり。こゝに於て朱貴林冲を導き、直に門に入て聚義廳の內に至る。林冲此處をみるに、其當中には山陣の大王第一の頭領王倫、高く校椅の上に坐す。其左には第二の頭領杜遷同じく校椅の上に坐す。其右には第三の頭領宋萬、同く校椅の上に坐しぬ。朱貴已に進み出で、則林冲に指して、王倫に告ていはく、此人はこれ東京八十萬禁軍教頭林冲と云豪傑なり、向に高太尉が非義に依て、無實の罪に陷され、滄州に流され、又滄州にては管營差撥陸虞候、富安等が奸謀にて、草料場を燒拂れ、乃ち差撥、陸虞候、富安等三人を殺して、滄州城を逃出で、直に柴大官人の館に至りて、暫く身を藏し居られしが、柴大官人甚だ懇情を竭さるゝの所、官司の穿鑿緊密に依て、一通の書簡を添て、當山陣に薦越されて候、願くは大王此人を陣中に留め給へ。此時林冲書簡を取出だして王倫に呈す。王倫頓て書翰を拔き見て、則林冲を請て第四の校椅に坐せしめければ、朱貴は第五の校椅に坐をなしぬ。王倫乃ち小賊等に命じて、酒宴を設しめ、已に飮酌始り酒はや數盃巡りければ、王倫林冲に問て曰く、柴大官人は益安健にして恙なく候や。林冲答て、柴大官人彌無異にして、每度郊外に獵を樂れ候。王倫又林冲が始終を詳に問聞て、心中に思ふやう、我は是落第の秀才なりしかども、幸ひ杜遷を語うて、此山に來りし

出し、頓て向の葦葦の内に射込けり。林冲これを見て問ていはく、蘆の内に響箭を射入給ふは、これ何の意ぞや。朱貴がいはく、此箭は則號箭と申て、相圖の箭なり、凡此處より山陣に用事ある時は、かくのごとく箭を放てば、早速葦の内より舟を漕來り候、と云も了らざるに、果して對ふの葦の内より、四五人の小賊一艘の舟を漕出し、直に朱貴が水亭の下に至る。朱貴は林冲を引て倶に舟に乘けるを、彼小賊らふたゝび舟を漕回して、葦の叢に入にけり。

○林冲雪夜　梁山に上る

小賊等が漕去し船疾く金沙灘の岸邊に至しかば、朱貴は林冲を引て岸に上り、同途して山陣へ馳登る。林冲心を認て見るに、岸の兩邊は悉く大木にて、山の半に一つの亭あり。これを過て暫く上る所に、大いなる關ありて、前には鎗戟劍刀弓矢旗等密しく竪並べ、其四方には檑木砲石等を重々に架列たり。林冲已に朱貴と倶に關を過て、左右を顧るに、谷深く、路險く、所々に備あつて、旗は風に飄り、矛は日に映き、其嚴重なること、寔に言語に盡すべからず。此所より又二つの關を踰え、已に陣門に至りしかば、林冲首を擡て四方をみるに、前後左右總て高山虛空に聳えて、雪色恰も銀を敷たるごとくなり。其中央には鏡面のごとき一片の平地ありて、

蒙汗薬を用て、足下をも剝取んと思ひし處、足下一向梁山泊の路を問給ふ故、暫く動靜を候ひ、未だ手を下ざる所に、足下又詩を吟じ、白壁に姓名を書候故、いよ〳〵蒙汗薬を差扣ぬ、其ゆゑいかんとなれば、某曾て足下の大名を聞こと久しく、今日幸ひ相遇ふこと、誠に天の引合せなり、足下は則當世の豪傑、殊更柴大官人の書簡を携へ給ふとなれば、大王王倫も必ず山陣に留て、重く用ひらるべき人なり、今宵は此處にて快く酒を酌候へ、とて、則ち酒宴を設け、厚く林冲を欵待けり。林冲これを謝して云く、某豈能かくのごとき管待に當んや、必ず心を費し給ふことなかれ。朱貴が云く、某原來山陣の命を奉て、若有名の豪傑に遇候時は、酒宴を設て欵待申なり、況や足下は山陣に入時は、某らなどとも盟を結んと欲し給ふことなれば、豈敢寸志を表ざらん、只好慇懃を休て、酒を酌疲を慰め候へ、とて、則盃を執て相勸め、酒已に半夜に至りければ、林冲が曰く、いかゞしてか舟を覓め、梁山泊へ渡り申さんや。朱貴が云く、舟は原來此處に極て多し、足下必ずこれを憂ず、今宵は此處に一宿し給へ、五更の時に至て、某足下を導き、倶に山陣に上るべし、と。此時盃已に收りければ、林冲朱貴各一間に入て歇けり。漸五更の左側にも成ければ、朱貴先起て林冲を呼起し、又酒肉を設けて林冲にすゝめ、酒數盃を傾るの後、朱貴自ら水亭の窓を推闢き、一張の畫弓一枝の響箭を取

陣を守る、其地に赴きて何事をなさんと欲するぞ。林冲がいはく、某實に滄州にて人を殺すに依て、官司追捕を馳て某を搜し索ること急なれば、身を忍ばん地なし、今山陣に入て災難を避脱れんとす。彼漢子が云く、さあらば、山陣に縁ある人足下を薦遣すならん。林冲が云く、我を遣すは、滄州橫海郡の人なり。彼漢子が云く、夫は柴大官人にてなきや。林冲が云く、足下は何故是を知給ふや。彼漢子が云く、柴大官人は原來山陣の大王とは交り厚き故、常に書簡往來す、偖此梁山泊の大王頭領王倫は、昔日未だ梁山泊を得ず、浪々の身なりし時、杜遷と兩人柴進が館に、數月逗留して憐を蒙り、發足の刻も路費等を多く求し故、今に於ても時々書を寄て相訪ふとなり。林冲は彼漢子が言を聞て、則拜をなして云く、足下梁山泊に故ある人とは、某曾て知ざりし、願くは姓名を報じ給へ。彼漢子忙はしく禮を還して云く、某は則王倫頭領の手下に屬する所の頭領、姓は朱名は貴、もと沂州の沂水縣の者なり、乃ち王倫頭領の命を受て、此所に酒店を開き、專ら往來の人を窺ひ、若財寶ある者、過るに遇ては、早速山陣に告知せて剝取り、もし財寶なき者來る時は、則免し過らしむ、凡人を剝取候には、輕き時は蒙汗藥を密に、酒の内に入てこれを飲しめ、渾身攤四肢痲れ、動き働くことならざる時を待て、竟に是を剝取申なり、又重き時は卽座に劍戟を用てこれを殺し剝取候なり、今已に

るに、豈料んや高俅の故にかく浪々の身となされ、家あれども囘りがたく、國あれども往がたし、今此寂寞を受ること、偏に時の不祥なり、と感懐益盛にして、遂に五言八句の詩を吟じ、即筆硯を借て白壁の上にこれを書下す。其詩に曰く。

伏レ義是林冲　爲レ人最揮レ忠　江湖馳ニ聞望一　慷慨聚ニ英雄一
身世悲ニ浮梗一　功名類ニ轉蓬一　他年若得レ志　威鎭ニ泰山東一

林冲一律を書罷り、又盃を傾け居たるに、彼大漢子忽ち林冲が前に進み來り、林冲が腰を揪へ、爾いかんぞ能大膽なるや、汝は是滄州にて大罪を犯し、專ら今官司より汝が形を寫し、方々を尋ね捜す所なり。林冲が云く、汝は我を何者と思ふぞや。彼大漢子のいはく、汝は是林冲にあらずや。林冲が云く、我姓は張なり、何を以て林冲とは云や。大漢子笑つて、汝必ず我を誑くことなかれ、今壁の上に分明に汝が姓名を書たるにあらずや。林冲がいはく、汝は實に我を捉へんとおもふや。彼大漢子呵々と打笑つて云く、我汝を拿へて何の用かあらん、先我に隨て内に入候へ、別に說話すべきことあり。林冲聊も噪ず、乃ち彼大漢子に從つて内に入り、一つの水亭の上に至つて、座已に定まりければ、大漢子小斷に命じて燈を點させ、林冲に對つて新に一揖して云く、今足下は一向梁山泊を尋行んと思はるゝが、彼所は强盜多く集て山

里あるとも覺えざるに、遙向の湖の濱に一間酒肆ありければ、林冲幸ひのことに思ひ、遂に酒肆の内に入て窺ひみる處に、店の左右多く凳を排てありしかば、林冲乃ち左の方の凳の上に坐し、行李を傍に置ける處に、早一人の小厮來りて問ていはく、貴客は酒を沽給ふや。林冲が曰く、我こゝに至るは酒を求めんが爲也、汝問にや呼ぶ、早く酒を持來れ。小厮遂に内に入て、未だ久しからずして、早速酒肴を携へ、林冲が前に置く。林冲自ら酒を篩で、僅二三盃を酌ける處に、又内より一人の大漢子、背に手を叉でさも從容に出來り、直に門前に至て四方の雪を賞して徘徊す。小刻ありて、彼大漢小厮に問ていはく、酒を飲は誰なるぞや。小厮がいはく、遠來の旅客なり。林冲又小厮を呼で問ていはく、此處より梁山泊へは幾の路有や。小厮が云く、此處よりは最近しといへども、都て水路にして曾て陸路なし、若梁山泊に往んには、必ず船を用て濟すべし。林冲がいはく、然らば汝我爲に舟を覓得させんや。小厮がいはく、かゝる大雪しかも日も晩んとす、何方に往てか船を求べき。林冲がいはく、汝辛苦を避ず、舟を求來らば、我重く汝を謝すべし、小厮がいはく、舟を求むる所あらば、我何ぞ辛苦を厭ひ候はん、實に舟を求る處なきなり。林冲これを聞て心の内甚だ憂ひ、又も幾ばく碗の酒を傾け、切に歎息して想ひけるは、我向に東京に於て敎頭たりし時は、毎日街に出て遊興し、酒を酌け

打笑て云けるは、其林冲と云者は我此人數の內にあり、足下何ぞこれを識認給はずや。關守も亦同じく哄戲て云けるは、大官人の供人の內には、二三人の林冲も有べけれども、我肯て是を免し申なり。柴進また笑つて云く、足下いよ〳〵免し給はゞ、某歸に多く鷹の雉犬の兎を送るべし、いざまづ別を乞申さん、とて、遂に馬に乘て關外に打出けり。已にして十二三里許行ける處に、彼最前先立て遣したる家人、已に路傍に出て相迎へ、老早此處に至て相待候、と告ければ、柴進乃ち林冲が獵裝束を脫しめ、旅粧束に更めさせ、一刻も早く、路を急ぎて落行給へ、と催促しければ、林冲大に悅び、乃ち彼家人が荷物行李を取て、自ら是を擔ひ、恭く柴進に別を告て云けるは、某想はず大官人の慈を蒙て、一命を脫れ申候、若行末恙なく、今生に存命候はゞ、異日聊此高恩を報じ申さん、とて、是より梁山泊へ赴きけり。偖柴進は諸の家人を從へ、直に獵場へ馳行き、日すでに晚に及んで、又關に至り、乃ち若干の雉兎の獵を關守に贈り、遂に事なく作就して、再び關守に辭し別て、家人と俱に本宅にぞ歸りける。林冲は此日柴進に別れてより、直に梁山泊を望んで、十餘日を經て急ぎける。暮冬の天氣彤雲密く布き、朔風烈しく起り、又紛々揚々として大雪降來り、四方の山谷都て銀を敷る如くなり。林冲は只獨雪を踏て、只顧路を急ぎける處に、寒氣益猛く、日色漸々暮て、しかも其邊に村

す、教頭今梁山泊に入んには、必ず此新關を通る、孰の策を以てか此を通し參らせん、と良久しく默然と沈吟して云けるは、幸ひに一つの計を設たり、容易教頭を通らしめん。林冲が云く、若大官人の救祕計を以て恙なく新關を通り得ば、一生忘れ難き洪恩ならん。柴進まづ林冲が行李を一人の家僕に挑せ、（行李二字専ら義を誤來れども、元使の字なること字典の註に出づ、）先達て關外に遣はし、乃ち林冲が、後より關を過りて至らんを待しむ。家僕遂に命を承て林冲が行李を荷ひ、關外に出て待にけり。柴進又許多の人馬を催し、弓箭旗鎗等を持せ、其外に猶鷹を羇させ、犬を牽せ、諸の家人共、都て獵裝束に出立ち、乃ち林冲にも同じく出立せ、大勢の中に夾み、盡く馬上にて關外に打出る。偖今般林冲を捜捕へんとて、新關を守る大將は、昔日未官に附ざりし時、曾て柴進が館に赴て、厚く恩を受し人なるが、此日柴進が關の邊に來るをみて、乃ち關の前に出て柴進を迎へ、大官人は今日も獵に出で樂を催し給ふや、羨しくこそ侍るなれ。柴進急に馬より下り云けるは、某閑暇にまかせかく保養をいたす、何ぞ究て樂しきことあらんや。偖足下は又何ゆゑ、此處に新關をすゑて守り給ふや。關守がいはく、此度滄州にて人を殺し、馬草を焚たる重科人林冲と云者、已に形を藏し逃失しゆゑ、大尹俄に此處に新關を設て、林冲を捜し捕へん爲、某をして此關を守らしむ、凡此處を往來する者、士農工商を論ぜず一々緊く改を加へ候。柴進是を聞て

林中の人形を郡邑に觸て厳密に尋求む

に多く追捕の人を分ち遣しける。林冲は柴進が東館に在て此風聞に驚き怕れ、柴進に對て云けるは、大官人某が危難を救ひ、當館に留置給ふこと、再生の恩終身まで報じがたし、偖頃日風聞を承るに、滄州の大尹某が畫像を觸流し、遠近の國々を嚴緊尋ね需となれば、若追捕當館に訊入ことあらば、禍害恩人に及んか、願くは某に聊の路費を賜てんや、何方へも逃隱れ、若命だに保得ば、異日聊鴻恩を報じ奉らん。柴進が云く、敎頭もし其意あらば、某一封の翰札をそへ、一方へ薦遣はさん。林冲がいはく、大官人若果してかく救を垂給はゞ、某身命を立るに足ん、しらず何の地にか寄遣し給ふぞ。柴進云く、山東濟州の内に一つの水郷あり、地名を梁山泊と云ひ、四方凡八百餘里にして、其的中に宛子城蓼兒洼と云あり、今三人豪傑集り、寨を列ね陣を累ね、專ら衆を招き山を守る、第一の頭領は白衣秀士王倫、第二の頭領は摸著天杜遷、第三の頭領は雲裏金剛宋萬と云ふ、此三人手下八百許の人を集て民家を打ち、官府を劫せり、大罪を犯したる族、多くは此梁山泊に入て難を遁れ災を避く、三人の頭領も亦彼辜人が逃入を悅で山陣に留置く、此三頭領は素より某と交厚く、常に書簡を相寄る、今某一翰を敎頭に與へ、梁山泊に薦め遣はさんとす。林冲いはく、若かくあらば愚が幸大いなり。柴進が云く、今滄州の通口には、官司より關を居榜を揭て、敎頭を尋ね搜さんとて、往來の者を改ると沙汰

大官人出させ給ふぞ、と呼りければ、諸の漢子共左右に分れ、謹で跪く。官人問て云く、汝等は何者を絆め來れるや。諸の漢子等がいはく、昨夜米偸盗を捉へ候を召連て候。彼官人近く前んで能見れば、乃ち東京八十萬禁軍教頭林冲なりしかば大に愕然、親ら其縛の索を解て、忙はしく問ていはく、林教頭は何故彼等に縛られ給ひしぞや。林冲此官人をみるに、これ則柴大官人なり。林冲大に喜び、急に禮をなして云けるは、大官人林冲を救ひ給はり候へ。柴進（柴大官人と呼ばる）又問て云く、教頭は是眞の大丈夫なり、いかなることに因て匹夫等に恥辱を取給ふぞや。林冲が云く、此ゆゑは一言を以て盡しがたし。柴進先林冲を延て内に入り、座已に定りければ、林冲彼草料場を燒れたる事ども、一々詳に語りけり。柴進云く、教頭は如何なればかくのごとく、時の不祥には遇給ふぞや、然れ共今日猶天の佑を蒙りて、我館に至り給ふ上は、少しも心を惱し給ふことなかれ、此處は則某が東館にて候へば、暫く逗留有て宜く商議を遂給へ、とて、乃ち新しき衣服を出して、林冲が舊衣服を更めさせ、早速酒宴を儲け、種々管待申けり。これより林冲は柴進が東館に五七日も滯留をぞしたりける。斯說滄州にては管營已に官府に至て、林冲が差撥、陸虞候、富安等三人を殺し、草料場をも亦火を放て燒拂ひ、遂に共夜逐電のよし訴へければ、大尹これを聞て大に驚き、林冲が形を畫かしめ、諸州郡鄉村邑

二編 巻之十一

東武 高井蘭山翁譯編

○朱貴水亭に號箭を施す

林冲已に、米倉を護る土民等に縛られ、尚未酒の醉醒ざりしが、彼者ども林冲を牽て一つの大屋敷に歸りける。內より一人の漢子出て云く、大官人はまだ起給はざれば、縛者を守りて、大門の邊に俟べし。是に於て諸の漢子共林冲を引て、門樓の下に至りて相待けり。此時五更の鐘も響聞え、東方既に白みければ、林冲は漸々醉醒て、忽ち眼を開て四方をみるに、寔に大いなる屋敷なり。林冲聲を揚て呼て云けるは、何者の所爲にて斯我を絆めて此所に來りけるぞ。漢子共これを聞き、大に罵ていはく、汝尚敢て口を闢や。彼鬚を燒れたる老人益怒て云けるは、汝大賊火を打散して我此鬚を燒けるは如何ぞや、少停大官人起給はゞ、汝が罪を糺さるべし、且汝に此劈木を與ん、とて、諸の漢子共一度に手を下して、林冲を散々に擲けり。林冲は少しも恐れず、我自ら辯ずる處あり、何ぞ汝等を恐れんや。斯る所に一人の漢子走り出で、

より嗣譯し、二十三回の始までを二編十卷とす。今書房の需に因て、畫傳を嗣編すといへども、原來好書の僻有のみにて、疎學の老衰翁何をか識得ん。諸看官冀は杜撰を宥恕し給へ。

但し譯體を初編に倣はんとすれば、全部長大に及ぶが故に、少しく取捨する所あり。（初編首書多し、版本損ひ安しと聞き是をせず。）附國字は都て字音は韻鏡に協ふ所を用ひ、字訓は古假字を點ずといへ共、傭筆に謬られ、校合の見落し有て、行届ざる所も間あらんか。但し愚が附國字流布とは聊差ふこと有り。酒食をしゆしいとするは、食ふ食ひ、簑笠をさりふとするは、笠にリツの音なければなり。乏少をばふせうとするは、乏にボクの音なければなり。畜生をきうしやうとするは、畜（カフモノ）畜（ヤシナフ）畜（タクハフ）蓄と同じ此類皆字を好む僻有て然り。銀目は一兩和の十匁拾兩和の百目、里數は六町を以て一里とすれば、三十里といへば、百八十町なれば、和の五里なり。和漢曲尺不同あり共、莫約にて知べし。水滸傳の題號水の滸は、梁山泊の義なり。

は長府侯の譯官にて、著述數編世に行れ、都下皆知る所なり。然るに坊間今忠義水滸傳通じがたき所あり。第二佛筆の誤なるや、嚮の嚮の字を用ひ、ひゞきと假名する所多く、第三加國字の誤鄆城縣をこんじやうけんと點じ、又は字を渾城縣と書し、梁山泊の聚義廳を、上の句つゞきに聚とよみ切り、別に義廳と訓たる、岡島子の譯本に、かゝる醜あらんやうなし。憶ふに何の故か有て再版の時錯亂淆雜し、校合も甚屆かざりしにやあらん。愚數十年以前見たる本には、かゝることを覺ず。已に今流布の本十巻目の目錄に出たる所、十一巻目に交へ亂れあるを以ても、其外の麁謬を推知べし。畫傳初編に、此書に採ずと云宜なり。

舶來する處の原本といへども、多くの中ゆゑ、不慮の筆麁間見ゆ。譬ば百回本の二十回の十丁に、粮食を狼食と書たる如き、所々にあれ共、看官心を用ば速に考知べし。原本支那の俗字俗語を用ること多く、焉哉乎也の助字なく、的了などの字を添て語をなせり。經傳には是を用ずといへども、朱子中庸章句活々潑地の字あり。此四字魚の地に跳て、ぴち〳〵すると云俗語といへり。是等の字を用て經を註すること、多く見ず。初編已に十回迄譯せり、今十一回

緒言

書肆萬扱堂の主は年來の知己にして、愚が著書を上木せしも三四ならず。一日茅舍に訊來て曰く、頃日水滸畫傳の刻版を購得たり、曲亭翁の著す所、本文十回まで新譯して初編十卷とす、乞ふ我爲に嗣編せよ。愚いはく、彼翁は稗史家高名なること都下に聞れ共、時を得ずして半面の交なし、水滸畫傳は讀見て、其新譯の意旨は了解せり、知ず愚需に應じ嗣編すとも、前作者の故障なきや。答へて其事あらずと、爰に於て二編より譯嗣す。

新譯の巨細は、初編の捌に曲亭翁詳に說あれば、別に贅せず。蓋し目錄に出る所は、皆是七十回本百回本にも出て、蒙求にて標題のごときものなり。しかるに其標題と、本文の傳と進退齟齬する所あり、今十二卷に斷る所のごとし。是は本唐山の本の誤なり。岡島冠山子の譯本に是を改ず、原本の次序に從へり。今此畫傳は專ら兒女子の讀ものゆゑ、齟齬する所は改更て、目錄と本文と正當ならしむ。愚若年に冠山子の忠義水滸傳を讀て其勤たるを感ず。此人

冲縛られて、いかなるところへかゆく。そは次の巻の出るをまちてしらん。

いはせもあへず、彼庄家眼を睜り、こはこゝろも得ぬ、われ好意をもて、汝に衣裳を烘らすれば、還酒を喫んといふ、汝ゆかばとく立去れ、もし去ずは弔在べきぞ、と異口同音に罵れば、林冲忽地大に怒り、厮們はなはだ道理をしらず、いで思ひしらせん、といきまきて、彼老たる庄家を、のけざまに搶倒し、鎗桿をつきいれて、火爐の裏を攪まはせば、その火四下に飛散りて、彼庄家の髭鬚に燒著き、こは何とせん、と叫ぶにぞ、衆人一齊に跳り起り、林冲を打んとするを、林冲は鎗桿をもて、亂打に打ちらせば、みなく一拄も拄得ず、ゆくへもしらず迯出けり。林冲はさもこそ、と打笑ひつゝ、土坑上に兩箇の椰瓢あるを見て、一箇を把りて、瓮の酒をかたぶけく、殘りなく喫をはり、鎗を提て門を走り出しかど、一歩は高く一歩は低く、踉々蹌々として、脚を把住得ず、一里の路に過ずして、朔風に一掉され、山澗邊に撲地と倒れり。凡醉たる人、一たび倒るゝときは、終に起る事かなはず、只醉伏して雪の裏にあり。浩處に彼莊家ばらは、別に二十人あまりを驅催し、鎗を拖棒を拽き、草屋の下にゆきて見るに、たえて林冲を見ず、いまだ遠くはゆかじとて、蹤跡を尋著つゝ赶將來り、只見れば林冲は、雪の裏に醉倒れ、鎗を捨てその傍にありしかば、衆人一發と走りかゝり、一條の索をもていたく縛め、膊を爬み、脚を把りて、雪を踏わき挑もてゆく。時は五更のころにぞありける。畢竟林

て、ます〳〵路をいそぎしに、雪の降事はじめにまされり。かくて林冲は、東を投て走る事兩箇更次にして、身も冷え、手脚冰て、艱難いふべうもあらず。この時草料場を離るゝ事、やゝ迥なりけるが、只見れば疎林ふかき處に、數間の草屋ありて、四壁みな雪にとぢられたるに、壁の縫裏より火の光透出にければ、林冲やがて走りゆきて、門を推開きつゝ裏面を見るに、中間に一箇老たる庄家、火に向てあり。又四五箇の小庄家、その周圍に坐著び、地爐の裏に柴折くべて焔々地なり。林冲は笠子をとりて前み向ひ、小人は牢城なる、管營使の人なるが、雪に衣裳を濕されて、寒いとも堪がたし、あはれこの火を借して、しばし烘らせたびてんや、といへば、庄家ども點頭て、汝みづから烘らんに、何かくるしかるべき、とく〳〵と饒せしかば、林冲は地爐のほとりに坐よりて、濕たる衣裳を烘るに、火炭の邊に一箇瓮兒を煨著たるが、酒の香もれて鼻孔にとほりし程に、彼庄家等に對ていふやう、小人懷中に些の碎銀子あり、望らくはこの酒を回て、喫せたまへかし、といふ。老たる庄家これを聞て、頭をうち掉り、我們は每夜輪流して米囤を看るなるに、今既に四更の天氣にして、ます〳〵寒し、この酒は我們が喫にさへなほ足らず、しかるを汝に與べきいはれなし、といふ。林冲またいふやう、宜ふところことわりなれど、只二三碗をわけ與へて、小人にも些のさむさを盪させ給へかし、と

き、陸謙は纔にゆく事五歩に過ず。林冲一聲大に叱り、奸賊那里へかゆくぞ、と叫び、胸を扯て雪の上に撲地と翻在げ、脚をもてその胸を踏とゞめ、鎗を捨て腰なる刀を抜出し、陸虞候が瞼の上に閣著て罵りけるは、この潑賊、われ元より汝と甚の寃讐もなかりつるに、いかなればしば〳〵われを害せんとははかりたる、正に是人を殺すは恕すべし、情理は容し難し、といきまけば、陸謙はおそる〳〵、事みな小人が身に干るにあらず、高太尉の差遣によりて、已ことを得ざりしなり、教頭ねがはくは饒恕し給へ、といふ聲は、枯野に蟲の鳴よりも細し。林冲これを聽もあへず、われと汝とは竹馬の友なるを、今日われを害せんとしたる事、なでふ汝が身に干ずとせん、まづわが刀を喫へよ、と罵り、陸謙が衣服を扯開き、尖刀を心窩にさし向て、只一剜に剜しかば、七竅より血の流れ出るを、手をさし入れてその心肝を摑み出し、只見れば差撥なほ死なず、よろめき〳〵走らんとすれば、林冲はやく赶到りて、只一刀に首を刎ね、陸謙富安が首をもかきおとし、三箇の頭髮を結びあはせて、しづかに尖刀を插て、廟の裏なる笠を把てうちかぶり、葫蘆の酒を喫盡して、ふたゝび鎗を拿著つゝ、東を投て走りしが、三五里に到らずして、近村の人、すべて水桶鈎子を拿著へ、火を救はんとて來れるにゆきあうたり。林冲近く前みよりて、汝等ははやくゆきて救應給へ、われは官に報さん、といひかけ

林冲雪中に寃を報ゆ

礙かあるべき、畢竟張教頭がうけ引ざればこそ、衙内の病いよ〻重りて、太尉もいかばかりか、心を苦しめ給ふらめ、這件の幹事につきては、わがこの兩人いくたびか心を竭しつるに、もし兩位の手を借らずは、速に完備がたかりけん、といふ。その時又一箇がいふやう、小人まづ墻のほとりにゆきて、枯柴を手折來て、是を火把として、もろともに走り去るべし、といへば、又一箇がいふやう、早晩七八分も燒おちたれば、彼いかで迯るべき、縱燒死なずとも、大軍の草料場を燒たれば、又死罪を脱れがたし、などいふに、又一箇がいふやう、とてもの事に一塊の骨頭を拾とり、將かへりて太尉と衙内に見せまゐらせなば、さこそ喜び給ふべけれ、とぞいへりける。林冲はこの三箇が説話を聞くに、一箇は差撥、一箇は陸虞候陸謙、一箇は富安にてありしかば、欣然として密によろこび、天林冲を憐見て、草廳を倒し給はずは、彼等がために燒ころさるべかりしを、はからずもこの處にて、寃をむくふ事よ、とふかく感激し、いとかろ〴〵と石を把除け、花鎗を挺つ〻廟の門をさつと開き、潑賊ども林冲を認れりや、と呼れば、三人急に走らんとするに、驚き呆て動得ず。林冲閃りと跳り出で、まづ一鎗に差撥を、肐察的と搠倒せば、陸虞候は手脚を縮め、命ばかりは饒し給へかし、とわぶ。その隙に彼富安は起つ顚つ逃る事、いまだ十來步に到らず。林冲赶つきて又一鎗に搠倒し、身を回して走り來ると

扇の風にあふらざるやうにこしらへおき、やがて裏面に入りて見るに、殿内には塑著の一尊、金甲の山神を安置し、左右には判官と小鬼とを立りしが、只紙錢のみ堆おきて、鄰舍もなく、廟主もなかりける程に、拿來りし花鎗と葫蘆とを紙錢の上に放在き、彼絮被を打ひらきて座をトめ、笠子をとりて袖子の雪をうち拂ひ、懷中の牛肉を下酒として、葫蘆の冷酒を喫んとするに、忽地外面に、必々剝々地と爆響したりければ、林冲怪みて身を跳り起し、壁の縫裏より外面を見れば、草料場の裏に火起りて、刮々雜々と燒著しかば、大に驚きて鎗を拿著へ、火を救はんとて走り出んとする折しも、前面より說話しつゝ來る人あれば、林冲なほ廟の裏面に伏在てこれを窺ふに、三箇ばかりの脚步響して、廟のまへに走り來つ、手をもて門扇を推しけれど、前に林冲が大石を靠住ておきつるなれば、推ども〳〵開かず、彼三人はぜひなく廟の簷下に停立て、燃上る火を見つゝ、一箇の漢子がほこりかにて、いかにこの計は施し得たるにあらずや、といへば、一箇が應て、管營差撥兩位の心を用られたる事をば、京師へ立かへるの日、高太尉に稟し聞え、二位を保て、大官に做しまるせん、這番こそ彼張教頭も、推に言語なかるべけれ、といふ。又一箇がいふやう、我們かく、しおほせて候へば、高衙內の病も、日あらずして痊可給ふべし、彼人燒死したりと聞ならば、衙內を女壻としまゐらせん事、何の

別に一葫蘆の酒と牛肉とを沽ひ、碎銀子をとり出て主人に與へ、葫蘆をば舊のごとく花鎗の竿に結びつけ、相擾、といひかけて、搶と外面へ走り去るに、雪はます〱をやみなく、風又大に吹起りて、面をむくべうもあらざりける。

○陸虞候草料場を火燒く

再說林冲は、瑞雪を踏北風を迎へて、飛也似に走りかへり、草料場の門口に到り、鎖を開きて裏面に入りしが、忽地こはいかに、と叫びけり。原是天理昭然として、善人義士を佑護給ひ、この大雪によりて林冲が性命を救ひ給ひけん、兩間の草廳、雪に壓れて倒れてあり。林冲はさていかにせまし、と思ひたゆたひしが、鎗と葫蘆とを雪の中に捨おきて、まづ火盆の火こそ心もとなけれ、とて、とかくして壁を撥開き、半身を探り入りてかいさぐるに、火は雪にうち滅されしかば、やゝ心おちゐて、ふたゝび一條の絮被を探りとりて鑽出で、只見れば天色既にくれて、いかにともせんすべなく、前に半里三町なりあまりあなたに、古廟ありけるを思ひ出し、今宵は那里に一宿し、明なば理會もありなん、と尋思しつ、又門を拽よせて舊のごとくに鎖し、那廟のほとりに走りつき、傍邊に一塊の石頭あるを見て撥將り、かろらかに過來りて門に靠了け、

もいやまさりにければ、いでや些の酒を沽もて來て、今宵の寒を淩んには、とて、包裹より些の銀子をとり出して、彼葫蘆を拿て鎗竿に結びつけ、火にはよく蓋をして、笠子を戴り、鑰匙をば腰に著て、外面へ走り出で、大門の扇を引立て、鎖を固くし、彼老軍が敎し路をこゝろざし、積雪を踏わき、朔風に背著、歩に信せてゆく／＼、いまだ二三町ならざるに、只見れば路の傍に一箇の古廟ありけり。林冲これを見て禮拜し、神明わが信心を憐て、久後を庇佑給へ、かさねて詣來て紙錢唐山の人、神佛を祭るに、方寸の紙に穴をあけ、これを錢になぞらへて燒くなり。これを紙錢といふ。或は金銀の箔を打ちたるもあり。これは金錢銀錢のこゝろなり。又一ひらの紙に、いくつともなく衣服のかたを押したるものありて、これをも燒くなり。これを俗に燒紙といふ。みな天地神明に衣服金銀を奉るの意なり。を燒べし、と念じつゝ、またゆく事少にして、果して一簇の人家あるところに出たり。林冲脚を住て見るとき、籬笆の中に草帚兒を挑出せし家ありしかば、やがて店の裏に到るに、主人うち見て、客人は那里より來給ひつる、と問ば、林冲彼葫蘆を指示し、いかにこれをば認らずや、といふ。主人點頭て、この葫蘆は草料場の老軍のなり、いかで認らざるべき、といふ。林冲又いふやう、今日よりこの葫蘆はわが物なり、このゝちをり／＼來りて酒を沽べきぞ、といふに、主人微笑て、しからば草料場の大哥にこそ在なれ、まづしばらく憩ひ給へ、天氣もいと寒けきに、三盃を酌て、權く接風つかうまつらん、といひつゝ、やがて一盤の熟牛肉と、一壺の酒をもて出て、林冲に喫せけり。林冲はこれを喫て、

林冲を
差撥
草料場

あり。這里に入りて見れば、一箇の老軍火に向て居たりける。その時差撥は彼老軍に對ひ、管營今この林冲を差して、汝に替らするなれば、汝は天王堂へ到りて看管かし、とく〳〵、といそがしたつれば、老軍はまづ鑰匙を拿出して、林冲に引著しつゝいふやう、倉厫の內には官司の封記あり、この幾堆の草には、一堆々々に數目あり、など、備細に說示し、又林冲を引て草廳に到り、おのれが行李を收拾て、又いふやう、火盆、鍋子、碗碟のたぐひは、すべて御身に借與候べし、といふ。林冲聞て、われもかゝる物をば、みな天王堂の裏にのこしおきつれば、御身が隨意拿去給へ、といふ。その時老軍は、壁に掛たる一箇の大葫蘆を指著し、もし酒を喫んとならば、こゝを出て、東の大路を二三里ゆけば市井あり、この葫蘆をもてゆきて買給へ、これも還土產にいたすなり、と說了り、やがて差撥とともに牢城へぞかへりける。されば林冲は、ひとり床上にありて、包裹より被臥などとり出し、又地爐の邊に幾塊の炭あるを見て、些の火焰を尋ね、これを火盆の中に入れて吹起つゝ、面を仰ぎてこの草屋を見るに、四下みな崩れて骨のみを殘し、風のまに〳〵吹動されて、今も倒るべき光景なれば、心のうちにおもふやう、われこの屋にて、いかで一冬をしのぎ得ん、雪も霽たらんには、城中にゆきて泥水匠を呼び來り、この壁どもを修理すべし、とひとりごち、かすけき火に打向ひて、いとゞ寒

貫の盤纏を圍よかし、ゆくときには差撥を郷導とすべきにこそ、といふ。林冲は、命うけ給はりぬ、と應て、牢城を退き、まづ李小二が家にゆきて、如此々々の事を物がたり、この事いかに思ひ候ぞ、と問ふ。李小二聞て、この差使は又天王堂よりも好し、那里にて草料を收るとき、些の常例錢鈔あり、常に錢を使ひて賄賂せざれば、この差使を勾がたく候、と說示すに、林冲眉を顰め、彼等却て我を害せずして、よき差使を授けしは、是いかなるこゝろならん、と疑惑へば、李小二又いふやう、恩人只疑を休て赴き給へ、今よりわが家遠く離れて、毎日に見えがたきを憂るのみ、されどいく程もなく工夫を得ば、ゆきて訪ひまゐらすべし、といひつゝ、やがて酒肉を安排し、林冲を待して、暫時の別ををしみしかば、林冲もこゝろよく喫了て、ふたゝび牢城に到りける。かくて林冲はまづ天王堂に立かへりて、包裹を脊負ひ、尖刀を帶し、花鎗を拿著て、差撥とともに草料場に赴きしに、正に是嚴冬の天氣なれば、彤雲密に布きて、紛紛揚々と一天の大雪を捲下し、須臾にして野は路を分がたく、頃刻にして山は根を見ず、銀の世界玉の乾坤、見る〱萬物みな皓し。さる程に林冲は、差撥とともに路すがら酒を喫て寒を防ぎ、彼草料場の外面に來て見れば、周遭は黃土牆にして、兩扇の大門あり。推開きて裏面に入るに、七八間の草房を倉廒と做著て、四下はすべて馬草を堆おき、中間に兩座の草廳

十歳餘りなるは陸虞候なり、この潑賊又こゝに來りてわれを害せんとす、われ這厮が骨肉を泥になさでおくべきかは、と齒を切りて罵れば、小二これを勸ていふやう、恩人只彼を隄防給ふ事こそ便了め、古の人の言にも、飯を喫へば噎ん事を防ぎ、路を走れば跌ん事を防ぐ、といひ傳へ候ぞや、よく〳〵見定め聞さだめ給へかし、といふを聞かけて、林冲は搶と走り去り、怒氣胸にせまりて止ざれば、まづ街上にて、一把の解腕尖刀と一條の花鎗を買ひ、前街後巷一地里を尋めぐれども、たえて遇ず。李小二夫婦はこの光景を見て、手に汗を捏著ばかりなり。林冲は次の日朝まだきより、滄州の城内城外小街夾巷團々と尋つゝ、その夕かた李小二が家に立よりて、けふも彼等を見かけざりし、といへば、小二がいふやう、恩人願くは事をゆるやかにして、みづから誤たまふな、といふ。林冲點頭て、この日も空しく天王堂にかへり、すべて三五日尋ありけども、たえて消耗もなかりし程に、やうやく心慢しが、第六日めに到りて、管營差撥は、林冲を點視の廳に呼びていふやう、汝こゝに來りてより、許多の時日を過したれば、柴大官人の面皮に看て、擡擧べう思ふなり、こゝより東門の外十五里に當りて、大軍草料場あり、毎月但草料を納め、些の常例錢を取覓るのみを勾當とす、原是一箇の老軍が看管てあれど、汝を擡擧て、彼に替らせ、老軍をば天王堂へ差すべし、汝はやく彼處に到りて、幾

顧頭を交耳を接へ、物がたる聲低して楚と聞わきがたし、只彼軍官の模樣の人、懷のうちより一つの帕子をとり出し、管營と差撥に遞與せしが、差撥いとうれしげなる氣色にて、事すべてわがうへにあり、好も歹も彼が性命を結果まうさん、といひしを聞とめ侍りし、と語る折しも、閣兒の裏にて、湯をもて來よ、と呼るにぞ、李小二は裏面に入りて、酒を盪る湯をとりかへつゝ見るに、管營が手に一封の書簡をもちたるが、急に袖の裏へ隱しけり。陸謙、はじめ董超薛覇を酒店に招きて密談し、今又李小二が店の事に到る。しかれどもいさゝかも前文を借らず。これこの作者の筆力すぐれたるところ、奇にして妙なり。かくて四箇の人は、ふたゝび四五盃の酒を喫て、酒錢を算還し、管營差撥まづ立かへり、引つゞきて彼二人も立出るとき、頭を低し、身を轉背にして走り去りぬ。浩處に林冲入り來りて、小二哥打つゞきて好買賣ありや、といふ。李小二見かへりて忙しく出むかへ、恩人まづ裏面に入りて坐し給へ、些の說話あり、といふにぞ、林冲怪しみてその故を問ふ。李小二聲を低して、ありし事どもかたり出で、彼官人が差撥に遞したる帕子は金子を裹るとおぼし、しかも差撥が高太尉の三字を說出し事、彼是不審こそ候へ、と一五一什を告しかば、林冲聞て、彼二人が生得は、甚麼なる模樣なりし、と問ば、李小二答て、彼官人は身材短くて五尺に足らず、面皮白淨にして髭鬚はなし、約三十餘歲とおぼし、又跟より來りし人も、長大からずして紫棠面色なり、といへば、林冲大に驚きて、その三

るに、李小二は梭を擲がごとく伏侍して、更にいとまなかりければ、跟より來れる人、みづから湯桶を討て酒を盪などするに、彼官人李小二を呼びていふやう、われに伴あれば酒を盪めさすべし、こなたより呼ずは汝且く來ることなかれ、といふ。李小二はともかくも、と應して門首に來り、老婆を呼びて私語けるは、彼二箇の人こそ不尷尬なれ、大姐さはおぼさずや、といふに、老婆聞て、御身何をもて不尷尬なりとは宣ふぞ、といふ。李小二又いふやう、彼二人が言語を聞ば、東京の人なり、はじめ又管營差撥を認らず、向後われ酒を將ゆきて退く時、差撥が口より高太尉の一句を訥出したり、これをもておもふに、もし林教頭の身のうへに、些の干礙あるべうもはかられず、われは門前にありて理會すべし、御身は閣兒の背後にゆきて、甚麽なる事をか說るらん、よく聞てよ、といふ。老婆はしばし尋思して、しからば御身天王堂にゆきて、林教頭をまねきよせ、直にその人を見せ給はゞ、疑念とみにはれなん、といへば、小二頭を掉て、いな〳〵、林教頭は性急の人なるに、倘こゝに來まして見給はんに、彼等は前日物がたり給ひつる、陸虞候の徒ならば、手を空くして罷給はんや、忽地に人を殺し火を放ち、わが夫婦をも連累せられなん、只御身ゆきて聽一聽給へ、なほ理會もあらん、といふに、老婆も、うべなり、とうけ引て、其處に到り、聞く事一時ばかりにして出來りていふやう、彼四人は只

れば、林冲も其信々しきを見て、折々些の銀子を與へて本錢にさせ、また李小二が妻は、林冲が衣服を縫補ひ、等閑ならず待しぬ。閒話休題、一日李小二門前にありて、菜蔬下飯を完排しつゝ、只見れば一箇の人、閃と店の裏に跳り入りて、凳兀に尻をかけたりしが、又一人走り來て、そのかたはらに坐しぬ。先に來りし人は、軍官にして、後に來りし人は、走卒の模樣なり。李小二これを見て、やがて裏面に走り入り、酒をまゐらすべうもや、と問にければ、彼人まづ一兩の銀子をとり出し、これを李小二に與へていふやう、好酒三四瓶と、菓品酒饌など、淨らにして將來れ、今こゝへ請る客あれば、かならず多き少きを問ず、只管にもて出よ、といふ。李小二聞て、そはいづれの客をか招き給ふ、と問ふ。彼人答て、われ今管營差撥の二人を請て、ものかたらふべくおもふに、汝わが爲に彼人を呼び來り候へ、もし何人ぞと問ば、只一箇の官人、些商議すべき事ありとて、等て候と答よ、といへば、李小二は心を得て、牢城の裏に到りて、彼二人を請來れり。しかれども管營差撥は其人を認らず、まづよきに講了禮して、さて名字を問ば、彼官人のいふやう、手書こゝにあり、少刻せばしらせ申さん、まづ酒をもて來よ、と呼びし程に、李小二連忙しく酒肉をもて出て、處せまきまでおきならべたり。その時彼官人は、副勸盃（常の盃の外に、わきて強ひるとき出す大盃なり、これを副ぶたと譯するは非ならん。）を討め、互に讓あひて、四人もろともに數盃を傾

順當しかば、主人ふかくよろこび、只一箇の女兒に小人を招了て女壻といたせしが、丈人丈母は前年身まかり候ひき、すなはち小人夫妻の酒店は、この營前にあり、今討錢にとて立出しに、はからずも恩人に見えまゐらするうれしさよ、恩人は又何ゆゑに這里に來り給ひし、といふ。林冲聞てみづから臉上を指著し、われ高太尉に惡るゝによりて、刺されてこの州へ配され、今天王堂を管りて彼首にあり、首をいへばしかぐ\なり、尾をかたれば箇樣々々、とすべて備細に說をはれば、李小二且驚き、且哀みて、やがて家に誘引かへり、上座に請じつゝ、妻を呼て對面させ、兩口兒拜伏していへりけるは、わが夫妻はたえて親眷もなかりつるに、今日思ひもかけず、恩人こゝに到り給ふなれば、おのづから心づよくこそ、といひて、塵さへすゑず管待ば、林冲只管辭退しつ、われは是罪ある囚なるに、かく睦み相語はど、御身夫妻を玷辱ざるものもなし、倘衣服の汚れ破れたるもあらば、わが家に拿來給へ、漿洗縫補て進らせ候はん、とて、いとねんごろに聞えしかば、林冲もふかくよろこび、來しかたのものがたりするに、冬の日はやく晚ゆくにぞ、林冲は別を告げ、天王堂へかへりける。その次の日、李小二來りて林冲を家に伴ひかへり、配處の憂を慰しが、是より毎日に湯を送り水を送て訪ひ慰

喜ぶ事限なし。かくて冬も半過るころ、一日林冲は、巳牌時分、たま〳〵營前を閒走し、將に行んとする折しも、忽地背後に人ありて、林敎頭、などて這里には在すぞや、と呼かけたり。

○林敎頭風雪山神廟

當時林冲は、頭を回してこれを見るに、豫て認れる酒生兒、李小二といふものなり。彼當初東京にありし時、多く林冲が看覷を得たり。しかのみならず、此李小二、主人の家財を盜み出し、みな淫樂の爲に用盡けるが、事發覺て官司に送り、既に罪を問されんとしたりしを、林冲さまざま陪話て彼を救ひ、些の錢物を主人に還し得させけり。これによりて李小二は、官司に送らるゝ事を免るゝといへども、京都の住ひいたしがたきをもて、林冲又彼に盤纒を齎して發せたるが、想ずも今日この處にて撞見ぬ。さて林冲は李小二に對ひ、汝いかにして這里には在るぞ、と問ふ。李小二拜伏していふやう、それがし恩人の救濟を得てしより、東京をたち出て、ゆくへもしらず走りめぐり、この滄州に到りしに、こゝに一箇の酒店に、姓は王氏なる人ありて、小人を住め、過賣の助となせし程に、小人も又勤謹によく好菜蔬を安排し、よく汁水を調和いたせしによりて、來りて喫給ふ人、すべて喝采ずといふことなし、こゝをもて買賣の

く寄下まゐらせなん、この事うけ引給はれかし、といふに、差撥も又いふやう、この人實に今病あり、管營しばし饒し給へ、といふ。管營聞て、この人果して症候あらば、權に且く寄下おき、病痊るをまちて、打んも遲からじ、と應しかば、差撥又いふやう、見に今天王堂の看守的、旣に年限滿たれば、この林冲を差して、それに換らせ候ひなん、帖文を給はり候へ、と聞えおき、林冲を領て單身房の裏に到り、行李など收拾させつゝ物がたるやう、敎頭われ十分に汝を周全て、天王堂を看する事ぞかし、この堂は營中第一の好處にして、省氣力的勾當なり、只早晩香を燒地を掃のみ、汝見よ、別の囚徒は、早より晩に到まで、手足にいとまなけれども、なほ饒さず、還人情なきものは、土牢に入れおきて、活みころしみの苦を受さするにこそ、といへば、林冲も厚謝して、ふたゝび二三兩の銀子をおくり與へ、なほ此うへの恩惠には、この頂上枷を開了て給はらば、いよ〳〵感悅いたすべし、といふ。差撥點頭て、まづ銀子を接了め、連忙しく走りゆきて、管營にその事を告げ、やがて枷を開去し程に、林冲はこれより天王堂の內にありて、每日香を燒掃除するを勾當とし、おぼえず光陰はやく過て、四五十日を送りしが、管營差撥は賄賂を得てしより、彼が自在にまかせて、亦敢て拘管ず、柴進も人を差して、冬の衣服を送りけり。こゝをもて、すべての囚徒も、林冲に救濟て、腹に食の滿ざる日もなく、みな

照顧を仰奉るなり、と托み聞え、柴進が書翰をとり出して、これ見て給はり候へ、といふ。差撥は兩封の書簡を手にとりて、柴大官人、今かく書札を送り給ふこと、是一錠の金子を得たるにおなじければ、何の煩惱かあるべき、この一封をば、われ管營に下すべし、管營來りて汝を點し、一百の殺威棒を打んとするとき、只病ありていまだ痊ずといふべし、われ又汝が與に支吾て、よきにはからひ候はん、といふに、林冲ふかくこれを謝せば、差撥は彼銀子と書札とを拿了て、單身房を退出しかば、林冲只管嘆息し、錢あれば木佛も面をかくすといふ常言も、かゝる時にこそありけれ、とひとりごちて居たりけり、さて差撥は銀子と書札とを管營に遞與し、備に林冲が事を物がたり、この漢子既に柴大官人よりも書を送りて、托み聞え給ふにこそ、元より高太尉の僞に陷害られて、こゝに配し來すといへども、させる罪犯あるにも候はず、など、首尾を舒しかば、管營聞て、かゝれば彼を看覷得させずはあるべからず、とく林冲を呼び候へ、といふに、差撥はやがて單身房の裏に到りて、林冲を將て來れり。時に管營林冲に對ひ、こゝに來れる犯人林冲よくうけ給はれ、太祖武德皇帝定おき給ふところの舊制あり、新に入り來る配軍をば、まづ打ことその數一百なり、これを殺威棒といふ、誰かある彼を駄起し來よ、と叫べは、林冲が告すやう、小人路すがら風寒に感冒され、いまだ痊可いたさゞれば、且

さん、などいふ折しも、只見れば差撥入來りて、この新來の配軍林冲とは汝か、と問に、林冲答て、小人に候、といふ。差撥は彼が錢を出さゞるを見て面皮を變じ、汝この賊配軍、われを見てなどて拜伏いたさゞる、這厮東京にて事をしいだし、こゝに流配てもなほ大刺々的ならんとするか、つら〳〵這斯が臉を見るに、すべて餓鬼の相貌あれば、年を經命終るまで、發跡ことたえてなし、打ども死なず、拷ても殺ざる、いと頑囚ぞや、汝賊骨頭あればとて、好も歹もすべてこれ、わが手の裏にあるものを、骨を粉身を碎きても、その功驗を見すべし、といきまきあらく罵れば、林冲は只顧罵られて一佛出世までも頭を擡ず、口を鉗て居たりしかば、衆の罪犯人は、この光景に害怕れ、みな散々に出行ける。林冲は傍に人なきを見て、五兩の銀子をとり出し、差撥哥々輕小には候へど、收め給へかし、といひもあへず、その懷にさし入れば、差撥ひそかに探り見て、これはわれと管營に送るにや、といふ。いな管營哥々には、別に五兩の銀子を送るべうおもふなれば、これ進らせてたび候へ、といひつゝ、又五兩の銀子を遞しけるにぞ、差撥忽地臉を軟呵々とうち笑て、林教頭われ久しく芳しき名を聞つるが、端的男子ぞかし、おもふに高太尉の爲に陷られて、暫時苦を受るといへども、久後かならず立身あるべし、殊に表人物、等閑の人にあらず候、といへば、林冲もうち笑て、よろづ差撥の

幸にこそ、といふ。其時董超薛覇もこのころの管待をよろこび聞え、遂に三箇の人は、滄州を投ていそぎしに、巳牌時候滄州の城中に到りつ。この地はさゝやかなる去處なりといへども、亦六街三市あり。さて三人は衙の裏に到りて公文をさし出しにければ、當廳林冲を引て州官に稟し聞えしかば、大尹は林冲を收了らせて、牢城（すべて罪ある人をおくその一郭なり。）に送りつかはし、やがて回文を兩箇の公人に遞與せし程に、董超薛霸は別を告て、東京へぞかへりける。話この下になし。かくて林冲は牢城の營内にゆきて見るに、門高く墻壯く、地濶く池深く、天王堂の畔には、兩行の垂柳、緑にして烟のごとく、點視廳の前には、一簇の喬松青して黛を潑し、往來的人はすべてこれ、釘を咬み鐵を嚼み、龍を降し虎を縛る、好漢のみぞ多かる。されば林冲は、牢城へ引わたされて、單身房の裏にありけるが、點視の爲に伺候したる一般的なる罪人どもこれを看覷み、林冲に耳語やう、この牢城の管營、差撥は、利を見て人を害ことおほし、もし些の人情なきときは、汝を土牢へつかはし、生死兩ながら得がたきの苦痛を受させ、又彼人情を得るときは、まづ一百の殺威棒を饒ことあり、そのとき病あるをもて、權く寄下まうさんと告給へ、しかれども人情なければ、この棒を脫れがたくこそ、と語れば、林冲聞て、おの〳〵今かく指敎し給はるうへは、われまづ五兩の銀子を管營に送り、又五兩の銀子を差撥に與へまう

頭直に赶入る事一歩、棒を提起て驀直に向ひ來るとき、林冲は彼が脚の亂るゝを見定め、棒をひねりて跳りかゝれば、洪教頭は思ふにたがひて、これを拄るに遑なく、脱れ避んとするところを、林冲快くその臁兒を丁とはらひ、忽地撞と打翻せば、人みな一齊に咄と笑ふ。柴進は林冲が輙く贏たるを見て大によろこび、しばく喝采て止ざるにぞ、洪教頭は滿面すべて火の如くし、那里ともなく逃去けり。さる程に、柴進は林冲が手を携て後堂に入り、更に酒を添利物を送り、これより毎日に管待して、既に五七日住しかば、兩箇の公人は只顧催促して、行ん事を討るにぞ、柴進兩封の手書を寫め、これを林冲に遞していふやう、滄州の大尹は柴進と疎からず、又牢城の管營、差撥（管營は牢城のあづかり、差撥はその下役にて、職役の名目なれど、此二人姓氏を闕くがゆゑに、只管營云々と稱するのみ。）も交厚く候へば、この手書をもてゆき給へ、かならず看覷まゐらすべし、と說示し、又二十五兩の銀子をとり出して林冲に與へ、別に五兩の銀子を兩箇の公人にとらせ、夜すがら酒を喫あかしつ、次の日天明に早飯をものして、莊客等に三箇の行李を挑了せなどするに、林冲は舊のごとく枷を帶け、柴進に辭別して立出るとき、柴進は莊門の外までおくり出で、しばし林冲を呼び住めていふやう、教頭日あらずして、われ冬の衣服を送り遣すべし、もし物に乏しき事もあらば、心くまなく申こし給へ、といへば、林冲ふかく感激し、いつの日にか此恩に答候はん、寔に一生の萬

つの間なし、なぞやかく心よわき事を聞え給ふ、いと本意なくこそ、といへは、林冲又いふやう、小人は身に枷を帶たれば、進退も自在ならず、こゝをもて輸たりとは申にて候、といまだいひもをはらざるに、柴進呵々と打笑ひ、われ事にまぎれて忘れたり、さもこそ、とて、莊客を呼び、十兩の銀子をとり來らせて、これを董超薛覇に與へ、小可大膽二位を煩せ候なり、權く林教頭の枷を開き給はんや、明日牢城にて些の事あらば、それがしよろしく申ひらくべし、といふ。兩箇の公人はこの銀子を見て、一議にもおよばず、やがて林冲が護身枷を開きし程に、柴進大によろこびて、再び莊客に、一錠の銀、重二十五兩あまりをとり來らせ、林冲と洪教頭に指示していふやう、兩箇の教頭いづれにもあれ、贏給ひし人に利物とすべし、とくとく較量給へ、といふ。これは林冲がなほ思ふまゝに、本事を使ひ出さじと陷み、故意とこの銀子を利物として、勵すべう思へばなり。さて洪教頭は、林冲が武藝、侮りがたくおぼえしに、今この夥の銀子を見て、彼には得させじと思ふから、ふかく心を盡して、ふたゝび旗鼓の手を使ひ、火を把天を燒の勢をなしつ、只顧打翻さんとかまへたり。林冲は柴進が心の裏をすべて曉り、今はかうと思ひしかば、件の棒を横たへ出で、草を撥蛇を尋るの勢をなせば、洪教頭一聲吼りて、來れ來れ、といひもあへず、猛く前みて打んとするを、林冲少し退けば、洪教

柴進が廳前に
林冲洪教頭と較量を

家有誓書鐵券

の處にて較量給へかし、といふ。林冲これを聞て、肚裏にて尋思するに、この洪教頭はかならず柴大官人の師父ならんを、われ立地に打翻さば、却て興を失ふべし、とせんかうせん、と躊躇ば、柴進快くこれを猜し、林教頭ふかく推辭給ひそ、この洪教頭はこゝに到りて多時からず、この間に又對手なかりき、小可只願二位の武藝を見まくほし、といふ。かくいはざれば柴進が面皮に看て、林冲が十分の本事を使ひ出さじと思へばなり。林冲はこの就裏を聞て、はづかに心を放し、只見れば洪教頭は、あらゝかに席を立て、來れ〳〵、と呼はりつゝ、堂後なる、空地の上に走り出れば、莊客一束の桿棒を拿來りて、そのほとりに放在り。洪教頭は裙子を高く拖折て、彼棒をえらみ把り、電光のごとく閃して、旗鼓といふ手を使ひ出し、來れ〳〵、と叫びけり。されど林冲はさわぎたる氣色もなく、大官人かならず笑給ふな、と會釋し、やゝ座を立て棒を執り、さらば教給へ、といふに、洪教頭ははや一口に呑もしつべき光景なるを、林冲は莞爾として、山東大擸といふ手を使ひ出せしが、正に巨蟒の洞より出て、樹を拔き藤を捲に異ならず。既に兩箇の教頭は、月を燭として手を交へ、纔に四合五合に及びしとき、林冲は圈子の外へ跳り出で、少く歇み給へ、と叫べば、柴進いと怪みて、林武師などて思ふ程に棒をば使ひ給はざる、と問ば、林冲答て、小人はや輸て候、といふ。柴進うち笑て、いまだ勝負をわか

に坐し、董超薛覇も亦おの〳〵座をトれば、洪教頭は肘を張顋を反て、ほこりかに打見やり、柴進に對ていふやう、大官人いかなれば禮儀を厚くして、かゝる配軍を管待給ふぞ、と問ば、柴進答へて、この人は尋常の流配人に比がたし、是はこれ八十萬禁軍教頭なるを、などかるかる〳〵しく慢り候べき、といふ。洪教頭冷笑て、大官人は、只鎗棒を習ふことを好み給ふが故に、すべての配軍常に來りて、倚草附木、みなわれは鎗棒の教頭なりとて、些の酒食米錢を誘くのみ、かならずしも眞の教頭とはおぼし給ふべからず、と嘲るにぞ、林冲はこれを聞といへども聲をもせず、頭を低して居たりける。時に柴進袖かきあはせ、凡人を相する事はいと難し、これらは他人の覷ひ給ふべきにあらず、といふ。洪教頭は今柴進が彼を信じ、おのれを否するの氣色あるを見て私に怒り、忽地身を跳起していふやう、われいまだ彼を信ぜず、彼もしわれと較量せば眞の教頭とせん、いかに一棒を使んや、と叫るに、林冲はとかくの問答にも及ず。洪教頭はこの光景を見て、原來彼もの、我を怕るゝにこそ、さらば打たふして酒興を催すべし、と尋思し、只顧催促して止ざりける。柴進は林冲が本事を見まく思ひ、又一つには林冲を彼に贏せて、その嘴を滅んと思ひ、まづ盃を把て五七盃を傾る折しも、月は庭前の木の間を漏て、影は廳堂の裏面を照し、さながら白晝に異ならず。かくて柴進は林冲に對ひ、教頭望らくはこ

初編　巻之十

○林冲が棒洪教頭を打つ

柴進はふたゝび酒食を安排して、林冲等を管待折しも、莊客來りて、教師來臨し給へり、と報知せしかば、それこなたへ請來しまゐらせ、はやく一張の卓を擡來よ、と命するに、莊客はこゝろを得て退出しが、やがて件の教師入來れり。その時林冲は、身を起してその人を見つゝ思ふやう、今莊客が彼を稱して教師といへるからは、かならず大官人の師父ならんと心づき、急に身を躬め、謹て參すれども、彼人は見かへりもせず、いと無禮なりしかど、林冲はなほ頭をも擡ず。柴進は教師に對ひ、林冲を指著していふやう、洪教頭、これなるは東京八十萬禁軍、鎗棒の教頭、林武師林冲にこそおはすなれ、對面あるべし、といひしかば、林冲ふたゝび彼洪教頭を拜しけり。されど洪教頭はいよ〳〵高ぶりて、禮をも答さゞれば、柴進こゝろに喜ず。林冲は遙に引下りて、わが座を洪教頭に讓れども、洪教頭はこれをさへ辭退せず、上首にむずとおしなほりて、傍若無人なりし程に、柴進はます〳〵よろこばず。林冲ははづかにその肩下

りせば、いかで尊顔を認るべき、と回答するにぞ、柴進は再三謙讓り、林冲を客座に請じ、董超薛覇を一帶に坐らせなどする間に、數箇の莊客、酒肉菓子餅を捉出で、又一盤一斗の白米の上に、十貫の錢を放在せ、すべて將出來りしかば、柴進はこれを見て、この村夫高下をしらず、教頭こゝに到給ひしを、いかでかく輕少の物を進らすべき、快く將ゆきて、別に羊をころし、酒を盪て管待まるらせよ、と命すれば、林冲がいふやう、大官人小人に賜らんとならば、これにてもなほ多し、なでふこの外を望候はんや、と推辭ければ、柴進微笑て、教頭かゝる事は宣ひそ、彼等みな尋常の流配人なりと思ひなして、かくははからひ候ひけん、やよ莊客ども、とく〳〵もてゆきて、引かへ來よかし、といそがし立れば、莊客は命に違ずして、別に酒食を安排し、既に盃盤賓主のまへに列りし程に、おの〳〵主人に謝して盃を執り、更に數盃に及びしとき、柴進は弓袋と箭壺を解去て、ます〳〵林冲以下兩箇の公人に盃をすゝめ、些の間話江湖上の勾當など說あへりしに、夏の日やうやく沒なんとするにぞ、柴進再び酒を添へ、山海の珍味數を竭して饗す折しも、一箇の莊客走來て、教師入來し給ひし、と報知す。畢竟この教師はいかなる人ぞ、そは次の卷を讀得てしらん。

とおぼしくて、龍眉鳳目、皓齒朱脣、髭鬚は細に垂れて衣服綺羅やかに裝ひ、手に一張の弓を帶ち、一壺の箭を插み、夥の從人を領て、すべて莊院のかたへ到れば、林冲は、これ柴大官人なるべく思ひつゝ、豪傑はやく豪傑をしる。これ眞の豪傑なり。いまだ問に及ず、しばし躊躇てありけるを、馬上の官人馬を駐め、彼處に枷を帶て立在るは、原いかなる人ぞや、と問ふ、林冲これを聞て、忙しく前み向ひ、身を躬て答るやう、小人は東京八十萬禁軍の敎頭林冲といふものなるが、高太尉に惡まるゝによりて、開封府に發下され、今番滄州へ刺配さるゝ路すがら、前面なる酒店にて、賢を招き士を納給ふ、柴大官人といふ好漢の、這里に住し給ふと聞て、便たづね來りしに、緣淺くして終に見ず、空しく立かへるにて候、といひもをはらざるに、彼官人、馬より閃と飛下りつゝ、小哥こそその柴進なれ、今豪傑の來臨あらんとも思ひかけず、みづから迎迓ざりつる無禮は、恕し給へかし、といへば、林冲も連忙しく禮を答すを、柴進やがてその手を携へ、相伴うて莊院に到れば、莊客等大に門を開きてこれを迎ふ。さて柴進は、直に林冲を廳前に誘引ひ、禮儀を厚くしていふやう、小哥敎頭の高名を聞事久しかりつるに、期せずして今日こゝに到給へば、平生の望足りていかばかりか喜ばしく候、といふ。林冲答て、微賤の林冲かく貴人の管待を蒙る事、宿生の幸なり、もし罪犯ありてこゝに流配さるゝにあらざ

りけり。是をわたれば平坦の大路にして、いく株の緑柳大河の兩岸に繁あひ、四方築垣の中に、彼大莊院甍をならべ、南に門あり東に牕あり、九級の高堂三徽の精舍、奇麗壯觀いふべうもあらず。林冲遙に打望て、こゝならんと思へばか、いよ〳〵脚もいそがれて、濶なる板橋のこなたまで來りしが、三五人の莊客橋の上に涼て居たりし程に、林冲まづ禮儀を舒べ、小人は京師の犯人林冲といふものなり、このよし大官人に報知させ給へかし、といふ。彼莊客等を之を聞て、汝はなはだ福なし、大官人家に在さば、かならず酒を喫せ錢を與へ給ふべけれど、けふ朝まだきに獵に出給ひし、といふ。林冲かさねて、そはいつのころ囘給はん、と問ば、今夜は大かた東庄にこそ歇給ふべけれ、しかればかへり來まさんころをば、われもしらず、と答するにちからなく、かゝれば實に福なし、いざ罷なん、とて、兩箇の公人とともに舊の路へ赴しが、ふかく望をうしなひて、心の中いよ〳〵樂しからず、行事纔に半里ばかりなる折しも、忽地前面なる林子の裏より、一簇の人馬出來れり。その打扮いかにとなれば、數十疋の駿馬は風に嘶ひ、兩三面の綉旗は日に弄り、粉青氈笠は、荷葉の倒に飜るがごとく、絳色の紅纓は、蓮花を亂插たるごとく、人みな箭を負ひ弓を拿り、或は細犬を牽き、蒼鷹を擎る、既に間ぢかく來りしとき、只見れば一位の大官人、白馬にうち跨り、年紀は三十四五

て、こはこゝろも得ぬ、酒を沽んといふを賣ずして、甚の好意かあらん、といへば、主人又いふやう、汝しらずやこの村の中に、一箇の大財主ありて、姓は柴、名は進といへり、よりてこのわたりの人は、柴大官人と稱し、江湖上にては小旋風と呼ぶ、彼は大周の天子、柴世宗の子孫なり、陳橋位を讓りてより、太祖武徳皇帝勅して、誓書鐵券を賜りしかば、人みな貴み重ずる事大かたならず、この人もつぱら往來の好漢を招き、家に養ふ事三五十人に及べり、又常々わが店に囑付て、流配の犯人來る事あらば、わが莊院に投來せよ、われかならず資助すべしと宣ふによりて、今汝に酒を賣らず、汝もし喫て、面皮を紅して到らば、彼見て盤纏ありとおもひ、資助はし給はじ、是わが好意にあらずや、と首尾を說をはれば、林冲は兩箇の公人に對ひ、小人東京にて軍を敎へたる時、人ありて柴大官人の名を稱するを聞り、誘彼家に尋ゆきて見給はんや、といふに、董超薛覇も主人が物がたりを聞しかば、かゝる大富貴の人の家に尋ゆかんには、われ／＼に虧了はさせじ、と深思しつ、ともかくも、と應して、既に包裹を背負ひなどする間に、林冲は主人に柴進が莊院を問ば、この前面にあたりて、二三里（六町を一里とす。こゝに何里と稱するは、みな同前なり。）には過ず、大なる石橋をわたらば、其處より彼莊院なりとおほせよ、とて、備細にさし示せば、林冲等は厚く主人に謝して門を出で、ゆく事少計にして、果して一座の大石橋あ

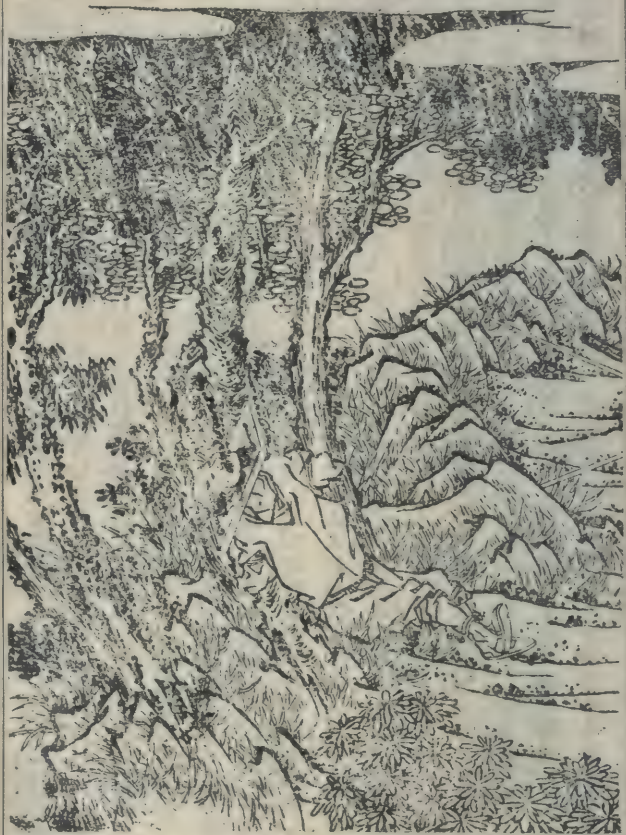
小人が頭は、これ父母の皮肉にて包著たれば、些の骨は候へども、いかでこの松の硬きに及び候はん、といひもをはらざるに、魯智深禪杖を輪起て、彼松の樹を丁と打ば、二寸あまり打こみて、幹は中よりさつくと折れ、忽地撞と倒るゝとき、魯智深一聲高く叫び、見よや兩箇の撮鳥ども、もし歹心を插まば、汝が兩の頭も又、この樹と一般ならん、といひをはり、遂に林冲に別を告げ、舊の路へかへり去しかば、董超薛覇は舌を吐き、項を縮て動得ず。林冲は二人を見かへり、誘ゆくべし、といへば、兩箇の公人やゝ身を起し、げに莽じき和尚かな、只一打にこの大木を打折る事、人間技にはあらじ、といふを、林冲うち笑て、かばかりの事は驚くに足らず、彼和尚寺にありし日、一株の大楊樹を、連根拖拔候ひし、と物がたるにぞ、二人はますく怕れつゝ、遂に這里を立出て、ゆくく晌午のころに到り、官道に一座の酒店ありしかば、おのく店の裏にやすらひしが、董超薛覇はこの半日、纔に自在を得たりける。さて店の裏には、三五人の酒を篩小厮ども、手もと忙しく脚を亂し、東に搬び西に搬びて、林冲等三人を顧ず。林冲あまりに待かねて、卓子をうち敲き、汝等何ゆゑに客を欺て、いつまでかかくておくぞ、縦われ犯人なりとも、這里の酒を白喫にはあらず、これいかなる道理ぞや、と呼はりし程に、主人やゝ出來り、原來この人、我的が好意をしらざるにこそ、といふ。林冲聞

實を告げ、この和尚に護送られし故に、林冲を殺し得ざりしと稟し、前に給はりし金子を還して、緊々的和尚を尋させ、この身の乾淨をしらせまゐらせんはいかに、といへば、董超も說き得て是〻と同じつゝ、二人暗に商量をぞ定ける。かくて魯智深は、林冲を護送りゆく事十七八里にして、はや滄州へは七十里あまりの路をへだて、纔に一日路なり。これより前はすべて人家建つゞきて僻淨處もなしと聞えしかば、魯智深はなほその實否を聞定て、少く松林の裏に歇み、林冲に對ひていふやう、敎頭こゝより滄州へは遠からず、前路すべて人家ありて、去處もなきよしを聞定おきつれば、われはこゝにて別れまうさん、といふ。林冲聞て、師兄立かへり給はゞ、泰山の處へ、よくも聞え給ひてよ。這番防護し給ひつる恩は、死後にこそ報いまゐらせん、といふ。その時魯智深は二十兩の銀子をとり出して、林冲に與へ、又二三兩の銀子を兩箇の公人に與へていふやう、この兩箇の撮鳥、われその頭を砍ならぶべかりしを、兄弟の面に看て饒し得させたれば、今より路すがら歹心を生ずる事なく、彼地に送りゆけよ、といへば、兩箇は口を齊して、いかでさる僻事をつかうまつらん、みな高太尉の差遣なれば、一旦さははかり候ひし、などいひつゝ、おそる〳〵銀子を收了て、既に別れ去らんとするを、魯智深こやこや、と呼び住め、汝兩箇の撮鳥が頭の硬き事、この松の樹に似たるか、と問ば、二人答て、

て、師兄はこれより那里へか赴き給ふ、と問ば、魯智深答て、人を殺さば血を見るべし、人を救ば徹を見るべし、われ直に教頭を送りて、滄州に到らん、といふ。兩箇の公人はこれを聞て、いとゞ苦々しく思へども、とかういふべきにあらねば、それがまに〳〵爭ず、只この和尚に打れん事を怕れ、智深が歇まんといへば便歇み、行んといへば便ゆく。もし聊もその意にたがへば、或は罵られ、或は打れし程に、董超も薛覇も、聲をだに高くえせず、更に和尚の發作ん事を怕れ、次の日一輛の車を討て、これに林冲を扶のほし、二人その車を推てゆきとゆく程に、只顧鬼胎に懐著き、心を小て使はるゝこと、奴僕に異なることなく、只その性命を保んことをおもふの外他事なし。魯智深は路すがら酒を沽ひ肉を買ひ、しば〳〵林冲を將息せて、兩箇の公人にも些をわかち喫せ、客店に到れば早く歇りて暗に行つ。董超薛覇はみづから打火て飯を做へ、まづ魯智深と林冲に供て、おのれは後に喫ひ、事みなわがまゝに行ふ事を得ず。一日兩箇の公人、暗に商量しけるは、我們彼和尚に監押せられたれば、ふたゝび手を下す事かなはず、このまゝにて東京へ立かへらば、高太尉かならず怒りおほすべし、この事いかにせまし、といふに、薛覇しばし尋思して、われ聞大相國寺の菜園廨宇の裏に、新來の僧人を魯智深とよぶ、彼萬夫無當の勇ありとぞ、今の和尚は彼魯智深なるべし、我們京師へ立かへらば、只その

の撮鳥が頭を打て、砕て微塵になさずんば、いかでこの熱腸を冷さん、といきまきあらく罵るにぞ、林冲はこれを勸めて、師兄われを救はんとならば、この二人を饒し給へかし、とさまざまにいひこしらゆれば、魯智深兩箇の公人に對ひ、汝この撮鳥、すべて劉にして肉醤とすべけれども、わが兄弟の面皮に看て饒ぞ、といひつゝ、戒刀を室に插め、又禪杖を拿著て、やよ撮鳥ども、快く教頭を扶掖き、われに從ひ來れ、といひかけ、前に立て林子を出るに、董超薛覇はふかく怕て、はかぐしく回話もせず、教頭小人を救給へく、と叫びながら、包裹と水火棒を提げ、林冲が包をも、かはりてこれを背負ひ、四人齊しく林子の裏を走り出で、ゆく事三四里にして村口に、小々なる酒店ありしかば、四箇の人はこの店にやすらひ、魯智深まづ酒保をよびて、五七斤の肉と酒を沽ひ、又麪を回せて打餅とし、これを林冲に喫せ、われも酒を飲などするに、董超薛覇は智深に對ひて、師父は原那里の寺にか住持し給ふ、いまだ法顔を認らず候、といへば、魯智深冷笑て、この撮鳥ども、わが住處を問て何にかする、立かへりて高俅に告ん爲歟、他人は彼を怕るゝとも、われは露ばかりも怕れず、われもし那廝に撞著ば、この三百の禪杖を喫すべきぞ、と罵れば、兩箇の公人はいよく怕れ、口を鉗てふたゝびいはず、些の酒食を喫をはり、おのく酒錢を還了して、この酒店を立離れしかば、林冲は魯智深に對

腰に一口の戒刀を跨み、禪杖を提起て、既に二人を打んとする時、林冲纔に眼を開ば、素認れる魯智深なり。こはいかにと喜びつゝ、忙しく住ていふやう、師兄彼等を打給ひそ、われ今說話あり、と叫べば、魯智深聞て擅に打ず、なほ眼を瞋し齒を切り、やうやく杖を住しかば、兩箇の公人は呆れに呆れて、活たるこゝちもなかりけり。林冲ふたゝび智深に對ひ、今日の事、彼二人が身に干るにもあらず、高大尉が陸謙をもて、二人に分付し、林冲を殺さんと計りしからは、彼等もなどか從ざらん、さるを兩箇の公人を殺し給はゞ、これ寃屈なり、といふに、魯智深みづから怒をしのび、禪杖を投すてて戒刀を扯出し、まづ林冲が索子を割斷て扶起し、教頭御身、那日刀を買給ふの時別れしより、すべての事をしるといへども、救ふべきよすがもなく、既に滄州に流配れ給ふに及びて、當日われも開封府の門前に到りて尋ねしかど、行ちがひけん終に逢ず、しかるに人のいふを聞ば、御身使臣房に在しとき、酒家保が兩箇の公人を呼びむかへ、店の裏には一箇の官人、酒食を安排して是を管待し、何事やらん耳語あひしと告るものあるによりて、是かならず路にて教頭を結果んとの事なるべくこゝろ付き、跟來りて兩箇の撮鳥が模樣を窺ふに、心もとなき事のみなれば、密におなじ客店に歇了り、做神做鬼するを闞窺れば、御身を賺して滾湯に脚を破らせ、今又こゝに誘ひ來て、情なくも殺さんとす、われ今こ

魯智深禅杖にて
林冲を救ふ

掲来れど、只顧托み聞えし程に、已ことを得ずかくの如し、汝かならずしも我們をうらむることなく、只死數とあきらめよ、明年の今日は、これ汝が周年なり、憐べし〳〵、その日限を定たれば、太尉もさこそ等給はめ、覺期せよ、といひもあへず、既に打んと前み向へば、林冲今はと思ひたえしが、なほ言語を和げていふやう、上下と小人は、往日些の讎もなく、近日又寃もなし、只救ひがたきを救ひ給はゞ、生々世々も忘れはせじ、喃々、といふをも聞ず、董超薛覇は左右に立めぐり、汝閒話を休よかし、われは汝を救べきすべをしらず、といきまきつゝ、水火棍を擎起て、林冲が腦袋上を、劈將より打んとす。痛しいかなこの豪傑、只手を束て死地に就く。正に是萬里の黄泉旅店なく、三魂今夜誰が家に落らんとおぼえてあはれなり。

○柴進が門に天下の客を招く

當時董超薛覇の二人は、手に棒を擧起て、林冲を打殺さんとす。浩處に松の樹の背後にあたりて、雷の鳴がごとく、一聲高く吼るとやがて、鐵の禪杖飛將來り、忽地兩箇が棍棒を一隔に丟落し、俄頃に一箇の胖和尚、脚踏ならして走り出で、われ林子の裏にありて、汝が計較をよくしりたるぞ、と叫れば、兩箇の公人大に驚き、彼和尚をよく見れば、身に皁布の直裰を穿て、

人しれず、好漢を結果ことおほかりしとぞ。今日彼兩箇の公人も、林冲を帶てこの林子の裏に走り入り、董超忽地いへりけるは、あまり夜深に立出たれば、なほ全く明はなれず、少刻この處にて歇べし、といふ。薛霸もこれに從て、三人行李を解おろし、すべて樹の根に搬び在る、林冲は一息呵とつきて、大木の株に靠著り、遂に仆れてふたゝび起ず。董超薛霸は是を見て、一歩行ば一歩等ち、倒れて又いつか起ん、われも殆困倦たり、さらば一睡いたさん、とて、水火棒を手ぢかく放在き、みなもろともに睡らんとしたりしが、二人忽地眼を開くにぞ、林冲いと怪みて、上下などて睡給はざる、と問ば、二人答て、我們も睡るべうおもへども、這里には關鎖もなし、只汝が走り去らん事を怕るゝ故に、心を放して睡がたし、といふ。林冲聞て、われも是一箇の好漢なり、從上下姑睡り給ふとも、脱去る事は候はじ、といふを、董超うち笑て、さはいへわれは信とせず、もし縛ておくぞならば、心やりともなるべし、といふ。林冲はこれをも推辭ず、かくまで貼み思ひ給はゞ、ともかくも計ひ給へ、と應すれば、薛霸は腰より一條の索子を解下し、林冲が手を連ね、脚を帶め、枷とともに緊々的縛て樹に繫ぎ住め、二人齊しく水火棒を引提つゝ、林冲に對ていふやう、これわが私に殺すにあらず、前日京師を出るとき、彼陸虞候陸謙が、高太尉の鈞旨を傳へ、我們兩箇に分付して、こゝにて密に汝を結果ひ、金印を

さて兩箇の公人は、彼滾湯に水を潑め、脚を洗ひて睡りしが、四更のころに到り、客店の人もいまだ起ざるに、薛覇はまづ起て面湯を焼し、打火て董超とともに飯を喫了し時、林冲やゝ起出し程に喫ふ事を得ず、又走り動く事もかなはず。薛覇は、いざうち立ん、とて、水火棒を引提て、林冲を催促す。その間に董超は、新しき草鞋一雙を解おろし、耳朶索兒を麻もて編み、これを林冲に穿よ、といふ。林冲は脚皮すべて、潦漿泡となりしかば、かゝる草鞋を穿べうもおぼえず、舊き草鞋を穿んとて、彼首此首を索れども、那里へかとり捨けん、たえて見えざれば、いかにともせんすべなく、この新しき草鞋を穿て、客店を立出れば、いまだ五更には過ざりける。かくて林冲は、ゆくこと僅二三里にして、脚上の泡を新しき草鞋に破られ、鮮血ながれ出て走り動得ず、只管聲喚て止ざるを、薛覇は跟より棒を揚てしばく赶たて、もし走らずはこの棍棒を喫すべし、と罵れば、林冲いとゞ苦しげにて、小人怠慢るにはあらねども、實に脚疼て、一歩も運動がたく候、といふ。董超つらく此光景を見て、げにさこそあらめ、われ汝を扶て走るべし、わが肩にかゝり給へ、とて、やがて手を挽腰を押し、又四五里來りしが、只見れば、一つの林子ありて、その名を野猪の林とよべり。この處は東京より滄州に至るまで、第一の嶮峻去處にぞ有ける。この宋の代に些の寃讎あるものは、錢を公人に與へて、這里にて

埋冤ひ、日もやゝ西に沒んとするころ、三箇の人はある村の客店に歇了り、董超薛覇は、棍棒を壁に倚かけて、包裹を解下せば、林冲も脊負ひ來りし包を下して、彼等が口を開を等ず、包裹より所持の碎銀兩をとり出し、店小二を央ひて、些の酒殺と、些の米とを買ひ、盤饌を安排して董超薛覇に喫せ、われもうち喫て、枷をかけられたるまゝに倒れ臥しけり。その時薛覇は、密に一鍋の百沸滾湯を提來りて、脚盆の内に傾在、林冲を呼び起していふやう、林敎頭、汝脚を洗ひて睡候へ、といふ。林冲これを聞て、やうやく身を起し、かく枷をかけられて候へば、身を曲ることもなしがたし、只このまゝにて睡候はん、といへば、薛覇又いふやう、しからばわれ御身にかはりて洗ひ得さすべし、とく〳〵こゝへ來給へ、とて招ども、林冲はなほ推辭て、敢從ざりけるを、薛覇は只顧これをすゝめ、旅するものゝ常なるに、何か苦う候べき、こはわが好意也かし、といふ。林冲はこれを計とも思ひかけず、しからば無禮は饒恕し給へ、といひつゝ、やがて脚をさし伸るを、薛覇はしかと引攫み、滾湯の中へ弁と入るれば、林冲一聲哎と叫び、急に脚を縮しかど、忽地脚皮紅に腫あがりて、疼堪がたし。薛覇は聲をふり立て、罪人の公人に伏侍事はあれど、公人の罪人に伏侍事を聞かず、しかるを汝なほ驕り高ぶりて、冷を嫌ひ熱をきらふ、是いかなる道理ぞを、と罵るを、林冲は回話もせず、舊の處へ倒臥しぬ。

字をすることとなり。それを明白に黥といふときは、その人腹だちうらむが故に、金印を打とはいへり。かくて三人は、一會の酒を喫了り、陸虞候酒錢を算了して、みなもろ共に酒店を立出で、おのがまに〳〵かへりける。さる程に薛霸は、彼金子を董超にも分與へ、まづ家に到て、包裹と水火棍棒（用心にもつ棒なり）を挐著へ、使臣房裏に來りて、林冲を監押しつ、董超とともに上路し、當日は城下を離るゝ事三十里（百八十町也）にして、歇けり。宋の代には、囚人を監押する公人の歇ときは、房錢をとらずとぞ。その夜董超薛霸は、林冲を領て客店に一宿し、次の日天明に打火て飲食をとゝのへ、滄州の路を投ていそぎしが、時は六月の天氣にして、炎暑堪がたく、林冲ははじめ棒にて打れしときは、さまで痛もつよからざりしに、一兩日大暑に路を走りしかば、棒瘡大に發りて、敢て自在に走り得ず。董超これを見ていたく喝り、汝いかなれば事を曉ざる、今滄州へゆかにんは、二千里あまりの路程なるを、かく慢々地と走りては、いつの程にか彼地に到らん、とく〳〵走れ、といそがしたつれば、林冲がいふやう、小人前日棒に打れ、今更棒瘡舉發たれば、いかにともせんすべなし、さはいへかゝる炎天に、上下の歩をとめ、とかういふに言語もあらず、と打しをれつゝ聞ゆれば、薛霸これを見かへりて、汝みづから慢々地と走れ、咭咶を聽なせそ、といひつゝ行ば、董超は路すがら、喃々咄々的、口の裏にて

無禮をいたせり、恕し給へ、と倍話しかば、陸謙又耳語やう、おの〳〵にも林冲は、太尉の對頭なる事をしり給ひつらめ、今高太尉の鈞旨を奉著り、この金子十兩を、二位に進せ候なり、かならずしも遠くゆくに及ず、僻靜去處にて、林冲を結果ひ、（結果は、俗語なり、しまうてのけるといふがごとし、）路にて病死せしといつはりて、滄州より回狀をだに討てかへり來まさば、縱開封府にて、些の事ありといふとも、太尉みづから分付して、よろしく計ひ給ふべし、と只顧托み聞ゆるを、董超一切うけ引ず、開封府の公文には、只林冲を解活的とこそうけ給はり候なれ、且本人の年紀、なほ壯にして、しかも健なるものを、かく作的て兜搭あらば、いかにせん、と阽めば、薛覇はこれを聞もあへず、董超まづわが言を聞給へ、今高太尉、我們を殺さんと宣ふとも、脫る事はなほ難し、況この金子を賜りて、事を委ね給ふなるに、その人情を破らずは、照顧し給ふべし、前頭の大松林猛惡去處に到りて、彼を結果んは容易けん、といひをはり、彼金子を收了つゝ、陸謙に對ひ、官人心を放し給へ、多くは五站路、少くは兩程にして、分曉らせ申さん、といふに、陸謙大に喜びて、薛端公却眞に爽し、その日、事をなし果なば、林冲が臉上の皮を剮ぎ、彼金印を掲取て表證となし給へ、しからばわれ又包辨て別に十兩の金子を進らすべし、かならず誤給ふなよ、好音を等候、といふ。原來宋の代の成敗に、犯人を流配すときは、臉上に刺

まづゆるやかに坐し給へ、事はおのづからしらるべし、といふ時、酒保は許多の酒肉を搬び來つ、一つの卓に擺了たりしかば、彼人又董超に對て、薛端公はいづれの處に住し給ふ、と問に、董超答て、薛覇が家は前面なる、巷の内に候、と回答するを、彼人なほ底脚問了て、酒保を呼び、汝わが爲に薛端公をも請來よかし、といへば、酒保はこゝろを得て退出しが、且くして酒保とともに、薛覇も閣兒の裏に來りし程に、董超は薛覇に對ひ、この官人只今我們を呼びて、説話せんと宣ひしが、御身が來給ふを等て、いまだその事はうけ給はらず、といふ。そのとき薛覇は彼人に禮儀を舒べ、さてその名字問ども、彼人は只微笑て、あらはにも告ず、少刻せばしらせ申べし、まづ酒を喫給へ、とて、三人對座して數盃を傾け、彼人袖裏より十兩の金子をとり出て、卓の上に放在き、二位の端公、おの〳〵五兩を收め給へ、些の小事あるによりて、こはしるしまでなり、といふ。二人はこの光景を見て、いよ〳〵いぶかり、小人素尊官を認らず候に、何事のおはしまして、この金子をば賜り候ぞ、と問ふ。時に彼人聲を低して、二位には彼林冲を監押して、滄州に投給ふにあらずや、それに付てたのみまゐらすべき一事あり、何か隱さんそれがしは、高太尉腹心の人、陸虞候陸謙なり、といまだ名告もをはらざるに、董超薛覇は、只喏々と回答しつ、俄頃に言語を更て、小人等さる人とも思ひかけねば、對座して

信を寄せ、をり〳〵安否をしらせてよ、と老のくり言はてしなく、なごりをしげに見えければ、林冲とかうの言語もなく、伏拜つゝ衆の、鄰舍にも別を告て、包裹を背に負ひ、やがて東西にわかれ去ぬ。

○魯智深大に野豬林を鬧す

防送の公人、董超薛覇の兩個は、林冲を使臣房裏に帶おきて、監に寄了き、おの〳〵まづ家に立かへりて、行李の收拾する折しも、ちかき巷口なる酒店の酒保、董超が家に來て、董端公、只今一位の官人、小人が店中におはして、急に見えまゐらせなん、と宣はするに、誘給へかし、といふ。董超聞て、そは誰ならん、と問ば、小人も何人かは認らねど、只端公を呼びてよ、と宣ふ故に、參りて候、といふ。今董超を端公と呼ぶ事は、宋の代に公人を稱して、すべて端公とよべばなり。さて董超は、酒保とともに、彼酒店の閣兒の裏に到りて見るに、一箇の人、頭には萬字頭巾を戴き、身には皁紗の背子を穿て、下面に皁靴、淨韈を穿き、董超を見て、慌忙しく出むかへ、端公まづこなたへ、とて席を讓れば、董超がいふやう、それがしいまだ尊顏を認らず、そも何人におはしまして、甚の使令か候、といへば、彼人又いふやう、とまれかくもあれ、

はらず妻はなほ、いよ〳〵哭きて聲を惜ず。且くして頭を擡げ、聞えぬ夫の言語かな、わが身を點汚ざる事は、よく知道ておはしながら、いとゞかなしき別路に、休了んとは心づよし、この事いかに宣ふとも、うち引は侍るまじ、さて何とせん、と身をもだへ、よゝと泣さへあはれなり。林冲もことわりと、思ひつゝ又いふやう、こはあしくも聞ものかな、斯せざれば日後に、兩下が身をも悞つべし、こゝに心のつかざるは、いと淺はかに候、といひ勸れば、張敎頭も、兩の瞼をしばたゝき、わが兒心を放せよ、是は林冲が肚裏に、ふかき主張ある事ぞ、われ又御身を嫁せず、身を終るまで盤纏は、こゝろを添て得させん、といひこしらへて引わくる。只是荊山玉損ては、惜べし數十年の結髮、其親も做がたく、寶鑑花殘狂ては、九十日東君の、匹配を費せり。嗚呼彼小園昨夜の風に、紅梅吹折られて、地に橫はるに異ならず。妻は忽地胸ふたがり、聲絕て四肢も動かず、仆れて死せるがごとくなれば、林冲も張敎頭も、連忙て扶起し、救る事半晌ばかりにして、やうやく甦醒したれど、只兀として哭休ず。かくてあるべきにあらざれば、林冲は休書を、わりなくも泰山に與付し、衆の鄰舍は、林冲が妻子を扶攙き、遂に酒店を立出れば、張敎頭はしばし林冲を呼びとゞめ、わが壻只前程を顧て、囘來る日を等給へ、御身が家の老小は、われ引とりて養ふべければ、すべて心にかくる事なく、もし便人あらば書

んすべなく、しからば心を安むる爲、權に休書をあづかりおくべし、よしやいくとせを經とても、わが女兒だに改嫁ずは、親子が情願もたちなん、とて、俄頃に酒保を呼びて、寫文書的人を尋來させ、一張の紙を沽て、かくぞ寫させたりける。

東京八十萬禁軍敎頭林冲。爲因身犯重罪斷配滄州去後存亡不保。有妻張氏年少。情願立此休書。任從改嫁。永無爭執。委是自行情願。卽非相逼。恐後無憑。立此文約爲照。年月日。

と書をはりしに、林冲はいたく打れて腕も自在ならず、ふるへながら年月の下へ花字を押し、又手摸（手のひらへ墨をぬりて、紙へ押すなり、今の和俗の手形といふもの、これに根く。）を打て、これを泰山に付與す折しも、林冲が妻は、只天に號地に哭き、女使錦兒に一包の衣服を抱著させ、やゝ酒店の裏に尋來たりしが、見れば思へばかくまでに、かはり果て淺ましき、夫のほとりに臥まろび、流れゆく身の柵と、なるよしもなき世をうらむ、涙は泉の涌がごとし。林冲も今さらに、心よわくてはと思ひ回し、妻に對ひていへりけるは、やよわが妻、いたくな歎きそ、われ今屈事にあひて、滄州へ赴くなれば、生死ともに保がたし、けふを限りの緣と思ひ、好頭腦だにあるならば、招とも嫁とも、よろしきに就給へかし、休書もこゝにあり、かならずしも林冲を、等んと思ひ給ひそ、と聞もを

穩ならず、且恐らくは高衙内、威をもて逼べし、況その青春なほ少きに、林冲が爲に前程を誤んは、いとほしくこそ覺え候へ、されば小人主張あり、これ他人の逼迫ものするにあらず、因て目今一紙の休書を立て、それがまに〳〵改嫁させ、聊爭執まじ、かゝれば林冲がこゝろも安く、却て再び高衙内に害せらるゝ事あらじ、といふを、張教頭は聞もあへず、賢壻いかなればかゝる言を宣ふぞや、御身天年齊からで、この横事に遭ぬれど、みづから犯せし罪ならねば、今日權且、滄州に赴きて、災を躱け、難を避よ、しからば皇天憐見て、早晩護佑てかへし給はん、その時夫妻完聚らば、いかに娛しからざるべき、われ又些の過活あれば、明日より女兒と錦兒を引とり、不揀怎的三五年、養ん事いと易し、又高衙内がいかばかり、逼て女兒を求るとも、うけ引べう思はざる、事みなわが身の上にあれば、御身滄州の牢城に到とも、われ又書を寄せ衣服を送らん、只憂事は牡鹿の角の、束の間にこそあるべければ、かゝる胡思亂想なせそ、と言を竭して慰るに、林冲ふたゝびいへりけるは、泰山の好意感ずるになほあまりあれど、もしわが隨意なし給はずは、死すとも目をば瞑がたし、といふ。しかれども張教頭は、とにかくに肯せず、衆の隣舍も、さはし給ひそ、と諫るを、林冲頭をうちふりて、この事肯し給はじとならば、假如免されてかへり來るとも、妻には見え候はじ、と誓を立て推辭しかば、張教頭もせ

高俅もわれに理なきをしれば、强て殺す事を得ず、ともかくも、と應するにぞ、府尹はやがて立かへりて、廳に陞で、林冲を呼出して、長枷を除了せ、背を打事二十枚、そののち文筆匠に命て彼が面頬へ刺させ、地方の遠近を量て、滄州の牢城へ配すべしとなり。よりて當廳、林冲に、量七斤半なる、團頭（團頭は、非人頭の事なれど、こゝにては鐵のかなものをいふなり。）鐵葉の護身枷を打て、封皮を貼れば、二箇の公人命をうけ給はり、監押して彼州へ啓程す。この防送の公人兩箇が名を、董超、薛覇といふ。彼等既に一道の公文を領了て、林冲を押送し、當日開封の府を出つゝ、只見れば衆多の隣舍、並に林冲が丈人張教頭、すべて府の前にありてこれを接著へ、林冲と兩箇の公人を引て、州橋の上なる酒店に到に、孫孔目が維持にて、打れし棒に身をも毒らざれば、林冲幸に走り動く事を得たり。さて張教頭は、酒保を呼びて酒肉を安排させ、兩箇の公人を管待しつ、盃の數もかさなりてのち、銀子をとり出て彼二人に送りけり。その時林冲は張教頭に對ひ、泰山今上に在す、今玆いかなる年災月厄なればにや、高衙内に撞了て、屈官司せられしうへは、今日一句の説話あり、よく聞て給はれかし、泰山誤て、小人に鍾愛の令弱を嫁らせ、既に三年を經たれども、兒といふもののある事なし、さはいへ年來面を赤めて、爭ふ事もなかりしに、この横事に想はずも、流配人となるからに、露の命も覺つかなきを、わが妻家にあるときは、わが心

林冲冤枉に
開封府に
發下さる

監下けり。さる程に林冲が家裏は、みづから飯をおくり來て錢を使ふに、林冲が丈人張教頭も、
買上し告下み、只顧かれを救んとす。こゝに當案孔目に、孫定といふものありけり。その
人となり鯁直にして、十分に善を好し、只人を週全ん事を要せり。こゝをもて世の人、すべて
孫佛兒とよび做しつ。この孫定明白に這件の事を知道て、つねに府尹に就裏を說しらせ、一日
又稟すやう、林冲原罪あるにあらず、はやくかれを週全給へかし、といふ。府尹聞て、彼が這
般の罪犯に於ては、高太尉批仰してその罪を定む、殊さら手に利刀を拿著へて、節堂に入たれ
ば、なかなか週全がたし、といふ。孫定又稟すやう、この南衙開封の府は、朝廷より建おき給
ふにあらずや、さるを高太尉權勢に就せ、人小々の罪犯あれば、この開封の府に發來し、殺し
て便剮りせんとす、もし這里は彼が家の官府ならばちから及ず、今朝廷の法度に仗らば、
なでふ罪なき人を殺し給はんや、といふ。そのいふところ理なれば、府尹しばし尋思しつ、し
からばいかに斷遣せん、と問に、孫定答て、林冲が口詞を見るに、罪なき事あきらかなり、し
かれども兩箇の承局を拿得ざるをもて、たえて證据とすべき者なし、只その利刃を懸て節堂へ
入りたるを罪とし、背を杖こと二十にして、刺して遠惡の軍州へ配し給へ、と稟せしかば、府
尹やうやくうけ引て、みづから高太尉の處へ到り、再三林冲が口詞のおもむきを稟說ける程に、

るとき、玉衡の明なるがごとく、是非を判く處、金鏡の照れるに似たり。かくて高太尉の幹人は、林冲を把て堦前に跪き、高俅がいふところを紏をはりて、彼寶劍を上れば、滕府尹聞て、林冲に對ひ、林冲汝は禁軍の教頭なるに、などて法度を辨ず、利刃を拿て節堂へは入たる、これは是該死的の罪犯なりかし、といふに、林冲が告すやう、小人元來鑫鹵的軍漢なりといへども、些の法度はしるものを、いかで擅に節堂へ入候べき、これは前月二十八日、妻とともに嶽廟に詣つる折しも、高衙内も又彼廟に到り、荊婦を把て調戯しを、忽地喝退つ、次後又陸虞候陸謙をもて、小人を賺し出し、街上に誘ひて酒を喫せ、又富安をもて荊婦を騙り、陸謙が家の樓上に伴ゆきて調戯しを、小人速に赶去し、陸謙が一場を、打碎て歸候ひき、この事既に兩度に及び、彼終に姦をなし得ざれども、人みなよくしるところなり、しかるにきのふ、林冲不圖この劍を買て候を、高太尉はやくしろし食て、今日兩箇の承局を遣し、彼劍を見給はんとて呼び給ふにより、やがて二人とともに參りたるに、彼承局は、林冲を節堂上に儐き、太尉に報さんとて退出候ひしが、想はずも高太尉外面より入り來り、計を設て小人を陷害んとす、望らくは恩相、わが爲に做主給へかし、と申せしかば、府尹は林冲が口詞を聞をはり、まづ回文に押了して、高俅が幹人に與へ、一面の枷枉をとり出て林冲に枷させ、且く牢の裏に

初編　卷之九

○林敎頭刺されて滄州道へ配さる

高太尉は衆多の軍校をもて、既に林冲を拿下させ、忽地これを斬らんとせしかば、林冲聲をふり立て、われ寃屈には死なじ、と叫びし程に、高俅冷笑て、汝節堂に入りて何事をかはかりし、且手に劍を拿著て下官を殺さんとす、かく事發覺るゝに及て、なほあらがふや、と罵れば、林冲又いふやう、太尉の呼び給はずは、などて這里へは參るべき、もし疑しくは兩個の承局を呼給ひて、林冲を賺し來れる緣故を尋給へかし、といはせもあへず、高俅一聲高く喝りて、やをれ林冲、わが府の中には、さる承局なし、這斷罪に服さずは、斷遣こそあれ、といきまき、左右を呼びて開封府に解去き、滕府尹（滕氏の府尹なり。）に分付て、好生推問し、勘理明白なるに到りて、首を刎させよ、と命すれば、幹人鈞旨を領了て、彼寶劍を封じ、これを拿著て林冲を監押し、開封府を投て到りしが、府尹は衙にありていまだ退ず、只見れば提轄官は機密を掌り、客帳司は牌單を管り、吏兵は籐條を執て堦前に立ち、節級は大杖を持て左右に分る。詞訟を斷

ならず歹心あるにこそ、といきまけば、林冲身を躬て稟やう、小人嘗野心を挿むにあらず、目今兩箇の局承が言を傳へ、太尉、林冲を召て、刀を見んと宣するによりて參れり、（林冲に劒を賣り、又白虎堂に誘引たるは陸謙富安がはかりごととしるべし、）といはせもあへず、高俅大に喝ていふやう、汝承局に伴れて來りしといふ、その人は今那里に居るぞ、と責問ば、林冲答て、彼兩人は太尉に報さんとて、退出候、といふに、高俅ます〳〵怒を發し、この事却て胡說なり、誰にもあれ故なくして、この節堂へ入る事を許さゞるをば、汝も豫て知つらん、誰かある、這厮を拿下よ、といひもをはらざるに、傍邊なる耳房裏より、二三十人走り出て、林冲を把て押へ、横に推し倒に拽き、恰皐鵰の紫燕を追ふがごとく、猛虎の羊羔を啖ふがごとく、忽地索をかけたりける。畢竟林冲が性命いかにぞや。そは次の卷を讀得てしらん。

白虎堂に誘めて高俅林冲を陥る

けふはじめてにこそ、など回答する間に、府の前に到りしかば、もろともに廳前に到り、こゝにて太尉をまたんとするに、兩人のいふやう、太尉は後堂にこそ座すなれ、誘こなたへ、とて伴ひしが、這里にても又高俅を見ず。林冲又とゞまりけるを、兩箇の承局又いふやう、原來太尉は裏面に在して等給ひけん、とく〳〵來給へ、といひかけて、なほ奥ふかく伴ひゆく程に、門二つ三つを過りて、一箇の去處に到りしに、その周遭すべて綠の欄干なり。彼兩人はこの處に林冲を資て、敎頭少くまち給へ、我們太尉に報さん、とて退出けり。さる程に林冲は、手に劍を拏て、ひとり簷前に立在つゝ、承局が音づれをまつに、一盞茶時出も來らざれば、いよいよこゝろ疑ひつゝ、簾を掲て裡を見るに、簷前に額ありて、白虎節堂といふ、四箇の青字を寫したれば、林冲猛に省き、この節堂は軍機の大事を商議する處なるを、今故なくして入るべきにあらず、こは欺れたるかと驚き怕れ、走り出んとする折しも、忽地靴履響高く聞えて、一箇の人外面より出來れり。林冲これを見れば別人にあらず、却てこれ本管高太尉なりしかば、劍を執て拜伏す。高俅見て大に怒り、林冲汝呼ぶ事もなかりつるに、などて白虎堂へは入りたるぞ、汝既に禁軍敎頭なれば、よも法度はしりつらめ、殊さら手に劍を拏著たるは、下官を殺さん爲歟、きのふ人ありてわれに告しは、汝兩三日前にも、刀を拏て府中を張望しと聞く、か

れてかへりし程に、林冲は彼漢を領て家に到り、錢を彼にとらせ、汝この劍をば、那里より得たる、と問ば、漢子答て、是はそれがしが祖上相傳の寶劍なり、家道消乏て候へば、ぜひなく將出て賣候、といふ。林冲かさねて、汝が祖上は誰なるぞ、と問に、彼漢敢告ず、もしいふときは人を辱抹なり、といふ。よりて林冲ふたゝび問ず。彼漢は價銀を得てかへり去にければ、林冲はこの劍を把て、翻來復去つら〳〵見つゝ、只顧これを喝采ていふやう、高太尉の府中に、一口の寶劍あるよしを聞しかど、人に見する事を許さゞれば、いまだ面あたり見ずといへども、縱その寶劍と比るとも、よも劣はせじ、とひとりごち、しばしは手をも放さず、その夜は壁にかけおきて、天明をまたずして起出で、又彼劍をと見かう見て、ふかく愛よろこびしに、次の日巳牌時分、兩箇の承局（和にいふ雜色、今の使徒のたぐひか。）來りていふやう、林教頭汝一口の寶劍を得たるよしを、高太尉聞しめし、自己の寶劍と比看給はんとて、もつぱら等せ給ふなる、誘給へ、とて急したつれば、林冲聞てふかく怪み、其麼なる多口的が報告て、わが劍を買得し事の、はやく太尉には聞えけん、と疑ひ惑ひつゝ、衣裳を更て彼劍を拏了へ、兩箇の承局と打つれだちて、既に家を立出しが、なほ心もとなければ、承局に對ひていふやう、われ日來府中にては汝兩人を認らず、いつの程にか參り仕給ふぞ、と問に、二人答て、我們は新近參隨なり、よりて教頭に面會するは、

を得てこれを遞す。その時林冲は、魯智深とともに、ふたゝびこれを見るに、清光目を奪ひ、冷氣人を侵し、遠く見れば、玉沼の春氷のごとく、近く見れば、瓊臺の瑞雪のごとく、花紋密に布て、豐城の獄内（晋の張華雷煥を補して、豐城の令とす。煥、獄屋の基を掘て、石函中に、二の寶劍あるを得たり。一は龍泉といひ、一は太阿といふ。）より飛來るかと疑れ、紫氣横りて、楚昭の夢中（楚の昭王、臥して寤む、呉王が湛盧の劍を得たり。）に收得たるに似たり。又是太阿巨闕（巨闕は、歐陽冶子が造るところの寶劍、太阿龍泉は楚王の劍なり。）も比べがたく、干將莫邪（干將は、呉人なり。闔閭二の劍を造らしむ、一を干將といひ、二を莫邪といふ。莫邪は干將が妻なり。）も等閑なるべき寶劍なりしかば、且驚き且愛て、汝いくばくの錢に賣るぞ、と問ば、彼漢子答て、索價を告せば、三千貫なりといへども、實價二千貫にて賣候べし、といふ。林冲聞て、値は二千貫にも値るべけれど、これをよく識て買人もあるまじ、汝もし一千貫に肯るならば、われ買て得させん、といふ。漢子しばし尋思して、われ急に些の錢を要しければ、五百貫を饒候はんに、千五百貫賜り候へ、といへば、林冲頭をふりて、いな〳〵千貫ならでは買じ、といふ。漢子只顧嘆氣して、かく宣はすればせんすべなし、金子を生鐵として賣んには、罷々今は一文の事もいはじ、とうけ引にぞ、林冲點頭て、しからば錢を遞さんに、われに從ひて來よ、といひつゝ、又魯智深に對て、師兄且く茶店に憩ひて等給へ、小弟やがてかへり來候はん、といへば、智深聞て、われもまづ立かへりて、明日又見え候はん、教頭慢々地と事をなし給へかし、といひをはり、やがてわか

人を呼び來れば、高俅これを近く招きて、わが小衙内の事、汝等甚の計較かある、もし彼が性命だに救ひなば、われかならず汝等を擡擧得さすべし、といふ。その時陸謙、頓首膝行して前み向ひ恩相今上に在す、この計施し易し、只林冲を除かんには、箇樣々々、と耳語ば、高俅聞得て笑を含み、この計最好し、汝等明日、われとともにこれを行へ、といひて、只顧喝采て止ざりけり。話この下になし。さて又林冲は、毎日に魯智深とともに、街に出て酒を喫み、這件事にこゝろを記ず。一日二人同行して、武陽の巷口に到るに、一箇の大漢子、頭には抓角兒頭巾を戴り、身には舊き戰袍を穿て、手に一口の寶劍を拏著へ、草標兒を插みて、街に立在み、今識者に遇ざれば、わがこの寶劍を屈沈にする事よ、と獨言けり。されど林冲は、それに心もつかず、只顧魯智深と說話つゝゆく程に、彼漢その背後に跟て步み來つ、惜べしこの寶劍、遂に識者なし、といふ。林冲これをば耳にもかけず、なほ魯智深と打つれだちて、やうやく巷に入りしかば、彼漢その背後にありて、かくひろき東京に、軍器を識る人の、たえてあらざることそうらみなれ、と二たび三たび獨言ければ、林冲はじめてこれを聞著け、頭を囘して見るときに、彼漢は件の劍を、すらりと掣將てさし出すに、明晃々として夏なほ寒し。林冲は此劍、事あるものよと見てければ、彼漢にうち對て、とくその利劍を見せよ、といへば、こゝろ

いひ慰る折しも、府裏の老都管、（役付の人にあらず、自分の家來なり。）出來りて、高衙内の病症を看ふに、痒からず疼からず、渾身は寒く又熱く、腹又飽つ又饑つ、白晝に飧を忘るゝ事あり、黄昏に寢ざる事多し。爺娘に對て、心中の恨を訴がたく、相識を見て、瞼上の羞を、遮かねし光景なり。その時陸虞候は、富安と商量し、老都管が病を看て、退くをまちうけ、これを僻淨處に邀ていふやう、衙内の病著、速に愈ん事を量給はゞ、只太尉に告て林冲を除き、彼が妻をだに進らせなば、日を俟ずして平愈あるべし、もししかせざれば彼性命、とても救ひがたからん、と耳語ば、老都管うち點頭て、容易々々、老漢今夜太尉に稟候はん、と承引ば、二人喜びて、我們既に計あり、只足下の回答を待つ、といひつゝ別れしが、老都管はその夜高太尉に、衙内の想思病、陸謙富安等がいひし事ども、備細に告せしかば、高俅聞て、わが孩兒はいつの程にか、林冲が妻を見たる、と問ふ。老都管又稟すやう、これは前月廿八日、嶽廟にて見給ひしより、今一月あまりを經て、如此々々の事ありしとて、陸謙が計し事ども、審に說了れば、高俅つら〳〵聞て、かゝれば彼が渾家の故をもて、いかでわが兒を害すべき、林冲一箇は惜に足らず、この事いかにせば好らん、といふ。老都管うけ給はり、陸虞候、富安の兩人、既に計較あるよしを申候ひし、といひもをはらざるに、それとく〳〵召せ、とおほするにぞ、老都管こゝろを得て、やがて彼二

ど、たえて面を見る事なく、府の前なる人々も、林冲が顏色の好ざるを見て、みな怪みあへりしとぞ。第四日の飯時候に、魯智深尋來て、教頭何とてそののちは音づれもなかりし、といふ。林冲答て、小弟はからずも事に紛れて、師兄を探まゐらせざりしに、既に寒舍に來臨し給ふなれば、三盃を草酌べう思へども、一時に周備がたきに、師兄とともに街に出て酒を喫べし、いかにゆき給ふまじきや、といへば、魯智深聞て、しかるべし、と回答しつ、もろともに立出て、一日の酒に心くまなく語くらし、明日又見え候はん、とて別しが、是より毎日に魯智深に伴れ、街に到りて酒飮あそび、這件の事においては、やうやく放慢けり。且說高衙内は、那日陸虞候が家の樓上にて、林冲に驚かされ、墻を跳こえて脫去しが、この事は養父高太尉に對て告べうもあらざれば、いよ〳〵愁悶つゝ、遂に長き病著となりて、ふたゝび起もあがり得ず。一日陸虞候陸謙は、富安とともに府の裏に詣で、高衙内の顏色やゝ憔悴たるを見て、衙内如何なれば憂多くして樂少くおはするぞ、と問に、高衙内答て、われ實に汝達を瞞ず、彼林冲が老婆の爲に、この病を添たれば、眼見的半年三個月も、性命は保がたからん、と心ぼそげに聞ゆれば、二人言語を齊し、とかく心を寬して、さのみは悶給ふべからず、好も歹も小人等に、打まかせて在さば、彼婦人を誘ひて、完聚まゐらすべし、かばかりの事に思ひ屈し給ふ事やある、など、

わが妻こゝを開よ、と呼ぶに、婦人は丈夫の聲を聞き、とかくして樓門を開く隙に、高衙内はおどろき瞭て、樓牕を空開つゝ、墻を跳こえて逃去りぬ。林冲は裏に入りて、高衙内を尋るに見えざれば、妻に對て、御身點汚たるか、と問に、いかでさる事侍らん、死とも身をば汚さじと、思ひ定て侍り、といふ。されど林冲はなほ怒に堪ず、身を跳起して陸謙が家を粉々に打碎き、妻を伴ひて、門外に立出れば、兩邊鄰舍どもは、すべて門を閉てこれを避く。かゝる處に女使錦兒も、後走に來りしかば、主從三人まづ家に立かへり、林冲は一把の解腕尖刀（日本風土記にいはく、剌刀の長尺なるものを解手刀といふ。武備志、日本考又同じ。小説に手と腕と通じ用ゆ、解腕は解手なり。東涯先生の名物六帖に、ヨロヒドホシと訓ず。一説に解手とは、大小便などにゆくことなり。其時用心にもつ短刀かといへり。）を挈著つゝ、再び樊樓の前に到て、陸謙を尋るに、日は晩れども環會ず、ぜひなく家にかへり來れば、その妻丈夫を勸ていふやう、わらは彼に騙されしかど、敢て身を汚せしにも侍らねば、只みづから休氣て胡做をし給ひそ、と言語を竭してとゞむるにぞ、林冲頭をうちふりて、いかでか忍耐べき、只憎べきは陸謙畜生、年來親しく交參て、兄のごとく弟のごとし、しかるにわれを騙て、高衙内に媚を索む、遺恨いづれの日か消ん、と（林冲豪傑只陸謙においてその人をしらず、義を兄弟に結びしはいかにぞや。）いきまくあらく罵りて、そなたを照管しかば、妻はなほ苦に勸つゝ、その夜は放て門を出さず。陸虞候もかくあるべう思ひし程に、高太尉の府内に躱在て、敢家に囘ざれば、林冲は一連三日、その在家を聞定めけれ

時に昏絕て仆れ給ひぬ、こは重氣といふものにやあらん、いまだ縡斷ざる間に、娘子をも呼てよ、といふによりて參れり、とく〳〵ゆきて看病し給へ、と叫びし程に、娘子大に驚き給ひて、連忙しく間壁の王婆を央て看了家させ、わらはを將てその人とともに、陸虞候の家に到り、官人は那里ぞ、と問給へば、樓上に、と答ふ、やがて樓上にゆきて見給ふに、卓子の上に些の酒肉を安排し、官人はたえて見え給はず、よりて退出んとし給ふ時、前日嶽廟にて、娘子を囉唣せし、後生が出來りて、娘子しばし坐し給へ、御身の丈夫來れり、といひつゝ、調戲んとするを見果ず、わらはは樓上を走り下しが、娘子はなほ拖とめられて、只顧叫び給し程に、直にその家を走り出て、官人を尋まゐらせしかど、たえてその往方をしらず、路にて藥を賣張先生に問侍りしに、教頭は樊樓といふ酒店にありて、一箇の人と酒を喫給ふを、目今見たり、と告訴しによりて、やゝこゝへは參れり、といひもをはらざるに、林冲ます〳〵驚きて、敢錦兒を顧ず、三走をも一步とし、陸謙が家に走りゆきて、搶と胡梯を上りしが、既に樓門を關著め、裏には妻の聲して叫ぶやう、淸平の世界に、いかなれば良人の婦を捉て、這里に關在給ふ、といへば又高衙内の聲音とおぼしく、かくまで思ひ焦るゝに、などて强顏もてなし給ふ、縱鐵石の人なりとも、物のあはれはしるべきに、など、いとなめげにかき口說を、林冲聞て聲をふり立て、

檣を跳こえて
高衙内
林沖を

陸謙忽地いへりけるは、我們自己の家にありて、酒を喫んも興なし、誘樊樓にゆきて、半酣の醉を竭さばや、といふに、林冲はともかくも、と回答して、直に樊樓といふ酒店にいたり、夥の酒肉を出させて、盃の數も重りしとき、林冲只顧嘆息せしかば、陸謙怪みてその故を問に、林冲答て、男子一身の本事ありながら、空しく明主に遇ず、屈て小人の下に沈在て、今この腌臢的氣を受く、是大なる不幸ならずや、といふ。陸謙聞て、今禁軍中、幾箇の教頭ありといへ共、兄長の本事に及ぶものなし、殊さら高太尉にも、わきて看承なるを、却て誰的氣をか受給ひし、などいふに、林冲は、前日高衙内の事ども、おちもなく告訴るに、陸謙又いふやう、高衙内一旦姪がはしき事ありとも、もし教頭の娘子としり給はゞ、などて憚おほさゞらん、しかればふかく怨に足らず、何事も休氣て、只顧酒を喫給へ、といひ慰むるに、林冲又八九盃の酒を喫み、小遺を要んとて、ひとり樓上を走り下り、酒店の門を立出て、東の小巷に到りつゝ、淨手しをはる折しもあれ、女使錦兒慌忙て出來り、目今官人を尋まゐらせて、彼此を走りめぐりしかど、見え給はず、原來這里にこそ在しけれ、といふに、林冲驚きて、そは甚事ぞ、と問ば、錦兒答て、前に官人は陸虞候とともに立出給ひて、幾程もなく、一個漢子驀地に走り來て、娘子に對ていふやう、われは陸虞候が隣舍のものなるが、御身が家の教頭、陸謙と酒を喫み、一

やがて富安とともに出來れり。時に高衙内は、富安が說ところの計、首尾を說聞せ、汝速にこの事を行ひ候へ、といふ。陸謙これを聞て、一トたびは驚きしが、高家の權威に害怕れて、敢推辭ず、只高衙内に喜ばれん事を思ひ、忽地朋友の交情を顧みずして、異議なく承引したりける。

○豹子頭誤て白虎堂に入る

且說林冲は、こゝろ樂しからざれば、その後はたえて街上へも出ざりしに、一日門首に人來りて、敎頭家にありや、と問ふ。林冲これを聞て、みづから立出見るに、これ陸虞候陸謙なり。時に陸謙がいふやう、敎頭頃日は、何とて久しく見え給はざる、あまり疎濶さに訪まゐらするなりかし、といへば、林冲答て、われ近曾心たのしからざる事あるによりて、かくこもり居候なる、まづ裡面に入りて茶を拜給へ、といひつゝ、接て客房に伴はんとすれば、陸謙がいふやう、しからば今敎頭を家に誘ひかへりて盃を勸め、憂をも慰め候はん、誘給へ、といそがしたつれば、林冲が妻この聲をもれ聞て、布簾の下に走り出で、やよ陸虞候、我夫には少し飲せて、はやく歸してよ、といふに、陸謙點頭て、阿嫂さのみ思ひ過し給ふな、大哥をばわが家に伴ひゆきて、三盃を喫候にこそ、といひもあへず、林冲とともに走り出で、既に街上に赴きしが、

安答て、衙内の物思ひは、雙木（すなはち林の字の謎）の事にあらずや、といふ。高衙内これを聞て、思はず高やかに打笑ひ、汝が推量につゆ違ず、われこの故に納悶るなり、さていかにしてよからん、といへば、富安又いふやう、是なしがたき事にあらず、衙内何とて林冲を怕れて、却て欺き給はざる、彼は見に帳前の敎頭なり、もし太尉に悪れまゐらするときは、輕くて謫され、重くは殺されん、それがし一つの計あり、輙く林冲が妻を誘ひて、あはせ進らせ候はん、と耳語ば、高衙内大によろこび、われ幾箇の、艶たる少女を見つれども、いまだ林冲が妻に及ず、汝もしこの戀をかなへ得させば、賞は望に任せなん、とく〳〵計を說聞せ候へ、といふ。富安は賞の一句を聞て滿面に笑を含み、なほ聲を低していふやう、陸虞候陸謙は、林冲と交り厚し、明日衙内は陸謙が家の樓上に、些の酒肉を設おきて、那里に躱在し、陸謙に命て林冲を他處に誑引出させ給へ、その時それがし林冲が家に到りて、箇様々々にいひこしらへ、彼妻を誘ひて、衙内にあはせ進すべし、婦人は水性なるものなれば、君が風流たる人物を見せ、これに加るに些の甜話兒をもて挑給はゞ、縱鐵石の人なりとも、いかで心を動さゞらん、この計いかに候はん、と物がたれば、高衙内掌を拍て稱讃し、この計奇妙なり、とく陸虞候を召せ、といふに、富安こゝろを得て、退き出づ。彼陸虞候陸謙が家は、高太尉が府と隔壁巷内にてありしかば、

俅を怕るゝとも、われは彼撮鳥を見ること、一隻の狗のごとし、今三百の禪杖を喫せずは、得こそかへるまじけれ、といきまきあらく罵りけり。林冲は智深がいたく醉たるを見て、師兄の說話理なり、林冲も彼を怕るゝとにはあらねども、衆人に勸られて、且く權に饒せしのみ、ふかくな怒り給ひそ、と却てこしらへ和むるにぞ、魯智深又いふやう、倘事あらばいつにもあれ、かならずわれを呼給へ、立地に走り來て、汝を助候べし、など、くりかへし〱、言語果しもなかりしかば、夥の潑皮ども、誘かへり給へ、とて、みなもろ共に促ば、魯智深は林冲が妻を見かへり、阿嫂われを怪みて笑ひ給ふなよ、明日又見參すべけれ、といひをはり、衆人に扶られて、廨宇のかたへ退りけり。かくて林冲は、妻と錦兒を將て家にかへり、こゝろ鬱々として樂しまず。こゝに又高衙内は、一班の間漢を引了て府中に立かへりしが、一トたび林冲が妻を見てしより、こゝち惑ひて忘れがたく、徒に心を焦して、兩三日を過せしに、衆多の間漢すべて來りて、四表八表の物がたりし、只顧慰めものすれども、敢たのしき氣色なければ、みな沒撩沒亂して退出しに、乾鳥頭富安といふもののみ、ひとり殘りとゞまりて、傍に人なきを窺ひ、前向て稟すやう、小間衙内を見奉るに、面色快らずして、物おもはしげに在すなる、この病源をしるものは、富安ならで候はじ、といふに、高衙内含笑て、汝何とか猜したる、と問ば、富

郎といふものの子を養ひてわが兒とし、これを高衙内と呼て鍾愛大かたならざれば、彼又養父の威勢に倚て、わりなく他の妻女に調戲しかど、京師の人もその權威に怕れて、誰爭ふものもなく、私に口順て花々太歳と呼なしつ。さて林冲は元より認れる高衙内なるをもて、おのづからふり揚し拳さへ軟て、さらにとかうの問答に及す。高衙内は又彼婦人を、林冲が妻なりともしらざれば、忌憚る氣色もなく、やよ林冲、汝が多管ことにあらず、とくいねかし、といひながら、なほ調戲んとしたるとき、高衙内の從者は、胡梯の上一時にさわがしきによりて、みなもろともに攏來つ、林冲がこゝにあるを見て、いと傍痛ければ、さらぬ態にて彼を勸め、又高衙内を和哄へ、廟を退きて、主をば馬にのぼし、立しほもなくかへり去ぬ。されど林冲は、怒いまだ消らず、齒を切りて停立しが、かくてあるべきにあらねば、妻と錦兒を領て下向に赴き、只見れば、魯智深鐵の禪杖を拏著つゝ、二三十人の潑皮を引著ていで來り、われ今汝に幇うて、彼奸賊を斷打さん爲に來れり、と呼はるにぞ、林冲はこれを廟の門外に迎ていふやう、わが妻に調戲たる後生は、本官高太尉の小衙内なり、元來林冲が妻を認らずして、一旦無禮に及ぶといへども、太尉の面に看て拳をも下ざりし、古より官に怕れずして、管に怕るゝといふことあればこそ、かく他の請受を得てしうたてさよ、といふに、魯智深は只顧眼を睜り、よしや汝は高

を添て管待折しも、女使錦兒臉うち赤め、慌忙て走り來つ、墻の缺より林冲を叫ていふやう、官人はやくかへり給へ、目今娘子廟の裏におはして、人に合口れ給へり、といひも果ざるに、林冲忙しく盃を放在て、彼今那里に在ぞ、と問ば、錦兒答て、娘子は五嶽樓の下におはせしを、夥の奸誰不及的が、わりなく拖住まゐらせて、とにかく放侍らず、と叫し程に、林冲ますますこゝろ躁て、魯智深にうち對ひ、それがしやがて歸り來候はんに、無禮は恕し給へかし、といひかけて、墻の缺を跳こえ、錦兒とともに五嶽樓に來て見れば、聞しにたがはず數箇の人、彈弓、吹筒、粘竿を拏著て、欄干のほとりに停立み、胡梯（梯ばしごはもと北狄より始るなれば、胡の字を付るなり、）の上に一箇の後生、林冲が妻を抱き住め、御身われとともに樓に上り給へ、いふべきことあり、なんどうち調戲て立ければ、林冲が妻臉を赤し、泰平の世にありながら、些の理非をも辨へず、良人の婦を捉て何事をし給はん、いと淫がはし、とうち腹立ち、拖はなさんとすれども放さず、せんすべもなく見えたりしに、林冲搶と走り來て、彼後生が肩胛をかい攫み、汝膽太くも白晝に、他の妻を拖とらへて調戲んとはするぞ、と罵り、右の拳を握かためて、打倒さんとしつゝ看一看ば、彼後生は、本管高太尉の螟蛉子、高衙内にてありしかば、再びうち驚て、忽地拳を下し得ず。抑高俅發跡て、既に大臣の班につらなるといへども、元來實子なかりしかば、阿叔の高三

の形勢、器械とりて凡にあらず、と獨言し程に、潑皮どもさゞめきて、彼敎師さへ喝采給へば、かならず見どころあるべし、といふに、魯智深も心ゆかしみ、いかに汝等は、彼軍官をしりたるか、と問ば、みな答ていふやう、この官人は八十萬禁軍、鎗棒の敎頭にて、林冲と名告給へり、よりて世の人、林武師とも、林敎頭とも稱候、と回答すれば、原來由緒ある人にこそ、誘こなたへ入りて相語給へかし、といへば、林冲墻を跳こえて、やがて槐樹の下に來つ、魯智深と名對面するに、魯智深はその身出家したる一五一什審に說をはり、さていふやう、それがし提轄のむかし、令尊林提轄とは一面の交あり、しかるに今敎頭を見まゐらすれば、なほその面影あり、なんど、いと信やかに聞ゆるにぞ、林冲も喜びて、師兄わが亡父を認り給ふぞならば、等閑の緣にあらず、願くは義をむすびて兄とも見まゐらすべし、といへば、魯智深ふかく感悅し、われこゝに來りても、いまださせる友に遇ず、しかるに今日はからずも、大哥に見え、義を結びて兄弟の思ひをなす事、大なる幸ひなり、又敎頭には何の故ありて、這里に來給ひし、と問ふ。林冲答て、それがしは荊婦とともに間壁の嶽廟劉李王を祭る廟なり。第二卷、王進母子が、東京を出奔する條下に見えたり。に詣て、還香願し候ひつるに、遙に器械の響を聞て、その人をなつかしみ、荊婦には女使錦兒を著て、廟裏に殘しおき、漫にこゝへはまゐれり、と物がたれば、魯智深いよ〳〵よろこびつゝ、再び酒

は些を安排して、還席ばや、とて、道人に命せて、一二三擔の酒と猪羊菓子のたぐひを沽せ、准備旣に整へり。この時三月盡前に（へうたん架あり、いまだいくばくもあらずして、三月盡と題する事、更に解すべからず。）の天氣いと麗なれば、綠槐樹の下に蘆席を舖せ、彼潑皮等を招きて、おの〳〵樹蔭に團座させ、大碗をもて酒を飲に、やうやく喫得て濃なり。時に張三李四一齊いふやう、我們前日師父の力を演給ふをば見たれども、いまだ器械を使ひ給ふを見ず、願ふは些を見せ給へかし、と請望にぞ、魯智深やがて房内より、渾鐵の禪杖をとり出し、汝等まづこの杖を見よ、長は五尺にして、重六十二斤なり、われ今これを使ひて見すべきにこそ、といへば、潑皮ども大に驚き、倘兩の臂膊、水牛の氣力なからましかば、いかで輙く使得ん、とぞ感じあへりける。その時魯智深は、彼禪杖を把て颼々と使ひ動すに、一上一下半點の參差なければ、衆人思はず聲を揚け、一齊に喝と采る折しも、官人めきたる一箇の漢子、墻外よりこの光景を見て、使ひ得て好し、使ひ得て好し、と喝采しかば、魯智深聞て手を住め、只見れば墻の缺し邊に、立著たる一箇の官人、その打扮怎生となれば、頭には青紗の抓角兒頭巾を戴り、身には綠羅團花戰袍を穿て、腰に雙搭尾龜背の銀帶を繋め、脚には磕瓜頭朝樣の皁靴を穿き、手に摺疊紙西川扇子を執ち、頭は豹のごとく、眼は環のごとく、燕の頷、虎の鬚、身材八尺、年紀は三十四五なるべし。この官人なほ墻のほとりにありて、彼和尚

魯智深菜園に緑楊樹を抜く

人、傍にありてうち笑ひ、近曾墻の角邊なる楊樹の上に、鴉巣を添了て、毎日晩に到るまで、いと聒しうこそ、といふ。衆人これを聞て、しからば彼巣をとり下して耳の根を清むべし、誘給へ、といひかけて、みな外面へ走り出れば、魯智深も酒興に乘じ、都て彼首にゆきて見るに、果して綠楊樹の上に鴉の巣あり。此樹いくとせか經たりけん、梢高くして輙くとり卸すべうもあらざれば、衆人奔走り、梯子をもて來てこそ、などいひあへるを、李四拖とゞめて云やう、われ元來樹に登ること猴のごとし、梯子をもて來るまでもなし、盤上らん、とて立寄るを、魯智深うち笑て、汝等且く退てわがするところを見よ、といひもあへず、直裰を脫すてて、彼樹の本を楚と抱き、身を倒繳て趁ると見えしが、さしもの大木根より拔て、跡は一つの穴となりつ。二三十人の潑皮は、これを見て拜伏し、師父は凡人にあらず、正眞の羅漢なり、もし千萬斤の氣力あらざりせば、いかでこの樹を拔得べき、と動容めきつゝ、且驚且感じて止ざれば、魯智深彼等を見かへりて、かばかりの戲はいまだ屑ならず、われ明日武藝を演し、器械を使うて見すべし、といふに、みなしかるべし、と回答して、當晩はおの〳〵かへりける。次の日を始として、張三李四が徒は智深を見る毎に、匾々的伏て是を敬ひ、日々に酒肉を將ゆきて、心くまなく饗しける程に、一日魯智深思ふやう、われ日來彼等が酒食を喫ふ事いと多し、今日

事を休よ、われは是關西延安府、老种經略相公帳前の提轄官、魯達といひしものなるが、人を打殺すによりて和尚となり、法名を智深と號し、今番五臺山より來りしなり、汝等二三十人はさらなり、縦千軍萬馬の隊をも殺くづさん事容易し、と説示すに、衆の潑皮は、只喏々と回答しつ、拜しわかれて歸りける。さて潑皮どもは、ふかく智深が勇力に屈伏し、次の日商量して些の錢を湊め、十瓶の酒と一隻の猪とを買て、これを智深が廨宇にもてゆき、みづから安排して魯智深を座席の中央に請待し、みな兩邊一帶に居ながれて、酒もりあそぶにぞ、魯智深いと怪みて、汝等甚の故に鈔を壞て、われを管待ぞ、と問ば、衆人答いふ、師父今這里に住持し給へば、我們よきうしろ盾を得て幸甚し、よりて些の主して、喜を竭にて候、といふ。魯智深聞て大によろこび、喫て半酣なん〱とすれば、二三十人のその中に、唱もの有又説ものあり、叉手を拍ものあり、又笑ふものありて、いよ〱興をぞ添にける。浩る折しも門外に鴉ありて、只顧哇々と啼しかば、衆人齒叩彈爪して、

赤口上レ天。白舌入レ地。

といふ句を口遊ば、魯智深耳を側だて、汝等烏亂の言語をもて、甚事をいふぞ、と問に、衆人答て、目今鴉しば〱叫候によりて、口舌あらんか、と申す事にて候、と回答すれば、種地する道

形狀、木犀の花に醉し、野の鳥に彷彿たり。頭髪の上には蛆蟲跂登り、耳の根には頭籌かゝり、只顙上らんと要せども、底ふかくして上り得ず、只聲を齊して、師父饒恕給へ〳〵、と叫びしほどに、魯智深はなほいたくいひ懲し、汝もろ〳〵の破落戸、はやく那鳥を拖上來れ、われ汝等を饒ん、と呼はるに、衆人はおそる〳〵、糞を擔ふ杓をさし伸て、張三李四に携らせ、からうじて胡蘆架の下に扶あげたれど、（魯智深二月五臺山を出て、直に東京に來る、當に三月のころなるべきに、胡蘆架あり、此時節解しがたし。）臭くして近づきがたし。魯智深呵々とうち笑ひ、兀たるこの蠢物、はやく菜園の池水を沃ぎかけて洗ひおとせ、われ汝等と說語せん、といへば、兩箇の潑皮は、やがて池水に身を浸して洗ひ了しかば、破落戸等衣服二つを脱て二人に被かへさせ、魯智深が背後に跟て、みな廨宇の裏に來れり。時に魯智深衆人に對ひ、汝等はこれ甚麽なる鳥人なれば、漫に虎鬚を捋て、われに戲弄んとはせしぞ、といふに、彼張三李四、件の火半とともに跪き、それがし等はこのほとりにありて賭博をなし、錢を討めて生活ものなるが、錢盡るときは、いく度かこの菜園の菜蔬を盜とりて、衣飯碗といたせども、この廨宇に住持せる長老も、これを禁ずる事あたはざりし、しかるに、相國寺の裏にては、いまだ師父を見たることとなし、今日かくからきめ見て、その膂力のすぐれ給ひしをしり、忽地後悔するといへども、かひなく候、とぞ陪話たりける。魯智深これを聞て、汝等われを瞞

初編　巻之八

○花和尚倒に垂柳を拔く

酸棗門の外なる、二三十人の潑皮、破落戸の中間に、兩箇の頭ありて、一箇は過街老鼠張三と呼れ、一個は青草蛇李四と名告れり。この兩人魯智深を誘邀へ、殘る潑皮どもは、いまだ走り動ずして、糞窖の邊にあり。魯智深は彼等が模樣を見て、はやく歹心ある事を猜し、大踏に歩みよりて、衆人のほとりに到るを、李四張三走りかゝり、左右の脚を楚と拿て、旣に窖の裏に搶下さんとするところを、魯智深はやく身を占りて、右の脚を丁と揚げ、李四を糞窖の裏へ踢下しければ、張三大に驚き怕れ、走り退んとしたりしを、魯智深左の脚をもて、これをも忽地踢下せば、彼二三十人の潑皮は、この光景にこゝろ臆れ、連忙しく脫去んとするを、魯智深聲をふり立て、汝等一人脫去らば、われ又一人を把て踢下し、もし二人脫去らば、二人を把て踢下さん、といふ聲耳を衝拔にぞ、衆皆呆れて目を瞪り、一塊になりて動得ず。只見れば彼李四張三は、糞窖の裏にありて、頭ばかりをさし出し、全身はすべて糞に塗れ、黄色に變りて蠢く

ともしらずして、當日廨宇の裏に到りしかば、數箇の種地道人、すべて來りて參拜し、一應の鎖鑰など交割し了て、送り來りし二人の和尙は、舊の住持の老僧とともに別を告げ、やがて寺に立かへりぬ。魯智深はひとり園圃に立出て、彼此を徘徊し、只見れば二三十人の潑皮、些の酒禮と菓盒を拏著來て、嘻々とうち笑ひ、我們は隣舍街坊に住ひするものどもに候なる、和尙今番入院したまふよしを聞及び、聊慶を申さんため推參いたし候、と丁寧に舒ける程に、魯智深は計とはゆめしらず、これを接んとて、大踏に歩みより、直に糞窖のほとりに來るを、夥の潑皮ども走りかゝり、左右の脚を楚と把り、搶落さんとしたりける。畢竟潑皮ども、魯智深を輒く擲し落すや否、そは次の巻を讀得て知らん。

ともし給ふべきにこそ、といと精細に説示せば、魯智深やうやく納得して、かくのごとく出身の時あらば、われ明日彼處に退りて、菜頭となるべし、と承引しかば、禪師よろこびおぼして、當日庫司の榜文を寫させて、廨宇の内に掛させ、明日交割あるべし、と命ける。さて詰朝に到りて、智淸禪師は法座に陞りて、法帖を魯智深に遞與し給へば、魯智深これを受とりて、禪師に辭別し、包裹を脊負ひ、戒刀と禪杖を携つゝ、兩箇の僧人に送られて、酸棗門外なる廨宇に入院せり。こゝに又彼菜園の左近に、二三十人の賭博、方を成ざる破落戸、潑皮ありて、つねに菜園の菜蔬を偸とりて、擅に動止しが、今廨宇の門上に新しき榜文を掛わたし、

大相國寺仰委。管二菜園一僧人魯智深。前來住持。自二明日一始掌管。竝不レ許二閒雜人等入レ園攪擾一。

と寫たりければ潑皮どもこれを見て、衆の破落戸を呼集會へ、今大相國寺より、魯智深といふ僧人を差して、菜園を管るとなり、彼僧が新に來れる時に于て、一鬧さわがせずは、永く我們を怕れ從ふまじ、といふ。その時一人すゝみ出て、われに一つの道理あり、彼和尚いまだ我們を認らざるこそ幸なれ、彼が入院を賀と號して、糞窖の邊に誘引ひ、忽地踢落して小耍んはいかに、といへば、衆皆聞て、妙計なり、と稱讃し、商量既に定りける。魯智深はかゝる事

大相國寺 魯智深 菜頭となる

十擔の菜蔬を納るに于ては、その餘は汝が私用に屬すべし、と命すれば、魯智深うけ給はり、それがし眞長老の命によりて大刹に投し事は、僅に菜園を管らんとの爲にはあらず、都寺監寺ともならんとてまゐれり、と申せば、首座のいふやう、師兄汝今新に來りて些の功勞もなきに、いかで都寺となし給ふべき、菜園を管るもこれ又大職事なりかし、といふを、魯智深とにかく承引ず、時に知客のいふやう、師兄わがいふところを聞給へ、凡僧門中職事の人員、おの〳〵頭項あり、愚僧がごとき知客を做ものは、只往來の客官僧衆を管待ことを理會め、又維那、侍者、書記、首坐のごときは、これ淸職にして、容易做めがたし、又都寺、監寺、提點、院主なんどの職は、常住財物を掌管るをもて、古老のものにあらざれば做ず、汝纔に方丈に到る、なでふ上等職事を授らるべき、なほこの外には、藏を管るものを藏主と呼び、殿を管るものを殿主と呼び、閣を管ものを閣主と呼び、化緣に管る者を化主と呼び、浴室を管るものを浴主と呼ぶ、すべてこれ事を主るの人員にして中等の職事なり、又この外に塔を管るものを塔頭、飯を管ものを飯頭、茶を管ものを茶頭、菜園を管ものを菜頭、東厠を管ものを淨頭（說文に、厠は溷なりとあり ゆゑに淨頭といふ。）と呼ぶ、これは是事に頭たる人員にして末等の職事なり、縱ば師兄の如き、今年菜園を管了ば、來年は塔頭とし、その次の年は浴主とし、又その次の年は監寺とも都寺

その時智清禪師は、許多の職事僧を方丈に會合て宣ひけるは、彼僧人は、元來經略府の軍官なりしが、人を打殺すによりて、落髪して僧と成るといへども、五臺山を鬧する事兩度に及び、彼山に住がたきをもて、わが寺に送り來したるを、もしこのまゝに留おきなば、彼かならず清規を亂るべし、しかれども師兄眞長老の托み聞え給ふものを、爭んは後めたし、●この事いかゞしてよからん、と宣はすれば、知客のいふやう、それがし等彼僧人を見るに、全く出家の模様にあらず、縱眞長老の托み來し給ふものなりとも、いかで住おき給ふべき、といふ。時に都寺のいふやう、それがし尋思いたすに、酸棗門の外なる退居廨宇は、菜園を管をもて職といたすなれど、時常軍健們、或は門外の破落戸等が來りて、馬を走せ羊を牽き、囉唣ことをなすものから、一人の老僧彼處にありて住持するが故に、これを禁ずる事かなはず、却て彼等に侮らる、今魯智深を彼廨宇に住持させ給はゞ、破落戸等も怕れ伏して、以來囉唣き事あるべからず、と申すにぞ、長老はさらなり、僧衆みな宜なりとうけ引て、やがて侍者の僧をもて、魯智深を呼出し、智清禪師魯智深に命せけるは、わが師兄眞大師の薦將にて、汝たま〳〵ここに來りし事なれば、すなはち職事僧の員に加るところなり、わがこの寺の大菜園は、酸棗門の外、嶽廟の間壁にあり、汝今より彼處にゆきて住持管領せよ、但每日に種地道人をもて、

人出迎へて知客にかくと通ずれば、知客の僧立出て魯智深を見るに、背には一つの包裹を負ひ、腰に一口の戒刀を跨へ、鐵の禪杖を引提て停立る形狀、いと莽なる胖和尚なりしかば、こゝろに五分の懼を生し、師兄は那里より來給ひし、と問に、魯智深は、包裹と禪杖をかたはらにうちおろし、愚僧事は、五臺山より來れるものにして、本師眞長老の書簡を將來れり、このよし智清禪師に稟させ給へかし、といへば、知客の僧やがて方丈に伴ひ、且くこゝにて待給へ、というて退出しが、又立かへりていふやう、師兄目今禪師の出させ給ふに、などて戒刀をも解去らず、かの七條坐具信香をもとり出して、禪師の立出給ふとき、禮拜の准備をもし給はざる、といへば、魯智深聞て、汝さおもひ候はゞ、はやくしらせ給はざりし、といひつゝ、戒刀を解て七條坐具などをとり出す間に、智清禪師立出給へば、知客の僧すなはち魯智深が事を演説す。その時魯智深は、眞長老の書簡をとり出して、禪師に獻り、香を燒て禮拜せり。智清禪師は書簡を拆開きて見給ふに、魯智深が僧人となりし緣由を審にかき寫し、この僧後にはかならず佛果を得べし、偏に憐愍を垂給はるべし、とありしかば、禪師讀をはりて宣ふやう、久しく眞長老の消息なかりしに、今その恙なきをしりて歡ぶに堪たり、汝まづ僧堂にゆきて齋を喫べ候へ、と宣ひて、智深を彼處に伴はせ給へば、魯智深は行童に償れ、僧堂に赴て歇みける。

火を插ば、折しも風緊して、大廈高楼一時に燃上り、刮々雜々と鳴わたりて、火氣忽地天に衝き、見る〳〵灰燼となりてうせにけり。かくて兩人は、石橋のほとりに退出て、その燒落るを見をはり、二人もろともに路をゆくこと一夜にして、やゝ明はなれんとするころ、家鷄の聲ちかく聞えて、一つの村に到しかば、やがて一軒の酒屋に入りて酒をのみ、魯智深は史進に對て、汝は今より那里を投てゆき給ふぞ、と問ふに、史進答て、われはふたゝび少華山に立かへりて、朱武等三人を托み、しばし艱難を脫るべく思ふなり、といふ。魯智深聞て、しからば汝華州に到著し給はゞ、かならず書簡をよせて、安否をしらせ給へ、など相語つゝ、遂に酒店をたち出で、又ゆく事七八里にして、こゝに一つの三岔路口あり。智深九紋龍を見かへりて、史大郎この處にて手をわかつべし、汝華州にゆき給はゞ、南の路に赴き給へ、われは東京へゆくなれば、東の路をこそ走べけれ、倘緣盡ずは、再會を期せん、といへば、史進がいふやう、和尚東京までは路も遙けし、みづから小心て道中恙なく到著し給へ、というて、互に餘波を惜み、遂に左右へわかれけり。さて魯智深はゆきとゆく程に、八九日を經て東京に到著し、大相國寺に赴くに、千門萬戶、三市六街、人物の風流、衣服の京樣、すべて目を驚すばかりなるに、彼大相國寺の奇麗壯觀、五臺山にも勝りける。かくて魯智深は知客寮のかたへゆきて呼門するに、道

忙き、刀を拖て逃ゆくを、史進は逃さじと赶かけつゝ、一條の朴刀、背の上に撲地と響ば、道人が首地上に落て、軀も倒れて血に塗る。憐べし崔道成丘小乙、化して南柯の一夢となりつ。正是從前過事を作ときは、無幸一齊來るとは、今この二人がうへにぞありける。

○魯智深瓦罐寺を火燒く

かくて魯智深史進の兩人は、寺内にすゝみ入りて、積香厨の後面にゆきて見れば、彼老僧等は、前に魯智深が輸て逃去しを見て、わが身も崔道成、丘小乙に殺されんとや思ひけん、みな首を縊て死たりしかば、魯智深史進は、やがて包裹を索るに、なほ就裏にてありし程に、魯智深はこれをとりて舊のごとく背負ひ、角門の裏に入りて、彼擄れ來りし女子を索るに、これも井に投て死にけり。この外すべて寺内には一箇の人もなく、小屋の裏には彼惡僧道人が貯祿し、衣服金銀あり、又厨房には酒と肉とあるを見て、兩人はまづ飽までこれを喫ひをはり、金錢は國の寶なるを、撇おくべきにあらず、とて、魯智深これを拾收て、史進にもわかち與へ、梁園好といへども、是久戀の家にあらず、此敗落寺をこのまゝになしおかば、後又盜賊の棲とならん、いでや燒はらひて旅客の殃を斷んには、とて、竈の下を撥開て火把に火をうつし、此首彼首に

道ならずとは思へども、富る旅人もがなと張しに、はからずも哥々に環會ぬるうれしさよ、とて、わが上すべて物がたれば、魯智深も、只今瓦罐寺にて惡僧等と戰ひし緣由を語り出れば、史進聞て、しからばわれ哥々ともろともに彼處にゆきて、包裹をとり復すべし、といひて、まづ乾たる肉と燒餅とをとり出して、魯智深に喫せ、わが身もこれを喫ひつ、二人打つれだちて瓦罐寺へ立ちかへるに、崔道成丘小乙は、なほ橋の上に歇ひ居たりしかば、魯智深は、史進を樹陰にかくし置き、鐵の禪杖を引提てすゝみ出で、われ前には饑疲れて、戰もこゝろに任せざりき、今ははやゆるしがたし、いで〳〵首を受とるべし、と呼はれば、生鐵佛大に怒り、汝前にもこりずまの、身の程しらぬ禿驢かな、と罵りて、朴刀を引歛め、橋を東へ走せ下る。魯智深は、一つには史進を得、二つには肚裏充滿して、精神日來に超たれば、虎のごとく吼り狼のごとく前み、戰いまだ八九合に及ざるに、崔道成漸く力怯み、只走路を討る外なし。飛天夜叉丘小乙は、道成が輸いろになりしを見て、朴刀を閃かし、協助せんと走り來るを、九紋龍忽地樹陰より跳り出で、汝等走ることなかれ、と呼り、刀を揮て丘小乙を遮り住め、面もふらず戰へば、魯智深ますく力を得て、一聲吼りて鐵の禪杖、生鐵佛が肩のあたりに閃くと見えし、生鐵佛崔道成は、橋の下へ打仆され、筋骨碎て死たりける。丘道人この光景を見て大に慌

魯智深も大に怒り、さらば手なみの程を認せんぞ、と罵りて、禪杖を輪起し、既に打んと走りかゝるを、彼漢聲をかけ、和尙の聲音おぼえあり、名告れ〳〵、と叫べども、魯智深敢耳にもかけず、われ汝と三百合戰ひて、名告るべし、と欺ば、彼漢も怒罵り、逆すゝみて戰ひしが、その武藝の尋常ならざるを見て、こゝろの中暗に喝采、僅に四打五打にして又いふやう、和尙等一等て、われ今いふべき事あり、と叫ぶにぞ、互に圈子の外へ退きて、魯智深まづその故を問ば、彼漢いふやう、われはじめより汝の聲音に聞熟たるところあり、その名を聞まほし、といへば、魯智深すなはち姓名を名告ける。彼漢これを聞て、忽地朴刀を傍に投撤て、いかに史進を認給はずや、といへば、智深もやうやく心づきて、原來史大郎にて候歟、いと闇に見たがへたり、とて、共に恙なき再會をよろこび聞え、魯智深はわが身の一伍一什を說をはりて、又史進がこゝにある故を問ば、史進がいふやう、それがしかの日、酒樓を出て哥々と別れ、次の日鄭屠を打殺して逃去給ひし事を聞つるが、われも又彼酒樓にて金老父子に銀子をとらせたる事を、訴へし人ありと見えて、做公人等史進をも捕んとするよし風聞あり、これによりて、はやく渭州を立出て延州に赴き、師父王進を索しかど、終に尋あはず、遂に北京に到りて、些の月日をおくる間に、盤纏もやうやく盡たれば、いかにともせんすべなく、この處まで來りつゝ、

禪杖を拖て走り出るを、二人は逐さじ、と呼はりて、山門の外まで、赶來れば、魯智深は又把てかへし、且戰ひ且走るに、彼二人は石橋の上まで赶來り、欄干に身を倚て、敢遠くも赶かけず。魯智深は息もつぎあへず、走る事二里ばかりにして、一つの林原にすゝみ入けるが、すべてこれ赤松の林にして、遠く望ば判官の鬚のごとく、近く見れば閻魔の髮に似たり。誰か鮮血を梢に洒ぎ、誰か朱砂を枝に鋪たるとおほうばかりにて、いと猛惡林子なり。この時魯智深思ふやう、われ既に饑疲て、彼二人に敵しがたし、しかれども包裹を監齋使者の面前に捨おきたれば、今身に帶し盤纒もなし、これを把らではいかにせん、など、とさまかうさま思ふ折しも、忽地一人の大漢木陰より立出て、探頭探腦唾吐して木がくれしかば、魯智深はやく、これ猜し、彼鳥人は、剪徑する强人なるべきが、われにものなき故に、唾吐して退きけん、よし〳〵渠奴を殺して衣裳を剝とり、酒に當て餓をわすれ、彼和尙道人と戰を決すべし、とひとりごち、なほ林の裏に前み入るに、松の枝掩かさなり、いと闇して日影も見えず。時に魯智深聲を高くし、目今われを張望たる鳥人、はやく來りて勝負を決せよ、と呼れば、彼大漢ふたゝびあらはれ出で、あら晦氣し、われ汝は出家人なるによりて、免しおきつるを、みづから願ひて死んとやする、いで望にまかせ得さすべし、といきまきつゝ、朴刀を引提て、脚踏ならし立むかへば、

深これを聞て、原來彼老僧等が、われに戲弄やしつる、と疑惑ひ、ふたゝび香積厨中に立かへりて見るに、老僧等は既に粥を喫了れり。魯智深は老僧に對て眼を瞋し、彼和尚が說ところをもて、件々これを責問ば、老僧等言を齊して、師兄彼惡僧に誑れ給へり、我們は僅に粥をすゝり、彼は飽まで酒を喫肉を啖ふ、これをもてその淸と濁れるをしり給へ、又言を巧にして師兄を寬しは、御身は鐵の禪杖を携へ、彼は手ぢかく器械なかりけるによりてなるべし、といへば、魯智深げにもと心づきて、ふたゝび方丈の後面へ立歸るに、はや脚門を鎖したれば、大に怒りてたゞ一脚に撲地と踢ひらき、驀直に搶て入る。彼生鐵佛崔道成は、智深が再び來るを見て、朴刀を閃し、槐樹の下より跳出で、咄と嚀て搶んとするを、魯智深一聲大に吼り、禪杖を輪起して、崔道成と戰ふこと、十四五合に及びしとき、道成やうやく力怯み、架隔遮攔逃も去べき氣色なれば、丘道人背後より前み來つ、朴刀を拔歛て、大踏に步みよるを、魯智深は背後に脚步響するを聞けども、見かへるに遑なく、既にその人影ちかづくを見て、暗算的人あり、と叫ぶ、その聲雷のごとくなれば、崔道成大に慌忙て、おもはず圈子の外へ跳り出たり。魯智深はその隙に、左右を把て倂せ戰ひ、又十合の上に及びしが、一つには餓て氣力衰へ、二つには許多の路を走り來て手足疲れ、二人の生力に輙く勝がたくおぼえしかば、些の破綻を賣せ、

きするて、盃盤なんど處せきまでおきならべ、一人の胖和尚、眉は漆もて刷るがごとく、臉は墨裝に似て、一身の肉すべて肱膊だち、胸脯に赤き毛生出たる、黒き肚皮を露し、その邊箱にはいとしわかき一人の女子ぞ居れりける。さて彼道人は竹籃と酒瓶をかきおろし、これを卓子の上に把のほせんとするときに、魯智深搶と前み到れば、彼三人うち驚きて、師兄は那里より來給ひし、と問に、魯智深は禪杖を右手に搶たて、汝等などてこの寺の僧衆を赶出し、かく穢れたる行ひをいたすぞ、と罵れば、彼和尚のいふやう、師兄まづことに歇ひて、わがいふところを聞給へ、元この寺は、田庄もおほく、僧衆も夥ありしかど、住持の長老惰弱にして、幾許の老和尚を、治下する事等閑なりし程に、大小の僧人擅に酒を喫み、女を養ひ、遂に長老をも排告出し、かく大破の寺院とはなしつ、愚僧は新にことに來りて、さしも名だたる大刹の、蹟なくなりゆかんいとほしさに、この道人とこゝろを合せ、山門をも修復し、殿宇をも修葺ん事を要のみ、しかるに今日前村なる王有金王氏の金もちなりが女兒參詣せり、この婦人の父親は、本寺の檀越なれども、身の幸なくて家私消乏へ、丈夫も又長き病氣にうち臥して、便なきまゝに、時常寺に詣て米を借る、愚僧もその舊き施主檀越なるによりて、これを爭ず、些の酒をとりよせて待にて候、彼老畜生等がいふところを、實となし給ひそ、と言語を巧にして誑ば、魯智

地眼を睜り、この老和尚道理なし、前には一粒の米もなしといひつるが、こゝに一鍋の粥あるはなぞ、出家の身をもて人を誂こそこゝろ得ね、といきまきて、竈の下に破漆たる春檯の有を把て、手ばやく粥をすくはんとするを、老僧等はよろめき〳〵、喫せじと住るを、拂除つゝ、手を鍋にさし入れて、三口五口喫ふ間に、老僧等はやうやく鍋をおしかくし、我們實にこの三日飯を喫ず、けふやゝ些の抄化して、この粟を得たりしに、これを御身に喫れては、何をもて我們が、けふの命を繋べき、いと情なし、とうらみしかば、魯智深これを聞て、ふたゝび粥を喫んともせず、外面に立出て、手を洗ひ居たる折しも、只見れば一箇の道人、かたへには竹籃に魚尾と肉とを納て、上に荷葉を托著せ、かたへには一瓶の酒を擔て、これをも荷葉をもて蓋かくし、これを一擔として、扛來れるが、頭には皁巾を戴き、身には布衫を穿て、腰に雜色の縧を繫び、脚に一雙の麻鞋を穿しめ、口に嘲歌をうたひつゝ、方丈のかたへゆくを聞ば、

　　儞在東時我在西　　儞無男子我無妻
　　我無妻時猶閒可　　儞無夫時好孤恓

とうたひければ、是かならず飛天夜叉丘小乙なるべく思ひ、禪杖を引提て、その踪を跟ゆくに、道人はゆめしらずして、方丈の後面なる、牆の裏に到しが、豫て槐樹の下に一つの卓子をか

深これを聞て、あら心も得ぬ、かゝる大刹に齋米なきことあらんや、といへば、老僧かさねて、わがこの寺は原大去處なりしかど、只十方常住によりて、雲遊の和尚一箇の道人（鳥髮の僧を道人といふ、俗にして出家の所爲をなすものなり、道士と混ずべからず。）を伴ひてこゝに來り、僧衆を赶出して園庄をも沽却ひ、一切のもの悉く押領して、みづから住持し候なる、我們は年老て、走動もこゝろにまかせざる故に、已ことを得ずして殘り留候へども、露命を繋便もなく、饑て死するを俟つにこそ、と語るもこゝろほそげなり。智深はそのいふところを聞て、もしかゝる事あらば、などて官府へは訴聞えざるぞ、といへば、老僧の云やう、このところは山寺にして衙門も遠く、彼和尚道人は力強くして、人を殺す事戲のごとくなれば、官軍もこれを禁じ給ひえず候、とものがたれば、魯智深なほ疑ひて、彼二人が名は何といふぞ、と問に、老僧答て、彼和尚の姓は崔氏にして、法名は道成綽號は生鐵佛、道人の姓は丘氏にして排行は小乙、綽號は飛天夜叉と名告れり、この二人が爲ところ、人を殺し火を放つ、强盜と是一般、只身に三衣を穿て、假に出家人の打扮をなすのみ、見に方丈の後面に栖ひ候、といひも果ざるに、一陣の飯の香吹來りて、魯智深が鼻孔に徹しかば、やがて片邊を見かへるに、一つの土竈に草蓋をしたる裏より、湯氣朧々と立のぼりし程に、彼草蓋を揭起つゝこれを見れば、只今烹おろしたりとおほしき、一鍋の粟米粥なり。魯智深忽

ありともおぼえず。かゝる大刹の、などてかくまでは敗落しぞ、とおもひつゝ、やがて方丈のかたに赴くに、滿地は燕の糞堆して、天井は蜘蛛の網に纏へり。さりともとおぼして只顧呼門しつれども、只松風の音のみして、誰そと答るものもなし。もし彼處に人やあるとて、香積厨中に繞出れば、人はさらなり、鍋も釜もなくて、竈頭も壞損たれば、いかにともせんすべなく、包裹を解下して、監齋使者厨にあるところの木像なり。の面前にさしおき、禪杖を提へて厨房の後面に尋ゆくに、こゝに一軒の小屋ありて、裡には幾箇の老僧團坐したりけるが、みな面黃み肌痩て、この世の人とも見えず。魯智深は搶とすゝみ入て聲をふり立て、この僧人ばら、こゝにありながら、われいくたびか呼門せしに、なぞや回答はせざる、といへば、彼老僧手を搖して、聲高し、といふを、魯智深は會釋もせず、われは是過往の僧人なるが、些の飯を討て喫まほしさに來つるものなり、何の氣づかはしき事やある、といふ。老僧聞て、我們とても飯の肚に滿る事なきものを、いかに討給ふとも、進らすべきもの候はず、といふ。智深又いふやう、われは五臺山より來れる僧人なり、縱半碗の粥、一塊の飯なりともくるしからず、まげて些を與へ給へかし、と討れば、老僧のいふやう、御身は活佛の靈山より來給ひし和尙ならば、討給はずとも齋を安排すべきものを、我們も饑に臨こと既に三日に及べるをいかにせん、といふ。魯智

に尋行きて、齋をも投め、とひとりごち、彼鈴鐸を郷導にして、おほつかなくもたどりゆきけり。

○九紋龍赤松林に剪逕す

當時魯智深は、數箇の山坂を走り過て、一つの松林ある處に到しが、それをも行ぬけて、いまだ半里三町ならず、頭を擡げて見るときに、一つの敗落寺院ありけり。彼風に吹れて響しは、この山門の鈴鐸なりしよ、とて瞻あぐれば、門上に舊朱紅の牌額ありて、瓦罐之寺といふ四つの金字を寫したり。又ゆくこと四五十歩にして、一條の石橋をわたり、やゝ寺内にすゝみ入りて見るに、既に年代を經たる大刹とは見ゆめれど、みな朽損じて四壁完からず、鐘樓は倒崩殿宇は崩摧き、山門は盡く蒼苔を長じ、經堂はすべて碧蘚を生ず。釋迦佛は角ぐむ蘆に膝を穿たれて、雪山に在せし時もおもひ出られ、觀世音は荊棘に身を纏れて、香山を守給ひし日に似たり。諸天は壞損じて、懐中に烏鵲巣を營み、帝釋は斜に欹て、口内に蜘蛛網をむすび、方丈は凄涼く、廊下は寂寞し。頭なき羅漢は、この法身に也災殃をや受給ひけん、背を折く金剛は神通ありともいかに施し展ん。香積厨中には、兎穴を藏し、龍華臺上には、狐蹤を印す。魯智深はこの光景を見繞りて、知客寮に到しが、門も壞れて礎のみを留め、四圍の壁おちて人

銀酒器は紛失して、半は微塵に碎たれば、衆皆こはいかにとうち驚き、周通まづその縛をときて故を問に、二人の小嘍囉は、しかぐ〳〵のよしを物がたる。周通聞て、この和尙元好人にあらず、彼那里より逃れ去つらん、とて、みな團々と踪跡を尋て、後の山にゆきて見れば、正しくこの處より、滾下たりとおぼしくして、一帶の草木左右に偃わかれてありしかば、周通ますく〳〵呆れ果て、この惡僧却て老賊にてありけるぞや、かゝる嶮岨を滾下ん事、尋常のものの及ぶべきにあらず、というて、舌を卷て驚嘆ずれば、李忠がいふやう、我們もし彼を索出して事を正さば、故き好を破べし、わが面に耷て恕さんや、といへば、周通又いふやう、縱彼を索とも、那里を指て赶ゆくべき、よしや捉へ得たりとも、彼に勝事おもひもよらず、只このまゝに捨おくこそ、後に環會たるとき、却て後やすからめ、というて、奪ひ來りし財物を、三分にわかちて、一分は小嘍囉等にとらせ、只顧魯智深を仕おきし事を後悔せり。かくて魯智深は、桃花山を離れて、朝まだきより路を走り、旣に午後になりしかど、いまだ市井に出ず、約五七十里も來つらんと思ふに、甚饑て物ほしうなりにければ、東を望み西を見かへり、さて那里にゆかば食を乞ふ家あらんとて、しばし停立たる折しも、遥に鐸鈴の聲聞えしかば、原來このほとりに寺院やある、もししからずは、宮觀の簷前にかけし鈴鐸の、風のまにく〳〵響くにこそ、さらば彼處

われ今彼等を一驚おどろかさばや、と思ひしかば、洒酒に侍りし兩人の小嘍囉を、忽地撻と踢たふしつゝ、搭膊解て柱にいたく細り著け、口には些の麻核桃を塞せ、まづ包裹を脊負ひ、戒刀を跨へ、眞長老の書簡と衣包を項にかけ、禪杖を把のべて、卓の上に飾おきたる金銀酒器なんどを、殘りなく衝碎きて微塵になし、搶と後の山に走り出て見れば、すべて嶮岨にして脫れ出べきやうもなければ、もし前の山より走り去らば、かならず彼黨に行あふべし、只向に見おきたる徑をゆきて、滾下んと思案しつ、まづ戒刀と包裹を禪杖に拴つけて丢落し、そののち一滾に骨碌骨碌と滾び墮れば、山の脚邊に滾到りて、些も傷損ることなし。やがて跳起て包裹と戒刀を舊のごとくに携へ、禪杖を衝ならしつゝ、東京を投て走りける。さて又李忠周通は、山下に走り下りて、彼旅人等を遮り住め、汝等命をしくは買路錢を留せ、と呼れば、小嘍囉ども一齊に喊を吶著る。彼旅人のうちに、猛き漢子ありて大に怒り、朴刀を撚りて李忠に搶てかゝり、一來一往一回一去、鬪十餘合におよびて勝負をわかたず。時に周通鎗を拏てすゝみ來れば、小嘍囉もろともに、面もふらず砍てまはるに、夥の旅人途をうしなひ、四落八落に逃ゆけば、彼一人も拄る事かなはず、刀を拖て走り去りしかば、李忠周通は車の財物を奪ひとらせ、凱歌を和著て慢々地と山寨に立かへり、只見れば殘じおきたる二人の小嘍囉は、一塊に細つけられ、金

李忠等を懲
魯智深桃花山を滚下

にせし金子段匹も齎し來れり、汝がこゝろいかに、といへば、周通大に怕羞て、既に哥々の一言をうけ給はりぬ、われこののち彼家に出入いたすまじ、といふ。（周通は、是却て眞の大丈夫）魯智深聞て、劉太公もこゝにあり、それ丈夫の事を做に、飜悔あるべからず、といへば、周通箭を折て誓をなすにぞ、劉太公大に喜び、彼金子段匹を還し納れ、拜しわかれて莊院にぞかへりける。さる程に李忠周通は、牛を推馬を宰り、魯智深を管待こと數日にして、一日償して山前山後の風景を遊覽さするに、巖は四方に峨々と聳え、只一條の徑あれども、澗を隔て草生亂れ、寔に嶮岨の山陣なり。魯智深はこゝに逗留して既に日を累し程に、遂に別を告て東京へ赴んといふ。李忠、周通これを聞て、なほ叮嚀に住れども、とても住る氣色なければ、次の日兩頭領は酒宴を設け、金銀酒器なんどを、卓の上におきならべて、既に盃を勸んとする折しもあれ、小嘍囉走り來て、目今山下に二輛の車を拖て、十餘人の旅客來れり、と注進す、李忠、周通聞もあへず、衆多の小嘍囉を呼び集め、魯智深に對ていふやう、哥々自在に酒を喫ておはせよ、我們彼財物を奪ひ來て、餞いたすべし、といひつゝ、只二人の小嘍囉を殘しおき、山下を望て走去ければ、魯智深こゝろにおもふやう、彼等稟性慳吝ふかく、（李忠が物をしみのふかき事は、魯智深渭州の酒樓にて見やぶりおきつ。）許多の金錢を貯ながら、なほ人に施す事を惜み、新に人を苦めて、おのれが義理をつくろはんとす、

ふに、李忠は容易うけ引て、この事少しも妨なし、まづ哥々を山中に伴ふべし、劉太公も來給へ、とて、いそがしたつれば、劉太公大によろこび、莊客を呼びて轎子を准備させ、魯智深が行李禪杖などを扛擔せて、智深を轎子に乘せ、その身も小やかなる轎にうち乘れば、李忠は馬にうち跨り、みなもろともに打つれて、桃花山に上りゆけば、その夜も既に明にけり。かくて魯智深劉太公は、寨の前にて轎子を下り、儐れて聚義廳に到れり。そのとき李忠は周通を呼出して、魯智深に相見するに、周通は和尚を見て、こゝろの中ふかく憤り、哥々わが爲に仇を報んとはせずして、却て渠奴を誘引給ひしは、なほからきめ見せんとての事歟、われ當初彼が手なみをしるならば、いかで虚々とその拳頭を喫べきや、といふに、李忠うち笑て、この和尚はわれ豫て汝に物がたりしたる、只三拳に鎭關西を打殺せし、魯提轄なり、といへば、周通ふたゝび大に驚き、身を飜して拜伏し、それがし眼ありながら豪傑をしらず、恕給へゆるし給へ、と陪しかば、魯智深も禮義を還し、向には拳を用ひて無禮をなしぬ、周通よく聞給へ、この劉太公には只一人の女兒あり、これを旦暮のたのしみとして、老を養ひ終を送り、なからん後には、その手より香花を受べく思ひてしを、汝強て娶るときは、彼が念願徒事となりて、その家斷滅に及ぶべし、天下の美女彼が女兒のみには限らず、汝この親事を休て、別に婦人を選給へ、原定

その次に劉太公を坐らせ、さて渭洲にて、鎮關西を打殺せし首より、五臺山を鬧せて、此たび東京の相國寺へ赴く尾まで、わがうへすべておちもなく物がたり、汝は又いかなる故にて、かかる生活をなすぞ、といへば、李忠答て、それがしかの日、酒樓を出て史進にもわかれ、次の日に到て聞ば、哥々は鄭屠を打殺し給ひしと風聞するによりて、速に史進を尋て商議すべく思ひしが、做公人等それがしをも捉んとするよしなれば、遂に史進を尋るに及ずして渭州をたち去き、只顧に路を走せ、日を經て桃花山の麓を過りしに、向に山中に寨を扎たる、小覇王周通といふもの、小嘍囉を引て路を遮り、それがしと鋒先をあらそひけるに、周通かなはざれば、やがて和睦し、それがしを山中に住めて寨主とし、彼は第二の交椅に坐てみづから弟と稱ず、それがしも投てゆくべきかたもなきまゝに、終に落草して今日に到れり、と物がたれば、魯智深聞て、しからば汝周通に説て、今番の親事を休させ給へ、この劉太公は只一人の女兒ありて、老後の便とするなるを、強て娶去るときは、父子の情願をむなしうす、是いたましき事にあらずや、といふ。劉太公はこれらの物がたりを聞て、はじめて心を易くし、俄頃に酒食を安排して、魯智深李忠等を管待しけり。さて劉太公は、原定にせし金子と、段匹をとり出せば、魯智深ふたゝび李忠に對ひ、この件々は汝が身上に係れり、汝よろしく計ひ候へ、とい

と報たりける。この時魯智深は、なほ酒を喫て居たりしが、この報を聞といへども、敢さわぐ氣色もなく、まづ直裰を脱すてて、戒刀を跨へ、禪杖を提て、大踏に歩み出で、打麥場のほとりに到り、只見れば桃花山第一の頭領は、馬を莊前に走せ著け、長き鎗を挺著て、目を睜聲を高くし、彼禿驢はいづこにある、出て勝負を決せよ、と呼れば、魯智深聞て大に怒り、この鳥人舌長し、みづから來りて死を求るか、と罵りつゝ禪杖を輪起して、彼頭領に打てかゝるを、鎗にて丁と逼住め、和尚且く戰をやめよ、汝が聲音わが耳におぼえあり、名字をしらせ候へかし、といへば、魯智深答て、われは是老种經略相公帳前の提轄魯達なり、今出家して和尚となり、魯智深と呼るゝぞ、といひも果ざるに、彼頭領は鎗を投擲て、馬より飛下りて拜伏し、哥々わかれてより恙なくおはせしこそうれしけれ、いかに李忠を見わすれ給ひしか、といふに、魯智深は火把の光にて看一看れば、往に江湖上、棒を使ひ藥を賣し教頭、打虎將李忠なりければ、こはいかに、とうち驚き、互に別後の恙なきをよろこび聞ゆるにぞ、劉太公はこの光景を見て大におどろき、原來和尚も一路なりけり、と怕まどひぬ。そのとき魯智深はふたゝび直裰を穿て李忠を廳上に伴ひ、劉太公を呼ていふやう、太公彼を怕れ給ひそ、彼はわが兄弟なり、といへば、劉太公いよいよ駭怕れ、頭を低て回答だにえせず。魯智深はわが次に李忠を坐らせ、

初編 卷之七

○花和尚大に桃花村を鬧す

さても桃花山第一の頭領は、今夜第二の頭領が、劉太公の家へ入贅するをもて、豫て人を彼處に遣して、その光景を探り聞せしに、その人忽地小嘍囉等とともに走り歸り、あら苦々し、さて何とせん、と叫びしかば、第一の頭領ふかく怪み、こは何事ぞ、と問に、小嘍囉等は、息まきあらく仔細を物がたる折しもあれ、第二の頭領は、頭巾をも被らず、綠羅袍をも扯破られ、大わらはになりて逃來り、馬より下りもあへず、哥々われを救給へ〳〵、と叫びしほどに、一の頭領ます〳〵驚き、なほその情由を尋ぬれば、はからずも今夜彼劉太公に謀られて、兇猛和尙に打れし事、一五一什を物がたるにぞ、一の頭領大きに怒り、よし〳〵汝はまづ房に入りて保養せよ、われ立地にその和尙を殺して、仇を報ふべし、といひもをはらず、猛に馬にうち跨て、鎗を挙け走り出れば、許多の小嘍囉ども、前後左右に從ひつゝ、一齊に喊をつくりかけ、桃花村を望みて、走來れば、劉太公の莊客、喊聲を聞著け、山中の人々、數を盡して來れり、

自若として居たりける。畢竟彼大王ふたゝび來りて寇すや否や、そは次の巻を讀得てしらん。

とも何か苦しかるべき、といふ間に、はや酒肉を將來れば、魯智深よろこびてこれを喫み、

よしなきわざをして、わが一家をくるしめ給ふものかな、といふに、魯智深うち笑て、太公無禮を怪み給ひそ、まづわが衣服と直裰を把來給へ、それを被をはりて物がたりせん、といへば、劉太公は房にゆきて、魯智深が衣服を將來つ、われ當初只因緣を說て彼を勸め、心を囘し意を轉させ給ふとのみ思ひしに、却て大王を打擲し給ひしかば、定めて山にかへりて大隊を驅催し、わが一家を殺し盡すべし、こは何とせん、と悔うらむにぞ、魯智深は衣服直裰を舊のごとく穿て容を正し、太公さのみ慌給ひそ、われは是、延安府なる老种經略相公、帳前の提轄官、魯達といひしものなるが、人を打殺すによりてかく出家せり、縱かの烏人、千騎二千騎にてよせ來るとも、敢てもののかずとせず、もし疑しくは、わが禪杖を引提て見給へ、といふに、莊客ども立かゝりて、これを挈んとするに、少しも動かず。魯智深これを使ふ事、燈草を撚るがごとくなれば、劉太公只顧驚き嘆じて、いとたのもしく思ひし程に、師父こゝに逗留ありて、わが家の守護神ともなり給へかし、と懇懃に托み聞ゆれば、魯智深點頭て、われ渠奴等を殺し竭すまでは、死すともこゝをば去らじ、といふに、劉太公やゝ力を得て莊客を呼び、些の酒を將來て師父に喫せ進らせよ、しかれども多くはすゝめそ、もし醉給はゞ過ありなん、といふを、魯智深聞て、われ一分の酒を喫ば、一分の本事あり、十分の酒を喫ときは、十分の氣力あり、醉

などて老公を打ぞ、といはせもあへず、魯智深ふたゝび罵りて、いで老婆の正體を、認らせんぞ、といきまきつゝ、床のほとりに拖倒し、亂打にうつほどに、大王ます〳〵苦痛に堪ず、只人ごろし人ごろし、と叫びけり。劉太公は這早因緣を說て、彼大王を勸るよと思ひたりしに、房の裏さわがしく、人ごろし〳〵と叫ぶ聲するに驚き、忙慌しく燈燭を著て、小嘍囉等とともに走り來て見れば、彼胖和尙は、赤條々になりて、大王を騎翻にし、打も殺すべき氣色なれば、小嘍囉大にうろたへ、衆皆來りて大王を救へ〳〵、と呼れば、夥の小嘍囉、鎗を拖棒を曳き、房の裏に走來れば、魯智深は大王をなげ撤て、禪杖を綽まはし、一聲嗑て跳出たり。されど小嘍囉等はその兇猛に害怕れ、左右なくはよりもつかず。劉太公は只顧心ぐるしさに、慌忙てせんすべをしらざりしが、大王は打鬧にまぎれて、房の門を脫れ出で、莊門のほとりに走ゆきて、彼綠楊に繫おきし、馬に閃りとうち跨つゝ、一枝の柳を手折り、これを鞭として跑れども〳〵、馬は只ひとつ處を繞居て、敢て走り去らざれば、大王大に焦燥て、この畜生、なほわれを欺か、と罵りつゝ、ふたゝび見ればこはいかに、走らざるもことわりなり、心慌しまゝに韁繩をも解されば、われながら鈍ましく、連忙しくこれを扯斷り、柳の鞭にて打たて〳〵、桃花山を望て脫去ける。この時小嘍囉等もみな四落八落に逃うせしかば、劉太公は魯智深を拖住ていたくうらみ、和尙

新人の房に魯智深
小霸王を懲す

この處すなはち新人の臥房なり、といへば、大王こゝろを得て房に入らんとす。劉太公は豫て燭燈を滅おきたりしが、吉凶いかにと阽みつゝ、舊の處へ退出ければ、大王は獨房の扉を推開きて入るに、只野干玉の闇にして善悪をもわかず。さても丈人は做家なる人かな、夜もあるべきに、今宵房の裏に碗燈を點さずして、わが夫人を黒地におく事のいたましさよ、明日小嘍囉に命せて、山の寨より好油一桶を把よすべし、などひとりごちたるを、魯智深は緞帳の裏にてこれを聞き、笑ひを忍びつゝ聲をもせず。大王は慢々地とさぐりより、吾娘子よ、御身いかなれば出迎へず、いつまでか恥らひ給ふ、われ明日より御身を壓寨夫人といたすなれば、うちとけて相語給へ、やよ〳〵、といひかけて、摸來摸去、銷金の帳を提起て、まづ片手を探あて、楚と握りて裏に入り、魯智深が肚皮を上へ下へと撫まはせば、魯智深は勢に就せて彼が頭巾を無手と攫み、右の拳を捏起め、罵ること一聲、直娘賊、といひもあへず、耳の根を一連に顛子も碎るばかりに丁と撲ば、大王大に苦みて、

胳膊を繫び、一雙の牛皮靴を著て、高頭一疋の白馬にぞ騎たりける。この大王莊前に到りて馬より下りしかば、小嘍囉ども聲を齊して賀を舒ぶ。劉太公慌忙しく出迎へ、衆の莊客等は跪きて左右にあり。大王すゝみ入りて劉太公を扶起し、（もろこしの婿禮は、婿まづ女の家にゆきて婚禮し、さて日を經て後に女をたづさへてわが家にかへる也。女のかたより男の家にゆきて婚禮する事はなし。本朝にてもいにしへはかくのごとし今はしからず。）汝は是わが丈人なるに、などてかく嚴ひ候ぞ、といふに、劉太公はます〱拜伏し、それがしは大王の治下なる人戸なり、いかで些の禮義をも竭さでは候べき、まづ三盃をすゝめん、とて、管待尋常に過たれば、大王既に七八分の醉出て、かや〱とうち笑ひ、われ汝が女壻になるといへども、些の虧を負ず、汝が女兒われに匹配する事、大なる僥倖なり、といふ。この時盃のかずもかさなりしほどに、劉太公はなほ下馬盃をまゐらせん、とて、打麥場のほとりに儐すれば、大王は香花燈燭を見ていよ〱歡び、秦山の迎接甚過たり、というて、又三盃をかたぶけ、直に廳上に到りて小嘍囉を呼び、騎來りし馬を楊樹の下に繫せ、又太公に對ひて、わが夫人は今那里にありや、と問へば、劉太公答へて、小女はとにかくに怕羞て、忽卒には出來らず、なほ房内にありて大王の來給ふを待候、といふに、大王うち笑て、夫婦の間何か羞しき事あらん、さらばこなたよりゆきて見えなん、といふ。劉太公はこれらの問訊する間にも、只一心に彼和尙が因緣を說て勸るよと思ひしかば、やがて大王を引て女兒が房前に到り、

處に送り遣したり、と答ふ。しからば愚僧を新婦の房内に伴ひ給へ、といふに、劉太公こゝろを得て、房のほとりに案内しつ、莊客とともに外面にたち出て筵席を安排す。その間に、魯智深は房の裏なる一椅獨卓なんどを撥過け、戒刀を床頭に放在て、禪杖を手ぢかく引よせ、銷金したる緞帳の中にありて赤條々地に成り、床の上に跳りあがりて、今か〳〵と等候たり。かくて劉太公は、莊客に命せて前後に許多の燈燭を點させ、打麥場のほとりに一條の卓子をかきすゑ、これにも香花燈燭を建つらねて、山海の珍味、准備にまかせて裝ならべたり。既に初更も過るころ、山のほとりに鑼鳴鼓響しかば、劉太公は、これ彼人の出來るならんとおもふに、魯智深が事いと心もとなく、莊客等も手に汗を握りつゝ、莊の門外にたち出て、彼首をうち望たる折しもあれ、只見れば、遙に四五十の火把照燿て白日のごとくなるに、一簇の人馬、劉太公が莊上を投て走せ來れば、太公下知して大に莊門をひらかせ、すゝみ出て迎れば、走來ぬる許多の人數、前に遮り後に擁り、明晃々たるものは、すべてこれ器械なり。其旗鎗のたぐひには、紅線の絹布を縛著け、小嘍囉等が頭巾には、野花を插頭とし、前には紅紗の燈籠四五對をもて路を照らし、彼大王馬上花やかに打扮て、頭には撮尖乾紅凹面巾を戴き、鬢の傍には、一枝の羅帛せし像生花を插み、身には金繡の綠羅袍を穿て、腰には銷金の紅き

といへば、劉太公しばし沈吟して、彼は人を殺し財を奪ふ魔王なるに、縱三寸不亂の舌をもて說給ふとも、よも從ひ候はじ、と跕ば、魯智深含笑て、われ五臺山文殊院にありて、眞長老に隨從し、よく因緣を說事を學び得たり、便是鐵石の人なりとも、勸て意を轉さする事いと易し、今夜女兒を別室に藏しおき、われ女兒の房内に入りかはり、彼が來るときに、因緣を說示し候はん、といふに、劉太公はなほこゝろもとながりて、師父かく宣はすれど、却て毛を吹疵を求るにあらずや、といひも果ざるに、魯智深は搶と立あがり、わが性命は天に係れり、無用の言な宣ひそ、誘とく〳〵その准備をなし給へ、と薦るにぞ、劉太公大によろこび、かゝればわが家の幸福これにます事なし、寔に活佛の來迎し給ふなりけり、と信だちて、いともうれしげなりければ、莊客等これを傳へ聞てます〳〵驚き呆れける。さて劉太公は魯智深に對ひ、師父なほ飯を喫給はんや、といへば、魯智深頭を打ふりて、飯はいまだほしうもあらず、酒あらば些を將來給へ、といふ。太公聞て、あり〳〵、と回答もあへず、莊客を呼びて酒を篩せ、熟たる一隻の鵞をもて殺とす。魯智深は大盃を引うけて、一連三十餘碗の酒を喫み、鵞を拖裂拖裂これをも殘らず喫盡し、莊客に命せて包裹をとりよせ、まづこれを房裏に安放せ、禪杖と戒刀を引提て劉太公にうち對ひ、誘女兒を躲し給へ、といへば、太公聞て、既に女兒をば他

愁るところは、わが家今夜小女に夫を招き候によりて、この煩惱をなすにこそ、といふを、魯智深聞もをはらず大に笑ひ、男大なれば婚し、女大なれば嫁す、これは是人倫の大事、五常の禮なり、などて煩惱ずる事やある、といふ。劉太公かさねて、師父は緣故をしり給はぬによりて、かく宣はすれど、この親事願はしきにあらず、いま已ことを得ざるなり、といへば、魯智深ます〳〵うち笑ひ、太公いかなればかく痴なる、もし願しからぬ事ならば、この婚緣を締には及べからず、といふ。劉太公又いふやう、愚老は只一人の女兒ありて、年既に十九歲になりぬ、しかるに彼處に一座の山ありて、桃花山と呼びつ、近來山中に許多の盜賊來り栖て、五七百人をあつめ、その頭たる大王二人ありて、常に家を打ち、村を劫すといへども、この青州の官軍も捕給ふ事かなはず、よりて彼盜賊この村をも橫行し、いつの程にかわが小女を張望けん、二十兩の金子と、一疋の紅錦をもて定禮とし、今夜吉日なれば入贅して、わが莊上に來らんとなり、しかはあれど、彼は黨も多く、勢も大なれば、これを爭ひ阻がたし、ここをもてわが顏色も生平ならず、この煩惱をなすにこそ、いかで一人の師父を爭候べき、と一五一什をものがたれば、魯智深情由を聞て、原來如此々々の事にて候ひつるかな、太公こゝろ易くおもひ給へ、愚僧彼大王に說示して、心を回し、意を轉させ、この婚姻を止さすべし、

又師父の俗姓法名は何とか告給ふ、といふに、魯智深がいふやう、わが師、智眞長老、諱の一字を賜り、又わが俗姓は魯氏なるが故に、魯智深と呼れ候、といふ。時に劉太公のいふやう、些の晩飯を進らすべきに、葷もの腥ものなどは喫給はじ、といふを、魯智深聞もあへず、われはすべて肉をも酒をも厭ず、牛肉狗肉、あるにまかせて喫候、といへば、劉太公かや〳〵とうち笑ひ、莊客を呼て酒食をまゐらせよ、と命するに、且く有て莊客は卓子の上に、牛肉と三四様の菜蔬をもりならべて提出ぬ。魯智深これを見て、肚包腰包を解ゆるべ、筯をあげてうちくらふ間に、莊客は又一壺の酒を將來れり。魯智深は且啖ひ、且喫ほどに、莊客は酒を篩あへず、又飯をもりあへず。劉太公は對座してこれを見つゝ呆れ果て、主從顏を見合せけり。さて晩飯もをはりしかば、劉太公は魯智深に對ひ、師父は外面なる耳房中に歇給へ、もし夜間に熱鬧しき事ありとも、かならず出て見給ふべからず、といふ。魯智深これを聞て、命うけ給はりぬ、今夜何事の候にや、と問に、劉太公詳にも告ず、出家の間管給ふ事にはあらず候、といふにぞ、魯智深いよ〳〵怪みて、われ太公を見るに、顏の色も快よからず、もし愚僧が宿かりしを厭給ふにや、明日房錢は算還いたすべきなり、といへば、劉太公のいふやう、わが家時常僧を宿して齋をすゝめ、布施する事しば〳〵なるに、いかで一人の師父を厭ひ候べき、但

汝等に綁縛らるゝ事あらんや、といへば、許多の莊家ども、或は罵るものあり、或は勸るものあり。魯智深ますく怒を發し、禪杖をふり揚て打もかゝるべき光景なり。浩處に年甲六旬にちかき老人、手には一條の拄杖を衝て、門外に走りいで、やよ莊客ども、などてかくさわがしきぞ、と喝ければ、莊客等答て、この和尚いはれなく我們を打んと致すによりて、ぜひなく鬪諍に及び候、といふとき、魯智深すゝみ出て、彼老人に對ひ、愚僧事は五臺山の僧人なるが、所用ありて東京へ赴く途中、今晚宿頭をとりおくれ、こゝに一宿せん事を乞求めしに、彼徒無禮を働き、理不盡に綁縛んといきまき候によりて、已ことを得ずかくのごとし、といふ。老人聞て、既にこれ五臺山より來給ふ師父ならば、われに從ひて裡に入らせ給へ、といひかけて正堂に伴ひ、賓主の座も定りて後、老人のいふやう、師父ふかくな怪み給ひそ、莊客どもは、活佛の靈山より來給ひし師父なることをしらず、尋常一例の行僧とこそ見進らせつらめ、愚老從來三寶（三寶は、佛、法、僧、）に歸依することふかし、しかるに今夜、わが莊上に事あるをもて、宿し進らするといへども、欵待も心にまかせず、といふに、魯智深は禪杖を衝て身を起し、寔に好意辱くこそ、まづ叟の名字は、何と名告給ふ、と問ば、老人答て、愚老が姓は劉氏にして、この處を桃花村と名づくるによりて、鄕人すべて愚老を呼て、桃花莊の劉太公と稱し候、

只顧路をゆく事半月にあまり、一日山水の秀たる處に到りしが、日もやゝ暮なんとて、山影ふかく沈み、槐陰既にくらく、綠楊の影の裏には、林に歸る鳥雀の聲聞え、紅杏の村の中には、牛羊の圈に入るを見る。落日は烟を帶て碧霧を生じ、斷霞は水に映じて紅光を散し、溪邊に釣する叟は舟を移して去り、野外の村童は犢に跨て歸る。その風景いと愛たければ、しばし停立たるに、日はいよ〳〵暮にけれど、ちかきわたりには宿かるべき家もなし。こはいかにせんと心忙しく、又二三十里六町を一里となす走りつゝ、一條の板橋をわたりて、遠く望めば、一簇の紅霞、樹木の叢中に閃きわたり、重々疊々たる亂山の下に、一つの莊院ありけり。さらば彼處にてこの夜をあかさばやとて、連忙しく走り著て見るに、十人あまりの莊家、東西に奔走して、いとかしがましければ、魯智深怪みつゝ莊前にいたり、禪杖を倚かけて、彼莊家に對ひ、これは行くらしたる行僧なり、今宵一夜を借して歇し給へかし、といふを、莊家は聞もあへず智深を見かへり、和尚はやく立去りて、幸に死を脫れよ、といふ。魯智深聞て眉を顰め、こはこゝろも得ぬ、宿からんといふわれに、何の科ありて殺さんとはいふぞ、といへば、莊家うち腹だちて、汝去ばはやくゆけ、胡說にこゝにありて手足賓緣とならば、立地に細著て、空房に繫おくべきぞ、といきまけば、魯智深忽地大にいかり、この鳥人更に道理をしらず、われなでふ

宣へば、魯智深跪て禮拜し、ねがはくは、その偈を聞ん、と申せしかば、長老偈言を説出して宣く、

遇レ林而起　遇レ山而富　遇レ水而興　遇レ江而止

と示給へば、魯智深聴をはりて長老を拜し、包裹を脊おひつゝ、腰包肚包とて、旅するものの常とする、布もて肚をしかと巻き、長老の書簡を受とりて、衆僧人に辭別し、やがて五臺山を出離れ、彼鐵匠が間壁なる、客店に歇ひて、禪杖と戒刀を打をはるを等候たり。されば寺内の僧衆は、魯智深が出去しを見て、一人としてよろこばざるものもなく、いまだ數日ならざるに、趙員外數多の金錢を將て五臺山に來り、山門の金剛を塑たて、半山の亭子を修復せり。話この下になし。かくて魯智深は、彼客店にありけるに、いくその日をかさねて、禪杖戒刀ともに完備しかば、些の碎銀を贈りて鐵匠を賞し、戒刀を跨禪杖を引提て、客店の主人と鐵匠が徒に別を告げ、遂に起程して東京に赴きけり。その打扮いかにとなれば、皂直裰の袖を脊に綰ね、燦く戒刀は鞘に納て、三尺の春氷を貯へ、挈る禪杖は、肩に倚かけて、一條の玉蟒を弄び、堅く脚絆を繫ては、鷺鷥の腿輕く、牢く衣鉢を拴うては、蜘蛛の肚肥たり。肉を食ひ魚を餐ふ臉、莽なる大和尙、これ經を讀佛を念ずる人にはあらず。さる程に、魯智深は、

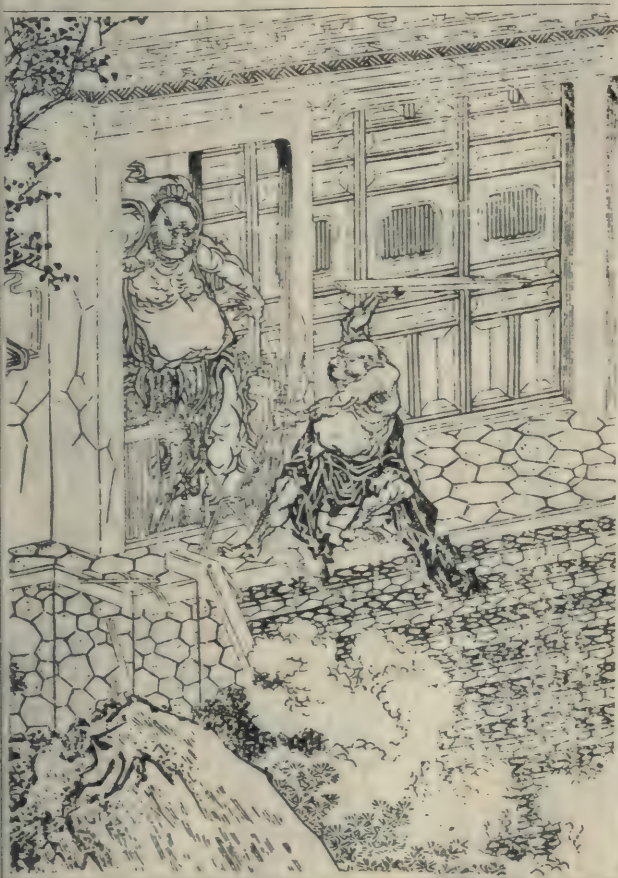
從ひ奉るべし、と回書かい寫て、その使に寄たりしかば、長老やがて侍者の僧を呼びて、皁布の直裰、一隻の僧鞋、十兩の白銀をとり寄せ、魯智深を召出して、彼件々を賜り、汝兩度まで、靈山を鬧せて、佛法を蔑にす、その罪輕からずといへども、施主趙員外の面皮を虧んいとほしさに、われ一封の書簡を贈りて、汝を遣べき處を安排せり、且われ夜來汝が始終の事を看了たれば、四句の偈を說示して、後の戒とすべし、汝身を終るまで受用よ、と宣へば、魯智深かしこみて、ふかくその慈悲を感激し、長老ねがはくはその偈を示し給へ、と請もとむ。嗚呼この長老、透徹にしてよく人を哀憐し、道高權智にして、未來を說に、一點も錯誤ことなし。宜なるかな彼魯智深、禪杖を揮ては、天下の英雄豪傑と戰を決し、怒て戒刀を掣ときは、世上の惡徒逆臣を砍ころし、名は塞北の三千里に揮ひ、佛果は江南第一州にぞ得たりける。

○小霸王醉て銷金の帳に入る

その時、長老魯智深に對て宣ふやう、智深まづ汝を遣すべき處を指揮せん、われに一人の師弟ありて、智淸禪師と號し、見に東京大相國寺に住持せり、われ今この書簡を寄せて、汝を托みて遣すべし、又夜來看了ところの四句の偈は、汝が生涯の大事なり、等閑に聞ことなかれ、と

その光景心頭に火焔起り、口角に霹靂鳴る。正に是箭に中りて、崖を投る虎豹のごとく、恰も鎗を著て澗を跳る豺狼に異ならず、東を指ては西を打ち、南を指ては北を打つ、その勢燦然として、敢て當るべうもあらざれば、矢庭に傷を被るもの、十餘人に及びける。魯智深はなほ兇にあれて、法堂のほとりに赶到り、只見れば長老立出給ひて、智深無禮なせそ、僧衆も手を動すべからず、と制し給へば、衆人は長老の出給ふを見て、おの〳〵退き躱れし程に、魯智深も卓䣓を投ずてて、長老わが爲に做主たまへ、と申せしが、この時酒は七八分醒にけり。長老は魯智深をちかく招き、汝連に老僧を苦しめ、前にも醉て不善の行ひありしをもて、趙員外に告知せしかど、員外書簡もて、さま〴〵僧衆に陪話しつるによりて、就裏にさしおきぬるを、今又醉て半山の亭子を打塌ち、且山門の金剛を打壞り、加旃衆人を打擲す、その罪業小きにあらず、わがこの五臺山は、文殊菩薩の道場にして、千百年清淨の靈地なるに、いかで汝がごとき穢汚たるものを住おくべき、今われ汝をさし遣處を安排せんに、われに從ひて來よ、と命せて、魯智深を方丈に伴ひ、職事僧人をよびて、打傷れたるものを養生させ、次の日長老は、首座と商議し、まづ趙員外に消息して、情由を告給へば、員外大にうち驚き、亭子と金剛は、それがし早速修復いたすべし、魯智深が事は、とかく長老の發遣にまかせて、淸規に

いとも堪がたく、衆僧、目を閉鼻を掩ひ、共に吐べき氣色なり。魯智深は吐了て、縧を解もあへず、直裰を唆々に引剝すつるに、彼狗の腿、懐の中よりまろび落たり。魯智深これを見てかや／＼とうち笑ひ、よし／＼今吐盡して少し饑たり、と獨ごち、拾ひとりて喫ける程に、衆僧見るに忍びず、袖を臉におしあてゝ、慢々地と脫んとするを、智深上首の僧を引とどめ、汝も些ばかり喫給へ、とたはぶれて、一塊の狗の肉を脣へさし著れば、上首の和尚臉を扭過け、袖もて口を楚と塞ぎ、命にかけて喫じとするにぞ、魯智深又下首の禪和子が嘴邊に衝著て、くらへ／＼、と責ければ、彼禪和子防ぎかねて、禪床を飛下んとするところを、魯智深無手と捉て放さず、只顧肉を口へさし入るゝを、同宿の禪和子四五人走り來て、さま／＼魯智深に賠話すれば、魯智深肉を投擲て、榮螺に等しき拳頭を提起げ、彼禪和子が光腦袋上を、剝々剝々と鑿しかば、堂内の衆僧さわぎたち、右往左往に逃まどひ、廊下を投て躱んとするを、迯さじと赶出たり。時に都寺、監寺等は、長老にも告ずして、一班なる執事の僧人を呼つどへ、老郎、火工道人、直廳、（一書に、直廳をさうぢのものとするは非なり）轎夫等、約一二百人を驅催し、手に／＼杖棒なんどを引提つゝ、手巾をもて盤頭し、皆もろともに打入りて、ぜひなく智深を捉んとす。魯智深はこれを見て、大に吼り、別に器機なかりし程に、佛前なる卓脚兩條を撇抜て、一味に跳出たり。

魯智深酔して金剛を笞つ

ある僧人ばら、方丈に來りて稟やう、彼野猫今日も又いたく醉て、半山の亭子上と山門の金剛をうち壞れり、こはいかにしてよからん、と異口同音に報れば、長老聞食て、いにしへより天子すら、なほ醉漢を避給ふ、況老僧の爭ひ制すべきにあらず、よしや金剛をうち壞るとも、彼施主趙員外に請て新に塑せ、亭子をも修復さすべきのみ、汝達彼が前日の手なみを見ずや、と宣へば、衆僧せんすべなくて、方丈を退き、門子を呼びて、彼ものいかにいふとも、門をな開きそ、と命せける。魯智深はしばし停立てありつれども、とかく門をひらかざれば、大に焦燥ち、この直娘的禿驢ども、われを寺内に入れじとならば、火を把來りて山門を、忽地に燒くべきぞ、といきまきあらく罵れば、僧衆これを聞て大に驚き、ふたゝび門子を呼ていふやう、もし入れざるときは、彼いよ／＼不良の行をなさんも量がたし、まづ門をひらきて、その光景を見よ、といへば、門子こゝろをえて、おそる／＼手を長く伸し、門の栓を引ぬきて、飛がごとくに躲れしかば、僧衆も身を避て遠々地よりこれを見るに、魯智深は大栓を引拔擲を聞き、力を盡して一推し推ば、門扇左右へさとひらけ、顛入つゝ撲地と倒れしが、やゝ身を起して僧堂に走り入り、選佛場の中に到れば、打坐の禪和子たち大に驚き、頭を低て居たりける。魯智深は禪床の邊に到るとやがて、喉嚨の裏咯々と響つゝ、此首彼首に吐ちらせば、その臭氣

膀子に亭子の柱を搖在ば、猛に刮々々と響わたり、亭子の柱は中より折れて、半廂既に塌ぬ。時に山門の門子、この胖響を聞つけてふかく怪み、高きより見おろせば、彼魯智深踉々蹌蹌として山に上り來つ。二人の門子うち驚き、山門を關かためて、門縫裏よりさし張ば、魯智深拳を揚て門を敲くこと、鼓を擂がごとく、あけよ〳〵と叫ども、門子敢て開く事なし。その時魯智深は、身を扭過て、左邊に立る金剛を見て、聲ふりたてゝ喝けるは、汝この鳥大漢子、われにかはりて門を敲んとはせず、却て拳を拿著て、われを威すとも、われ少しも汝を怕れず、いで手なみの程を見すべし、といひもあへず、臺基に跳上り、欄刺子をかい摑みて葱を抜ごとくに引抜撒て、折木頭を閃しつゝ、金剛の腿を丁と打ば、泥和顏色すべて脱たり。門子はこの光景を張看て大に慌て、まづ長老に報知んとて、連忙走りゆきけるが、魯智深は又身を調轉して、右邊なる金剛を喝著け、汝大なる口をひらきて、われを笑ふは何事ぞ、からきめ見せん、と罵りつゝ、彼金剛の脚の上を力に就て打しかば、一聲地も震ふ價の響して、金剛は撞と顚墮ち、臺基の下に倒にければ、魯智深かや〳〵とうち笑ひ、且罵れ、且叫び、なほ外面に停立ぬ。かくて二人の門子は、魯智深が爲體を長老に報たてまつれば、長老の宣く、汝等漫にさわがして、彼を怒らする事なかれ、とく退出よ、と命する折しも、首坐、監寺、都寺、すべて職

な賣沒して、些の菜蔬あり、これを進らすべきか、といふとき、智深猛に一陣の肉香を聽著て、空地のほとりに走り出で、只見れば墻の片陰に、一雙の狗肉を烹て、沙鍋の裏にあり。魯智深見をはりて舊のところに立かへり、汝かくまでよき殽ありつるを、などてなしとはいふぞ、といへば、主人含笑て、御身出家の人なれば、狗をば啖給はじと思ひ候ひき、苦しからずは進らせ候はん、といふ。魯智深點頭て、われに錢なしと思ひそ、さらばまづ銀子を遞與べし、とて、懷中の銀をとり出て與れば、主人これを受收め、熟たる半隻の狗肉に、些の蒜泥を搗ぎて將來れば、魯智深大に喜びて、手をもて彼狗肉を引裂き、蒜泥に蘸して啖つゝ、一連十來碗の酒を喫て、口いと滑なり。主人は只呆にあきれて、顏うち守りたるに、魯智深は忽地酒を喫竭して、又一桶の酒を將來れ、といふにぞ、主人いよ〳〵呆れつゝ、ふたゝび酒を舀もて來れば、魯智深は時を移さずこれをも喫をはりて、啖殘せし狗腿一脚を懷にし、搶と門を出ながら、多的し銀子はまた明日來て喫べきぞ、といひかけて走り去りにければ、主人は目を瞬口を開き、只顧と呆れて回答だにせず。魯智深は、五臺山を望て走る程に、やゝ半山の亭子上に到り、しばし歇ひてありしかば、酒いよ〳〵湧上り、勢に就せて身を跳起し、われ久しく拽拳使脚をなさゞれば、身體すべて倦困れたり、さらば些の力だめしをもせばや、とて、只一

かへりて、さても頑なる漢子哉、われ今彼處の酒肆にて飽まで喫み、かへり來りて後にこそ、說話すべけれ、とつぶやきて、ゆく事いまだいく歩ならずして、又一軒の酒旗兒を望見て、直にその家に走り入り、酒を喫ん、といふに、この店の主人も、又長老の法度あればとて賣與へず。魯智深はせんすべなくて、こゝをも立出で、すべて四五軒の酒肆に到しかど、みな悉く賣與へず。その時魯智深はこゝろの中に謀を設け、市稍盡頭にゆきて見れば、杏花ふかく咲亂れたる門に、草箒兒を挑出せし家あれば、簾子を揭て裡に入り、さゝやかなる窓の下の凳子に尻うちかけ、これは行脚の僧なるが、漫行していと饑たり、とく〳〵酒を喫せよ、といふ。こゝの主人は莊家とおぼしくて、ふつゝかなる漢子出むかへて、和尚もし五臺山の師父ならば、酒は賣がたく候、といふを、魯智深聞もあへず、われは遠方より來れるものにして、彼山の僧人にはあらず、はやく酒を將來れ、といふとき、主人つら〳〵魯智深を見るに、その模樣聲音に至るまで、常に見るところの、五臺山の僧人とは各別なりしかば、少しも疑ず、和尚いかばかりの酒を喫給ふぞ、と問に、魯智深答て、いかばかりといふことなく、只顧篩て將來れ、と焦燥にぞ、やがて十來碗の酒を篩來て、そのほとりに放在ば、魯智深これを喫つゝ、主人に對て、肉あらば一盤喫せよ、といふに、主人がいふやう、早來には、些の牛肉ありしかど、み

て進らせ候はん、もし動し得給はずとも、それがしを咎給ひそ、といへば、魯智深やうやくうけ引て、しからば六十二斤に打候へ、彼兩件の家生、價銀いかばかりぞ、と問に、討價なしに五兩の銀子を給はらん、といふ。魯智深聞て、われは價銀の多少を論ぜず、只顧よき鋼を用て打候へ、もしわが意に稱ひなば、別に賞を得さすべし、といつひゝ、懷中より銀子を取出してこれを遞與し、心歡しきまゝに、また待詔に對ていふやう、われ今酒を買て汝と喫べく思ふはいかに、といふに、待詔答て、見給ふごとくかく生活にいとまなく候へば、相陪いたしがたくこそ、と固辭しかば、魯智深は強ても勸ず、鐵匠が店を立出て、いまだ二三十歩も到らざるに、只見れば一箇の酒望子を挑出して、屋の簷上にあり。智深見て、簾子を掀起つゝ搶と裏に入りて、坐しもやらず卓子をうち敲て、酒を將來れ、と呼れば、主人出迎ていふやう、師父も五臺山の僧人と見まゐらせて候、わがこの房屋も本錢も、彼寺より借受て、生活をいたすなるに、長老豫て法度を出し給ひて、寺内の僧人に酒を賣て喫するときは、立地に本錢をも追了し、房屋をも赶出し給はんとなり、よりて師父には賣がたく候、といへば、魯智深聞て、それはそれにてもあるべけれど、まげて些の酒を喫せよ、われ人に對ひて、こゝにて酒を買たりとはいふまじ、とて、再三乞求れども、主人一切うけ引ざれば、魯智深ぜひなく走り出つゝ、彼主人を見

立よりて、二三人の待詔に對ひ、この裡に好鋼ありや、といへは、鐵を打もの鎚を仕て、はじめて魯智深を見るに、腮の邊は新に剃たる鬚、短くはえて戧々地、いとおどろ〳〵しき形容なれば、待詔ども怪み怕れて、師父まづ裏に入りて歇給へ、何の要に鋼を求め給ふぞ、といふ。智深答て、われ一條の禪杖と一口の戒刀（禪杖、戒刀、みな僧の用具なり。僧史略に曰く、蓋佛は一切の草木を斫截ち、鬼神を壊ることを許さず。草木すらなほ戒む。況やその他をや。これによりて僧の刀を戒刀といふ。）とを、打すべくおもふなり、いかに好鐵ありや、といへば、待詔聞て、幸上等の鋼をばもち合せて候なる、その禪杖と戒刀の長短輕重は、いか程にかつかうまつるべうもや、と問に、魯智深答て、戒刀は尋常の寸法に倣ふべし、但禪杖は一條の重約百斤あまりにてよかんなん、と命すれば、待詔うち笑て、それはあまりに重くして、動し給ふ事かなふべからず、むかし關王の青龍刀も八十二斤なりとうけ給はり傳へ候ひし、といひも果ざるに、魯智深大に焦燥て、われいかで關羽に劣るべき、彼も是一個の人なり、汝無用の舌を動す事なかれ、といへば、待詔又いふやう、もし我們にまかせ給はゞ、重四五十斤に打て進すべし、これにてもなほ十分の重あらん、といふを、魯智深頭を左右にうちふり、われは百斤にせまく思へども、汝がいふ所によりて、關王の偃月刀に擬へ、八十二斤に打べし、といへば、待詔押かへして、禪杖のあまり肥きは、使ひ給ふに便よからず、今その中分をとりて、六十二斤の水磨禪杖を打

初編　巻之六

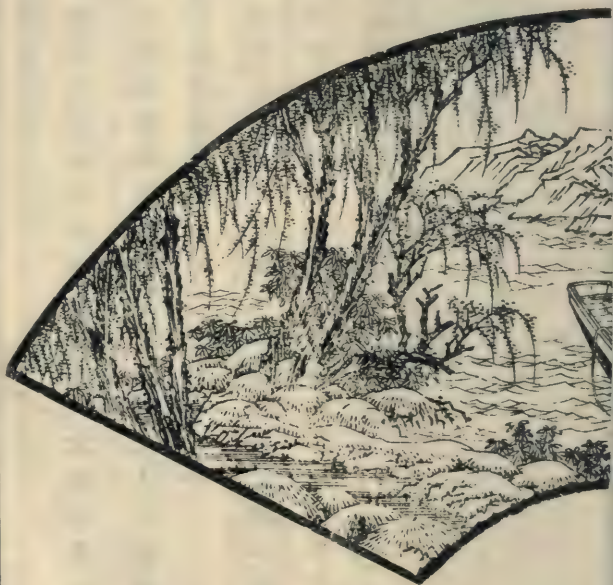
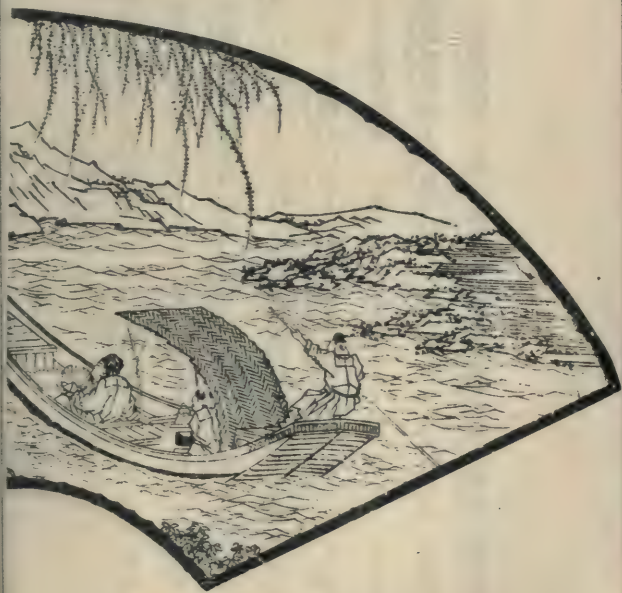
○魯智深大に五臺山を鬧す

魯智深は、曩に亂醉して山門を鬧せしより、三四箇月は寺内を出ざりしが、一日二月の天氣いと長閑なりける程に、忽地歩に信せて山門の外に立出で、頭を囘して五臺山の風景を眺め、只顚喝采て停立をりしも、猛に山下のかたにあたりて、叮々噹々と響聲、風のまに／＼吹あげて、手にとるごとく聞えしかば、僧房に走りかへりて、些の銀子を懐にし、件の響を慕ひつゝ山を下るに、却て彼處はしかるべき市井にて建並べる家五七百もあるべく、肉を賣店、菜を賣店あり、又酒店麪店あり。魯智深この光景を見て、われ早くことに酒肆ある事をしらば、彼一桶の酒を奪ては喫まじかりしに、これ故にこそ久しく禁酒して過つれ、など獨言ち、舊病ふたゝび發りて、些の清水流（酒なり。俠骨中、酒を名づけて、清水流といふ。）をも喫ばやとて、ひとり彼此を徘徊し、不意彼物の響せし家のまへに到りて見れば、是鐵所が店なりけり。その間壁は客店にて、門に、父　子　客店（一説に、父子はげんきんの義なりといふ。なほ説あれど略す。）といふ四字を寫著たる招牌を出しおきつ。魯智深すなはち鐵匠が舗に

○續文獻通考卷之百七十七第二張十行云。

水滸傳　羅貫著。貫字本中。杭州人。編撰小說數十種。而水滸傳敍宋江事。奸盜脫騙機械甚詳。然變詐百端。壞人心術。說者謂。子孫三代皆啞。天道好還之報如此。

○清朝查愼所著人海記云。華亭王圻。續文獻通考藝文類中。載琵琶記樂府水滸傳。又明朝宗室。鄭。越。襄。荊。淮。滕。梁。衛八王。並仁宗子。而云成祖子。其誤尤甚。友人鹽谷簣藏書錄云。清人查愼人海記二卷。近屬商舶所齎來。乾隆秘藏無板書中之一也。

附言

前帙五册、倉卒の間に稿を脱したるをもて、なほふたゝび考正さんとおもひつるを、書肆等發兌の時節おくるゝとて、只管繍梓をいそがし、あまた校じ漏させて、既に世に刊布せり。よりて錯誤少からず。就中宋の洪邁が容齋續考の如き、愕りて宋洪が邁俗考とし、日本書紀を日本書記とするのたぐひ、枚擧に遑あらず。これらは婦幼の爲にことわりを述るとしもあらねど、識者の一噱をいかにせん。只この編のみならず、凡印本は作者の自筆ならざるがゆゑに、校正等閑なれば、衍誤多からざる事を得ず。三寫して魯を魚となす事、いにしへよりみなしかり。漫戲の稗說、ふかく誤字假名違等を正に足らねど、甚しきはしのぶに堪ず、更に數行を追書して、作者の拙を補ふのみ。且前帙序卷に論ずる處の、續文獻通考、及人海記の說を合せ考へ、かさねてこゝに抄書すといふ。

頭上青天只恁欺。害人性命霸人妻。須知奸惡千般計。要使英雄一命危。
忠義縈心由秉賦。貪嗔轉念是慈悲。林冲合是災星退。却笑高俅枉作爲。

第九回　天鵬鵠
千古高風聚義亭。英雄豪傑盡堪驚。智深不救林冲死。柴進焉能擅大名。
人猛烈馬猙獰。相逢較藝論專精。展開縛虎屠龍手。來戰移山跨海人。

第十回
天理昭昭不可誣。莫將奸惡作良圖。若非風雪沽村酒。定被焚燒化朽枯。
自謂冥中施計毒。誰知暗裡有神扶。最憐萬死逃生地。眞是瑰奇偉丈夫。

皆

文化乙丑初冬上旬。曲亭主人錄於飯岱著作堂

靈根號初編後帙

○開　詞

第　五　回

禪林辭去入禪林。知己相逢義斷金。且把威風驚賊膽。謾將妙理悅禪心。綽名久喚花和尙。道號親名魯智深。俗願了時終證果。眼前爭柰沒知音。

第　六　回

萍踪浪跡入東京。行盡山林數十程。古刹今番經劫火。中原從此動刀兵。相國寺中重掛塔。種蔬園內且經營。自古白雲無去住。幾多變化任縱橫。

第　七　回

在世爲人保七旬。何勞日夜弄精神。世事到頭終有盡。浮花過眼總非眞。貧窮富貴天之命。事業功名隙裡塵。得便宜處休歡喜。遠在兒孫近在身。

第　八　回

愚直なるを憐て、且く方丈に留おき、齋を安排して飽まで喫せ、なほ言語をやはらげて叮嚀に教諭し、細布の直裰と僧鞋とを賜りて、やがて僧堂にかへし給へり。凡酒を飲に、歡を盡すべからず。常言に、酒よく事を成し、酒よく事を敗る、といへり。もし小膽のものこれを飲ば、漫に大膽となる、況勇敢丈夫をや。彼魯智深、再度酒戒を守るや否や、そは次の巻を讀得てしらん。

を禀て、座禪の處に到て見るに、智深いまだ起ざれば、しばしその覺るをまつに、魯智深忽地に起出て、忙しく直裰を引被け、一道烟走に僧堂を走去るにぞ、侍者これを見てうち驚き、こは何事をかするぞ、とて、潛にその背後にありて、彼が爲ところを張望ば、魯智深佛殿の後にゆきて屎を撒けり。侍者は笑を忍び、鼻を掩ひつゝ、その淨手し了をまちて、長老の命を告げ、伴ひてまゐりしかば、長老智深をちかく招きたまひ、汝武夫の出身なりといへども、趙員外既にこれを出家させ、われまた三歸五戒を授て、一には殺生すべからず、二には偸盜すべからず、三には邪淫すべからず、四には貪酒をすべからず、五には妄語すべからず、とぞ示したる、この五戒は僧家の常理にして、出家人第一に貪酒ことを許さず、しかるを汝夜來おほく喫み、いたく醉て、門子を打たふし、藏殿の槅子を踏破りて、火工老郎を打擲し、口に賊聲を出せしは、これいかなる道理ぞ、といとしづやかにいひ懲し給へば、智深頭を地上に著て、以後を愼み候はん、とぞまうしける。長老この光景を見そなはして、さもこそあれ、汝は出家たり、既に酒戒を破りて、淸規を亂りしからに、われもし施主趙員外の面を看にあらざりせば、面前赶出して、再び寺に容まじきぞ、汝みづから愼戒て、再後犯すべからず、と命すれば、魯智深合掌して長老を再拜し、命うけ給はりぬ、命うけ給はりぬ、と申せし程に、長老は彼が

了て跪き、長老に告申すやう、智深今日些の酒を喫しかど、彼輩を凌ことなかりけるに、衆人却てわれを罵り、いたく打んとせしによりて、已ことを得ず闘諍に及び候、長老みづから察し給へかし、と申ければ、長老聞て宣く、汝何事もわが面を看て怒をさめ、はやく退りて歇候へ、もし訟る事もあらば、明日慢々地聞べきなり、と宣ふに、魯智深なほくど〳〵として、それがしもし長老の面を見るにあらずは、禿驢等を悉く、うち殺さんものを、など、くりかへし〳〵おなじ事のみいへりけるを、長老は侍者を呼て、魯智深を扶て禪床上に伴はせ給へば、智深は彼處に到とやがて、高鼾して睡りける。この時許多の徒弟、長老のほとりに團座して稟すやう、前日我們、魯智深をば、剃度し給ふべからずと諫まゐらせしを、露ばかりも聽給はざりけるが、今日果してかくのごとし、もし彼野猫にひとしき悪僧を養おき給はゞ、いよいよ清規を亂なん、とく〳〵赶出して、居多の人の心を安め給へかし、と言葉を齊して、いと苦々しげに訴聞えしかば、長老の宣く、われ往にもいへる如く、彼今は些の囉唣ありといふとも、後にはかならず正果を得ん、とかく檀越趙員外の面を見て、這番は且容恕せよ、われ明日彼を呼びて、以後を佶と戒むべし、と宣ひて、慈愛尋常に過たれば、衆僧も呆れはて、冷笑てぞ退きける。さて次の日早齋も果て、長老は侍者に命せ、魯智深を呼せ給ひつ。侍者命

竹批を喫ぞかし、汝はやくいづちへも出去なば、今幾下の竹批を免さるべし、といきまきあらくいひ懲す。この時魯智深、一つにははじめて和尚となり、二には舊性いまだ改ず、門子がいたく遮り留るを見て大に怒り、兩雙の眼を濶と睜ひらき、いかに汝等、われを打んとや、いで打て、いで留めよ、と叫びつゝ、蹌々としてすゝみ寄れば、兩人の門子も、彼が勢の猛きに怕れ、一人は飛がごとくに走りゆきて、監寺にかくと告しらせ、一人は竹批を拖て、智深を入れじとあらそふを、魯智深大に吼りて、只一拳に彼門子を打たふし、遂に寺内に顚入る。監寺は門子が報によりて大に驚き、老郎、火工轎夫なんど二三十人を呼あつめ、おの〳〵白木の棒を掔て、西の廊下より走出たり。（監寺人をあつめ、魯智深を怒らせて、みづから火を出す。その智深に及ばざる事既に斯のごとし。）智深は遥にこれを見てふたたび吼ること霹靂の如く、大手をひらきてよろめき來れば、衆人もそのはじめ、彼は軍官の出身なる事をしらず、今面あたり勇き形狀を見て、忽地に辟易し、慌忙つゝ、藏殿の裏に退きかくれ、亮槅を楯にして、ちかづけじとうろたへさわぐを、魯智深亮槅を撲地と蹋やぶり、件の棒を奪とりて、右に左に打ちらせば、衆皆頭を抱て立足もなく逃出し、やがて長老に報知せしかば、長老直に三五人の侍者を召つれて、みづから廊の下にたち出で、やをれ智深無禮なせそ、と喝給へば、魯智深いたく醉たりといへども、却てこれ長老なりと認ければ、棒を撇

魯智深大に
酔て衆人を
乱打す

を顰め、腰を摩まはし、倘長老この事をしろし食ば、いかなる辛きめ見つらんとおもふに浅ましく、且魯智深が勇力に怕れて、はか〴〵しく回答もせず、残りし酒を二桶に分け、酒の背は給はるに及ばず、只この事を人に語り給ひそ、といひかけて、擔桶を挑ひ、鏃子を握もちて、飛がごとくに走去けり。魯智深はその後影を目送りて、呵々とうち笑ひ、なほこゝにあること半時ばかりにして、亭子上を走り出で、酒氣に就せて松の樹間を徘徊するに、酒いよ〳〵湧上り、大に醉て足の踏どころをしらず、直裰を把て裸膊ぎ、兩隻の袖を腰の間に纒著て、脊上の花繍（十七回に云く、智深がいへらく、人わが背上に花繍あるを見て、花和尚と呼做すと云々。）を露出しつ、やがて山に登り來る、その光景いかにとなれば、頭重く脚輕く、眼紅に面赤く、前に合し後に仰ぎ、東に倒れ西に歪き、浪々蹌々として風に當る鶴のごとく、擺々搖々て、水を出る龜に似たり。天は天宮を指して天蓬元帥を罵り、地は地府を踏て催命判官を拿んとす。正に是裸形赤體の醉魔君、火を放ち人を殺す、花和尚ともいひつべし。時に二人の門子、遠くこれを見て大に驚き、竹批を拏げて走り出で、智深を遮留ていふやう、汝佛家の弟子として五戒を破り、などてかく噇醉て歸り來れる、汝も瞎にあらざれば、見に庫裏に貼ところの、曉示は看たるらめ、凡和尚戒を破りて酒を喫ば、笞こと四十枚にして、寺を趕出すべしとなり、倘我們醉たる僧人を寺内に容るゝときは、共に十下の

彼漢子聞て大に呆れ、和尚何故にそれがしを作耍たまふや、われこの酒を挑著來れるは、火工道人、（火工は、大工人夫などの一むれをいふ。火と夥と通用す、是を火たきと譯するはたがへりとぞ。）老郎、直廳、轎夫なんどに賣べき爲なり、しり給はずや、本寺の長老法度を出して、和尚の們に酒を賣ことを許し給はず、もし此法度にたがふときは、わが身立地に長老の責罰を被りて、本錢をもとり上られ、屋をも追出さるゝぞかし、我們は元來この寺の錢を關て本錢とし、又本寺の屋宇に住ひするなれば、いかで御身に賣與て、生活に放るゝ事を致すべき、假にもかゝる戲言をな宣ひそ、といひて、更に賣べき氣色なし。魯智深これを聞て、われ實にたはるゝにあらず、汝いよ〳〵賣まじきか、といへば、彼漢子聞もあへず、否、縱殺さるゝとも賣候はず、といふに、智深又いふやう、われは汝を殺さんといふにはあらず、只酒を喫んと思ふのみ、とく〳〵拿來れ、と請求むるにぞ、漢子はこの光景を見て、不是頭と思ひしかば、擔桶を挑て走り去らんとする處を、智深亭子より閃と飛下り、猿臂を伸して、匾柤を丁と拿住め、足を飛して撲地と踢に、漢子は地上に撻と仆れ、しばしは起もあがり得ず。魯智深はさもこそとうち笑ひて、兩桶の酒を亭子上に提來り、鏇子を拾とりて、息もせず喫ほどに、時を移さず一桶の酒を喫竭し、彼漢子を見かへりていふやう、汝明日寺に來りて錢をとれ、些の虧をもさすることとなし、といへば、漢子はやうやく起上りて、眉

つゝ退出ける。かくて魯智深は、五臺山の寺内にありて、覺ず四五箇月を過せしに、時初冬の天氣いとうらゝかなれば、皂布の直裰に、鴉青縧を繫び、一雙の僧鞋を換て、大踏に山門を歩み出で、足に信せてゆく〳〵、山の半なる亭子上に到りて、鵞頂懶凳につら杖つきて、つくづくと思ふやう、われ往常は、酒を好み肉を好み、毎日口を離さゞりしに、趙員外われをすすめて出家させしより、たえて酒を喫ず、又肉を食ず、しかのみならず、員外近屬は些の東西をも贈與ざるによりて、口中空しく尿水を出し、たゞ筋も撓み骨も細やぐばかりなり、よしわれこの風景を賞ながら、酒なきこそ遺憾けれ、と獨言たる折しもあれ、只見れば遙あなたより、一人の漢子、一付の擔桶を排著つゝ、手には一箇の鏇子を拿たるが、高く唱て、山を登來るを聞ば、

九里山（九里山の戌皐といふところにあり。漢の高祖、この山の麓に、大に楚の兵をやぶる。）前作₂戰場₁。（事は上に見えたり。）牧童拾得舊刀鎗。

順風吹起烏江（烏江は項羽このところに戰ひ死す。）水。好似₂虞姬（項王の妃なり。）別₁霸王₁。（すなはち項羽なり。）

かく唱つゝ山を登り、亭子上のまへに擔桶をおろしてやすらひしかば、魯智深彼漢子を招き、それなる桶の中に納しは、いかなる物ぞ、と問に、彼漢子答て、好酒なり、といふ。魯智深は酒と聞て口中忽地に涎を流し、われその一桶を買べきに、はやくもち來りて喫せよ、といへば、

汝達の身に干る事なし、とうち腹立ば、禪和子聞て、善哉、といへりしを、智深鱔哉と聞て鱔の事なりと思ひたがへ、やがて身を起して裸袖し、われは團魚をこそ喫まく思ふに、鱔哉とは遺恨なれ、といひつゝ、ふたゝびうち臥たりければ、禪和子は呆れて回答もせず。次の日二人の禪和子は、魯智深が無禮なりし事を、長老に聞えまゐらせんとて、まづ首座の老僧に如此如此の由を告るに、首座のいふやう、長老豫て説示し給へるは、彼人久後正果を得ん事凡ならず、汝等却て彼に及ばず、と宣ひき、只これ護短なりと思へども、智深が事につきては、敢てその非を責がたし、とかく怒を忍びて、彼が隨意うち捨おき候へ、といひ諭せば、禪和子も默止してその後は管ず。魯智深はわがうへをいふ人なきを見て、いよ／＼意のまゝに動止ひ、晩に到れば、身を翻し、手足を伸して、禪床上に熟睡し、夜間の鼾は雷のごとくにて、覺れば忙しく走り出て、佛殿の後に大小便をたれちらす、その光景言語同斷なりければ、一日侍者の僧、長老に稟すやう、智深甚無禮にして、全く出家人の所爲にあらず、もしかゝる人を寺内にさしおき給ひなば、この靈場を汚すべし、よく／＼深念候へかし、といひもあへぬに、長老氣色あしく見えて、此言語いと胡説なり、彼はいまだ事に熟ざるものなれば、さゝやかなる過ありとも、檀越の面に覷て、後にみづから改るを待よかし、と宣へば、侍者はつぶやき

は魯智深を、師兄師弟の衆僧に相見せ、やがて誘引て、僧堂の背後なる、叢林の中の選佛場に住はせける。かくて趙員外は、宿願こゝに成就したりと歡び、次の日長老に別を告て、遂に下向に赴くにぞ、智眞長老は、衆僧を將て、山門の外まで送り給ふ。員外別に臨て、長老に對ていふやう、魯智深は愚直の人なれば、早晩禮儀をも缺て、清規を誤り犯す事も候はんが、何事もそれがしが薄面に覷てゆるし給へ、又大衆も格別の慈眼をもつて、あはれみを垂給はるべし、と只顧たのみ聞ゆれば、長老の宣く、員外ふかくな思ひ過し給ひそ、愚僧慢々地と教化して、經をも讀習せ、座禪の旨をも辨させ候はん、とぞ宣ひける。趙員外又魯達を松の木蔭に招きていふやう、御身今日よりは往日には比しがたし、よくみづから戒め省て、露ばかりも托大給ふべからず、もししからざる時は、かさねて對面いたしがたし、又衣服なんどは、折々わが方より贈進らすべければ、他事なく修行あるべし、といひ了り、再びもろ人に別を告げ、轎子に上りて歸去ば、長老も衆僧を將て、寺内に入らせ給ひける。さても魯智深は、趙員外にわかれてより、選佛場の禪床上にありて、擅に睡りしかば、同宿の禪和子氣疎く思ひ、智深を呼起していふやう、凡そ出家人は、座禪して智を學ぶを身の勤とす、しかるを漫に打臥て睡る事やある、やよ起給へ〳〵、と呼覺すにぞ、魯智深やうやく首を擡げ、われ心ありて睡れるを、

大衆口を掩て是を笑ふ。時に長老法坐の上にありて、高やかに偈を念じて宣く、

寸草不留　六根清淨　與汝剃了　免得爭競

長老、偈を念じをはりて一喝し給ひければ、淨髮人只一剃髮に、髮鬚一根も殘さず剃落しけり。長老空頭浩處に首座、度牒をもて出て、法坐のまへに上り、法名を賜らん事を請申せば、長老空頭度牒（いまだ名を寫さざる度牒なり。）を把て、又偈を說て宣く、

靈光一點　價値千金　佛法廣大　賜名智深

かく法名を賜しかば、これより魯達を魯智深と呼べり。又長老は書記の僧を召て、度牒に件の法名を寫させて、これを魯智深に授させ、法衣と袈裟を賜れば、智深これを被て監寺に導れ、法座の前にすゝみよるに、長老手をもつて彼が頂を摩まはし、また受記して（五戒をさづくる也。）宣く、一には三寶に歸依すべし、二には佛法に歸奉すべし、三には師友に歸敬すべし、これは是三歸なり、又五戒は、一に殺生を要ざれ、二に偸盜を要ざれ、三に邪淫を要ざれ、四に貪酒を要ざれ、五に妄語を要ざれ、と示し給ふに、魯智深は禪宗の答應に、是否といふ二字をしらざれば、われよく記覺と答しかば、大衆すべてこれを笑ひつ。既に受記も果ければ、趙員外は衆僧を雲堂に請じて、香を燒き、齋を備へ、大小の職事僧人に、上賀の禮物を饋し程に、監寺

を考べし、と宣ひて、香を燒禪椅に上り、口に咒語を誦して、定に入り給ふこと暫時にして回來つ、衆僧に對て宣ふやう、彼を剃度せん事ゆめ止むべからず、この人、上は天罡星に應じ、心地剛直なり、時下かく薄命なりといへども、久後却て淸淨なるべし、その正果を得るに至りては、おの〳〵の及ぶところにあらず、よくわが言を忘れずして、みづからおもひ當るを俟候へ、と示し給へば、衆僧なほこれを實語とせず、さても長老の護短かな、と私語あひぬ。さて長老は、趙員外等をふたゝび方丈に請じて齋食を備へ、さま〴〵これを管待給ふに、員外は食後、人をもて僧鞋、僧衣、僧帽、袈裟、拜具の物料を買せ、一兩日にして准備悉く調ひぬ。よりて智眞長老、吉日良辰を擇み、鴻鐘を鳴させ法鼓を擊せて、法堂の内に大衆を集會給ひし程に、五六百箇の諸僧人、整々齊々として袈裟を被け、すべて法座の下に來りて、合掌禮拜し、わかれて東西兩班に侍立せり。その時施主趙員外は、銀子と表裏の信香禪家に僧となる人、剃髮して本尊を拜する香を信香といふ。それを持參したるなり。とを取出し、法座のまへに再拜す。表白宣疏佛へ事のよしを告ぐる書付なり。も果て、二人の行童魯達をいざなひて、法座の下に到れば、維那の僧、魯達が巾幘を除せ、頭髮をわけて九つに綰ね、これを手股に挾む時、淨髮人一周遭をとりて、すべて剃をはり、やがて髭鬚を剃んとすれば、魯達はいとうらめしげに見かへりて、いかに些の鬚をば殘して、われにかへせよかし、とつぶやくにぞ、

かど、いまだその人を得ざるに默止しが、幸にこの表弟魯達といふものあり、此人軍漢の出身なりといへども、塵世の無常、人間の艱苦をはかなみ、只顧俗を棄て出家せん事をねがふ、請望らくは、長老の慈愛によりて、彼を僧となし給はゞ、一切の所用はそれがし准備いたすべし、但長老の玉成にあへるに于ては、幸甚しからん、と申すにぞ、長老聞て宣く、これ又不測の因緣なり、いと易しいと易し、まづ茶を進らせよ、と命すれば、二人の行童茶を托出て兩人に勸るに、香氣馥郁として絕品なり。長老又首座を喚て魯達が剃髮の事を商議し、又監寺都寺に命せて、齋食を備へよ、と宣ふ。そのとき衆僧座を立て商議しけるは、彼人全く出家人の模樣にあらず、一雙の眼ざし、人にしては恰も賊の如く、萬根の髯髮、獸にしては更に虎に似たり、とかく長老を諫て、彼事を止めまゐらせんに、知客（客ある時に出て挨拶する役僧なり）は彼處にゆきて、客人に挨拶し給へかし、といへば、知客はこゝろを得て、趙員外と魯達を客殿に請じ、しばし四表八表の物がたりす。その間に衆僧、ひとしく長老に稟すやう、彼出家せんといふ人を見るに、形容醜惡として見にくゝ、相貌兇頑としておそろしげなり、かゝる人を剃度し給はゞ、久からずして山門の累となるべし、よく〳〵深念あらまほしけれ、と諫れば、長老の宣く、彼は檀越趙員外の表弟なるに、形狀醜しとて固辭るべきか、おの〳〵且く疑念を休よ、我まづ彼が向後

衆僧を召倶して、みづから山門の外に出迎へ、施主今遠く詣來給ふは、いかなる故やある、と問給へば、趙員外うやうやしく、魯達とともに禮儀を舒べ、今日些の願事候によりて、わざわざ上刹へ參り候ひし、と申すにぞ、しからばまづ方丈へおはせよ、とて、いと慇懃に誘引給へば、魯達は員外の背後にありて、この文殊寺を見るに、山門は峻嶺を侵し、佛殿は碧雲に接り、鐘樓は月幗とともに連りて、經堂は雲霧の裡に立つ。幾許の僧寮は、烟霞を納め、七層の寶塔は、丹霄に聳ゆ。正に是塵外の大刹、淸淨の靈場なり。かくて智眞長老は趙員外を方丈に案内して、客座に請じ給ひければ、魯達は何の遠慮もなく、禪椅のほとりに無手と坐しぬ。員外これを傍痛く思ひて、魯達が耳に口をさし寄せ、御身今こゝに來て出家すなるに、などて長老と對座して、無禮の動止はし給ふぞ、と私語ば、魯達點頭て、われ事に馴ざるによりて、心つかざりし、とて、やがて員外の肩下に坐す。當時監寺、都寺、知客、維那、侍者、書記なんど稱る諸僧人、次第によりて兩班に居ならぶ折しも、員外の莊客ども、彼禮物を搬將來りて、これを面前に擔するたり。長老これらの品々を見そなはして、員外に對ひ、施主今何の故ありて、許多の禮物を贈り給ふぞ、と宣へば、趙員外身を起し、膝をすゝめていへりけるは、それがし原一條の心願あり、一人を剃度して上刹の僧侶とせまく思ひ、度牒、詞簿などをば調おきし

主檀越たり、因てそれがしこの年來一人を出家させて、文殊院の僧侶となさん事を思ひ、豫て五花度牒（花押五つある度牒なり）を買おきて、出家さすべき人を索るといへども、いまだ心腹の人を得ざれば、この宿願を遂る事なし、もし提轄落髪して和尚となる事を承引給はゞ、一切の雜費は、それがしこれを備辨べし、いかにこの謀に從ひ給ふべきか、といへば、魯達情由を聞ておもふやう、われ縱こゝを脱去とも、いづれの里をか賴べき、とかく員外のいふがまにまに、後やすく世を送らばやと深念し、便答へていへりけるは、かく員外の庇を被る事、こよなき身の幸なり、又剃髮の事は、元より希ところにこそ、と回答するに、員外ふかく歡びて、その夜すがら衣服を縫せ、禮物盤纏等を准備して、次の日朝まだきに、魯達を轎に上せ、わが身も轎に上りて、五臺山に赴きけり。既に麓まで來りし時、魯達は仰て彼山を見るに、雲は峯頂を遮りて、晷山腰を轉り、花は春風に舞うて、暗に清香を吐く。宿雨に披し藤は、嫩なる絲をかけ、清流を拖く瀧は、銀の線を亂す。寔にこれ好座の風景、奇にして又妙なりける。かくて兩箇の轎子、山の半まで來れる時、趙員外まづ人を走せて、かくと告させし程に、都寺、監寺の老僧出來りて、山門の外なりける、亭子上に誘引へば、趙員外も魯達も轎より出て、やがて彼所にやすらへり。時に智眞長老は、大檀那趙員外來臨せりと聞給ひて、首座侍者なんどの

を過せしに、一日兩人書院にありて、物うち相語る折しも、金老慌忙しく走來ていふやう、前日それがし、提轄を樓上に登し、酒をすゝめてありし時、員外大勢を將て搦捉んと鬩きながら、故なくして人を退け給ひしとて、人些の疑を生し、風聞區々なりけるに、きのふ三四個の做公人、近き舍、隣れる坊に來て、情由を問諦る事、いとも緊かりき、倘事發覺て不慮の疎失あらば、いかにせん、と潛き告れば、魯達聞て、しかる時はわれはやく脱去外あらじ、といへば、趙員外且く沈吟していふやう、今提轄を放遣るときは、居多の面皮を缺て、わが志念を空す、又留おくときは、却て仇となる事も出來なん、それがしつら〳〵おもふに、提轄この難を避て身を安くし、萬に一つも失あらせざる謀あり、しかれども提轄肯し給はじ、といふを、魯達聞もあへず、われは是死すべきの人なり、もし身をおくの宿を得て、この急難を脱るゝ事あらば、いかで肯せざるべき、とく〳〵說示し給へかし、と只顧賴聞えしかば、趙員外もいとうれじみたるおもゝちにて、わが欲る處別事にあらず、こゝを去る事三十餘里にして、一座の山あり、便五臺山と號く、山上に一箇の寺ありて、これを文殊院と喚做せり、原これ文殊菩薩の道場にて、寺中に五七百人の僧あり、その頭たる智眞長老と、それがしとは、莫逆の交をなしつ、抑わが先祖許多の金錢を施して、彼寺に納む、こゝをもてわが家今に第一の施

ば母屋に歸し、只ひとり裡へは入り給ひし、と一五一什を說示せば、魯達も、原來は錯誤にてありつるか、といひて、はじめてこゝろ安堵けり。その時趙員外は、魯達を再び樓上に請登し、又酒宴を設てさま〴〵饗させ、只管歎賞していふやう、それがし平日提轄の豪傑なる事を聞て、渴望まゐらせしに、はからずして見ること、寔にこの身の幸なり、といふに、魯達含笑て、それがしはかくのごとく粗鹵漢子にて、既に死すべき罪過を犯せり、しかるを員外棄給はずして、對面を許さるゝ事、却てわが僥倖にこそ、と問答し、鄭屠を打殺したる始末、おちもなく物がたるにぞ、趙員外ます〳〵感激し、互に兵法を討論し、半夜の酒に醉を竭して、その夜はおのおの歇けり。次の日早飯も果て、趙員外は魯達に對ていふ樣、この處は世を潛ぶ穩便の地にあらず、わが本宅はこゝより十里すなはち六十町なり。あまりにして、地名を七寶村といふ、今日より提轄をわが莊院に舍匿まゐらすべし、この事いかにあらん、といへば、魯達聞て大に歡び、ともかくもよきに計ひ給はれかし、と頼み聞えし程に、趙員外は俄頃に人を七寶村に走らせ、二疋の馬を牽來らせて、一疋には魯達を上せ、一疋にはみづから上りて、莊客に魯達が行李を打擔せ、晌午のころに立出て、七寶村に歸りゆけば、金老、翠蓮は門邊に停立て、しばし二人を目送りける。さる程に趙員外は、魯達を本宅に伴ひかへり、酒食を備て管待しつゝ、はやくも五七日

趙員外疑つて
魯提轄を捉んとす

日もやゝ西に傾きけり。浩處に誰ともしらず二三十人、手ごとに白木の棒を挙げ、一個の人、馬にうち騎たるが、驀地に出來り、その賊を捉逃しそ、と呼れば、魯達は牕よりこれを見て、すはわがうへよと思ひしかば、急に凳子を挙起して、既に飛下りて打散さんとするを、金老連忙しく抱住め、事叶はずはともかくも、まづそれがし彼處にゆきて、緣故を問諦め候べし、權潛りておはし候へ、といひもあへず、ひとり樓上より走り下りて、彼官人めきたる人のほとりに到り、何やらん私言けるに、馬上の人忽地かや〳〵とうち笑ひて、壯使どもに下知すれば、悉皆こゝろを得て、舊の路へ退きかへりぬ。かくて彼官人めきたる人は、馬より下りて裡に入りしかば、金老は魯達を樓上より呼迎へて、彼人に對面さするに、彼官人魯達を見るとやがて、身を翻して再拜し、義士提轄、わが拜禮を受給へかし、といふに、魯達奇みて、金老に對ひ、この人は誰なるぞ、われはいまだ相識ざるに、などてかく慇懃なる、と問ば、金老答て、これは便女兒翠蓮を愛あはれみ給ふ、趙員外にておはすなり、今郎君子弟を引つれて、こゝに來給ひし故は、わが女兒御身と樓上にありて、酒喫などせしを、莊客等がこゝを過るとて見咎め、員外に告まゐらせし程に、そは密夫ならんと疑て、これを制せん爲に、大勢を召つれ、みづから來給ふといへども、それがし潛に提轄なるよしを聞え申せしによりて、彼壯佼どもを

て、みづからこゝへは來給ひし、且こなたへ、と誘引にぞ、魯達は彼女子の模樣を見るに、むかし窶しかりけるには引かへて、金釵斜に插て、黑髮に映じ、翠袖巧に裁て、白雪を籠め、脣の薄紅なるは、咲初たる桃櫻のごとく、手の嫩に纖たるは、土を出る春笋に異ならず、臉は三月の花を匂せ、眉は初春の柳を畫て、虛燒の薫さへえならず、これや楚岫の雲はれて、瑤臺の月を見るかとぞ怪る。さて翠蓮は魯達を樓上に誘ひ登し、過來しかたを語出て、旅路の憂を問慰るに、魯達ははや退らんとて、既に座を立んとするを、金老拖住ていふやう、提轄いかなれば我們に心を置給ふぞ、せめてけふ一日は、打解て相語給へ、などいひつつ、新討の小廝婭嬛に命せて、火を燒せ水を汲せ、みづから酒食を按排しつ、すべて春臺の上に盛ならべて、これを樓上にもち登させ、やがて盃を把あげて魯達にすゝめ、父子拜伏していふやう、今はた父子がうへを思へば、向には轍魚の泥に吻き、身をおく宿もなかりしに、思はずもかくの如く、やすらかに世を送る事、みな是君が賜なり、されば我們こゝに來りしより、提轄の名を紅紙牌兒に寫し、（思ある人の名を書きつけて朝夕に拜するなり。生ける人なるゆゑに紅紙をもちゆ。死せし人には靑き紙を用ふるなり。）晨に夜に燒香して、念懈ことなかりしに、今面あたり見えまゐらするうれしさよ、只こゝろよく三盃を傾給へ、とて、父子の欵待尋常に過たれば、魯達もその志の厚を感じ、膝をゆるめて酒喫などするに、

るべし、まづ兩三日は路をかへてこそと思案し、遂に北を望て走る折しも、途中にて京師の古鄕何がしにゆきあひしに、彼人のいふやう、われは久しく代州雁門縣に在て、買賣をなすに、京師にも勝りて、世わたりの便よき所なり、誘給へ、われ彼處に伴なひ行べし、といふに任せ、東京に歸る事を止て、父子この處に伴れ、しばし彼人の介抱を得てありつるに、いく程もなく女兒翠蓮は、趙員外となんいへる、いと富たる人の妾となり、鍾愛あさからずして、我們父子を外宅に養ひ、衣食何くれのもの、すべて乏しからず惠給ひぬ、かれも是もみな提轄の大恩によるなれば、女兒も日來この事をいひもて出しつ、彼趙員外は、鎗を刺し棒を使ふ事を好み、義に仗り、信を守る丈夫なるが故に、御身が事を傳聞て、ふかく愛あはれみ、路遠して對面せざる事を本意なくも思ひ給へり、誘わが家へ鄕導いたすべし、まづ〱休足ありて慢々地と商議し給へかし、といふに、魯提轄はともかくも、と回答して、打つれ立てゆくに、いまだ半里（三町ばかりなり）ならざるに、はやくその門に來つ。只見れば金老簾子を掲げ、やよわが兒よ、いづくにある、大恩人の來ませしに、とく〱出候へ、と呼れば、翠蓮忙しく走り出で、魯提轄を一目見て、こは〱いかに、とばかりに、俯しつ仰ぎつうちをがみ、寔に提轄のふかき庇は、片時も忘るる隙なけれど、山川萬里を隔つれば、見えまゐらせがたきをうらみしに、けふはいかなる風吹

初編　巻之五

○趙員外重て文殊院を修す

魯達は鴈門縣の中明亭にて、思はずも呼かけられ、扭過てその人を見れば、これ則渭州の客店にて、路費を與へ、その艱難を救ひて、故郷へ旅だたせたる、金老にてぞありける。その時金老は、魯達が袖を引て僻淨に退り、聲を低うしていふやう、提轄いかに膽太ければ、世をも人をも怕れ給はざる、今處々に榜文を張掛げ、一千貫の賞錢を出して、御身を捉んとす、見給はずや、御身が年甲相貌、悉く榜の面に寫したり、倘それがしいちはやく見つけまゐらせずは、忽地做公人に捉れ給ひなん、いと危しく／＼、と信だちて物がたれば、魯達聞て、われ嚮に汝父子を旅だたせて、直に狀元橋下に到り、怒に就て只三拳に、鄭屠を打殺し、身を脱れて處々方方を流浪すること、半月あまりにして、やゝこゝまでは來りしなり、汝は又何故に東京へは歸らずして、この代州へは來りしぞ、と問に、金老答て、それがし父子、提轄の恩惠を得てしより、豫て東京へ歸らんとは思ひしかど、不圖こゝろに思ふやう、東の街道へはかならず追人かゝ

にしへより餓ものは食を擇ず、寒ものは衣を擇ず、惶ものは路を擇ず、貧きものは妻を擇ずといひし常言も、今わがうへに思ひしられて、既にゆく事半月あまりを經て、代州鴈門縣に到り、彼方此方を徘徊し、いと閙熱しき市井を過るとき、一簇の人、十字街口に圍住て制札を讀居たり。その光景いかにとなれば、肩を扶頭を交へ、紛々として賢愚を辨ぜず、又貴賤をわかちがたし。張三は蠢胖にして字を識らず、李四は矮矬にして人のみを見る。白頭の老叟は杖に携て讀み、綠鬢の書生は毫を出して寫めり。魯達はこれを見ていまだ覺らず、ちかく前みよりて榜を見るに、元來無筆なりければ、その緣故をしらずといへども、人の讀を聞ば、

　滑州經略府の提轄、魯達といふものは、市人鄭屠を打殺すの犯人なり。もし人ありて停藏おくものは、その罪犯人とおなじかるべし。もし人ありて搦獲るものは、賞錢千貫文を給ふべし。

と讀もをはらざるに、忽地魯達が背後のかたより、張大哥、人の聞きしらぬやうに、魯達をよびかくるなり。（金聖歎がいはく、王進が史家村に宿かりしとき、偽りて張氏の商人なりといふ。今又金老魯達を呼びて張大哥といふ。是張の字の熟也。作者の心を用ひたる事しるべし。）などてこゝには在すや、と呼びかけて、その肩を拍くものあり。畢竟この人は是いかなる人ぞ。そは次の卷を讀得てしらん。

は、とてもこれを救ひがたし、さて苦々しき事かな、と思ひつゝ、便應ていふやう、魯達は元わが父の處にありし、經略府の軍官なり、近曾わが手に屬して、半點の過もなかりしが、今日人を殺すうへは、拏て法の如く行ひ給はん事勿論なり、父は遠處に鎭守たれば、この事後にこそ申つかはすべれ、と回答すれば、府尹はこゝろを得て、州衙にかへり、當日緝捕使臣を呼つどへて、文書を押下し、犯人魯達を捉ふべき旨を命すれば、王觀察といふもの奉りて、二十人あまりの做公人とともに、魯達が宿處に走むかひしに、魯達は今朝逃亡て、ゆくへ定ならずと聞えしかば、王觀察やがて部署して索れども、時も遙に隔れば、急には捉ふべうもあらず、衆皆ぜひなく立かへりて、如此々々の由を演說するに、府尹聞て、ふたゝび文書を各處へ押下し、彼魯達を捉へ來らば、賞錢一千貫文を給ふべき旨を令しらせ、鄭屠が一屬、坊正、里正、房主人を呼び出して、件の情由をいひわたしければ、鄭屠が家には棺木を備て、その屍を葬ける。話この下になし。さても魯達は、當日渭州の地を離れて、東に逃れ西に走り、群を失ふ孤鴈、網を漏し活魚、更に明なる月に翔り、還て流るゝ水に泝るに異ならず、その遠近を分ねば、まして高低をも顧ず忙しくして路行人に撞倒り、脚は快して陣に臨む馬のごとく、いくばくの州府を過りつゝ、身を逃れて路を避ず、到ところを一日の家とせり。い

雁門縣る
魯提轄
故人ふ逢

一字の全堂水陸道場をはじめ、鈸兒鐃兒の響に齊く、鄭屠は忽地挺在て、やうやく唇の色も變りし程に、魯達私に思ふやう、われは只いたく打て懲さんと思ひしに、僅三拳にしてもろくも死せるかな、彼いよいよ絶斷なば、人よもわれを安穩にてはおくまじと思案し、遂に拔足に去らんとせしが、その屍を見かへりて、汝詐死したりとも、誰かこれを實とすべき、われかさねてこゝに來て、慢々と理會ん、目今の事遣な、と且罵り且步み、やがて宿所に走かへりて、衣服を被かへ、盤纏を懷にし、眉に齊き一條の短棒を提て、南門より走り出で、驀地に脫去ぬ。さて又鄭屠が眷屬、近隣の衆人等は、鄭屠を助起してさまざま勸るに、半日あまりを經たれども、遂に活ず、既に黃泉の客となりしかば、衆相語て州衙に訟出で、便告狀を進れば、府尹廳に立出て、狀子を看をはり、右左を見かへりていふやう、魯達は經略府の提轄なれば、わが心のまゝには捕捉がたし、とて、俄頃に轎に上りて、經略府に赴き、門前にて轎子より下立ば、把門軍士かくと告し程に、經略やがて廳上に出迎て對面するに、府尹禮儀を厚していふやう、相公の府中なる提轄魯達、今故なくして市人鄭屠を打殺しつ、よりてまづこの事を相公に聞え進らせて、ともかくもはからはばや、と思ひて參れるなり、と告るにぞ、經略うち驚きておもふやう、魯達は武藝に勝れたれども、麁鹵にしてかく人命を傷ふうへ

異ならず。鄭屠も今は忍び得ず、怒り脚底下より直に衝て、頂門心の頭へ登り、骨を剔尖刀を引提て、一道烟走に跳り來るを、魯提轄拔足に、外面に立出れば、近隣の火家、過路の老弱、すべて圍住て、これを見るといへども、魯達が猛威に懼怕れて、勸解んとするものもなく、彼店二も、この光景に驚き呆れて、二人の背後へ躱けり。時に鄭屠は、右の手に刀を挙げ、左の手にて魯達を揪んとするところを、魯達は勢に就て、彼が左の手を按住め、引倒しつゝ胸脯を、一歩撲地と踏住り、甾のごとき拳を揚げ、鄭屠を看著ていふやう、われは當初、老种經略相公に投ひて、關西五路の廉訪使なりしかど、鎭關西と喚事をなさず、汝はこれ肉を宰り、刀を操る屠戸にして、狗にひとしき愚者なるに、いかなればみづから鎭關西とは稱るぞ、しかのみならず、汝翠蓮父子を強騙て、三千貫の借錢を負せたる天罰、今こそ思ひしるべけれ、といきまきて、鼻子上を丁と打ば、鮮血さつと流れ出で、鼻子は半邊へ歪つゝ、恰一軒の醤油店、醎的、酸的、辣的、一度に滾ごとくなれば、鄭屠は大に苦みて、もてる刀を捨しかば、魯達又拳をあげて、眼眶を丁と打に、烏珠高く迸出て、一軒の綵帛舗、紅的、黒的、青的、引ちらすに彷彿たり。兩邊にてこれを見る人、魯達が勇力に膽を消し、只逡巡して前み得ず。この時鄭屠は虫の鳴ばかりなる聲音にて、許し給へ〱、と叫べども、魯達罵てなほ息ず、又一拳大陽の上を打ば、

細やかに切む折しも、店小二は、手帕をもつて頭を包み、鄭屠に金老が事を告んとて來りしに、魯達が肉案門のほとりにあるを見て、怕てあへて攏來ず、房の簷下に停立つゝ、遠くうち望てぞ居たりける。かくて鄭屠は、肉を整々に切了り、これを荷葉に包ていふやう、提轄これより人をして送らせ申べきに、將て去給へかし、といへば、魯達又いふやう、われ又別に望あり、十斤の肥的を、これ又臊子に切て進らすべし、もし半點も精肉をまじへたらば、御用には立がたし、といふ。鄭屠聞て、精肉は裹て餛飩にもなれど、肥的は臊子に切せて、何にかし給ふべき、といへば、魯提轄眼を睜り、とまれかくもまれ、相公の鈞旨とて分付られたる事なれば、我も其故をしらず、汝切ばはやく切め、と焦燥に、鄭屠はぜひなく又十斤の肥的を切みて、これをも荷葉に包みなどするに、彼是隙どりて、一時あまりを經るといへども、店小二は魯達が歸らざるによりて、なほ裡に入る事を得ず、魯達は金老親子がいよ／＼遠く走りつらんと思ひしかば、兩包の肉を採て、又鄭屠にうち對ひ、われなほ別に望あり、十斤の寸金軟骨を臊子に切て進らせよ、といへば、鄭屠はます／＼呆れ果て、提轄何とてかく、われを消遣給ふぞ、と打笑へば、魯達つと身を起し、われ汝を消遣といふとも、何か苦しかるべき、といひもあへず、兩包の肉を把て、鄭屠が面へ打つくれば、二十斤の臊子、はら／＼と散亂して、肉を雨に

小二はこれに驚き怕れ、頤を抱へつゝはしり躱て、主人にかくと告にければ、主人うち驚て立出しが、金老翠蓮は、既に街のかたへ走り去ぬ。魯提轄おもふやう、われ今こゝを退かば、渠奴等定めて金老を追蒐べし、われ權こゝにありて、家内の者どもを遮とゞめばや、と思案しつ、店上の凳子に尻かけて、行もやらず戍居れば、店主人その猛威にや怕れけん、一言半句の問答にも及ず、手を空してながめ居たりける。魯達はかく圖て後、時刻を考へ、今は追とも急には及じとて、遂にこゝを立出て、狀元橋を望て走ゆきけり。この朝鄭屠は、兩間の門面を押ひらき、兩副の肉案をならべて、猪肉許多を掛わたし、小厮に商賣の指揮などしてありける處へ、魯達大踏に歩みて入來れば、鄭屠見て出迎へ、提轄何事の候ひて、めづらかにも詣來給ふものかな、といへば、魯達は聲をふり立て、鄭屠々〱、われ經略相公の鈞旨を奉りて來れり、はやく精肉十斤を、臊子に切て進らせよ、もし半點の肥的も、そのまゝにてあるときは、御用にはたゝぬぞ、と呼れば、鄭屠聞て、命承りぬ、と同答しつ、魯達を凳子にやすらはせ、使頭を呼て肉を切せんとすれば、魯達又いふやう、彼等は腌臢厮なるに、うち任せおく事やある、汝みづから切べし、と焦燥にぞ、鄭屠はいと怪有々〱しき事かなと思ひながら、說得是なり、それがし切て進らせん、とて、肉案の上につと居て、みづから十斤の肉を、いと

て、速く行李を收拾よ、われ明日朝まだきに發付て、故郷にかへすべし、われゆかばかならず店主人も阻べからず、と説示せば、金老は女兒とともに、魯達を神佛のごとく伏拜み、〳〵おのが宿處へ立かへれば、魯達、史進、李忠等も引つゞきて酒肆をたち出で、街の上にて相わかれ、史進、李忠は、おのれ〳〵が旅宿を投て退りける。さる程に、金老父子は、思ひもかけず十五兩の銀子を得てふかく歡び、一時に行裝を整て、房宿錢など遺なく算清し、次の日早天に起出て飯を喫べ、もつぱら魯提轄がおとづれをまつに、魯達は當日經略府の前なる宿所にかへりしが、とかく憤に迫て、晩飯さへ喫ず、夜のあくるをまちて、金老が旅宿に到り、店小二を呼出して、金老父子を招すれば、金老は翠蓮とともに忙しく走り出て、その恩惠の淺からざるを歡び聞え、擔兒を挑て走り去らんとするを、小二見てうち驚き、金公いづちへか去給ふ、といひもあへず、父子をしかと攔住れば、魯達傍より前みより、この兩人、汝が家に房錢などの虧ありや、などてわりなく住るぞ、といへば、小二聞て、房錢は曉昔遺りなく算還したれど、彼鄭大官人の錢をいまだ還し果ざるに、遠く放遣ときは後難脱れがたし、といへば、魯達忽地眼を瞋し、鄭屠が錢はわが方より還すべし、汝それにてもなほ父子を住るや、といひ懲せば、小二おそる〳〵再び口を開んとする時、魯達拳を揚て其面上を打しかば、板齒二枚を打折けり。

を屠りて世をわたる、腌臢しき潑才なり、とて、只管に怒罵り、史進李忠を見かへりて、御身二人はしばしこゝにて待給へ、われ今ゆきて、鄭屠を打殺し來らん、といひも果さず、既に走り出んとするを、史進李忠左右より抱き住め、さま〳〵いひこしらへて寛るにぞ、魯達やうやく元の座に復るといへども、怒なほ息らず、金老父子に對ていふやう、汝等安堵てわが理會を見よ、まづ汝等に盤纏を與へて、明日東京へ旅だたすべし、といへば、父子のものは掌を合せ、もし斯のごとき庇を蒙るときは、寔にわれらが爲には重恩の父母にてましますなり、しかはあれど、我們こゝを立退ときは、鄭大官人かならず店主人を討て、彼錢を返せといふべし、こゝを以店主人放遣ことを肯いたすまじ、といへば、魯達聲を勵し、われおのづから道理あれば、聊も妨なし、といひつゝ、懐を探りて、五兩の銀子をとり出し、卓の上に放下き、さて史進に對ていふやう、われ今日はもちあはせたる銀この外になし、御身銀あらば些を借與給へ、明日はかならず還し進らせん、といへば、史進は安き事なり、と回答て、包裹より一錠十兩の銀子をとり出し、やがて卓の上に放在ぬ。魯達又李忠に對ひ、汝も些を借せ、といふに、李忠しぶ〳〵二兩の銀子をとり出せば、魯達は彼が吝して、銀の少きをうちはらだち、これをば李忠に投かへし、只この十五兩の銀子を金老に與へていふやう、汝父子これを盤纏とし

事、日にいく度といふをしらず、父は年も老て、元來懦弱なるものなれば、これを爭ひていひ諦んともせず、彼は錢あり勢ありて、當初嘗一文をも與ざりし身價を、文書を證据として只管に債侍り、こゝに於ていかにともせんすべなさに、小より習おぼえし小曲兒を唄ひ、この酒樓に來りて、日々に些の錢を獲て、過半は彼に返し、そのうち僅ばかりを殘して、親子が盤纏とし侍りしに、この兩三日はたえて酒客も稀なれば、彼錢の限りにたがひ、いたく討られて、いかなる恥や見つらん、と思ふにかひなき心から、淺ましくも又悲くて、泣聲外へもらせしを、官人たちに怪られ、面目もなく侍り、といひつゝ、狹き袂を顔に掩ひ、よゝと泣て涙雨のごとくなれば、魯達又問て云やう、汝が姓は何とかよぶ、今いづれの客店にかある、又彼鄭大官人とやらんは、いづちに住ひするものぞ、と問に、老兒答て、それがしが姓は金氏にて、排行は二郎也、又女兒が小字は翠蓮と呼て候、（金氏の女兒を翠蓮と名づけしは、潘妃が金蓮歩の故事にして、後世婦人の行むを金蓮歩といへばなり。）便前面の東門の裏なる、魯家といふ客店に寄宿して、毎日にこゝへ通ひ候なり、又彼鎭關西、鄭大官人といふ人は、狀元橋といふ橋の下にて、獸肉を賣て活業とする、鄭屠といへるものなるが、綽號を鎭關西と稱候、と親子首尾おちもなく物がたれば、魯提轄聞了て、いと腹だたしき氣色にて、鄭大官人といふ奴を、何人かとおもひしに、原來この經略府の前にありて、豬

板をぞもてりける。彼女子は十分の容貌なしといへども、すこしく人を動すの顔色ありて、翠の黒髪は一枝の玉簪を插し、柳の細腰には、六幅の紅羅裙子を繫び、雪はづかしき肌妙にして、遠山の眉を顰め、涙さしぐみて珠を落すばかりなる形勢は、もし雨に病にあらずは、かならず雲に愁るなるべく、定て是憂を懷き、恨を積人とおぼし。さて彼女子は、涙をかき拭て、深深と三人の前に立出で、三箇萬福、（萬福とは、唐山の婦女子、人に對しての禮なり。しる人にても、はじめてあふ人にても、まづ萬福を唱て、次に餘談におよぶなり。この方の婦人、人に對して御機げんよう、おめでたうなどいふがごとし。）といふに、彼老兒も拜伏して、三人に見えしかば、魯達問ていふやう、汝兩人はいづくの人ぞ、又いかなる情由ありて、いたくうち泣たるぞ、といへば、女子答て、わらはは元東京のものなるが、この渭州の親眷を便りて、親子三人はる〳〵と來りしに、はからずもその人は、近曾南京に搬移りしと聞えし程に、賴む木蔭に雨漏こゝちし、しばし逗留してありけるうちに、母親は客店にて頓に身まかり、父子二人いよ〳〵流落れ、うき月日を送る折しも、鎭關西、鄭大官人（富める人はなべて官人と稱するなり。）といふ財主ありて、いつの程にか奴家を見たりけん、媒をもつて妾とせんよしをいひこしらへ、强て三千貫の文書を寫させて、いまだその錢をば遞與さず、わらははばかりを迎とりしが、僅三個月にも及ざるに、彼家の大娘子、嫉妬ふかくして、忽地わらはを追出し、はじめ生受せし店主人に著落侍りて、彼三千貫文の身價を、返し納よと責むる

魯提轄酒樓ニ金翠蓮父子を憐む

いひつゝ、圍住たる人を右に推左に交へ、この愚者ども、いかに物が見たきとて、屁眼ほどは闞よかし、もし速に立去らずは、いたく打べし、と罵るに、衆皆魯達が勢の猛に驚き怕れ、紛紛として四方に立去りにければ、魯達はわりなく李忠をも伴ひつゝ、潘家といふ酒樓に登り、三人團座して酒酌かはす折しも、間壁閤子に人ありとおぼしくて、頻に啼哭したりければ、魯達憤々して、ありあふ碟兒盞兒をかい摑み、樓の板上に投しほどに、酒保この胖響にうち驚き、慌忙しく走り來れば、魯提轄聲をふり立て、われたま〳〵こゝに詣來て酒を喫といへども、酒貲を借べしといふにもあらず、しかるをなどて忌々しき人の啼哭を聞せて、酒興を醒させんとはする、畢竟汝等がわれを侮るにこそ、といきまきあらく罵れば、酒保抄手していふやう、官人まづ怒を息給へ、それがしいかで人を泣せて、身の樂といたすべき、かれは日ごとにわが樓上に來りて、生活をなす父子のものなるが、官人たちのこゝに在すをしらず、かれら一時に事に迫りて、思はずうち泣て候ひしものならん、何事も僕が面皮に看て許し給へ、と倍話ければ、魯達聞て、さはいへわれは一切曉得ず、汝はやくその人を喚來りて、われに見せよ、と焦燥ば、酒保おそる〳〵鄰房に赴きしが、程もなく件の兩人、魯達等がほとりに歩み出たり。前にすすみし一人は、十七八歲の女子にて、背後に從ふ一人は、五六十歲の老兒なるが、手には串柏

小种經略相公の守たまふ州なるを、御邊聞あやまちて、索來給へりとおぼし、しかればいかに索給ふとも、王敎頭は當處にはあらず候、といふに、史進もやうやく心づきて、只管後悔したりける。魯達は史進がいと本意なげなるを見て、御邊定て長途の疲もあるべし、誘たまへ彼處に赴て一杯の酒をも喫ん、とて、手を携て伴ふにぞ、史進も伴れて茶坊を立出る時、魯提轄見かへりて、茶錢はわれ明日持參すべきぞ、といふに、茶博士應て、提轄かばかりの茶を喫給ふとも、何か苦しかるべき、と回答するを聞かけて、兩人こゝを走り去り、四五十步も來りしに、只見れば人あまた圍住て、いと閙しければ、史進は何事ぞと思ひつゝ、衆人を開わきてこれを見るに、圍の中に一箇の人ありて、十來條桿棒を使ひ、十數箇の膏藥を盤子に盛りて、これを賣にてぞありける。史進つら〳〵彼人を見れば、むかし初て武藝を學びし師父打虎將李忠といふものなりしかば、史進思はず聲をかけて、その名を連喚し程に、李忠もはじめて史進を看著て大に驚き、互に一別の情を述れば、魯達はいともどかしうおぼえて、李忠に對ひ、汝既に史大郎と師弟の因あらば、今吾儕と共に退りて、三杯を（三杯は酒をいふなり、此方にて酒を九献といふがごとし。）喫んや、といへば、李忠應て、それがしはこの藥を賣をはりて、後よりぞ參るべき、提轄は史進を將て、先へゆき給へ、といひもあへぬに、魯達大に焦燥て、汝ゆかばもろ共にゆけ、いつまで是にまたんや、と

すべし、といふに、史進慌忙しく身を起して、禮儀を舒しかば、彼人も又史進が相貌堂々として、好漢なるを見て、會釋しつ、互に席をすゝめけり。時に史進がいふやう、いと卒爾にはあれど、官人の高姓大名は何とか告給ふぞ、といへば、彼人答て、われはこの經略府の提轄をつとむるものにして、姓は魯、名は達といへり、こゝを以人われを稱て魯提轄ともいふなり、御邊は又いづちの人ぞ、その名字を聞まほし、といふに、史進いよ〳〵謙遜り、それがしは華州華陰縣の人氏、姓は史、名は進といふものなり。さて官人に問申たきは、それがしに一人の師父あり、元これ東京八十萬禁軍教頭王進といふ人なり、今はこの人、當所の經略府にあるよしなれば、索來れり、宿處はいづちにや、教給へ、と叮嚀に尋れば、魯達聞て、御邊は史家村なる九紋龍史大郎にはあらぬか、といへば、史進拜伏して、それがし便九紋龍なり、といひも訖らぬに、魯達連忙しく禮儀を還し、常言に、名を聞は面を見るにしかず、面を見るは名を聞より勝れりとぞいふなる、御邊がたづねたまふ王教頭は、東京にありて、太尉高俅に憎れたる、王進が事にあらずや、といふに、史進點頭て、宣ふごとくその王進が事なり、今はいかにしつる、しり給はゞはやく教給へかし、と請需にぞ、魯提轄がいふやう、われも豫て王進が名は聞及びしが、この人は延安府の鎭守たる、老种經略相公の處にありとぞ、この地は渭州にして、

ひは玉鉾の路にまよひ、夜は荒き林に宿りて、在明の月をながめ、晝は險き谷を渉て、夕づく日の影に吟ひ、霜に臥雨に歇み、凡半月あまりを經て、渭州の地にも著けるが、この裡に經略府ありと聞れば、師父王進は其處にこそと思ふにうれしく、當日城下に到て、六街三市を徘徊するに、一軒の茶坊、路口にあり。史進はこの茶坊にやすらひつゝ、端ぢかなる凳子に尻うちかくれば、茶博士これを迎て、客官には、いかなる茶を喫給ふぞ、と問ふ。史進答て、われは泡茶をこそ喫べけれ、といへば、茶博士やがて泡茶を進らするにぞ、史進は茶を喫ながら問けるやう、この裡なる經略府はいづちにある、と問ば、この前面なる府便それなり、と答ふ。しからばその府の中に、東京八十萬禁軍教頭王進といふ人あるをしれりや、と問ふ。茶博士しばし沈吟て、この府裏には教頭極て多ければ、三四人王氏を名告る教頭もあれど、いづれか王進といふ事は、よくも辨候はず、と物がたる折しも、只見れば一人の大漢、大蹈に歩み來て、茶坊の凳子に無手と坐す。史進まづこの人を見るに、その模樣軍官とおぼしくて、面圓く、耳太して、鼻直り、口は方にして、腮の邊に髯鬚しげく生出で、身の長は八尺あまりありて、腰の闊は十圍（指にて寸をとるに、十開におよぶを十圍といふ。）もあるべし。この人こゝに來りて茶を喫とき、茶博士史進に對て、客官彼王教頭を尋んとならば、この提轄に問給へ、かならずよくしりて在

九紋龍莊前に縣尉と戰ふ

こにわが師父王教頭は、關西の經略府に在すなる、とかくこの人をたよりて、彼處にこそ赴くべけれ、と思案しつゝ、一日朱武等に存念をかたりて、別を告しかば、朱武等三人これを聞て、御身遠方へ赴ん事を欲せずとも、今よりこの寨の主となりて、世を安らかに送り給へ、もし又草賊の隊に落ん事を厭給はゞ、我們力を合せて莊院を舊のごとく整ひ、ながく御身に從て、良民となるべし、といふに、史進がいふやう、おの〳〵の好情を詐にはあらねども、既に做公人を殺したれば、故村へ立かへる事かなひ難し、しかれどもわれ潔白の人として、この寨の主となり、なき父母の名まで汚ん事はいともかしこし、縱おの〳〵いか程宣ふとも、とても住る身にしあらねば、明日袂を分なん、とて、朱武等が苦に住るをも聽ず、莊客等をばすべて少華山に留おきて、次の日些の銀子を懐にし、ひとり行裝をとゝのへて山を下れば、莊客どもは只顧主從の別を惜み、朱武等三人も小嘍囉を將て、麓まで送りゆき、涙をそゝぎて留別の情を舒れば、史進はこの程の庇を歡び聞え、遂に關の西を投て、旅路のそらに赴きけるとぞ。

○魯提轄拳して鎮關西を打つ

九紋龍史進は、少華山をたち出て、關西の滑州を望てゆく程に、或はあし曳の山を越え、ある

王四を呼て只一刀に斫殺し、莊客に命て、莊院の四方に火を放させ、朱武等三人とともに鎧一縮して、おの〳〵腰刀朴刀を拔そばめ、門を開きて走出たり。この時兩人の都頭は、人數を遠けて、史進がおとづれを待たるに、案に相違して、史進みづから煙の裏より切て出で、朱武楊春は左右に從ひ、陳達は後に備へ、小嘍囉と莊客等とを引率し、一衝一撞、東を指ては西を殺し、その勢破竹のごとく、兩人の都頭が、證人李吉を從て、停立る眼前へ、驀地に擊てかかれば、三人大に懼怕れ、ぜひなく逆へ戰んとするを、史進は李吉を見るとやがて、一聲の霹靂頭の上に落るがごとく、咄と噎てその朴刀閃くよと見えたりしが、李吉が體兩段にわかれ、忽地撑と仆れける。兩人の都頭は、この光景にます〳〵怕れ、慌忙しく迯んとするを、陳達、楊春遮りとどめ、遂に兩人を切伏れば、縣尉は活たる心持もなく、鞭を鳴らし馬を跑し、土兵もろ共に、たつ足もなく逃うせぬ。かくて史進は、朱武、陳達、楊春と、莊客小嘍囉を從て、少華山の案內に到て喘息するに、朱武等三人、俄頃に牛を殺し馬を宰せ、賀喜の酒宴を設て、おの〳〵醉を竭しけり。話この下になし。さる程に史進は思ひもかけず家を喪ひて、少華山にある事數日に及びしが、心の中におもふやう、われ旣に莊院を燒失ひて、家財什物すべて灰燼となりぬれば、かへるべき家もなし、さればとてこの處にも、ながく住らん事をおもはず、こ

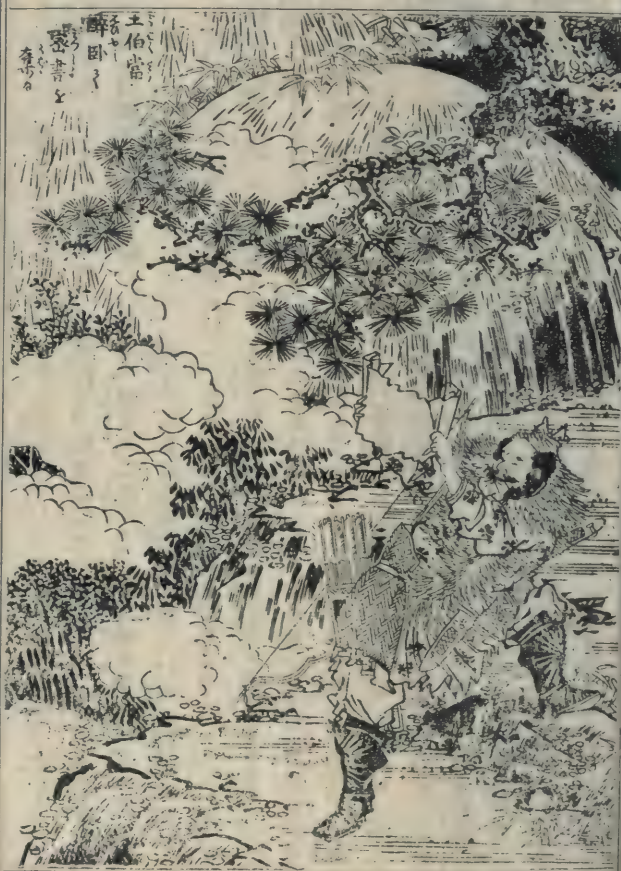
この期に及ても、なほ頼哩とするや、猾戸李吉原告して、こゝにあり、とて指し示すに、史進は李吉を月光にすかし見て大に怒り、やをれ李吉、汝甚胡說なり、今何の證据ありて、かゝる訴にはおよびしぞ、といきまきあらく罵れば、李吉からくとあざ笑ひ、われもこのことを知らざりしが、向に林原にて王四が遺せし少華山の返簡を拾ひしによりて、うちも置れず訴たり、證据なしとはいはせじ、と應しかば、史進忽地疑ひ惑ひ、王四を呼て、かゝる事ありや、汝往には返簡なしといへりしが、いと覺つかなし、とくいへ、とく語れ、と責問にぞ、王四も今は匿がたく、當夜いたく酒を飲て、林の内に醉臥し、返簡をば奪ひとられしかど、明白に聞えまゐらせんには、よもそのまゝには置給はじ、と驚き怕れ、返簡は來らずと欺き申たり、只枉て身の罪を恕給へ、と賠る折しも、討手の大勢喊聲を合せて、只管こみ入らんとする勢を示せども、元より史進が武勇に怕るゝものどもなれば、漫に門内へは攻入らず。時に史進外面に對て、ふたゝび呼りけるは、兩人の都頭に物申さん、しばし鬧動を鎭てそれがしがいふ事を聞給へ、旣に事發覺るゝうへは、陳ずるに言語なし、よりて只今三人の頭領を縛て引わたし進らすべうおもふなれば、圍を退けて待給へかし、と高やかに叫びけり。兩人の都頭は、これを聞て潛に歡び、しからばはやく賊を縛て遞與候へ、と回答する間に、史進は梯子を閃と飛下り、

初編　卷之四

○史大郎夜華陰縣に走る

さても史進は、花陰の縣尉が、二人の都頭とともに、許多の土兵を牽て、莊院の四面をとり圍しを見て、こはいかにせんと議するに、朱武等三人跪ていふやう、大郎、御身は元來乾淨の人なるに、吾儕が爲に進累せられ給ふことやある、はやく我儕を縛て引わたし給へ、しかるときは負累を免るゝのみならず、愛たき賞に預り給ふべし、といふを、史進聞もあへず頭をうちふり、これはいかなる言語ぞや、もし汝達がいふごとくせば、個三人を賺して招きよせ、潛に官に訴聞えて、賞を請にこれ齊し、これらは己を利せんとして、天下の笑を惹ものなり、今はいかにともせんすべなし、もし死るときは汝達ともろ共に死し、活る時は汝達ともろともに活ん、しかれども、事をはやまるも智の足ざるに似たれば、われまづ討手の大將に見參して、その來歷を聞べし、といひ了り、梯子に上りて、頭を梁牆の上よりさし出し、兩人の都頭、何事のおはしまして、夜半にわが莊内を劫し給ふぞ、と呼れば、二個の都頭答ていふやう、大郎

て楚としれり、みづから出て縛を受るや、踏こみて生拘んや、いかに〳〵、と叫ぶ聲、谺に響て夥し。嗚呼彼史進、半點の邪なく、只一旦の義に仗て、朱武等三人と親しく交參ひ、禍その身に及ぶ事、原是天罡地煞星の、一齊に相會ものなるべし。畢竟史進三人の頭領と、いかにしてか脱れ出る、そは後の巻を讀得てしらん。

頭領に酒を強られ、饗さま〴〵ありて、とかく放給はず、よりて心ならず夜をふかし候ひき、是併主公の福蔭にこそ、といへば、史進聞て、回書はなきや、と問に、王四又答けるは、三人の頭領、既に回書を寫んとし給ひけるを、僕止めて稟やう、かく許多酒を過して候へば、回書を賜て、途中に悞あらばいかにせん、究て十五日に詣來給ふぞならば、回翰には及び候まじ、と申せしかば、しからば汝よきに聞え候へ、その夜は甲夜より必まゐるべしと宣ひつるなり、と日來の辯舌を振て誣ば、史進ます〳〵歡びて、世の人汝を賽伯當と稱するも宜なり、といひて、只顧彼を賞たりける。かくて中秋十五夜の佳節にもなりければ、史進は果品の酒を按排して、一腔羊、百箇の鷄、鵞を煮させて、彼三人をまつに、この日天晴わたりて、一輪の月閃き登り、十分の影滿て晝の如し。さるあひだ少華山の頭領、朱武、陳達、楊春は、僅に三四人の小嘍囉を將て、史進が莊院に入り來れば、史進莊客に命て、門戸を堅く鎖させ、朱武等三人を後堂に作ひつゝ、賓主四人團坐して月を賞翫し、羊を割み、酒を勸て、四表八表の物がたりに、いよ〳〵興を催す折しも、花陰縣の縣尉、馬上勇々敷打扮て、二人の都頭と、三四百人の土兵を引率し、蕉火さながら晃星のごとく、史進が莊院の四面八隅、稻麻のごとくとり圍み、異口同音に喚はるやう、少華山三人の強盜ども、今宵こゝに會合する事、出首のものあり

王伯當
酔臥して
密書を
奪はる

して抨ひし程に、朱武等が書翰と銀とを抨ひ出しつ。この李吉元來少しは文字をもしりてければ、その書を押しひらきて讀に、上面寫に少華山朱武、陳達、楊春とありて、その餘の事は、文を兼武を備たる言語なれば、讀解得ずといへども、彼三人の名字あれば大に喜び、われ今思ひがけず大財に有つきたり、近來官より三千貫の賞錢を出し、人を招きて三人の強盜を捉へさせ給ふなるに、われ前日矮の丘乙郎にあはんとて、史進が家を張望し時、史進ふかく疑て、われに偸心ありと罵しが、彼却て強盜と交るは何事ぞ、かゝる證据を得し上は、出首せずはあらじとて、銀と書翰を奪ひとり、直に走去けるを、王四はゆめしらずして、亥刻過る比に、はじめて醒て大に驚き、起あがりて腰を探れば膳膞なし、こはいかにと慌忙き、彼此を索るに、莎草の中に膳膞は捨ありしが、裡には銀も書翰も見えず。王四いよ〳〵當惑して、つく〴〵と思ふやう、銀はうしなひても惜むに足らねど、返書を失ひては一言の分說なし、もし明白にこの事を告申さんには、大郎怒りていかなるからきめや見せ給はん、只回書はまるらずと僞りて、その場をくるめんものを、と深念しつ、飛が如くに走歸しかど、夜ははやいたく深にけり。史進は王四が遲く歸りしを見て、汝何とてかく閒どりし、と問に、王四答て、それがし三人の

に彼王四こそよけれとて、委く使の旨を命せて、外に一人の莊客をさし副へ、音物を少華山の案へ饋つかはせしかば、三人の頭領ふかくよろこびて、王四等に銀子十兩を與へ、酒食を勸て饗せば、彼等十四五碗の酒を喫み、いとうれしみて山を下りぬ。さる程に、史進は、一旦その義氣を感じて、朱武等三人と他事なく交り、物を饋り、物を得て、そこはかとなく日を過し、既に八月にもなりし程に、十五夜の月を、ひとり賞んも興なし、この夜には少華山三人の頭領を招くべしとて、その前日、一封の手書を寫め、王四を使として少華山へつかはしける。王四旨を稟て、やがて彼處に赴き、史進が手書をさし出せば、朱武等三人讀了て、只管よろこび、回書かい寫て王四に遞與し、彼には五兩の銀子を與へて、許多酒を喫せ、欵待日來にいやましたれば、王四は醉を竭して山を走下る折しも、この頃使して、をり／＼史進が家に來る小嘍囉に行逢しが、この小嘍囉王四を誘ひ、麁なる酒店にいたりて、又十五碗の酒を勸めし程に、王四いたく醉て酒店をたち出で、小嘍囉にわかれて、ひとり史家村にかへらんとすれば、山風に吹すさまれて、ます／＼醉出で、只踉々蹌々としつ、一つの林を過るとき、株に跪きて撲地と仆れ、そのまゝ睡て前後をしらず。浩處に獵戸李吉は、兎を張ひて彼此を狩くらし、林の中を徘徊するに、豫てしれる王四が醉臥たるを見て、喚覺んと思ひつゝ、只見れば彼が腰膊の口解

讃しければ、陳達、楊春も、彼が義心の堅きを感じぬ。さて十日あまり經て、朱武等三人は、史進に命助られたる酬謝をせではあるべからず、とて、蒜條金三十兩を、二人の小嘍囉にもたせ、月黒き夜にまぎれ、史進が家に贈つかはしける程に、二人の使は初更のころに、その家に到り、私に史進に對面していふやう、三人の頭領、嚮に命助られたる高恩わすれがたく、聊一禮を謝さん爲、輕少たりといへども、これを饋進らせて候、と述訖り、件の金をさし出せば、史進は思ひがけずとて、更に受ざりしを、使の小嘍囉、叮嚀に薦て、もし受給はざれば、我們立かへりて、告ぐべき言葉なし、といふに默止がたく、しからば暫時預おくなり、とて、金を收め、二人の使に酒を飲せ、零碎銀一兩を與へてかへしけり。そののち半月あまりを經て、朱武等三人、又史進が家へ、一串の大珠子を饋りぬ。史進これを受けておもふやう、彼等三人われを敬ひ重じて、しば〳〵物を送り來せしに、われも些の酬恩せばやと思ひて、錦襖子三領を、新く縫たてさせ、別に三頭の羊を煮て、大なる盒子に盛り、さて孰を使にしてこれを饋らんと思ふに、年來召仕ぬる莊客王四といふものは、こゝろ利たるをのこなるをもて、世の人口順に、賽伯當と喚べり。これは唐の世のはじめに、伯當といふ辯者あり、今の王四もそれに似たりければ、伯當賽（賽はもどきと訓ず、華人梅もどきを賽瑪瑙となづけ、ぬす人を賽崑崙などよぶにてしるべし。）といへるこゝろなりとぞ。史進この日の使

れも殺すに忍がたし、と肚裏にて了簡し、汝等まづわれとともに來れ、といひかけて、草堂に伴ひ、さていふやう、われは是一箇の丈夫なり、今汝等が義心のふかきを、空しくせんもいとほしければ、陳達を許し歸さんと思ふはいかに、といへば、朱武楊春言葉をそろへ、もし如此ならば再生の恩を被る事、歡ぶになほあまりあれど、おそらくは大郎をも連累いたすべし、たゞ三人もろともに縛て、官へ解送し、賞錢を受給へ、といひて、思ひ究たる體なれば、史進こゝろにふかく感激し、汝等强盜たりといへども、その義心は却てふかし、さるを官に解送して、賞錢を乞ん事は、大丈夫の恥るところなり、ふたたびいふことなかれ、といひつゝ、陳達が縛をときゆるすに、三人ふかく歡びて、史進を神佛のごとくに伏をがめば、史進微笑て、汝等酒を飮や否や、と問に、朱武答て、死する事だに厭ざる身の、賜らんとある物を、などて固辭候はん、と答れば、史進大に歡びて、三人に酒を勸め、みな恕してかへしければ、朱武、陳達、楊春は、はじめて甦たるこゝちして、史進が高恩をよろこび聞え、少華山にぞかへりける。かくて三人の頭領寨にかへり、陳達、楊春、只管朱武が謀略の奇なるを賞嘆しかば、朱武がいふやう、われたまく苦しき計をもつて、陳達を救ひ出すといへども、九紋龍もし義氣のすぐれたるにあらずは、よもわれくを恕してはかへさじ、誠に史進は當世の豪傑なり、と稱

をもつて敵しがたし、たゞかやう〳〵に謀なば、倘若陳達を救ひ出す事もあるべし、といひつ、額を合せて私語ば、楊春聞て、理とうけ引つゝ、二人うちつれて山を下り、史家村を望ていそぎける。この時史進は怒なほ消らでありけるに、荘客又走り來て、少華山の朱武、楊春、よせ來れり、と注進するにぞ、史進ふたゝび馬に上り、やがて門外に停止てこれをまつに、おもふにたがひて朱武楊春は、小嘍囉をもめしつれず、只二人歩行してこゝに來り、史進が馬前に跪きて、只管涙を流せし程に、史進も疑ひ惑ひながら、やをら馬よりおり立ち、汝兩人ここに來りて、何事をか訴るぞ、と問に、朱武いよ〳〵泣て、それがし等三人、官司の逼迫を被り、已ことを得ず山に登りて、落草しそのはじめ、もろともに盟を立て、おなじ日には生れずとも、只ねがはくは同日に死ん、縱劉備、關羽、張飛が義心に及ずとも、その志はこれおなじかるべし、と約しぬ、しかるに今日、陳達われ〳〵が好言を用ずして虎穴に陷り、立地に擒捉るゝといへども、却救ふにちから及ざるをしるがゆゑに、われ〳〵も又英雄の手にかゝりて、潔く死べく思ひ定め、兩人相伴て參れり、といひもあへず千行の涙にむせびければ、史進これを聞て思ふやう、かれらかくまで義心ふかきを、愁に官に解送して、賞錢を乞ん事、天下の好漢に笑はるべし、古よりいふ事あり、虎はさゝやかなる獸を食ず、今その憐を乞を見てわ

るゝ體にあしらへば、陳達得たりと矛取なほし、心窩めがけて刺んとするを、史進閃りと腰を捻れば、陳達が鎗空を刺き、馬人ともになだれかゝるを、史進猿臂を舒べ、陳達が腰縛摑て高くさし上げ、大地に撞と投著れば、莊戸ども走り寄り、忽地に縛つゝ、勢に乘じて責打ば、小嘍囉等途をうしなひ、四落八落に逃うせけり。史進は迯るを遠く追ず、陳達を引きたてさせて莊内にかへり、彼をば出居の柱に拴著け、なほ殘る二人の賊首をも生拘て後に、官に訴へ奉り、賞にあづかるべし、とて、衆人とともに酒を飲み、歡を竭せしかば、史家の莊戸ども、その武勇を感じ賞め、みなたのもしくぞおぼえける。さて又少華山の寨には、朱武楊春の二人、陳達が事を心もとなく思ひつゝ、いかにしつらん、などいひあへる折しも、小嘍囉ども逃かへり、陳達頭領、兩君の諫を用ひ給はず、果して史進が爲に生拘られ給ひし、と告て、史進が英勇、戰の形勢、見たるまゝに物がたれば、朱武楊春大に驚き、われ〳〵そのはじめより、陳達は史進が對家にあらざる事をしりつるゆゑ、しば〳〵止めしかど、彼聽ずして却て禍を引出したり、といひて、以の外周章す。時に楊春がいふやう、只このうへは數を盡して走むかひ、史進と雌雄を決して陳達を奪ひかへすか、もろともに陣歿するかの、二つより外あるべからず、いかにさはおぼさぬか、と問に、朱武答て、このこと決して無用なり、彼史進が武勇、ちから

九紋龍
勇敵
跳澗虎を
擒捉

す、もし恩惠を被りて、輒くこの處を經由ことを得たらましかば、並に一根の草をも動さず、故なく彼縣に赴くに于ては、回來るときに、厚く拜謝たてまつらん、と言を卑して述たりければ、史進呵々とうち笑ひ、わが家は代々里正を承當をもて、ゆきて捉んと思ひてしに、汝みづからこゝへ來ぬるを、えこそ放ては遣まじけれ、汝無用の舌を動さんより、はやく縛を受よ、といへば、陳達又いふやう、四海の中みな兄弟なり、などて一條の路を惜みて、怨を締んとはし給ふぞ、まげて恩惠にあづかるべし、と請もとむれば、史進頭を左右にうちふり、われは許して放過すべく思へども、只一箇肯せざるものあり、汝そのものに問てこの所を過れ、といふ。陳達、そは何人にて在すにや、と問に、史進答て、わが刀汝を恕すことを肯せぬぞ、と欺けば、陳達聞もあへず大に怒り、いはせておけばいはるゝものかな、汝及ばぬ腕だてせんとて、後悔せそ、と罵れば、史進も又大に怒り、刀を輪して打てかゝる。陳達も馬に拍いれ、矛を挺りて迎たゝかひ、一來一往、一上一下、刀尖より火花を撒し、人まぜもせず挑みあふ。一來一往は正に是、龍、水底に遊ぶとき、珠に戯るゝの風情あり。一上一下は正に是、虎、山中に餓たるとき、食を爭ふに彷彿たり。九紋龍怒りて打ば、三尖の刀頂門の上に飛び、跳澗虎嗔て刺ば、丈八の矛心坎を離ずして閃き、戰ひ既に數十合に及びしが、史進僞りて太刀筋やうやく亂

莊前莊後、四五百人の史家の莊戸、鎗を引提棒を横たへ、暗號をたがへず走り集り、史進が莊内に充滿たり。史進がその日の打扮には、頭に一字巾を戴き、身に朱紅甲を被て、上に青錦襖を著し、下に抹綠靴を穿き、腰に皮の𦜝膊を繫び、前後は鐵の掩心に、一張の弓、一壺の矢を携へ、手には一把の三尖兩刃、四竅八環なる刀を拿ち、火炭赤馬に、ゆらりと上て靮かいくり、莊きものは前に備へ、老たるものは後に立て、一度に喊を吶かけて、村の北口に押出せば、陳達も人馬を引て既に間近く寄せ來れり。史進敵を見わたせば、跳澗虎陳達は、乾紅凹面巾を戴き、裏金たる生鐵の甲を被て、上に紅衲襖を著し、下に吊墩靴を穿き、七尺あまりの攢線なる、𦜝膊をしかと繫び、高頭白馬に、白泡はませてうち跪り、一丈八尺ありける白點鋼の矛を横たへ、百五十人の小嘍囉を、前後左右に從て、一齊に喊を合せ、犇犇と寄せあうて、二員大將馬を乘出し、陳達馬上にありて身を欠し、聊禮儀を放へば、史進大に喝ていふやう、汝等人を殺し火を放ち、家を打村を劫の盜賊、天の責を被りて、當に死すべき罪人なり、汝も耳朶あらば、定てわが名を聞つらんに、みづから來りて虎の鬚を引んとするは、身の程しらぬ愚者かな、と罵けり。陳達はこれを聞といへども、なほ言葉を和げ、それがしこゝに來る事別義にあらず、わが山寨の中、兵粮乏しきによりて、花陰縣にゆきて粮を借んと欲

究て過あらじ、といふを、陳達聞もあへず、蒲城縣は、人民少して錢糧もおほからず、又花陰縣は、人戸豐に富て、錢糧に乏からず、しかるを大を捨て小を取らんとする事、さらにうけ引がたし、といふを、楊春又おしかへして、花陰縣を撃時は、史家村を經由なるに、彼九紋龍史進と聞えしは、雙なき英雄にて、虎よりも勇しとぞ、彼その村にありながら、いかで我們を放遣べき、この事思ひ止り給へかし、と諫れども、陳達更に聽容ず。汝はかひなき男子かな、只一人の史進を怕るゝ程ならば、許多の官軍をいかにせん、人はともあれかくもあれ、われは花陰縣をこそ打べけれ、といふを、朱武つく〴〵聞て、彼史進が武勇をば、われも粗聞しりぬ、汝彼處にむかふことを休て、蒲城縣を打給へ、といひも果ざるに、陳達うち腹だちて、よし〳〵汝兩人は、他の武勇のみを長て、自己の威勢を滅候へ、縱九紋龍、三の頭六の臂ありとも、何程の事かあらん、われ史家村をうち過て、花陰縣に押寄ん事、人なき郷にゆくが如し、と飽まで廣言吐ちらし、既に坐を立んとするを、朱武楊春押とゞめて、再三爭ひ諫れども、陳達一切肯せず、一時に點了して、鎧の腊膊繫ながら、馬に閃とうち跨り、百四五十人の小嘍囉を引つれて、鑼を鳴し鼓を擂し、驀地に山を下り、史家村へぞ走去ける。さる程に史進が莊客、鑼鼓の響を聞つけ、主人にかくと注進すれば、史進下知して、まづ梆子を敲せしかば、東西南北

油斷なし。抑少華山に寨を構たる、第一の頭領、神機軍師朱武といふものは、原是定遠といふところの人氏にて、よく兩刀を使ひけり。彼劍法は十分の本事にあらざれども、精しく陣法に通達して、廣く謀略あり。その形勢いかにとなれば、棕葉をもて道服とし、鹿皮をもて雲冠とす。瞼紅にして雙眼俊く、面白して細髯垂れ、陣法は孔明にも方べ、陰謀は范蠡にも勝れりとす。第二の頭領、跳澗虎陳達といふものは、原是鄴城といふところの人氏にて、よく白點鋼の鎗を使へり。其形勢いかにとなれば、力健に聲雄く、性粗鹵くして、長鎗丈八尺、撇すときはさながら雨の如し。第三の頭領、白花蛇楊春といふものは、原是蒲州解良縣の人氏、よく一口の大桿刀を使ふ。その形勢いかにとなれば、腰長く臂痩たれど、力は却て誇に堪へ、刀を把て敵に逆へば、刀尖花を撒すに似たり。されば彼朱武、一日陳達楊春に相語ふやう、今花陰縣より、三千貫の賞錢を出し、人を招きて我們を捉んとするよし、その聞えあり、もし彼處より寄せられなば、厮殺の戰なり、しかれば山寨の中に兵糧を積有へ、官軍を防ぐの准備をせではかなふまじ、この事いかに思ひ給ふ、と問に、陳達すゝみ出ていふやう、哥々の宣ふところ理におぼゆ、今より華陰縣に押寄せ、兵粮を借來らん、と異もなげに回答すれば、楊春しばし沈吟して、華陰縣にて粮を借らん事、甚しかるべからす、只蒲城縣に押寄んには、

李吉審に蚐華山の光景を説

李吉はこゝろえ果てかへりける。この時史進おもふやう、彼強盜既に許多の手下を聚め、縣尉だに怕れぬ程ならば、定てわが村坊へも來りて、騷擾事もあるべし、はやく渠奴等を防ぐ用心をするにはしかじとて、軈て廳前に走りかへり、莊客に命せて、當村の莊戶を殘りなく呼集させ、酒を湛へ、牛を殺し、もつぱらこれを俟程に、三四百人の莊戶、みな史氏を名告るもの、悉く來り集て、草堂の上に列座せり。時に史進莊客に洒酒せて、一面に酒を勸め、衆人に對ていふやう、仄に聞く、少華山に三人の強盜栖て、五七百の小嘍囉を聚め、掠に財を奪ひ、舍を劫こと傍若無人なりとぞ、しかれば渠奴等わが村へも來りて、囉唣させん事あるまじきにあらず、よりて今おの〳〵を招きて相語ふべく思ふなり、倘若強盜來る事あらば、梆子をもつて暗號とすべし、その時おの〳〵鎗、鎌、棒なんどを引提て走著給へ、またおの〳〵に事あらば、互に如此して救應ひ、もろともに村坊を保べし、縱強盜何百人寄來るとも、われみづから理會あれば、少しも怕れ給ふべからず、と說示せば、衆皆言葉を齊して、われ〳〵は愚なるものに候へば、とにもかくにも大郎の命に從ひ、梆子だに響候はゞ、早速走著候はん、と承引て、よくその暗號を定おき、史進が莊院を退出ける。史進はかく計りて後、俄頃に器械を准備して、門戶墻垣を堅固に修復し、又衣甲を拴束へ、馬刀を整頓て、賊を防ぐの用意、つゆばかりも

給ひそ、こゝの莊客なる、矮の丘乙郎を誘引て、一杯の酒を喫ばやとて來りしが、大郎この處に涼て在すに憚て、彼が出るを待けるなり、無禮は恕し給へかし、と賠たりければ、史進聞て、それはそれにてもありなん、汝は常時わが家に獵の獲をもて來て賣ぬれど、われ曾些の虧をさせつることもなし、しかるにこのごろはたえて一頭の兎だに賣與へず、こはわれに錢なしとおもひ欺るにこそ、といへば、李吉答て、それがしなでふ大郎を欺るべき、此程は獸を得たる事なきによりて、もて參らぬにて候、といふ。否さはいひそ、この凋き少華山に、などて獸のなき事あらん、この言甚胡說なり、とて、史進一切實事とせざれば、李吉又いふやう、大郎はいまだしろしめさずや、近屬彼山には、三人の强盜來りて山寨を構へ、五七百人の小嘍囉をあつめ、百十餘疋の馬を有ふ、その頭たる第一箇の大王を、神機軍師朱武と喚び、第二箇を、跳澗虎陳達と喚び、第三箇を、白花蛇楊春と喚ぶ、この三人を頭として、彼等常に火を放ち、舍を刼といへども、華陰の縣尉も制し給ふことかなはず、三千貫の賞錢を出し、人を招きて捉させんとなり、これによりてそれがしも渡世の路を塞れ、彼山へ登がたければ、さてこそ獸を得ずとは申しつるなれ、と物がたれば、史進熟聞て、われも少華山に、强盜栖よしを聞及しが、かばかりの事なりとも思はざりし、汝もしこののち野味あらば、かならず賣與よ、といふに、

初編　巻之三

○九紋龍大に史家村を鬧す

九紋龍史進は、王進に別れて後も、武藝いよ〳〵懈らず、毎日に氣力を打熬て、只管弓を射、馬を走め、半年あまり過しつるに、父の太公假初に病出しが、醫療看病その驗なく、終にむなしうなりにければ、史進いたく哀みて、西山の上に葬果て、過七の追薦好事すべて心を盡して營ぬ。元來彼九紋龍は、農業を務ることを嫌ひし程に、史太公なくなりては耕作を管るものもなく、只いたづらに月日たちて、六月中旬にぞなれりける。ある日の事なりしに、史進はあまりに暑熱に堪かね、交床を打麥場の柳蔭にもて出で、しぐるゝ蟬もあながまやとて、松ふく風をまちがほに、ひとり涼たる折しも、彼首に木がくれて莊内を探頭人あれば、こはこゝろを得ぬ、怪しくも見ゆる奴かな、と獨言つゝ、跳起て走り出で、老樹の背後を楚と見るに、豫て認得たる獵手の李吉なりしかば、史進これを呼とゞめ、汝うそ〳〵とわが莊院を張望るは、脚頭を見おかん爲ならずや、と咎るにぞ、李吉ほとり近う來て腰を折め、大郎（史進を敬ていふ詞）いたくな疑

に、この程やうやくその恩も報いつれば、近きうちに延安府に赴くべし、とて、一日太公史進に別を告て、日來の一禮を述ければ、史進只管とゞめていふやう、わが師何とて急に旅だたんとは宣ふぞ、聊も心おきなく逗留ありて、おなじくはこゝにて生涯をおくり給へ、それがし貧しきといへども、よろしく養ひ進すべし、といふに、王進答て、われ母とともに、こゝにて安く世をおくらんことは、こよなき幸福なり、しかはあれど、もし高俅聞しりて、追捕この家に迫るならば、御身父子を連累すべし、是元來わが希ところにあらず、縱ひいか程留給ふとも、とても留る身にしあらねば、明日袂を分べく思ふなり、殊さらわがゆく延安府といふ處は、土地肥て人を用るの州なれば、身を立る便なきにあらず、まづ〳〵このまゝ別れ候はん、といひて、いかに留れども留る氣色なければ、史進父子ふかく別を惜み、やがて留別の酒宴を設け、一疋の緞子と百兩の花銀を餞して、武藝指敎の酬謝とす。さて王進は、次の日擔兒を馬に拴縛け、母をその上に扶乘て、太公史進に辭別し、遂に延安府を望て立出けるとぞ。

なり、又それがしが兒子とては、この後生只一人にて、その名を史進と喚て候、かれ稚きより農業を嫌ひ、鎗を刺し棒を使ふ事のみを好み候へば、母はこれを憂事に思ひほそり、前年身まかり候ひぬ、されどそれがしは、彼が好むまに〳〵、つよく制し止もせず、又錢財をも惜ずして、許多師父をえらみ、年來武藝を學せ、又高手なる匠人に托みて、彼が一身に花繡させ、肩、臂、胸、膛のあたり、すべて九條の龍あり、これによりて滿縣の人、口順に彼を喚て、九紋龍史進といへり、教頭今日既にこゝにおはして、わが子をとり立給はらば、それがし厚く酬謝奉らん、といと叮嚀に托み聞ゆれば、王進よろこびて、太公心安くおもひ給へ、それがし覺得たる程の武藝は、力を竭して點撥いたすべし、とうけ引て、史進と師弟の契約をなし、なほこゝに逗留して、毎日彼に十八般の武藝、一々頭より指教したりける。抑十八般の武藝といふは、矛、鎚、弓、弩、銃、鞭、簡、劍、鏈、撾、斧、鉞、戈、戟、牌、棒、鎗、杈なり。今按ずるに、五雜俎に載るところの、十八般の武藝は、一に弓、二に弩、三に鎗、四に刀、五に劍、六に矛、七に盾、八に斧、九に鉞、十に戟、十一に鞭、十二に簡、十三に檛、十四に殳、十五に把頭、十六に叉、十七に綿繩套索、十八に白打とあり。上に記す十八般と大に同して少しく異なり。かくて光陰はやく過て、王進母子華陰縣にある事、半年にあまりしかば、史進は十八般の武藝十分に精熟たるに、王進なほ心を盡して、件々の奥妙を傳へ、今ははや孰に劣るべうもあらざれば、王進ふかく歡て、つくづくと思ふやう、われ一旦史太公父子が情に羈れ、こゝにある事數月に及びし

とたのもしく囘答するにぞ、太公大に歡びて、俄頃に酒宴を設け、王進母子を賓ざねにて、四人團坐して酒酌かはし、太公、王進に對ひていふやう、客人の武藝は、寔に尋常にあらず、定ていづ地の教頭にてか在すらん、苦しからずは名告給へかし、といふに、王進答て、今は何か匿候はん、はじめ張氏の商人なりと申せしは虚言にて、實それがしは、東京八十萬禁軍の教頭王進といふものなるが、かやう／＼の難義に係りて、母子京師を脱れ出で、延安府におはします、老种經略相公のかたに由縁あれば、其處をこゝろざして赴く折しも、母の病著によりてこゝ許の庇を蒙り、母も程なく快氣いたせし事、莫大の高恩忘れがたさに、わがうへを明し聞えまゐらするなり、といひて、彼高俅が佞惡まで、おちもなくものがたれば、太公父子ははじめてその素生を聞て、且驚き且痛み、さてこそ只人にはあらじと見えさせ給ひつる、と嘆賞して、ます／＼敬ひ語ふ間に、王進又いふやう、かくいへば誇るに似たれど、令郎の今まで學び給ひし武藝は、只花やかなるのみにて、戰場の用には立がたし、それがし點撥いたすに于ては、程なく上達あるべし、といふに、太公父子斜ならず歡びけり。且くして太公、王進にものがたるやう、それがしは先祖より、この花陰縣に住ひして、里正を承當候なるが、前面の山はすなはち少華山なり、又この邨は史家村とよびて、凡三四百軒の竈ありて、村中の民悉くみな姓は史氏

九紋龍莊内に
王進と
教を受く

なければ、王進は只うち笑みて、彼と爭んともせず。太公この光景を見て、しかれば兒子と較量して、いたく打伏せ給はるべし、縱打ころさるゝとも、自業自得なれば、聊も恨なし、といひて再三乞求し程に、王進も今は默止がたくて、無禮は許し給へ、といひつゝ、鎗架の上なりける、手ごろの棒をえらみ取り、しづ〳〵と立むかひて、まづ旗鼓といふ手を使ひ、棒を電のごとく閃して見せければ、後生は會釋もなく、只一打と逆來るを、王進わざと棒を挽き、二步三步逡巡す。後生は得たりとつけ入り、踏こみて打んとするを、王進はやく身を囘し、空を望て撲地と打ば、後生丁と受とゞむ。王進このとき、彼を打ばうつべかりしが、猜のつかぬやうにして、軟に贏をとらばやと思ひ、又その棒を引ほどき、腋の下へ閃と突入れ、一縱反ると見えつるが、後生は持たる棒を、遙あなたへ縱おとされ、後方に撻と倒れしかば、王進忙しく棒を投撇て、後生を扶起し、定て痛やし給ひつらん、恕したまへ、と挨拶すれば、後生身を起して首を低げ、それがし眼ありながら眞の豪傑をしらずして、こよなき過言に及しこそ面目なけれ、思へば是まで學びし武藝は、皆徒事にてありけるなり、只ねがはくは無禮の罪を恕し給ひ、御點撥托み奉る、と餘義なくも聞ゆれば、王進莞爾としていふやう、それがし母子、思ひがけずこゝに宿りて、厚き庇を蒙れば、せめて御身に棒の一手も敎まゐらせ、聊恩を報ずべし、とい

聲喚給ふは母御にておはするかな、旅にて病給へば、さぞな心ほそくおほすらめ、只いつまでも逗留ありて、ゆる〳〵と保養あれかし、幸わが家に心痛を治する妙藥あり、まづこれを進らせて試み給へ、といひて、彼藥を與へ、いと信々しく勸るにぞ、母子はます〳〵感悅し、こゝに五七日足をとどめて養生せしかば、母の病やうやくおこたりぬ。かゝれば翌にも出立せんとて、王進は後槽に到て、わが馬を見る時、空地の上に、一人の後生、もろ肌脫て棒を使ひ居たるが、白くふくよかなる肢體に、青く龍を刺して、年紀は十八九なるべく見ゆ。王進彼が棒を使ふを見て、おもはず聲を發し、この棒、使ふことはよくつかへども、なほ破綻ありてものの用にたちがたし、と譏しを、後生聞つけて大に怒り、われ是まで、七八人の師父に從ひて、武藝の奧妙を究たるに、汝何ものなれば嘲哢ふぞ、その頤打するくれん、といきまきて、走りかからんとする折しも、莊主の太公走り來て、やよ〳〵、客人に無禮なせそ、と喝りつゝ、王進に對ていふやう、客人はよく棒を使ひ給ふとおぼし、彼はわが兒子にて候なる、汝はやく客人に點撥を受よ、藝術足らざるところもあらば、教へ給はり候へ、といひつ、又後生に對て、汝はやく客人に點撥を受よ、といふに、後生いよ〳〵憤り、わが父彼がいふ所を眞となし給ひそ、我まづ彼と較量して、もし贏たらば弟子になるべし、さもなくばえこそ命には從ふまじけれ、といひて、更にうけ引氣色

を穿ぬ。王進ちかく居よりて、禮義を舒ければ、太公も又禮をかへし、客人ゆるやかに坐し給へ、路をゆく人は、露霜にそぼぬれて、いくばくの辛苦ならんかし、御身母子はいづくの人にて、いづ地へ到給ふ、と問に、王進答て、それがし事、姓は張氏にて、元京師の商人なるが、身の幸なくて本錢を消折ひ、いかにともせんすべなければ、延安府なる親券を托みて赴くにて候、しかるに今日路を貪り、宿頭をゆきすぎて、かく庇にあづかり候、房金は例にまかせて、いか程なりとも拜納候はん、といへば、太公聞て、これらの事は心づかひし給ふな、さこそ空腹にてあるべし、夕食を進らせん、とて、莊客に命て飯を供へ、酒を盪させ、厚く母子を欵待し、又王進が牽來りし馬にも秣を食せて後槽に引入れさせ、みづから旅路の憂を問慰などしつ、食事も既に果しかば、又莊客に案内させて、客房に誘せ、臥單煖に設おきて、ゆるやかに歇すれば、王進母子は庇のあさからぬを歡び聞え、枕引よせて臥たりける。さて次の日に到て、夜も既に明たれど、王進母子はいまだ起ず。太公みづから客房の前に來りて窺ふに、裡には人の聲喚音すれば、こゝろ怪みつゝ、夜も明たるに、客人などて起給はざるやらん、と案内ば、王進忙しく走り出で、起つる事はとくに起候へども、わが母此程、毎日に馬に乘て路を走りし疲にや、心痛の病發りて、夜すがら惱み候ゆゑ、介抱いたし居候、といふに、太公驚きて、さては

きけん、絕てしれるものもなく、その僞體逃亡せしとおぼゆれば、その日の夕かたに、李牌、張牌、殿帥府に參りて緣由を訴聞しかば、高俅聞て大に怒り、俄頃に文書を諸方へ押下し、もつぱら王進を拏んとす。さる程に王進母子は、その曉東京の地を離れ、野を過ぎ、山を超え、路を往くこと十日ばかりにして、一日の黃昏に、宿頭を行すぎて、ゆけども〳〵客店なく、只ある村を過るとき、林の中に燈の光、粲々と閃きければ、王進ちかく立よりて熟視るに、この家殊さらの大莊院にて、四方の土牆の裏に、柳二三百株を栽ならべたり。やがて門をさし覗きつゝ呼門ば、一人の莊客立出て、こゝに來ぬる故を問に、王進答て、それがしは老たる母を携たる旅客なるが、あまりに路をいそぎて宿頭をゆき過ぎ、暮に及て迷惑し、貴宅を見かけて參りしものなり、あはれ一夜の庇を垂給へかし、と禮義を篤して慇懃にたのみ聞ゆれば、莊客走り入て、莊客太公にかくと告るに、莊主は、いと情あるものにて、輒くうけ引き、王進母子をよび入れさせけり。王進は宿を貸んとあるに、やゝこゝろ安堵て、母を馬より扶おろし、馬をば柳の樹に繫とめて、彼莊客に從つゝ裡に入り、打麥場の上に擔兒をさしおき、なほ伴れて草堂に至り、莊客太公に對面す。この太公は、年紀六十を超たらんとおぼしくて、髭鬚白く、頭に遮塵の煖帽を戴き、身に直縫の寬衫を穿て、腰に皂絲の縧を繫び、足に熟皮の靴

の字を加へてこれをわかつ、此方にて大殿と稱するがごとし。又經略は官名にて、此方の國司城代などに似たり。は、邊庭を守て在ど、その手下の軍官、京師へ到る毎に、それがし弟子となりて、棒鎗など學びしもの多ければ、其處を便りて、この急難を脱れ候はんか、と私語ば、母もこれに從ひて、逃出べき謀を定めおき、王進その夜さり、二人の牌軍、張牌、李牌（牌はふだなり、官府へ出入する者はふだを渡しおくをもて牌といふ。張も李もその人の姓也。）を呼ていふやう、われこの程、病痊たる酬愿に、酸棗門の外なる嶽廟へ參詣すべくおもへば、汝兩人は、夜のうちより彼處に赴き、廟祝にこの事を告て、はやくより廟門をひらかせ、祀の牲などとゝのへて、わが詣るをまち候へ、われかならず未明に參詣すべきにこそ、といへば、張牌李牌こゝろを得て、寅刻ばかりに家を立出し程に、王進は欺き課て、今はこゝろ安しとよろこび、貯祿たる銀を懷に挾め、衣服など打挾て、さて後槽より馬を牽出し、行李を捈縛て、母をその上にかき乘せつゝ、みづから繋を取て、いまだ夜も明はなれざるに、西華門を走り出で、延安府を投て旅だちける。さて又彼二人の牌軍は、ゆめにも此ことをしらず、廟のほとりにありて、もつぱら王進をまつに、日は高く昇れども、その人は影もせず。あまりに待わびて、張牌やがて走り歸り、その家の光景を見れば、門は空く鎖して裏には人氣もなし。こはあやしと疑ひ惑ひ、また舊の廟に走りゆきて、李牌にもこの事を告しらせ、二人もろともに彼此を索ね巡れども、王進もその母も、いづちゆ

の愚者甚無禮なり、とく拏出して笞てよ、といきまきあらくいひ懲せば、都牙將等、みな王進と睦じきをもて、軍正司とともにこれを寛ていふやう、太尉新に職につき給ひて、慶をなす折なるに、人を罪せん事究てよろしからず、まげて彼を恕し給へ、といひて、さま〴〵こしらへ諫れば、高俅やうやく面を柔げ、衆官の言葉默止がたければ、今日はまづ恕し、明日かならず理會せん、この旨こゝろえ候へ、といふ時、王進はじめて頭を擡げ、太尉の面を熟と見るに、年來見おぼえある高俅なれば、うち驚きつゝ牙門を退き、こゝろの中におもふやう、わが生命このたびは保がたからん、彼高太尉といへるは、いかなる人ぞとおもひしに、東京の幇間、高二にてありけるなり、このもの前年棒を使ふことを學び、わが父にいたく打翻られ、四五箇月起こともかなはざりし、しかるに彼今發跡て、殿帥府の太尉になりしかば、勢要に乘じて、舊怨を報んとす、われ又彼が屬官なれば、とても爭ひ凌ことあたはじ、こはいかにせん、と只管に愁ひ悶え、やがて家に立かへりて、母にしか〴〵の物がたりするにぞ、母も縁由を聞て深くうち歎き、母子言葉もなくて、涙さしぐみたるが、且くして母のいふやう、世の常言に、三十六の計も走るを第一とすといふなれど、さし當て立退かたもあるまじ、といふに、王進沈吟して、母の命いと理におほえ候、こゝに延安府といふ處なる、老种經畧相公（老は老人なり、种は氏也、父子在官のとき、老

高俅怒て
王進を
罵る

れより高殿師、亦高太尉と稱られ、吉日をえらみて殿師の府に引うつりしかば、太尉の屬官等、居多群參りつ、おの〳〵手本を呈るに、高俅花帖を一々點見れば、その内只一人、八十萬禁軍の教頭、王進といふもののみ來らず。この人は前頃、病に臥して衙門を引き、その事を前の殿師太尉に申ことわり、家にありて保養したるが、妻はなくて母なん一人おはしける。しかるに高俅は當日王進が來らざるを見て大に怒り、渠奴病に托て、われを侮るとおぼし、いそぎ拏り來れ、と焦燥にぞ、今日牌頭の小吏、王進が家に走りゆきて、如此々々の故を告れば、王進大に驚きて、已ことを得ず病を推し、忙しく朝服を被かへて、その人とともに殿師府に參り、身を躬腰を折り、禮儀を厚して參見するに、高俅眼を瞋していふやう、汝は都軍教頭王昇が兒子なるよな、汝が父は、原市上にて、棒を使ひ藥を賣て生活とし、何の武藝もなきものなりしに、前の殿師眼明らかならず、汝をとり擧て教頭とせり、しかるをなほ身の程をしらず、誰が勢要を托てわれを侮るぞ、と罵れば、王進畏みて稟すやう、それがしまつたく太尉を侮にあらず、實に病いまだ痊ざるによつてなり、といふに、高俅いよ〳〵怒を發し、汝が言葉胡說なり、もし實に病ならば、いかにしてこゝへは來つる、と責問に、王進又答けるは、太尉の召せと命するに固辭がたく、推て參り候ひし、といひも果ざるに、高俅聲をふり立て、こ

の日端王人をもて、王都尉を招給ひ、彼玉の玩器を惠れし事をよろこび聞えさせ、言の序に宣ふやう、きのふ使に來りし高俅は、殊さら毬の高手なれば、われこの人を得まく欲す、まげて與へられよかし、と宣へば、王都尉答へて、殿下この人を愛し給ふぞならば、こよなき彼が僥倖なり、長く留おき給はん事、下官も願はしくこそ、と稟すに、端王いと歡しき御氣色にて、さま〴〵都尉を饗し給へば、王都尉は思ひもかけず、面目を施し、暮に及びて歸りける。是よりして高俅は、束の間も端王の御側を去らず、言を巧に、事を厚くして給事したりければ、端王いよ〳〵愛し給ひて、二なき人とたのみおほせしに、いまだ兩月をも經ずして、哲宗皇帝崩御ましまし、御子なきによりて、文武の百官端王を册き立て、やがて皇位に卽まるらせ、すなはち徽宗皇帝と號し奉る。これ玉淸教主、微妙道君皇帝の御事なり。この君御世しろしめして後も、天下ます〳〵泰平にて、一日主上高俅を召て宣ふやう、朕汝を重く用んとおもへども、邊功あらざれば、かる〴〵しく陞遷がたし、よりて豫て樞密院に內勅して、汝が名を隨駕の中に書加させおきつれば、遠からず出身の日あるべし、とひそかに聞えさせ給ひし程に、高俅拜伏して、御恩惠身にあまりてこそ、と回答奉りしが、主上とにかく彼を寵愛の餘り、いまだ半月も經ざる間に、殿帥府の太尉になし下されける。されば高俅は、一時に大臣の員に列り、こ

高俅不意に
端王の
毬を
踢返す

しも、端王は軟紗の唐巾を戴き、紫縫龍袍を穿給ひて、文武の雙穗たる縧を繋び、嵌金線の飛鳳靴を穿き、四五人の小黄門と、毬を蹴ておはしければ、高俅は人の後面についゐて、毬の果るを待たるに、高俅が當に發跡べき時節到來やしたりけん、端王の蹴給ひし毬翦て、彼がつい居し頭の上に、閃と飛て落かゝる。毬に名たゝる高俅が、なじかは少しも擬議すべき、一時なる膽量に、鴛鴦拐といふ手にて、滾れかゝりし件の毬を、端王へ蹴戻しまゐらすれば、端王大によろこびつゝ、はじめて高俅を見そなはして、汝は何人ぞ、と問給ふに、高俅頭を地上に附け、それがしは王都尉の使にて、玉の鎭紙と筆架とを齎來たる、高俅とまうすものなり、都尉の書呈こゝにあり、と稟しつ、おそる／＼彼書簡を獻れば、端王ひらき見てふかくうれしみ給ひ、玉の玩器をば、黄門に命せてとり收させ、さて高俅に宣ふやう、汝は世に稀なる毬の高手なり、只今この場にて、毬つかうまつれ、と命するを、再三固辭奉れど、とかく許し給はず。さのみはいとも畏しとて、やがて毬場に參り加はり、年來の本事この時にありと思ひしかば、祕術を竭して王の御こゝろに稱やうにしつ。毬は只鰾膠をもつて、身に粘たるに異ならず、高く揚り低く飛び、みなよく法に合し程に、端王ます／＼賞給ひて、直に宮中に留め置き、ふたゝび王都尉の府に歸し給はず。王都尉は高俅が歸り來ざるを、ふかく奇み思ふ處に、次

の碗には、仙桃異果、熊掌、駝蹄を堆供へ、鱗々たる膾、銀絲を切り、細々たる茶は、玉蘂を烹て、紅裙の舞女は、盡象板、鸞簫を隨著び、翠袖の歌姫は、簇て龍笙、鳳管を捧定ち、准備已にとゝのひしころ、端王來臨ありければ、王都尉こは辱とて、件々心を竭して欵待進らせ、酒宴もやうやく時うつりて、端王淨手にたち給ひしかへさ、書院の飾著を見たまふに、書案の上に羊脂玉といふ玉もて、細工いと妙に作りなしたる、獅子の鎭紙ありけり。端王この鎭紙を手にとりて、と見かう見つ、只管ほしげにおはするを、王都尉はやく猜して稟やう、この外になほ龍の筆架あり、これも一手匠人の刻しものに候なるが、ふかく藏おきて、目今手頭にあらず、明日それをもとり揃て獻候べし、と聞えまゐらすれば、端王御喜びありて、舊の席に著給ひ、饗應、さま〴〵興ありて、その夕ぐれ宮中にかへり給ひしかば、次の日王都尉は、彼龍の筆架をとり出し、獅子の鎭紙とともに小金の盒子に盛て、黄羅包袱に裹み、一封の書呈をかい寫て、高俅を使とし、これを端王の宮中へ獻れば、高俅旨を承て彼處にまゐり、把門官吏に、王都尉の使者なるよしを告げ、院公に如此々々の口上を演說すれば、院公聞て、端王は今庭心裏にて、小黄門と毬を踢し居給ふなれば、足下直に庭門にまはり、使の趣を申上候へかし、誘こなたへ、とて案内するに、高俅はその後に従ひて、庭門に到る折

ら時めき榮給へば、世の人小王都太尉と尊み稱るにこそ、今高俅を薦て、彼處に進らせなば、かならず歡び給はざる事あるべからず、と肚の裏にて了簡し、次の日一箇の幹人に書呈をもたせ、その人とともに高俅を、王都尉の許へ送り遣しける。この王都尉は、今上哲宗皇帝の御妹夫にて、神宗皇帝の駙馬なりしかば、その身の富貴に任せつゝ、風流の人とだにいへば、不用なるをも厭ことなく、おほく養おけりしが、目今小蘇學士が人を遣し、書を馳て高俅を薦むるによりて、ふかく歡び、やがて回書を學士が使にとらせ、すなはち高俅を留おきて、側ちかく召つかはれしに、高俅は元幇間の事にはあり、只管諂諛て、はやくその意に稱ひ、よろづ同家人の如くにてぞ有ける。さるあひだ、いまだいく程もなく、王都尉誕生日の慶ありとて、都尉の小舅端王を請待す。この端王と號は、先帝神宗皇帝第十一箇の御子にて、見に今上の御弟にわたらせ給へば、排行を九大王と稱奉り、御こゝろ怜悧おはしまして、よろづ風流を好み給ひ、下賤の事に至りても、俳優幇間のうへまで、しろしめさずといふことなく、又これを愛し給はざる事なし。加旃、琴、棋、書畫、儒釋の敎、あるひは吹彈歌舞の伎、よく悉く傚ひ得て、就中氣毬を好み給ひしとぞ。かくて王都尉東道して、香は寶鼎に焚き、花は金瓶に插し、水晶の壺琥珀の盃には、瑤池の玉液、紫府の瓊漿を滿泛へ、玳瑁の盤、玻瓈

東京へかへらせけり。さる程に高俅は、柳世權に別を告げ、東京を望ていそぎつゝ、日を經て金梁橋下なる、董將士が藥店に索ゆき、紹介の手書をさし出しければ、董將士讀了て、こゝろの中におもふやう、此高俅は、音に聞つる破落戸なるを、今赦免せられしとて、もしわが家にとゞめ置かば、彼かならず子ども等に、よからぬ事を敎べし、さればとて柳世權が紹介たる人を、追ひやらんも影護し、まづ權留おきて、その後外へ出さばや、と深念し、よくぞ來給ひつる、誘こなたへ、とて客房に伴ひ、篤く欵待して五七日留おき、一日董將士は高俅を招きていふやう、わが家は商人なれば、御身いつまで居給ふとも、出身の便もあらず、よりて御身を小蘇學士といふ人の許へ、たのみ遣すべく思ふなり、この人は元來手びろく、權門の縉紳へ出入し給ふゆゑに、よく心を小てその家に奉公せば、遠らず出身の便もあらん、いよ〳〵ゆかんとならば、この手書をもて行給へ、といひつゝ、豫て寫おきたる一封をとり出て示せしかば、高俅歡びてこれを受とり、この日小蘇學士の家に到りしに、彼學士もまた董將士が手書を見て思ふやう、高俅は原幇間をなせし浮浪子弟なるを、なでふわが家に養ふべき、しかれどもわれ年來董將士と親く交れば、是を推辭も人情にあらず、幸なるかな、駙馬（天子の婿を駙馬といふ）王晉卿の府へは、われ日來まゐりて、その光景を見るに、彼家、風流の人物、藝能閑たるものを愛し、殊さ

更め、みづから高俅と名告けり。此人武藝相撲をよくし、又糸竹の技を嗜み、又詩を賦し文を作るといへども、萬能の闕たるも、一心の正しきにしかず、かく諸藝には達しながら、忠義の道には却りて疎く、常に東京の裏を徘徊し、幇間をなして生活とせしに、近曾生鐵王員外といふものの子どもをそゝのかし、毎日に花街に誘引て、許多の錢をつかはせし程に、王員外ふかく高俅をうらみ、一封の訴狀を認て、官府へ訴訟いたしければ、府尹聽て高俅を捉させ、杖の數四十を笞せて、東京を追放せり。是よりして高俅、都のうちに足を容れがたければ、淮西の臨淮州といふ邊庭にゆきて、柳世權といふものをたのみしに、此柳世權は、身の脩よかぬをのこにて、おほく無頼惡徒のみを養おき、その房金を取て、活業とするなれば、彼をも輒くうけ引て留おきし程に、高俅こゝにあること三年に及びしころ、今上哲宗皇帝、五穀豐作、四海安全の爲、みづから南郊の祀を遊しけるに、この年風雨よくとゝのひしかば、主上御感のあまり、天下に大赦を行れ、追放の罪人等を召かへさるゝによりて、高俅もこのたび赦免を得て、只顧東京へ歸らまほしく思ひ、柳世權にこの事を相語に、柳世權も彼が大赦にあうたるを喜び、幸東京金梁橋下なる、生藥舗に董將士といふもの、わが親戚なれば、御身まづ其處へ落つき給ふべし、といひて、紹介の手書一封を書寫め、些の人事盤纒などとりもたせ、高俅を賫發て

初編　巻之二

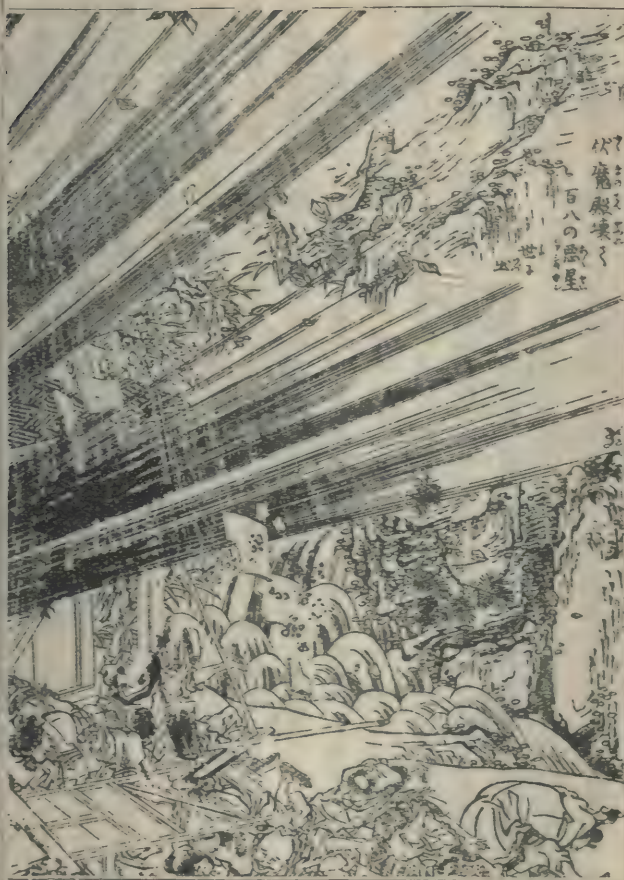
○王教頭私に延安府に走る

張天師道術をもつて、民間の疫癘ことゞゝく禳ひ除きし後は、天下泰平なるゆゑに、異しき物語なし。かくて仁宗皇帝、宇宙御めすこと、四十二年にして崩御ましゝゝけるが、太子なきによりて、皇位を濮安懿王允讓の御子、太祖皇帝の御孫に傳へ給ひ、これを英宗皇帝と號し奉る。是又在位四年にして、皇位を太子神宗に傳へ給ふ。神宗皇帝在位十八年にして、皇位を太子哲宗皇帝に傳へ給ひ、嘉祐三年より天子四代、すべて三十餘年を經て、四海ますゝゝ無事なりける。此時東京開封の府中、汴梁（魏の梁なり）の宣武軍といふ處に、一人の浮浪子弟ありけり。姓は高氏にて、人の二男なりしかば、排行を高二といふ。（此方にて太郎二郎といふが如し）彼弱年より家業を做さず、只鎗を刺し棒を使ひ、又よく毬を踢て、雙なき高手なり。こゝをもて都の人、彼を口順み、高二とは呼ずして高毬と呼びつ。すなはち是毬の字は、萬利と讀て、その姓又高氏なれば、毬の技に高しといふこゝろなりとぞ。高二これを娛しきことにおぼえ、毬の字の毛偏を人偏に書

え奉れば、主上叡聞ましまして、彼に恩賞あり、官職舊のごとくにてあるべし、と命出されける。彼天罡星、地煞星、化していかなるものにかなる。そは次の巻々を讀得てしらん。

らん、皆殿内を迯出るとて、押倒され踏反され、慌忙て傷を蒙るものも多かり。洪信も顚つ倒つ、廊の邊まで迯來りて、面色土の如くになり、茫然としてありければ、住持道衆もこゝに集會ひ、大息つきてせんすべをしらず。且くしてみな〳〵人ごこち復しかば、住持洪信に對ていふやう、抑この伏魔の殿といふは、當初、祖老天師洞玄老人、法力をもつて、三十六員の天罡星、七十二座の地煞星、すべて百八の魔王を鎖鎭め、上には石碑を立て、碑の面には、龍章鳳篆、天府等の文字を鑿著け、永く魔王を世に出さじ、と誓ひ給ひしに、太尉侮りてこれを放給へば、是民の災を禳んための勅使にはあらで、却て災を惹給へり、さて苦々しき事かな、とかき口説にぞ、洪信今さら面目をうしなひ、俄頃に行装を整て、やがて京師にぞ歸りける。

かくて洪信は日にあゆみ夜に宿り、既に都なる汴梁城に著けるが、道すがら巷の説を聞くに、此度信州龍虎山の、嗣漢天師張眞人といふ道士、この東京に來臨ありて、七日七夜の祈禱ありし程に、民間の疫癘悉く除き去り、張天師はふたゝび鶴に乘り雲を凌ぎ、本の山に歸り給ひし、といひもて口順ければ、洪信この風聲を聞て、さては住持がいひしに違ざりけり、と意うれしく、詰朝主上に見え奉り、張天師は神通をもつて、束の間に來朝し給ひしかど、それがしらは驛站して歸るが故に、道中とかく果敢どらず、やうやく昨日京著仕り候ひし、と奏し聞

伏魔殿壊て
百八の魔星
世に出

且石碑の脊を見よ、數百年のむかしより、わが姓を鑿おきて、洪に遇而開とあり、これわが開くべきを示すなり、我つらく〳〵思ふに、魔王は蟄して石碑の下にこそあるらめ、はやく人夫をまし加へて、堀崩させん、と競かゝれば、住持おそる〳〵又諫るやう、太尉もしこの處を堀せ給はゞ、必ず天下に禍出來て、萬民一日も安からじ、只此まゝにて擱きたまへ、といひもあへぬに、洪信大きにうち笑ひ、愚なるかな、今分明に證迹ありて、われに遇て開と鑿おきしを、などて此まゝ擱くべき、とく〳〵と焦燥を、住持とにかく諫れども、洪信さらに聞入れず、みづから下知して人夫を集め、まづ彼石碑を堀倒させ、下なる石龜を堀る事、半日ばかりにして、この龜やうやく全身を顯したり。すは扛除よといふ程こそあれ、みなもろともに力を併せ、からうじてこれを傍に引除け、又その下を二尺あまり堀つる時、方にして板のごとく、圍一丈もあるらんとおぼしき青石ありけり。洪信これを見ていよ〳〵勇み、なほ下知を傳へて、この石蓋をとり除けさせしかば、下は一つの穴ありて、その深きこといかばかりなるをしらず。時に忽地、天も摧け、地も塌り、萬竿の竹一度に裂け、百千の雷半夜に墜るごとき音して、雲か煙か隱々と一道の黑氣、穴の内より立登り、殿の棟桁衝破りて、半天にたな引つゝ、砕て百餘道の金光と變じ、四面八方に飛去りぬ。諸人これを見しはじめより、なじかは驚き怕れざ

て、まづ封皮を掲とり、鐵鎚をもて件の鎖を打碎き、一度に門を押ひらきつゝ、われ先にとこみ入りけるが、この殿や昏々冥々として、數百年太陽の光を見ねば、又億萬歳明月の影も瞻がたく、既に南北を分たねば、まして東西を辨ず、黒煙靄々として、人を撲に寒く、冷氣陰々として體を侵すに顫く。當是人跡到らざる處、妖怪往來の栖、雙の目は開ども、却りて盲の如く、兩の手は伸せども、掌も見えずして、常に三十夜のごとく、又五更の時に似たれば、洪信下知して居多の松明をともさせ、四面にふりてらして、見れどもく、たえて眼に遮るものなく、只殿の中央に、その高さ六七尺もあるらんとおほしき、石碑ありて、その下に石の龜あり。この龜既に土中に陷りて、僅に半身を顯したり。やがて石碑の面を見るに、鳳篆龍章とて、世に見なれざる、あやしき文字のみを彫つけたれば、人皆これを讀ものなし。又その背を見るに、こゝには普通の大文字を刻て、遇洪而開、と錄せり。是なん天罡星、地煞星といふ星の、世に出べき時至り、宋朝に忠臣義士の、顯るべき前象にして、洪信これを開く事、洞玄國師豫て察知し、四箇の文字に示し給へり。嗚呼是寔に天數ならん。彼忠義の人をもつて、これを魔王に比するゆゑは、佞人これを見れば讀て魔王とし、賢人これを見れば、稱て忠義とす。是又邪正表裏の義なり。さて洪信は、この四字を見て大きに歡び、住持に對ていへりけるは、汝達

洪信慢く鎖魔碑を發く

に魔王を見ばやと思ひ、住持に對ていふやう、汝達この門をひらき候へ、われその魔王の正體を見まく思ふなり、といへば、住持うち驚き、こは氣疎き事を命候ものかな、代々の天師すら開き給ふ事なきに、貧道などが分際にて、かるぐ〳〵しく開かれ候はんや、殊に洞玄國師叮嚀に戒を遺し、末世の諸人、漫にこの殿を開くことを許したまはず、只おそれても怕るべきは祖師の遺戒なり、といひも果てざるに、洪信かや〳〵と冷笑ひ、汝達㧡に怪奇を傳へて、愚民を迷し、假にこの殿を作り設け、魔王を鎖鎭ると稱へて、その家の道術を顯し耀すの計ならん、我弱冠より、諸子百家の書を讀ども、魔王を鎖といふ法ある事を聞かず、世の人はとまれかくもあれ、われは決して信とせず、誘々この裡を一見すべし、といひて、更にうけ引氣色なければ、住持又いふやう、太尉もしこの殿を開き給はゞ、終に天下の患となりなん、よく〳〵御思案あらまほしけれ、と諫れば、洪信勃然して聲をふり立て、汝達もし立地に開かずは、われ都に立かへり、龍虎山の道士等、放に僞を行ひ、魔王を鎖鎭しと稱して、愚民を迷し、もつぱら術を賣候と奏聞して、忽地山を追放せん、なほそれにても開くまじきか、と目を瞋し臂を張り、礙と白眼ていひ懲せば、住持も道衆も、その權威に害怕れ、もしこの上に諍諫ば、一山の滅亡を招くに似たりとて、俄頃に奴隷火工等を呼び會合へ、彼等にこの事をいひわたし

居多の從者を召つれ、已に方丈を立出るに、一山の道衆、その左右に從ひつゝ、彼此を嚮導す。洪信主從彼三淸殿の光景を見るに、奇麗壯觀都にも又罕なり。左の廊下には九天殿、紫微殿、北極殿あり、右の廊下には太乙殿、三官殿、驅邪殿ありて、太乙眞君、紫微大帝、天丁力士、南極老人、二十八宿の星君、三十二帝天子の木像、位階によりて安置せり。洪信これらの件々見了て、右のかたなる廊の背に到れば、こゝに又一つの別殿ありて、四方の環繞は、濕を融さぬ爲に、椒を搗こみたる紅泥牆にして、正面兩の扇、これ又硃紅の槅子なり。門の面には大なる鎖を用て楚とさし固め、鎖の上には封皮を貼り、封皮の上にはいくへともなく朱印を押加へて、簷下に硃紅の額を打ち、伏魔之殿といふ四箇の金字を寫したり。洪信見て、これはいかなる故ありて、かく嚴しく鎖して、封皮を貼おくにや、と問へば、住持答て、當山の祖師、大唐の洞玄國師、魔王をこの殿内に鎖鎭給ふによりて、代々の天師みづから封印を加へ、子々孫に至るまで、開く事を許し給はず、もし慢て魔王を走らする時は、忽地世の間に災害すべしとぞ、今八九代の天師を經たれども、いよ〳〵洞玄國師の戒をまもり、なほ銅の汁を用て、鎖の透間に鑄かけ給へば、誰ありてこの裡の事をしるものの候べき、貧道當宮に住持する事、三十餘年におよべども、只傳へ聞のみなり、と物がたるを、洪信聞てふかく奇み、われまづ試

て幼少かるべき、この事のみは承がたし、といふに、住持又いふやう、當代の天師は、童顔仙骨にして、年紀いとわかく見え給へども、これは是格外の人にして、四方にその化を顯し給ふ事久しく、靈驗究て灼然なれば、世の人これを尊みて、道通祖師と稱るなり、太尉かならずしも、かる〴〵しく見なし給ひそ、といへば、洪信やうやく曉得て、われ眼ありながら、眞の張天師を認らざりしこそ愚なれ、いかにせまし、と後悔すれば、住持かさねて、太尉御こゝろ安くおぼし給へ、張天師已に鶴に乘り雲を淩ぎて、都へゆかんと宣ひつれば、今ははや參内ありて、醮事の場に臨み給ひなん、しからば太尉歸京し給ふ及頃には、疫癘も悉く穰ひ除き、民みな枯たる草の雨にあひしごとくなるべければ、縱張天師に對面なくて歸り給ふとも、さまで上の御咎もあらじ、まづ〳〵休息し給へかし、とさま〴〵慰こしらゆるに、洪信やうやく心安堵て、詔書を住持に遞與しければ、住持受とりて御書匣に收藏め、齋を供酒宴を設けて、いよいよ彼を饗應しけるとぞ。

○洪太尉誤して妖魔をはしらす

詰朝早飯も果しかば、今日遊山あるべし、とて、住持みづから促せば、洪信大きによろこびて、

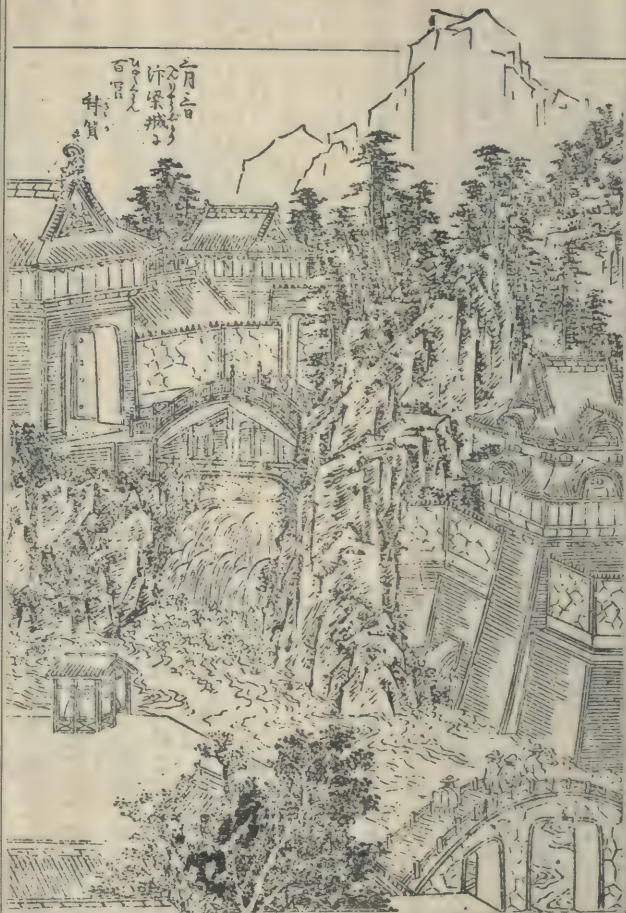
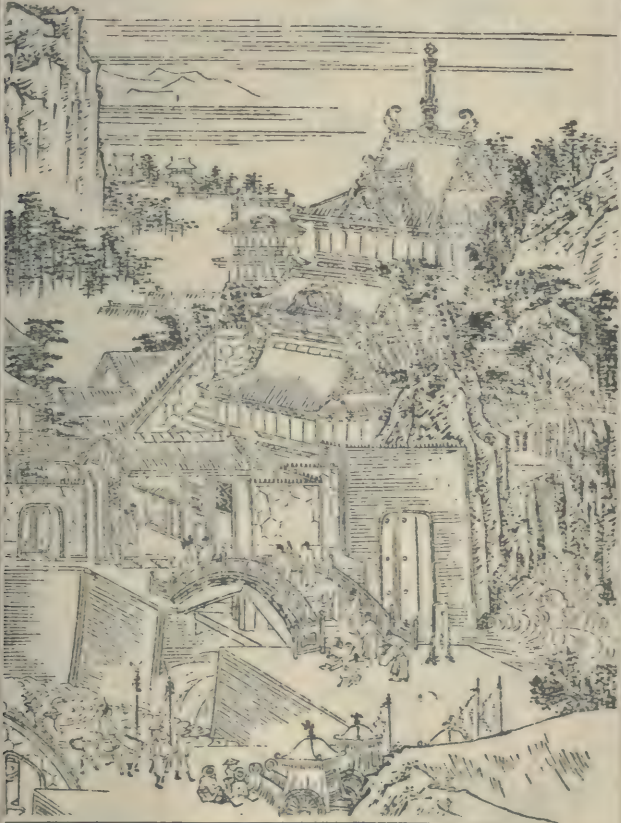
して、ひとりみづから山に登りしは、勅諚を重とし、張天師を敬ふの切なるによれり、しかるを汝達却てこれを蔑にし、よくもからきめ見せつるかな、嚮にわれ山の半に至りし時、白額錦毛の虎出てわれを威し、しばし魂を消せたり、次に丈餘の雪花蛇來りて、わが行路を遮りとどむ、われもし運つよく命めでたからずは、生て都へはよも歸らじ、これ汝達勅使を侮り、潛に與を催とおほし、いひわけあらばいへ聞ん、といきまきあらくいひ懲せば、住持大に迷惑し、貧道などて勅使を欺き奉るべき、さるあやしみは、吾儕が僻事せしにはあらず、張天師密に太尉の信心を試み給ふなり、彼山、猛き獸多しといへども、天師の徳によりて人を傷る事なし、只願くは怒を鎭め、憤を散し給へかし、と賠るにぞ、洪信少し心解け、わが信心懈りしにはあらず、かゝる辛苦をも屑とせず、なほ巓までと登りゆく折しも、笛の音隱々に聞えしかば、こは奇しと見るところに、一人の童子黃牛に乘り、笛吹すさみて出來り、われに對ひていふやう、張天師は、今朝鶴に乘雲を凌ぎ、都へとて往給ひつれば、菴の中に人もなし、とくとく下向あるべしといひしに任せ、やがて歸り來れり、とものがたれば、住持聞て、その童子こそ張天師にておはすなれ、認り給はぬとは云ひながら、眼前ものいひかはして、外に見なし給ひぬる遺憾よ、と只管悔み聞ゆれば、洪信さらに實とせず、彼もし張天師ならば、など

被て、笛吹ならし行過るを、洪信喃々と呼とゞめ、汝われを識りたるか、といへば、童子莞然とうち笑み、笛をもて、洪信を指していふやう、御身こゝに來たまひしは、張天師に見えまらせん爲なり、われ今朝菴の中にありて、張天師の前に侍りけるに、天師物がたり給ひしは、今都のうち疫癘盛に流行り、民落命するもの甚多し、これによりて、主上洪太尉を勅使として、われを都に招き、三千六百分、羅天大醮の祕法を修行せて、この病難を禳除給はんと也、しかればわれ今、鶴に乘雲を淩ぎ、一瞬の間に都へゆくべしと宣へり、定て今ごろは都にこそ著給ひつらめ、御身縱千辛萬苦を經て、菴に索ゆき給ふとも、張天師おはしまさねばそのかひもあるまじ、この山には猛獸毒虫いと多ければ、もしは不慮の悞あらんも痛し、はやく〳〵下山し給へ、といふに、洪信ますく〳〵疑ひ迷ひ、汝虛言もてわれを誑るにはあらぬか、といふとき、童子は回答もせず又笛を吹すさみて、林木原にぞ入りにける。洪信その後影を見送りつゝ、つくづく思ふやう、彼童子、いかにしてよくわが上をばしりつらん、そも尋常の子どもにはあらじ、彼は張天師の命を稟て、外ながらその事を示せしにや、これをしもなほ疑はゞ、終に猛獸の腹に葬らるべし、と深念しつ、こゝより引かへして舊の麓へ走り下れば、住持は又道衆ともに出迎へ、廳て方丈に誘引て、山中の容子を問に、洪信忽地目を瞋し、われ朝廷の貴官と

やゝ人ごこちつきて、おそる〳〵身を起し、投捨たる手爐を拾ひとりて香を燒き、僅に五三十歩行けるが、とかく艱苦に忍びかね、こゝろの中いよ〳〵焦燥ち、われは朝廷の大臣なるに、主上用ひ給ふ事うすくして、かゝる惡處へ遣され、許多の難義にあはせ給ふは、いかなる過世の報いぞや、と口の中にてぶつ〳〵罵り、いまだ行くことといくばくならず、風又俄頃に吹起り、毒氣沖りて天を曚め、山邊に繁き竹簇、簌々と響つゝ、その長十丈あまりの大蛇、鱗は月を流す波瀾よりも晃き、舌は暗を照らす篝火よりも閃き、草木を靡けてすゝみ來れば、洪信魂身にそはず、眼眩みて倒れけり。されど彼大蛇はこれを呑まんともせず、身を轉して蟠り、首を擡舌を長くし、毒氣を洪信が顔に吐ちらして、飽まで驚し、一溜と走り退て竹簇の裏に入りぬ。洪信はしばし死たるごとくなりしが、忽地息出て起上り、ふかく住持を怨みて、又獨言けるやう、彼惡道士、勅使を誑して猛獸多き惡處に僨き、かくまで憂目見するこそ安からね、われもし張天師に索あはずは、住持をはじめ一山の奴原、そのまゝにはおくべからず、と且怒り且罵り、又登りゆかんとするに、松林の背にあたりて、笛の音隱々に響しが、漸々にちかく聞えしかば、洪信ふかくこゝろ奇み、睛を定めてその方を見れば、一人の童子、黄牛にうち乘りて、當面に出來れり。其形狀究て俗ならず、頭に兩枚の丫髻を綰ね、身には一領の青衣を

よいよ萬民を救ふの功を建給んとならば、聊も怠慢の心を發さず、よく己を責て登給へ、もし信心忽ならば、とても張天師に對面かなふまじ、といひ訖り、遂にわかれて歸りける。洪信は、ひとり香を燒き、天尊の寶號を唱へ、からうじて山の半まで登りしが、思ひしよりも大山にて、峰高く溪深く、瀑布は斜に飛び、藤は倒に掛り、虎嘯くとき、風谷の口に生じ、猿啼ゆふべ、月山の腰に墜ち、さながら靑黛千々の玉を染成がごとくなれば、やうやく身疲こゝろ怠り、しばし停立て思ふやう、われは是高官の人なり、京師にありける日は、食ふに鼎を列ね、臥に茵を重てさへ、なほ倦怠たる身の、淺ましくも布の衣に麻鞋穿き、かゝる山路をたどたどしく、ひとり登るは何事ぞ、抑張天師はいづ地にありて、われにからきめ見せ給ふ、と獨言たる折しもあれ、凹なる岨蔭より、一陣の風さつと起り、その風地上を過るとき、木草みな背向に靡き、忽地一聲高く吼る、響は山も崩るゝごとく、撲地と跳り出るもの、是白額の虎なれば、洪信大に驚き怕れ、阿呀と叫びて仆るゝとき、件の虎を只見たれば、毛色は黃金を盈たるごとく、爪は白銀の鉤にひとしく、人を射る眼の光は、電の閃くかと怪まれ、濶と開く口赤くして、血をもる盆に異ならず、鞭に似たる尾をうち揮り、戟に似たる牙を張り、やがて洪信がほとりに來りて、右に盤左に旋り、哮こと又一聲、遂に後の山坂を、跳越えて走り去しかば、洪信

住持答て、天師は山中にありといへども、神通不測にして、或ときは霧に駕雲に乘り、又ある時は峯に坐し谷に遊び、其在す所究て定かならず、この故に貧道等も、また平生に見えがたければ、今詔書を賜はるに當りて、これを招きまゐらせんやうなし、況人を走せて呼び迎る事などは、おもひもよらず候、しかれども、主上萬民の病難を救はせ給はん爲に、はる〴〵勅使を下し給ふなれば、張天師も是を他事とは思ひ給はじ、太尉今一點の誠心を竭し、齋戒沐浴して淨衣を著し、從者は只一人をも召つれず、みづから詔書を脊に負ひ、手に龍香と、手爐をもち、歩行して山に登り、信心禮拜してこれを訪給はゞ、張天師もまた、主上の御慈の深さと、太尉の誠忠の厚さとを感じおぼし、輙く見え給ふ事もありなん、かへす〴〵も太尉萬民の爲に位の高きを忘れ、よくこの事を行ひ給へかし、といふに、洪信聞て大に歡び、われ京城を出る日より素食して來りしものを、いかで信心うすかるべき、必ず御身の言葉に從ふべし、と承引つゝ、甲夜よりその用意して、明日早旦に起出で、浴み沐りて白粥を食べ、淨衣を身に被ひて、詔書を納たる錦の囊を襟に掛け、銀の手爐をうや〳〵しく捧もちて、麻鞋穿しめつゝ、おぼつかなくも只ひとり、嶺を投て立出れば、住持は許多の道衆とともに、後の山下まで送りゆき、慇懃にその道徑を斥をしへ、なほ只管戒ていふやう、山中は草深くして路いと險し、い

二月三日
汴梁城に
百官
拝賀

燭を捧げ、幢幡寳蓋をもち連ね、一派の仙樂、融々として山を下り、勅使を迎まゐらする。洪信は上清宮のこなたにて馬より下り、まづ宮殿を瞻れば、松栢屈曲として風に吟じ、樓閣參差として日に輝き、道士霞を呑の窗、仙童藥を搗の室、水は堦砌の下に流れ、山は墻院の後に繞り、こゝに舞ふ鶴、丹頂を生じ、かしこに遊ぶ龜、緑毛に長じ、三清殿上金鐘を鳴し、四聖堂の前玉磬響て、塵外無何有の郷なれば、洪信只顧目を驚かし、誘引れて客殿の上座に著時、住持遠路の疲勞を慰め、さて勅諚の趣を問に、洪信答て、今都に疫癘流行して、死するもの十が六七に過たり、これによりて主上ふかく歎かせ給ひ、張天師を都に請待して、この病難を禳ひ除き、民の塗炭を救ひ給はんため、下官御使をうけ給はりて參著せり、張天師は今いづくに在す、はやく對面いたすべし、といへば、住持こゝろを得て稟やう、當代の天師は道行尋常ならず、唯淸を好み、穢を惡み、人と交參もうるさしとて、みづから山の絕頂に菴を締び、常に眞を修し、性を養ひ、かるぐしく世間に出給はねば、容易見え給ふ事、かなふべうもおぼえず、まづ且く休足し給へ、といひて方丈に伴ひ、茶を獻せ、齋を供へ、水陸の珍味、數を竭して欵待ども、洪信は、張天師、山の頂にありて、輙く見えがたしと聞て、その心安からず、ふたゝび住持に對ひていふやう、張天師もし巓の草菴に在さば、などて呼下さゞるやらん、と問ふに、

禱ありけり。しかれどもその年疫癘なほ盛りにして、朝に病もの夕に死し、親は子を喪ひて家に哭き、妻は夫に後れて野に葬る、その歎きいくばくといふ事を知らず。是によりて主上いよいよ御こゝろ安からざれば、ふたゝび百官を會合給ひ、此事いかゞしてよからん、と勅問あるに、范仲淹といふもの奏するやう、それがし等が愚意を以て、この災を禳んと量に、江西信州の龍虎山に、神通不測、道行無量の道士あり、その號を嗣漢天師張眞人といひ、又略しては張天師ともいふ、加旃彼が家に天災を禳ふの祕法ありて、三千六百分、羅天大醮と名づけたり、これいと稀なる靈法なるよし、世に掲焉し、いそぎこの道士を召のぼし、疫鬼を攘せ給はゞ、民の病難忽地に除去り、上下安堵の思ひをなさん事、更に疑ひ候まじ、と憚るところなく奏し聞え奉れば、主上御感淺からず、太尉洪信を勅使とし、嗣漢天師張眞人を請待あるべし、と定給ひし程に、洪信この勅命を奉り、詔書を錦の嚢に納め、御香を玉の盒に盛り、從者あまた召つれて、次の日都を起行けり。さる程に太尉洪信は、頓の御使なればとて、當日東京の地を離れ、江西信州貴溪縣を投ていそぎつゝ、山をば馬もて越え、川をば船もて渡り、ゆきとゆく程に、日を經て彼地にも著しかば、貴溪の縣大小の官人、郭を出てこれを待受け、嚮導して龍虎山の麓に到れば、一山の道衆、豫てこの告ありしによりて、鐘を鳴し鼓を撃ち、香花燈

新編水滸畫傳

東都　曲亭主人編譯

初編巻之一

○張天師祈て瘟疫を禳ふ

異朝大宋の天子、仁宗皇帝の御宇、嘉祐三年三月三日の寅の一天に、主上紫宸殿に出御ありて、朝賀を受させ給ひしかば、三公百官禮儀を正し、おの〳〵位階にしたがひ、主上を拜し奉る、玉しく庭の春の色、げに目ざましき光景なり。時に殿頭官、諸司百官にうち對ひ、事あらば奏聞あれ、事なくば御簾を捲て退出候へ、と呼れば、宰相趙哲、參政文彥博の二人、齊く列をすゝみ出で、只今都のうち疫癘大に流行して、軍民百姓死するもの甚多し、ねがはくは寛く仁政を布施し、この災を禳ひ除き、民の急難を救ひ給へかし、と言葉を揃て奏すれば、主上諸也と聞食入られ、軈て勅して天下の囚徒と、民間の稅賦を免し、又都の寺院に命せて、御祈

に過ぐ。これによりて米を給り藥を給りて、萬民を救ひ給ふといへども、些の驗もなかりしかば、文武の百官商議して、早朝に帝に奏聞し、此天災を祈禳んとす。もしこの事なかりせば、三十二員の天罡星、七十二座の地煞星、人間に出現して、宋の天下を閙し得べき。請見よ禍福得喪の理、舒て許多の卷々に詳なり。

勅諚ありけり。その時老叟は宮中に至りて太子を抱きまゐらせつゝ、御耳の邊に口をさし著て、八箇の文字を低話けるが、太子は立地に聲を止めて、再び啼哭給ふことなし。彼老叟はおのれが名字をもいはず、忽地一陣の清風に乗じて飛去りぬ。さて老叟が耳語まうせし八箇の文字は、文有二文曲一武有二武曲一、といひしとぞ。端的是天帝紫微の宮中より、兩座（天罡星地煞星を謂んとてまづこゝに文曲武曲の二星を謂ず。）の星辰を差遣し、この天子を輔佐しまゐらせんとなり。されば文曲星は、南衙開封府主、龍圖閣の大學士、包拯と云ものに應ず。又武曲星は、征西夏國大元帥、狄青といふものに應ず。この兩賢臣出來りて、仁宗皇帝を輔佐し奉り、在位四十二年の間九たび年號を改元し、天聖元年癸亥に位に登り給ひて、天聖九年に至るまで、天下太平にして、五穀豐登り、萬民業をたのしみて、路に遺たるを拾はず、戸を夜閉ることとなし、この九年を一登といふ。明道元年より皇祐三年に至りて、この九年又豐なり、これを二登といふ。皇祐四年より嘉祐二年に至りて、この九年田禾大に熟る、これを三登といふ。合せて三九二十七年、これを三登の世といへり。その時百姓些の安樂を受たりしに、誰か云ん、樂極るときは悲を生ず、嘉祐三年の春に至りて、天下盛に瘟疫流行し、江南より兩京に至るまで、人民（士農工商）この症に染らざるものもなく、各州よりの奏申は、片雪の飛がごとし。加旃、東京城中城外の軍民、（軍は軍役に使ふ人夫なり。）死するもの半

し、都を汴梁といふ處に建給ひしより、九朝八帝の班頭、四百年開基の帝となん仰ぎ奉りける。彼堯夫先生の詩に、一旦雲開復見天、と作りしは、未前を察るの一句なり。その頃西嶽花山といふ山に、陳搏處士といふ道高有德の先生ありて、天文雲氣の事に通達せり。一日陳搏先生驢に騎て山を下り、華陰の道中に赴く折しも、路ゆく客人のものがたりするを聞ば、今東京の柴世宗（後周の天子なり。）位を趙匡胤に讓給ふといふ。彼先生これを聞て、歡喜に堪ず、手をもて額に加へ、驢の背上にありて大に笑ひつゝ、おもはず顚下しかば、人驚きてその故を問に、先生しか〴〵の事を說聞せ、天下これより定るべし、といひつるが、果して庚申の年に、趙匡胤天子の位に卽給ひしこそ不思議なれ。この君位に在す事十七年にして、天下太平なり。すなはち位を御弟太宗に傳給ふ。太宗皇帝在位二十二年にして、位を眞宗に傳給ふ。眞宗皇帝又位を仁宗に傳給ふ。仁宗皇帝（名は禎。）は、廼これ天上の赤脚大仙の天降ますところにして、生れ給ふとき、晝夜啼哭て止み給はず。よりて朝廷より黃榜を出し、人を召て療治させ給はんとなり。時に天帝、太白星に詔して、下界に遣し給ひし程に、太白金星やがて一箇の老叟と化して前み來り、彼黃榜を掲りて、それがしよく太子の啼哭給ふを止め進らすべし、と言ふ。榜を守る官員これを誘引て殿下に參り、備由を奏し聞え奉れば、眞宗皇帝老叟を觀して、太子を見せよと

官野史のこと〴〵く信ずべからざる所以なり。

中華故の宋の天子、神宗皇帝の御宇に、姓は邵、諱は堯夫、道號は康節先生といふ、いと名高き一箇の儒者ありけり。此時天下大に亂れて、朝には梁に屬き、暮には晉に屬き、合戰一日も息ときなし。彼先生ふかくこれを嘆て、

紛紛五代亂離間　一旦雲開復見天
草木百年新雨露　車書萬里舊江山
尋常巷陌陳羅綺　幾處樓臺奏管絃
人樂太平無事日　鶯花無限日高眠

と口遊しが、既に梁、（梁の太祖姓は朱、名は晃、はじめの名は温。）唐、（唐の大祖姓は李、名は存勗。）晉、（晉の高祖姓は石、名は敬瑭。）漢、（漢の高祖姓は劉、名は暠、初の名は知遠。）周、（周の大祖姓は郭、名は威。）すべて十五帝を經て、播亂五十年、その後天道やうやく環り、四海靜謐すべき時節到來して、宋の太祖武德皇帝（太祖姓は趙、名は匡胤。）甲馬の營中（武德皇帝誕生の後、これを香孩兒の營といふ。）に、降誕まし〳〵ける。此君生れ給ふとき、赤光天に滿ち、異香日を經れども散らず。廼是天上の霹靂大仙天降まし〳〵けるにや、智勇俱に雙なくして、世々の天子も及ぶことなし。この故に一條の桿棒（一條の桿棒は漢の高祖三尺の劍を以て天下を治むるこゝろ也。）をもつて、四百餘州を打成げ、世界を掃清て宇宙を蕩靜め、姓を趙とし、國號を大宋と

引首

○楔子

金聖歎が云く、この一回古本に楔子と題す。楔子は物をもつて物を出すの謂なり。頭に疫をもつて楔とす、楔祈禱を出す。祈禱をもつて楔とす、楔天師を出す。天師をもつて楔とす、楔洪信を出す。洪信をもつて楔とす、楔遊山を出す。遊山をもつて楔とす、楔開碣を出す。碣を開をもつて楔とす、楔三十六の天罡星七十二の地煞星を出す、これを正楔といふ。中間に、又康節希夷の二先生を楔とす、楔劫運定數を出す。武德皇帝、包拯、狄青を楔とす、楔星辰の名字を出す。山中の虎と蛇とを楔とす、楔陳達楊春を出す。洪信が驕情傲色なるを楔とす、楔高俅蔡京を出す。道童猥摧認がたきを以て、直に七十回に皇甫が馬を相するを結尾とす、これを奇楔といふ。

金壇王氏が小品中に亦云、この書每回に楔子あり。書肆翻刻する時删おとして今俱に傳はらずといふ。王望如が云、聖歎がいふ所の楔子は、無中の生有、皆憑空の詞、これ稗

校定原本

李卓吾評閲一百回（和俗これを百回本といふ）
金聖歎外書七十回（二本ありこれを聖歎本といふ）
卓吾評點一百一十五回（これを李卓吾本といふ）
水滸後傳四十回（二本あり今四十回本これを取る）
飜刻二十回

編譯引書

宋史　武備志　兵錄　事文類聚　廣輿記
大明一統志　文體明辨　五雜組　遊仙窟　鄉談雜字
續文獻通考　日本風土記　金瓶梅　群書纂要　日本書紀
和名類聚鈔　和字正濫要略　古言梯　水滸傳解　水滸傳抄譯
名物六帖　金瓶梅譯文　南北宋志傳　縉紳全覽

いふ。すこしあがめていふこゝろなり。老公なり。老婆妻なり、老は老人の事にあらず。賊配軍賊はぬす人なり、又配軍は流人の事なり。人を罵りてぬす人の島流しめといふこゝろなり。師父師匠なり。兄弟従弟、又従弟をもすべて兄弟といふ。弟兄弟をいふ。兄弟といへば、兄のことになる。財主金もちなり。新郎はなむこ也。新婦花よめなり。新人ともいふ。又女壻むこなり。行童寺のちごなり。酒生兒酒屋の年季ものなり。

附 天罡星北斗といふ説あり、螢惑のたぐひなるあしき星なり。地煞星煞は殺なり、これも悪しき星。江湖上世間のひろきをいふなり。大莊院ゐなかの大やしきなり。朴刀陶氏が云、短き手鎗やうのものにて、穂の長きものなり。朴刀の事、さま〳〵の推量の説のみなりしが、武松が高塀を越るとき、突立てこれを力とする處にて、その形状を合點せりといふ。

外 主上原本には天子とあり。都原本に京師。汝原本に你。待原本に等。彼原本に那。彼原本に他。等原本に們。聞原本に聽。彼處原本に那里。停立原本に立在。何原本に甚。訖原本に了。見原本に看。又 御身。楚と。丁と。誘。浩處。思食。語。對面。伴。軈。氣色。對。申。侍。候。以上今の世の和文に用ゐるところなり。混じてこゝに筆するものは、見る人つれに目なれて、よみやすからんが爲ぞ。此餘はすべて本文に註せり。

役人なり。經略相公唐の正觀二年、邊州に經略使を置く、なほ詳に第二卷に註せり。太公老主人を稱していふなり。府尹縣邑の長是を尹といふ。又總管、州尹、知州、刺史、事みな同じ。こゝに説くところは和の檢非使のたぐひなり。提轄官知州の小吏なり。機密をつかさどる。和にいふ捕手の役人なり。直廳和に今いふ玄關番なり。當廳これもおなじ。和の取次のたぐひ。鳥人人を罵りて鳥といふ。此方にてくそくらへといふがごとし。直娘賊これも人を罵ることばにて、娘は鳥の字の轉じたるなりとぞ。里正名主なり。鄭屠鄭は氏なり、屠はほふりとて、獸をほふるものの總名なり。土兵軍役にかりもよほされたる百姓なり。縣尉宋の建隆三年、始て縣ごとに、復尉一員を置き、主簿の下にあり、俸賜主簿とおなじ。和にいふ郡司庄司のたぐひなり。員外總員外郎あり、又吏部、兵部、戸部の員外郎あり。元是官名、後世民間の富人も員外と稱す。本邦の民間、兵衞、左右衞門と稱するがごとし、と鳥山がいへり。官人これも上におなじ。後世官人ならずとも、富人を稱していふ。漢子單于中國の人を呼て漢といひしより、後世男子の稱とす。文墨匠いれずみをする細工人なり。門子扈從なり。ところによりて門番をもいふ。幹人家來なり。幇間たいこもちなり。待詔鍛冶やの手間とりなり。小二小厮におなじ。でっちなり、小ものなり。道人僧にして髮を剃らず、肉食妻帶するものなり。莊客大百姓の家の子なり。酒保さかとうじなり。又酒店の主人、また賣手にも通じ用ゆ。好漢好男子なり。茶博士茶店の主人なり。衙内和にいふ御曹司、若殿のたぐひ。但官人にかぎりて稱するなり。當案孔目衙前の吏職とて、使司の事すべてその手を經ざることなし、名物六帖にやくしよのもとじめと訓す。承局未レ詳。名物六帖に、承若をわたり人と訓す。承若は傔人なり。唐の制に、大使、副使、傔人あり、蓋このことか。女使こしもとなり。婭嬛丫鬟もおなじ。女のわらはなり。泰山妻の父、しうとなり。丈人上におなじ。丈母妻の母、しうとめ也。丈夫をつとなり。渾家妻をいふ。娘子上におなじ。大姐妻を

初鐫十卷職役稱呼俗解

○衣服器材の類は、いまだ眼に見ざるを以て、推量の國訓多し、因てこゝに贅せず。

處士 いまだ仕ざるこれを處士といふ。轉じて又浪人のこととす。**太尉** 大臣なり。堯の時舜を太尉とす。秦漢以降みな太尉あり。宋は唐の舊に仍て、御筆改て太尉を武選とす。一品の任、節度使の上にあり。元の時太尉、司徒、司空を三公とす。**道士** 僧にあらず、俗にあらず、上老子を祖とし、下列仙を師とす。もつぱら人の爲に鬼を驅り、病を禳ふものなり。本邦の山伏すこしくこれに似たり。**道衆** 道士たちなり。**道童** 道士のめしつかふわらはなり。**貧道** 道士の自稱なり。僧なれば貧僧小僧などと稱すべし。本邦の僧人やゝもすれば貧道と稱するものあり。道士の自稱ととりちがへたるなり、と陶山いへり、**天師** 道士の長たるものをいふ。五雜俎に云、晉より唐に及て、なほいまだ聞く事を得ず、五代に至りて、遂に天師と稱す。廣信の龍虎山に據りて金碧の殿字、儼然として世業となる。我太祖皇帝の曰、至て尊きものは天、豈師あらんや。これを削りて眞人とす。しかれども二品の秩を後裔に傳ふ云々。**眞人** 註上にみえたり。謝肇淛が麈餘に、龍虎山の張眞人及道士の法驗往々說ㇾ之。**軍人** 軍は徭役とて軍の歩役に使ふ人夫なり。皆民なれ共、分ていふときは、民は士農工商の四民なり、と陶山が解にみえたり。**潑皮** あぶれものなり。**破落戸** うはきものなり、又いたづら者なり。陶氏が云、破落戸をおちぶれものと譯するはわるし。破落戸の財主ともあれば、富人にもいふにてしるべし。**火工道人** 火と夥と通ず。一組むれのことなり。寺に居る大工日雇は、道人になりて居るとみえたり。是を火たきと譯するは甚しき誤なるよし尙善既にいへり。**生鐵** かなもの商賣なり。**八十萬禁軍敎頭** 官軍へ武藝の師範する

朱貴　穆弘　李俊　張橫　張順
朱武　孫新　裴宣　鷗鵬　鄧飛
燕順　楊林　蔣敬　呂方　郭盛
王英　鄭天壽　陳達　楊春　陶宗旺
鮑旭　樊瑞　項充　李袞　馬麟
童威　童猛　時遷　孟康　焦挺
石勇　顧大嫂　張青　穆春　曹正
宋萬　杜遷　薛永　李忠　周通
湯隆　李立　孫二娘　白勝

關勝　秦明　呼延灼　花榮　董平
張清　徐寧　楊志　索超　黃信
宣贊　郝思文　韓滔　彭玘　單廷珪
魏定國　綾振　龔旺　丁得孫　魯達
林冲　孫立

○通計一百零八人

新編水滸畫傳姓氏

諸生

吳用　金大堅　蕭讓

世裔

柴進

平民

武松　史進　施恩　盧俊義　阮小二
阮小五　阮小七　石秀　解珍　解寶
燕青　扈三娘　孔明　孔亮　侯健
宋清　杜興　鄒淵　鄒閏　王定六
郁保四　段景住　李應

公孫勝

皇甫端　安道全

宋江　朱仝　雷橫　李雲　戴宗
劉唐　李逵　樂和　朱富　蔡福
蔡慶　楊雄

と西遊記を誚る、これ二つ。他またいへらく、水滸傳は鬼神怪異の事を說ず、是彼筆力人に過たる處なりといふ。水滸にいかで鬼神怪異の事なしといはん。洪信石碣を開て百八の魔君を走らせ、宋公明九天玄女に遇て、天書を受るがごとき、是未曾有の怪異ならずや、是三つ。他又いへらく、史記と水滸傳とは同じからず、施耐庵一肚皮に宿怨なしといひ、後に至りて又いへらく、この書を爲者の胸中、われその何等の寃苦ありて、かならず言を一百八人に設るを知らずといふ、是四つ。かくの如き辯論一定せず。他又百八の人物、その賢愚を論ずるに至りては、假を弄して眞となすに過たり。況貫華堂所藏、古本水滸傳施耐庵が自序と稱するの類、疑ふらくは聖歎が僞作ならん。何をもて是をしるといふに、われ他が西廂記外書の序說にて看破せり。その文こゝに抄するに及ばず、みづからしらんとせば、彼書を開て見るべし。かくいへど聖歎が外書を取らざるにはあらず、彼是校讐飜譯して集成する事、既に前にことわれり、と答ふるにぞ、難ずるものあざ笑ひて、ふたゝび共にいはざりけり。

乙丑季秋の日　　　簑笠隱居かさねて筆を飯㙒の著作堂に採る

○今この書中に筆する全像數十頁は、すべて兵録に圖するところの百八人の像に根き、或は聖歎外書、一本に圖するところの、宋公明以下四十人の像を摸し、或は李卓吾評點の、全像二十頁のおもむきに倣ひ、是に畫工の今案を加へ、潤色してこゝに出せり。且武備志より以下の圖說、取るべきあればかならずこれに据て畫しむといへども、家宅、械器、衣服に至りては、なほその形を審にせざるもの多し。こゝをもて日本めきたるところなきにしもあらず。余曾華人の圖する、三國志、水滸傳等の人物を見るに、漢宋の人にして韃清の服を被たるもあり、亦是憑空結構の戲墨、咎るに足らず。この書も又しかり。閲者理をもつて論ずることなかれ。

○ある人わが著作堂を訪て、水滸畫傳兩三卷を閲しつ、是を難じていへらく、王望如が評論、金聖歎が外書、世もつて奇絶と稱す。しかるを足下、今百回本を取て譯するは、いかにぞや、といふ。余がいへらく、聖歎原錦繡の才子といへども、國字をもて譯するに當りては、他が批註も却て用なし。且余が淺見をもてこれを論ずるときは、聖歎が外書取べき事あり、又取べからざることあり。いと嗚呼なれど試にその二三をいはゞ、他小說を評する每に、動すれば聖教經傳を引く、是余がうけがたしとする一つなり。他又三國志を評していへらく、吾謂、才子書の目、宜三國志演義をもて第一とすべしといひ、又水滸を評するに至りては、大に三國志

才、かならず大に人に過たるものならん、不如これを赦して方臘（當時の大盗）を討せ、みづから贖しめんとまうす。帝すなはち候蒙に命て、東平府の知とし給ふ。いまだ赴ずして卒しぬ。又張叔夜に命て、海州に知とし給ふ。時に宋江海州に至る。叔夜間者をもて、その向ふところを覘するに、宋江徑より海濱に趨て、却て鉅舟十餘に鹵獲を載す。叔夜死をきはめたる士、千人を近城に伏おきて、輕兵を出し、海に距てこれを誘戰せ、先壯卒を海旁に匿し、兵の合するを伺ひつゝ、火を擧てその舟を焚く。賊これを聞て皆鬪の志なし。伏兵これに乘じて賊の副將軍を擒とす。宋江乃降參せり。按ずるに、彼三十六座の天罡星は、三十六人をもて横行せしに擬す。又宋帝、宋江等に方臘を討せ給ふ事は、候蒙が上書に擬す。しかればこの書寓言といへども、大に據あり。加旃、三十六人の姓名は、具に宣和遺事に載たり。末生の人を談ずるにあらざるよし、吳門が外書にいへり。

○宋の洪邁俗考にいへらく、鐘聲一百八撞てもて、十二月、二十四氣、七十二候に應ず。又瓦釜漫錄に、釋氏の念珠一百零八、これ年に七十二候、十二月、二十四氣あるに準といへり。しかれば水滸の百八人も、この數に依りて、星の數に合せたりとおぼし。作者こゝろを用るの精細、この一條にてもしるべし。

せり。

○水滸傳の作者究て詳ならず、或は洪武のはじめ、越人羅貫中これを作るといひ、或は元人施耐庵が筆なりといふ。田叔禾が西湖遊覽志に又いへらく、この書宋人の筆に出づ、近曾金聖歎、七十回より後を斷て、羅貫中が續ところとす。因て口を極て羅氏を誣ひ、復僞りて施氏が序を前にすといふ。按ずるに、當初の作者、みづから小說に序して、姓名を露す事、あるべうもあらず、こゝをもて人の疑を惹り。なほ細しくは後の條にことわるべし。又續文獻通考に、羅貫中、水滸傳を作りて世を誣の報い、三世の子弟みな啞なりけるよしを載たり。もし果して百零八人の寓言は、耐菴が筆に起りて、七十回の後より羅氏が續ものならば、天も人を罰するに私ありといはん歟。羅貫中、姓は羅、名は貫、字は本中、今の人貫中をもて名とするものは誤なり。蓋やこの人、當時の賢才にして、却て時に遇ず、一旦憤を發して、私に三國志演義と忠義水滸傳とを著し、事を彼に託して志を己に舒べ、もて天下の人に示せしとぞ。古人の議論かくのごとし。いまだいづれか是なるをしらず。

○宋史にいへらく、宋江起りて盜をなす。三十六人を以河朔に横行し、轉十郡を掠む。官軍敢その鋒に嬰ことなし。知亳州（知州は官名なほ國司のごとし。知は其州をあづかりしるなり。）侯蒙上書して（天子にたてまつるを上書といふ。）いへらく、宋江が

老人の筆に根ことなく、只顧婦女童蒙の爲に解しやすきを宗とす。しかれども、艶麗の句、風流の況、なほ捨るに忍ず、又その但見玉をつらねて、當時を見るがごときは、敢て漏さずしてこれを譯し、但その繁を芟り、闕たるを補ひ、訛れるを正し、疑しきを決し、一統してもて大成す。又その傍訓のごときに至ては、音訓に管らざるものあり。譬ば詔書を讀て勅書とし、僧人を讀て法師とし、（日本紀に僧をホフシと訓ず）禪杖を讀て鹿杖とし、（和名鈔、僧坊の具に鹿杖あり、和名加勢都惠。その物異なりといへども、姑くこれに因る。）金剛を讀て二王とし、嶽廟（劉李王を祭るの廟なり。）を讀て美嶽神社とし、人氏を讀て仕人とし、商議を讀て談合とするの類、枚擧に遑なし。これ傍訓は字の註なり、しかせざれば、耳に聞ものに諭しがたし。且唐土の俗語を譯するに、我俚語俗言をもてせざれば平等せず。又和名のなき物あり、又和訓の施しがたきものあり、その譯すべきものは、本文の熟字を抄出し、其譯すべからざるものは、我私の筆に操る。この故に一編の文章、古雅と今俗と混雜して更に格體を定めず。これ予が情願にはあらず、實に已ことを得ざればなり。

○水滸傳に十三箇の文法あり、所謂倒插法、夾叙法、大落墨法、綿針泥刺法、背面鋪粉法、弄引法、獺尾法、正犯法、略犯法、極不省法、極省法、横雲斷山法、鸞膠續絃法、これなり。この事金聖歎が外書に舒て詳なり。和漢文章を異にすといへども、纔にその意を受てこれを譯

ば、やがて彼人に就て、巻のところ〴〵にその像を出し、もて繍像水滸傳の模様に擬す。且金聖歎が議論に従ひ、今忠義の兩字を省き、名づけて水滸畫傳といふ。抑〻この事一朝諸なひてより、書肆毎日に詣來つ、求ること急にして終日去らず、前に畫工傭書あり、後にまた劂氏あり。一頁草し了ば一頁倣書し、二頁草しをはれば二頁刻し、いまだ數月ならずして初編十巻功を終ふ。語路の盈縮、魯魚の錯誤、みづから正に遑あらず、元是兒戯の一端に成る。閲者幸に予を論ずることなかれ。

○水滸の一書は、曩に冠山岡島老人、飜譯の功なりしより以降、我俗始て世にこの奇編ある事をしる。（惜むべしその書近曾舞馬の難に係り、數百の版面烏有すといふ。）しかれども婦女童蒙、なほ解がたしとするものは、その書、漢文の口調に倣ひ、片假名をもて記せばなるべし。これさへ纔にその意を譯して、その文の美を譯するに至らず。これなでふ冠山老人本來の面目ならんや。實に已ことを得ざりしとおぼし。彼俗子の書を讀を見れば、只傍訓に因て字義に管らず、口に讀と雖も肚に味ふことなく、耳に聞て却て感ずることあり。故に一人讀ときは、五三人これを聽き、耳を側つるもの、その意通ぜざれば、悉よしと賞ぜず。難かな文をもて俗に説事、われいまだ其爲ところをしらず。よりて今予が譯ところは、いよ〳〵雅に遠しといへども、別に華本を編譯して、絕て冠山

譯水滸辯

降みふらずみ五月雨の、暮んとしては又一際あかうなりつゝ、十日あまりの月しろおぼつかなくも、しばし山の挾に閃き出たるゆふべ、書肆ふたり、成文堂、衆星閣とかいふもの、予が柴門を敲て、ねんごろに乞事あり。その故を問ば、彼が家に藏るところの畫本、水滸畫潛覽は、むかし鳥山石燕が筆のすさびに、水滸傳の人物を寫し、その傍に國字をもて、事の概略を記せり。上木既に三十年來、普く世に行ふといへども、粗漏にしていまだ婦女童蒙の目を歡するに足らず。よりて今新に予が譯文を乞て、彼畫潛覽に根き、水滸の畫本を板せんといふ。予嘗水滸傳を讀に、食を忘れて厭ことなく、燭を秉て倦ときなし。この書や、變化の妙、宛轉の奇、おのづからしかるものにして、作者一生の精神、半世の英氣を竭し、文章一家をなして、他書とおなじからず。こゝをもて白頭の宿儒、なほこれを病り。況予が管見をもて、此書を譯んは、いと影護し。しかはあれど、著述は予が好ところ、水滸も又予が愛るところ、事二つながら雞肋にして、固辭に詭くまでせず、乞るゝこと再三にしてやうやくうけ引つ、僅に五三本を校讐して、忽卒にこれを譯す。さるあひだ書肆又畫工北齋子とよし、予も一面のまじはりあれ

案此書全傳百回。或百二十回。別有後傳四十回。而今罕傳焉。聖歎以爲。始石碣散妖而終石碣收妖。是所以七十回爲正本也。然而此書終七十回。則閱者尙似有遺憾。是以取全傳百回。以金氏批註及兩三本。彼是校定。而編譯。應書肆之需云爾。

皇和文化乙丑年重陽前五日書于飯岱芸堂

曲亭外史

吳門金聖歎反而正之。列以第五才子。爲其文章妙天下也。其作者示戒之苦心。猶未聞揚殆盡。余則補其所未逮曰。水滸百八人。非忠義皆可爲忠義。是子輿氏祖述孔子性相近之論。而創爲性善之意也夫。

桐菴老人書於醉畊堂墨室

順治丁酉冬月

水滸序

水滸一書七十回。爲一百八人作列傳。或謂東都施耐菴所著。或謂越人羅貫中所作。皆不可知。要不過編輯綠林之劫殺以示戒也。原其意蓋曰之百八人者。非宋朝之亂臣賊子耶。苟生堯舜之世。井田學校各有其方。皆可爲耳目股肱奔走禦侮之具。不幸生徽宗時。或迫飢寒。或逼功令。遂相率而爲盜耳。作者之旨。不責下而責上。其詞蓋深絕。而痛惡之。其心則悲憫。而矜疑之。亦有關世道之書與宣淫導慾諸稗史迥異也。近見續文獻通考。經籍誌中亦列水滸。且以忠義命之。又不可使聞於隣國。試問此百八人者。始而奪貨。繼而殺人。爲王法所必誅。爲天理所不貸。所謂忠義者如是。天下之人。不盡爲盜不止。豈作者之意哉。

三編

二編

新編水滸畫傳 一 目錄

初編 （靈根號）

本書の插畫は、浮世畫の泰斗たる北齋爲一老人の筆にして、當時剞劂の名手米助といふもの之を刻し、畫圖の精妙實に當時の小說界に一時期を劃したりといふ。
今本書を翻刻するに方りては、專ら原本の面目を存することを努め、明かに傭書の誤と認むべきものの外毫も改竄を加へず、插畫も、二三風俗を壞ふの虞あるものの外はすべて之を載せたり。

大正二年十一月　　　　武笠三

緒言

水滸傳は、宋史、宣和遺事等に見えたる河朔の寇盜宋江等三十六人の事蹟に本づきて、一百八箇の所謂豪傑が、時勢境遇の爲に迫られて盜賊となれる、悲しむべく又笑ふべき許多の脚色を結構し、場面の變化を豐かならしめたると同時に、よく其人物の性格を描寫せる小說にして、獨り支那小說中の巨擘たるのみならず、亦實に世界の文學中に於ける屈指の妙篇と謂ふを妨げざるべし。作者は、或は明の羅貫中とし、或は元の施耐菴なりと謂ひ、或は羅にあらず施にあらず、別に無名氏ありて之を作れりと謂ひ、古來の諸說紛然として歸著する所なし。水滸傳に、七十回本、百回本、百二十回本の數種ありて、本文互に異同あり。本書新編水滸畫傳は、主として百回本に據りて飜譯する所、初編十卷は曲亭馬琴の筆にして、二編以下は高井蘭山の手に成れり。その新編といひ畫傳と稱するは、之より先に鳥山石燕の水滸畫潛覽あり、岡島冠山の忠義水滸傳あるを以て也。その飜譯の用意に至りては、曲亭高井の二家各編首に辯ずる所あるを以て、今贅せず。

水滸畫傳

壹